

混沌世界のプロローグー好き勝手準備後自滅した神様転生者のせいで全方位魔改造されるけど、おっぱいドラゴンが新たな仲間と共に
頑張る話・第二部

グレン×グレン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

注意その1：この作品は、「好き勝手準備後自滅した神様転生者のせいで全方位魔改造されるけど、おっぱいドラゴンが新たな仲間と共に頑張る話」の第二部であり、この作品から呼んでも混乱しか生みません。

前作を読んだうえで続きが読みたいと思った方だけご覧ください！

注意その2：評価に関しては「その評価をどう反映するか」「そもそも反映するかどうか」を探りたいため、コメント数10文字を必須としております。あくまで低評価に対応する者なので、高評価の場合は「とつても面白いです！」とでも入れてくださればいいので、出来ればお気軽に評価してくれると嬉しいですよ。

愚かな転生者が自滅したのち、その残滓が生んだ一つのエピローグは幕を落とした。

ゆえにここから始まるは、新たなる世界のプロローグ。

禍の団が齎す大きな打撃を乗り越えた、チームD×Dの若き英雄たち。

奇しくも彼らは、今後の未来を見据えた催しである国際レーティン
グゲーム「アザゼル杯」へと意識を向ける。

だがそれは同時に、この異分子が混ざりこみすぎた世界に起こる諸
問題。ひいてはこの平和を苦痛に感じる者達との小競り合いすらと
も向き合う、これまでとは毛色が違う多忙な生活の始まりだった。

？ 誠ウエルシュ・ドラゴンの赤龍帝、兵藤一誠

明星バニング・ドラゴンの白龍皇、ヴァーリ・ルシファー

紅髪ルイン・プリンセスの滅殺姫、リアス・グレモリー

悪敵シルバレットの聖銀弾、カズヒ・シチャースチエ

涙換タイタス・クロウの救済者、九成和地

これはそんな世界の未来を担う者達が挑む、愛と勇気と熱血に、煩
悩が混ざった英雄譚である

追記：A I イラストに手を出して、挿絵を作ってみております。

第一弾：カズヒ・シチャースチエ：

目次

設定資料集	メインキャラクター編	1
設定資料集	各種星辰光編	5
序章	第一話 悪魔の未来を担う者達	14
序章	第二話 久しぶりの安らぎ	24
序章	第三話 お久しぶりねの平和な学園♪	32
序章	第四話 問題続くよどこまでも	39
第一章	新期来訪編	
新期来訪編	第一話 負の欲望は尽きることなく	49
新期来訪編	第二話 末裔大発掘	60
新期来訪編	第三話 突然の終幕	68
新期来訪編	第四話 真魔王計画	75
新期来訪編	第五話 治しようがないなら一度死なせるとかいう	86
パワー治療……治療？		
96	新期来訪編 第六話 モテる男にはモテる男の苦労がある。	
新期来訪編	第七話 荒事一段落	105
新期来訪編	第八話	114
新期来訪編	第九話 新たな一歩を	129
新期来訪編	第十話 新たな始まりの予感	142
新期来訪編	第十一話 釣り場での一幕	151
新期来訪編	第十二話 度の超えた金とけた違いのお偉いさんは	160
メンタル壊れる		169
新期来訪編	第十三話 責任	

新期来訪編 第十四話	卒業式。そして新たなる――	175
新期来訪編 第十五話	渦の胎動	184
新期来訪編 第十六話	原付バイクは二人乗り禁止だから銀○の 真似はしちやだめだぞ？	193
新期来訪編 第十七話	初日の夜に	201
新期来訪編 第十八話	死闘、四覇将&五蹂士！	211
新期来訪編 第十九話	自分が一番不幸だと思ひ込む奴は、たい い視野が狭いものである。	222
新期来訪編 第二十話	たいしたことないと思っていた連中が実 はやばいとは割とよくある展開	228
新期来訪編 第二十一話	行く先々でトラブルに巻き込まれる、こ れもまたご都合主義にして主人公補正なり	234
新期来訪編 第二十二話	意外と大変な戦い	240
新期来訪編	新たなる世界の予兆	246
新期来訪編	幕間 準備期間は大事にしよう	253
第二章 大会開幕編		
大会開幕編 第一話	ニューフェイスも色物です！	260
大会開幕編 第二話	忘れられがちだが、駒王学園は偏差値高いの である。	270
大会開幕編 第三話	無自覚に口説き倒す男とは大概面倒である	278
大会開幕編 第四話	想定外の事態はいつ起こるかわからないか ら想定外である。	285
大会開幕編 第五話	新たなる出会いは（敵味方問わず）突然に	

	大会開幕編	第六話	真徒顕現（前編）	303
	大会開幕編	第七話	真徒顕現（後編）	311
	大会開幕編	第八話	どいつもこいつも準備中♪	322
	大会開幕編	第九話	準備完了♪	328
	大会開幕編	第十話	アザゼル杯、開幕です！	334
	大会開幕編	第十一話	若手悪魔の大激戦（前編）	343
	大会開幕編	第十二話	若手悪魔の大激戦（後編）	351
	大会開幕編	第十三話	涙換救済（タイタス・クロウ）の初試合！	362
	大会開幕編	第十四話	ブラフや引き抜きも立派な戦略的手段である。	370
	大会開幕編	第十五話	蟒蛇は星を宿す	378
	大会開幕編	第十六話	恋する乙女とマッチング!?	387
	大会開幕編	第十七話	睡眠の覚醒	396
	大会開幕編	第十八話	連・戦・直・前	404
	大会開幕編	第十九話	悪魔重鎮胃痛案件	411
	大会開幕編	第二十話	光狂いとは覚醒する前から強くなり続けるからなおヤバイ	422
	大会開幕編	第二十一話	女傑大暴れ	430
	大会開幕編	第二十二話	世界公開大告白（第一弾）	436
	大会開幕編	第二十三話	戦いの直前	447
454	大会開幕編	第二十四話	試合開幕、和地VS春奈（その一）	
460	大会開幕編	第二十五話	試合開幕、和地VS春奈（その二）	

大会開幕編 第二十六話 試合開幕、和地VS春奈(その三)

468

大会開幕編 第二十七話 決着とこれからと

477

大会開幕編 第二十八話 秘密のお話

484

大会開幕編 幕間 激戦の予感

493

第三章 戦愛白熱編

戦愛白熱編 第一話 新たなる戦士たち(前編)

502

戦愛白熱編 第二話 新たなる戦士たち(中編)

509

戦愛白熱編 第三話 新たなる戦士たち(後編)

515

戦愛白熱編 第四話 テスト明けの日常

522

戦愛白熱編 第五話 魔王の血筋も、大変です!

531

戦愛白熱編 第六話 穏やかなテスト前

539

戦愛白熱編 第七話 姉妹がわかるテスト返還!

548

戦愛白熱編 第八話 男子会と女子会

557

戦愛白熱編 第九話 聖騎士と激突です!

565

戦愛白熱編 第十話 激突! デュナミスの新生チーム(その1)

573

2) 戦愛白熱編 第十一話 激突! デュナミスの新生チーム(その

581

3) 戦愛白熱編 第十二話 激突! デュナミスの新生チーム(その

590

4) 戦愛白熱編 第十三話 激突! デュナミスの新生チーム(その

599

5) 戦愛白熱編 第十四話 激突! デュナミスの新生チーム(その

604

戦愛白熱編 第十五話 激戦の余韻 | 613

戦愛白熱編 第十六話 祝勝会も、大騒ぎ! | 621

戦愛白熱編 第十七話 地下室、死闘中! | 629

戦愛白熱編 第十八話 | 637

戦愛白熱編 第十九話 魔王、超集合 | 647

戦愛白熱編 第二十話 スーパー魔王フェスティバル | 655

戦愛白熱編 スーパー才能フェスティバル (料理編) | 666

戦愛白熱編 第二十二話 死闘開幕!! 速攻波乱! | 674

戦愛白熱編 第二十三話 九大罪王の王冠 | 681

戦愛白熱編 第二十四話 銀の激突の後に | 693

戦愛白熱編 第二十五話 目の前でする自傷行為はもはや脅迫で

ある | 700

戦愛白熱編 第二十六話 伝統は時代とともに仕立て直されるも

のなり | 709

戦愛白熱編 第二十七話 悪魔の微笑み | 720

戦愛白熱編 第二十八話 驚天動地の隠し玉! | 727

戦愛白熱編 第二十九話 対神激戦絶好調 | 732

戦愛白熱編 第三十話 超常大激戦 | 739

戦愛白熱編 第三十一話 新たなる神魔の大戦 | 747

戦愛白熱編 第三十二話 リアス祝勝会 (前編) | 755

戦愛白熱編 第三十三話 リアス祝勝会 (後編) | 761

戦愛白熱編 第三十四話 リュシオンという壁 | 765

戦愛白熱編 第三十五話 性能が高い || 強いとならないときがあ

る | 771

戦愛白熱編 第三十六話 カズヒの故郷 | 777

戦愛白熱編	第三十七話	フォートレス・ハンティング	894
戦愛白熱編	第三十八話	激突、GF撃墜戦(その1)	789
戦愛白熱編	第三十九話	激突、GF撃墜戦(その2)	796
戦愛白熱編	第四十話	激突、GF撃墜戦(その3)	802
戦愛白熱編	第四十一話	激突、GF撃墜戦(その4)	810
戦愛白熱編	第四十二話	激突、GF撃墜戦(その5)	817
戦愛白熱編	第四十三話	衝撃! カズヒのコネクション!?	823

戦愛白熱編 幕間 酒の席で武勇伝を語るものは数多く、思い出し
たくない過去も数多い

第四章 闇動神備編

闇動神備編	第一話	兵站とっても重要です	841
闇動神備編	第二話	どこもかしこも大変です。	852
闇動神備編	第三話	下半身関係の失敗談は割と尾を引く	860
闇動神備編	第四話	攻略戦は順調です	869
闇動神備編	第五話	ギャグみたいな事態で死屍累々になる事態 が本当にある	876
闇動神備編	第六話	冥府、腰を上げる	883
闇動神備編	第七話	一度やらかすと一生恨まれることもままあ るもの。	891

901

闇動神備編	第八話	和地「もはや定番になっている……っ」	901
闇動神備編	第九話	激突、冥府派VS英雄派!	911
闇動神備編	第十話	神器の否定者	917
闇動神備編	第十一話	熾烈なる大激戦	927

闇動神備編 第十一話 もはや何でもあり | 935

闇動神備編 第十二話 たまたま同じ目的で出くわすと、気まずい

よね | 945

闇動神備編 第十三話 星の戦槌 | 953

闇動神備編 第十四話 革命の真徒 | 960

闇動神備編 第十五話 因縁つけるのに理由はいらない | 968

闇動神備編 第十六話 不穏増大 | 975

闇動神備編 第十七話 欲望の姫君 | 981

闇動神備編 第十八話 窮地、何とか潜り抜ける | 987

闇動神備編 十九話 あえて空気読まない人がいると、時として気

分が切り替わる | 996

闇動神備編 第二十話 シエラのSはシャムハト(聖娼)のS!の

闇動神備編 第二十一話 死闘(一)、幕開ける | 1010

闇動神備編 第二十二話 死闘(当事者にとっては)、勃発! | 1014

1020 闇動神備編 第二十三話 (当事者にとっての)死闘、並列侵攻!

1029 闇動神備編 第二十四話 星辰光、(本当に真面目に)開帳

1035 闇動神備編 第二十五話 魂(たま)じゃないよ、塊(かい)だか

らね? | 1042

闇動神備編 第二十六話 巨星激戦 | 1050

設定資料集 メインキャラクター編

◎極晁衛奏者

◇九成和地

ご存じ本作の主人公にして狂言語り。 瞼の裏の笑顔に誓い、涙の意味を変える旧済銀神エルダーゴッドたる涙換救済タイタス・クロウ。

眉目秀麗文武両道を高水準でまとも上げた優良物件。愛する女に對しては、高い包容力を持ちながらも時々精神年齢がダダ下がりするのが愛嬌か。

第一部において極晁弄奏者どころか、後に続くだろう全極晁に通用する衛奏という勝利を見せるも、その裏面である「極晁が必要な時にも効果を発揮しきれない」点を考慮。それなしでもやっていけるようにする為、そして民衆にそれを見せる為にもアザゼル杯参戦を決意している主人公。

同時に様々な出会いやとんでもない金もあり、苦勞する時はかなり苦勞している少年。恋愛でも暴走するが、大金を払える機会でも暴走しそう。

全体的に非常に優秀な男だが、原作主人公たるイツセーや真主人公たるカズヒに比べると、異常や特例に近い札がない男。反面両者では不向きな神器の新境地、残神を前提とした、装備による禁手の切り替えで両者に追隨する戦力価値を誇る、守り手としての高いポテンシャルが持ち味。

あまねく極晁を封じる衛奏もあり、世界の英雄が一角であることは揺らがない。ゆえにこそ、その責任を果たすべく刃を研ぎ澄ませ、彼は往く。

◇カズヒ・シチャースチエ

ご存じ本作メインヒロインにして真主人公。瞼の裏の笑顔に誓い、正義を奉じる必要悪たる悪敵銀神ノーデンスたる悪祓銀弾シルバレット

気合と根性で物理法則に喧嘩を売る、女光狂いのガチ勢。正義の味方で邪悪の宿敵。ただし恋愛ではドストレートデレ。

前世からの最大の業たるミザリ打倒を成し遂げるも、その残滓や残された被害を踏まえ、自分が和地達と共にいることを容認してもらう為にも日々精進。その一環として独自にアザゼル杯に参戦する。

また血の繋がらない年上の実子というややこしすぎる幸香のこともあり、苦勞に対して覚醒しながら頑張り続ける宿命が残りまくりでもある。

本作光狂い筆頭なだけあり、物理法則を覚醒で乗り越える光極めちやつてる女傑。ただ自分が特例枠なのを自覚している為、それなりのブレーキをかけられる異端のガチ勢。

衛奏と弄奏を共に奏でた者として、今の世界に対して責任を果たす。鋼の女傑は愛を持つが故に、それに恥じぬ己を目指し続ける。

◎ヒロインズ

◇リーネス・エグリゴリ

前作における苦勞人筆頭枠、ついにヒロイン枠に掲載

最も前世の因縁を意識し、立ち回り続けた陰の功勞者。またアザゼルが隔離結界領域に旅立った今、D×Dの技術畑筆頭枠。

前世の記憶継承関係もあり胃痛枠であり、またそれゆえに恋愛弱者。加えて和地が保護者フィルターをかけていたが、それを乗り越えヒロイン認定されることに成功した。

恋愛面において鶴羽張りにポンコツになりながらも、それ以外は大事な技術顧問。カズビのチームに属しつつ、その未来に幸あれと願っている。

◇南空鶴羽

前作におけるポンコツ筆頭枠、ある意味で最も和地と付き合いの長いヒロインでもある。

本作においてもリアクション担当であり、最近は何ローグのシャツのように、奇声が目撃されている。

本作においてもカズヒの親友として、彼女のチームに参戦。固有結界の特性もあり、割と本気でチームのエース格だったりする。

◇枉法インガ

和地にとつての近所のお姉さん枠、メイド業務も大絶賛進行中。

本作においては和地のチームに参戦し、割と油断できない実力を発揮。メイド業務もだいたい慣れており、割と安定したポジション獲得中。

戦力面でも割と優秀。ハイマニューバ接近戦スタイルは、決して油断できない実力者であります。

◇リヴァ・ヒルドールヴ

和地にとつての女教師枠。ムードメーカーかつ最年長者は伊達ではない。

本作においては和地とは別チームで参戦中。元々基本性能はトップな上、おちやらけているようで油断できない策士ムーブも可能なエクスレンポジション。ゆえに攻められると意外と弱いよ？

◇ベルナ・ガルアルエル

和地が縁薄くてもオトしたある意味で第一部ヒロイン異例枠。お嫁さん願望がメイドスキルに繋がってエース格。

お姉さん問題もあって比較的苦労人枠。今後の決着もきちんと考え中です。

本作においては和地のチームに参戦中。高い機動力を生かした射撃戦主体で、大暴れの余地は十分ある。

◇成田春奈

和地の幼馴染染枠たる武闘派ヒロイン。ついに神器が神滅具になりました。

原点を思い出したがゆえに、和地と並び立てる女傑目指してメイド業務と並行努力中。また心の師匠たるカズヒもいる上、主の名もあり

自己研鑽に陰り無し。

本作においては主の命に恥じぬよう、別チームで参戦。迷走を終え昇華した、その灼熱はエースそのもの。

設定資料集 各種星辰光編

◎チームD×D

○オカルト研究部協力者

☆アルティイーネ・スタードライブ
ブリーステッドカノン・オーバードライブ
紅星の砲火、道を違えても悔いはなく

基準値：A A

発動値：A A A

収束性：B

拡散性：B

操縦性：A A

付属性：A A

維持性：A A

干渉性：D

アルティイーネ・スタードライブが振るう独自の星辰光。

振るう能力は星砲創生運用能力。星剣と同種の力を持つ星砲を作り出し自在に運用する能力。

星砲は弾丸の種類も自由自在であり、ある程度の仕立て直して連射性や口径を切り替えることが可能。基本的には歩兵携行が可能なレベルだが、それ単体を自在に使役できる都合上自身が持つ分、尚更に無茶のある仕様にできる。ただし使役能力がその高性能に反比例するかのよう低下しており、拡散性を補佐的な運用にしか回せないのが欠点。

更に溜めを必要とすれば、超大型の多段加速式電磁投射砲といった無茶も可能。第三宇宙速度を超える初速を放つこともでき、その破壊力は魔王クラスに通用する。

更に彼女はその付属性を持つことで、疑似的に一体化することも可能。本来は使い勝手が悪くなるが、ここにきて自由な発想でそれを扱う。

奇襲に使うのではなく、瞬間炸裂型の大反動にすることで、全身に固体ロケットを搭載するかのような加速装置として運用可能。これにより空中戦から瞬間的な攻撃力も上昇など、銃の具現化とは思えない対応力を獲得する。

星と共生する王族として生れ落ちながら、彼女は星の肌を荒らす人類という虫と共生する。

それはきつと、その可能性に光を見出したから。手を取ってくれた赤き龍と共に、彼女は星の海を目指す。

★詠唱

創生せよ、地より溢れし星辰よ——我らは煌く星の使徒。

紅の衝撃は我が身を貫き、面白き世を伝えてくれた。

星の歴史の僅か数刻。ただそれだけの短き者が、世界に彩りを示してくれる。

眺めて笑うが真徒の価値なら、私はそれを投げ捨てよう。

踊る阿呆に見る阿呆。同じ阿呆なら踊りたいと、私はそこに飛び出した。

無限の夢持つ赤き王道。その道はまるでパレードで、誰もが笑顔を浮かべている。

私もそこに混ざりたいと、心の底から思うから。気品を投げ捨て無邪気に笑い、笑顔で明日を迎えよう。

我、星の共生たることを誇らぬもの。ゆえに一つの誠を誇る者。

我が前に立ちふさがるもの、その一切を撃ち抜かん。
超新星——紅星の砲火、道を違えても悔いはなく

◎味方陣営

○デユナミス星騎士団

☆ストラス・デユラン

祈りの守護者、聖なる勇士は此処に（括弧内は禁手発動時）

基準値：D (B)
発動値：A (A A A)
収束性：A (A A A)
拡散性：E
操縦性：E
付属性：C
維持性：C
干渉性：E

ストラス・デュランの星辰光。能力は動作高速化。

極まって高い収束性による突破力を持ち味とし、文字通り行動速度を大幅に強化するという単純故の強固さを持ち味とする星辰光。

単純に早くなるという分かり易い星であり、また動作が早くなるだけで反応速度が速くなるわけではないという、単純故の弱みも存在。しかしそれを補う技量を持つてれば、圧倒的なポテンシャルを発揮する星辰光。

単純に早いということは、攻撃を喰らいにくく質量攻撃が強化され、反応が間に合えば質量攻撃の威力を殺すこともできる。シンプルゆえに扱うには優れた技量が必要であり、シンプルゆえに使いこなせば絶対に強力になれる星辰光。

更に禁手の恩恵により、彼は自力で魔星の領域へと到達。極限に到達した出力と収束性は、あらゆる敵を圧倒する武の極限へと近づいた。

強き決意と精神力をもって、信仰の敵を打ち砕く。ストラス・デュランの星辰光である。

★詠唱

創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌く流れ星

主の愛に応えるがために幾年月、磨き上げたはこの力。代行として悪を討つ、天の武は此処に参上する

怒りの裁き。慈愛の許し。矛盾を併せ持つ威光こそ、我らが主の輝きなり。

汝が罪を悔いるなら、今が改める時である。決してたやすくはない贖罪、我らが支えとなろうとも。

恥じぬというなら是非も無し。代行されし裁きによって、お主を審判へと送り出そう。

僭越なる代行の重さを背負い、聖なる騎士がここに立つ。主の裁定が下るその時まで、恥じぬ生き様見せようぞ

超新星――祈りの守護者、聖なる勇士は此処に

◎ 敵対勢力

○ 禍の団

● 洗殺隊

☆アルグラブ・スタードライブ
星の重みは神罰が如き、砕け散れ

基準値：A

発動値：A A A

収束性：A A

拡散性：B

操縦性：A A

付属性：D

維持性：A A

干渉性：D

アルグラブ・スタードライブが振るう星辰光。

振るう能力は星槌創生運用能力。自分を丸ごと隠せるサイズの星槌を複数具現化し、自在に操って攻撃する星辰光。

高い出力は合計十五の星槌を生み出すこととなり、更に収束性・拡散性・操縦性・維持性の四つがもれなく非常に優秀以上であり、隙の無い自在な攻撃を可能とする。

一撃一撃の重さは、文字通り隕石の直撃に匹敵。それを広範囲かつ自由自在に振るう権能は、攻防一体の体現者。スタードライブは素の性能が魔王クラスであり、この星は単独で眷属の群れを作るが如き異

能となる。

シンプルイズベストを地で行く星であり、故に強者が振るえば手が付けられない星と化す。

その猛攻はまさに圧殺。羽虫の如く敵を叩き潰しながら、そこに高揚は一切ない。

害虫を駆除するに快楽は不要。ただ不快感を払うが為に殺すのみ。

★詠唱

創生せよ、地より溢れし星辰よ——我らは煌く星の使徒。

青き宝珠、命育む奇跡の星。今ここに、その輝きを代行せん。

無尽に広がる星の海。その砂粒の一つにある、この奇跡に宿る我らが幸運。そこに感謝を捧げよう。

故に星敵粉碎あるのみ。星の重みで押し潰される。

この一撃こそ星の代行。大地を汚すというのなら、その業に立ち向かうが義務である。

汝、星に挑む価値はあるか？ 能わるのなら、砕け散れ。

超新星——星の重みは神罰が如き、砕け散れ

☆通常真徒

畏敬に能う母星の輝き、平伏せよ

基準値：C

発動値：A

収束性：B

拡散性：B

操縦性：A A

付属性：D

維持性：A A

干渉性：D

それは、星と繋がる共成体。世界に刻まれた異端の反動。

生物としての完全上位種。その力、人に対して牙を向く。

基本的な真徒が保有する星辰光。能力は星剣創生運用能力。星の

力を宿した星剣を作り出し自在に操作する星辰光。

星剣は優れた切れ味と強度を保有しており、聖剣創造や魔剣創造の下手な禁手を超える性能を維持。基準値でも二本創造し、発動値では五本同時に扱うことが可能。

高い収束性と拡散性により、頑丈なそれらを広範囲で使役可能。更に極まって高い操縦性と維持性により、長時間正確に運用可能。星剣は自在に操作できる為持つ必要がなく、それにより斬撃・刺突といった攻撃だけでなく、巨体による受け止めや受け流しによる防御も可能。

総じて強大な星であり、これ単体で下手な上級悪魔を眷属事蹂躪可能。また星辰体と感応して発動する都合上、星そのものは星辰体と感応できるなら地球外でも燃費が変わらないという利点がある。

総じて圧倒的な星であり、単独で魔星を相手どれるだけの星辰光。全ては地球と繋がる共成体としてのみ振るわれる刃。星敵とみなされれば最後、斬撃の檻は万象を断つ

★詠唱

創生せよ、地より溢れし星辰よ——我らは煌く星の使徒。

青き宝珠、命育む奇跡の星。今ここに、その輝きを代行せん。

無尽に広がる星の海。その砂粒の一つにある、この奇跡に宿る我らが幸運。そこに感謝を捧げよう。

抜刀せよ、星の刃。その煌きは至宝の如く。その一閃は神仏魔王に傷をつけると保証しよう。

ゆえに我らが怨敵よ、その愚行を悔いるがいい。この刃、汝を屠る得物足りえると知るがいい。

汝、この星の敵であるか？ その真偽、つるぎ剣によって審問する。

超新星——メタルノヴァ畏敬に能う母星の輝き、アリスセイバー・フルドライブ平伏せよ

○ハーデス陣営

☆マークツヴァイ（阿武隈川人）

ミッドガルズ・ソード・アンリミテッド勝利掴め、人界制す魔剣軍

基準値：A

発動値：A A
収束性：A A
拡散性：A
操縦性：A A
付属性：D
維持性：A
干渉性：A

マークツヴァイの星辰光。振るう星の名は魔剣創造多重再現能力・
独立具現型。

魔剣創造という神器を、魔剣を振るう騎士という亜種の形で多重に
再現する能力。

もとよりこの系統の神器は魔剣を振るう騎士を複数具現化して操
る禁手を保有しており、ある意味で上位互換となる。何故なら複数の
騎士を多重再現することで運用するばかりか、禁手を同時に複数展開
することが可能である故。強いて言うなら亜種として具現化した性
質上、騎士に渡してもらわなければ当人は魔剣を振るえないのが難点
だが、至ればそれで済む話なうえ、当人が強力なので欠陥というほど
ではない。

また禁手そのものに干渉しあうことで、複数の禁手を組み合わせた
隙の無い戦闘も可能になるのが利点。基本的には多種多様な魔の武
装で攻め立てる魔剣の騎士団を呼び出しつつ、聖魔の昇華を果たした
己の準神滅具を武器に魔剣の騎馬で一撃離脱の各個撃破を狙うのが
基本戦術。応用することで遠隔地から魔の弾丸を放つ機関銃の飽和
戦術をとることも可能など、ただでさえ手札が多い創造系神器をさら
に拡張する戦術をとることが可能。

マークツヴァイ自身も英才教育を受けている為、複数を組み合わせ
た戦術をいくつも使用できるところが驚異的。条件反射レベルで複
雑な禁手の組み合わせを行うことができるがゆえに、彼は最高出力で
劣りながらも同僚の人造惑星で最強クラスを自負できる。

……翻って、既に彼の力量は円熟に到達している節があるのが唯一

の欠点。彼自身が殻を破らねばここから先の成長は見込めず、それゆえに星辰奏者の時点で聖血宿さぬ九成和地相手に、準神滅具二つというマウントをとれながらも同等の力量に甘んじていた。

人生の悟り、勝利の答え。極晁星に到達した、涙換救済は魔星の完全上位互換。ゆえに彼が雪辱を晴らすには、次元の違いに食らいつく、心の輝きが必要となる。

殻を破ることができているのか。それこそが無尽斬撃の命題である。

★詠唱

創生せよ、天に描いた守護星よ——我らは鋼の流れ星。

今ここに、我らは神に見初められん。約束された破滅に挑む、黄昏の戦が約束された。

栄光の死により俗世を飛び立ち、迎えられるは神域の楽園。約束されるは英雄の座。汝は人界に留まる器でないのだと、荘厳たる神々が、我が身を褒め称えてくれたのだ。

故に我、凡俗を超えた傑物なり。幾千の敵が集まろうと、有象無象が我を討つこと能わず。この身が示す魔剣の群れが、鎧袖一触、一騎当千の威光を示して屠るのみ。

故にこそ、恨めしいのは我が宿敵。汝の守りが忌々しい。

絶対なる救済。嘆きの変換。涙の意味を変えろという、妄言こそが我が怨敵。

幾千の刃も聖なる一閃も、汝の守りを切り裂けぬ。あろうことか絶対なる絡繰りの仮面すら預けられる、面従腹背が苛立たしい。

故に、我が栄光は汝の死の先にある。

苦渋にまみれ、絶望せよ。それこそが我が黄昏の先にある新世界にほかならぬ。

メタルヴァー
超新星——勝利掴め、人界制す魔剣軍

○その他敵対勢力

☆カイザー・ヴォルテックス
ヴォルテックス・ブレインカー
星穿つ大なる渦、顕現の時

基準値：B

発動値：A
収束性：B
拡散性：C
操縦性：B
付属性：C
維持性：C
干渉性：B

カイザー・ヴォルテックスが振るう星辰光。星辰体回転運動発生能力。星辰体そのものに干渉し、回転運動により発生した渦で戦闘を行う能力。

星辰体そのものに干渉する関係上、対星辰奏者・人造惑星に対して絶大な対応力が持ち味。星辰体に由来する戦闘においては乱れが生じる為、敵対する星辰奏者や人造惑星は大きな不調を背負った状態で挑む必要が生まれてしまう。

基本的にはドリル上にしての近接攻撃が基本だが、足に展開しての高速移動・高速飛行・高速潜航も可能。また渦の回転運動は攻撃を受け流すことにも長けており、攻防移動と隙が無い汎用性を誇る。

全ては大いなる渦に世界を呑み込ませるが為。

禍すら超える渦を齎さんとする悪鬼、カイザー・ヴォルテックスの星辰光である。

序章 第一話 悪魔の未来を担う者達

Other side

冥界における観光都市の最先端。レーティングゲームの聖地であるアグレアス。

ここにあるホテルの一室。有力貴族をメイン層としたホテルの会議室を借り切って、数人の悪魔が集まっていた。

「……すいません。このメンツに私がいることが不思議なんです。そう緊張というより、げんなりというべき感情を隠しきれていないのは、マルガレーテ・ゼプル

魔王ベルゼブブの血が先祖返りしたが、その価値観から魔王の血族として生きることを望まない女性。

そんな彼女がこの場の傑物が集まっている一室に入っていることに、げんなりするのは当然だろう。

だが同時に、この場を作った者は安心させるように微笑んだ。

「君はただの護衛だよ。シユウマ殿の一件があるから、テイラでは少々邪推されるかと思ってるね。この場に後継私掠船団ディアドコイ・フライベーターを連れてくるわけにはいかないだろう?」

「なるほど。まあ、あいつらはその辺りは弁えてくれるからいいんですけど」

その答えに納得したのか、マルガレーテは一步後ろに下がるとそのまま直立不動になる。

同時にいつでも戦闘に移れる力具合であり、それを見た二名の悪魔は素直に評価の感情を浮かべている。

万が一を考慮して構えるのは護衛としては妥当な判断。むしろここまで優れた資質を見せていることに評価を示したい。

だが同時に、彼女の地雷を指摘する可能性を悟っていたので、二人

は揃って言及は避けていた。

そしてそれが偶発的につつかれることが無いよう、フロンスは小さく苦笑をしながら話を始めることにする。

「今回はお呼び立てして申し訳ない。ただ今後の冥界の未来を左右するとはいえ、ある意味では与太話なので、お茶でも飲みながら出構いませんですよ、グレイフィア殿」

「……では失礼して。……なるほど、いい茶葉ですね」

そういう対応をとるのは、グレイフィア・ルキフグス。

隔離結界領域に向かうサーゼクス・ルシファーが遺した唯一の眷属。最強の女王、銀髪の殲滅女王と呼ばれる、魔王クラスの純血悪魔である。

同等とされたロイガン・ベルフェゴールが不正を明かし処罰を受け、魔王セラフォル・レヴィアタンが隔離結界領域に旅立った今、彼女は女性悪魔最強そのものだ。

そんな彼女をあえて呼び出しながら、フロンスは最低限の礼節をとりながらも余裕だった。

分かっているのだ。グレイフィアはこの場でこちらを害することはないし、害する気にさせるつもりはこちらにないし、万が一にも満たない可能性が起きたとしてもマルガレーテがいれば、外にいる警備班が来るまでは余裕でしのげると。

そしてそんな彼は、表情を鋭くするともう一人の人物に視線を向ける。

「そちらも飲むと良い。というより、入れた侍女が気にするだろうか、飲めとすら言いたいのだがね」

「……罪人が、こんなところで茶をたしなむわけにはいかないだろう」

そう返すのは、デイハウザー・ベリアル。

皇帝の異名すら持つ、レーティングゲーム不動のトップ。純血悪魔が誇る、魔王クラスの傑物。

ビィディゼ・アバドンが不正の結果である駒を封印され、ファルビウム・アスモデウスとサーゼクス・ルシファーが隔離結界領域に旅立った今、彼はアジユカ・ベルゼブブに次ぐ最強格の純血悪魔。真っ

向勝負でもグレイファイア・ルキフグスと渡り合えるだろう。

そんな冥界でも指折りの戦士を前にして、フロンズは冷たい表情を浮かべている。

「いいから飲みたまえ。罪人なら尚更、飲めと言われたものを拒むわけにはいかぬと思うが?」

「……そういわれると断れないな。……ふむ、確かに茶葉だけでなく入れたものも良いものだ」

その二人を見てから、フロンズも改めて紅茶を一口飲む。

そのうえで、彼は二人に対して本題を告げる。

「さて、前置きをするところの話は、アジュカ・ベルゼブブ様及びゼクラム・バアル様のお二人にも許可を得ている。そういう大前提で進めてもらいたい」

「構いませんが、どういう話ですか?」

そう切り込むグレイファイアに、フロンズはこともなげに告げた。

「単純明快に言いましょう。……私が主導で推し進めている九大罪王制度、その枠についてももらいたい」

一方その頃、地球のある一角。

アジュカ・ベルゼブブが個人的に持っているビルの屋上庭園。

そこでアジュカは、破壊神シヴァと語らいをしていた。

「ふふふ。国際レーティングゲームの準備は滞りなく進んでいるようだね」

「大王派の主導権をフロンズ・フィーニクスが握ってくれましたからね。彼は中々バランスを考慮して動いてくれているので助かります」
「そう語る彼らの視線の先には、タブレットに表示された各種データがある。」

それは「国際レーティングゲーム大会「アザゼル杯」」の文字が浮かんでいた。

もとより、レーティングゲームの国際化は冥界でも進められていた。

レーティングゲームそのものに各勢力が興味を持っていることが一つ。和平によって溜まるだろう、不満のガス抜きに代理戦争じみたものを用意したかったことが一つ。またレーティングゲームの不正をどうにかする手法として、数多くの勢力が目を見せられるようにしたかったこともある。

デイハウザー・ベリアルが隠し立てせずに大きな公表をした時には肝が冷えた者も多かっただろうが、おかげでいきつかけになったところはあある。

「シヴァ様がご協力してくださったことには感謝しています。お互いに迷惑を叶える為に共存共栄といきましょうか」

「そうだね。まあ、ブラフマーやヴィシュヌ、その他の隔離結界領域に向かった者達に恥じる真似はしないと約束しようか」

そう語り合いながら、シヴァは同時に興味深そうな表情を浮かべ、モニターを操作する。

そこに映るはフロンズ・フィーニクス。

その下に移る「最上級悪魔」の階級に、彼は笑みを深くする。

「政治の分野の功績を中心としての最上級悪魔。分家出身の若手でありながら、現在の大王派は彼が取り仕切っていると聞いているよ」

「もとよりフィーニクス家は、冥界の出生率問題に多大な貢献を果たしていますからね。大王派から多発する不正問題において、シロの者達を上手くまとめ上げた手腕に、俺たち魔王派や初代バアル殿たち旧家の価値観を配慮して、上手く中継点となっていることが大きいもので。それに見合った地位につけないわけにはいきませんよ」

そう告げるアジュカは、流石に少し苦笑気味だった。

「……正直少し不安もありますかね。まあ、当面は問題ないとは思いますが」

「九大罪王制度だっけ？　大王派主導で進めていた計画なのに、初代罪王に傘下はおろか大王派寄りの者を一切入れないように動いているそうじゃないか」

その対応は、スタンスの表明といえるのだろう。

当面、大王派は魔王派より下でいい。発言力が低下しているが、それを罪王で補おうとは考えない。

この対応は殊勝と捉えられ、魔王派からもそれなりに安心感を生んでいる。

とはいえ、ここにいる者は楽観的には動いていなかったが。

「抜け目なく、そんな罪王達が配慮せざるを得ない地位には何人か滑り込ませようとしていますかね。まあ、こちらが強く出そうになる前に引く程度の行動ですが」

「発言力が得られればいいけど、それで敵を作るような真似をしてまではないか。これはあれだね、既に数百年ぐらい先を見越しているようだ」

そう評価するシヴァは、そのうえでタブレットを操作する。

「……ただし、血統や歴史を重視する大王派として相応の策は取っている。この提案はそういう事かな？」

そう尋ねるだけの一手。

それはフロンズが直々に「初代罪王の有力候補」として提案した、二名の悪魔。

映し出されるは、グレイファイア・ルキフグスとデイハウザー・ベリアルの二名だった。

「……奇手ではあるけど、同時に効果的だ。グレイファイア女は今も昔も魔王クラスで、魔王の妻でもあったからね。ベリアルの方は元々大王派だけど、この流れで大王のシンパと思われることはないだろう」

「大体的には恩赦にしつつ、実態としては処罰として強制させるようですがね。冥界の未来に効果的な一手を入れつつ、皮肉を極めて私怨もぶつけているようですよ」

ことデイハウザーに関していえば、そう言うほかない。

今頃その話をしている頃だろうし、デイハウザーは渋い顔になっているはず。

そう思いながら、アジュカは少しだけ彼に同情した。

「……一応言っておくがデイハウザー殿。貴殿においては強制であり、拒否権はない。アジュカ様とゼクラム様双方に話も通しているのですね」

デイハウザーが拒否されるより早く。フロンズは前もって釘を刺す。

「私を魔王の後継にするなど、民意が納得するのかね？」

「するさ。そういうお膳立ては既に準備をしているからな」

そう切り返すと、フロンズは機器を操作して後ろのモニターに情報を展開する。

そこに映し出されるは「アザゼル杯」の文字とその概要だった。

「貴殿の告発に対するある種のアンサーとして、よりクリーンなレーティングゲームの取り組みとして、このような催しが行われる予定となっている。アジュカ様たちは同様の催しをかつてから起こしたがつており、貴殿のやらかしを上手く利用し、ここから各勢力の目が光るレーティングゲームを作り上げたいようだ」

そしてモニターを操作しつつ、いくつかの情報をピックアップしていく。

「しかしレーティングゲームというルールがあるとはいえ、この催しが起こればプロのプレイヤーでも上位に入れるかは分からない。そしてそれは場合によっては、悪魔側の不満に繋がりがねないだろう」
そう告げ、そしてフロンズは指を鳴らす。

「だからこそ、それなりの方法は必要なのだよ。「彼でもできないなら仕方がない」か「神が相手でも彼なら勝てるんだ」のどちらかがね？」
「……今更私に、ゲームの英雄と成れというのか？」

デイハウザーの視線は鋭くなるが、フロンズも鋭い視線でそれに対応する。

「不正はさせせん。貴殿が実力で負けたのなら民も諦めがつくし、貴殿の実力が届けば民の希望となる」

そう告げるフロンスの表情は、しかし鋭さを通り越して一種の敵意があつた。

それはデイハウザーが魔王クラスであろうと変わらない。むしろそんなことは問題ではない。

相手は現状罪人であり、政治の場において自分は冥界でも指折りの発言力を持つ。そして護衛は彼が本気を出しても対応する余地がある。

直接勝てなくても、それ以外の形で引きずり落とせる。政治という自身の強みを自覚しているがゆえに、フロンスはデイハウザーと真つ向からにらみ合える。

「分かりやすく言い換えよう。悪魔にとってのレーティングゲームの価値を大きく減じた行動を償え。レーティングゲームにとっての悪魔の価値を守る為に生きることだな」

そのうえで、しかしフロンスは更に続けてしまった。

「貴殿が性急かつ乱暴な真似をした所為で、出なくてもいい犠牲が多数出ているのだ。……それなりの報いは受けてもらわんとこちらも気が済まんだよ……っ」

怒気は隠し切れない。

フロンス・ファイニクスにとって、シュウマ・バアルを失つたことはそれだけの重みをもっている。

そして、彼のように不正をさせられた者達を思えば、彼らに温情を与えきれないこの流れは不快感すら覚えていた。

ゆえに、フロンスはベリアル家そのものが大王派寄りであることを踏まえてなお、デイハウザーを罪王候補として推薦した。

既にベリアル家が大王派から離れて言っていることを踏まえてなお、余計な疑心が生まれるリスク込みであえてこの嫌がらせを行ったのだ。

「ちなみにベリアルは傲慢の大罪を司るとされているが、私は憤怒か怠惰にするよう求めているよ。激情に駆られて段取りと根回しを省略した貴殿に、これほど相応しい罪は無かろう?」

「……フロンス様、しなくてもいい戦いはしたくないのですが……」

思わずマルガレーテが苦言を呈するほど、フロンスからは珍しく毒が漏れている。

今の発言からもよく分かる。要はベリアル家に相応しい罪には就けず、自分の愚行に相応しい罪で生きていけと言っているのだ。段取りを踏まえることを切れた勢いで怠けたことを背負い続けろと。

そしてその毒と怒気に、デイハウザーは洩面を浮かべながらも引く構えを見せた。

「……道化となつてでも冥界に光を齎すこと。その為の人身御供になることが、私の罰か……」

その流れである種の区切りができたかと判断したのか。それともこのまま二人に話させると暴発が起きると踏んだのか。

グレイフィアは此処で、飲んでいた紅茶のカップをあえて音を立てて置く事で、意識を自分に向けさせる。

「その流れだと、私の場合は強制ではないという事かしら？」

それはルシファアに使えるメイドのグレイフィアではなく、サーゼクスと愛し合う妻のグレイフィアとしての顔。

その顔で、グレイフィアは確認する。

デイハウザーに関しては拒否権がない。むしろそれをもって罰とする。それはすなわち、グレイフィアにとってはそうではない。

そしてそれを、フロンスは素直に頷いた。

「貴殿に関しては強制の余地がありません。最も、アジュカ様もゼクラム様も貴女が罪王に就任するだけの資格があるとみていますがね」
当然だろう。

大王派をまとめているとはいえ、フロンスの権限ではグレイフィアに対して何かを強制できる立場にない。

しかし同時に、アジュカ・ベルゼブブもゼクラム・バアルも認めているのだ。女性純血悪魔で最強の彼女は、罪王に就任するだけの箔と説得力があると。

「魔王クラスの力量を持ち、サーゼクス・ルシファアと愛し合う妻。貴女なら、夫が一万年を賭けてでも繋げた冥界の未来を支える王となることは、デイハウザー殿の贖罪に並ぶ美談です。ゆえにまとめて話を

振らせていただきました」

「なるほど。デイハウザーとだけ話すのは、不安要素があつたようですね」

その切り返しを、フロンズは否定しない。

毒が漏れることを事前に想定して、デイハウザーも自分も最低限の冷静さが取れる状況を作る。なのでまとめて話をするのも兼ね、グレイフィアをストッパー役に据えているという事だろう。

それをあえて意に介さずグレイフィアは目を伏せ、少し考えこんだ。

数秒、それだけで彼女は考えをまとめて目を開く。

「」

その返答に、フロンズもデイハウザーもマルガレーテも目を見開いた。

そしてフロンズは――

「ふむ、ではこういう流れが必要なのですが――」

そこからくる話し合い。それを聞いたデイハウザーとマルガレーテは、こう思ったことを身内に語っている。

―胃が痛くなる話し合いだった―

序章 第二話 久しぶりの安らぎ

和地 Side

俺はまどろみから目を覚ますと、人肌のぬくもりを感じて苦笑を浮かべた。

「…………えへえ…………天ぶらあ…………いっぱあい…………」

好物の夢を見ながら、よだれを垂らして寝言をつぶやく鶴羽。

「…………すう…………う…………く」

転じて静かに寝息を立てているのはカズヒ。

うん、こういうのも平和でいいんだろう。イツセーから時々嫉妬の視線を向けられるけど、悪質な嫌がらせはされてないからいいだろう。男としては色々最高です。

ただそれは置いといて。

俺は左右で眠る二人を見てから、真ん中で震えている最後の一人に向いた。

「…………おはよう、というより…………寝れたか、リーネス？」

「い、一時間に五分は…………っ」

全然寝れてないな。これは恥ずかしくて、寝たくても寝れなくて寝てもすぐ起きてしまうパターンかあ。

おいおい、今日は学校あるぞ。

やはり学校がある日の夜にこういうのはダメな奴だったな。……人数が多いから、こういう時もそこそこ入れないとダメなんだった。まあスケジュール調整はしながらやっているし、今後調整するべきだろう。ただリーネス、教室が違うからフォローしきれないんだよなあ。

「というより、だ。なんでカズヒも鶴羽もリーネスの初夜を完全サ

ポート体制なんだ。初夜が40とか、客観的に考えてアブノーマルすぎないか？」

俺もカズヒも鶴羽も、性体験が独特ではある。独特ではあるけど、これは流石に客観視してアレになるだろう。

ちよつと頭痛を覚える中、リーネスも思い出して更に恥ずかしくなっているのか、またプルプル震えてるし。

「御免なさい。その、待ちきれなくて……睡眠不足気味で……」

「ああ、だから退院祝いでいきなりこの流れになったのか」

実は昨日まで、俺とカズヒは入院中だった。

色々滅茶苦茶なことをしていたので検査入院的なあれだ。おかげでだいぶ引つ張られた。

なので、リーネスの告白に正しく答えている暇もなかったわけだ……うん。

「リーネス」

「え……っ！」

俺はそつと、リーネスを抱きしめる。

抱きしめて、リーネスのすぐ近くで深呼吸。

うん。大丈夫。

「大丈夫。俺はリーネスのことをそういう意味で好きだと思ってるし、これからもつと思えるって確信できた」

だから、俺はぎゅつとリーネスを抱きしめる。

「落ち着いたら、デートしような？」

「え……あ……は……い」

わあい。すつごい可愛いリーネスが堪能できましたあ。

「と、いうわけでそろそろ起きていいぞ、二人とも」

「……うん」

ちなみに、途中からカズヒも鶴羽も起きていることは気づいてました。

こういう時に親友に気遣えるのなら、そもそも初夜の完全サポートとかいった暴走はしない方がいいのでは。俺はちよつと首を傾げてしまったりした。

降りてきた九成達と朝食を食べるけど、朝の話題は一つになってる感じだな。

「マジか、国際レーティングゲーム？ この時期に？」

「そうなんだよ。俺もついさつきレイヴェル達から聞いたばかりでさ、結構驚いてる」

九成も流石に知らなかったみたいで、俺達もちよつと話が弾んでるな。

なんでも、アジユカ様にインドの破壊神シヴァ様を筆頭としてそんな話になったらしい。

こんな時期について気もするけど、同時にこんな時期だからかもしれない。

「この一年は色々大変だったからなあ。そういう意味だと、民衆の心を慰撫する感じなんだろうなあ」

なんとなくだけど、俺もそんなことが分かるようになってきた。

龍神化の反動とかで全然できてないけど、こういう時こそおっぱいドラゴンの公演とかを冥界でした方がいいじゃないかって思うしな。その一環なんだろう。

「そうですね。和平が結ばれてから禍の団との闘いが何度も起きてますし、このままだと和平に負の印象が生まれるかもしれないし」

「ありえますね。和平そのものが多くの混乱のきっかけになったと、そういう風に考えてしまう者はいるでしょうし」

ルーシアとロスヴァイセさんも、朝食を食べながらそんなことを

言ってくる。

なるほど。そういう風に考えてしまう時もあるのか。

「それはそうですね。領民達の心を慰撫することも王の仕事、そういうイベントを用意するのもまた必要な業務ですわ。イツセー様も、追いついたらおっぱいドラゴンのイベント要望が来ておりますのでいくつかは受け入れてくださいませ」

そして敏腕マネージャーのレイヴェルからも、厳しくも頼もしい意見が飛んできた。

うん、やつぱり出てくるか。

俺も頑張らないとな。おっぱいドラゴンはこういう時こそ、冥界の子供達に笑顔を届けなさいと！

気合を入れて朝飯を食べるけど、母さんと父さんがなんかしみじみといった表情だった。

「お父さん、イツセーが、イツセーがなんか広い視野で物事を語っているわ。……成長、したのねえ……っ」

「ああ、母さんや。俺達の息子が世界とか国家とか、そういう規模のことを考えるようになったんだ……っ」

そんな光景を見た九成は、俺の方とちらりと見た。

「親孝行、きちんとしてろよ？」

「はい」

色々親関係がアレな九成が言うと、何も言えない。

さて、こういう時はカズヒとかも一家言とかありそうだけど――

「二」「……卵かけご飯、お代わりっ!!」「二」

――今日は卵かけご飯だった！こりや無理だ!!

ま、そんなこんなで俺達は、それなりに平和を取り戻しながらも、変化を少しずつ見つけて言っている。

そう、変化とさえばだ。

「そろそろ、俺達も進級だし、卒業式もあるんだよなあ」
もう二月。ならすぐに三月だ。

俺達も三年生で、リアス達は卒業なんだよなあ……。

祐斗 S i d e

「……どの国家も色々と動いているみたいだね」

なんとなく、僕は休み時間にそんな話をしていた。

話をしているのは、ジューズを買いに行っている時に出会った匙君だ。

流石に禍の団との闘いも当分は鎮まるだろうと思っていたのもあり、ちよつと話はずんでいる形だね。

「ああ、特に日本は大変だぜ？　なんとって、皇族が変態達にターゲットにされたわけだしな」

匙君は少し頬を引きつらせているけど、仕方ないところもあるだろう。

日本という国において、天皇一族は象徴として、今現在においても凄まじく重い要素だ。そんな彼らが寄りにもよって、「全人類を淫乱な変態にする」なんて言う思想で動く組織に害されるところだったわけだしね。しかもその過程で東京都心が戦場になったんだから、それは衝撃的だろう。

アポプスが率いたトライヘキサと邪龍達で、ただでさえ自衛隊には被害が出ている。その再編は復活を考慮していたこともあって、日本は国防強化に凄まじく力を振るっているようだし。

「しかもほら、あいつらの置き土産といふかなんていうか……あれだろ？」

「そうだね。あんなものを手に入れたら、国家も大きな動きを加速させるだろうさ」

お互いに苦笑するけど、これもまた衝撃的だろう。

大欲情教団の地下性都と呼ばれた拠点。その、本部ともいえる地域。

禍の団との闘いなどもあつて壊滅的で、回収できた技術や設備は僅かではある。ただ同時に、周囲を含めた土地そのものは得られている。そして、それは聖墓によつて作られている。

カテドラル・グレイブ 現世聖域の墓標。神の子が埋葬された聖墓に由来する聖遺物。地脈や地殻変動の力を利用して、地形を変動させるだけでなく優れた加護を与える聖別された聖域を作り出す神滅具。

彼らは教主が宿したそれを基点として、神器をそうとは知らずに研究して、再現まで行つた。そして教主もそれを使い、地下性都を作り上げた。

その所為だろう。彼らは来るべき全世界変態化における橋頭保としても性都を作り上げていたのか、周囲の土地にも影響を与えていた。

おそらく、地球という大地の地下深くにある資源だ。それを世界各地に作り上げているだろう地下性都や拠点の地脈及び地殻変動を使い、集めたんだ。

本部中の本部であることもあつてか、地下性都近辺は何時の間にか鉱脈の宝庫となつている。

そこはもはや、鉱脈の見本市。金や銀といった貴金属、ダイヤモンドやルビーといった宝石類、更にいわゆるレアアースまであり、最低でもつまり、十中八九もつと長く続く一世紀は輸入を必要としないどころか、小銭稼ぎ程度の輸出も狙えるとされている。間違いなく国家財政的に莫大な恩恵を与えるだろう。

それもあつて、防衛費に国内GDP比率の大幅引き上げは確定。まずそこに注力しているようだけど、大欲情教団が暴れたこともあつて

国内外を問わず問題視されていない。

とはいえ、かなり思い切ったことを進めているようだけどね。

「確か、憲法九条の解釈を大幅に変えているとかニュースで見たよ」
「友好国が侵略されれば間接的に自国も侵略される。ゆえに、自国の為には友好国の国防に貢献することも国防活動である」だったな。まさか型落ちとはいえ兵器の輸出やライセンス生産って話まで出るなんてな……」

匙君も遠い目をしているね。

……日本の自衛隊は、他国の軍隊と比較しても質は高い方だ。独自に攻撃潜水艦を開発し、第三代戦車を国産で運用しているしね。

それに伴い、最新型に刷新されていく一世代前の兵器に目を付けたらしい。他国のさらに質で劣る兵器の刷新にそれらを使い、場合によつてはライセンス生産まで許すという対応をとっているそうだ。

はつきり言つてかなりこじつけに近いけど、大欲情教団対策は世界的な急務。その一環としての側面もあり、今のところ国内外問わず反対意見はさほどないそんな余裕がないとも言う。

というより、どこの国もそんな余裕はないだろう。

……回収することができた僅かな情報から、大欲情教団の拠点である地下性都は、国連加盟国全体で見れば平均1.5はあるとされている。国土や人口から逆算すれば、複数国で一か所という場合も想定される中で、だ。

更に彼らによつて連合艦隊で数多くの兵器が奪取された。中には戦略原子力潜水艦もあり、つまり彼らは核兵器を手にしてしまつている。

結果としてどこの国も、軍事面できく強化が必須。どこかの国が制圧されて性都ならぬ性国になったら目も当てられないとして、殆どの国家はまず自国及びシンパの国の軍事力強化を重視。対立国に対しても「自分の身を変態から守れるようにしろ」というスタンスらしい。

結果として、日本のこの行動も容認されている。うるさく言いそうなの中国も、空母を奪われるという大損害で余裕がないようだしね。

そういう意味だと色々大変ではあるけれど――

「……まあ、ここから持ち直していくべきだろうさ。僕らもね？」

「だな。流石に当分は禍の団も動けないだろ」

――それを平和に繋げるのは、未来を担う僕達の仕事でもあるだろう
さ。

序章 第三話 お久しぶりねの平和な学園♪

和地Side

まだ二月だと寒くはあるけど、だからこそ屋上には人が少ないわけだ。

そして寒い中で温かい飲み物を飲むのはある意味で格別ではある。そしてそんなことを考える俺は、今日は屋上で昼食を食べるようになっているわけだ。

「……あ、あああくん」

「うん、あくん」

ただし、リーネスと二人つきりである。

ちなみにお膳立てをしたのはカズヒと鶴羽。既に数日前から準備をしていたらしく、人払いの魔術的措置をぶちかましていたらしい。

正直何をやっているんだと言いたい。いや、親友を思う気持ちは正しい、俺もそこは尊重したい、でもやりすぎである。

まあ、そういう状況下だからこそできる余地つてもものもある。

具体的には――

「しっかりとこの拡張ユニット天才的だな。俺や木場が使えばいろんな意味で省スペースが確立されるし」

「そ、そうでしょお？ 実は元々、私はこつち方面の研究に手を出していたのよお」

ちよつと自慢げなリーネス特製の手袋をつけた俺は、今創造した鍋でチーズフォンドウを食べている。

学校の屋上でチーズフォンドウ。教師陣に知らればツツコミが入りそうだが、調理器具を持ち込んでないから悟られない。ちなみに牛乳やソーセージなどは小型の保冷バッグを分散で隠し持って持ち込んだ形だ。

いやあ、チーズフォンドウ美味しい。下茹でしてた野菜とかソーセージとかだけだけど、チーズを含めていいものばかり持ち込まれてるから美味しい。

そしてこの手袋はリーネスが研究していた、神器の拡張ユニット。ある意味でパラディンドッグの前身ともいえる技術だが、これにより俺の魔剣創造は発展し、剣どころか刃物でもない物を至ることなく創造している。コンロ無しで一定温度を維持する鍋とかだ。

「しっかしごめんな、入院長引いて？ 本当ならまずデートが先だとは思ってたんだけどさあ」

いやあ、そこは困ったもんだ。

退院タイミングもあったので、数日はデートに行っている暇もない。

この屋上チーズフォンドウは、つまるところ代用に近いその場しのぎだ。俺達が二人でいちやつける空間を作って、少しだけ……って形なんだろう。

まあ、週末には流石にデートするけどな。リーネスはクラシックや雅楽主体で音楽鑑賞が趣味だから、そういったものが楽しめるカフェとかを巡りつつ、昼飯は卵専門店でお飯を中核とする飲食店をチエック済みだ。

色々俺が鈍感で、メンタルに負荷もあつたらうからなあ。その分は頑張つてカバーさせてもらいますよつと。

で、俺がチーズの管理をしつつリーネスがチーズを捌めてあーんする流れを続けていると、小さくリーネスが息を吐いた。

「……あ、お腹いっぱいになつたか？」

「いいええ。そうじゃなくて……その……ねえ？」

ちよつと言いくそうにしているので、俺は無言で微笑みながらそれを待つ。

そしてちよつと言ひ難そうにしていたリーネスは、ふと空を見上げた。

「思つてなかつたものお、こんなことお」

そう呟いたリーネスは、感慨深い表情になっていた。

今の自分が信じられないような、そんな表情。

ただ、その雰囲気は悪くない。

「ずっと……ずっと、日美子達とまた会えるかもと、会えた時居場所が作れるようにと思ってたからねえ？　だから、私が彼氏を作るとか、考えてなかったもの」

そうか。うん、そうだな。

リーネスは、亜種聖杯で転生者を悟る魔眼まで作った。そうまでして、道間日美子や、道間七緒や、道間乙女や、道間田知を探していた。神の子を見張る者で頑張ったのも、きつと居場所を作れる立場を得る為だったんだろう。そこをずっと頑張ってきて、そして今度は道間誠明の件だ。付け加えるなら、道間乙女分裂問題とかもだろう。ヒマリとヒツギが共にいた時の、リーネスの精神状態はちよつと同情したくなる。

だからこそ、自分が幸せを得る側になったことで困惑しているわけだ。

だから、俺はそつとリーネスを抱き寄せた。

「……ありがとうな、リーネス」

「え……え、ええ……っ!？」

慌てるリーネスだけど、これは本心だ。

いや、これだけじゃ駄目だな、うん。

「頑張ったな。本当によく頑張ったよ、ありがとう」

ああ、これが本心だ。

リーネスは本当に頑張ってくれた。俺達の居場所を作ろうとして、本当に作ってくれた。

リーネスが色々と動いていなければ、俺は今頃カズヒと会えなかった。というか今頃死んでるしな。ついでに言うと、インガ姉ちゃん達を救えなかったとも思う。

ああ、それにいろんなものをリーネスが用意してくれた。それがあ
るからこそ、俺達は生き残れた。

今ここに俺がいるのは、リーネスのおかげだ。

「だから、思う存分俺で幸せになっってくれ。これから俺は、リーネスを

幸せにすることも頑張るから」

ああ、確信した。

俺はリーネスが好きになった。愛することができたし、これからもできる。

だから、今はそつと抱きしめる。この気持ち、少しでもリーネスに伝わるようにと。

「……ええ、よろしくねえ」

体重を少し預けてくれる、リーネスにちよつとはしやぎそうになったのは内緒だ。

「あら、ちよつとぐらいはしやいでいいのよお?」

「あれえっ!?!」

なんでバレてるっ!?!

カズヒSide

私は昼休み中にある呼び出しを受け、そしてその申し出を受けることにした。

受けることにしたのはいいのだけれど……。

「イツセー、ちよつと相談があるわ。いえ、愚痴があるわ」

「俺最近なにかしたか!？」

思わぬ展開と指名ビビられたわね。

「いや待ってくれ。本当にあれから覗きはしてないしエロ本だって学校じゃ見てないし、エロ話も人に聞こえないようにしてきたぞ!」

本気で泡を食っているのは流石にシヨックだ。

「一応言っておくけど、それは日本の公序良俗よ。いえ、貴方の煩惱だと大変なのは分かってるけど」

とりあえずそこは釘を刺しておく。

イツセーにとつてそれがどれだけ精神的に負荷がかかることであろうと、その所為で心因性のひきつけを起こそうとだ。あまりの頻度に今までヘイトをためていた女子生徒すら若干同情するようになっていたとはいえ、そこは問題である。女子生徒の警察が知ったらガチで動くレベルの過剰報復とトントンにしたとはいえ、本来なら警察署に文字通り叩き込むことを考える問題行動だからだ。

だがまあ、今回はそこではない。

「説教じゃなくて愚痴よ。これに関してはイツセーの責任はほぼないわ」

「……何があつたんだよ? あと九成には言わないのか?」

イツセーもいぶかしげな表情をするけれど、それはそれよ。

「今はリーネスと二人の時間を楽しみ合うことが先決。まあ、どっちにしてもオカ研に言うけれど」

とりあえずそろそろ本題に入るとしよう。

「風紀委員会から助っ人要請がなされたわ。……具体的には今生徒会用の特務部隊を、隊長として結成してほしいと言われたわ」

「……………なんか、ごめん」

イツセーはそれだけを絞り出した。

「いえ、あのバカが聞かないのは今に始まったことじゃないわ。ただでさえドアノブや寝相でそっちも疲れるでしょうし、そこまで説教するほど鬼じゃないわ」

「……なんでゼノヴィア達は、ドアノブを使うタイミングがおかしいんだろうか。あと寝相の悪さが俺にばかり集中するのもなんで？」

そこは同情するわ。

まあ、つまるところそういう事だ。

ゼノヴィアが生徒会長になってから、駒王学園高等部の生徒会は大きく変わったと言ってもいい。

具体的には暴走超特急。しかもアザゼル先生に話を通すという不正一歩手前の搦め手を使い、不良高校に殴り込むという真似までしてきやがった。

前会長であるソーナ先輩も、割と放任主義というかなんというか。もうちよつとビシつと言ってほしいのだけれど、生徒会長を退任したから深く突っ込まない主義のようね。

ただし、不良高校に殴り込みに言ったら世界全土で活動する犯罪組織対外的にそう説明するしかないな大欲情教団の構成員が出るという大騒ぎ。しかもそれが遠因で奴らがカウンターを叩き出して世界各国の連合艦隊が大打撃。同時に皇族すらターゲットにした東京都心での大戦闘。結果として世界全土に影響を及ぼすは、戦略核がそのまま取られるわと、大騒ぎになっている。

なので、正式にお目付け役をつけたいということになったらしい。アザゼル先生が隔離結界領域に行ったことは、これを止めない要素になったでしょうね。

ただし、問題があまりに数多い。

「ただ現実問題、今の生徒会って武闘派集団でしょ？ だからこつちも戦力になる連中を中心にするつもりだし、兼任になるからオカ研にばかり顔を出せないのよね」

「……お前も大変だな。ミザリの件が片付いたばかりだったのに」
そうなのよね。

ただまあ、誠にいを……ミザリを倒せたことではじめをある程度はつけたわけだ。その分少しは余裕もあるだろう。禍の団も当面は活動を自粛するでしょうし。

だからまあ、受けることにしたわけだ。

そしてその為、色々とこちらも動いている。

「対策として、未だ法律面で色々と不鮮明なのを逆手にとって
エスベラント星辰奏者の適性持ちを探してスカウトする予定だわ。最悪の場合は
仮想敵という名目で勇ちんのPMCに就職を斡旋する予定」

「マジでそれぐらい必要なのが酷いよなあ」

本当にそれぐらいは必要というのが、あれなのよね。

まあ、そういうわけで――

「松田と元浜に適性があったから誘ってみるわ。あとオカ研からも、
兼任してくれる人がいないか聞いてみるわね」

――そういった仕事もするということになるわね。

「ええええええええええええつ!?!」

そこまで驚かなくても。いや、耳が……っ

序章 第四話 問題続くよどこまでも

和地 Side

「……何がどうしてあんなった……っ」

「落ち着けイッセー。いや、カズヒがなんかごめん」

その日の午後、俺はイッセーと一緒にハンバーガーショップでだべっていた。

こういう男同士の馬鹿話にカズヒ達は理解を示してくれている。同性同士でないとできない、馬鹿極まりない話とか、異性をダシにした同性同士のグチとか、そういうのが世の中にはある。

なので、カズヒが女性陣を監視してくれるそうさ。あとでなんか買って帰ろう。

「まったく。なんか体も凝ってるなお前。あとでツボでも押してやるから元気出せ」

「いやだつてさあ？ 松田と元浜が星辰奏者だぜ？ ツツコミ追いつかないっていうか、意味不明っていうかさあ？」

「星辰奏者の適性は、ピンキリ問わなければ数%ぐらいはあるだろうからな。ま、お前は意味不明な星辰奏者なんだからおまいう案件だからな？」

イヤホンと、サーヴァントと一緒に体を作り直して、二人で一つの星辰光アステリズムつて意味不明だからな？

そんなことを言い合いながら、俺達はまあくだらない話に移行する。

「そういえば九成、三年になる頃に外国から留学生が来るって知ってるか？」

「三年生になってから？ またタイミングとしては不思議な気がするな」

俺がそれを返すと、イツセーはちよつと目をキラキラさせている。「なんでも本命は大学部の方らしいんだけど、日本に興味があるのとそっちのハイスクールで必要なカリキュラムを全部終えてるってことで、一年早く来るらしいんだってさ。……そういう子って、やっぱり可愛いだろ？」

「フィクションと混同するなフィクションと。後俺もお前もモテまくってるんだから、がつつくな」

悪目立ちしなければいいんだがとか、そういうことを懸念しちまうな。

まあ、覗きの常習犯なイツセーが警察に突き出されないわけだからな。その辺りは心が広い奴が多いし大丈夫か。……いや、それが死んでもおかしくない私刑リンチなのはどうなんだ。

ちよつとため息をつきたくなるが、まあそれはそれとしてだ。

「というかお前、ついに上級悪魔なんだってな。……凄い出世速度じゃないか」

「だよなあ。前代未聞らしいぜ、転生して一年、それもプロデビュー前って」

イツセー自身軽く困惑している出世速度だ。

まあ、手柄だけで言ったら十分すぎるからな。

上級悪魔と一对一の決闘で勝つ。最上級墮天使に襲われながらも、主や仲間達と一緒に死者一人出さず生還する。魔王の血を引く完全上位互換状態のライバルを打倒する。悪魔になってから数か月でこれだ。

更に禍の団がガチになってからは、魔王血族三人がかりだの、悪神によるクーデター騒ぎだの、神滅具保有者が何人も所属する連中との一戦だのを潜り抜け、中級悪魔に昇格。

リゼヴィムが動いてからは、龍王クラスの邪龍なんて代物まで出てきたわけだ。そこに龍神化に到達し、超越者やら天龍クラスすら打倒してのけた。

とどめに俺がメインだったとはいえ、スフィア極晁星を相手にして打倒したわけだ。むしろ最上級悪魔でもお釣りがくる。

ま、同時に若手極まりないからな。ある程度の段取りはあるに越したことはない。

一応段階を踏んでいる。ただその程度のことだろう。間違いなく、近いうちに最上級悪魔昇格が確定する。

「まあ頑張れ。下手するとお前、数十年ぐらいしたら罪王にノミネートされるぞ」

「……いや、まさか」

そんな答えを返すイツセーだが、それはちよつと自分の理解が足りてないな。

あとはまあ環境だろう。普通に考えれば、人間世界基準だと以上だろうしな。

ただ、イツセーは今や異形や異能の世界に生きているわけだ。

「異形や異能の世界を人間界のそれとごっちゃにするなよ？ まあそれにしたって特例の極みだと思うが、俺達はやっていることが特例の極みだからな？」

「……あく。確かに、セラフオール様とか魔王なのに、映画の主演とかもやってるしなあ」

納得してくれて何よりだ。

そういえば、魔法少女レヴィアたんは今後どうするんだろうか。

そんなことを思いながら、俺らはもうちよつとだべろうとしたが――

『――イツセー、和地、聞こえる？』

通信用の魔法陣が緊急展開。

この瞬間、俺達は意識を切り替える。

『――バラキエル副総督から、日本国総理大臣との連名で緊急の協力要請があったわ。すぐに戻って頂戴』

また、とんでもないことになりそうだなオイ。

それから五分後。

家の地下、ブリーフィングとかで使っている多目的室。

そこで俺達オカルト研究部メンバーに、シトリー眷属及びグリゼルダさんが呼び出されていた。

そして足早に入ってくるのは、朱乃さんの父親でもあるバラキエルさん。

一見すると堅物に見えるような偉丈夫だが、生粋のドMで堕ちた人だ。まあMと親バカ以外はかなりまともな人なので、とても信頼できる人物だ。今は繰り上がりじみたところもあるが、神の子を見張る者の副総督を務めている。

裏を返せば、娘がいるなどの縁があるとはいえ、副総督が自ら出てくるレベルの事態という事なんだがな。

「……急に呼び出して済まない。だが少々急ぎなので、本題から入ろう」

緊張感のある表情で、バラキエルさんはUSBメモリを機材に挿入すると映像を映し出す。

展開されるのは関東地方のマップ。そこで駒王町に近い都市部分と、比較的離れた山間部がチェックされている。

この二か所で、俺達の力を借りたい問題が発生した。つまるところそういう事なんだろうが、類似性が思いつかないんだが。

内心首を傾げていると、バラキエルさんは眉間にしわを寄せながら、俺達を見渡す。

「単刀直入に言おう。緊急性のあるまったく別の問題が発生し、更に脅威度が凶りづらいときている。その為奥の手として君達の力を借

りたいと日本政府から要請が来たのだ」

「なんか、妙な雰囲気だな。」

「お父様、緊急性があるのに脅威度が図りづらいとは？ それに異形に
関与するなら、朱雀姉様から話が届くのでは？」

朱乃さんがそう尋ねると、バラキエルさんが頷いた。

「そこが問題だ。今回起きている二つの事件、どちらも異形や異能が
関与しているにしてはその辺りの対応がずさんなのだ」

そう告げると、バラキエルさんは更に情報を開示する。

まず映し出されたのは、近くにある都市部。

学校が映し出されると、その隣に数人の男女の写真も映し出され
る。

「……まずこちらの方だが、神の子を見張る者が確保した神器保有者、
その中で常々異能や異形と関わらない暮らしを求めている者達が多
く通っている付属高校だ」
なるほど。

和平が結ばれる前から、神器関係の見過ごせないトラブルは墮天使
側の責務となっていた。各勢力間での暗黙の了解であり、神器保有者
の保護や、未熟や悪意による神器使いの暴走を殺してでも止めるなど
だ。

正直いい気分がしないこともあるが、和平が結ばれてない状況では
仕方ないことが多すぎる。イツセーもこの件で暗殺され、それが妙な
流れでリアス部長の眷属になったりとかだ。人間世界の各国からも
墮天使の責務という暗黙の了解があり、日本では数年前にやらかし案
件があるので尚更手が抜けない。

そしてそれらは墮天使側で保護している形である為、和平が結ばれ
るまでは不自由を強いることもままあるものだ。仕事をするなら給
料も支払うから、協力してくれる人たちは問題ないが、誰もが異形や
異能で神器の力を使うことを良しとするわけではない。だが和平前
に野に放つのは、技術の流出もあって流石に難しい。

それが和平が結ばれたことで、だいぶ緩和されたとは聞いている。
元々日本は神話側も緩いというか穏健なので、かなり制約が緩んでい

るのは知っている。

「そしてこの学園では、その辺りの記憶を消した者達が通っている寮もある学園なのだが……ここ数週間、学園生徒や教員の様子がおかしいという通報や相談が多発していた」

そういうと、バラキエルさんは映し出されている写真をピックアップする。

「彼らは公安から派遣された調査員及び、保険として我々や五大宗家が派遣した調査員だ。異形や異能が関わっている可能性は低かったが念の為……だったのだが、状況が変わった」

その表情が鋭くなると、更に新しい写真やデータを映し出す。

データの方は何やら妙な数値やグラフになっており、写真では拘束具でベッドに縛り付けられた彼らが映っている。

「……単刀直入に言おう。彼らは特殊な薬物を投与される形で洗脳された。それにより一部の情報を、洗脳した者達に送っていることも判明している」

おいおい、マジかよ。

しかも薬物？ 異形や異能のやり口にしては、多少違和感を覚えるな。

「ヴァレリー・ツエペシユの検査をしている時に、物のついでで聖杯の調整試験対象にした結果アタリを引いたのだ。慌てて他のメンバーも総当たりで調べたら、全員だと判明した」

そう語るバラキエルさんは、顔に苦い色を思いつきり浮かべている。

まあそうだろう。薬物投与で洗脳とか、かなりアレだ。それも異形や異能の者達までいる状態でされるとか、その時点でヤバいだろう。

追加で言えば、そんなことを成立させれる連中がいるのも厄介だ。そしてそうなっているという事は――

「ゆえに可及的速やかに部隊を派遣する必要がある。……加えて面倒なこと、夫従妻隷会の関係者とマークされている者が多数部外者なのに入入りしているという情報も掴めたのでな」

「……また、面倒なことになりそうだな」

思わず俺はぼやいたよ。

夫従妻隷会。「妻という存在は夫の奴隷として服従すべし」という価値観に基づいて行動する、女性主体犯罪組織。

行っていることは、薬物投与などによる男女問わない人格改造や、夫による妻の使役を妨害する者の破滅や支配。それに伴い妻を使役する夫に物資や金銭などの支援も行っている。

かつて性犯罪者抹殺私刑団体である、アルテミスの鉄槌と共にこの辺りも含めた範囲で激しく戦っていた連中だ。あの頃は松田と元浜がエロを抑えてノイローゼを起こしており、エログッズ購入を黙認されていたので俺が護衛したりもしたな。カズヒはカズヒで変態どもを含めた4つ巴になっていたはずだ。

「つまり、犯人は夫従妻隷会と」

「その可能性がどうも低い」

と、木場の確認にバラキエルさんはいぶかしげな表情だった。

低いのか。どういうことだ？

「というのもだ、使われている薬物は全てが科学的に合成されたものかつ、まったくの新種だ。そのうえ、これまで夫従妻隷会が使っていたものとは比べ物にならない効果の高さと副作用の低さだ」

「……それは確かに、おかしいわね」

リアス部長がいぶかし気になるし、カズヒも眉間にしわを寄せる。

「それだけの代物、先進国の専門機関でも投入するべきレベルだわ。いきなり誰にも感づかれず、それだけ大量に薬物を開発できるとは思えないわ」

「そもそも、調査チームが全員洗脳されるまで、緊急連絡ができないともいうのも考えづらいですね。夫従妻隷会が如何にレイダー技術を持っているとはいえ、五大宗家や神の子を見張る者のエージェントままでいてそれは手際が良すぎます」

ソーナ先輩もそれに頷いており、バラキエルさんも頷いた。

「それもあって士気にも揺らぎがあつてな。戦力確保と士気向上を兼ねている」

そう告げてから、更にバラキエルさんは山間部のモニターを操作す

る。

「……そして、こちらの方が大きな問題だ」

そう言いながら映し出されたものを見て、俺達は一瞬絶句した。

スマホでとったと思われる映像は、空から降ってきた何かが直撃した人間が、急にうずくまる映像だ。

そして次の瞬間、その体は変化する。泡立つかのように膨れ上がりたり変色したりし、気づいたときにはホラーゲームのクリーチャーみたいになっている。

『ナグリタイ……ナグ……ルウウウウウツ!?!』

そして飛び掛かる光景と共に、映像は途切れる。

「……これが三十分前の映像だ。そして、同様の現象がその小さな町で起こっている」

おいおい、どういうことだ？

異形や異能による、人体改造ともとれる。だがそれにしてもやり方がずさんだ。

異形や異能は人間界に秘匿することを選んでいる都合上、その手の対策や手段も確立している。こんな簡単にスマホで映像が流れるなんて早々ない。そもそもさせないように立ち回るからな。

まるでアポプスやアジ・ダハーカが暴れていた時のようだ。だが、それにしたって妙だ。

なんだあの、TとかGとかCとかのウイルス案件じみた変貌は。しかも空から降ってきた何かに当たったとか、まず間違いなくそれが原因だろう。

やり方も雑だし、隠す気もない。なら都心部でやるぐらいでもいいだろうに、何故か微妙なところでやっている。

寒気というか違和感が強すぎるが、これもまずいな。

「現在その町は緊急封鎖。自衛隊と五大宗家がこちらでも対応しているが、状況は刻一刻と悪くなっている」

そして映し出される映像には、なんかファンタジーゲームとかで出てきそうな、悪の拠点っぽいものが出てきている。

所々が生物のようになっており、その意匠が似通っているところか

ら、たぶんさっきの化け物と同系列。

……これも、やばいつてのか。

「正直緊急度ではこちらも高いが、どちらも決して時間をかけるわけにはいかない。なので済まないが、緊急用の待機班を含めて三つに分かれて手伝ってもらいたいのだ」

「そうね。これだけの事態、早急に止めないとどこにとつても悪いことになるわ」

リアス部長がそう言うと、グリゼルダさんも頷いていた。

「デュリオ達D×Dの別動隊にも連絡をしておきましょう。万が一の可能性がありません」

「では、夫従妻隷会は私達シトリー側が立ち回りましょう。むしろ派手な動きをとっている方は、リアス達も動きやすいでしょうし」

ソーナ先輩も頷いて動く中、俺はちよつと寒気を覚えていた。

……禍の団が動いている。おそらく誰もがそう考えているだろう。だが、それにしたって違和感が大きい。

禍の団は今間違はなく大打撃を受けているはずだ。というより、組織を再編させる余裕があるのかもわからない。

初期において主導権を握っている派閥は、殆どすべてが壊滅している。象徴にして力の供給源だったオーフィスも、その後釜であるリリスもこつちが確保した。更に切り札であるトライヘキサや極晷も失い、どう考えても組織力で大打撃を受けている。

そんな状態で、これだけの騒ぎを起こせるか？ それも、D×Dの主力である広義的リアス・グレモリー眷属が集まっている東京近辺で？

「……妙なことが起こっているわね。変な事態にならないければいいのだけれど」

小さく、カズヒがそう呟いたのが聞こえてきた。

そして恐るべきことに、この戦いはある意味でとてつもない蛇足になる。

具体的には、禍の団と戦った時のロキに近い戦闘。ろくに関与しないややこしい出来事。そういうほかないのだから。

第一章 新期来訪編
新期来訪編 第一話 負の欲望は尽きることなく

祐斗Side

山間部の町で起きた、謎の魔獣化事件。

僕達オカルト研究部が増援として派遣されたこの事態は、少しややくしいことになっているね。

「……くっ！ 止まれっ！ 止まらないとー」

「ウルサイ……ジャマ……コロオス……ッ！」

牽制として威嚇射撃を行う、自衛隊のバトルレイダー。

だけど、魔獣化した存在は苛立たしげな様子に向け、逆に殺意を込めて殴り掛かる。

ーそれを、僕は四肢を切り裂くことで無力化した。

「ためらえばそちらが殺されます！ せめて四肢を砕いての無力化は割り切ってください」

「……すまない」

やはりこれはまずいね。

東京都の自衛隊は、変態達や数多くのテロリストとの戦闘で経験を積んでいる。だからこそ、腹をくくれば殺し合いに対応するだけの割り切りは持てる。

だけど、魔獣化した存在は民間人だ。

民間人を守るのが彼らの仕事だ。それに映像に映された通り、意図的になったわけではない被害者がこの魔獣ともいえる。戻せるかどうかも分からないけど、それは戻せるかもしれないところはある。だからこそ、自衛官は躊躇してしまう。

……そういう意味では、僕らはまだ割り切りができるだろう。

倒さずに済ませるなら済ますべき相手と何度も戦い、そういった余裕を持ちこめない経験も何度もしてきた。英雄派に操られた神器保有者や、聖杯で邪龍になった者達がいい例だ。

そういった者達を殺すことを選ばねば、大切な仲間や守るべき者達が被害を受ける。それは分かっている、ためらいが生まれることはあるだろう。

だからこそ、ここはそれを乗り越えた僕達がフォローするべきだろう。

幸い、この魔獣化した者達は中級悪魔なら余裕をもって対処できるレベルだ。下級悪魔でも、相応の戦闘経験やセンスがあれば一対一で不覚をとることはまずないだろう。

性能は相応にある。全体的な耐久力は戦車の正面装甲より劣る程度だが、それゆえに対物狙撃銃や重機関銃では急所を狙ってもびくともしない。脅力は戦車をひっくり返せる程度にはあり、存在によってはちよつとした榴弾レベルのオーラを放つなど遠距離攻撃ができる個体もいる。移動速度も一世代前の戦車レベルはあり、跳躍することもある為、機動力は高い方だろう。

総じて、普通の軍隊が相手をするなら第三世代戦車に重装備の随伴歩兵が一個分隊以上は欲しい。そうでないと倒すのは難しいだろう。

だが、倒すのではなく足止めなら、歩兵数人でもできるだろう。なにせ、こいつらの判断は衝動的だ。

それぞれがうわごとのように一つの行動に拘り、それを邪魔する存在に突発的に攻撃を仕掛けると言っている。それゆえに、陽動などは比較的簡単なんだ。

食事に関するうわごを繰り返す者は、手当たり次第に食べられそうなものを食べる。そして胃の容量が限界になったと思えば、今度は吐き出してからにしてからまた食べる。そんな感じだ。

なので、それに類するものを用意することで陽動することは可能だ。性欲に関するうわごを呟く個体に至っては、幻術の要領で複数を融合し、消すと同時に一つだけアダルト雑誌を置くと、同士討ちを始めている。

弱い者いじめの類を咥く個体は戦闘部隊から逃げるような動きをするが、これも弱い者いじめをしたいからなだけだろう。徒手空拳や異能主体な小猫ちゃんやレイヴェルさんは、それぞれが囷と大技を交代し合うことで、そういつた手合いを引き寄せて殲滅していつているぐらいだ。

つまり行動アルゴリズムが単調すぎる。理性が無いどころか、知性に至っても賢い動物はいくらでもいるレベルだ。どちらかというところ、本能の手綱を握れていないというべきか。

だからこそ、慎重かつ冷静に行けばすべてを捕縛することもできるだろう。死人を出さずに鎮圧することも、この魔獣だけなら不可能ではない。

問題は、だ。

僕はちらりと、ある方向を確認する。

そこには巨大な、魔獣で出来た城とでも形容するべきものが出来ていた。

この距離から確認する限り、高さは80mほど。四方の編は200mぐらいの、巨大建造物といえるだろう。

あれが出現してから、更に魔獣の出現率が増えている。更に言えば、人々を魔獣化させる結晶体も飛散している。

既に朱乃さん達が撃ち落としを試みている為、そちらに関しての被害は少ない。だが同時に多少はおり、更なる魔獣となってしまう事態になっていた。

……レイダー部隊が主体になっているのも、装甲で防げるということが重要だからだ。更に異能持ちは魔獣化を防げるようで、当たり前次第に下がって、異能で切除する方向になっていた。

とはいえ、だ。

「この戦力で、これだけの規模の事態を引き起こす？ 不可解だね」
推測するに、大欲情教団と同種の存在と考えるべきだろう。

異形や異能について相応の知識があるのなら、これだけの事態をこの程度の戦力で起こすリスクは分かり切っている。となると逆算して、それが分かかってない者達が動いているとしか思えない。

まったく。禍の団が大打撃を受けたというのに、世の中には困った者達が数多くいるものだよ！

和地Side

まったく。大欲情教団系列の秘密結社的な連中がまたしても出てくるとはな。

しかも、射出して当たったら化け物にするような技術なんてろくでもない物を。TとかGとかCとかいったウイルス系列とは言うが、即化け物かと考えればCが最適だろう。ろくでもなさすぎる。

そんなものが飛んでくるとか、危なくて外に出るのも困難だ。だが建物に籠っていると、魔獣化した者達に襲撃されかねない。

というわけで、俺は今カバーに回っている。

警察から用意してもらった機動隊用の装甲車。それを自衛隊が戦車やレイダー部隊を前衛にして引き連れ、俺がそれに随伴。その車列で住宅街などを回り、俺が障壁でカバーをしつつ乗せて離脱。

このパターンで俺達は避難を進めていた。

俺を抜きしたメンツもいるが、その場合は安全性を考慮する為少数になるほかない。その分どうしても時間がかかるわけだ。

だが俺がいるグループは、俺の星辰光で大きくカバーができる。だから車列は十台以上。その分一回の移動で回収できる人数が多いわけだ。

これもまた、俺が極晃に至った恩恵だ。

極晃に至った俺の星は、性能も大幅に向上している。

これにより、俺の障壁展開能力は数段上に進化を遂げた。上面に大

きく傘のように障壁を展開しつつ、建物から出て車両に入る避難民を数人ずつに絞れば、更にすっぽり被さる様に障壁でカバーができるわけだ。

ぶつちやけ、デیفエンディングタートルやチャージングリザードを使う必要がない。どっちも今の俺なら普通にできるからな。

とてももつたいたないので、あとで何とか改善策を考えよう。文明の発達とは時にこんなもんだが、それでもなあと思ってしまう。

とはいえ、だ。

「ありがとう、少年！ 一旦後方に移動して避難を進めるよ」

「了解です」

サポートに回っている機動隊のレイダーと言葉を交わし、周囲を警戒する。

幸か不幸か魔獣共は、心を鬼にすれば自衛隊で十分対応可能だ。レイダーなら装甲もあつて魔獣化されることはないし、俺達はカバーに回るだけで済んでいる。

そしてその過程で、カズヒが本丸と思われる謎建築物に突貫している。

フォロー担当としてゼノヴィアやイリナ、アニルも参加しているが、対応力を重視してリアス部長まで向かっている。

このレベルの戦力が基本なら問題はないだろうがな。問題は精銳を出し惜しみしているとかの場合だが。

まあ、だからこそカズヒまで参加しているわけだ。本当にやばくなる前に、連絡は来るだろうー

「……ほんとにもう。やりたいことを邪魔しないでっ！」

―その瞬間、後ろから迫りくる魔力砲撃を俺は障壁で素早く逸らす。

斜め上からだつたので、障壁も減衰用まで用意し、いくつも展開して何とか上に逸らす。

余波でマンションの上半分が吹き飛んだが、避難が完了した直後だつたのが不幸中の幸いだ。

厄介な出力だな。直撃してればこの辺り一帯吹き飛んでるぞ。

「……は？」

「い、今の威力は―」

「すぐに避難してください！ こいつは格が違いすぎる!!」

呆気にとられる人達に怒鳴りつけ、俺は素早く魔剣を展開する。

ヤバイヤバイヤバイ！ 思った途端に大粒が来やがった。

今の魔力砲撃、最上級悪魔の領域に届いていたぞ。それもおそらく本気じゃないし、グレンデルレベルの脅威とみなすべきだろう。

「急いで！ こっちもちよつと余裕がない！」

「わ、分かった！ 全員走れ!!」

慌てて避難が進む中、俺は素早く足を踏み込む。

これはガチで動いた方がよさそうなんだな。俺もすぐに対応するさ。

『BLANCE SAVE!』

パラディンドッグを装填する中、相手の姿を確認する。

薄いシースルー素材に見える、薄つすらと内側が透けて見える素材を多用した、煽情的な衣装を纏った女。

青紫の長い髪をポニーテールにした彼女は、手に絶大な魔力を纏っている。

その表情はイライラしているようで、こちらに殺意を向けていることが丸分かり。目の辺りが隠されて対象にも関わらず、それが分かるほどの怒りが見えている。

「折角好きなことだけして生きれるのに、邪魔するなんて無粋なことをしないで頂戴」

「なるほどな。そういうことか」

今の発言を記録しながら、俺は何となくを理解する。

つまるところ、こいつらの目的は衝動の開放といったところか。

他にも色々聞きたいが、まず言いたいことを言わせてもらう。

「ふざけるな。ただそれだけの化け物にすることを、善行だともいうつもりか？」

ふざけるなとしか言えないが、それに対して相手から、呆れといった感情が透けて見える。

「そうでしょう？ 我慢して好きなことをしないなんて可哀想だもの。……素敵な世界を広めたいって、そう思うからしてるのよ？」
「そう言いながら、女は結晶体を何時の間にか展開すると投げつける。」

それを素早く光力とショットライザーで撃ち落としながら、俺はため息をついた。

「こんな形で使うとは。――バランス・ブレイク禁手化」

その言葉と共に具現化するの、魔剣ではなくバイク。

ソニック・チャリオット疾走車輪。俺が持つ新規の一つ。一言で言うなら、めっちゃ凄いバイクを具現化するというシンプルな神器だ。

そしてそれが禁手に至ったことで、かなり大型のバイクに変化。その外見の通り、馬力を中心として更なる進化を遂げている。

だが、それは余技と言つていい。ぶつちやけ今の俺なら、バイクを積極的に使う必要はないからな。

そしてその本領を、自動で走りながら具現化する。

同時に、俺は更なる追加も完了した。

コスモス・メイク「残創」

『ASSALT SAVE!』

装填されるサルヴェイテイニングアサルトドッグプログライズキー。そして同時に、バイクは瞬時に変形する。

現れるは、二つのローターで飛行する人型の従者。サルヴェイテイニングアサルトドッグの影響で武装を展開し、銃撃で砲撃を打ち落とすしながら、車列を援護する。

同時に、俺はパラドックスで仮面ライダーマクシミアンに変身。対応準備を完了させた。

「なによ……気分が悪くなるじゃない！」

「その反応、やはりモグリ類か」

俺は冷静に判断しながら、俺自身の力をカバーする。

俺が至った疾走車輪の亜種禁手。それはバイクそのものを大型化して強化するのみならず、有事に人型に変形しての戦闘支援が行える禁手。その名も、ウォー・チャリオット・サーヴァント戦場駆ける従士の戦車。

更に最初から残神をセットで運用するように設計しており、プログライズキーと装填することで従士の機能を拡張させる
チャリオット・ライドライザー
従士纏う数式装甲を残神として保有している。

さて、俺もいい加減進化を遂げまくっている。

さて、目隠しをしているので表情は読み切れないが、この際それはどうでもいい。

「覚悟しろ。お前らの目的は知らないが、お前は此処で足止めし、可能なら倒す」

星魔剣の切っ先を突き付け、俺は此処に宣言する。

グッドエンド
「嬉涙旧済で今日を終えるぜっ!」

「こっちのセリフよ! 気持ちよくやりたいことをやって終わるわっ!!」

そして、俺達は激突する。

イツセーSide

まったく、いきなりこんなことになるだなんてな!

俺は町の上空で、魔獣達を上から攻撃していた。

俺がオフエンス向きなのは自他共にとってやつだしな。魔獣達の中には空を飛ぶ奴もいるし、思う存分暴れて吹っ飛ばすのが理に適っている。

ただ、そんなことをされれば相手だっとうんざりする。

だから来たよ、強敵が!

「邪魔しないでよ! 皆が可哀想でしょ!」

放たれる蹴りを俺は受け止め、十メートルぐらい後ろの吹っ飛ばされた。

不意打ちだったけど、重い蹴りだな。グレンデルが本気で殴りつけてきたぐらいってところか。結構やるな。

それはそんな風に感触を確かめながら、相手を確認する。

……ビキニみたいな衣装で、結構大きいおっぱいがとつても気になる女の子だ。赤紫の髪はツインテールで、目元は布を巻いて隠している感じだな。

っていうか、俺を相手に女の子が出てくるってことは、敵はやっぱ大欲情教団みたいな感じか。異形の知識はあんまりないっぽいな。

『おそろくはな。だが万が一もあるし、ディアドコイ・ブライベーター後継私掠船団のように対策があるかもしれん。気を抜くなよ?』

分かっているって、ドライグ。

漸く禍の団を倒せたんだ。こんなところで終わる気はないさ。

それに、俺達が住んでいる近くでこんなことをしやがったんだ。相応の報いは受けてもらう。

俺達の平穏を乱す敵は、絶対に潰す。相手が女の子でも容赦しないぜ。

「……可哀想」

と思つてたら、なんかすつごく同情された!?

「な、何が可哀想だ!」

いきなり酷いことを言うやつだな! 出会い頭になんでそんなこと言われなきゃならないんだ!

そりゃあ俺は、おっぱい一杯夢いっぱいなところとかを残念扱いされることもある。自分でも覗きや学校でエロ本を読むのを我慢するだけで、ひきつけを起こすのはどうかと思う時もある。残念扱いされることは仕方ない。

だけどなあ、俺のことをさっぱり知らないだろう奴に、出会い頭で言われる筋合いはねえよ!?

っていうか、泣きそうな表情になるなよ。どんだけ同情してんだ! 「……そんなに強い欲望があるのに、押さえつけてるなんて。もっと素直に解き放つた方が素晴らしいのに……っ」

……俺の煩惱が察知されている!?

っていうか、そっち方向の同情かよ。大欲情教団の関係者なのかと思いたくなるな。

「こっちに来ない？ 君のその欲望を、解放しよう？」

なんか右手まで差し伸べてきてるんだけど。

っていうか、左手で上着を引つ張って生乳を見せてきたぞ!?

うおおおおお！ 非常時だけどそれはそれとしておっぱい！

脳内保存、急げ!!

何とか戦闘態勢をとったままで俺が鼻血を流していると、その女の子は小さく微笑んだ。

「素直になろう？ 私もちよつとムラムラしたし、いっぱい入れて出してい・い・よ？」

俺は、一瞬息を吸い込んだ。

「……断る！」

そしてはつきり言い切った。

「……なんで？ そんなに我慢したいの？」

不思議がられるけど、対した理由じゃねえよ。

「シャルロットあに、リアス女に、胸を張る。それが俺の生き方なんぞな」

そうさ、理由なんてそんなもんだ。

だけど、それで十分さ。

だから俺は言い切れる。俺達の下で起きている光景を前に言い切る。

「……あんな姿になるなんて、まっぴらごめんだ。それじゃあ二人に、皆に、子供達に、顔向けなんてできやしねえ！」

ああ、それに――

「あんなもので、俺達の平和を踏みにじろうっていうんだろ？ だったら容赦なく、滅ぼしてでも倒してやるさ！」

――あんな光景、子供達に見せられるかよ!!

「……はあ」

そして目の前の奴はため息をついた。

「なんでそんなにつらく生きるのかな？ 苦しいだけじゃん、可哀想」
心からそう思っている言い方をしたうえで、その子は足にオーラを

籠める。

……問題は、そのオーラそのものだ。

魔力に近い、その力。そしてヤバいと思うぐらいに、その質を俺は良く知っている。

なんとたつて一回マジで殺されている。死に物狂い、いや決死でだ。おかげで体が一回完全にダメになって、オーフィスや歴代の協力、そしてたまたまグレートレッドが通りがかってなきやヤバかった。

そう、それは――

「……シャルバツ!?!」

「何それ。ゲームのボスキャラ?」

首を傾げるその子は、そのまま蹴りを叩き込んでくる。

そしてそのうえ、こつちのことを本気で憐れむ表情までしてきやがった。

「したいことしないなんて可哀想。見てて辛いから死んじやって!」

なんか滅茶苦茶なこと言ってくる奴だな。

シャルバ……いや、マルガレーテさんを思い起こすところもある。っていうかこの魔力の質、かなりやばくないか?

なんか妙なレベルでアレだけど、なら尚更容赦しねえ。

このままこいつらの好きにさせたら、たくさんの人が魔獣になる。

もし冥界の子供達が、駒王町の人達があんなつたら。そう想像しただけで、俺が戦う理由には十分だ。

「容赦はしねえよ。遠慮なく、吹っ飛ばす!!」

滅ぼしてでも倒してやる、覚悟しな!!

新时期来訪編 第二話 末裔大発掘

祐斗Side

避難誘導はだいぶ済んでいるけど、被害も比例して大きくなっている。

魔獣達の戦闘能力は、戦車と随伴歩兵がいるレベルだけど、そんな存在が遠慮なく暴れば被害は甚大になって当然だ。

魔獣化した者達の数は、少なく見積もっても千を超えている。元々山間部で人口が少ない町だったこともあり、人口比でかなりの割合が魔獣になっている計算だ。

死者だって少なくない数が出ているし、この町は放棄に近いことになるだろう。状況が把握しきれない以上、当面は封鎖して調査に徹するべきだしね。

しかし、下手人は一体誰だ？

この地区は奇跡的に異形が関わっていない空白地帯。とはいえ目と鼻の先に東京がある以上、半端な組織が関わっているとも思えない。

となると、組織の統制が取れなくなった禍の団が暴走したと考えるべきか？

そう思った時、空に影が差す。

見上げればそこに在るのは、強襲突撃ユニットを搭載したサンタマリア級が一隻。

更の上からデビルレイダー部隊が多数降下し、魔獣達との戦闘を開始した。

「どういうことだ？」

ここで大王派がわざわざ出てくる必要はない。それに疑問を思った時、素早く着地する悪魔が一人。

随伴にデビルレイダーも一個小隊規模が降下するが、更に降りる存在の姿に僕は目を見開いた。

「おや？ グレモリーんとこの聖魔剣くんじやないさね？」

「そういえば援軍として要請されていたな。急いできたので通達が間に合わなかったか」

女王であるティラ・バアルを従え、フロンズ・フィーニクスが降下して来ている？

「……いえ、通達は届いておりますわ。ただ乱戦ゆえに行き渡ってないだけです」

そこに、レイヴェルさんが来ると鋭い表情を向ける。

「ですが詳細はこちらにも届いておりません。『その地に重要な存在がいる故、保護を兼ねて援軍を送る』とだけ伺っておりますわ」

どうということだ？

先も言ったが、この町は異形や異能においてはある種の空白地帯だ。

裏を返せば、下手にどこかの勢力が関わると揉める。高天原や五大宗家ならともかく、悪魔側が何の話も通さないでいると、文句の一つも飛んでくるだろう。

僕が周囲を警戒しながら怪訝な表情を浮かべていると、フロンズ氏は手を前に出しながら首を横に振る。

「誤解しないでほしいが、大王派はこの地にはノータッチだ。ただ別件で動いていた情報から、無視できない存在が二人もおられることが判明したのでね。こうして慌てて飛んできたわけだよ」

……どうやら、彼らにとつても寝耳に水な案件のようだね。

「それで、フロンズさん？ そのお二方とはどのような？」

そうレイヴェルさんに尋ねられ、フロンズ氏は苦笑いを浮かべる。

苦笑いとは、どうも判断に困る――

「アスモテウスとベルゼブブのハーフだよ」

……え？

思わずきよとんとする中、フロンズ氏は肩をすくめた。

「当人はそのことを知らないそうだ。だが、無視するわけにもいかな

いだらう?」

……どうやら、世界にはまだまだ火種が多く残っているようだね
……っ

イツセーSide

なるおっ! 思った以上に強い!

魔力を込めた蹴り主体の相手は、出力が高くて結構手古摺っている。

戦い方は拙いところもあるし、戦闘技術も粗削り。たぶん我流で鍛えた感じだな。はつきり言っただけなら、俺達だって苦戦はしない。

だが基本性能がやばい。最上級悪魔クラスはあると思ったけど、下手すると魔王クラスはあるんじゃないか!?

しかも――

「よっしや触った! ドレス・ブレイク 洋服崩壊」

「……何かした?」

――こっちも効かないのかよ!?

対策してると思ってたけど、俺の乳技が通用しない。

バイリンガル 乳語翻訳も試してみたけど、これまた通じてない。ちなみに透過は込めているけどこのぎまだ。

どうなってるんだよ一体さあ! あの反応だと、そもそも何かを無効化しているってことにも気づいてないぞ!?

『二重の意味で妙だな。何かが決定的にかみ合っていない』

どういうことだ、ドライブグ？

『まず相手の反応だが、間違いなく相棒についての知識が足りていない。そもそも乳技を使われているという反応すらないからな』

あくなるほど。そっちの方がしっくりくるな。

ベルゼブブって言葉についてもさっぱり分かってないみたいだし、もしかして異形や異能について知識が無いのかもな。

大欲情教団みたいなあれなんだろうか。そう考えると色々としつくりくるけどな。

で、もう一つあるみたいだけど？

『相棒の乳技が効いてない方だ。あれはむしろ当てた途端に吸収されている印象がある』

吸収？

また凄い方向から来たな。

俺の乳技、魔力を煩惱で変換している所為で、対策が色々大変なところがある。

乳語翻訳とかがいい例だ。質問をおっぱいに応えてもらうこの技は、読心術とかの対策が全く通用しない。

そして弾く対策をしても、赤龍帝第三の力である透過ですり抜ける。

だからこそ、未だに有効的な対策は数少ない。後継私掠船団が開発した「煩惱を見せる形で勝手に使う」アプローチくらいしか天敵がない。

だけど吸収か。

つまり、俺が流し込んだ煩惱が込められた魔力を力に変換しているってことか。確かにそれなら、力を与えるだけになりそうだな。

確かに、ちよつと妙な気もするな。

『そうだ。これだけの力持ちながら相棒を知らない事といい、相棒の乳技を吸収するという謎の現象。……乳神と似ているようでまた別の異様さを持つな』

ってことはあれか？もしかして、異世界案件？

『かもしれないな。リゼヴィムはグレートレッドを異世界侵略の邪魔者

とみなしていたが、侵略規模の軍勢でなければ出し抜くことはできるだろう。乳神の使いもそう取れるしな』

……その予想、念の為にアジュカ様達に伝えた方がいいかもな。もつとも、それはこれを生き残ってからなんだけど！

「はああつー！」

「おらあつー！」

蹴りと拳がぶつかり合うけど、これはちよつと不安だな。

というのも、なんか空を飛ぶ魔獣がゴロゴロ出てきやがった。

飛龍を出せば対応できるけど、このままだとちよつと懸念事項が――

「イツセーか!？」

――九成か！

「助かった、手助けしてく……れえつ!？」

「……すまん、俺も戦闘中……だ！」

九成は九成で、魔力攻撃を捌いてこつちに来ているだけだった！

つてことは二対二か！ 九成を手古摺らせるとか相当だな。

……そつちにいたのもまたエロイ格好の女の子だ。歳は俺と同じぐらいか？

お互いに並び立つ形になると、相手の方は困り顔になっていた。

「亜香里あかりも苦勞してるの？ 素直になれない人がこんな強いなんて」

「そうだね。でも一緒なら勝てるでしょ、有加利ゆかりちゃん」

仲が良い感じだな、これ。

だけどなあ！

「だったらこつちも連携だ！ やつちまおうぜ、九成！」

「同感だな。それならこつちの方が有利だろ」

なめられたもんだぜ。

相手はまだ場慣れしてない。なら、経験豊富なこつちが有利だ。連携戦闘の訓練だつてしているんだよ、あんまりなめるな！

そう思いながら構えると、相手は小さく微笑んだ。

「でも、私達だけじゃないんだよね？」

「素直に生きてる子達だからこそ、手伝ってもくれるのよ？」

二人がそんなことを行つたとき、少し離れたところで何かが起き上がった。

「……デカイ！ あれ、魔獣化したにしたってデカくないか!?」
「どうなつてんだ!?!」

「あゝ……魔獣達が融合して、なんかデカくなつてる」

俺が面食らつていると、プログライズキーでセンサー類も強化されてる九成が、微妙にげんなりした様子になった。

融合つてマジか。ただけクリチャー!?!

『『『『『オンナ……オカス……オカシタイ……』』』』』』』

「もちろんいいよ♪ でも、その前に手伝つて♪」

畜生マジか。流れがエロゲーの世界じゃねえか!?!

つていうかそんな流れでオツケーなのですか!?! え、マジで!?!

いや落ち着け。その流れだとエッチするにはあんなことにならないといけなくなる。どう考えてもアウトだ。

童貞卒業は惜しいけど、リアスやシャルロット達に顔向けできない卒業は我慢の子つてなあつ!

「……いろんな意味でバイオでハザードなウイルス案件だな、おい」
九成もげんなりしながら魔剣を構える。

つていうかそんなことまでできるのなら、更に手古摺りそうで――

「――おいおい、手柄の一人占めはよしてくれや」

――その瞬間、絶大な魔力砲撃がそのデカブツを一撃で吹き飛ばした。
た。

しかも砲撃を放つた方向から、飛び掛かるように二人の女に切りか

かる姿が！

「わっ!? また邪魔者お?」

「困ったものね!」

反撃を回避してこつちに下がってきたのは、デカイ剣を持った姉ちゃんだ。俺達よりちよつと上なぐらいだな。しかも動きから見て強そうだ。

「初めましてだな、おっぱいドラゴンにタイタス・クロウ涙換救済! アタシもちよつと混ぜてくれよ?」

「どちら様で?」

思わずハモって尋ねると、その姉ちゃんは歯を見せて笑った。

そして同時に悪魔の翼を広げると、凄い魔力を纏い始まる。

……いや、ちよつと待ってもらえます?」

もしかして、これって—

「ディアドコイ・フライベーター後継私掠船団所属、先日新たに筆頭戦力となった新参だ!」

—ヴァーリヤリゼヴィム、ミザリと魔力が似通ってないか!」

「先祖返りの魔王血族! サンライト・ルシファー黄金恒星、ラムル・ルシファー・ゴールド

リバーだ!」

「嘘だろオイ!」

ここに来てまたルシファーかよ!」

ヴァーリヤラミザリヤリゼヴィムやら、俺はどんだけ魔王ルシファーと縁があるんだ。サーゼクス様もルシファー襲名しているから、リアスだつてルシファーの妹だし! ここに来て後継私掠船団までルシファー持ったの!」

俺がちよつと面食らっていると、ラムルって人がこつちに視線を向け直す。

「わにがわ因みにフロンズの旦那から指示があるんだが、あかり鱈川亜香里と望月有加利もちつきつて女、この町にいるんで保護しとけつて言われてんだが知つてるか?」

……え?」

あかりとゆかり? いやちよつと待つてくれ。

俺と九成は目を見合わせると、そのまま相手の方を見る。

さつきあの二人、お互いのことそう呼び合ってたっけ？

「名字違いつてこと、ない？」

九成がか細い希望を託して尋ねるけど、目の前の二人は不思議そうな表情だった。

「なんで私と亜香里の名前を知ってるのかしら？」

「どちらさま？」

あ、当たり前だ。

「……おいおいまじかよ。最悪じゃねえか、悪魔的に」

「悪魔的になってなんだよ。状況がさっぱりだから、手短にできる範囲で説明してくれ」

ちよつと困り顔になってるラムルに九成がそう促すと、ラムルはちよつと考え込む感じだった。

そしてまず亜香里って言われたこの方に指を刺すと。

「あっちがベルゼブブのハーフ」

で、今度は有加利の方に指を向ける。

「でもってアスモデウスのハーフ」

……………。

「はあああああああああっ!？」

どういふ状況なんだよおおおおおっ!!!

新时期来訪編 第三話 突然の終幕

カズヒSide

リアス部長やイリナ、ゼノヴィアにアニルと一緒に、私は謎の建造物に突入していた。

……アダルトゲームとかで出てくる雰囲気がありすぎて、正直女主体で来たのは反省している。

とはいえ、今の私達なら手早く片づけられる手合いだらけなのは安心だ。油断は禁物だけれど、いつでも離脱できるように後続の自衛隊も退路を確保してくれている。

そして私達は、敵を撃破しながら中心部に到達する。

そしてその光景を見て、思わず一瞬絶句してしまった。

「……惨いな、これは」

ゼノヴィアが吐き気を催しながらそう呟くと、アニルは目を閉じて十字を切る。

イリナもまた、思わず主に祈りを捧げるほどだ。これは酷い。

「なんてマネを……許せないわ……っ」

リアス部長が拳を血がにじむほどに握ってしまう。

それほどまでに、目の前の光景は酷かった。

……肉と半ば一体になり、人間として歪になっている存在。

そしてそれに群がり犯す化け物となった生物達。

それを素早く仕留めながら、私は内心でため息をつく。

直感的に入った方がいいと判断してよかった。リアス部長達だけでは、動揺が激しくなっていただろう。万が一の油断に繋がりがねない。

ただ、そんな中で一人だけ丁重に扱われている姿があった。

一糸纏わぬ状態にされ、触手と一体化している要素は確かにある。そして同時に、彼は年若い少年であることがちゃんと分かる状態だった。

だが、上半身は確実に人間のままだった彼は、ゆっくりと見上げると私達に気づく。

「……誰、だい?」

「生存者か!」

「待つてゼノヴィア! 釣りかもしれない、慎重によ」

慌てて駆け寄ろうとするゼノヴィアを制し、私は聖墓を展開しながら慎重に探りつつ近づく。

聖墓の影響に抵抗している辺り、相応の力があるようだ。まだ私が慣れてないとはいえ、中々に厄介ね。

「ゼノヴィアは、イリナやアニルと一緒に周囲の警戒をお願い。私とカズヒで調べるわ」

リアス部長が素早く指示を出し、そして星を発動する。

彼女の星は、長い時間同調した味方の異能を発現する。必然として自分の眷属や親密に付き合っている者の異能は再現しやすく長くできる。その中には、仙術使いの小猫や治癒の力を持つアーシアも当然含まれる。

その力と同調して解析をするけど、……芳しくないわね。

「生命活動がこの辺りと一体化しているわね。私の再現じゃ、聖杯でも切り離すのに時間がかかるわ」

「鶴羽は別件の方に注力しているし、となると小猫とアーシア、それにヴァレリーが欲しいところね。連絡するべきかしら」

思った以上に状況は悪いが、同時に彼はまだ人間だ。

生命活動に置いてどうにかする余地があれば、助けられる可能性はある。

「……よかった、これで……」

ほっとした様子の少年だけど、まだそれは早い。

救助する余地があることと、救助できるかどうかは全く別。ここか

ら安全地帯に運べるかがまず問題で、そもそも運べるようにするのに相当の時間がかかるだろう。

だからこそ、それは暗部私が言うべきだ。

「まだよ。状況が色々切迫している以上、悪いけど助けられる確約は――」

できない。

その言葉を言うとした時だった。

「助け……られる」

彼は、自分のことを対象にしていなかった。

そして同時に、強い力の発動を感じる。

「これは、バランス・ブレイク 禁手化!? セイクリッド・ギア 神器 保有者だったの!？」

リアス部長が面食らうけれど、彼はそれに力なく微笑む。

「……そこは良く、分からないです。ただ、僕は……ずっと待つてました」

そう返す彼の顔色はどんどん悪くなる。

咄嗟に私は解析の方向性を変え、すぐに理解した。

この禁手は、正気!？」

「やめなさい! 分かっているの? 貴方は今、自分の命と引き換えに一発限りの博打を撃とうとしているのよ!!」

「え、何が起きてるの!？」

私が思わず怒鳴り、それに反応したイリナが慌てて振り返る。

とにかく分かりやすく説明した方がいいわね。

「要は覇を疑似的に再現した禁手ってこと! ……いい、貴方は今、自分の命と魂を炉にくべて出力を強引に高めているの。自爆技なのよ!？」

そういう方法はあり得るだろう。

神器が想いに応えるのなら、禁手を命と引き換えにするような真似は不可能じゃない。というより、ありえないような進化を齎すのならそれぐらい入るといふべきか。

それは例えるなら、通常状態から一足飛びにD×Dに至るようなものだ。短期間とはいえ段階を踏んでいたイツセーですら、多臓器不全

を引き起こした。命が繋がったのはオーフィス達がいたからと
言っている。

それが無い彼がこんな状況であれば、確実に死ぬ。

「……分かってる、でも……助け、たいんだ……」

「いったい何を!? 誰を助けたいの、言ってくれたなら私達が――」

何とかすると部長が言う前に、彼は首を横に振る。

「……無理、です。普通じゃ……だから……」

そう呟く彼の体は、少しずつ終わっていく。

分子結合を保つてられないのだろう。水分が抜け、変色し、そのま
ま砕けて散っていく。

更に彼を経由して生命力を吸われているからか、この建築物そのも
のが同様の風化を遂げて行っている。

「まずいっすよー！ このままだとこころも崩れちゃいます!!」

アニルがそれに気づいた時、彼は苦笑した。

「その……お願い、が、ありま……す」

その言葉に、私達は誰もが意識を耳に集中する。

彼はもう助からない。助かることを放棄して、誰かを助けようとし
ている。

それに配慮ができないほど、私達は情が無いわけでは断じてない。
私でもそうなのだから、部長達なら尚更だ。

「言って頂戴。何を願うの?」

部長がそう尋ねると、彼は消えかける光を目に取り戻す。

「……亜香里と、有加利を。鰐川亜香里……と、望月有加利を、助け

……て、くだ……さ……い……」

そう告げたのが、彼の最後の力だった。

その後一瞬で彼は風化し、上半身の殆どが崩れ落ちる。

残されたのは、化け物と一体化した下半身。そして周囲の建築物も
また崩れ落ち始めている。

……おそらくだが、これが決定打になるだろう。

だから、こそ――

その瞬間、急に二人は体を抱えて苦しみ出す。

「ああ、あ……あああああああつ!?!」

「何、が……うわあああああつ!?!」

彼女達は急に闇に包まれていくと、それが肉の塊となっていく。

な、何があった!?!

「おいおいなんだよ!?! こりやあれか、ゲームみたいにデカくなった奴がボスなのか!?!」

「いや、そんなベタなことないだろ。今までの敵だってそんなこと無かったし」

ラムルとイツセーが困惑するが、俺はとりあえず周囲を確認。

周囲の魔獣達にも同様の事態が起きているが、その数は少ない。ただし、デカイ建築物に関しては急激に風化し崩壊し始めている。

カズヒ達が中枢をぶち壊したとかか? いや、それにしても連絡が全くないのが気になるな。自衛隊の後続もいるから、連絡ゼロってことはないだろうが。

どういふことか分からないが、とりあえず状況は俺達に有利に働いている。

周囲の状況を確認しながら、その辺りの状況を把握していると通信がつながった。

『……その場にいる全ての者に、リアス・グレモリーから指示を出します』

「リアス？ 一体なんだ？」

「どうなってるんだ？」

イツセーとラムルが首を傾げたその時、今度はカズヒの声が飛んできた。

『鰐川亜香里と、望月有加利が分かるのなら、何があっても真つ先に保護しなさい。それが、私達にできるせめてもの誠意よ！』

「「はあっ!?!」」

正直状況が分からない中、目の前のそいつらは不思議な現象を起こす。

闇が液体のように落ちると、そこには一糸纏わぬ姿の二人の少女がいた。

どちらも敵対したそいつらだろうが髪の色が大きく変わっている。

青紫だった望月有加利は、鮮やかな水色の髪に。

赤紫だった鰐川亜香里は、鮮やかな桃色の髪に。

二人はそのまま、崩れ落ちるように落下し始め――

「九成右！」

「ああ！」

――慌てて俺達はそれを受け止める。

ああもう。何が何だか分からないが、とりあえず危険性はなさそうだ。

敵意がないどころか意識がない。なら警戒を解かなければ問題ないだろう。

「ったく！ カバーするからサンタマリア級にまで下がれ！ どうせ狙いはそいつらだから、検査と看病はしてくれるだろうよ！」

ラムルがカバーに入ってくれたので、俺達は素直に従うことにする。

周囲を警戒しながらだが、既に魔獣達は一斉に崩壊。残りは僅かだから、五大宗家でも余裕すぎるだろう。

それを把握しながら離脱していると、通信が届いた。

『……和地』

この声は鶴羽か。

「どうした？ 正直こっちも、今色々ありすぎて余裕がないんだが」
俺は周囲の警戒を解かない範囲で促した時だった。

『……リーダーが……っ』

その言葉に、俺は流石に肩が振るえた。

どうやら、世の中に問題が尽きることはまだまだなとそうだと
いう事か。

新时期来訪編 第四話 真魔王計画

カズヒSide

サンタマリア級のブリーフィングルーム。

その一つで、私達D×Dメンバーはフロンズ達から事後説明を受けることになった。

「……手間を掛けさせてすまないが、ある程度の情報交換は必要だろう」

そう前置きしたフロンズは、そこから話し始める。

「とりあえずあの町と学園に関しては、星辰奏者を主体とするテロ組織によるテロ被害により閉鎖という形となる。……町の方々の移住先については、こちらも手配を支援しよう」

そうなるわけね。

流石はフロンズ・フィーニクス。現大王派の実権をほぼ握っているとも言われる、大王派が誇る新任最上級悪魔。まったりこと政で頭角を現すだけのことはあるわけね。

素早い事後処理。おそらく重要な判断をするもの以外は多数確保。場合によっては一から教育をしている可能性もあるでしょう。できる手合いが対立派閥とか、数百年後は大変でしょうね。

まあ、幸香達にとってはこういった上司を持てるのはいい事でしょうけど。

「そうね。そして説明もしてもらえるのでしょうか?」

「無論だとも、リアス嬢。それぐらいの責任は理解しているとも」

リアス部長に促され、フロンズは軽く肩をすくめる。

「……既に魔王様方には了承してもらっているが、我々は幸香達がかつていたという繋がりを通じ、旧魔王を中心に禍の団に対する寝返り工作を進めていた」

なるほどね。

敵対勢力に対する寝返り工作。戦争や対立では古今東西よく行われている手段だわ。

窮地になったから手の平を反す手合いは信用できないけれど、前もって手順や作法や段取りを踏まえているのなら一定の信頼は置ける。そういった手法は当然どの時代でも行われるもの。当たり前の手法だわ。

もちろん種族まで違っていると警戒も出るけれど、種族が同じならある程度はあり得る。そして幸か不幸か、悪魔は禍の団においても大きな派閥と化している。

「……旧魔王派を取り込めるの？ ヴァーリはどちらかと言えば現魔王派私達寄りよ？」

リアス部長はそこを指摘する。

実際問題、ヴァーリ・ルシファーは魔王派と大王派のどっちかと言えば魔王派だ。というより、奴はあまり魔王ルシファーとしての責任までおいたがらない。旗頭にすることが困難といえるだろうし、家柄の沽券とかを特に重んじる大王派とそりが合わない。

だから部長の質問は正当だ。担ぎ出せない神輿を利用して、価値があるのかと質問は必須だろう。フロンズが分かってないはずはないだろうけど、確認は大事なもの。

そしてフロンズもそこまで読んで、小さく微笑むほどだった。

「だからこそだ。崇める神輿がないのなら、弁護と多少の保障で抱き込める余地はありそうだろう？」

「……ああ。今の吸血鬼に近いんですね……」

ギヤスパーが遠い目をしているわね。

まあ、権威のよりどころや権威を失ったというのは思うわね。自棄を起こして暴れたり、無いものに縋って暴走したり徒もあり得る。だけどそこを指摘したうえである程度の保証を示すことで、「負けただけで守れるものはある」という逃げ道を用意したと。

まあ、魔王派は基本的に平和主義者でお人好し。平和的に解決できるならそれを選ぶし、殲滅戦は好まないもの。私だって必要性が薄い

悪行まで好き好んでやらないし、それはいいでしょう。

ただ、フロンズは少し渋い顔をしている。

「取り込みは進んでいる……が、同時に困ったことがいくつあつてね。今回もその一環といえるのだが……困ったことがあつてね」

眉間にしわが寄っているわね。

いったい何があつたのか。逆に興味が湧いてきたわね。

「……いったい何を引き当てたの？ シャルバ達が目論んでいた代物とか、その時点で嫌な予感がするわね」

リアス部長が凄く嫌そうな顔で言うと、フロンズは何故か首を横に振る。

「いや違う。奴らは何一つ知らない地雷だ」

別の意味で嫌な予感がしてきた。

とりあえず、立ち位置とかを考えないと面倒くさいことになる相手なので、リーネスやイリナに視線を向ける。

「……もしかして、人為的に魔王を作ろうとお？」

「どういう事かしら？ 人為的に魔王つて作れるの？」

リーネスがあえて意図的に最悪な予想を語り、それにイリナが引つかかる。

そしてまあ、説明のつかかりとしてリーネスは頷いた。

「魔術的な手法なら、人工的に生物を作り出せるわあ。それで悪魔を作ることも、理論的には可能といえるから、それでよお」

「安心したまえ。流石にそういう方向ではない」

フロンズはそう前置きし、そして続けたわ。

「どうも内乱で負けてから、ある計画が進んでいたのだ。……今の魔王血族が現魔王に負けたのなら、勝てる魔王血族を生み出せば……とね」

ああ、なるほど。

私達全員がほぼ納得したわ。少なくとも、奴らがそういう事をするということだね。

軽く引き気味の空気に、フロンズは同意を肩をすくめて示した。

そのうえで、彼は話を続ける方向に持ち込んでいく。

「シャルバ達に反対されていたが、魔術回路保有者を抱き込んで内密に進めていたようだ。……それが良くなかった」

苦笑交じりで両手を広げると、フロンズはそのまま続ける態勢に入る。

「その過程で「多民族とあえて掛け合わせていいとこどり」などという発想もあったようで、それらが原因で因子が流出したこともあったらしい。まだ確定はできないが、ユーピやマルガレーテはそのケースと思われる」

少しため息交じりだが、これは仕方がないところもあるだろう。

ある意味でこれは地雷の発掘だ。いきなりこんな情報が出てくれば、フロンズ達も困っていたことだろう。

「そして彼女達もまた、そのケースと？」

「亜種聖杯を利用した托卵。それにより引けた当たりが彼女達だ」

肩をすくめてリアス部長に伝えるフロンズは、げんなりしている様子だった。

「交渉が成立したのは数時間前だ。アジュカ様達も同席しているから確認してくれたまえ」

ため息をついたりリアス部長に、フロンズはそう返す。

……どこもかしこも大変ねと言うべきかしらね。

「……ちなみに、純血の者達もいるという事かしら？」

そこは確かに厄介だ。

もし魔王血族、それも純血の者がいれば旧魔王派は盛り返す。そうなるのかなり面倒なことになる。

ただし、こちらが確保できれば切り崩すには十分すぎる。そういう意味では、諸刃の剣というべきだろう。

不安と期待が混ざり合う視線が、フロンズに集まっている。

その上で、フロンズは複雑な表情を答えにする。

「一応、数名を保護することはできた。ただそれで終わっているかどうかについては、今の情報では断言できません」

「……厄介なことね。それで、保護した方々は？」

渋い表情になりながらも、リアス部長は話を進める。

それに対し、フロンズは少し視線を逸らしながらも話す態度ではあった。

「アジユカ様、ゼクラム様、そして破壊神シヴァ様が満場一致で「この者が預かるなら」と納得してくれた者に一旦預けている。その者の要望で語れぬが、まあ太鼓判ぐらいはアジユカ様とゼクラム様に確認できる立場だろう、貴女は」

「どうやら、これ以上は聞き出せなさそうね。」

リアス部長で繋ぎをとれる、アジユカ・ベルゼブブ様にゼクラム・バアル。この二人が納得しているのなら文句のつけようがないわ。

フロンズもその二人には気を遣っているでしょうし、これ以上は無理そうね。

「だからこそ、私は此処であえて言う。」

「……つまり、件の二人は魔王血族という事かしら？」

そこは重要な情報だから、嘘偽りは認められない。

その意志を込めた視線に、フロンズはしっかりと頷いた。

「わにぐち鰐口亜香里はベルゼブブ、もちづき望月有利はアスモデウス。どちらも托卵じみた方法で生み出された、計画の産物だよ」

なるほどね。

それなりにツテを独自に持っていたと。そういう事で納得するしかない、という事でしよう。

そしてそれを知った時には、彼女達の住んでいる町は大惨事。慌てて保護できる余地を確保するべく、艦艇を派遣して突貫したと。

「……そして面倒なことだが、魔獣化事件はややこしいことになっていくようだな？」

そうフロンズが確認するように問うと、ロスヴァイセさんが頷いていた。

「ええ。魔獣化した者達のオーラなどは全くの新種でした。結晶体の破片などからは、ある意味で神器に近い性質が見て取れましたが」

「……もうぶっちゃけるとねえ？ あの結晶体は埋め込まれた者の欲望に呼应し、肉体と精神を変質させるのよお」

引き継いだリーネスが、素早く魔法陣を操作して映像を映し出す。

「埋め込まれた者達が強く持ち抑え込んでいる欲望。それを解放して欲望のままに動く生命体に変質化させる。言葉にすれば単純だけど、聖杯に匹敵する所業ねえ?」

悍ましい話も、あつたものね。

こんな下劣なやり方で人間を破壊する。流星にちよつと納得できないわ。

「リーネス、それで治療の余地は?」

私がそれを確認すると、リーネスは首を横に振った。

「正攻法では不可能ねえ。例えるなら、吸血鬼の城下町で邪龍になった者達と同じつてところかしらあ」

「……それは、酷い話ですわね」

朱乃さんが眉をしかめるだけのことはある。

あそこまで作り変えられれば、もう元に戻せない。例え元の形と精神性を取り戻せたとしても、ある種のスワンプマン問題といえるでしょう。

きつと、彼はそこまでは思い至らなかつたのかもしれないわね。

「それでリーネス。例の亜香里に有加利といった少女達はどんなんだ?」

ゼノヴィアが、そこについて指摘する。

彼女も、彼のあの最期を見ているものね。そんな彼の、最後の頼みに思うところはあつて当然でしょう。

そしてリーネスも頷くと、素早く映像を移し替える。

「……厳密には、彼女達は元に戻ったわけじゃない。強引に元の状態に戻そうとしたことが理由でしょうけれどお、各種生命機能があまりに衰弱していたわ。……だから」

そう区切り、リーネスは視線をフロンズに向ける。

それに対し、フロンズは苦笑すると肩をすくめた。

「墮天使化で延命を図つたというところかね?」
なるほどね。

割と火急の事態でもあつた。だからこそ、手持ちに手段で即座に対応。その結果が墮天使化、と。

フロンス達からすると、面倒ごとになるかもしれない。そういった懸念を前に、フロンスは気にしていない。

「マルガレーテの件もあるが、相手の意思が魔王の血族として生きないことであるなら仕方がない。まあ、それに神器という聖書の神が持たした奇跡を、魔王の血を継ぐ者が持ち、墮天使として新生するのは良い事だ。和平的に美談だろうか？」

「前向きな考え方で良い事だわ」

警戒心を少し出しながら、リアス部長がそう返す。

まあ、フロンス達は魔王を「かつて支配者だった一族」にとどめる方針だものね。だからこそその九大罪王制度。別に魔王血族にハーフがいる程度はどうでもいいと。

あくまで旧魔王派の抱き込みの一環だったのでしよう。だから、墮天使になる程度は問題ではない、と。

それらを聞いたうえで、フロンスは小さく頷くと立ち上がった。

「……彼女達については、当面貴殿らに任せの方がよさそうだ。もし魔王血族として生きるといふのなら、その時はこちらが引き受けてもいいがね」

どうやら、そのレベルでいいという事ね。

フロンス達からしてみれば、決して無視はできないけどその程度。魔王として生きるにしても生きないにしても、旧魔王派の神輿にさえならなければいい。そういう感覚なのでしょう。

フロンスはそのまま帰り支度を進めるけど、その視線がイツセーの方に向いていた。

「そういえば赤龍帝、貴殿と共に二人を保護したタイタス・クロウ涙換救済は？」

お前達ならこの場に連れてくるだろうに。

その程度の疑問ではあるのだろうが、フロンスはそこに首を傾げている。

……その時、私達は少し雰囲気为重くなった。

そしてフロンスはそれを妙な方向に勘違いしたらしい。

「もしや不調かね？ 試作型の墮天使化を使った弊害……なら、そちらのシルバレット悪祓銀弾も休んでいるか。深手でも？」

「いいえ。彼自身はすっかり無傷でしのいでいたわ」
リアス部長がそう訂正したので、私も言っておくべきでしょうね。
「昔の身内が別件でまづいことになっていてね。今はそっちに向かっ
ているわ」
……まったく。禍の団が当分何とかなったと思ったらこれとか、勘
弁してほしいのだけれどね。

和地 Side

神の子を見張る者が保有する、日本国内にある医療設備。
そのの一室に横になっている少女がいた。
年齢は俺より一つ上。灰色の髪を持つ彼女は、ただ目を開いてい
た。

そして俺達の方を見ると、無表情で口を開く。

「自覚範囲内の体調は良好。ご命令を下さいます」

……その何も映し出されていない反応に、俺は拳を握り締める。

そのうえで、崩れ落ちそうになる鶴羽の肩を抱き寄せて支える。

「……名簿で見つけて、もしかしてと思って探してた……」

そう小さく語る鶴羽は、明らかに消耗していた。

「想像以上に激戦で、死人も出てるから容赦もできない。学生が、教師
が、改造されて死も恐れない兵士になって……」

そして俯く鶴羽は、涙を一つ落としてしまう。

「リーダー、胴体から断ち切られてて、私、慌てて、聖杯で……治した
のに……っ」

「もういい、鶴羽……っ」

俺は鶴羽を抱きかかえる。

目の前にいる少女を、俺達は知っている。

名前は緋音・アフォガード^{あかね}。なんでも先祖代々結構な割合で死因が溺死だとかで、戒めの為にそんなファミリーネームを名乗っている、イタリア系のクォーター。

そして俺達と同じザイアに拾われた孤児で、俺達のリーダー役だった。

突出した異能はなかったが、非常時に強い精神性もあってレイダー部隊の隊長格候補。もしあのままザイアが動いていたら、俺とヒマリのサポート部隊として鶴羽を率いていただろう。割と頼りがいのある人だったしな。

ただ同時に、だからこそ自分にできないことは難しいことは理解できる人だった。平時では割と緩いところがあるからか、異形たちの共存を自分が選べる自信がないといって、記憶操作を受けることを自ら決めた人だ。

例えば、常に頼りがいがあるのはザイアという環境だったからかもしれない。ザイアという環境が異常だと、無意識で察していた可能性がある。だから、常に非常時に強い精神性が働いていた。

記憶消去を自分から受け入れたのも、そういう事だろう。ザイアの異常性を悟っていたが、同時に影響を受けていたから。そこから至った結論が、記憶消去だった。

その後はある程度の監視がつく形で、墮天使側が動いていたのは知っている。和平が結ばれた以上、より自由に動ける環境に移されるとの想像もついたはずだ。

……バラキエルさんはあえて黙っていたのだろう。万が一の可能性があつたし、他にもリスクはあつたからな。

ただ、鶴羽はおかげでかなり参っている。

聖杯を無理して使うぐらいで対応しているが、それでもこのざまだ。

緋音さんは、元に戻すことが不可能かもしれない。

不可逆の加工を受けている。例えるなら、ブドウをワインにしま

たブドウに加工するようなものだ。それはもう、別物だろう。

そして同様の改造人間が多数確認された。それが、例の学園で行われていた事態だった。

状況次第で自爆まで敢行する、脳を中心に改造を施された元人間。それが、夫従妻隸会の新たな手法。

どこからこんなレベルの改造技術を手に入れたのか。世界はいくらでも悪意が転がっているが、こうして目にするようになるのはやはりきつい。

……本当に、ふざけるな……っ

緋音さんには本当に世話になった。ヒマリの面倒とかで助けられたことも多いし、ダウナー気味だけど社交性は割とあった。戦術の座学とかでも指摘はしっかりしていたし、そういう意味でも、感謝している。

ったく。それが、こんな――

「……ん？」

――ふと気づくと、なんかどたばたという騒がしい足音が聞こえてきた。

首を傾げて振り向いた時、盛大にドアが蹴破られる。

「お待たせしましたの！ 切り札を引っ張ってきましたわよ！」

「ヒマリ!?!」

思わず鶴羽と一緒に声が出るけど、ヒマリが額に汗して誰かを引っ張っている。

……ってちよつと待て。

その人は――

「むく。お姉ちゃんってば強引なんだからあ」

「『そういうのいいから』」

このタイミングで子供ぶらないでください。状況分かってないからだろうけど、割りといラってくるから。

そんな殺意が微妙に漏れたこっちの反応に気が付いたのか、彼女は雰囲気を本来のものに切り替える。

「……ふむ、借りは返すつもりではあったが、医療設備（こんなところ）に引っ張り込む

とは……そういう事でよいのじやな？」

すぐにある程度の状況を理解する当たり、やはり傑物であるからこそその地位か。

まったく、いないと思っただらこんなことしてたんだなヒマリ。

行動力の高さに脱帽だ。確かに、これはどんでん返しレベルの鬼札ジョーカーだとも。どうにかできる余地が見えそうだ。

「そういうわけで、ちよつと相談がありますわ、藤姫さん！」

「ふむ。安請け合いはせぬが話はまず聞いてやろうではないか」

道間家のご意見番。原理イデア・ブラッド血戒を宿す祖たる死徒。

道間藤姫。ここで来るか！

新时期来訪編 第五話 治しようがないなら一度死なせるとかいうパワー治療……治療？

イツセーSide

俺達は、ちよつと落ち着いてから神の子を見張る者の医療施設に来ていた。

亜香里や有加利って子達もだけど、九成達のザイア時代の先輩も運ばれているからな。様子ぐらいいは見とかないと。

まったく。漸くミザリやりゼヴィムも倒して、少しは平和になったと思っただらこれだ。世の中嫌なことはいくらでもはびこってるんだな。

「……九成達、大丈夫かな？」

俺がつい呟くと、隣を歩いてるシャルロットが頷いた。

「心配ですね。和地君はともかく、鶴羽さんは相当沈んでそうです」

「そうね。ソーナの話では相当取り乱していたそうなもの」

ソーナ先輩から話を聞いているリアスも、顔をしかめている。

匙も慌てて止めに入るぐらい、聖杯を過剰使用してみたいだしな。下手したら精神汚染が酷いことになっていたかもしれない。

……つたく。禍の団が収まったと思っただら、訳の分からない事態に夫従妻隸会。やってくれるにもほどがあるぜ。

「そういうえば、今回の事態はどういう風にもとめるのかな？ 国際レーティングゲーム大会にも影響は出るかもしれないけど」

「それはないみたいよ。今回の件、異形が絡んでいるけど大きな関係はないってことになるみたい。ほら、国家間の紛争があってもオリンピックとか開催される時があるっていうのと同じ感じで」

木場の懸念にイリナがそう答えると、リーネスもそこは頷いてい

た。

ちなみに今のリーネス、俺達駒王町における墮天使のトップだ。アザゼル先生から直々に駒王町における後任にするという書状があったらしい。それに今のリーネス、神の子を見張る者でも結構な権限を持つ準幹部ポジションになってるし、適任だ。

悪魔はリアスとソーナ先輩。墮天使はリーネス。天使や教会側はイリナ。彼女達が駒王町方面でのトップ役になるみたいだな。

そして俺ももうすぐ上級悪魔。なんていうか、俺の周りって凄い人が多いし、俺も凄い事になってるよな。

ただ、そんな凄い奴が揃っても、出来ないことはある。

いろんなところで悲劇は起こってるし、それを俺達だけで全部どうにかすることはできない。禍の団は大打撃を受けているけど、禍の団だけが悪い奴らってわけじゃない。世界中に悪い奴はいっぱいいる。分かつちやいるけど、こういう経験をするとちよつと嫌な気分になつちまうよなあ。

「……はあ」

「イツセーさん……」

ついため息をついてしまうと、アジアに心配されちゃった。

いかんいかん！ アーシアを心配させてどうするんだ。ダメだろそれは。

「俺達に出来ることがあるか分からないけど、なんかできることがあったら、全力でサポートしようぜ？」

「そうですね。私も微力ながらお手伝いしますわ、イツセー様」

レイヴェルも領きながら、その辺りを確認する為かメモを取り出して確認を始める。

さて、そろそろ九成や南空さんの先輩がいるっていう病室の方だけどー

あれ、誰か出てきたぞ？

看護師さんでもお医者様でもない感じだ。というより、見かけただだと俺達より小さい子供っぽい。でも雰囲気とかから見ると、たぶん結構生きてる異形の人っぽいな。

「……藤姫？」

カズヒがなんか怪訝そうな表情を浮かべている。

えっと、藤姫ってどつかで聞いたことがあるような？

俺が首を傾げていると、朱乃さんが思い出したのか一礼する。

「お話は聞いております。道間のご意見番たる、死徒の祖であられる道間藤姫さまですね？」

ああ、それだ！

アザゼル先生と波長の合う、死徒のトップとかいう！

俺がそれを思い出していると、藤姫って人は不敵な笑みを浮かべながら、なんかポーズをとった。

もうこの時点で確信したよ。この人、アザゼル先生と気が合うし、何ならサタンレンジャーにゲストとして参加したがるタイプだ。

「い・か・に・も！ 儂こそ道間のご意見番たる死徒の祖が一角！ 道間あ……藤姫なのじー」

「ー申し訳ありません。ここは病人の方も多いので、共用部分であまり騒がしいことはお控えください」

そして後ろから看護師さんに怒られた。

「……これはすまぬ。以後気を付けよう」

そして素直に謝ったし。

なんか流れがしまらないなあ。

そんな感じで俺達がちよつと反応に困っていると、看護師さんを見送った藤姫さんはこちらに振り返った。

「済まぬ済まぬ。適度にふざけるのが心を若くするコツじゃが、空気を読まな過ぎたわ」

あ、この人アザゼル先生やリヴァさんと同じタイプだ。

それとなく後ろを確認すると、みんながリヴァさんを囲んでいざという時取り押さえられる状態になっていた。

リヴァさん。口元が引きつってるけど自業自得っす！

「……それで、藤姫様はこんなところで何をなさっているのですか？」

リアスが代表して聞くと、藤姫さんはちよつとだけ首を傾げた。

それにこつちが首を傾げたくなっていると、何かに思い至ったのか

はたと手を打った。

「……ヒマリの奴め、思い付きの独断で儂を引つ張ってきおったか。中々愉快的な奴よのう」

「……なんかごめんなさい」

「すみませんでした……っ」

ヒツギとオトメさんが即座に謝ったよ。

とりあえず、ここに藤姫さんを連れてきたのはヒマリなのか。

あいつは一体何を考えてるんだ？

俺達がちよつと戸惑っていると、藤姫さんはなんて事のないように小さく微笑んだ。

「まあよい。儂も少し用事がある故、詳しいことはあ奴らに聞くがよいぞぞ？」

そういうと、藤姫さんはそのまま外の方に向かっていく。手の平をひらひらと降ってくる辺り、中々豪快な人だな。

そんなことを思っていると、藤姫さんはこっちに顔だけを振り返る。

「まあ、今後ちよくちよく顔を合わせることもあるじやろうて。あ奴に関しては、道間に対して意見を通せる故丁重に扱うのじやな？」

……ん？

正直よく分からず、俺達はみんなして顔を見合わせる。

ただ、カズヒとリーネスは別の意味で顔を見合わせていた。

「……まさか、ヒマリってそういうことを？」

「……ありえそうねえ……なんて荒業あ……」

な、なんだ？

とりあえず、魔術的に何かしたとかそんなことなんだろうか。

俺達がよく分からないでいると、二人は意を決して病室に足早に向かっていく。

「……はっ！ も、もしかして？」

そして乙女さんが何かに気づくと、すぐに追いかけていく。

うん。とりあえず、魔術回路的なあれが大いに関わる何かをしたってことでもいいんだろう。そう考えるべきなんだろうなあ。

俺達はそれを悟ると、小さく頷き合った。
たぶん、ツツコミとか絶叫とかが出てきそうなことになってくるぞお？

カズヒSide

私は意を決すると、ドアをノックしてから返事を待たずに入ることにする。

道間藤姫。彼女がこの状況下で連れてこられたということは、一つの可能性を暗に示している。

それを確かめることも踏まえて部屋に入ると。

「……………う……………おえ…っ！」

「大丈夫。俺も鶴羽もヒマリも、今ここにちやんといるし受け止めるから」

「そうですね。緋音さんは、今でも大好きな先輩ですわよ」

えづく少女を前後から労わる、和地とヒマリの姿があった。

そして同時に、その少女が人ならざるものになっていることも理解できた。

……………なるほどね。

「あー、なんかごめん。説明してからの方がよかったわよ……………ね？」

と、少し離れたところで洗面器を洗っていた鶴羽が、気まずそうな表情を浮かべている。

私は安心させるように、軽く肩をすくめるにとどめておく。

「ま、それぐらいは和平も結んでるし問題ないでしょう。説教が必要ならリアス部長達がするでしょうしね」

「それもそうねえ。それに、考えようによってはいい機会かしらあ？」
そうリーネスも笑顔で言っているし、なら問題はないでしょう。

第一、説教するならまずはヒマリでしょうし。

「……えっと、つまりその子……死徒になっちゃったの？」

と、遅れてきたオトメねえがその確認を一応する。

それに対し、鶴羽がしっかりと頷いて……そつと視線を逸らした。

「「待ちなさい」」

当然だけど、私もリーネスもオトメねえも、そこに関してはしつかりと指摘する。

死徒化を治療の一環として使う。それはそれとしてアレではあるけれど、そこはいい。

死徒化と言ってもいくつか種類がある。死徒が血を吸って人を殺す際、自らの血を送って死徒にする場合。もう一つは魔術的措置で自ら死徒となる場合。まあどちらもリスクはあるし、そもそも死徒の不老長命は悪魔とか異形のそれに比べると多々問題も大きいものだ。

自我を確立させているところから見て、藤姫はかなり厚遇をしたらしい。まあヒマリはある意味で道間家の管理行き届きが思いつきり被害を与えているし、相応の条件なら引き出せるでしょう。藤姫も借りは返すという旨を言っていたし。

問題は、その時点で顔を背けるのならともかく、その後で背けることだ。

階梯の問題かしら？

確か死徒として上級である第Ⅶ階梯に届かなければ、死徒は親の命令に絶対服従。そういう意味では私たちが彼女を抱える際、政治的というか謀略的にまずいことになる。

だけどそれをやれば不興を買うと藤姫だって分かっているはず。

つまり、どんな手段を使ったかはともかく死徒として上級は確定。親に対して反抗することができ、場合によっては下克上もワンチャン領域たる上級死徒でないとややくしくなる。第Ⅶ位階に到達していると考えるべきなのだけど、どういう事？

私はその辺りで怪訝に思っていると、リーネスはにっこり微笑みな

がら鶴羽の方を見た。

その視線を、鶴羽は直視できていない。

冷や汗すら流しながら逸らしている。

「えっと、何があったの?」

イリナがその辺りを切り込み、鶴羽も覚悟を決めたらしい。

盛大に肩を落とすと、手を伸ばして彼女の方に向ける。

「紹介するわ。彼女は緋音・アフオガードさん。ザイア時代で私のチームでリーダーになってた人で—」

そして、凄く遠い目になった。

「今は藤姫さんの後継者。……第八階梯の死徒よ」

「「ええええええええええええつ!?!」」

冗談でしょう!?

和地Side

ああ、なんか騒がしいことになっている。当然だけど。

「ど、どういう事なんだ? 何が凄いなだ!?!」

イツセーがよく分かってないので素直に尋ねると、お袋が苦笑い気味でそれに頷いた。

「そのね? 死徒っていうのは人から外れる呪いの深度で、階梯があるの。で、第八階梯っていうのは祖の証明である原理血戒イデア・ブラットを継承できる領域に至っている段階で……つまり死徒の世界における最高峰。頂点のすぐ下なの、その子」

「……つまり、あの人って死徒版の最上級悪魔とかそんな感じ?」

イツセーがその辺りを解釈するが、たぶんちよつと違う。

「どちらかというところ、聖書の神が存命時のミカエル様達セラフの立場が近いわね」

カズヒがその辺りを修正するけど、まあそういう事だ。俺も正直ビビっている。

道間藤姫、こちらに對する厚遇にもほどがあるだろうに。

これ、藤姫に何かあつた場合に俺達オカ研が藤姫の死徒集團を乗っ取ることが理論上可能になつたぞ。いくら詫びだからって、そこまでするか？ やるやらないの問題じゃないとすら思うんだが。

正直俺も軽く戦慄しているが、今はそこは置いておこう。

俺はそつと、いまだえづいている緋音さんをそつとなで、落ち着かせる。

「大丈夫。少なくとも、ここに居る人達は緋音さんに危害を加えるつもりなんてないから、さ」

「……………ん」

そう答える緋音さんは、それでも震え、吐き気を殺しきれてない。ついさつきまでは、吐くものなんて何もないのに無理やり粘液を吐くほどに精神が追い詰められていた。

まだ震えるその体。それだけで、彼女がどんな目にあつたのか察するに余りある。

察してやりたいが、きつと俺達が察しているレベルを遥かに超えるレベルで酷い目に遭つたんだらう。死徒とかしたことは別の意味で、その体が冷たく青い、酷い状態だ。

だからこそ、俺とヒマリはそつと抱きしめる。

「大丈夫。俺は緋音さんのことを信用している。ここは緋音さんを守ってくれるところだから、な？」

「そうですね。悪魔の方々も多いですけど、みんないい人ですわ。大丈夫ですわよ」

後ろから抱きしめて宥めるヒマリも、優しい微笑で緋音さんを受け止める。

そして、緋音さんは少し儂く、だけど小さく微笑んだ。

「……………うん。大丈夫……………うん、まだ大変だけど、ちよつと落ち着い

た」

そうか。

素直でよろしい。そっちの方が俺としても向き合いやすい。

……と思っていたら、なんかちよつと騒がしいな。

なんだなんだと思っていると、看護師さんが急に入ってきた。

「た、大変です！ 九成さん達は……リーネスさんもいましたか！」

慌てているその看護師さんは、そのまま転げそうになりながら部屋に入ると、声を上げる。

「申し訳ありません！ 鰐川亜香里と望月有加利の二名が、脱走しました！」

「……はい？」

え、ちよつと待って。

今度は何だよ本当に！

ひと段落突く間もなくトラブル発生かあああああつ！！

Other side

「……おお、アジユカ殿か。映像越しとはいえお初にお目にかかる」

『こちらこそ。サーゼクスやセラフォルと会えば意気投合しそうな方のように』

「それで、他の祖が大王派を経由して送った神血についてはどうじゃ？」

『残念ながらと言っておこう。あの血はあまりにも価値がある物だが、今の我々では代用品を作ることできないだろうね』

「なるほどなるほど。他の派閥の祖はついてないようじゃ。……ま、

それなら悪い事にはならぬじゃろうて」

『……リアスのところにいる、ヒマリ・ナインテイルから頼みを受けたと聞いたが』

「うむ。死徒化を回復の手段にするなどどうかしておるが、あれはそうでもなければ無理じゃったろうて」

『データは見ているが、やはり凄まじい改造だな』

「薬学投与でどうにかなるものではない。死徒化により復元呪詛が働いたが、あれは脳があまりにいじくられていたというほかないのお」
『そんな技術力はこの世界にもない。……魔獣化も含めて、調べる必要がありすぎるな』

「大変なことじゃ。見舞いに酒でも差し入れよう」

『それはありがたい。だが、そんな神血を気軽に使ってよかつたのか？』

「お主に言われるとはのお？」

『大王派を経由して聞いている。道間の死徒達が源流のいた時から持ち出した切り札となる特殊な血液。千年経とうと劣化せず、その血は小瓶一つ分で千年の蓄積に匹敵する質を持つと』

「そう。道間の祖が温存し、第Ⅷ位階^{後継者}と見定めた新参者や人間にのみ使う虎の子。それを使わせてもらったのじゃから、今後の付き合い方には配慮願うぞ？」

『それはもう。こちらが強硬手段で道間の派閥を一つ乗っ取れる余地をあえて作ったのだ。その覚悟と大判振る舞いには応えるとも』

「なら、こちらは当面見物といういくか。……わざわざ乗っ取りができる余地を作ることと借りの利子まで返す勢いでやったのじゃからな。見せてもらうぞ、緋音・アフオガードよ」

新时期来訪編 第六話 モテる男にはモテる男の苦勞がある。

カズヒSide

「どういうこと？ 詳しく説明して頂戴」

リアス部長が促すと、呼吸を整えていた看護師さんは我に返る。

「は、はい！ つい五分前に意識が戻ったのですが、記憶が曖昧だったのか混乱状態で、その状態で二人が再会したことで……」

そこで言いよどみ、だけど言い切った。

「……結界を張っていたことが仇になりました。魔王血族に由来する魔力で吹き飛ばされ、死者こそいませんが全員が昏倒しており、対応が遅れました」

頭を抱えたくなるというしかない。

思わぬところで魔王血族がいて、それが妙な魔獣化事件で魔獣になり、一人の少年の決死の自己犠牲で「確証はないがそう形容するほかない」でどうにかなった。そして説明を受けて一旦こちらで預かる流れになったと思っただらこれだ。状況が錯綜しすぎている。

「とりあえず、まずは周囲の搜索ねえ」

「そうね。魔王血族だつて情報が洩れてたら、絶対よくない輩が探りを入れてるわ！」

「……旧魔王派だつてもはや一枚岩じゃない。祭り上げる神輿を探している可能性は大きいわ」

リーネスにイリナにリアス部長の、駒王町側の代表三名がすぐに動く体制になっている。

その際、視界の隅で和地が少し考えこんでいた。

まあ分かるわ。

彼女達を保護したのは和地とイツセー。彼らならその辺もあって、探しに行きたいと思うでしょう。

ただ同時に、アフオガードのことを考えると、自分が動く余裕がないことも悟っている。

……これは、私がかバーするパターンよね。

まだ名も知らない彼に託されたのは私達である以上、むしろ私達こそが動くべき。和地にはまだ彼女を優先した方がいいでしょうし、これが妥当。そういった役割分担は大事よね。

「和地、こっちは任せてー」

任せて頂戴と、言おうとした時だった。

「ー行つて……きなよ、和ちゃん」

それより先に、アフオガードがそう告げる。

あと和ちゃんつて……和ちゃんつて……。

「……ははあん？」

そしてリヴァ、何に気づいたのかしら？

「いや、緋音さん。今は緋音さんのー」

「大丈夫、とは言わないけど、今は……だいぶ落ち着いているから」

和地の反論を遮って、アフオガードは力なく微笑んだ。

小さく肩は震えている。ただその上で、彼女は確かに微笑んだ。

「私は一応……リーダーだからね。君を……きちんと活かすやり方を考えてるから」

そこに在るのは、確かな信頼。

流石は、私の愛する救済者。

割と本質は分かりやすい。つまりはそういう事なのかもしれないわね。

「足引つ張るのも……趣味じゃないから。まず気になること片付けてから、私の相手をしてくれる？」

「……分かった。ちよつと待っててくれ」

和地も珍しく根負けしたみたいね。まあ、メンタルがゴリゴリ削れている相手に無理押しはできないし、仕方ないかしら。

「イツセー、付いて来てくれ。念の為に先回りしておきたいところが

色々な後処理もあるので、俺達は用意してもらっていた車で移動する。

そしてその中で、俺はぽつりと呟いてしまう。

「……緋音さん、俺のこと好きだったのか……」

「うん、お前本当に年上を落とすすぎだからな？」

イツセーに呆れられてしまった。

いや、あの反応とかこの流れ、そう考えるべきだろう。

なにせリヴァ先生が察し、あの場にいたカズヒやリーネスや鶴羽を意図的に残したんだ。これはもう確定的に明らか。あの人、緋音さんの異形に対する抵抗心を恋バナで緩める気だ。

頑張れ緋音さん。あとカズヒとリーネスは何とかリヴァ先生の手綱を頼む。鶴羽は……ドンマイ。

しかし、俺ってそんなにモテてたのか。これはむしろ、気づいてないことを心から反省するべきではないのか？

「……イツセー、モテるって大変なんだな」

「……ちよつと分かるかもしれない」

俺達はちよつとだけ俯いた。

「いや本当に、ゼノヴィアの寝相でよくベッドから落とされてるんだよ俺だけ。……起きて俺のいないベッドで仲良く眠っているリアス達の姿を見ていると、新しい性癖を開拓しそうになる」

「ゴメンそれ方向性絶対違う」

なんでそういう方向性なんだよ。そこじゃないんだよ。

あとお前、ゼノヴィアの寝相を何とかする手段模索しろ。というより、流石に頻度が多いならきちんとして指摘して対策を立てるべきだよ。

ゼノヴィアもなんで器用にイツセーだけ蹴落とす。お前もうイツセーと同じベッドで寝るな。

「いつそのこと、SFみたいにドームで包まれる系統のベッド作ってもらったらどうだ？ 神の子を見張る者なら喜んで作ると思うぞ？」

創造系神器の要領で、人工神器的にできると思うんだが。

ただイツセーは、なんか真剣に俯き始めた。

「突き破ることになったらどうするんだよ。絶対痛いだろう？」

「もうそれは、ゼノヴィアと一緒に寝ることを放棄するべきじゃね？」
寝相は本人の意思ではどうしようもない。だが実害が出ているのなら、文句を言う権利はある。一緒になることを禁止する権利はあるだろう。

笑い話とかそういうの抜きで、もろに実害が出ているなら少しは対策とかいろいろ考えた方がいいだろう。

……まあ、寝相なんてどうしようもないからな。最悪ゼノヴィアだけ寝返りが打てないように拘束するとかぐらいか？

……。

「イツセー。ゼノヴィアなら「寝相で蹴り落とされてるから」って理由で拘束させても文句出なさそうな気がしてきたぞ？」

あいつ、というか教会組、毎度毎度へんてこりんな方向に行っているからな。

天界が墮天使の協力を受けて開発した、天使が子作りできる部屋に繋がるドアノブ。あの使い方があいつら致命的に間違ってる。そして間違い方から考えると……イケるんじゃないか？

真剣にイケそうな気がしてきた。素直に理由まで言えば、割と成功しそうな気がしてきた。

だってあいつら、ドアノブの使い方がおかしいからな。

普通に誘って使うなりすればいいものの、何故か「夜中トイレに起きた時」だの「たまの一人の時間にプラモ創ろうとした時」だのを見計らっている。しかもコスプレをしてだ。

当人に珍しくその気がない時を狙ってどうする。しかもそんなタイミングにアブノーマル要素を出すな。それではできるものもできないとなぜ分からん。桐生もアドバイスを遊び半分にしすぎだ。天然にからかいを混ぜるとややこしいことになるとなぜ分からんのだ。

カズヒが説教するのも仕方がないだろう。何故あいつらはあいつらで、アドバイスを対象を寄りにもよってそっちにする。

「……確かに」

イツセーも真剣に考えこみ始めているし。

「……いや、脱線しすぎだろ！ 今は脱走した子達の方をだつて！」

イツセーが我に返つてツツコミを入れるけど、まあそうか。

思わぬ方向からのラブ発覚に、俺もちよつと混乱してたな。反省反省。

とはいえ、だ。

「可能性の一つを確認するだけだがな。まあ、先回りできる余地があるならあそこぐらいだろう」

「……あの町、か」

イツセーもすぐに思い当たるが、実際それぐらいしか当たりをつけられるところがない。

ただ、心当たりがある場所を探すならそれぐらいだ。他にないと言つてもいい。

彼女達が生まれた時から住んでいたというあの町。そして、彼女達自身が壊したと言つてもいいあの場所。

今の彼女達の状況がどうなっているのか、俺達はすべてを理解できることはない。殆ど分からないと言つてもいい。

だが、あの状態が異常であることは分かる。そして、死んだという少年はそれを元に戻そうとした。そこから考えれば、答えは三つだ。

「一つは、結局精神は戻つてないので同じことをする為の脱走。これなら遠慮する理由はない」

これならいい。いや、悲しいことだが容赦する理由が無い。

ただ、そうでない場合は……だ。

「二つ目。己の所業を信じたくないから、否定の為の確認。そして三つ目は――」

「記憶そのものがないから、確認せずにはいられないってことか」
イツセーもすぐに理解してくれたようだ。

まあ、そのどちらかであるなら……いる可能性はあるだろう。

なにせ、あの町には駅がきちんとあったからな。駅名を覚えていれば、向かうことは不可能じゃない。その程度の距離しかない施設だったし。

だからこそ、俺達は車で運んでもらっている。
ただ、もしそうだとするのなら。

「……シヨック、だろうな」

「そうだな。きつと……っ」

正直、俺もイツセーも気持ちは沈んでいた。

イツセーSide

俺達は、目的地に到着したんで車を降りた。

運転してくれた人に待機と感謝を告げて、そこに足を進める。

もう時刻は夜だけど、俺達は異形になっているから夜目は効く。月
明りもあるし星も見えているから、割と分かっている感じだ。

……つまり、そういう状況でないなら周りが見えないぐらい暗くな
る環境だ。

元々周囲が山に囲まれていて、ちょっと閉鎖している感じな立地
だった。だから、星明りが多い夜でなければ周りが見えないかもしれ
ない。

いや、こんなに暗いからこそ星明りが見えているのか。そういえ
ば、都市だと街の明かりが強すぎて星が見えないっていう話を聞いた
ことがある。

その町だった場所には、明かりなんて灯ってない。

少し離れたところ、駅のあった場所には自衛隊の人達がキャンプを
作っている。まだ何があるか分からないから、五大宗家の人達まで含
めての仮設基地になっている。

車もそこに止まっている。あと仮設基地の人に話を聞いたけど、流石に駅の近くには来ていなかったらしい。

……ただ、この光景を見たら足が止まりそうだな。

山に囲まれているから、山の上から見るとできるだろうし。恰好が入院患者用の服だったはずだし、駅は使っていない。異形の身体能力も確立しているだろうし、走ってきた可能性はある。

だとすると、探すのも大変だな。

そう思えるぐらい、目の前の光景は色々酷い。

街灯とかが灯っていないのは、電線が破壊されていて電気の殆どが流れてないからだ。

住居も、商店も、道路や塀も多くが壊れている。中心部の方には小さめだけど病院や図書館もあって、そういった施設も大半が被害に遭っている。

結局のところ、魔獣化した人間の数は人口の一割に近かったそうだ。そこに魔獣化した人達に襲われたり、パニックになって事故を起こしたり。全体的な犠牲者は、確認されている死者だけでも人口の三割だとか。行方不明者まで含めれば半数を超えているらしい。

……酷い話だよ。

はぐれ吸血鬼とかがたまに街そのものを支配とかでも、割合的には同じぐらいの被害が出ることもあるらしい。それも和平によって対策もできるだろうことを考えれば、これは最近稀に見る被害なんだろう。

これを、彼女達が主導したってことになるんだよな。

「なあ、あの子達って記憶あるのかな？」

「そこまではまだ分からないさ。もともと、どっちだとしても相当ショックだろうな」

九成も痛さを堪えている様な表情だ。俺もだろうけどさ。

いつそのこと、あのままって感じなんだったら気持ちはましなのかな。

でも、それじゃ駄目だ。少なくとも俺はそう思うし、九成だって似たようなことを思ってるだろう。

俺も九成も会ってない。だけど、リアスやゼノヴィア、イリナやカズビ、アニルの前で命を捨ててまであの子達を救おうとした奴がいる。その気持ち、俺も痛いほど分かる。

それぐらい大事だったんだ。友達なのか、家族なのか、それとも恋人だったのか。誰であったのだとしても、本当に大事だったんだ。

だから、だから……っ

「……イツセー」

俺が拳を握り締めていると、九成が遠くを見つめて俺に声をかける。

その視線の方を見れば、遠目にだけど桃色の髪と水色の髪をした女の子の姿が、もう一人の女の子と一緒に見える。

あれは、あの二人か……？

「とりあえず行ってみるぞ。違ったならその時はその時だ」

「分かった。急ごうぜ！」

俺達は確認しなきゃいけないし、急いで駆け寄っていく。

ちようど、その時――

「なっ!?!」

――上から、魔力の砲撃が降ってきた!?

新时期来訪編 第七話 荒事一段落

イツセーSide

なんでいきなり魔力が襲い掛かってくるんだよ!?

「……そういう事か、急ぐぞ!」

「なんか分かったのか!?!」

九成が慌て始めるけど、まあ俺も正直ヤバいことは分かってる。

だってあの子達の方にも攻撃が入っているしな! あと、何人が仮説キャンプの方に飛んで行っているし!

これ完璧に敵襲だろ! それも、悪魔関係の!!

「なんか分かったのか!?! こいつら、どこの連中だ!?!」

「おそらく旧魔王派だ! 仮説だが、内輪もめが起きている!」

内輪もめ?

俺は走りながら鎧を展開すると、九成もショットライザーで素早く変身しながら続けてくれる。

攻撃が意外と激しいから手間取ってるけど、これぐらいならそんなに時間はかからねえな。

「で、内輪もめってなんだよ!?!」

「こっち側でもあるだろ! 純血に拘る連中ってのが!」

ああ、なるほど!

そういえば、サイラオーグさんの眷属にも人間との混血とかがいたけど、旧家の連中は嫌ってるって話があったな!

お貴族様ほど純血とかに拘る印象があるけど、つまり――

「ハーフの魔王血族なんて勘弁ってか!?!」

「話によれば、純血の末裔が本命で、混血は隠してたりしてたらしいからな!」

なるほど。そういうことか。

フロンズさん達が交渉でその情報を確保したけど、あの人達が掴め

たなら当然魔王派の知らない連中だつて掴めるはずだ。

そして旧魔王派とか、混血のことが嫌いっぽいな。だからなかつたことにしたくて襲撃を仕掛けたつてか！

だつたらさっさと安全を確保しないと！ 絶対に死なせられるかよ！

「保護は任せた、タイタス・クロウ涙換救済！ 道は俺が突き破る！」

「よし任せられた！ 頼りにしてるぜ、おっばいドラゴン！」

九成の予想通りなら、間違いなく抹殺狙い。

だから、さっさと駆けつけて九成を護衛につけるのが一番だ。防衛戦なら九成はD×Dでもトップクラスだからな。

だからこそ、開幕速攻！

「開幕速攻、ドラゴンショットツ！」

俺がかなり力を込めたドラゴンショットをぶつ放す。

放たれる弾幕を吹っ飛ばし、彼女達の少し上を通るようにぶつ放す。

「先行け九成！ カバーする！」

「任せとけ！」

そう言うなり、九成は素早く飛び出した。

ミザリとの決戦で無茶しすぎて死に、リーネスのおかげで墮天使化した九成は、黒い翼を広げてすぐに飛ぶ。

……もうあんなに飛べるようになってる。こんな事態じゃなけりやあ凹んでるぜ、俺。

だけど、後ろを追いかけて俺達は――

「よし確保お！」

「間に合った！」

――何とか付けたぜ！

「きやつ！」

「ひやつ！」

九成が抱き寄せる様に水色の髪の子を庇う様に前に出て、俺は後ろの方にいた桃色の子をキャッチする。

あ、一緒にいたのは後継私掠船団のラムルか！

「誰かと思えばお前らか？ まだ呼んでなかったんだけどよ？」

「脱走した病院にたまたまいてな。慌てて探してたんだよ」

九成がそう言う中、ラムルは小さく頷くと、そのまま一歩前が出る。

「ま、そういう事ならさっさと安全圏に下がりな。まずは要救助者の安全確保ってな」

「え、いいのか？」

俺は流石にそう返す。

いつそのこと俺達も参戦した方がいいんじゃないか？

そう思うけど、ラムルはため息をつきながら肩をすくめる。

「あんまり人の仕事をとるなって話だよ。それに、場慣れしてねえ奴を殺し合いの現場に置くのもあれだろうが」

「なるほど正論。……イツセー、離脱するぞ！」

「お、おう！ でも自衛隊の方は？」

俺はその辺ちよつと気になったけど、その時足音が聞こえてきた。

「敵部隊及び要救助者発見！ これより戦闘に移る！」

「野郎、人様の国で好き勝手してるんじゃないやねえ！」

自衛隊の人達か？ なんか見慣れないレイダーになってるな。

そういえば、独自開発のプログライズキーを作るって話になってな。あれか！

「なめるな人間風情があつ！」

「猿め、さっさと死ぬがいい！」

旧魔王派の連中も攻撃を加えようとするけど、その時あらぬ方向から撃ち抜かれた。

あ、あの人達囃か。

いつの間にか十字砲火になってるし。やっぱり訓練している本職なだけあるな。

「流石はプロの自衛隊。世界的に実力を認められてるってだけあるな」

「同じ日本人として尊敬するよなあ。いや、元だけど」

「……流れるようにノールックキルしながら言うか？」

「…………え、えつと…………？」

俺も九成もラムルも、とりあえず寄ってくる連中を吹っ飛ばす程度はできるんだけどね。

やっぱこう、積み重ねが生む深みっていうの？ ベテランの人達だからこそその強みってあるよなあ。

特に俺、戦闘訓練とか一年もしてないし。なんなら実戦を経験した方が早いし。

そんなもって、ラムルは肩をコキコキしながらニヤリと笑う。

「ま、そういうわけだからこっちは十分だ。つか、アンタらが暴れると手柄が上げれねえから下がれマジで！」

実際、十分に撃退してみたみたいだ。それも死者無しで。

…………装備さえしつかりしてれば、やりようはあるんだなあ。

和地 Side

自衛隊の仮説キャンプで、俺達は一旦待機することになっていた。

まあ事態が事態なので、事情聴取の必要がある。鰐川亜香里と望月有加利は、勝手に閉鎖地帯に入っているから嚴重注意も込みだ。これでもかなり厚遇されている方だろう。

で、俺は今リアス部長に報告中だ。

「…………と、いうわけで俺達は一旦待機中です。一時間ぐらいたら戻

れると思います」

ちなみに、その間に晩御飯までごちそうになる流れだ。俺達の立場とか状況を分かってくれている方々だったので、心遣いに感謝して甘えることにしている。

自衛隊って食事も結構いけるらしいな。今日の晩御飯は五目御飯・鰯大根・ごぼうのきんぴら・豚汁だそうだ。美味しそう。

とりあえず鎮圧が終わっているのも含めて報告し終え、聞いたリアス部長は軽く安堵の息を吐いているようだ。

『分かったわ。イツセーは今、あの子達についているのね？』
『それはもう。誰かについておくに越したことはないですしね』

どっちが報告するかについては若干悩んだが、俺の方がこういった作業に長けているというところで決定した。

あとはまあ、イツセーの方がこういう時向いているだろう。
あいつは体当たりでぶつかっていくことしかできないところはあるけど、純粋な人柄ゆえの強みっていうのがあるからな。

理知的に立ち回るのはあとでもいいさ。今は、あの二人も落ち着く時間が欲しいだろうしな。

ただ同時に、通信の向こうでため息が聞こえてくる。
……言いたいことは分かる。

「フラグ、立ちそうですよね」
『あなたも含めてよ』

畜生、ぐうの音も出ない。
可能性はあるんだよなあ。イツセーはもちろん、俺もハーレム野郎

だし。
いやまったく。我ながらこういう時に女殺しになるというか。クソ親父との血の繋がりをこんなところで感じてしまうというか。

まあそれはともかくだ。こっちも言うべきことは言っただし確認し
とこう。

「……ちなみに、緋音さんは大丈夫ですか？ いえ、そのままの意味でもあるんですけどリヴァ先生的なところが」
その辺りの確認は必須だろう。

本当なら、まずは緋音さんについていたいところもある。

あの人はそもそも、ザイアの教育を結構受けていた人だからな。だからサウザンドデイストラクション後、自分は無理だと記憶消去を望んでいたんだ。異形に対する抵抗はかなり強いだろう。

更にとち狂った犯罪集団によって改造までされているうえ、自分が死徒という異形に成り果てた。何故そうなったのかについては分からないところも多いが、どう考えても精神的に負荷が大きいはずだ。

そういう意味だとリヴァ先生は、ある意味適任だろう。あの人、良くも悪くも空気をユルくするのが割とできるだろうからなあ。あの気質もあるし年季も違うから、たぶんリアス部長達が接するよりは気楽になれるだろう。

ただ同時にトラブルメーカー気質だ。いや、その辺りの見極めはちゃんとしたうえでやるのがタチ悪いんだけど。だからこそまあ塩梅はしつかりできると思うけど。

……ただ、色々あつた直後だし、あんまり疲れさせるのはダメだよなあ。

ザイアの影響がデカ目の人物だし、異形が刺激を与えるのは避けた方がいいのが実情だ。自分が異形に成り果ててしまったこともあると、尚更精神的に不安定だろう。できればゆっくりしてもらいたいから、事情聴取以外は控えめに願いたい。

そこがちよつと不安だったんだけどー

『そこは大丈夫ね。意外と話は弾んでいるわ』

ーお、そうなのか。

それは正直ほつとしたー

『今は貴方を話のタネにして盛り上がっているわね』

ーどういう展開!?

自衛隊の仮設キャンプ。その一角で、ラムル・ルシファー・ゴールドリバーはコーヒーを片手に休んでいた。

旧魔王派の横やりといったトラブルはあったが、今回も後継私掠船団はしっかり仕事をした。

大王派……否、フロンズや幸香としても寝耳に水の事態だったが、最低限の仕事はしっかりと果せている。

魔王血族が軒並み死亡したことで、理念の存続が不可能になったと思われた旧魔王派。彼らの寝返り工作で組織力の強化と禍の団に対する死体蹴りを試みようとしたら、発掘された人工的な魔王後継者の製造という地雷原。そこにわざと混血まで作るという暴挙じみた手法だ。

これが明かされたことで、割とフロンズは忙しくなっている。

魔王血族というのは、旧魔王派にとって象徴に等しい。

その準決闘が尽く死に、ハーフや先祖返りとはいえヴァーリ・ルシファーや、自分にユーピが現政権側についているマルガレーテは制約もあるので除外。この状況では魔王血族を尊ぶ彼らにとって、精神的に不安定かつ抱き込む余地があると思うのは当然だ。

だが、純血の魔王をこの後追加生産されればややこしくなる。ハーフであっても尚更だ。

そういったこともあり、フロンズは既存の対象を現政権が確保するべきと既に要望しているところだろう。

問答無用の抹殺はない。敵対を決定するなら最悪殺すこともやむなしだが、問答無用で魔王血族を殺せば悪魔社会の民意が反発を起す。ただでさえ現魔王の過半数が隔離結界領域に行っているのに、そんなやり方は下の下だろう。

逆に協力を選んでくれるのならば、旧魔王派を切り崩す手段になる。こちら側に協力するのならそれなりの待遇を約束してもいいと

フロンズは思っており、実際ラムルもそれなりに恩恵を受けている。今の悪魔社会から見ても、魔王血族が共にあるというのはそれだけでプラスに働く。

マルガレーテのように魔王血族として動かないという事でも構わない。旧魔王派の手に落ちない備えは必要だが、その辺りさえ良しとするなら、不都合分の対価は支払う価値がある。

そして、別にそれはフロンズの手元でなくていい。

手元に二名マルガレーテは当然除くもいるのだから、やりようは十分確保している。だからフロンズは自分達でなく、現魔王政権側なら誰でもいいと思っている。それこそ墮天使だろうと天界や教会だろうと、最悪別の神話体系や異形勢力でも構わない。

なのでスカウトはしなくもいいと指示を受けている。何故ならD×Dが接触しているからとも。

なので、ラムルはコーヒーブレイクをしながらのんびりできる。

「……さて、あいつらはどう生きるかな？」

ただし、彼女なりに少しは気にかかっている。

なまじ魔王に縁のある者として、意識を全く向けないわけではない。また妙な縁で話をしてしまったので、少しだけだが持論を語ってしまった。

無視するのならどうでもいい。そんな奴に意識を向けるだけ時間の無駄だ。

だが、もしそれをきっかけに化けるのなら――

「好敵手の一人や二人はいないと、怠けちまいそうだからな」

――挑み超えるに値する、そんな存在になつてほしい。

そう、彼女は後継私掠船団デアアドコイ・フライベレーティア。その筆頭戦力。

掲げた字に近い、先達に勝利することを選んだ者達。己がまだまだ矮小だと、ゆえにこそ大いなるものを超えることを望む覇道の徒。光を目指す邁進者であり、断じて聖人君子ではない。

ゆえに彼女は天を仰ぎ、その星空に齒を剥いた。

「超えて見せるぜ、ルシファー共。死んだりゼヴィムも、隔離されたサーゼクスも、アタシの格下にしてやるよ……！」

そう、彼女が超えんとするのは、初代ルシファーにあらず。

セイクリッド・ギア・キャンセラー
神器無効化能力の体現者。クリフォートを率いた扇動の鬼才。リ

ゼヴィム・リヴァン・ルシファー。

ルイン・ザ・エクスティンクト
滅殺の魔弾の使い手。冥界を導いた紅髪の魔王。サーゼクス・ルシファー。

ルシファーの字を名乗るのならば、超えるべきはたかが魔王にあらず。

そんなを関す超越者。彼らを超えなければ話にならない。

「国際レーティングゲームにはぜひ参加だな。てめえも出るんだろう……ヴァーリ・ルシファー……！」

そして、天龍に並ぶ邪龍たるアジ・ダハーカを滅ぼした者。

明星の白龍皇、ヴァーリ・ルシファーが第一弾だ。

まずは超越者にまだ認定されてない奴を超える。それこそが彼女の掲げる第一歩。

「いい世の中になったもんだ。超越者、真っ向から超えてやるぜ！」

それこそが、光に狂った異常者としての彼女の在り方。

サンライト・ルシファー
黄金恒星。ラムル・ルシファー・ゴールドリバーの目指す覇道である。

新时期来訪編 第八話

和地 S i d e

とりあえず、イツセーがついていた方がいいしゆつくりできるに越したことはない。

そんな判断で、俺は戻る前に晩飯を貰って運んでいる。

向こうも育ちざかりに気を遣ってくれたのか、多めに擁してくれたからな。残さず食べるのが礼儀というものだろう。

ただ、食欲がなさそうな人が二人もいるしな。その辺り、俺が頑張るしかないだろうなあ。イツセーも引っ張られて食が細りそうだしなあ。

そんなことを考えながら俺達に充てられたテントに向かえば、すすり泣く声が聞こえてくる。

やはりお通夜じみたムードになるか。そう思ったが何かが違う。

違うというのは声の質だ。

「おい、まさか―」

俺は少し足早になるとテントに入る。

「……………ぐずつ……………ひっぐ……………つ」

「なんでお前が号泣してるんだよ!？」

床に手をつけて涙をこぼすイツセーに、俺は盛大にツツコミを入れた。

晩飯を入れているコンテナをゆつくりと置くと、投影魔術の応用で張銭を出して張り倒す。

スパアン、といい音を出して俺は盛大にイツセーの頭を張り倒す。

「何すんだバカ野郎! 俺はなあ、俺はなあ!!」

「お前が盛大に泣いてどうするんだ! みる、二人が複雑な表情で泣くに泣けてないだろ!!」

鰐川亜香里と望月有利利をなんだと思っている!?

涙の意味を変えるのが俺の心情とはいえ、このやり方は問題だろうか。

部外者が自分達以上に泣きはらしている所為で、泣くに泣けない。涙を止める理由としてこれは何とつかあれだ。他になんかなかったのか。

しかもイツセーのことだから、天然でやっている。間違いなく天然で号泣している。

「……あく、すまない。イツセーは情に厚い男だから、その……感情が振り切れたんだろう」

俺がとりあえず二人に謝ると、二人とも戸惑いながらも頷いてくれた。

「……あ、でも……助かりました。私達だけだったら、もう我慢ができなかったかもしれないです」

水色の髪、望月有利利の方がそう返してくれる。

つまるところ、それほどまでにきつい話になるという事だろうか。

「あの、大丈夫？ 落ち着いた？」

「ああ、落ち着いたっていうか、引っ込められたっていうか」

桃色の髪をしている鰐川亜香里の方も、イツセーの方に気づかいを向けている。

感情的になっっている人間を落ち着かせるには、同じ方向でもっと感情が振り切れている奴を見せることとか聞いたことがあるが……当たり前だな。インパクトが違う。

さて、ある程度の詳しい話は聞いていたからなんだろう。それを改めて話すのもあれだな。

「とりあえずだ、イツセー。お前が聞いた話を聞きたいからちよつと顔貸せ」

俺はそう言いながら、自衛隊の方から貰った晩御飯を広げる。

「あまり繰り返したくない話だろうし、俺はこいつからのまた聞きで十分だ。ただ、後々の事情聴取はすることになるから——」

「……ううん、話すよ」

「俺の言葉を遮って、鰐川亜香里の方がそうしゃべった。俺はそれを受け止め、真っ直ぐに向き直る。」

その表情は、少しだがしっかりとした意思が籠っている。

「いいのか？ きついことをしゃべらせると思うが―」

「構わないわ。私も同じ気持ち」

そう、望月有加利も続けて告げる。

「……私達も、歩人君あゆとが助けてくれたのなら……あの子に恥じない生き方がしたいもの」

そう、自分自身に頷きながら告げる言葉に、俺は理解を示すしかないだろう。

「……その覚悟に敬意を。なら、聞かせてくれ」

俺は腹をくくると、折りたたみイスを開いて座ると同時に、録音機材も取り出した。

「あまり何度も話させるのも酷だし、録音内容を提出すれば事後確認だけで済むかもしれない……いいか？」

ここから、かなり凹むような話になりそうだな。

祐斗Side

D×Dは各勢力の連合部隊といえる為、全員が集まることはあまりない。

ただ、今回の事態は無視できない。結論として、それぞれのチームのリーダー格が集まって軽い会議を行う流れになっている。

僕はリアス部長の護衛兼補佐として、その会議に参加していた。

「……まさか予備まで用意していたとはね。中々に小賢しい連中のようだ」

そうぼやいたのは、白龍皇ヴァーリ・ルシファー。かつて禍の団にいた時、旧魔王血族が尽く打ち取られた時に色々と言われたみたいだね。

当時の彼らは多方面から酷評されていたしね。半ば自業自得だけど、相当苛立ちが漏れている。

「……奉じる家柄の者から、より優れたものを生み出そうとする。古来よりの種族でも行われてきたものだが、嘆かわしいな」

そう吐き捨てるのは、黒髪の偉丈夫であるサイラオーグさん。

バアル宗家でありながら、生まれつき魔力を持たないゆえに冷遇され続けてきた人物だ。この価値観には思うところがあるだろうね。

それに対し、ソーナ先輩は眼鏡の位置を直してから、ため息をつく。

「夫従妻隸会も論外ですし、旧魔王派のやり口も警戒です。……しかし、同じぐらい謎の魔獣化現象も危険でしょう」

そう話を切り替え、会長は映像を映し出す。

……何度見ても、この映像は嫌な気分になるね。

ホラー映画。それも近年よくあるウィルスなどによる変貌に近い。もはや質量すら半ば無視していると思えるレベルだ。

『ムカツクナグルウウウウウ……ナグルムカツウウウウクウウウウウウ……ッ！』

そんなうわごとを叫びながら、明後日方向に走ると拳で建物を殴りつける。

そんな魔獣と化した人間の姿を見て、誰もが眉をしかめる。

人間が無残な姿になって殺戮や破壊を巻き起こす時点できついのがある。また、まるでクリフォトが作り上げた量産型邪龍を思い起こさせるところもある。不快感が増していくよ。

「……やっとなこともえげつないがの。そもそも効率が悪そうじゃな」

そう冷静に批評するのは、サブリーダーの初代孫悟空殿だ。

長い年月を生きて戦っているだけあって、こういう時でも冷静さを

保っている。そして優れた仙術の使い手でもある故、だからこそ分かることもあるだろう。

「効率が悪いって、どんな感じなんスかね？」

「これだけの力があるのなら、もっと制御性や安定性が見込めるはずじゃ。性能にばらつきはあるし半ば暴走しておるしで、侵略活動や虐殺が目的にしろ、もっとやりようがあるはずじゃて」

リーダーのデュリオに対する孫悟空殿の説明に、確かに納得できるところはある。

確かに、クリフオトの量産型邪龍に比べれば、個性がありすぎるともいえる。

そうみると違和感が多い。無駄と粗が多すぎるといふか、

「……設計コンセプト、もしくは戦略ドクトリンが違うのでは？」

そう、僕達の意識を集める発言をしたのは、シーグヴァイラ・アガレス様だ。

ここ最近では生粋のロボマニアとT Fユニットのかみ合わせばかりが目立つけど、彼女のまた若手四王の一角。トライフォース
ルークィーズ・フォー

その意見には価値があると、誰もが耳を澄ませ―

「……そう、例えるならガンダ〇〇〇劇場版のELSです」

―しかしやはりロボだった。

「御免なさい。私達はまだ履修してないから、もっと分かりやすくして頂戴」

そしてリアス部長、もしかして布教されています？

「簡潔にまとめれば、彼らがこの行動を行った目的もしくは手段を、私達は敵対勢力に対する攻撃活動だと思っ込んで……という事です」

な、なるほど？

ちよつとよく分からない感覚でいると、ICPOから出向しているカズヒの前世の友人である引岡さんがぽんと手を打った。

「……つまるどころ、アレか？ ピースドラッグの大都市麻薬散布計画的な？」

『『『『『『『……ああ！』』』』』』』』

あの作戦には殆どのメンバーが参加したからか、今のですぐに納得できた。

そうか、その可能性はあるね。

ピースドラッグは世界的な人口密集地に麻薬の散布を試みた。だけどそれは、都市機能をマヒさせるとか無差別攻撃とかではない。

ただ単に、麻薬を吸ってもらいたかった。麻薬の良さを知って、人類すべてが麻薬を恒常的に堪能できる世界を作る為の布教活動だった。根本的に善意で動いていたし、害をなくそうという発想がまずなかった。

それと同じ。というわけではないだろう。

人間を化け物に変えて周囲に被害をもたらす行動に悪意がないとは言えない。だけど同時に、根本的な目的が違う可能性は十分にある。

あの魔獣化現象は、直接的な戦力の確保が目的ではない。戦力を得る為に魔獣に変えるのではなく、魔獣に変えたら戦力もついでに増えた。そう考えれば納得できる余地はある。

世界にはそういうケースは数多い。クリフォトの量産型邪龍に例えてたけど、リゼヴィムやミザリも近いところがあるから納得しやすくなった。

ただ、問題は――

「……情報があまりに少ないこと。これがネックですね」

――そう、シスターグリゼルダが厳しい現実を告げる。

そう、今回の事態は僕達が深く真相に関与する前にどうにかなってしまった。

中枢と思われる地点が完全崩壊した所為で、現状では解析も困難といえる状況だ。

「……まあ、その辺りは農らがやることじゃなかろうて」

そこで、孫悟空殿がまとめに入る。

若手が殆どの僕達の中で、年季が入っているからこそその説得力がそこに在る。

「ここから先は、現場で動く農らの管轄じゃないぜい？ 他所の仕事

を奪うより、自分のことを考えるつてのも重要じゃろ？ 一発屋で終わることもあるじゃろうしな？」

「……確かに、この流れだと本当に壊滅つてこともありそうだよねえ」
デュリオも同意を示しながら、しかし少し暗い顔をしていた。

「ただ、例の二人の女の子がちよつと不安だね？」

確かに、彼ならそこは気にするだろう。

「なんていうかこお、幹部みたいな感じだったんだろ？ 日本で言う
と……基本着ぐるみばかりな特撮の敵集団に、生身のまま出てくる類
の敵幹部みたいなの？」

そう続けるデュリオは、資料を確認する。

「……正気に戻ってるのかどうかは分からないけどさ、戻ってるのなら、キツイだろうねえ」

確かにそうだね。

実際、意識を取り戻した直後はだいぶ混乱していたみたいだ。おそらく、精神的な状態は真っ当に戻っているだろう。

そして、自分達が引き起こした事態を知れば……察するに余りあるだろう。

ただ、同時にそこに関しては心配しすぎてはいないんだ。

「……大丈夫ですよ、デュリオ」

僕はその根拠を持っている。

「あの二人がついてますから。そう悪い事にはならないでしょう」

「そうね。その点において、イツセーと和地は信頼の塊だわ」

リアス部長も頷くけど、その時に鳶雄さんが首を傾げていた。

「そういえば指摘はしてなかったけど、リヴァさんはどうしたんだい？」

まあ、そこは気になるだろう。

彼女はアースガルの先代主神オーディンの娘であり、現主神
ヴィーザルの妹だ。立ち位置的にもビッグであり、また慧眼の持ち主
でもあるから、こういう時に出てくる人物だ。

ただ、僕とリアス部長は少し苦笑いするしかなかった。

「……恋バナをしてるわ」

部長の苦笑交じりの答えに、誰もがきよとんとなつてしまつていた。

カズヒSide

「では、緋音・アフォガードさん。カズ君のどこが好きになつたのかなあ〜?」

「えつと……どういふこと?」

「わざわざスーツを着てマイクを向けるリヴァに、アフォガードは救いを求める目で質問を飛ばしてきた。

うん、言いたいことはよく分かる。その目をするのもよく分かる。だからまあ、言うべきことは一つね。

「諦めなさい。この状態のリヴァは無敵よ」

「え、そういう……結論?」

とても面倒くさいけど、そう言うしかない。

鶴羽やリーネスも視線をそつと逸らしているし。

まったく。こつちはこつちでやることがあるし、何故やるのかの理由もなんとなく分かる。

要はアフォガードのメンタルケアね。話を聞く限り、ザイアの偏向教育で異形に抵抗感が強いわけで、更に死徒という形で異形に落ちているわけだし。それなりのメンタルケアというか、ある程度の開き直りに持ち込む必要はある。

……まあ、自発的に「無理っぽい」として記憶消去を選んでいるのなら致命傷にはならないでしょう。インターバルやそこに関する保護もあるし、慣れる余地はある。

実際、アフオガードは割と普通に話してくれている。隣にまだ純人間な鶴羽がいるからでもあるけれど、少し警戒したり怯えたりする時もあるけど、会話はスムーズだ。

そう思っていると、リヴァは何故か私の後ろに回って両肩に手を置いてきた。

「さあ、キリキリ白状なさい！ あとボスが頂点だったことは覚えておくこと、序列マジ大切！」

「ボス言うな」

言葉だけのツッコミで感謝しなさい。アイアンクローぐらいは入ってもバチ当たらないでしょ、これ。

流れるように私がハーレムの正妻だと牽制球まで勝手に入れてきたわね。いえ、そういうのはある意味で大切だと分かっているけど。

勢いよくブッコンで勢いで緊張感を吹き飛ばす作戦ね？ 相変わらずバカやってるようであらうことであらう。

まあいいわ。相当精神的にキてみたいだし、ここは私もカバーした方がいいでしょうね。

「まあそういうわけで。私が和地の告白に「来るもの拒まず去る者創らずのハーレム野郎」を条件にしたことが大きいから。有言実行している男だからその辺りは覚悟して言い寄りなさい」

そこは条件といえるから、私の口から直々に言っておく。

……ただ、アフオガードは十秒ぐらいぼかんとしていた。

ふむ。やはりハーレムは抵抗があつて当然よね。名前からして一夫一妻の文化体系出身でしょうし、一夫多妻には抵抗があつてしかるべきだわ。そこはさっせれる。

ただ今更ナシってわけにはいかない。今後彼女が和地とどう向き合うかはともかく、惚れた張れたのノリになるのならそこは弁えてもらわないと。

さて、返答は如何に。

「えっと……その、よろしく?」

「完璧に勢いにのまれてるわね」

とりあえず、あとで冷静になってから聞き直すか。

「ボス、ボス。インガ達も呼んじやいます?」

「ボス言うな。あと既にキャパオーバー気味だから後にしなさい」

それとなく「他にもいるよ?」な追加情報を、私に提言する形で伝えてくるわね。

直接かける言葉だけでなく、周りの会話からも情報を拾えるようにする。リヴァ、恐ろしい女……っ。

「とりあえず、和地の先輩さんだったのよねえ? ……つまり、和地とその……しちやつた?」

そしてリーネス達も話を振ってくるけど、こつちもこつちでテンパってるわね。

今はその対応は間違ってると思うのだけれど。

「それはもう。私とリーダーがいれば、和地を左右からとつかえひつかえイチャイチャイチャイチャできるってわけよ!」

そして鶴羽は鶴羽で乗っかるし――

「そうだね。ヒマリ……もいれば凄い事できるしね?」

――あ、そういえばその情報は共有してるわけがなかった。

「「……………ぐう……………」」

胃が、私もリーネスも鶴羽も胃が痛くなっているっ。

「え? どうしたの……急病!?!」

アフォガードが困惑して当然ね。

ザイアが壊滅してからすぐに記憶消去を受けているなら、その手の情報が入ってくるわけがないか。

リヴァもすぐに思い至ったのか、ちよつと苦笑いで手を横に振る。

「あく違う違う。実はそこに、そちらさんが予想できるわけがない核地雷が埋まっております……そこから説明、いる?」

「絶対必須でしょ……………」

というより、ハーレムや序列よりこつちが一番ハードルがデカいわね。

くっ! 和地に来るもの拒まず去る者作らずなハーレムを要請しておきながら、私が一番のハードルになるとは。

やはりこれは誠意案件! 可能な限り誠意を見せて、別方向から去

る者が作られる事態だけは防ぐ！

「……では、詳しい話をするわね」

「「はい、待った」」

……床に正座しながら説明を試みたら、即座に止められたわ。解せない……っ！

イツセーSide

うう。何度聞いても涙が出てきそうな話だ。

「……OK分かった。要約しよう」

話を聞き終わった九成も、渋い表情を浮かべている。

ため息を一度ついてから、九成はそれをまとめている。

「……記憶に関してはいくらからか穴や薄れているのも多いが、何かと戦っている記憶はある。自分達が悪魔の血を引いているのも多いが、何かと支援した者もいる。そしてある一点からぼやけている記憶が完全に飛び、気づいたら病院にいたわけだな？」

「ええ。信じてくれない話でしょうけど、そう言うしかないの」

望月さんはそう言うけど、九成は軽く肩をすくめるだけだった。

「その心配はいらない。イツセーが女相手に信用できるといいうのなら、嘘はないとみて間違いないだろう」

おお、九成はその辺りめっちゃや信用してくれてるんだ……あ。

「御免九成。俺まだ乳語バイリンガル翻訳使ってない」

「……前言撤回。信用できるかとりあえず確認させてくれ」

「何がどういうことなの？」

鰐川さんの方が首を傾げてるけど、いやちよつと待ってほしい。

作っておいてなんだけど、乳語翻訳は女受けがかなり悪いからなあ。初めて使った時は全方位からツツコミ喰らったし。

おっぱいと対話できるのは素晴らしい技だと思うけど、まあ煩惱100%かつおっぱいが無いストレスで限界に近かった精神状態で作った業だからな。俺のおっぱいを求める心は常人の非じゃないから、常人だときついんだろう。

あれ？ これ使ったら凄い勢いでヘイト稼ぐんじゃないか？ 俺に慣れてない子にいきなり使うの、流星にまづいんじゃない？

俺はちよつと不安になってきたんだけどー

「安心してくれ。精神を蹂躪された小国元首クラスの人物を、かの孫悟空が力を貸すことで半日程度で当たり前に外出できるレベルに回復した技だ。昏睡状態だった貴族の女性にアプローチとして掛けるよう依頼された時なんて、僅か数日後に生霊が叱咤激励したり更に少しして意識が回復するという現象が起きた、霊験あらたかな技といえるだろう」

——いい得て妙だな！

九成の言ってることは間違ってるけど、確かにそこだけ聞くと凄まじいありがたい力に見えるそうさ。おっぱいに飢えすぎていることが理由で会得した技なのに、本当に大活躍しすぎだろ。

いやでも、なんていうか……ね？

「……それって、凄まじいのはかけるように促せる人達の方じゃね？」

「……方向性が違う。いやまあそっちも発想力は凄まじいというか、仕える主の母親にかけてほしいとか、決断力とか胆力とかが尋常じゃないと思うが」

九成もそこはフォローしなかった。

でもそうだよ。冷静に考えるとどう考えても凄まじいことしてるよね!?

「シヴァ様。報告は届いていますか？」

『アジユカかい？ ああ、旧魔王派も色々やっているみたいだね。……それで保護は？』

「ええ、イツセー君と九成君が保護してくれたようです。今は自衛隊と共に、捕縛できた旧魔王派を尋問しています。ただ、問題が一つ」
『なんだい？ 今回の一件、下手人はフロンズと内通していない旧魔王派だと思っただけ……違うのかい？』

「はい。全てが真実は断言できませんが、どうも旧魔王派の者達は便乗した要素があるようです」

『とうとう？』

「まず前提としてですが、どうやら今回の襲撃は同士討ちに近いところがありました。計画を知らない者達に混血までいることを知られ、血統主義者が抹殺を敢行。それを止めようとした計画の者達もいたので比較的容易かったと」

『彼らも細かいところに拘るものだね。それで、本題はどういった感じなんだい？』

「計画推進派は鰐川亜香里と望月有加利の両名が、例の魔獣化した存在……それも、小動物が変化しものと遭遇したと語っていました。それを接触する機会を凶っていた者が補佐する形で撃退したのが始まりということですよ」

『……つまり、例の魔獣化騒ぎは旧魔王派とは無関係ということかい？』

「はい。彼らが言うには、性能が低かったので引き込む為の餌にする形で誘導したと。……両名及び、よく行動している少年は異形の知識がないので、上手く口止めしつつ誘導し、戦闘訓練として利用してい

たようです」

『旧魔王派も業が深い。木っ端魔法使いの外法研究か何かだと思っただろうけど、地雷を踏んだようだ』

「そのようです。その後、望月有加利が一足早く行方不明になり間髪入れず鰐川亜香里と先の少年……海峯歩人かいほうあゆとも行方不明に。一月ほど搜索していたようですが、事態が動くまで上手く進まなかったようですね」

『現場で動いていた小物を利用してしようとして、逆に自分達が小物だと気づかなかつたという事か。策士策に溺れる……とも言い難い、愚策の極みだね』

「口から出まかせと思いたいですが、その辺りの供述は誰もが統一されていません。信憑性は高いでしょう」

『藪をつついて蛇が出ると日本そこでは言うけど、とんだ大蛇の群れが出てきたようだ。……こちらからも人材を派遣しよう。そこは閉鎖しつつ、徹底的に調べるべきだ』

「ええ。サーゼクス達が死力を尽くしてくれた世界、むざむざ汚させるわけにはいきません」

『ところで、可能性はいくつ考えている?』

「いくつものですが、最悪の可能性がありそうですね」

『……異世界の存在か。今回の規模から逆算して、下手人はそこまで多くないだろうけどね』

「だからこそ、こちら側の事情を把握しきれずに動いた結果がこれでしょう。問題ですね」

『そうだね。これで向こうの警戒するだろうし、今回のように尻尾を出す真似は避けるだろう。最も、こちらにも搜索に人員を割くから意外と見つかるかもしれないけど』

「その時は、貴方自ら破壊しますか?」

『それも一興だね。……ただ、同時に起こった一件も含めて警戒は必須だろう』

「ですね。……異世界E×Eだけでも厄介というのに、トラブルが頻発するようで」

『幸か不幸か、規模が小さいから国際レーティングゲームはどうになるだろうけどね。ハレのイベントで民衆の心をしっかり慰撫し、本格的に問題が起こるまでに備えておかないと。それに……』
「それに？」

『……僕も、直接兵藤一誠とは会ってみたくてね。ことが大ごとになれば彼の承認式が取りやめになって、挨拶に行く口実が無くなるどころだったから、さっ……』

新时期来訪編 第九話 新たな一步を

和地 Side

改めて、乳語翻訳パイリンガルで確認をとったので大丈夫だろう。

乳語翻訳はその性質上、手探りで新しく対抗術式を用意しなければならぬ存在。それも透過ですり抜けられるという、敵からすると嫌すぎるコンボ。流石に欺瞞情報を送り込むなど、異形歴新米にできることじゃない。

と、いうわけでこれで最低限の保証は確立したな。

だが同時に、情報源としては頼りないことは間違いない。

だがそれも仕方がないだろう。

「……不可逆の変貌を強引に戻すなんて離れ業を、幽世セライロト・グラールの聖杯抜きにするなんて神の御業すら超える所業だろう。結局それ単体では生命活動すら困難で、墮天使化という追加が必要だったしな」

俺はフォローも兼ねて、その辺りをはつきり言う。

実際問題だが、あれは変貌というより加工に近い。

その性質上不可逆であり、例え幽世の聖杯があつたとしても元に戻すのは不可能だろう。禁手になればあるいわといったところで、それにしたって簡単ではない。

だからこそ、記憶に障害が残って仕方がない。おそらく回帰は不完全で、様々な部分が欠落した状態だった。記憶が物理的に消失している可能性だってあるわけだしな。

「そして乳語翻訳で裏も取れた。今の君達に厳罰を下すのは、少なくとも三大勢力ウッチのトップ陣は良しとしないだろうさ」

後天的に墮天使となり、聖書の神が作りし神器を持つ、魔王の血を引く少女達。

この時点でいろんな価値がありすぎるし、何より心神喪失に近い状

態だ。シエムハザ総督もアジュカ・ベルゼブブ様もガブリエル様も、温情を出すことが必須になるだろう。

「そうだな！ よかったじゃんか、二人とも！」

イツセーがほっとしてそう声を上げる。

ただ、鰐川も望月もいい顔はしてなかった。

まあ、それは分かるだろう。

「でも、いいの？」

鰐川の方が、小さく呟いていた。

その肩は震えているし、顔色も悪い。

そして、俺達も分かっているその理由を、望月も言葉にする。

「……この町を壊して、たくさんの人を死なせたのは……私達だった者がしたことですよ」

そう、このテントの外にある廃墟と化した街並み。

それは間違いなく魔獣化した存在が起こしたことで、その先駆けとなっていたのは二人がなってしまうていた存在だ。

そして、二人も気づいているんだろう。

「お父さんもお母さんも、もういないよ……？」

「それに、学校のみんなも、私達が……っ」

鰐川も望月も、悟ってしまったている。

この町を破壊し大量の死者を生んでしまったのなら、当然だが自分達と縁のある者達も多数滅ぼしてしまっている。その事実を悟っている。

重いだろう。真つ当感性なら抵抗を持って当たり前の所業だ。それをしてしまったという確信があるのなら、心をきしませるのには十分だ。

……だからこそ、だろうな。

「だとしても、だ」

「ああ、そうだ！」

俺は静かに。イツセーは力強く。

そこに手を差し伸べる。そういう性分なんだよ、俺達は。

誰かの笑顔を守る赤龍ウエルシユ・ドラゴン帝と、嘆きの意味を変える救済者タイタス・クロウ。

そんな俺達がどうするかなんて、そこは決して揺らがない。

「悲劇を齎してしまつた以上、いやでも背負うしかないことはある。君達が罪悪感を持つているというのなら、そこに対して筋を通してケジメをつけるに越したことはない」

俺はそう前置きし、そして胸を張つて告げる。

「……その為の手伝いぐらいならさせてもらうさ。なにせ、最愛の銀弾が受け取つた願いだからな」

ああ、そこに関しては明言できる。

カズヒ・シチャースチエが助けることを請け負つた。その時点で俺も無視する道理は欠片もない。

正義を奉じる必要悪。邪悪の宿敵、祓魔の銀弾。それがカズヒ・シチャースチエの在り方だ。そう生きてこう死ぬと近い、それを実行し続ける女だ。

そんな彼女が、助けることを請け負つた。なら俺も助けに動くさ、当然だ。

そして、請け負つたのはカズヒだけでもない。

「そういう事さ！ リアスやゼノヴィアだつて聞いてそうするつて動いたんだし、俺だつて力は貸すさ！」

心の底から当たり前のようにはつきり言つて、そのうえで少し慥然とした表情になる。

「それに二人は悪くないだろ？ 悪いのは、二人を魔獣にしてそんなことをさせた奴だ。……もし戦うことになつたのなら、絶対に俺が倒してやるさ」

「ま、実際諸悪の根源はそいつだろうな。しつかり落とし前はつけさせてやる」

俺もそこには全面に賛成したうえで、ただ言うべきことは言つておく。

「まあ、それでも背負わずにはいられない物はあるだろうしそこは止めない。……ただし！」

そう、一番言うべきはこれだ。

「背負う意義が欠片も無い物を背負つたり、許容量を超えて潰れるよ

うな真似まではしなくていい。それじゃあ二人を助けた歩人^{あゆと}ってやつが報われないさ」

「だなー。文字通りその歩人って人が二人を助けて見せたんだ。しっかり幸せになったって報告できるように生きないと駄目だって！出なけりやそいつが可哀想じゃねえか」

イツセーも同調して、二人はともにきよんとしてから、力なくだけど微笑んだ。

「……そうね。ずっと沈んだままだったら、歩人君が泣いちゃいそう」
望月がそう寂しげに笑うと、鰐川の方もうんうんと頷いていた。

「分かった！ とりあえず、しっかり眠ってから頑張ります！」

「うん、そういうのは俺好みだ！ 二人とも色々大変だったんだし、まじっすっかり休んでから考えよう！」

イツセーが鰐川に同調しかけているけど、まあそれはいいだろう。それはそれとして、俺は望月の方に近づくと隣に座る。

私見だが、鰐川はどちらかというと責任感が強いからこそ前向きになれるタイプだろう。イツセーみたいなタイプと絡めば、真っ直ぐ進めるはずだ。

ただ、望月の方は気負っている。これは責任感が強いからこそ抱え込んでしまうタイプと見た。

「……さつきも言ったが、背負いすぎるなよ。人にはそれぞれ許容量ってものがある」

だから俺は、釘を刺す。

はつとなる望月に、俺は目を見てはつきりと告げる。

「責任を背負うことはいいい。だが背負えない重荷を無理に抱え込んで、誰かを巻き込んで自滅するだけだ」

大抵の存在には許容できる限界がある。そしてそういうものは、限界を超えれば破裂するなり押し潰すなりするものだ。

そして、場合によっては周囲を巻き込んで大きな悲劇を生み出しかねない。そういうケースは腐るほどある。何より、俺はそんなケースで生まれた存在だ。

だからこそ、これははつきり言っている。

「無理に限界を超えようとしなくていい。カズヒねえもリアス部長もゼノヴィアもイツセーも、そして俺もそこまで求めない。……無理して倒れる前に、ちゃんと誰かに……いや」

ここまで行っただのなら、最低限の責任は取らないと。

「俺に言え。肩ぐらいは貸してやる」

その言葉に、一筋の涙が零れる。

……まずい、言いすぎたか？

俺はちよつと冷や汗が出てきそうになった。

「その、プライド傷つけたのならすまない」

「……ううん。そういう事言われたの、あまり記憶になかったから」

あく。なんとというかしつかり者の印象があるしな。

まあ、それが悪いってことはない。ないが、それはそれで苦労があるだろう。

だったらー

「……ま、縁があつたら少しは頼ってくれ。こっちも常に何でもかんでもできるとは言わないけど、頼めば力貸してくれる人達も多いんだ」

ー少しぐらい、肩の荷を下ろせる場所があつた方がいいだろう。

「……ええ、ありがとう……っ」

うん。

泣くことそのものは否定しないし、悲しい時に泣きはらせないのも問題だ。

だけどやっぱり、涙の意味は笑顔こっちがいい。

少し止まらなさそうだし、ちよつと待ってあげるとしますか。

「よろしくお願いします……ボス」

「リヴァに感化されないで頂戴」

話をし終えた後の、アフォガード……もう緋音でいいか。

緋音の第一声がこれか。リヴァの影響を悪い意味で受けてないかしら。

「そうよりリーダー。ややこしくなるからカズヒをボスと呼ぶのはたまにだけ！」

「駄目だよ。むしろややこしいから……リーダーは終了」

鶴羽のズレた反論になんかズレてそうなツツコミを緋音はしている。

その上で、リーネスが用意した特別製の輸血パックから血をチューチュー飲み始めた。

まあ、死徒は血液の補充が必須なものね。効率的なところをも魔術的に対応したリーネス印の加工済み輸血パック。これさえあれば血液関連は問題なさそうだわ。

「で……ボス。その……ありがとう？」

「いえ、お礼を言われるようなことしたのかしら？」

正直突拍子もないお礼な気がするのだけど。

そう思っていると、何故かリーネスやリヴァが苦笑している。

「俺の裏の笑顔の誓い。あれがあるからこそお、和地は今の和地なのにねえ？」

「いやホント、カズヒには感謝感激雨あられ。おかげで素敵な共有ダーリンをゲットしちゃいましたー！」

そ、そう返されるとちよつと反論しづらいわね。

私にとつても和地にとつても、あの日の笑顔に交わした誓いは原点だ。あれがあったからこそお互いに頑張れたし、成長できた。極^{スファイア}晃星にすら到達できた。

あの日私を救ってくれた笑顔の君。彼もまた、私の笑顔に誓って生きて、私を再び救ってくれた。その笑顔が、多くの人を救ってきた。

その笑顔で、多くの悪を祓い続けた。

自然と、私の頬は染まって少し緩んでしまう。

「……ええ。私達は互いの笑顔でここまでこれたもの。存分にご相伴に預かりなさい」

思わず胸を張ってそんなことを行ってしまう。

ただ、それを見るリーネスも鶴羽も、安堵している笑顔を浮かべていた。

いつもいつも、心配かけて悪いわね。大事な私の二人の親友。

これからも思う存分、和地と一緒に生きていきましよう。これからも胃に悪いことをすることになりそうだし、それぐらいはさせて頂戴。

「……ちなみに昨夜、鶴羽とボスが完全サポートでリーネスの初夜をエスコートしました」

と、一瞬のスキをついてリヴァが余計なことを緋音に告げやがった。

視線が、視線がもの凄く微妙なものを見る目つきに！

「それはどう……なの？ いや、ザイアでもそういう事あるから……鶴羽がいるならトチらないけど」

「余計なこと言ってくれたわね」

アイアンクローをそろそろリヴァにお見舞いしたくなってきた。

まあ、それはともかく。

「とりあえず、異形には慣れそうかしら？」

私はそこを確認する。

かつてザイアの偏向教育を受け、異形を受け入れきれないと記憶を自ら消去することを選んだ緋音。

正直そこが懸念だったけれど、思ったより割り切れているのかしら。

「……私も、似たような経験が……あるの」

そう告げる緋音の頬は、複雑に歪んでいた。

「私の家族は……異形と思われる強盗殺人で殺された。でも、私だけは……助けが間に合った」

その言葉に込められた感情は、本当に複雑に入り乱れているのだろう。

「一生懸命守ってくれて……間に合わなかったことを泣きながら謝ってくれた、あの人。彼女みたいになりたいと……ザイアに入ってから頑張ってた」

「……そっか。その大前提が崩れそうになれば、それは耐えられないかもしれないわね」

リヴァがそうしんみり語る中、緋音はそれでも表情を微笑に傾ける。

「うん。きつと、和ちゃんのことを好きになったのは……同じなんだ」なるほど、ね。

直感的に悟っていたのでしよう。

和地が瞼の裏の笑顔に誓ったように、彼女も己の在り方を誓った過去がある。

それは大前提の崩壊で崩れそうになったけれど、でも結論として、取り戻せた。

「私は、やっぱり私みたいな人を……減らしたい。その為に……この新しい人生を、使いたい」

胸に手を当てて思い出すのは、きつとあの日の原風景。

己の原点を取り戻せたのは、異形に対する抵抗心を、異形によって救われ異形になったことによるショック療法かもしれないわね。

なら、私が言うことは一つだわ。

「あまり言えた義理ではないけど、無理と思ったら素直に伝えて」

ああ、私も感謝したい。

「和地の大事な先輩なら、和地は絶対力を貸す。私だって、手が空いているならちよつとぐらいサポートするわ」

この人は、きつと和地にいい影響を与えてくれた人だ。

なら、私も彼女を守りたい。和地がそう思っているだろうからこそ、私も手が空いている時ぐらいは手伝おう。

その想いをもって、私は緋音に手を差し出す。

「貴女が手を取ってくれるなら、私達は貴女を歓迎するわ」

その手を、緋音は一瞬の躊躇を振り切って取ってくれた。

「よろしく……ね、リーダー」

その決意に敬意を。そして、これからの貴女に幸いを。

さて、和地はそろそろ帰れるようになるかしら。

「……あ」

「「あ？」」

四人揃って疑問符を上げるけど、私は今壮絶な事実思い当った。

今和地は、責任を取る形で鰐川亜香里と望月有加利を探している。

そして、同行しているのはイツセー。

それが今かみ合って、結論が出た。

「……新入りはもう一人できるかもしれないわね」

「ああ……」

リーネスと鶴羽が心底納得し、天を仰いだ。

相当メンタル参っている可能性があるあの二人が、よりもよって

イツセーや和地に接触する。

これはあり得る。かなりあり得る。場合によってはどっちも一人

でという可能性があるけれどね。

「覚悟してね、後輩ちゃあん？ カズ君は天然女つたらしの権化だから。

前世の父親からすけこましの才能だけを受けた超優良物件

の権化だから」

「あく。和ちゃん、ザイア時代でも女子人気凄かった……からね」

でしようね。

ふっ。むしろここでそれぐらいできなくて何が和地か。

やってしまえ涙換救済。私の男ならそれぐらいはやってのけてこ

そと示してみなさい！

イツセーSide

ちよつとテントから出て、俺は鰐川さんと歩いていた。

「よかつたのか？ 望月さんを置いて」

それとなく袖を引っ張ってきた鰐川さんについてきたけど、つまりそつとしておいた方がいい的な感じかもしれない。

だけど、ちよつとした素振りで分かるぐらいにお互い仲がいい感じだったけど。

「ん〜。なんとなく、弱いところをちゃんと出してほしかったからかな？ ……自分でも意外なぐらい、そう思ったの」

そう答える鰐川さんは、自分でも不思議そうだった。

ただ同時に、そこに迷いない感じだ。

「私や歩人くんにとって、有加利ちゃんはお姉さんって感じで、いつも甘えてたの。……でも、それだけじゃいけないって、今は強く思うんだ」

そう言いながら、鰐川さんは空を見上げる。

その表情は自分でも不思議そうで、悩んでいる感じだ。

ただ、同時に強い決意が見えていた。

「……うん。きつと、歩人君が遺してくれたんだね」

そう呟くと、鰐川さんは急に両手で自分の頬を叩く。

気合を入れている。そういう事なんだろうな。

実際、それを終えた鰐川さんの雰囲気はもつとしっかりしていた。

「うん、頑張る！ 歩人君が繋いでくれたのなら、私はちゃんと頑張らないとね！」

「……そうだな」

ああ、俺もそう思う。

「その歩人ってやつのは知らないけど、命を捨ててでも二人を助けようとしてくれたんだろ？ だったらその分、いっぱい頑張って笑顔でいられるようにならないとね！」

「そうだよな。……うん、頑張つてそうになれるように生きてみるよ！」
元氣いっぱい頷いた鰐川さんは、そのままふと顔を逸らしてい

る。

「あの人にも言われたしね！ 結構厳しいけど、実際そうだと思うから」

「……ラムルの奴か」

後継私掠船団の新しい筆頭戦力。それも、ルシファアの先祖返りとかいうとんでもない奴。

そういや、一緒にいたな。

「何言われたんだ？」

なんつーか、あれで妙に影響力あるからなあいつら。ちよつと変なこと言われてないといんだけど。

そんな気持ちで聞いてみると、鰐川さんはちよつとすすけているような雰囲気になっていた。

そんなでもって、なんというか顔の雰囲気はラムルっぽい感じになった。

「……身内が泥被ってまで命繋げてもらったんなら、笑顔で墓参りできるように生きるべきだろ。それが嫌だつーんなら、さつさと死んで否定しろ……って」

「き、キッツいこと言うなあ」

前半はちよつと納得できちゃうのがあれだ。

俺もまあ、似たようなことするしそのあと笑顔でみんなを支えて生きてほしいとか、リアス達に思ってるしな。ちよつと否定できない。

いや、後半はどうかと思うけど。ようは「残りの人生ウジウジ生きる方が失礼だし、そもそも無意味だろ」って感じなんだろうけど？

それにしたって乱暴すぎるだろ。いや、後継私掠船団らしい気がするけど。

「でも、そうなんだよね。歩人君が命を捨てても助けてくれたのなら、歩人君が笑顔になれるような生き方をしないと……さ？」

「そうだな。そこは本当にそう思う」

だから、俺はもう一度言っておいていいだろう。

「そんな奴からリアスが君達を託されたっていうなら、俺ももちろん力になるぜ」

思わず揃って大絶叫して、周囲を騒がせてしまったよ。
おいおい、マジで準神滅具かあ。世界は広いのか狭いのかって感じ
だな、オイ。

新时期来訪編 第十話 新たな始まりの予感

和地Side

昼休み、たまには一人の時間を思ったら匙に遭遇した。

「……そういえば、そっちも一部昇格の話があったらしいな」

「まあな。ま、上手くいけば俺も教師になれる（悪魔で教師になるには中級悪魔以上である必要があるらしい）段階ってこった」

そんな感じでだべっていると、ふと少し前のことを思い出す。

「結局なんだったんだろうな、あの魔獣化騒動」

「ああ、俺達が夫従妻隷会とやり合った時の奴か？」

あの魔獣化騒動。規模が小さい町一つにとどまったとはいえかなりアレだからな。ある程度のぼかさされた人間界でも海外でニユースになったほどだ。異形世界ではもっと大きな話になっている。

生物が魔獣化するということで、真っ先に思い起こされるはクリフォトによる各種テロ活動。特に吸血鬼側で起きた事件が類似しているだろう。

その所為で、吸血鬼側はツエペシユもカーミラも割と騒がしいらしい。まあ、思いつきり被害を受けているわけだしな。

だからこそ、真っ先に考慮するべきは英霊召喚もしくは亜種聖杯セフィロト・グラールそれによって幽世の聖杯を利用できるようになった可能性。当然、各勢力もその可能性を第一に調べている。

だが、俺は少し懸念がある。

「……嫌な予感が一つある。一応上にも具申しているし、他にも思っている奴はいるけどな」

「なんだ？」

匙が首を傾げる中、俺はその予感を語る。

「まったくの新顔。その可能性だ」

そう。俺はそれを考えている。

今回起きた二つの事件。どちらもそれぞれ別の違和感がある。先進国の専門機関が必要なレベルの新薬が多数。戦略的観点から見ても違和感しかない場所の選定。どちらも方向性は別だが、違和感がぬぐえない。

あとでリアス部長から聞いた話だが、シーグヴァイラ・アガレスは魔獣化の方で「そもそも相手の目的や手段が勝つ為ではない可能性」があった。

もしそうだとするなら、最悪の可能性は――

「……ザイアみたいなのどこから取り出したそれ」みたいな新技術や異能が、また出てきたんじゃないかってことだ」

――まったくの未知。その可能性だ。

未知とはそれだけで脅威だ。知らないというのは対策が分からないという事だ。世の中あらゆるもので、前例のないものが大きな影響を与えたものは数知れない。

もし、もしもだ。

もし今回の事例が、まったく想定外のところから来た未知の手段だとするのなら。

「……覚悟しとけよ、匙。俺達は既に知っているだろう」

それは、その時点で大きすぎる脅威になる。

俺はその緊張感と戦慄を、隠すことができなかった。

何故なら――

「この世は異世界が存在し、おっぱいを司る神がいる。つまりどんなへんてこりんな奴が出てきてもおかしくないってことだ」

――前例が前例すぎるからな。

「……なんだろう。緊張感がごっそり減った気がするぞ、九成」

「全部前例の所為だよ畜生！」

前例が本当に酷過ぎる!!

二月も後半。そろそろ進級のシーズンだ。

そしてそれは進学のシーズンであり、当然だけど卒業のシーズンでもある。

リアス部長がその地位をアシアさんに預けてから、もう数か月と形容できる。部長は朱乃さんと一緒に、生徒会長を降りたソーナ先輩達と話をしたりする時間が増えている。その為、顔を出さない時もある。

最初の頃はアシアさんは流されるままだったけど、最近はいよいよまとめられるようになってきている。

「……はい。では二月のまとめを行いながら進めていきましょう」

「そうだな。……二月……バレンタイン、チョコレート……」

「……まずカズヒにお礼するべきだよな、俺達」

アシアさんが議題を進行しようとして、イツセー君と九成君が少しマジ顔になったりはしたけど、だいぶスムーズに話は進んでいる。

ちなみに二人だけど、カズヒが主導でまとめたことで、全員で協力して小さめのチョコケーキをそれぞれ贈るということで収まつたらしい。

もしそうでなかった場合、チョコレートの群れが襲い掛かるだろう。あとイツセー君の場合、どんなチョコレートが来るか正直予想がつかない。カズヒは本当にいい仕事をしているね。

まあ、そんな脱線もほんの僅か。僕達は一通り終わらせると、雑談に移っていく。

……とはいえ、少し真面目になってしまっただけね。

「ま、パン屋は当分やめておけ。趣味で作る分なら問題ないだろうが、

天界の仕事に慣れるまではあんまり多方面に手を出さない方がいいだろ」

「……やっぱりそうよねえ。って、慣れたら副業って手があったのよね！ ナイスよ九成君！」

九成君がそれとなくフォローを入れていたけど、イリナさんの場合がそうだろう。

ミカエル様のAであるイリナさんは、彼が他の御使いと共に隔離結界領域に向かったことで、これから相応の立場につく。

私人としてパン屋に興味があるイリナさんだけど、そんな余裕がなくなるかもしれないと言われていた。

……一時的とはいえ、僕達は大きなものを失った。そして、多くの者にとって一時的ではない喪失を経験した者もいる。

そしてそれを終えたとしても、前回の事件のように何が起こるか分からない。それほどまでに、この世界は数多くの混乱の種に溢れている。

禍の団だつてそうだ。主だった大派閥は壊滅したとはいえ、疾風殺戮・comといった中堅どころの派閥は健在だ。更に旧魔王派に至っては、新たな魔王血族が台頭しかねない。

そういう意味では、僕達チームD×Dはこれからも忙しいことになるだろう。

とはいえ、悪い事ばかりではないさ

「……そういえば、国際レーティングゲームについて聞いたかい？」

僕は気分を上げようと、そちらに話を振る。

それに対し、沈んだ雰囲気をもったヒツギさんも乗っかるように手を打った。

「結構集まってるみたいじゃん？ ヴァーリ達は絶対参加するだろうし、リアス先輩も出張るかもね。そうだったらイツセー達も……って感じかな？」

「そうねえ。リアス先輩が出るなら、眷属悪魔が出ないわけじゃないわよねえ？」

リーネスがそこを振ると、そこから話が弾み始める。

当然ではあるね。

リアス部長は、元々レーティングゲームの各種タイトルを掴み取ることを目標としていた。そこにレーティングゲームの国際大会となれば、興味を持たないわけがない。

国際レーティングゲーム大会は、試験的な要素もあるからだいたい遊びがあるらしい。

発表当初は流石に反対意見もあつた。邪龍戦役は被害が大きく、また喪失も多いことから不謹慎とも言われた。

けど同時に、須弥山の帝釈天を含めてかなりの参加希望者が出てきていた。更にムスペル Heim の巨人スルト等、世界に名だたる遺された強者が次々と参戦を表明したのだ。この勢いが反対意見を超えたのが現状だ。

また優勝賞品として、「世界に混乱を齎さない範囲で、運営側が願いを叶える」という盛大なものが提示された。同時に運営資金は運営側のポケットマネーで行い、チケットなどの利益は復興資金に充てられるというチャリティー事業の側面があることも大きい。

そういう、名だたる強者が参戦する一大イベント。リアス部長なら絶対に参加を表明するだろう。

「そうになると、眷属としては大忙しだね。イツセー君はどう思う?」

「……あ、ああ。誰が相手だろうと、勝つ為に全力出さないと! 部長にも相手にも失礼さ!」

僕はそう振った時、イツセー君は少しだけ反応が遅れていた。

……ん?

みんなが少し首を傾げたその時だ。

ドアがノックされ、少ししてから一人の少年が顔を覗かせる。

「……生徒会の者です。ゼノヴィア会長はいますか?」

と、そこから顔を見せた少年に、小猫ちゃんが声をかける。

「コーチン、仕事?」

「……そうなんだが、コーチンはやめてくれて言ってるだろ?」

微妙に嫌そうな表情を浮かべる彼に、ルーシアちゃんとアニル君が両手を合わせる。

「すいません、百鬼くんなきり。ゼノヴィア先輩は特別風紀委員というカウ
ンターの存在に反論をしに行つて、今カズヒ先輩と死闘を繰り広げて
います」

「因みに、一般生徒の構成員にゼノヴィアの脅威度を体感させる為に
わざと長丁場にしてるつてよ」

その説明に、百鬼と呼ばれた彼は、天を見上げた。

「あく……。あれはやりすぎたかあ」

その何とも言えない感じに、ギヤスパ―君とレイヴェルさんも少し
同情の色を見せている。

「う、うん。どつちかっていうと、そのあとだよね……」

「世界各国の海軍戦力を奪いに奪った組織ですものね。百鬼さん達の
安全も考えているのでしよう」

う、うくん。それは確かに。

ちよつといたたまれない空気になったけど、彼は気を取り直すとこ
ちらに一礼する。

「つと、生徒会書記、一年生の百鬼なきり勾陳こうちん黄龍わうりゅうです。勾陳は海外で言う
ミドルネームのようなもので、出来れば百鬼か黄龍をお願いします」

「……長いな。日本人だと珍しくないか？」

「戦国武将か。……いや、百鬼つてことは、もしかして五大宗家？」

イツセー君と九成君も反応するけど、それに対して百鬼君は小さく
苦笑した。

「実は俺、五大宗家の百鬼家で黄龍を襲名した次期当主なんですよ」

「朱乃さんや椿姫先輩と同じ、五大宗家の方なんですか」

アーシアさんが感心するけど、中々の人物が来たものだね。

五大宗家。日本の異能者を代表する組織。朱乃さんが生まれた頃
は色々と保守的すぎたけど、和平の影響や次期当主の代替わり、また
数年前にヴァルプルガなども関わっている事件もあって、だいぶ変化
しているらしい。

「勾陳？ コーチンってイツセーみたいな感じの愛称なんですかのね
？」

「……すいません、その呼び名はやめてください。……名古屋コーチ

ンみたいでいやなんで」

ヒマリさんの邪気のなさにちよつと困りながらも、しつかり念押しをしてから彼はイツセー君を見る。

「赤龍帝の兵藤一誠先輩ですね。俺、貴方を目標にしているので一度挨拶をしておきたかったんです」

「……え、俺？」

きよとんとなりながら自分を指刺して確認するイツセー君に、百鬼くんは頭まで下げる。

ただ、分かる気がするね。

黄龍とは霊獣の龍。その力は間違いなく高位であり、龍王や伝説の邪龍とも並び立てる、優れた龍だ。

それを宿す存在として、歴代最優の赤龍帝と呼ばれるようになったイツセー君は、ある意味で憧れの存在になりえるだろう。

とはいえ、少し真に迫る者があるね。

「神滅具を宿しているとはいえ、貴方はただの一般人。それが僅か一年足らずで神や魔王すら倒せる存在になった。俺も貴方の様に、運命すら超えられるような強さが欲しいと思っています」

……凄い目だ。ここまで強く尊敬するというのも中々ない。

「……そ、そうか？ ……ま、そういうなら」

ちよつと戸惑っているイツセー君だけど、軽く笑いながら百鬼君に手を差し伸べる。

「これからゼノヴィアやカズヒをよろしくな。ま、俺でよかったらちよつとぐらいは」

「……はいっ！」

ふふ。イツセー君はこういうところが凄いなだね。

そんなことがあった日の夜、俺にお客さんが来た。

主のリアスにマネージャーのレイヴェルが付き添うけど、これがびっくりする相手だった。

「……タンニーンさんの息子さんっすか!」

「ああ。結構びっくりしたぜ」

久しぶりに男同士で水入らずがしたかつたんで、俺は別館の男風呂の方に来てた。

そこでサウナに入りながら、アニルや九成にそのことを話したんだ。

タンニーンのおっさんに子供がいたことにも驚いた。っていうか三男が来たってことは、兄が二人はいるわけだ。

ただ内容も内容だったよ。

「臣下になりたいって跪いてきてさあ。ちよつとびっくりだったなあ」

「臣下? 眷属じゃなくて?」

サウナ用のドリンクを飲もうとする手を止めて、九成がそこに食いついた。

そもそも眷属になりたいっていう方向の発想が出るのか。俺、昇格は確定したけどまだ中級なんだけど。っていうか眷属志望がわざわざ来るような奴だと思われてるのか。

……いやまあ、冷静に考えると来るのか?

そこはいいとして、俺はとりあえず領いた。

「そうなんだよ。俺が眷属で最高のハーレムを作りたいってところまで知っててさ。それを邪魔しようなんて考えないって。只の部下、一人の兵でいいってぐらいでさ?」

正直かなり戸惑ったなあ。

なんていうか荒くれ者で有名なしいけど、むしろ礼儀正しいぐらいだったし。ついでに言うとおっさんの子供で一番強いらしいのに、俺

に対してすつごい下につく方向だったし。

「……まあ、異例の進化を遂げる赤龍帝つすしねえ？ そりや舎弟願望の連中だつて出やがりますつて」

「同感。タンニーン氏も変にイキるような真似を見逃しはしないだろうし、グレンデルやアポプスを倒す実力すら否定する阿呆に育つてはいないだろうさ」

アニルと九成はむしろ納得してるんだけど。

「ま、本当に魅力的な人物つてのは、性別関わらず人に好かれるもんでさあ」

「ここ最近は迷惑行為もしてないし、ひきつけの頻度も一日数回から週数回にまで減ってるしな。成長を認めるやつはきちんといささ」

二人はそんな風にうんうん頷いているけどさあ？

「……俺、男にモテても嬉しくねえよ!？」

思わず絶叫するからなあ!？」

新时期来访編 第十一話 釣り場での一幕

和地 Side

日本の海に浮かぶ無人島の一つ。

俺達は今、そんな場所に來ている！

「さあ、聞きたいことがあったら教えてあげるからね！」

「はいですのー！ この時期はどんな魚が連れそうですの？」

ノリノリの五郎さんに、元氣よくヒマリが手を挙げて質問する。

そして俺達は今日、五郎さんの発案で釣りに來ていた。

俺も久しぶりに釣りをするなあ。ふふふ、最近は釣りはしてなかった。

ちよつと前に厄介なことも起きたけど、最近はだいぶ平和な方だからな。こうしてオカ研総出で釣りに行けるなんて、そうそうないだろう。

そして万が一が起きたとしても、ここにはオカ研が勢揃い。当然だがこの戦力なら、ちよつとやそつとでは倒されない。しかも五郎さんはヴァーリにまで誘いをかけていたらしい。その結果としてヴァーリチームまで参戦という、アッセンブルな戦力となっている。

油断は禁物だが、気を張りすぎるのもあれだ。息を抜ける時に抜くのも仕事のうち。

何よりー

「……では新人の皆様。周囲の警戒を行いつつ、ご夫妻のサポートを交代制で行うように」

『『『『『はい、メリード様！』』』』』』』

ー懲罰メイドの人員が増えている！

……というのも、夫妻が誘拐されるわオフィスが襲撃されるわといったこともあり、警備関係の更なる強化が必須となった。

初期の懲罰メイドはディオドラ関係が多かったが、その後の禁手バーゲンセール問題で暴発した一件や、王の駒やゲームの不正で起きた各種暴動、もしくは不正によって主の巻き添えを喰らった者達から入念な審査を経て、追加人員が結構増えている。

それに伴い、兵藤邸の移転が決定。道間家やそれ以外から魔術回路保有者も集め、土地の選定からまとめて更なる強化を行う予定だ。建築資材も徹底的に選別したうえで、カズヒが持っている聖墓まで使つてフルで組み立て直すらしい。

……最も、前任メイドはそっちの作業に追われているので、春つちやインガ姉ちゃん、ベルナが来れてないのは残念だ。釣った魚でなんか作るとするか。

ちなみに俺は寿司と刺身が好きだ。ベルナも日本食をだいぶ鳴らしているしその方向で……いや、カルパッチョという案もあるな。

そんなことを考えこんでいる間に、みんなはそれぞれ思い思いの場所に行っているようだ。

それに気づいた時、メイドの一人がアイスボックスを手に持って俺に近づいていた。

「九成様。よければ私が荷物をお持ちいたします」

そこにいるのは、短めに切り揃えた髪の毛のメイドさん。

外見は二十代前半といったところだけど、ちよつと困った。

「え？ ……あゝ、お名前……は？」

いかん。結構な増員だったので、まだ名前を完璧に把握できてない。

これからもそれなりに顔を合わせるわけだし、名前と顔を一致させるぐらいはしておかないと。反省反省。

ただメイドの方は気にしてないのか、小さく笑うと一礼する。

「自己紹介が遅れました。私は本日より懲罰メイドに追加補充された、行船三美ゆきかみ みつみと申します」

へえ……。綺麗な人だな。

明るい茶髪をした彼女は、どこか儂げな印象を与えつつも、強いという印象を与えている。

間違いなく鍛えている。動きにもムラやアラがない。それにおそらく、星辰奏者だろう。

っと。値踏みみたいなのはしない方がいいな。

「ありがとうございます。でも、俺も一応鍛えているので」

「存じ上げていますが、私達はメイド、それも懲罰で派遣された身です。こき使ってくれるぐらいでちようどいいですから」

と、言われてもな。

確かに相応にハードな業務であるべきだが、しかしある意味で温情でもあるしな。そこまで深く考える必要はないんだが。

それに――

「どっちかというとメイドはサブで、本筋は警護なんですから。俺、一応かなり強い方ですよ?」

――そういうことなわけだからなあ。

「……そう、ですね。では、私達は三希様と五郎様の方を護衛して――」と、素直に受け取った三美さんは振り返る。

そして俺も視線を向けると、そこには思った以上に人が多かった。考えてみれば、メイドの人達も今回かなり多かったからな。

と、そこで執事服を着た男の方が振り返る。

……これまた、どこかすすけたと言うか虚ろな雰囲気があるな。最も態度はしつかりしているんだが、どこか虚無を感じるといえるかなんというか。

「三美は反対側のカバーを頼む。君なら一人で行けるだろうが」

「かしこまりました」

三美さんは素直に指示を受けるが、これはこれは。

「……どうなさいましたか?」

俺の苦笑に気づいた三美さんに、肩をすくめて答えるしかないな、これは。

「いや、俺も裏の方で釣りする気だったんで」

人が多すぎると分母の問題があるから、あまりいなさそうなところで釣りをするつもりだったんだ。

そのちよつとした運命の悪戯に、三美さんも小さく苦笑していた。

「……では、和地様の釣りの腕を見学させていただきませう」
「……久しぶりなんだけど、これは釣れないと恥ずかしい流れに！」

カズヒSide

このいい機会。久しぶりに満足いくまで釣るとしますか。

私はこれでも、卵かけご飯の次に刺身が好物。ストリートチルドレン時代は禄に食えてなかったし、ここで釣りに釣って食べまくるぐらいでいきましょう。

昆布締めやしょうゆ漬けにするというのもオツね。ふふふ、皮算用だけど釣りがいがあるわ！

「……かなり楽しそうね」

「それはもう。趣味と実益が揃ったイベントですから」

たまたまポイントが被ったりアス部長にそう答えながら、私は既に釣り糸を垂らす。

魔術的な調整も行いつつ、いくつかのパターンを切り分けて……

ヒット！

「獲ったぞ獲物おっ!!」

よし！ 刺身でいける魚ゲット！

一瞬でメた上で、素早く魔術で保護しながら氷に沈める。

ふっふっふ。この調子で釣りまくってくれる！

「楽しそうで何よりだわ。さて、私も……それっ！」

部長も釣りを始め、三十分もする頃には少しは釣れている。

そこで私もだいぶ落ち着いたので、少し世間話をする事になった。

「……はあ。ヴァーリ・ルシファーが最上級悪魔に、ですか？」

「ええ。と言っても、当人も一度は断ったけど押し切られた形よ？」

即座に部長がそれなりに捕捉してくれるけど、冥界政府もよくもまあ。

仮にも和平という大きな出来事にテロリストを手引きした奴なんだけど。……まあ、かのデイハウザー・ベリアルが罪王最有力候補になっっているし今更かしら。

この辺り、やっぱり人間界とノリというか価値観がずれてるわね。秘密にする方針は最適というほかないわ。すみ分けは割と大事だもの。

「因みにアザゼルが強い要望を残していたそうよ？」

「あの親バカ先生は。……まあ、処罰は与えているしその上でなら引くべきですかね」

ため息をついていると、リアスはこちらをまじまじ見ると苦笑する。

「……でも、別に私に敬語を使わなくてもいいんじゃないかしら？」

ほら、実質的には貴方の方が年上でしよう？」

ああ、そういえば。

実質的には私は四十手前と言ってもいい。それに立ち位置的にも、過度にへりくだる必要はない。

と、言われてもねえ。

「もう慣れてますからね。それに、年功序列っていうのはそれに伴うノウハウや技量があつてこそでしよう？」

「なら問題なさそうだけど？」

……言い方を間違えたわね。

自分で言うのもなんだけど、真つ向勝負なら高確率で競り勝てるわね。

私は少し考える。

冷静に考えれば、プライベートなら一つ二つの歳の差で必ずしも敬語は使わない。それはそうだ。

なら、いいか。

「なら、今後は少しずつならしていくわ。良いかしら、リアス」
「ええ、これからはそつちの方でよろしく……つと」

あら、リアスもまた釣れたわね。

そして私も更に釣り、話はまた移り変わっていく。

「そういえば、国際レーティングゲームもだいぶ形になっているわね。
リアスはやっぱり参加？」

「もちろんよー。こんな機会は中々ないし、私達がどこまで強くなっ
たのかを確かめる、いい機会だわ」
なるほど。

そしてアザゼル杯と呼ばれるだろうその試合では、信じられないよ
うな優勝賞品が出る。

……そうね。少し聞いてみるべきかしら。

「リアス、その試合で私が参加して……優勝は狙えると思う？」

その質問に、リアスは少し目を丸くした。

まあ、私が競技試合に勢いよく参加するというのはイメージがかみ
合わないでしょうね。自分でもそう思う。

ただリアスはすぐに考えこむと……なんか凄く真剣になったわね。

「個人に限定すれば凄まじい強敵ね。そもそも神や龍に対する特攻を
持ち、短期決戦に特化した禁手を保有。ルール次第では帝釈天の喉元
を食い破れるかもしれないわ」

「想像以上に高評価をしてくれてありがとう。自分のことながら大概
よね」

まあ実際、事実なんだけど。

並みいる強敵を倒すべく、私もかなりの鍛え方をしてきたわけだ。
その結果として、対神や対龍の手段すら獲得。ロキやクロウ・クル
ワツハ相手に単独での戦闘もできた。

更にそこで禁手もある。短期決戦に特化した銀弾エンド・ザ・リボルバーの決戦兵装は、そ
れだけで魔王にすら届くと自負している。

とはいえ、リアスはすぐに表情を引き締める。

「でも、相手はチームで挑んでくる。相応の戦力を用意しなければ圧
殺されるし、ルール次第では絡め取ることは可能だわ」

「……ですよね」

敬語が戻ったけど、実際そこもそうだった。

レーティングゲームは集団による競技試合。ルールはきちんと守る必要がある。

転じて私は暗部部隊。ルール無用の殺し合いに長けており、そういう意味では不利ともいえる。

競技試合と殺し合いの強さは別物といえるもの。この辺りを考えると、色々と考えた方がいいわね。

「でも意外ね。参加したいの？」

まあ、リアスからすればそう思うわね。私はそういうことを言うのが意外と思われるような生き方をしているわけだし。

ただ、ね。

「……復興支援金に優勝賞品ぶっこみたいのよ。ほら、私は色々やらかしているから、そういうことは隙あらばしていく方がいいでしょうし」

「うるさい人が出てくるわよ？ 売名行為とか」

「地獄への道は善意で舗装されている。善意は使わねば地獄に落ちる時に無駄に落ちて敷石になるだけですから」

私はそう返すと、同時に獲物がかかったことを察知する。

「ふっ。釣って極楽食って供養とは言わないから、精々恨むといいわ！」

さあ、私の刺身になるといい！

割と釣れるな。

これは刺身以外も考えるべきだろう。焼き魚もよし、煮つけもよし。洋風でムニエルやアクアパッツアもいいだろう。天ぷら、フライ、南蛮漬け……夢が広がる。むしろアニルもいるし、燻製という手法もよだれが出そうだ。

よし、この調子で釣りまくるか。

「……凄く釣れていますね。ここまで釣りがお上手でしたか」

三美さんは感心してくれているけど、そういうわけでもない。

下手の横好きでもないが、そこまでずば抜けた技量があるわけでもない。基本的には趣味の範疇。特技というほどでもないわけだ。

「場所と時期がいいんでしょね。普段ならここまで釣れませんよ」

俺はそう返すと、次の仕掛けを考えながら小さく微笑む。

「まあクックスもいますし。皆さんの分も釣って見せるぐらいの勢いでいきますかね」

「……ご配慮、ありがとうございます」

冗談交じりで言うのと、クスリと笑顔で返される。

とはいえ、世間話はしたいところだな。

「そういえば、兵藤邸こっちに派遣されるってことは、罪状はそこまで重くならないかね？ 差し支えなければ伺っても？」

うっかり地雷を踏みつけるわけにもいかなからな。後でさわりぐらいは把握しておくべきだと思っていた。

こんな形で縁ができているし、いつそのこと自発的に聞いてみるべきだろう。今後の関係性は考えないといけないしな。

そして三美さんは、特になんてことがないような苦笑を浮かべている。

「たいしたことではございません。かつての主がゲームの不正に関与していた、それだけのことです」

「……なるほど」

かなり根が深い問題だったらしいからな、ゲームの不正。

相当金が動いていたらしいし、スキャンダル連続でゲームのランキングが一気に変動しているとも言われている。ごっそりとランキ

ング上位がいなくなり、繰り上がり昇格が進んでたとか。

「とはいえ、主は利権と引き換えに作戦内容を相手に伝えておくという手法でして、リアリティを重視して私達には言わなかったこともあります。おかげでこちらも被害者に近いとみなされましたが、その……」

少し遠い目になりかけているので、俺から言った方がいいだろう。

「外聞が悪すぎて、将来がまずかったと」

「……はい。流石にこれからの人生も長いので困っていたのですが、そこで今回の選定に適い、こうしてメイドを務めさせていただいております」

なるほどなるほど。

やはりまあ、懲罰メイドもそういう事だ。

苦勞しているという事だろう。なら、俺が言うべきことは一つだな。

「ま、当面は安心してくれていいですよ」

そう、これだけは確約できる。

「仕事はきついしトラブルはやってくるでしょうが、使い潰すようなことはしません。リアス部長はそういう人ですし、俺達もそんなことは望みませんから」

そう、そこに関しては胸を張って断言できる。

俺達はそういう生き方をしているし、その為に頑張っている。カズヒだつて、好き好んでそんな真似をする奴では断じてない。

だからまあ、その辺りは気楽になつていた欲しいものだ。

それに対して、三美さんは笑顔を浮かべてくれる。

「……そうですね。そこに関してはありがたいと思います」
……。

その表情が、どこかかつてのインガ姉ちゃんを思わせる。

これは、色々とある人なんだろうな。

新期来訪編 第十二話 度の超えた金とけた違いのお偉いさんはメンタル壊れる

和地 Side

冬ももうすぐ終わる頃、俺達には大きなイベントがやってきた。

……兵藤一誠の上級悪魔昇格式典である。

異例と言えば異例中の異例だ。イツセーは悪魔になってからまだ一年に足りていない。転生悪魔制度が始まった時期に転生してなお、下級悪魔止まりな者だっているのだから、この出世は極めて希少と言ってもいい。

だが同時に、それだけのことをしている。魔王血族、神滅具保有者、伝説の邪龍相手に大立ち回りをし、その殆どで勝利に多大な貢献をした。更には悪神ロキという神の中でも名実ともに上澄みの存在を、いくつもの要素が絡んだとはいえ打倒したこともある。更には極晃奏者ミザリ・ルシファア討伐において、俺の衛奏に匹敵する趨勢を傾ける一手を成し遂げたのだ。

ヴァーリ・ルシファアも最上級悪魔になるそうだが、ぶつちやけイツセーが最上級悪魔に就任してもおかしくない。流石にそこまでの前例は出さずに済ませるに越したことはないので、こうして段階を置いた形だ。

そんなわけで俺達は式典会場に向かっているが――

「……はあ」

――俺は別件でため息をつきたくなっていた。

「すまんイツセー。心労と緊張感で吐きたくなってきた」

「俺より緊張と心労を背負うなよ。別件だけだ」

イツセーにも言われるが、かなり困ったというかなんというかだ。

俺はそんな感情のまま、何度目か分からない金額を確認する。

……かなりギリギリだが、一千億に届いている。ドルでなくて円で
はあるが、それにしたって異常の極みだ。

「大丈夫かい？ いきなりこの金額が手元に入るとか、色々大変だろ
う？」

心配してくれる五郎さんには感謝しかない。この金額は金銭感覚
がぶっ壊れる。

そんなげんなり気味の俺は、その元凶ともいえるプログライズキー
を起動させる。

『SAVE STAR!』

そんな猟犬のライダモデルが組み込まれたプログライズキーの名
はサルヴェイテイニングハウンドプログライズキー。

このプログライズキーは、極晃星^{スフィア}のある性質が利用されている。

極晃星は規格外の星辰光であり、到達にはいくつもの条件があるこ
とは知っての通り。そしてもう一つの特性がある。

それは、到達するのと比較した場合より簡単に接続することができ
るという点。具体的には、到達と同種の思いを他者と共有するなどす
れば、接続することができるのだ。

もちろんそれも楽ではない。だが星とはすなわち祈る物。極晃星
は祈りが届けば無条件で力を貸してしまいう危険性がある。

初代極晃である弄奏は「失う先に見つけた勝利という光。それに全
てを賭ける思い」が引き金になる。最もミザリにしろカズヒにしろ、
かなりアレなので同種の想いを抱くのは困難だろう。

だが衛奏の場合は「極晃星という力から守ろうとする願い」である
為、極晃星が脅威として現出すればカウンターとして眷属が多数出て
くる余地がある。とはいえ、他の条件もあるので絶対ではない。

当然だが、新しい極晃星が出てくる可能性はある。そしてどの勢力
も、手に入れられれば凄まじい恩恵があるが、性質上やらかす危険性
がありすぎる上にやらかした場合の影響力がデカイから、危険だとも
分かっている。喉から手が出るほど欲しいが、同時にとても恐ろしい
代物と分かっているのだ。

結論として、どの勢力も「対極晁装備」はいろんな意味でほしい。結論として、衛奏を人為的に利用できる状態を整えたいのだ。俺がすぐに到着するかどうか分からないし、眷属が偶然できる可能性に頼って被害が増えるのも嫌だろうし。

そこでリーネスが開発したのがコレ。これを使って実装すれば、ほぼ確実に極晁相手に衛奏眷属となれる対極晁星用プログライズキーだ。

技術限界もあつて焼き切れるから使い捨てだが、俺が協力すれば大量生産の余地がある。その上で買ったかれたり酷使されるのを避ける為、一つ一つに対してライセンス生産かつ年間契約にしている。それはある意味で、各勢力に対するある種の権勢も兼ねての動きだった。

……が、ミザリがやりすぎていたことから世界各国各勢力はこぞつて契約。結果として、俺とリーネスの資産は一千億をギリで超えた。「ふ、ふふふ……。これはもう、専用の宇宙ステーションと巨大潜水艦でも作らないと……」

「あ、その時は俺も資金出すから」

「リーネスも和地も落ち着いて？ 無理に使おうとしないでもいいよ？」

リーネスと俺がすすけた表情で話を勧めようとすると、お袋が慌てて止めてくれた。

あ、これヤバい。金が多すぎると返って苦労することも多いだろう。

「……前向きに考えましょう。女性を大量に抱えるのなら、それなりの資産は必須よ。石油王とかがハーレム作れるのと同じ理屈よ」

カズヒ、そういう次元の金額じゃないだろこれ。

「そこに誓いの人間力と、鍛え上げられた体力もあつて完璧状態！

くー！ そんな和地に痺れて憧れるー!!」

「待ってリヴァア！ それだと和地が悪党になるからー！」

ノリノリのリヴァア先生を鶴羽が抑えてくれるけど、もう困ったもんだなオイ。

いやあ、本当に困ったもんだ。俺の胃は割と痛い。

「……リアス部長お。ノーベル賞じみたものを作って、お金を使うところを作りたいんですけど。ほら、お金は使って回さないといけないでしょ?」

「とりあえず、グレイファイアにも話しておくから水を飲みなさい。顔色が悪いわよ?」

リアス部長が気を回してくれているけど、イヤホンとこれ……どうしよ?」

ちよつと冗談抜きで人生観狂うぞ。それに経済的にもある程度は使っておかないと。第一俺の主義信条から言っても、ここまで金があるのなら相当数は義援金とかに回さなければ。

と、とりあえずこれは……あれだ!

「そっくだイツセー! 共同出資だ!」

俺は閃いたぞ!

「俺達で冥界の孤児院とかに、国際レーティングゲームのチケットを贈るんだ! お前子供のヒーローなんだし、そういうチャリティー事業にも手を出すべきだ!!」

「そ、そうだな! 俺もおっぱいドラゴンの興行収入がちよつと多いし、人生観狂いそうだったし!」

「……そういう事なら、あとでお父様にも話しておくべきね。グレイファイアもそこに文句は言わないでしょう」

俺達が盛り上がっていると、リアス部長もそこに頷いてくれている。

……と、そろそろ着くな。

ドレスはあまり気慣れていないので、タキシードを着させてもらうことにした。

とはいえこれ、オーダーメイドね。流石はグレモリー宗家の調達というべきかしら。

白というよりは白銀。豪華な装飾はなく、シンプルにまとめられている。その上で高級感がしつかりとあり、王侯貴族の隣にいても違和感がないようにできている。

「……ありがとう、リアス。これ、魔術的に保管しておくわ」

「ええ、次の機会にはドレスを用立てるわ」

そう微笑みと共に返されると、流石に断れないわね。

まあ、当面の礼服はこれで十分。とはいえ、今後和地と一緒にパーティに参加するかもしれないし。ドレスもいずれは用立ててもらわうことになりそうだわ。

まあ、今回はあくまで参加するだけ。主役はイツセーに主のリアスとなるわけですけど。

「とはいえ、教会に属する暗部部隊だった私が悪魔の上級昇格式典に傘下とはね。和平が結ばれるまでは流石に想像できなかつたわ」

「そうね。私も、コカビエルの件で貴方達と顔を合わせた時は考えもしなかつた」

お互いに苦笑を浮かべるが、しかしこれは意外というしかないだろう。

「……こういうのを合縁奇縁と日本では言うのだろうか。とはいえ、私もタキシードを用立ててもらわうべきだったかもね」

「ゼノヴィア先輩なら確かに似合いそうですね」

「確かに、男装が似合うタイプよね」

ゼノヴィアが私を羨ましそうに見ている中、ルーシアや鶴羽が茶化

す光景。

それを見ると、私は少しおかしくなって笑ってしまふ。

ええ、この光景は和平があつてこそそのもの。そして、私はそれを悪くは思つてない。

その中に私が入れるというこの奇跡に、私は感謝しよう。

納得できない者はいるだろう。私に敵意を持つ者もいるだろう。

それはもう仕方がないし、自業自得というほかない。

だからこそ、これからも私は私でい続けよう。

邪悪の宿敵、正義を奉じる必要悪。誰かの勝利笑顔を守る為に、命を懸

ける悪祓銀弾。シルバールレット 旧済銀神エルダー・ゴッドを導いた、瞼の裏の悪敵銀神ノーデンス。

だけどもあ、今日に限つては一人の客として祝福しましょう。

歴代最弱から歴代最優。そして前代未聞を形にし続けた赤龍帝。

誇りなさい、？誠の赤龍帝ウエルシユ・ドラゴン。兵藤一誠。

今この式典こそ、貴方が形にして見せた、一つの勝利の結果でしよう。

祐斗Side

式典は問題が起こることなく終わり、僕達はこの後のパーティまで小休止となつていた。

途中で何人か客人が来訪し、その中にはフェニックス夫人やヴェネラナ様も。そこでイツセー君はトレードを行い、アジアさんにゼノヴィア、レイヴェルさんを己の眷属とする。

途中でフェニックス家夫人に耳打ちされていたけど、まあ今後を踏

まえると婚姻関係か、将来的な眷属としての扱いだらう。

そして僕たちもそろそろパーティーに行こうとした、その時だった。

「失礼するよ。赤龍帝は此処かな？」

そう告げながら入ってくるのは、僕らより年下に見える少年。

……その時、僕達は戦慄を覚えた。

今までたくさんの敵と戦ってきた。当然、強者とされる者も数多い。

そんな僕達だからこそ分かる。そんな僕達が動けない。

そんな、トライヘキサやグレートレットとも質が違う、強大な存在が目の中の人物だ。

戦闘態勢や警戒すら取れない。畏怖の感情があまりに高まる。

間違いない。目の前の人物は、グレートレットやトライヘキサに通用する。勝つことはできなくとも、単独で戦えるだろう存在だ。

そんな存在に僕らは、間違いなく気圧され――

「失礼ですが、どこかの神話の神でおられますか？」

「今日は祝いの場ですので、悪ふざけはおやめください」

――そんな中でも、彼らは違った。

九成君とカズヒは、素早く前に出るとカバーの大勢に入る。

特に状況が掴めていない、イツセイ君のご両親は確実にカバーできる位置だ。九成君がガードしながら下がらせ、カズヒが迎撃しながら攻撃できる。

……というより、既にショットライザーを装着してプログライザーキーも装填している。カズヒに至っては瞬時にアヴェンジングシールドを装填済みだ。

態度こそにこやかだけど、いざとなったら本気で戦闘ができる状態でもある。

こういう時、この二人は本当にブレないから頼もしい。

「……あ、よければお菓子食べます？ 新規事業のおっぱいドラゴン牛乳で作った牛乳プリンですよ？」

……そんな空気が全部吹き飛んだね。

青い髪を綺麗にまとめてドレス姿だったリヴァさんが、そんなこと

を言いながらお菓子の入った箱を少年に差し出している。

なんとという胆力だ。もしくは仕掛けないと見抜いたのか？ どちらにしても、主神の娘は伊達ではない……いや、リヴァさんが特殊なだけかな？

「……ふふっ。オーデインは子供に恵まれているね。それにスワイアデイフエンダー極晃衛奏者も卓越した胆力だ。もちろん、他の者も十分すぎるほどだけどね」

そう返す少年は、その絶大な気配を霧散させる。

思わず僕らが息を吐く中、カズヒはジト目をリヴァに向ける。

「……ナイスフォローというべきか、ハリセンで叩くべきか微妙に悩むわね」

「まあまあボス。連れてきた人が人なんだし、ここで荒事はしないっしょお♪」

呆れ半分のカズヒに、リヴァさんは笑顔でそういうと外にウインクをして見せる。

同時に、遅れて入ってきた人がアジユカ様であることに安堵する。

……アジユカ様が客人として連れてきたのか。なら、あくまでこれは悪戯か試しだろう。今の悪魔のトップがいる中であまり無体なことをするわけがないし、する人物を前置きもなく連れてこないだろう。

とはいえ、いったいこの少年は？

僕達の疑問を悟っているのか、アジユカ様はその少年に手を向けると、僕達に見渡した。

「紹介しよう。こちらはインドの破壊神シヴァ様だ。現状のインド神話を束ねておられる方だよ」

その名前を聞いて、僕達は改めて戦慄する。

インドの破壊神、シヴァ。龍神格や極晃星を除けば、最強といえるだろう存在。

あの帝釈天が目の敵にしているだろう、超上の極み。トライヘキサが封じられ、更に極晃星に衛奏という枷が欠けられた以上、常態では彼がこの世界で頂点に立つ。まごうことなく頂点に立てる存在。

……衛奏であつても、彼には勝てない。いや、衛奏だからこそ彼には勝てない。

極晃という概念を、世界に過ぎた力とみなし、だからこそそれに対する枷となつた衛奏。それは極晃にのみ通用するからこそ、極晃全てを抑え込める枷になる。ゆえに、シヴァ神には決して通用しない。

つまり、単純な戦闘能力なら彼はアジュカ様すら超える最強だ。僕達が総力を挙げてなお、彼は全てを薙ぎ払るだけの力を持つ。

その上で――

「……とりあえず、アザゼル先生みたいな悪ふざけはやめてもらえませんか？　ここ祝いの場なんで」

「今後は同様の事態に備え、相打ち後用の遺書を携帯することにします。お気を付けを」

――この二人、ブレないなあっ!?

新时期来訪編 第十三話 責任

祐斗Side

インドの破壊神、シヴァ。

今のこの世界においてある種の頂点。そんな人物までもが挨拶に来るとは、イツセー君も凄まじいことになっている。

更にアスラ神族の王子であるマハーバリ氏まで挨拶に来ており、イツセー君のことを気に入っているようだ。

最も――

「どうだろう赤龍帝。そして比翼の極スライア・ディフェンダー晁衛奏者。僕の元に来ないかい？」

――イツセー君達をスカウトするとは思ってなかったけどね。

「……私は一応、教会に属する者ですが」

即座にカズヒがそう応対するけど、シヴァ神は微笑を崩さない。

「シヴァ様。確かに私が用意できるものを用意するとは言いました
が、それは流石に」

アジユカ様も苦言を呈しているが、シヴァ神は冗談は言っていない
ようだけど真意を悟らせない態度のままだ。

「別に三大勢力から抜けるとは言っていないよ。ただ、インドラも裏で
色々動いているからね。彼が動くような時は、僕と共に戦ってくれ
ないかってだけさ」

……インドラ、か。

またの名を帝釈天。彼は英雄派首魁である曹操の存在を知ってい
ながら、あえて隠していた節がある。

その後もイツセー君達が曹操を追い込んだのをいいことに、彼を捕
縛して冥府に送り付けた。それらは奪い取った神滅具を保有する為
の言い訳だったが、曹操達が帰還してからも自分の監視下に置く形で

動いている。D×Dの準メンバーにすることである程度の折り合いはつけているが、やはり油断できない。

元々インドラはシヴァに敵意を見せており、アザゼル先生も暗躍の根幹はそれだと見当をつけていた。

なら当然、シヴァ神が警戒して備えるのは当然。

帝釈天はシヴァ神でも、確勝ができるような相手ではない。さらに、人が振るえる最強の神殺したる聖槍の担い手たる曹操がいる。対抗馬として曹操を打倒したイツセー君を求めめるのもある意味で当然か。

更に今後の世界において、決して無視できないだろう極晁星。それに対して圧倒的な対応力を誇る極晁衛奏者。九成君とカズヒを引きこもうとするのも理解はできる。

ただ、やはり僕ら如きでは底が読めない。そこがどうしても、こういうところでは不気味に思ってしまう。

「……そう言われましたね。会ったばかりの人物、それもあんな悪戯をされた直後にスカウトをされても即答はできませんよ?」

九成君もそう返すけど、流石に少し警戒しているようだ。

相手は今の世界におけるある種の頂点。あまり事を荒立てるわけにもいかないし、僕らもうかつに口がはさめない。

とはいえ、これはアザゼル先生がいないとイツセー君にも――

「……貴方は、帝釈天と戦争がしたいんですか?」

―その時、イツセー君はシヴァ様にそう尋ねる。

彼なりに一生懸命考えた。その上で、尋ねなければならぬ質問だと思っただろう。

彼も今や上級悪魔。どうやら、僕達が思いもよらぬところで成長したようだ。

そしてシヴァ様は、その質問に微笑んだ。

「いい質問だ。悪くはないが、ドロドロの大戦争をしようとは思わない。……うん、もっと面白い趣向で済ませたいところだと言っておうか」

けむに巻いているように見えるが、しかし嘘は言っていないように

も思える。

数千年を生きる神に対して、僕らがそこを見抜こうというのも愚かな話だろう。

そんなシヴァさまは、イツセー君を見ながら人差し指を立てる。

「……一つ、？誠の赤龍帝に明言しよう。これから、君や極晃衛奏者が相対する者は、敵味方に関わらず神クラスが多くなるだろう。それだけの存在であり、それだけのことをしてきたことは認識した方がいい」

そう語るシヴァ神の目は、いったい何を見ているのか。

「少なくとも、帝釈天達は既に「次」を見ている。そしてそれを見ている者は君達を無視できない。そういう存在になってしまっているんだよ」

そう告げるシヴァ様は、その上でイツセー君を見据えている。

「……おそらくだけど、今の君は強者つわものが好きになっているだろう。女体を欲し、平和を望むのは真実だろう。しかし、強き意思をもって強くなってきた者達に触れ、君はそこに惹かれていると思っっている」

その指摘に、イツセー君は答えない。

それを気にすることなく、彼はイツセー君の背中をぼんぼんと叩く。

「そしてそろそろ始まる国際レーティングゲーム。僕も運営として参加するアザゼル杯カップ。指をくわえて見ていられるかな？」

シヴァ神には困ったものだ、俺は内心でため息をついた。

悪戯好きな神様には苦勞する。振り回される方はたまったものじゃないのに、振り回されるほかない。厄介なことだ。

パーティにあまりのめりこめなかつたのは、それが理由だろう。

……アザゼル杯か。

国際レーティングゲーム。あまねく勢力から様々な強者が参戦する、世界規模のレーティングゲーム。

列車の窓から景色を見つつ、俺はそれに思いをはせる。

好き好んで殺し合いをする趣味はない。権力にさほど興味はないし、金が多すぎることに困っている身としては優勝賞品をもってして何かを望む必要性も薄い。……まず自前の金でどうにかできるかを重視するべきだしな。

ただ同時に、俺は一つの懸念を持っている。

極^{スフィア}晃星は、今の世界には過ぎた力だ。だからこそ俺は衛奏を手にしたし、その判断は今でも変わってない。

惑星環境をたつた二人の祈りで塗り替える。言葉にすれば素晴らしいようにも聞こえるが、つまり極々僅かな人間の願いで世界が書き換えられることを意味している。

まして出力が天元突破すれば、理論上は太陽系を吹き飛ばすことが可能。そんな力、今の地球には過ぎた力にもほどがある。だからこそ、俺はカズヒと衛奏に至れたんだ。

だがそれは、もし極晃星でなければどうにもできない力を相手にした場合、なすすべもなく蹂躪される恐れがあることを意味している。

ないとは言い切れない。あまりに広すぎるこの宇宙において、俺達はあるに小さすぎる空間しか見ていない。宇宙現象ともなればそれこそ太陽系を吹き飛ばす事態が起こりえるだろうし、そう考えれば惑星環境の改変なんて小さな規模だ。

……だからこそ、責任は取らなければならない。

俺は自分の意思で、極晃を否定した。ならその責任は取らないといけない。

取れるだろうか。そう自問する。
取りたいと思う。そう回答する。

なら、せめて無理だと確信できるまではやってみよう。
そう決意し、俺は振り返る。

「……いい目をしてるわね。決意を決めた人の目だわ」

そこに立っていたカズヒは、微笑みながら拳を伸ばす。

「私は私で参戦するわ。和地はどうするの?」

カズヒはアザゼル杯に参加するのか。

その理由はあえて問わない。ただ、彼女がそういつた催しごとに自ら参加することに、どこか嬉しくなっている自分がいる。

だから、素直に答えることにする。

「俺も俺で参戦するさ。……うん、やってみたいことが増えた」

ちよつと不敵な笑みになつてるよな、俺も。

「俺は強くなりたいし、強さをきちんと見せる必要がある。……
極晃星^{スファイア}という可能性を閉ざした者として、それが無くても世界は進めるのだと、示す責任があるからな」

そう、それは俺が生涯かけて成すべきことだ。

極晃星という力。その本質を閉ざす衛奏を紡いだ者として、責任という物がある。

俺はそれを成す為に参加する。俺自身が世界に責任を負える強さを得る為に。そして皆に、世界は極晃が無くてもやっていけるのだと、ほかならぬ俺が示す為に

そして、俺にはもう一つ理由がある。

「……カズヒ。俺は俺のチームで参戦する。カズヒのチームに挑戦する」

拳を突き付け、俺は最愛の伴侶に宣言する。

「カズヒの全力とぶつかり合いたい。惚れた女に並び立てる、そんな男でいたいからな」

俺のそんな言葉に、カズヒも小さく頷いた。

「そうね。そういえば、貴方とはスパarring程度しかしてなかったもの」

だろう？

どうせなら、思う存分大舞台でやってみたい。

老若男女が見ている前で、俺はカズヒと向き合いたい。

心の底から、俺がカズヒを愛していると、愛しているから並び立ちたいと、声高らかに宣言したい。

だからこそ――

「その時は、手加減無用でよろしく頼む」

「遠慮はしないわ、覚悟しなさい？」

――拳を軽くぶつけ合わせ、俺達は激突を宣言した。

新时期来訪編 第十四話 卒業式。そして新たななる――

和地Side

卒業式の日。俺は校舎裏で緋音さんに電話をしていた。

聖杯で可能な限り回復させるだけでなく、死徒化まで併用することで何とか自我を取り戻した緋音さんだが、元々異形に対する抵抗を消しきれなかったから記憶の方を消していた人だ。

最終的には「そこまでしたなら責任も持ちなさい」と俺達で面倒を見ることになったが、それまでに慣れが必要だと判断されている。

……兵藤邸はメンバーの異形率が半端ないからな。記憶を消した数年間が抵抗を和らげ、死徒化がショック療法としても機能した。それでも抵抗が全くないわけではない。

だからこそ、改めて異形の側や異能の側から人間と異形についての関係性を見つめ直している。それがあれば、ある程度は行けるだろうとカウンセラーからも判断されている。

「……それじゃあ、もうすぐ退院できるのか？」
『うん。まだ異形には慣れないけど……良い人達だね』

その返答に、俺はホツとしつつも安堵する。

緋音さんならイツセー達とも良い付き合いができるとは思っている。ただしザイアで刻み込まれた異形Ⅱ邪悪という図式が邪魔をしている形だ。

それを分かっているから、緋音さんは記憶消去を選んだ。それはつまり、理性でそれが間違いだと分かっても感情が納得できないという事。知識としては理解はできているからこそ難儀な問題だ。

それが純人間の組織にあんなことになり、異形に救われる形で異形になった。正直精神面においては不安すぎたが、結果的に上手くハマってくれたようで良かった良かった。数年間の記憶を消した日々

がインターバルにもなったわけだ。

「それで、退院後はそのままか？」

『どう……だろ？ 少しだけ……ならしてからの方が、いいかな？』
まあ確かに。

刷り込み的なものはだいぶ薄くなっているが、いきなり異形との生活は心労が酷いだろう。兵藤邸は純粋な人間が殆どいないからな。割ときついか。

となると、ある程度のお試し期間がいるか。その辺りも考えておかないと進められるものも進められないな。

ただまあ、思ったよりスムーズに進んでいるようで何よりだ。

「緋音さんが、前向きに異形になれてくれて良かったよ。あいつら基本的に、困ったところはあっても良い奴だからさ」

だから、それはホツとしている。

……あれ？ 返事が返ってこない？

『だ……だって、和ちゃんも異形に……なってるし』
………。

ああ、なるほど。

そういえば俺との再会から俺が墮天使化したことについて、インターバルあったな。

あれが効果的ってことか。そつかそつか。なるほど。

「っしやあー！」

『何を……大歓声してるの!?!』

いや、だつてさあ？

「愛の力が心の縛りを解き放つとか、テンション上げずにどうしろと？」

いやあく。モテる男はつらいなく。

そつかそつかー。俺つてば、俺に惚れることで潜在意識レベルの苦手すら克服に尽力しちゃうかく。無自覚に人の心をときはなっちゃうかく。

よっし！ この調子で日々成長！ カズヒにもインガ姉ちゃんにも春つちにもリヴァ先生にもベルナにも鶴羽にも、誰に対しても胸を

張れるように頑張るか！

『もう、その辺に……して。ほら、そろそろ学校も……始まるでしょ？』

うん。これは顔が赤くなっている緋音さんの雰囲気分かる分かる。

実際そろそろ教室に戻った方がいいしな。とりあえずこの辺にしておくか。

「確かに、今日は卒業式だしな。先輩方に悪いし準備をしておくよ」

……ここに来てからは半年そこら。だが濃密な時間だった。なんだろうか、感慨深く感じてしまう日になったもんだ。

カズヒ Side

式直前で体育館に移動する前に、念の為に用を足しておいた。そして手を洗って改めて向かえば、見知った顔を見つける。

「……サイラオーグ・バアル？」

「カズヒ・シチャースチエか。リアス達の節目なので祝いにな」
まあ、親戚ではあるからいいのかしら。

しかし彼までくるとなると、これは相当のメンツがきそうね。

……アジュカ・ベルゼブ様まで来たりするのかしら。いえ、流石に彼は来ないでしょう。仕事忙しでしょうし。

「ちようどいい。既に兵藤一誠にも言ったが、お前にも伝えておこう」
そう前置きすると、サイラオーグ・バアルは強い意志を込めた目で私を見る。

「国際レーティングゲーム大会。俺も出る。お前達も出るといういい何も取り繕わない、シンプルな宣言。」

彼なら出るとは思っていたけれど、まさかこんなことを言うとなね。

「こんな機会は滅多にない。神々も出るだろうからこそ、その力をぶつけ磨くいい機会だろう。何より、お前のような強者がぶつかり合つてこそこの催しだろう」

「安心しなさい。一応出るつもりではあるわ」

私はそれを素直に返すと、その上で小さく微笑んで見せる。

「言っておくけど、優勝を狙っているから。私に挑むのならそれぐらいする気概で来ることね」

「それはいい。あのヴァーリ・ルシファーすら下して見せたお前となら、滾る戦いができそうだな」

なるほどね。

まあ、別に問題はないでしょう。

お祭り騒ぎは楽しまないと。同じ阿保なら踊らにや損と。

だから私も言うべきね。

「お互い楽しんでいきましょう。バカ騒ぎは笑って楽しんでこそよ？」

「……面白い。なら、勝利の大笑を上げるとするさ」

そう言葉を交わし合い、私は先に体育館に向かう。

そして少ししてから始まった卒業式。

予想通りとすべきかしら。かなりのメンツが集まっていた。

グレモリー夫妻、バラキエルさんといった卒業生の親族が、泣いたり笑ったりとしている。

そのこのグレイフィアさんの姿もあって、少しほっとした。彼女は最近姿を現してなかったから、引き籠つてないのは良い事だもの。真剣な表情なのがちよつと気にはなつたけれど。

だけど、私はとても感慨深いものを感じていた。

……私も来年、卒業式に出るのだろう。

かつて私は出れなかった。最後の月に誠には行動を開始し、私は

それから瞼の裏の誓いが為に全てを賭けた。

それでも結局、たくさんの人達を道連れにして破滅した。私の業は背負うしかなく、だから卒業式なんて行けなかった。

私は来年、そこに居ていいのだろうか。そう思う。

そこに居てもいいだろうと、せめて容認されるような生き方をしよう。そう願う。

だから、私は卒業証書を受け取る彼らの姿を目に焼き付ける。

来年はそこに私がいる。それを、成し遂げることを決意する為にも。

「……………ぐずうつ！ ひい……………つぐ……！」

少し離れたところで感極まりまくっている、鶴羽にはあとでティツシユを渡しに行こう。

和地 Side

卒業式を終え、卒業証書を持ったりアス部長と朱乃さんは門から外

に出た。

それを出迎えた俺たちは、三人の決意を見届ける。

「……リアス姉さん」

「リアス姉様……」

「り、リアスお姉ちゃん！」

そんな風に部長を呼ぶのは、木場に小猫にギヤスパー。

初期からリアス・グレモリー眷属であり、リアス部長から家族として接されてきた三人。

少し前から二人以外のメンバーは相談されており、俺達は賛成している。

……あ、リアス部長感激している。

「ふふ、もう一度呼んで頂戴？」

「あまりからかわないように。これでだいぶ緊張してるのよ？」

ちよつとはしゃいでいるリアス部長をカズヒがたしなめるが、まあこれぐらいはいいだろう。

「……あらあら。なら私も呼んでくださいませんか？」

「あわわわわっ！ い、今はリアスお姉ちゃんだけで限界ですううううううう！」

あちら。朱乃さんの方までは無理だったようだ。ギヤスパーはそろそろ限界っぽいな。

ま、それはいいだろう。

「ふふふつ。三人とも、前から覚悟してきてましたものね？」

「そうですね。朱乃さんもとなると、また覚悟する期間が必要そうです」

ヒマリやルーシアが小さく笑うと、皆に笑いが伝染する。

そんな中、イツセーがこれまた緊張した様子で一步前が出る。

俺達がちよつと見守る体制に入っていると、視界に割と何人か見えてくる人が見えている。

ちよつと気を利かせて気配遮断の結界でも張った方がいいだろうか。そう思った俺は、その直後に目を見開いた。

……金の髪と薄紫の髪の二人の少女。こちらではなく学園を見て

「どうしたの、シルファちゃん」

「何でもないわ、お姉ちゃん」

「そうなの？ さっきどこか別のところを見てた気がするけど」

「いえ、視線を感じたような気がしたから。……でもまあ、日本は単一民族国家だから私達目立つわよね」

「それもそっか。でも、駒王学園は他国からの留学生も多いんだって。ちよつと楽しみかも」

「飛び級入学せず、年齢通りにハイスクールの三年から転入するものね。……私はお姉ちゃんがいればそれでいいけど」

「もお。そういう事ばかり言ったら駄目だよ？ 折角の新しい世界なんだから、楽しまないと」

「だから頑張ろう？ ザンブレイブ・チルドレンだからこそ、日本に留学できたんだし」

「そうね。ハルトナイン・オーシャン様様だわ」

『……アジュカ。それで彼女達はどうするのですか？』

「結局のところ、駒王町の結界には引つかからなかったが油断はできません。シエムハザ総督もガブリエルも、最低限の警戒は怠らないように」

『そうですねえ。あの二人が無関係でも、ハルトナイン・オーシャンがサウザンドフォースと無関係であることは意味しませんし』

『そうですね、ガブリエル。……アキシオン同盟及びナインハルト・コーポレーション。直接的な繋がりはサウザンド・デイストラクション後ですが、だからこそ、調べる必要があります』

「アザゼル元総督がイツセー君の子供達と接触したことで、この世界における大きな異分子があることを知れた。そこから逆算したいくつかの要警戒対象」

『アキシオン同盟とハルトナイン・オーシャンは可能性としては中堅ですが、サウザンド・デイストラクション後に同盟を結んでいることから警戒対象から外れさせません』

『他の方々も調べてくれますけど、わざわざハルトナイン・オーシャンのザンブレイブ・チルドレンが駒王町に来るのなら、そこを調べるのは私達ですよねえ』

「オカルト研究部の者達にも情報はある程度統制しなければね。……杞憂で済めばいいが、万が一があるから……な」

新时期来訪編 第十五話 渦の胎動

和地 Side

駒王学園も学年末の修了式が終わり、三月も下旬となった。

俺達は明日から春休み。その春休みが始まる前から、俺達は旅支度をしている。

……そう、俺達新旧オカ研メンバーは、リアスさんと朱乃さんの卒業旅行で日本横断ツアーに出る。

北の北海道から始まり、南の沖縄まで一週間の観光地巡りツアー。ふっふっふ。テンションが割と上がるというものだ。

そして俺は既に旅支度を終えている。男はこういう時身軽な傾向があるからな。緊急の出立に備えて最低限の備えはしているし。

去年の暮れから今年の初めまで、俺達は激闘に次ぐ激闘だった。リゼヴィムとミザリのルシファー血族には苦勞させられたものだ。

だからこそ、俺達はここで一気に慰安旅行も兼ねて楽しむんだ。禍の団も大打撃を受けて落ち着き始めた今の異形世界なら、それぐらいはできるわけだな。

そんなわけで、俺はやるべきことをしっかりやっとなかないとな。

「……で、メイドの皆さんはお土産何がいいですかー？ 逐一郵送で送るし資金面は数億円になっても問題なく俺のおごりですけど、手続きの手間がかかるので一人基本一つまでとしておりますのでー」

そう、メイド達に対するお土産の準備だ。

結構な人数のメイドさんがいるわけだしな。折角日本の観光名所を巡るんだし、お土産は用意してあげるべきだろう。……あと金が溜まり過ぎているので、少しぐらい使って経済を回したい。

事前にどこ行くかは張り出しており、そこから欲しいものをそれぞれ伝えてもらう方針だ。流石に処理容量の限界もあるので気品は一

人一つ。ただし春つち達にはもう一つぐらい用意する感じで決定している。俺の女にぐらいサービスするからね？

「あ、じゃあ私ここの地酒！」

「はーい！ ご当地カッ普拉ーメン！」

「サーターアンダギー！」

「八つ橋！」

「イツセー様達が持って帰ってくれた京野菜の漬物がまた食べたーい！」

「棒ラーメンを……ご当地棒ラーメンを……っ」

……消え物が多いな。まあ、個人で使えるスペースも少ないから当然か。

「で、インガ姉ちゃん達は？」

大体まとまったし、そろそろインガ姉ちゃん達の方も聞かないとな。

「そこはとりあえずメモにまとめてるから、これを読んでおいて？」

「店の住所まで書いてるから、まあ迷わねえだろ」

「時間に余裕がないなら自分達優先よ。ほら、私達って一応罪人でもあるわけだからさ？」

流れるように進めてくれているものだ。俺はいい女を持った。

……ゆえに、真っ先に別行動でメモに書かれている土産物を購入することは決定だ。何が、何でも、購入する!!

「……三人とも、和地様がやる気になってるだけですか？」

「あ、メリード」

と、呆れ顔のメリードがこちらに一枚紙を渡してきた。

「ちなみに私めはこちらを要望します。……最近使っている下ごしらえ用の包丁が小さくなってきたので、有名な職人の逸品を買ってきていただけると」

「おっけーおっけー。……このなら九重に聞けばある程度の融通は利きそうだな。任せとけ」

メリードにも世話になっているしな。可能な限り最高峰の逸品を購入しよう。九重の言伝があればアコギな真似はされまい。

さて、メイドさん達の要望であと聞いてないのは――

「……すいません和地様。まとめるのを悩んで遅くなりました」

――あ、三美さんだ。

「珍しいですね。ここに來てから時間の遅れは一切ない貴女が遅れるとは。……慣れが油断に代わってますか?」

「どれにするか少し悩みすぎまして……では、こちらをお願いします」
と、メリードに素早く釈明をしてから三美さんはメモを渡す。

……これ、画材?

「京都のあそこはいい画材が揃っているんです。昔修学旅行で買ったことがあるのを思い出しまして」

「へえ。三美さんって絵を描くんですね?」

春つちが興味深そうに覗き込むと、三美さんは苦笑する。

「一流の芸術家には劣りますけどね。三流どまりと悟ったので、そちらの道には進まなかったんですけど……たまにやると凝り性になってしまっ」

苦笑いというか寂しそうな笑みだけど、嘘は言っていないだろう。

懲罰メイドは個人の空間や収納スペースはそう大きくない。その上で欲しいというのなら、それぐらいに思い入れはあるんだろう。

なら、しっかりと買っておくか。

「分かりました。きちんと覚えておくので、安心して待っていてください」

……さて、他のメンバーはどんな感じかね?

事前の打ち合わせも兼ねて、今日は僕とギヤスパ―君も兵藤邸に来ている。

この一週間の卒業旅行に合わせ、兵藤邸の移築はほぼ決定。禍の団が大打撃を受けたとはいえ、更なる脅威が生まれなとも限らない。イツセー君のご両親が誘拐されオーフィスが深手を負った事態を避ける為、土地の霊脈すら考慮した特別製の新生兵藤邸が作られる予定になっている。

その際は簡易的な礼拝施設まで作るというプランもある。他にもある程度の神話専門知識がすぐ集められるように、専用の書庫を作ることもある。

そして九成君側専用の別館を作るプランもあるそうだ。九成君は「その場合は建築こつち持ちで」と言ったそうだ。どうやら、集まりすぎている金銭を使って経済を回すべきだと思っっているようだ。

さて、それはともかく……あ、いたいた。

「やあ。そつちも準備は万端かな？」

「ヒマリやヒツギ達がいたので声をかけると、みんなが振り返った。

「祐斗ですか？ 早めに来るとは流石優等生ですのー♪」

「まあね。僕も結構楽しみにしていたからさ。」

ヒマリに挨拶をしながら、みんなの様子を確認する。

どうやら準備はまとまっているようだね。誰もが落ち着いている。

「……準備万端です。食べつくします」

「ほどほどにしなよ？ 小猫が食べつくしたら他のお客さんの迷惑じゃんか」

小猫ちゃんを軽く茶化すヒツギだけど、彼女の割と楽しみにしているようだ。

「いやー。私って乙女の影響出てるけど、その辺り半端じゃん？

知ってる気がして全然知らない、不思議な感覚だから楽しみでさ？」

そうウキウキしているヒツギに、ロスヴァイセさんも頷いている。

……ただし、雰囲気ガチだ。

「そうですね。日本には数多くの観光名所やパワースポットがあると聞きます。京都ではなかったですが……確かお金を洗うと倍になる

という場所もあるとか」

ロスヴァイセさんはちよつと真剣みが凄い。

周囲がちよつと引く中、ルーシアさんがため息をついた。

「落ち着いてください、ロスヴァイセ先生。普通に高給取りなんですから、そんなに真剣にならなくても」

「そんなことはありません！ お金というのはいつなくなるか分からない物ですから、常に大切にしてなければいけませんよ？」

ルーシアさんに力説するロスヴァイセさんだけど、かなり引かれて
いる。

「いや、私一応信徒なので……清貧を尊びたいです」

あ、あはは……。

「まあまあ。ロスヴァイセさんもイツセー君の眷属として、資金面でもしつかりと面倒を見る必要があるからね。少しは厳しくもなるさ」

そう、ロスヴァイセさんはイツセー君の眷属となった。

リアス姉さんの判断だけど、確かにイツセー君との相性は良さそう
だ。

厳密なリアス・グレモリー眷属は古参のメンバーだけに戻ったけど、それでも僕達が広義のグレモリー眷属ではい続けている。アザゼル杯では戦うこともあるだろうけど、それはそれとして大切な仲間だしね。

「……でも、ヴァレリーも連れて行かせてくれてよかったなあ。いっぱいいろんなところを見せて上げれるから」

ギヤスパー君がそんなほっこりとした様子で言うと、みんなも少し
優しい表情になる。

トスカとヴァレリーも連れて行けるのが良い事だ。二人とも外界との接触が少なかったし、これを機に色々な場所を見せてあげたい
ね。

ただまあ、オーフィスとリリスは流石に連れていけないのが難点だ
けどね。

まあ、事情を知らないとはいえ九重さんが見てくれるというし問題
はないだろう。今頃はイツセー君やリアス姉さんにお土産をねだつ

ていることだろう。

ふふ。ここ最近には本当に忙しかったしね。これが終わればアザゼル杯に備える必要もあるし、また別の意味で忙しい。

この旅行、ゆつたりと楽しんでいきたいものだよ。

O t h e r s i d e

新旧オカルト研究部員達が呑気なことを考えている時、日本近海の孤島で暗躍する者達がいた。

孤島に建設された秘密基地。その集会場に大量の人々が集まっている。

黒ずくめの戦闘員。そう形容するほかない集団は、壇上の首領に対し両手を突き上げ大きな声を張り上げる。

『『『『『『『ヴォルテックスウツ!!』』』』』』』』』』

集会場を響かせるその合唱が収まるのを待ってから、首領の男は声を張り上げる。

「……諸君！ つい先日、我々の名前を勝手にパクって幅を利かせたカオス・ブリゲートの禍の団は大打撃を受けた！ 今こそ我ら、ヴォルテックス・パンチ禍の団が世界を征服する時である!!」

そう、彼らの名はヴォルテックス・パンチ禍の団。禍の団とややこしいが、彼らより古くからある秘密結社である。具体的には十倍ぐらい昔からある秘密結社である。

だがオーフィスという旗頭がないこの組織は、異形社会に対して名を知られた存在もいなかった。その為活動は細々とこっそりであり、そこに禍の団が出てきたことでお互いの行動が逆になって伝わるな

ど、ある意味で迷惑をこうむってきたと言ってもいい。

だが、その禍の団は大きく崩壊した。

旧魔王三人が打倒されたことで、旧魔王派は大きく弱体化。英雄派も曹操達筆頭が打倒され、何時の間にか現政権側に大半が吸収。クリフトのリゼヴィムは滅ぼされ、極晃奏者ミザリ・ルシファアも戦死した。

それに伴い禍の団は大打撃中の大打撃であり、とてもじゃないがすぐに大規模作戦を動かせる状態ではない。

だからこそ、ここで禍の団が動くべきだという流れになったのだ。

「ふっふっふ。我が改造技術とサウザンドデストラクションで流れた技術がかみ合えば、もはや世界は我らの手中に収められるも同然！」

得意げな態度を隠しもしない、禍の団首領カイザー・ヴォルテックス。

彼は此処で宣言する。

「今ここに、我ら禍の団は日本征服作戦を敢行する！ 数多くのテロで浮足立っている今こそ好機！ そして大欲情教団とかいう、訳の分からぬ勘違いで発展した連中の技術も我らが奪い取るのだ！」

そしてカイザー・ヴォルテックスは首位を見渡し、Vの字ポーズをする。

「ヴォルテックススウツ!!」

『『『『『ヴォルテックススウツ!!』』』』』』

この渦の団独特の敬礼と共に、悪の組織が人知れず動き出していたのだ。

「謎の着ぐるみ集団？」

俺が首を傾げると、教えてくれたレイヴエルは頷いた。

「ここ最近、日本の観光地で着ぐるみを着た集団が悪戯をしているという報告が相次いでおります。私達……特にイツセイ様はそういうトラブルに巻き込まれやすいので、お気を付けくださいませ」

「……本当ね。なんでこんな格好でそんなことを……う？」

リアスが気になってタブレットで画像を検索すると、確かに着ぐるみやコスプレな連中が嫌がらせをしている。

なんでこんな妙な格好で、こんなちんけな悪行してるんだ？

間違いなくコスプレや着ぐるみの方が金がかかってそうなんだけど……ど？

リアスと俺は顔を見合わせて、首を傾げる。

「……それなりに気を付けた方がいいのではないのでしょうか？」

と、そこでアニルと話していたシャルロットが話に入ってくる。

いや、確かに因縁つけてきそうだけど。特に俺、こういう変人とか変態とやけに縁があるけど。

でもちんけ過ぎない？

俺はそう思うんだけど、シャルロットはちよつと真剣だった。

「大欲情教団の例もあります。バカみたいいな人達が馬鹿みたいに強かった……なんて事態、私達は何度も経験してますからね？」

なるほど。

言われてみるとその通りだ。俺がよくぶつかる特急の変態は、シャルレにならない奴が多かったからなあ。

俺もド変態で前人未踏だから、ちよつと反論できない。おっぱいで前人未踏の進化とか、一般人からすると異常扱いされるみたいだし。

同列扱いは嫌だけど、気をつけるぐらいはした方がいいか。

「……リアス先輩！ 日本の燻製文化に、野菜があるって本当ですか？」

「そうね。でもいぶりがっこは秋田県の名産。ここは普通に鰹節から入ることにしましょうか」

お、アニルも割とはしゃいでるな？

こりや、俺も負けてられないぜ！

カズヒSide

「……で、リーネス。各地の卵はちゃんと調べてある？」

「もちろんよお。オトメも、ここ数日は卵我慢したあ？」

「うん。コレステロールはちよつと解禁だね。いっぱい食べよう！」

サウナで一息つきながら、私達は含み笑いを隠し切れない。

鶏卵と一口に言っても、各地でそれなりにブランドがあったりするものだ。

ここで食べ比べよ。違いが判る女でありたい私達は、ここでその第一歩を踏み出すのだから！

「邪魔する輩は筋が通る範囲内で殲滅するのみ。……食べるわよ、皆！」

「ええ!!」

さあ、楽しみだわ日本横断ツアー!!

新时期来訪編 第十六話 原付バイクは二人乗り禁止だから銀○の真似はしちやだめだぞ？

和地Side

北海道、新千歳空港。

俺達は今、旅行のスタートを形から入る為に飛行機に乗って到着した！ あとは魔法陣のジャンプになるけどな！

とはいえ、空港でメンバーは解散となる。それぞれが行きたい場所にい趣、夕方に予約してあるホテルに集合。まあ北海道は二泊の予定だけ。

さて、それじゃあ俺はカズヒを誘って―

「行くわよ皆！ 既に電話予約もしているわ！」

「二ご当地卵かけごはん♪」

―既に走り去る、カズヒを先頭とする卵かけご飯フリークの姿を俺は見た。

…………俺は公衆の面前であることを忘れて崩れ落ちた。

「よっしやあ！ ほっけの燻製を買いに行きましょう！ ついでに工場とか見学できますかね!？」

「おっけ♪ 私も今日の夜のおつまみゲットの為に引率するわね？ 免許は持つてるから車でドライブよ〜」

…………そして落ち込んでいるうちにリヴァ先生がアニルについていった。

いかん。俺はいきなり出遅れた…………っ！

「大丈夫か、九成？」

と、そこにゼノヴィアが寄ってくれた。

「大丈夫、九成君？ 主のご加護いる？」

「こ、こんなことでせびったら罰が当たりそうだからいい」

イリナも氣遣ってくれるが、俺は何とか起き上がると氣を取り直す。

仕方ない。ちよつと疾走車輪の練習も兼ねてツーリングでもするか。……ついでに寿司屋によつてやけ食いしてやる。

そう思っていると、ゼノヴィアがなんかバイクのキーを見せてきた。

「タイミングを逸したのなら、私達とツーリングをしないか？ 免許を取ったので広い北海道を走る予定なんだ」

あく。そういえば免許取ったとか言ってたな。

「ちなみに私はゼノヴィアの後ろに乗せてもらう予定よ！ 北海道の風を切つて走るの！」

……ん？

「ゼノヴィア、お前教習所で座学受けたか？」

何を言っているんだろうか、こいつらは。

「日本でバイクの二人乗りは、免許所得から一年以上経ってからだぞ？ お前取ったの最近じゃなかったっけか？」

「え？」

イツセーSide

「悪いなイツセー。そういう事でイリナのおっぱいを背中中で堪能させてもらう！」

「許してイツセー君、私、今日はバイクに乗せてもらう気持ちを抑えきれないの！」

んなこと言いながら、九成の後ろに乗ったイリナがバイクで去っていく。

「すまないイツセー。座学でうっかり聞き逃した私を恨んでくれ……っ」

そしてゼノヴィアもそんなことを行ってから、走り去っていく。

え、どういう事？

九成に限って不倫とかないし、不倫なんてしたらカズヒも絶対けじめをつけさせるだろうから心配してないけど。

というより、九成の奴背中にクツションはりつけてたし。めっちゃくちや気づかいしてくれているから、俺も冷静にその辺考えられるし。

でも、確かイリナはゼノヴィアの後ろに乗るって言ってたはずだ。イリナだって女の子だし、割とそういうった意識は強いから好き好んで俺以外の男に抱き着いてバイクはしないだろう。九成だってその辺りの気は使えるやつだったはずだ。

何が何だか分かんねえなあ。

「……何があつたんでしよう？」

「いや、俺に言われても……？」

二人して首を傾げていると、声が掛けられてきた。

「……バイクの二人乗りは、所得一年以上以上じゃないと日本じゃ無理だからよ。教習所で親戚がバイトをしていたから教わっているわ」
振り返ると、そこには水色の髪をポニーテールにした女の人。

あれ？ この人来てたの？

「望月さん？ なんでこんなところに？」

この人、今は冥界の施設で経過観察のはずなんだけど……？

そう思っていると、後ろから鰐川さんも顔を覗かせる。

「兵藤さん見つけた！ ……あ、これジオテイクスさんって人から」

そう言っって手紙を渡してくれたけど、なんだろう。

どれどれ？

——リアスと婿殿へ。ホテルの予約はしておいたので、彼女達も連れてやってくれ。あと、来年度から駒王学園に転入させるので、面倒も

見るように。ジオテイクスー

俺が読んでいると、二人は不思議そうに首を傾げていた。

「あの、もしかして話を通ってないんですか？」

「あれ？ ……こういうのって普通話すよね？」

「……すみません。異形の文化は人間と異なっており、あとグレモリー家はどうもサプライズが好きなようですよ」

ロスヴァイセさんがそう説明するけど、それはともかくまあいいか。

「……その、どうしますロスヴァイセさん？」

「……仕方ないですね。他の人はもう出発してますから、私達と一緒に来てください」

ははは、これは……うん、にぎやかになるな。

「ま、そういうわけでよろしくな！ ……あ、もしかして年上だったりするっ…」

カズヒSide

耐えろ私、耐えるのよ私。

私はこれまでにない心を追い詰める圧力に、私は気合と根性で耐えている。

耐えるのよ。私はそれが取り柄でしょう……っ

「まだだ、まだだ。まだ耐えろ……お代わりは、厳禁……っ！」

卵の食べ過ぎはコレステロールがアレよ。他の場所でも食べるのだから、帰った後当面食べないにしても一日二杯で耐えるの、カズヒ！

私は涙を呑んで己の欲望を抑え込みながら、付け合わせの方を頼んで強引に胃を膨らませて乗り越える。

「ごちそう様……っ」

リーネスも

「お代わり二杯で、ごめんなさい……っ」

オトメねえも

「とても美味しくて……名残惜しいですのっ!」

ヒマリも

「今度友達が北海道来るなら……お勧めしとくからっ」

ヒツギも

みんな耐えているのだから、耐えるのよ……っ

「きよ、恐縮、です」

気圧されている店員さんからお釣りを受け取り、私達は店を出る。名残惜しい。名残惜しいけど、卵かけご飯は他にもある。

耐えるのよ。コレステロールの過剰摂取は健康に悪いのだから。上を見上げて零れそうになる涙を堪えながら私はみんなに宣言する。

「温泉行くわよ! 気分をリフレッシュして、この衝動を乗り越えるの!!」

「うん!」

みんなの決意を受け、私も一步を踏み出し――

「……え? 鮭が怪人でサケハラスメント?」

「なんだそりゃ?」

「いや、今夜うちに泊まる遠くの親戚が、バーベキューしたら無理やり鮭を食わされそうになってるとか」

――なんか変な事件が起きているわね。

イツセーとかが巻き込まれてなければいいけど。イツセーつて、そういう変なトラブルに巻き込まれやすいところあるから。

だが、こつちだつて甘くはない！

「させると思うか！」

「アーメン！」

「まとめて吹き飛ばします！」

ゼノヴィアとイリナが敵を切り伏せ、ロスヴァイセさんが制圧射撃ならぬ制圧砲撃。

そして俺がカバーする間に、イツセーが素早く殴り掛かる。

「いい加減にしやがれ、鮭野郎！」

それを鮭は躲しながら、瞬時の何かを投擲。

それがイツセーに当たった瞬間、香ばしい香りと音が響き渡る。

だが次の瞬間、それを炎で焼き払ってイツセーは再び殴り掛かる。

「油で揚げるんじゃないやねえ！　なんだよその技は!!」

「シャケーツ!!　我が食技をこうも振り払うとは！」

今なんて言った？

いや、そういえばさっきの斬撃もそんな技を言っていたな。つまり

鮭の三枚おろしを焼く感じの技か。

今のはつまり鮭を揚げる……サーモンフライか！

冷静に考えると、そこはかとなくごま油の香りが……ごま油でいいのか？

「この必殺奥義、サケフライごま油が効かぬとは。……ええい、こうなれば！」

その瞬間、鮭の周囲で凄まじい白もやみみたいなものが発生する。

俺たちまで呑み込んで……冷たいうえに煙い!!

「ゲホゴホツ!!　な、なんだこりゃ!!」

「なんで煙が冷たいんだ!?　あと鼻に匂いが!」

イツセーとゼノヴィアが困惑するが、その時俺は閃いた。

「スモークサーモンに由来する技だ！　スモークサーモンは冷やした煙で燻すって聞いたことがある！」

俺は聞きかじった知識で、この技がどういうものか悟ってしまった。

正直凹む。変態になった気分だ。

「なんですかその技は!？」

「すべてが全部鮭料理に繋がっているわね? ヴァーリと同様の存在なのかしら!？」

ロスヴァイセさんがツッコミ、イリナが感心する。

いやホンと、なんだこれは!

「あの、なんかきつスキの人達が凄く速度で逃げてるんだけど!？」

マジですか望月!？」

祐斗Side

そんなことをイツセー君達が経験したらしい。

少し疲れた表情のみんなを出迎えた僕達は、においを落とす為に先にお風呂を浴びてきた彼らのグチを聞いて苦笑していた。

「……まさか例の着ぐるみ集団。ですがやっていることがただの悪戯なのに、いざ戦闘になればそこまでは、質の悪い集団ですわね」

「大変だったね、皆。田知も……大丈夫? 今日の晩御飯、鮭はやめとく?。」

レイヴェルさんが凄く微妙な表情をし、オトメさんは少し凹み気味の九成君を撫でて慰めている。

そして九成君は本当に虚ろな表情だった。

「……今日は、本当に……疲れた……っ」

いや、本当にお疲れ様!

新时期来訪編 第十七話 初日の夜に

イツセーSide

あく疲れた。なんていうか疲れた。

なんだったんだ、あの鮭怪人。実力はそこそこあるけど、やってることが悪行としてもしょうもないというかなんとというか。

だけど本当に強かった。そう思うと、なんかまた疲れてきた。

とりあえず鮭の匂いが消えきれてない気がするから、とりあえずもう一回温泉に入る。

流石に混浴風呂はないけど、だからこそ普通に温泉を堪能できる。

……何のトラブルもない温泉に、なんか心が洗われる。

うん、リアス達と一緒にいるお風呂もいいんだけど、たまにはこういう時間があるといいよね！

そんな風にリフレッシュしてから、俺は温泉を出る。

こういうところは、待合室的なところでくつろげるのがいいよなあ。

アイスとか飲み物も自販機で売ってるし、食べ物も売ってる。

ちよつと胃がこなれたし、少しだけ食べるってのもいいかも。

そんなこと思いながら出ると、浴衣姿で涼んでいる鰐川さんがいた。

「よ、鰐川さん」

「あ、兵藤さん」

俺は何となく、飲み物を買ってから隣に座る。

鰐川さんも牛乳を買っていて、少し天井を見上げてから苦笑した。

「なんかごめんね？ 全然話が行ってなかったって思ってた」

「気にすんなって。……冷静に考えると、リアスの家ってそういうところが多いっていうか」

俺は本気でその辺りに納得しているし、どっちにしたって鰐川さん達に文句を言う理由もないしな。

いや、本当にリアス含めて、リアスの実家ってそういうところあるよなあ。サーゼクス様もアザゼル先生に「女子全員イツセーの家で住んでね？」なんてしてきたし。

うちの改装も、一回目は俺が寝てる間にだったしなあ。ア－シアのホームステイも俺なりに一つ聞いてなかったし。シリアスなのも含めると、リアスの結婚を強引に進めたりとか。

……うん、俺達今後もサプライズされそう。カズヒがキレて説教させたりしなけりゃいいんだけど。あいつ常に切腹して詫びになるなら問題ナシって思考だしな。なんかやらかしそう。

ちよつと真剣に家族会議した方がいいかもしれない。特にリアスには前もって相談しておかないと。カズヒだし、カズヒだし。

「どしたの?」

「いや、ちよつと今後の正座説教が、ね」

気を取り直そう。

とりあえず、ここにいるっていうなら鰐川さんも温泉に入ってたんだらう。

「二人で入ってたのか? 望月さんは?」

「あく。有加利ちゃんはまた別。私はこの時間帯に入っておきたかったから」

ん、そうなのか。

二人はとつても仲が良さそうな気がしたけど、それでもつてことなのか。

なんだろう。拘りってやつか?

俺がそう思っていると、鰐川さんは凄い真剣な表情になっていた。

だけどおかしい。これ何かがおかしい。

バイリンガル

例えるなら、俺が乳語翻訳を初めて使った時のような。もしくはファーブニルがパンツを揚げて邪龍が改心した時のような。もしくは、ヴァーリが作った拉麺で結界を張るたくさんの父兄さん達の姿を見た時のような。

そう、当人は真剣だけど周りが真剣になれないような感じがするぞ。

「……あんまり遅いとよく眠れないし。これぐらいが私のゴールデンタイムだから」

「……よし、聞こう。」

「えっと、つまりよく眠る為に？」

「もちろん！ 安眠大好き、趣味はお昼寝、今日は忙しかったから、夜の睡眠で取り戻します！」

「真つ直ぐな目だった。」

心の底から本気の日だった。そういえば、この子もドラゴン系の神器持ってたっけ。

「そっかあ。そういう事かあ。」

「ちよつと聞くけど、ラーメンが大好きすぎて変な悟りを抱くのはどう思う？」

「大好きなものが関わると、人間ってどうしても変なことになるよね。経験あるよ」

「そっか。ヴァーリは大丈夫か。」

「じゃあ本題だ。」

「……ちなみに、男がおっぱいを求めるのはどう思う？」

「男の子ってそういうものでしょ？ 歩人くんも、つい視線が向いて慌てて顔を赤くしたりとかあるもん」

「そっか。」

「……鱈川さん、ドラゴンの才能あるよ！ 君は絶対強くなれる！」

「たぶんだけど、俺やヴァーリと同じ領域に踏み込める！」

「持つてるのが神滅具だったら、D×Dの領域に行けたかもね！」

「え、そうなの？ 強くなれちゃう？」

「なれるなれる。おっぱい^俺だつて強くなれたし、ラーメン^{ヴァーリ}だつて強くなれた。ならきつと、お昼寝^{鱈川さん}だつて強くなれるさ！」

「うん、確信すら覚えてきたぜ！」

「そんでもって、強い奴つてのはたくさんの人も守れるもんさ。大丈夫、鱈川さんは歩人つて人に胸を張れるって絶対！」

ま、魔王の血を引いた準神滅具保有者だしな。

そんなじゃそこらのやつじゃ相手にならないぐらいに強くなれるだろ。モチベーションもあるし大丈夫だな。

ただ、いきなり言われたから鰐川さんはちよつと困惑している。

「そ、そっかな？ ……大丈夫、かな」

どこか不安っぽいけど、俺ははつきり言っただけはにやれる。

「大丈夫だよ。俺も一緒に手伝うからさ」

その辺ははつきり言っとなかないとな。

「俺は馬鹿だからあんま細かいこと言えないけど、鰐川さんみたいな心意気を持った才能ある人なら、絶対に強くなれる。そういうやつを、俺は何人も見てきたからな！」

太鼓判を押してやると、鰐川さんはちよつとだけはにかんだ。

「……ありがと。ちよつと、安心したかな？」

頬を掻きながら、鰐川さんはちよつと照れ臭そうだった。

「あ、でもこれから面倒をみられるなら……兵藤さんっていうのもあれだよな？ 一誠さんでいいかな？」

「それもそうか。ちなみに、親しい奴はイツセーって感じで呼ぶんだ。

そんな感じで頼むぜ」

あんまりかしこまったりされるのも苦手だし、そんなぐらいでいい感じだな。

「オツケー。なら、私のことも亜香里でいいよ、イツセー」

そう言うと、鰐川……いや、亜香里は牛乳のパックを手に持って少し掲げる。

俺はちよつと戸惑ったけど、すぐに分かったんで自分の牛乳パックを手に盛った。

「これからよろしくっ」

これからの、歩人って人に胸を張れるようになる亜香里の人生に乾杯！

……ふう。たまには一人の時間もいいもんだ。

俺はホテルの最上階にある展望台でくつろいでいた。

この時間帯なら人は基本いないし、気分転換には最高だろう。

なんていうかわけの分からない連中がゴロゴロいたからな。なんだあの怪人軍団。

まったく。禍の団が大打撃を受けて、少しは静かに過ごせると思ったらあれだ。謎の魔獣化騒動に夫従妻隷会の人体改造。更にリアス先輩達の卒業旅行に行けば初手であれだ。

軽く凹む。というより、イベント事に合わせて妙なことが起こりやすいオカ研のパターンから踏まえると、卒業旅行中にことごとく変な連中と出会いそうだ。凹むぞ本当に。

常在戦場。死を想え^{メモント・モリ}。何が起こるか分からないから、何が起こっても瞼の裏の笑顔の誓いは裏切らないよう生きている。生きているが折角の旅行でトラブル起きれば凹むぞ普通に。

しかも今回、サプライズで追加要素があるってのに。勘弁してくれ本当に……っ。

ため息をついたうえで、俺は下で買ってきたジュースをぐびぐび飲む。

成人になったら酒浸りになりそうだ。星辰奏者^{エスベラント}は肝機能も向上するから、俺って酒量がかなり多い奴になるかもしれん。休肝日ぐらいは作っておこう。

そう思った時、足音が聞こえた。

たぶん一般客の一人だろう。星辰奏者の五感を基準にしているわけがないし、適度なスルーが肝要だよなど。

「……あ、九成さん？」

と思つたら、聞き覚えのある声がかげられた。

「おや、望月さん」

振り返りながら答えると、望月さんはバツが悪そうにしながら、頬を掻きつつ近くの椅子に座る。

「今日はごめんさい。連絡が行ってないとは思ってなくて」

「お構いなくお構いなく。グレモリーの宗家ではよくあることだし」

サプライズ好きだから悪気ないだろうしな。少なくとも望月さん達は悪くない。

なので手を横に振って応えると、望月さんは苦笑しながら外を見る。

流石に夜も遅いので、辺りは暗い。周囲の風景を見るのは、星辰奏者や異形でもなければ難しいだろう。

だがその分満天の星空だ。これはこれでいい景色だと思う。

「そういえば、望月さんはなんでここ……あ、周囲が騒がしかったか」
「ううん。そういうわけじゃなくて」

そう返す望月さんは、やがて笑顔を隠し切れずにうつむいた。

「……本当に、こんな楽しくていいのかなって」

ああ、なるほど。

俺があえて沈黙で促すと、望月さんは少し口元を歪めている。

「周囲の人達も私を責めたりしないし、ある意味で被害者だと言ってくれる。でも、私はやっぱりこの手で多くの被害を生んでしまったから」

なるほど、な。

やっぱり気にしてしまうか。気にしないでいるのも、それはそれで大変か。

俺はどうしたものかを考えて、そして彼女ならこうすると確信できた。

きつと、彼女なら言えというだろう。自分から言うだろう。そういう人だと知っているから、俺は極晁を彼女と描けた。

だから、言っていだろう。

「……二十年ほど前、一人の少女が過ちを犯した」

俺は、大きくはないがよく通るような声で、それを語る。

「その十年以上前から、小学校に上がる前から外道に犯され続けてきた少女は、最初に侵される直前で軽くあしらわれた想いを醸造させ、そしてふとした時にそれを抑えきれなくなり悪意のままに振舞った」
初手からかなりアレな話だ。大雑把にまとめているだけの話でもかなりきつい。

実際、望月さんは顔色が真っ青になってる。まあ、女性の立場なら尚更そう思うだろうしな。

だからこそ、俺はあえて続ける。

「歪みに歪んだその想いを叶える為、彼女は自分を犯し続ける連中の弱みを握り、家族同然に育った女性を犯させた。そしてその女性の心が壊れ、下種の子供が孕んだタイミングで、その事実を想いを寄せる男に明かし、心を砕いて自分に縛り付けようとした」

本当に、雑にまとめればえげつない。

間違いなく少女は悪鬼と成り果てた。間違いなく悲惨で同情すら買える事情があらうと、そこから動いた行動が悪辣すぎる。

「……だがその結果、男是最悪の性質を自覚。結果として、世界は危うくたった一人の男によって涙嘆地獄バッドエンドを押し付けられそうになったほどだ。事情を知っている異形と人間界にとって、心臓が止まるほどの非常時だった」

「……それは、酷いね」

そう呟くことしか、望月さんには言えなかった。

そうだろう。これだけ聞けば、どう考えても好意的に見れば抵抗が出てくるだろうしな。

「……そして彼女は、それがきつかけとなつて己の在り方を悟り絶望し――」

目を伏せ、俺はあの日を思い出す。

「――そこで、一つの救いを得て残りの人生を生きると誓った」

その言葉に、望月さんはきよとんとなる。

だが俺は思い出せる。

あの誓いを、その笑顔を。そして、そんな彼女と共に成し遂げてきたことを。

「瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻む」

この言葉を、俺はいつだって胸に宿している。そしてそれはカズヒ彼女もそうなんだ。

「その決意を胸に、彼女は多くの邪悪を祓い、多くの嘆きを救い、バッドエンド涙嘆地獄を打倒して、世界に大きな希望を齎した。……彼女は、誰かと一緒にいることを容認され、そしてそこで満足せずに成せる範囲の成すべきことから、成したいことを続けている」

俺はそうまとめ、そして望月さんに微笑んだ。

「それに比べれば望月さんは十分マシさ。だから、俺達と一緒にいる時ぐらい笑ってればいい」

「……うん、ありがとう」

そう答える望月さんは、ちよつとほつとした表情だった。

まあ、それにそんなものじゃないからな。

「第一、国際テロ組織の頭張っていた奴やら趣味の一環で育ての親裏切ってそんなテロ組織に入ったバカが、堂々と国際競技に参加することが認められてるからなあ、この業界。望月さんレベルで気にしてるとやっつてられないぞ?」

「そ、そうなの!? それはその、それでいいの?」

戸惑っているところ悪いけど、事実なので諦めてくれ。

「因みに後者は望月さんとは別の魔王のハーフだ。よく兵藤邸ちに来るから覚悟しとけよ? 絶対絡まれるぞ?」

「え、ええ!! それって別の意味で大丈夫なの!?!」

動揺しまくっている望月さんだけど、まあ肩の力は抜けているらしい。

「ま、そういう時は俺を呼んでくれ。カバーぐらいはしてやるさ」

そういう風にまとめると、俺は立ち上がる。

「さ、そろそろ戻ろうぜ? 明日もはしゃぐから休んどかないとな」

そう促すと、望月さんはふつと笑った。

「……有加利よ」

ん？

俺が首を傾げると、望月さんは苦笑していた。

「これからは、名前で呼んでくれる？ いえ、あなただけじゃなくて、これからお世話になる人達とは、あまり壁を作りたくないから」

それはきつと、第一歩。

彼女が胸を張って、歩人という人に感謝の言葉を伝えられるようになる為の。その、第一歩。

だから俺は――

「OK、有加利さん。みんなにも言いに行こうか」

――その決意に、敬意を払おう。

Other side

「……どうやら、我らの前にはまだ恐るべき敵がいるようだ」

ヴォルテックス・パンチ

渦の団の集會場で、カイザー・ヴォルテックスはそう告げる。

渦の団が誇る怪人の中でも有数たる、サーモン・キング。そのバーベキュー妨害が撃退され、彼らは冷や水を掛けられた。

禍の団が大打撃を受けてなお、渦の団には強敵がいる。その事実にも誰も戦慄する。

そして、カイザー・ヴォルテックスは目を見開いた。

「ゆえに行け、四覇将よ！ 同時にお前達に配下として、サーモン・キングに並び立つ五蹂士を差し向ける!!」

その言葉に、壇上にいる男達が頷き、更に四人のフードが寄り添っ

新时期来訪編 第十八話 死闘、四覇将&五蹂士！

和地Side

リアス先輩達の卒業旅行三日目、京都に転移した俺は――

「悪いわね九重！ 私達はまず卵かけご飯を食べる！」

「そもそも私達、前世まえの中学で京都行ってたからねえ？」

「そんな時から続いている卵かけご飯のお店……っ」

カズヒ及びリーネス及びお袋。ブレることなく卵かけご飯の店に特攻。

「よっし今度は俺も行くぞおおおおっ!!!」

それに対し、俺も今回について行く。

全力疾走。今回は俺も絶対について行く。

「お、和地も卵かけご飯に惹かれたのですわね？」

「いや、絶対違うと思うじゃんか」

ヒマリよ。俺との付き合いは長いのにヒツギにツツコまれるな。

いや、卵かけご飯は美味しいけど。美味しいけどそうじゃないんだ。

デートしたいんです！ いやデートになってないけど！ 折角の旅だからカズヒと一緒に時間が欲しいんです!!

一時間後

恐ろしい真似を!」

―と、なんか変な格好の男がびっくりしている。

……というか、そいつの周囲にいる連中に見覚えがありまくる。

「なんとおそろしい。警察を相手にそこまでのことをするとは、五蹂士たるサボタージユ子爵ですらそこまでのことはしないぞ」

「警察官の親にしたくもない勉強をされた恨みを具現化した、警察官を怠惰にさせる怨術。サボタージユ子爵の奥義をこんなことで悪用させるとは……っ」

「だがペンタグラム伯爵によって京都を恐怖に落とす為にも、ここはとどまるわけにはいきませんぞ」

「そう、京都全ての神社仏閣で落書きを行い、縁起を悪くする為には……っ」

……。

俺は、どこからツッコめばいいんだ。

特にアレなのはあれだ。規模と能力に比例しない、やることのシヨボさだ。警察を無力化までしてしてやる悪事が、落書きってお前ら。

え、こいつら何考えてるの？ 馬鹿なの？

「とりあえず、そのヘキサグラム男爵を含めて何とかするしかないか」
ため息をつきたくなるけど、とりあえず動くしかないだろうさ。

「……そうね。どうやら腹ごなしにはちようど良さそうだわ」

あ、カズヒが来てくれた。

「リーネスが銀行強盗、オトメねえ達が別動隊を潰しに行ったわ。私達は奴らを叩きのめすわよ?」

「OK。まあ、人間世界表の法律に配慮しつつでいくか」

さして、少し暴れるとするか!

「……おのれえっ!! 四覇将たるペンタグラム伯爵と、五蹂士たるサボタージュ子爵が倒されるとは!!」

ヴォルテックス・バンチ
渦の団の集会場で、カイザー・ヴォルテックスは拳を打ち付けるほどに悔しさを覚えていた。

「サボタージュ子爵の怨術とペンタグラム伯爵の陰陽道により、京都府警の警察全てをさぼらせることはできましたが、よもやICPOから増援が派遣されるとは……っ」

「警視庁ではなくICPOからとは。いったい誰が連絡を……? (カズビがディーレンに連絡した結果である)」

戦闘員達も戦慄するが、しかしそこでとどまる者達ばかりではない。

「ならば次だ! 次は大阪に向かうのだ!!」

祐斗Side

ふう。大阪には美味しいものが多い。

「……はふっ……イザイヤ、この美味しいのはなんていうの?」

「ああ、それはたこ焼きだね。大阪の名物とまで言われているよ」

トスカも気に入ってくれたようで何より。

大阪となれば食べ歩き。きつと小猫ちゃん達も楽しんでるだろう。

く。

そして少ししたら打ち上げられていく。そこまでがワンセットか!?

「これぞ我が心頭術！ ついに我らが渦ヴォルテックス・バンチの団の本格活動を前に、解禁あるのみ!!」

「おお！ 道頓堀少佐の心頭術が解放されたぞ!」

「毎週一回必ず道頓堀に落ちること一年。道頓堀少佐は約120時間の間、道頓堀川の水を操ることができたのだ!!」

何その意味不明な能力!? 道頓堀川限定って、微妙だ!?

かといってあれは見過ごせない。というより、道頓堀川って水質がよくないはずでは？ いや、改善運動が進められてたっけ？

と、とにかく止めないと。警察の方々も苦勞しているし、何より数が違いすぎる。

「トスカは待っていてくれ。僕はちよつと……あのへんな人達を止めてくるよ」

「う、うん。無理はしないでね……?」

ああ、分かっている。

すぐに片付けるさ!

Other side

「タイガー監督と道頓堀少佐がやられただど!」

その報告に、カイザー・ヴォルテックスは渦の団本部の会議室で愕然となった。

「くっ！ タイガースが優勝した年ならこんなことには……っ!」

「渦の団屈指の心頭術の使い手たる、道頓堀少佐がついていてもだとは……っ！」

構成員も戦慄するが、しかし彼らは諦めない。

「ならば次は九州だ！ 豚丸骨大将と出島仮面を向かわせろ!!」

イツセーSide

「……ええええええっ!!」

俺は思いつきり驚いた。

九州の福岡についた途端に、俺達はホテルで待機することになった。

「どういうことなの？ ここで待機してほしだいなんて？」

リアスが転移場所を用意してくれたホテルの人に尋ねると、ホテルの支配人はだらだら汗を流しながら、凄く困惑の表情を浮かべていた。

「申し訳ありません。皆様が転移する二分前に、謎の巨大生物……：生物？……が現れて、自衛隊の出動が決定したばかりなのです。ここは緊急避難先になっておりまして、状況が分かるまでは出すわけにはいきません……」

巨大生物？

え、怪獣映画みたいなの？ でも生物に疑問がありそうだったぞ？

俺達が首を傾げていると、リーネスとカズヒが何かを取り出して操作する。

「……魔術式高速飛行ドローンを射出したわあ。これですぐ見えるはずよお？」

「……………見えたけど、ナニ、コレ？」

なんか、カズヒがもの凄く困惑している。

「いや、何が出てきたんだ……………よ……………？」

覗き込んだ九成も、なんか凄い顔になってる。

「何があっただんですか、先輩方」

小猫ちゃんに指摘され、リーネスがモニターを操作して音声も流れるようにした。

『ラアアアアアアアアアアメエエエエエエエエエ！』

……………。

俺達の思考が真っ白になった。

イヤ、ナニコレ？

ラーメンで出来た、全高30mぐらいあるイソギンチャク？

そんな存在が、麺とスープで出来た触手で何かを叩き落そうとしている。

よく見ると、それは豚の獣人となんか四角い仮面をつけた男に、どこかで見たような格好の集団。

……………そして、ヴァーリだった。

あと周囲を確認していると、そんな集団を含めた不特定多数の者達が一心不乱に何かをしている。

『……………捏ねる……………捏ねる……………』

『……………チャーシュー……………いっぱい……………』

『……………豚骨……………スープ……………コツテリ……………濃厚……………』

……………ラーメンを作っていた。

虚ろな目でラーメンを作り、そして食べる。

え、なにこれ？

『砕け散るがいい、麺技、豚骨頭正おおおおおっ!!』

『拉麺とは人と共にある物。人を支配する物ではない！ 顕現せよ、
麵龍皇帝……………グレンデルツ!』

更に拉麺で出来た巨大な豚の群れと、ラーメンで出来たグレンデル
が出現し、怪獣大決戦の要素を見せてやがる。

……………本当に、なんだこれは!?

『なめるなあ！ 二つの改造技術で培った、出島の力を知るがいい!!』
そしてあの仮面つて出島だったの!? 何そのチョイス!?

俺達が唾然としていると、なんかどたばたと音がしてきた。

「……来てたわね!」

「……助かりました!」

あ、黒歌とルフエイ!

「やばいわ! 突然現れた拉麺のイソギンチャクが、一般市民をラーメンを作り食すだけの存在に変えて行ってるニャン!」

「ヴァーリ様は「ラーメンの在り方を冒とくしている」と激昂してしまっているうえ、謎の獣人が率いる武装勢力が参戦して、收拾がつかなくなっていました……!」

うん、もう見てる。

えっと、これ、あれ?

正直困惑しまくっているけど、リアスはため息をつきながら気合を入れていた。

「……とりあえず、ヴァーリに加勢するわよ。短期決戦で終わらせなければ、人間界に無用の混乱が広まってしまうわ」

「わ、分かった! 俺、頑張るよ!」

こうなったら自棄だ畜生!

俺達の観光の為、旅行の為、そして何より九州の人々の為!

ラーメン何するものぞおおおおおおっ!!!

Other side

尽く幹部達が撃退される事実には、渦の団は八割方お通夜のような雰

困気となっていた。

だが、それも怒りのオーラに塗り潰され、周囲の装飾物に罅が走った。

「もう我慢ならん！ こうなれば我が自ら出てくれる!!」

カイザー・ヴォルテックスは激怒した。

必ず怨敵たるこの日本を征服せねばならぬ。征服の為にまず破壊しなければならぬと決意した。

「……ならば、私めが破壊を成す首領を守護するしかないようですね」「ふおっふおっふお。ファイナル・デスシーサー様が出るのなら、儂も出るしかありませんなあ?」

その後ろにつくは、四覇将最後の一人ファイナル・デスシーサー。そして五蹂士最後の一人、那覇仙人。

「おお、他の四覇将お三方が同時に攻撃してもなお崩せぬ守護の極み。ファイナル・デスシーサー様が首領と共にあるのなら……っ!」

「そして沖縄でのみ活動を行う代わりに、那覇仙人は沖縄限定で四覇将に並ぶ強さを発揮する。……これならば!」

その二大巨頭の姿に、誰もが戦慄と自信を覚える。

そして、そこに一人の怪人が並び立つ。

「シャーケツケツケ、ならば私も汚名を返上する時!! 五蹂士二人と四覇将がいるのなら、我らに敗北はない!」

「おお! サーマン・キング様も戦列に復帰なさるのか!」

「これならば、これならば!!」

沸き立つ配下達の姿に、怒りに震えたカイザー・ヴォルテックスも落ち着きを取り戻す。

「ふっふっふ。那覇仙人の本領を發揮する沖縄なら、これまでのような敗北はない! 何より沖縄を守護するシーサーが破壊を齎せば、その恐怖は瞬く間に日本全土に浸透するだろう!」

そして、誰もが両手を天へと掲げるのに時間はかからなかった。

新时期来訪編 第十九話 自分が一番不幸だと思い込む奴は、たいてい視野が狭いものである。

カズヒSide

「……っ!？」

がぼりと起き上がるその相手に、私はペットボトルのスポーツドリンクを押し付ける。

「飲みなさい。凄い汗よ」

「……え、と……カズヒさん?」

目を丸くしながら受け取る望月有加利は、しかし喉が渴いていたのかとりあえずそれを飲んだ。

私はそれを確認しながら、備え付けのユニットバスの方を顎でしゃくる。

と、ちようどいいタイミングで鰐川亜香里も出てきたわね。

「あれ……? 有加利ちゃんも……?」

「亜香里……。そつか、そうだよ……ね」

二人揃って調子が悪いけど、まあそうでしょうね。

「とりあえずあなたも飲んでおきなさい。吐くとミネラルが消耗するものよ」

スポーツドリンクを鰐川の方に渡しながら、私は心底同情する。

「まあ、あの惨状と今の精神状態から見ればそうなると分かってたわ。和地もそれなりに気にしていたけど、連続はなんなんで今回は私が引き受けたわ」

なんだかんだで、私達はそれとなく何人が交代で二人を気にかけていた。

あの魔獣化騒動からひと月近く立っている。だけど、それはたった

ひと月という場合だつてある。

だから一応、それとなく気にはしていた。当人たちがなまじ善性だと分かったからこそ、絶対にまだ気にしていると分かっている。トラウマになっている恐れだつてあつた。

それもあつて、この卒業旅行に二人を連れていく形になつたのでしよう。精神的なリフレッシュを試みていると、そういう事になるわけだ。

……とはいえ、これはこつちでもやるべきね。

「時間も時間だし、今から寝直すよりは気晴らしをした方が良さそうね」

「え?」

キョトンとする亜香里に、私は肩をすくめながら小さく笑う。

「いい機会だから腹を割つて話しましょう。もう温泉の方は空いているし、汗を流しながら……ね?」

今回泊まつたホテルは、温泉付きだつたりする。ついでに言うとサウナまでついている。

軽く汗を流して温まつてから、私達はサウナに入った。

そして息を吐きながら、私は二人の様子を確認する。

汗を流してリフレッシュしたことで、とりあえず二人とも落ち着いてはいるようだ。

とはいえ、それは落ち着いただけ。やっぱり色々と思うところはあるでしょう。拭いきれないトラウマが刻み込まれていると、それぐらいは分かっている。

悪夢を見て飛び起きる。トラウマに由来する形で吐く。どちらにしても、心に刻みついた傷があることの証明だ。

いきなり何とかしようとは思わない。そういつたものは基本的に

短期でどうにかしない。時間をかけて、段階的に、ゆつくりと治していくのが肝なのだ。

とはいえ、このままってのもあれでしょう。私達との旅行でリフレッシュしてほしいけど、突発的にフラッシュバックする光景はかなり酷いと見たわ。

……なら、ここは私の出番でしょうね。

「気にするな……と言っても、気にしてしまうでしょうね。そこは理解するわ」

「……分かるんですか?」

有加利の方がそう返すけど、少し険もある。

まあよくある話ね。酷い目にあつた者が「気持ちに分かるとか言うな!」なんていうのは常套句。言いたくなる奴は当たり前にいるだろう。

ただ、理解まではできないわけじゃない。

「共感じゃなくて理解ならできるわよ。知識を集め、「自分がそうなたら」を想像する。そもそも相互理解と寛容は融和に必須である以上、異形勢力間の平和を進めるのならそうあらんとしなければならぬいでしょう?」

そう前置きしたうえで、私は更に続ける。

「……銃の操作を誤り、暴発で仲間を怪我を負わせた新兵」

あえて唐突に語る私の例えに、二人はちよつと固まった。

それをあえて無視して、私は更に語り続ける。

「操縦をミスして味方をひき潰した戦車兵。司令部の撤退命令で同胞を何人も見捨てた歩兵部隊。機体の不調を見逃し、マシントラブルで機体ごと顔見知り爆散したと知った整備兵。戦局を冷静に判断したがゆえに、一部の部下を生贄にする命令を下した指揮官」

目を閉じてつらつらと語り、私はその光景を思い出す。

それは、私が独立戦争に少年兵として参加した時に実際にあつたと。

そして同時に、そういつた件は悪魔祓いになってからも数多い。

「何人も見てきた。乗り越えた者も背負い続ける者もいれば、割り切

り無感動になった者いるし、それができず逃げ出した者も狂った者も見てきた。……そして、規模に限定すれば貴女達がそれ以上の重いものを背負っていることぐらい理解できる。……心中ぐらい察するわよ。でなければ様子を確認したりなんてしないわ」

「そう……よね。ごめんなさい、八つ当たりになるわよね？」

気圧され気味で謝る有加利に、私は肩をすくめて見せる。

「気にすることはないわ。追い詰められている者が周りに気を使うのは大変なもの。むしろ頑張っている方でしように」

そう告げたうえで、私は腹をくくる。

どうせ誰かが言っているとは思うけど、あえて自分から言うべきだ。

「唐突だけど、私には前世の記憶があるわ」

「……え？」

きよんとするけど、私はそこで構わず続ける。

……知っている者達も多いから割愛するが、我ながら本当に碌でもない。

兄に対して告白し振られた、小学生にもなっていないその時から始まった地獄。

心がマヒし、どこかが歪み腐っていくなら、それでも救いだった日常。

それが大きく削れ、ふとした瞬間に反転した自分。

その果てに壊した姉同然の乙女ねえ。そして決定的な本質を自覚してしまった、愛しい誠にい。

そして生まれた子供にいけしやあしやあと幸せの香りなんていう意味を込め、そして決定的な破綻を自覚したあの爆発。

……そして、それからの私を決定づける笑顔の誓い。

それでも私は遅すぎて、結局は何もかもが手遅れで死ぬ。それでも、私を友と呼んでくれた二つの救い。

そして気づいた二度目の生。そこから歩む、シルバレット悪祓銀弾の生き様。

そして互いに知らぬとはいえ再会し、涙換救済と共に戦い、そして再び彼に救われた。

そして、取り返せないはずだった運命ベアトリッチェの淑女との邂逅を経て、私は弄奏と衛奏を導き、そして皆の力を借りて決着をつけた。

そこまで語り、私は言うべきことを言う。

「……自分のことが許せないのはいいの。そこまで強制しないわ」

「え、ええ!?!」

亜香里の方が困惑するけど、実際そこは止めない。

「カズヒも私日美子を許さないもの。どんな惨劇という過程があろうと、私は踏みに行ってはならない物を踏みに行った。しかもそれが原因で世界が涙嘆地獄バッドエンドに染まりかけた」

そう、私は私を許さない。その事実は変わらない。

「カズヒ・シチャースチエは道間日美子を許さない。それをすれば私はまた腐るとすら思っている」

そう、それが私という女。

それでも、もう一つの絶対がある。

「だけど、和地が……鶴羽が……リーネスが……オトメねえが。更にイツセー達も含めて、誰かが私を許してくれることは受け入れた」
そう、それはもう一つの絶対だ。

自分で自分を許せない人がいるように。被害者が罪人を許さないことがあるように。その逆もまたあり得るのだと、私はそれを受け止めた。

その否定はしてはいけないことだ。私が私を許さないからとしても。誰かが私を許さないとしても。それがむしろ当然だとしても。

私を許してくれる誰かがいることを、私が否定してはいけないのだ。

「……だから、貴女たちもそこは許してあげなさい。……貴女たちが自分を許せなくても、貴女たちと向き合ったうえで許してくれる誰かを否定してはいけないわ」

そこまで言ったうえで、私は軽く苦笑する。

「まあ、私がそれを認めれたのはつい最近なだけどね?」

そういう意味だと、説得力が薄いかしらね。

「……貴女が、あの……人?」

ぼかんとしながらつぶやく有加利だけど、どうやら和地はぼかして言ったみたいね。

なら、隠す必要もないでしょう。

「まあそういうわけで。貴女達が下であることと、それより下に私がいることは矛盾しないわ。嫌になったら私を思い出しなさい?」

もつと酷い奴でも許してくれる奴がいるんだから、貴女達を許してくれる人もいるんだとね。

「……さて、そろそろサウナは出た方がいいわね。汗を流したらみんなと合流して、朝食にしましょうか」

これで、少しは気晴らしになればいいんだけど……ね。

Other side

「……流石にここまでくると少し暑いわね」

「そうだねっ。なら水着も持ってきたらよかったかも」

「水着のレンタルはあると思うわよ、お姉ちゃん」

「あ、それもそっか。……じゃ、今日は色々観光して、明日は一緒に泳がない?」

「私はお姉ちゃんの行きたいところでいいわ。そんなに意見を聞かなくてもいいのよ?」

「だめだめ! 一緒に楽しみたいんだから、シルファちゃんもちやんと意見してよね?」

「……ふう。分かりました、ヴィーナお姉ちゃん」

新时期来訪編 第二十話 たいしたことないと思つて
いた連中が実はやばいとは割とよくある展開

和地 Side

「……あく。さんぴんお茶うめ〜」

俺は沖縄についた後、貸し切りのプライベートビーチに行かずに少し離れた茶屋でさんぴん茶を飲んでいた。

あく。流石に沖縄は暑いなあ。まだ海で泳げるレベルの気温だよ。はあ。だけどこれぐらいならちようどいい。残り二日間はまつたりして過ごしたいなあ〜

でも多分出てくるだろうな。あの変人軍団とまた戦うんだろうな。ここまでの道程で一か所一回戦ってるし、絶対一度は戦うんだろうな〜

あく。ちよつとげんなり。

俺がそんな感じで凹んでいると、足音が聞こえてきた。

「あれ？ ここにいたんだ？」

「泳いでないと思つたけれど、どうしたの？」

と、そこにいたのは有加利と亜香里。

ただ、二人ともちよつと困り顔というか疲れている印象がある。

……やはり予感は当たったか。

「今頃オカ研の女子達が半分以上、トッププレス状態の奴までいる形でイツセー争奪戦を繰り返しているからだよ」

「……付き合ひ、長いのね」

有加利が労わる視線になったので、俺は半目になりながら肩をすくめる。

「そしてそういう場面において男は弱者なんだ。巻き込まれないよう

当分は安全圏に避難することにしたのさ」

「た、大変だね……」

亜香里に同情されるけど、もはや慣れた。

「覚えておけ。オカ研もしくはグレモリー眷属において、アレは日常茶飯事となる」

何かしらの対応を考えておかないと、かなり疲れることになる。覚悟しておいた方がいい恒例行事だ。

特にこの二人、今後を考えると経過観察も兼ねて新生兵藤邸で預かることになるだろうからな。直のことになるだろう。

さて、今朝は前よりもすつきりした感じがしたけど、そこからこれは割ときついだらう。

……フオローするか。

「ちようどいい。どうせ数時間は騒がしいだろうし……ちよつと別の場所行くか？ 奢るぞ？」

あれは色々疲れるから、初手から数時間も経験させるのもあれだ。先達として後進に気を使わねばな。

「いいの？ あまりお世話になるのもー」

「むしろ使わせてください俺の心の平穩の為に」

そしてごり押しで俺が払う方向に持っていかねば。

頼む金を使わせてくれ。金は集まってくる分使って経済を回さねば……！

俺のその隠し切れない強迫観念を悟ったのか、有加利も亜香里も一歩を引いていた。

あ、これ別の意味でまづいかも？

「……お願いします。想定外の形で金が入りまくっていて、一切使わないで経済を滞らせるのはメンタルに響くんです……っ！」

「土下座!?! そんなにお金を使いたいのか!?!」

ドンビキしないでくれ亜香里。俺にとって、許容範囲外過ぎる大量の金は控えめに言って地獄だ……っ

「わ、分かったから！ じゃあ……沖縄料理！ そういえばあまり食べたこと無いし、思いつきり食べてみたいわね……っ」

有加利が気を利かせてくれてありがたい。

お金を、お金を使わねば……っ

「なら、私も参加していいかしら?」

そ、その声は!?

「カズヒか! 奢られてくれるのか!」

ちよつと涙が出てくるぐらいありがたい。いや本当に。

身の程を超えた金は心を病ませる呪いになるんだ。割と真剣にメンタルをゴリゴリと削ってくる……っ

涙すら浮かびそうな俺に、水着姿のカズヒは軽く引き気味の表情を浮かべている。ちなみにラインの引かれた競泳水着は似合ってます!

「水着も似合ってるし最高か! 女神かやつほう!」

「……誉め言葉は素直に貰っておくけど、とりあえず身の丈に合っていない金に振り回されすぎよ。……素直に奢られてあげるから落ち着きなさい」

カズヒは軽くため息をつくど、肩をすくめながらパーカーを肩にかける。

「いったん着替えるから待ってなさい。ほら、そこの二人も外に出るなら私服に着替えること」

きつちりまとめてくれるカズヒに大感謝だあああああっ!!

カズヒSide

ふう。食った食った……。

「沖縄料理美味しいなあ。ニンジンシリシリはあとで俺も作ってみようか」

「それ以外にも美味しかったわね。沖縄文化、なめたものじゃないわ」
和地も感心しているけど、沖縄文化も舐めたものじゃないわね。

異文化交流とはこういうものね。やはり見聞を広めるのは悪い事じゃないわ。

沖縄料理に舌鼓を打った後、私達はホッと一息をつきながらバスに揺られる。

目的地は水族館。まあ大した理由はないけれど、たまはこういうのもいいでしょう。

「……すびく……っ」

ただ、隣でこつちが眠くなるぐらい気持ちよく寝ている亜香里は何なのか。

「まあ、昨日はあまり寝つきがいいとは思えなかったけれど」

「ご、ごめんなさい。亜香里ってはお昼寝が趣味だから……寝れるチャンス逃さないところがあつて」

有利がその辺り恐縮するけど、まあ悪いことを言っているわけではないわね。

「まあいいさ。色々あつて疲れも溜まつてるだろうし、水族館まではぐつすりというこつで」

和地もそう言っているし、なら別に問題ないでしょう。

「最悪私や和地なら抱えて運べるでしょうしね。……いえ、この場合和地以外が運ぶとまずいわね」

そんなことを言いながら、私は苦笑交じりでふと視線を動かす……と。

「……何してるの、シャルロット?」

「う、気づかれてしまいましたか……」

まったく気づかなかつたけれど、シャルロットが後ろにいたわね。気配遮断スキルをフルに使ってまで隠れなくてもいいでしょうに。

「やあ、アジユカ。君も忙しいだろうに、いきなり直接来るとはね」
「申し訳ありません、シヴァ様。考慮するべき事態が発生しまして」
「その表情、隠し切れない緊迫感があふれているね。どうしたんだい？」

「……ここ数日、神の子を見張る者を含めた各勢力がそれなりに捜査していたテロ組織、ヴォルテックス・パンチの団の構成員を連続して捕縛あるいは撃破に成功しています」

「ああ、あの禍のカオス・ブリゲード団と紛らわしい悪戯軍団。目の上のたん瘤がいなくなつて、他の小物達と同様に動くんじやないかと諜報部が言っていたね。また赤龍帝達かい？」

「はい。リアスの卒業旅行で日本横断ツアーをしていたところ、行く先々で遭遇しているそうです。……問題は、その渦の団にありまして」

「どうしたんだい？ 彼らが禍の団より危険とは思えないけど。スワイア極晷星にでも到達したとか？」

「ある意味では、それ以上に厄介な事態です」
「それはまた。どういうことだい？」

「リアス達と遭遇した者達は半分以上がこれまでにない力を振るっていました。そこに重点を置いて尋問をしたところ……」
「したところ？」

「……首領の実験で一時的に転移した、異世界の力を振るったとの報告が」

「異世界？ まさか、エヴィー・エトウルデ E×E かい？」

「それが別枠です。どの世界も何かしらで荒廃しているようですが、どの世界でも相応の力を持つ独自の力が確立されているようでして」

「……先日の魔獣化事件、それもかい？」

「共通点は発覚してません。ですが、ここまでいくつもの異世界が関わっているのなら……更に一つや二つ増えていてもおかしくないでしょう」

「そうか。……面白いと言いたいところだけど、アザゼル杯が始まるという時に余計な仕事が増えるのは困ったものだね」

「そしてアザゼル元総督と接触した、異なる並行世界におけるリアス達の子供達。彼らからもたらされた異世界関連に、そういった情報はありませんでした」

「この世界は、どうやらその並行世界とは比べ物にならない事態が起きそうだね。……破壊神としては、壊しがいがあることを欲したいね」

新期来訪編 第二十一話 行く先々でトラブルに巻き込まれる、これもまたご都合主義にして主人公補正なり

カズヒSide

「で、貴女なんでもこんなところに？」

シャルロットと思わぬ遭遇に、とりあえずその辺を突っつくことにする。

そもそもなんで一人でバスに乗っているのかしらね。

今頃、イツセーハーレムは壮絶な戦い棒倒しをやっているはずなのだけれど。

ただシャルロットは気分を落ち着ける為のアイスティーを飲むと、平静を取り戻していた。

「いえ、そもそもイツセーなら最終的に全員してくれるでしょうから。そこまで順番に拘らなくてもいいですし」

あつさりと言い切ったわね。

「圧倒的余裕ね」

「もはや正妻の貫禄だな」

私も和地も軽く戦慄したわね。

余裕というかなんというか。圧倒的にマウントをとっているオーラすら感じるわ。これが相棒の貫禄か。

……いえ、冷静に考えれば私と和地も似たようなものね。驚く必要性はさほどなかったかも。

「つまりシャルロットはイツセーにとってのカズヒという事か」

「そういえば、私達が知り合ったのも同じ時期だったわね」

なんだろうか、これはむしろほっとするわね。

私も和地もあの頃に再会し、その時期にシャルロットも召喚された。

そしてその地を管理するリアスの眷属であったイツセーと共に、共闘して危機を乗り越えた。そして合同部隊として活動し、更なる修羅場を乗り越えた。そして連合部隊であるD×Dの中核メンバー。

ここに至るまで一年も経ってないわね。ふふ、濃密な数か月を過ごしたものだわ。

……………

「前世の業がこんな形で清算を求めたのかしらね……………」

「か、カズヒ？ 大丈夫？ なんていうか……………色素が薄く!？」

「ごめんなさい、有加利。割とメンタルが珍しく削れたわ。」

いえ、冷静に考えると本当にアレよね。

「……………そういえば、俺ってば神話級の相手と戦ったのってコカビエルが最初だったなあ」

「そしてそのコカビエルですら、私達が戦ってきた大物で比べれば中堅レベルつてのが酷いわね」

和地も私も少しすすけたわね。

いえ、コカビエルは間違いなく神話級の敵なんだけどね。神の子を見張る者最高幹部の一人である時点で、下手な最上級悪魔を軽くひねれるレベルの強者なのよ。

控えめに言って、魔王クラスでも本来手古摺るのよ。つまり英雄派の幹部達でも、一対一で倒せる奴は極僅か。ヘラクレスやジャンヌ・ダルクが相手ならコカビエルの方が強いはず。

ただ、魔王クラスの力量を持つ者がゴロゴロ出てきたものね。間違いない平均をはるかに上回る上澄みレベルだけれど、上澄みの中ではそこそこというか、一枚落ちるというか。そこから上がシャレにならないというか。

オーフィスの蛇で強化された魔王末裔達なら割と戦えそうだけれど。曹操とかヴィールとかリゼヴィムとか、あとミザリとかトライヘキサとか。

……………本当に、一年未満の戦いでどれだけインフレしているのよ。

「一昔前のバトル系少年漫画か……っ!!」

「俺達の壮絶な高校二年生、物語になるなら絶対見所あるだろうなあ」
和地も少し遠い目をしてきているわね。

ふふふ、世の中とんでもない試練が起こるものね。天運が悪すぎるわ……っ。

「それで、なんでシャルロットはこんなところに？」

有利が凹んでいる私たちに代わって、シャルロットに本題を聞き直す。

そしてシャルロットは、小さく微笑んだ。

「ええ、イツセーはリアスと一緒にドライブデートをしているので、様子を見てみようかと」

……。

「シャルロット」

「はい？」

私に尋ねられてきよとんとしているところ、悪いけれどね？

「それはストーカーのやることよ？」

「……暇だったんです」

正直でよろしい。

和地 Side

「うーん！ いい感じのお昼寝タイムだったーっ！」

伸びをする亜香里だが、寝起きいいな。

バスが着いたと思ったらスッキリ起きた。起きるタイミングを

計っているのかと言いたくなるが、直前までぐっすり眠っていた気がするんだが。

とはいえ、ここは水族館。そしてイツセー達がいるはずの場所でもある。

さて、デートの邪魔をするのも無粋な気がするが……ん？

「何か、騒がしくない？」

有加利も気づいているから当然俺達も気づいている。

水族館の方だが騒がしい。というか、悲鳴まで聞こえてきてないか？

俺たちは顔を見合わせて頷き合う。

これはあれだな。また訳の分からない連中が出てきているな。

嫌な予感を覚えた俺達は、警戒しながら足早に水族館に接近する。すると、水族館の方からなんか急に人が走ってきてるな。それもたくさん。

ん？　なんか後ろの方に見覚えのある女子二人がいるぞ。

……あ。ちよつと前の卒業式の日に見た、カズヒに雰囲気似てる女子と、一緒にいた金髪美少女!?

「……急いでいいけど慌てないで！　ここで転ぶと酷いことになるわよ！」

「大丈夫、まだ来てないから！　来てもこつちが抑えるから!!」

なんか知らんが避難しているとかそういう感じだぞ!?　なんだなんだ!?

「……そこ！　状況を説明して、早く！」

そこでカズヒが携帯を取り出しながら、しんがりを務めている二人の少女に吠えた。

ああ、それは分かる。それだけの事態だと分かる。

これは明らかに緊急避難の領域だ。間違いなく、水族館の中では荒事が起こっている。それも、不良の喧嘩とは次元が違う領域の事態だ。

「……え？　え、その——」

それに金髪の少女が気づいて困惑するが、それに合わせるようにも

う片方が声を張り上げる。

「―中で変態みたいな連中が暴れているわ！ 約二名が対応しているけど、はつきり言つて分からないことが多い！」

反応が早くて助かる。

つまるところ―

「イツセーとリアス先輩か」

―あの二人が対応しているという事だ。

それがわかれば十分。俺達がやる事は分かり切っている。

「……イツセー、詳細報告を！」

シャルロットが念話で素早く話を進める。

シャルロットはイツセーのサーヴァント。龍神に由来する肉体を得たとしても、イツセーとの魔力的なつながりは決して消えない。分かっていながら連絡が取れるわけだ。

だからこそ、俺達はそこからの対応を踏まえて動ける。

そのとき、シャルロットはハツとなつて上を見上げる。

「……あそこが吹き飛ばされます！ 対処を！」

その声に、俺とカズヒは速攻で判断する。

飛び上がるカズヒに、俺は素早く星魔剣を創造しながらカバーに入る体制をとる。

その瞬間、水族館の壁が吹き飛ばされた。

「え……？」

「……は？」

有加利と亜香里が困惑する中、俺達は無言で連携を行う。

カズヒが素早く迎撃し、破片を粉碎する。

そこに俺が障壁を展開し、避難していた人達に当たらないようにカバー。

そして安全を確保した次の瞬間、イツセーとリアス先輩が着地する。

「助かるシャルロット！ 九成とカズヒもありがとな!!」

「でも追撃が来る、迎撃準備を！」

イツセーとリアス先輩が声を飛ばすと共に、破壊された壁からたく

新时期来訪編 第二十二話 意外と大変な戦い

イツセーSide

「イツセー、どうなってるんだあれは！」

九成が俺達に駆けつけながら聞くけど、俺も正直分かんねえ！

ただ、色々と言っていたことから判断すると、言えることがある。

「俺達の行く先々で迷惑行為をしていた連中、そのボスがあのおっさんみたいだ」

そして沖縄でついにボスとか、どんな展開なんだろうな。

ちよつと俺も文句を言いたいけど、それより先に戦闘員っぽい連中が怒り出した。

「おっさんとは失礼な！」

「我ら渦ヴォルテックス・バンチの団の長、カイザー・ヴォルテックス様に無礼な！」

「禍カオス・ブリゲートの団とかいう新参のパチモン集団がいなくなったと思えば！」

最高幹部の四覇将と筆頭戦力の五蹂士が尽く倒される非常事態。

……こつちも苛立っているのだぞ!!」

知るかって言いたい。

ん？　なんか九成が額に手を当てて頭痛を堪えている感じだぞ？

「どうした？」

「いや、京都で警察官をサボらせていたアホが、五蹂士とか呼ばれていたような」

……つまり、俺達の行く先々で変なことしてた連中が、最高幹部とか筆頭戦力と。

いや、んなバカな！

「……シャーケツケツケ！　雪辱を晴らす機会が来るとはなんと好都合!!」

——と思ったら、北海道で取り逃がした鮭の怪人が出てきた。

「サーモン・キング！ では五蹂士の一角たる貴様を妨害したのは……奴らか!!」

カイザーとか呼ばれてたおっさんが、驚いた後凄く睨んできた。

「おのれ！ 四覇将たるペンタグラム伯爵、タイガー監督、豚丸骨大将。五蹂士たるサボタージュ子爵、道頓堀少佐、出島仮面。……そしてサーモン・キングを撃退したのはすべてが奴らだというのか!？」

「おそらくは。我ら渦の団の日本征服計画、その各作戦を妨害した者が、総帥による破壊すら邪魔をするとは……許せん！」

「馬つ鹿じゃねえの!？」

怒りに燃えるおっさんと鮭に、俺と九成は一斉に突っ込んだよ。

あんなアホな嫌がらせで日本征服とか馬鹿なの？ ただ無駄に強いのも納得だよ。

「まったく。かといって見過ごすのもあれだ。言っちゃなんだけど、あの鮭とおっさんは警察官には荷が重すぎる。

俺達でぶっ飛ばす。それしかねえ。

「イツセー、あまり目立った戦闘は避けるべきです。短期決戦で吹き飛ばしましょう」

シャルロットが駆け寄ってきたけど、確かにその通りだ。

「分かってる。開幕速攻、アステリズム星辰光で決着ケケリをつける！」

「だな。あれならまだ目立たない」

九成も俺に頷いて、素早く星を開帳する。

「創生せよ、天に描いた双星を——我らは双子の流れ星!!」

「天衛せよ、我が守護星——鋼の笑顔暫で涙を変えろ!!」

俺達は星を具現化しながら、おっさんに向かって突撃する。

大将首、速攻で——

「……創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌く流れ星」

——な、に……!？」

「ぬうつ!?!」

「ぐあつ!?!」

……和地とイツセーが吹き飛ばされた!?!

あの二人を純粹な星辰光で弾き飛ばすとか、あの男化け物?

いえ、そんなことを言っている場合でもないわね。

「ふおつふおつふお。この程度ではのお?」

私の攻撃を素早く捌いて、オーラの砲撃を放ってくる老人。

この強さ、ステラフレームの自我覚醒体すら打倒できるわね。

基本性能に限定すれば魔王クラス。D×Dでも単独で打倒できるのは少数派。

不幸中の幸いは、私の星が効果を發揮する点ね。

そう判断しながら、私はノールックでカイザー何とかに射撃を放つ。

宝石魔術を込めた悪殺の瘴気。直撃すれば、自他共に求める悪の組織なら通用する。

「ぬるいわあつ!」

流された?

……まさか、そういう事――

「考え事をする余裕があるのかのお?」

――チツ!!

熟考する余裕はない。目の前の老人はそれだけの実力者だ。

「馬鹿め! 五蹂土筆頭たる那覇仙人を相手に他所見ができるか!」

「その通り! 那覇仙人は沖繩でしか力を發揮できない代わりに、沖繩での性能が大幅に向上する心頭術の持ち主!」

「沖繩限定なら四覇将ですら一步劣るのだ!」

「避難誘導は完了したけど。そっちは大丈夫？」

「……とりあえず、この助太刀は日本の法律的にOKかしらね？」

……確か、避難で殿を務めていた女二人ね。

今にして思えば、この二人は星辰奏者^{エスベラント}だわ。

とはいえ、どの辺りまで情報を明かせばいいのか。

それを考えていると、薄紫の髪の女がこっちに視線を向ける。

「……ナインハルト・コーポレーション民間警備部門暫定所属、シルファ・ザンブレイブよ。とりあえず、非常時なので助太刀するわ」

「同じヴィーナ・ザンブレイブだよ。その、もしかして異形関係者かな？」

……どうやら、ある程度は知っている連中のようね。

「チームD×D所属、カズヒ・シチャースチエよ。元教会の悪魔祓いと
言った方が分かりやすいかしら？」

「あ、そうなんだ。確か対テロリストの合同部隊だっけ？」

ヴィーナの方が腑に落ちる中、シルファの方は鋭い表情で那覇の爺さんを警戒する。

「とはいえ、こんな事態に巻き込まれるなんてね。留学記念に日本旅行に行ったらこれとか、幸先が悪すぎるわ」

ため息をつくシルファに、ヴィーナの方も苦笑いを浮かべている。

「そうだねえ。思いきらずに東京にしとけばよかったかも。……凄い事になってるよね」

「それは大変ね。駒王町近辺に住んでいるのなら、トラブルバスターに使える便利な人達は紹介するわよ？」

多少は同情するけど、ま、その程度ぐらいしておくべきね。戦闘中だし。

……そして二人とも、目を丸くするな。

「……あ、駒王学園高等部に進学します」

「因みに、元々は大学部予定だったけど高等部三年から転入予定よ」

……マジか。

「なるほど。なら気のいい同年代を紹介してあげるわ。……こいつらを沈黙させてからだけ」

さて、こうなれば気合を入れるしかないわね。
さつさと、この場で、叩き潰す!!

新时期来訪編 新たなる世界の予兆

和地 Side

「和地！ 外野を片付けたらそつちに行くからしのいで！」

カズビから声が届くと共に、カイザーなんとかの攻撃が襲い掛かる。

つたく。カズビの声ぐらい堪能させろつての！

こつちの障壁をまるでねじ切るように突破してくる攻撃を、俺は素早く回避する。

間違いなく手練れなうえ、星辰光に強い相性を持っている。

これは流石に厄介だが……なめるな！

既に聖血もある程度は慣れてる以上、俺はこの程度一人でも対応できる！！

そして――

「もらった！」

――戦っているのは俺だけじゃない！！

横合いから殴り掛かるイツセーに、それを陽動として死角から迫るシャルロット。

その攻撃を何とか回避するカイザー何とかがだが、鎧に明確に傷をつけた。

「おのれええええいっつ！！ 小僧共がここまでやるか！ 我が^{ヴォルテックス・ブレインカー}星穿つ大いなる渦、顕現の時をもってしてもしぶとい！！」

やはり星辰奏者か。油断できんな。

だが、禁手を使って魔星化している俺や、比翼連理のイツセー達にすら迫るとはどういう仕組みだ？

懸念を覚える俺の耳に、カズビの声が飛んできた。

「解析は大雑把に済んでいるわ！ そいつの星は^{アストラル}星辰体そのものに回

転運動を巻き起こしている！ その影響で相手の星を捻じ曲げているのよ!!」

「はあ!? ふざけんなよ!」

イツセーが思わずぼやく内容だな。

星辰体そのものに影響を与える星ならば、当然星辰体の影響で具現化する星辰光全体に相性がいいわけだ。

カイザー・ヴォルテックス

ヴォルテックス・プロレイカー
星穿つ大いなる渦、顕現の時

基準値：B

発動値：A

収束性：B

拡散性：C

操縦性：B

付属性：C

維持性：C

干渉性：B

厄介な星だ。

通常の星辰光つてのが酷い。これが極晃なら、俺の衛奏でどうにかできるつてのに。

どうしかけたものかと思った時、更にカズヒの声は飛ぶ。

「そして避難は終了している。ここに残っているのは異形を知る者だけ……意味は分かるわね!!」

「……なるほどな!!」

その意味を悟り、俺達は勝機を悟った。

確かに、あのカイザー何とかは強いだろう。

……だが、俺達を舐めるなよ？

「なら、決めるしかないよなあ！」

「まったくだ！ そろそろこっちも本気出すかあ!!」

俺はショットライザーを構え、イツセーも籠手を具現化させる。

……相手が星辰光にめっぽう強いのなら、星以外で勝負するのみ。

「……我、目覚めるは——王の真理を天に掲げし、赤龍帝なり!!」

イツセーが真女王の詠唱を告げる共に、俺もショットライザーを突き付ける。

「覚悟してもらおうか、渦の団。……お前達の渦が齎す悲劇は此処で終わる」

『AS ALLT SAVE!』

悪いが、俺の前で悲劇は一切必要ない。

「そろそろ終わらせてもらうわ、こっちは息抜きに来てるのよ」

『CRY!』

カズヒもハウリングホッパーを装填し、ショットライザーを構えて
いる。

「嬉涙救済グッドエンドで、今日を終えるぜ!!」

「貴様を邪悪と……断定する!!」

Other side

「……ハーデス様。またチームD×Dが功績をあげたようです」

『フアフアファ。忌々しい連中ではあるが、その実力は本物だからな。』

うかつに手を出せばそうもなるだろう』

「問題は、その打倒された勢力である渦の団です。……アジユカ・ベルゼブブたちの告げる内容によれば、独自に異世界の技術を取り込んでいたと」

『フン。異世界の存在が実証された以上、それは構わん。問題はそれにどう対処するか……じゃ』

「……ハーデス様！ 朗報でございます!!」

「どうした騒々しい！ まだ私が報告をしている最中だ—」

「あの者達が、コキュートスで例の施設を発見いたしました!!」

『……ほお？ で、例の存在は?』

「現在はまだ探索が進んでおりませんが、設備の規模と内容から見て間違いないとのことですよ」

『なるほど。どうやら対策の余地はありそうだな』

和地 Side

なんか疲れたなあ。

何とか頑張つてあの連中を打倒した後、俺達はそいつらを追っていたらしい鳶雄さんに後を任せて休むことにした。

助太刀してくれた人達を含めて、有加利達は近くの喫茶店で一息ついている。

……有加利達も駒王学園に転入することになるだろうし、そういう意味では合縁奇縁だ。

まったく。ま、明日は流石にゆっくりできそうだな。

そう思っていると、俺の隣にカズヒが座る。

「……まったく。とんだ卒業旅行になってるわね。リアスも大変だわ」

「俺らも大概大変だったけどなあ」

苦笑しながら頷き合って、俺はそのあと喫茶店の方をちらりと見る。

「そういうえば、あの二人ってナインハルト・コーポレーションのザンブレイブチルドレンってやつか」

ナインハルト・コーポレーション。第二次大戦後にめきめきと発展を遂げた海運業、ハルトナイン・オーシャンを中核とする大規模複合企業。海運から始まり造船を中核とする重工業部門を設立、そこから海賊対策の施設群を母体とするPMCや、その経験をもとに海軍装備を開発する軍需部門。更に近年では医療部門や漁業部門まで手広く広げているとか。

そして彼らは大規模な児童養護グループとして「ザンブレイブ・チルドレン」というものを保有。独自の奨学金制度や企業向けの専門教育で大学卒業まで完全サポートし、在学期間分系列企業で就労すれば奨学金の返済が完全免除。そして専門教育もあつて愛着や成功を得た大半の子供達は、そのまま企業に属するという流れらしい。

「そうらしいわ。二人とも星辰奏者だという事から、PMC部門の就職がほぼ確定。ただあそこ、国際企業だから海外留学を進めているのよ。で、日本の駒王学園大学部狙いだそうよ」

「……その前の慣らしで高等部ってわけか」

中々やるなあ、ハルトナイン・オーシャン。

ただ、カズヒはちよつと目を細めていた。

「ただ、最近あそこはアキシオン同盟との密接な提携を結んでいるのが不安ね」

……ああ。

「中規模国家四か国が中心となった、軍事・経済・研究における同盟の事だろ？ 更なる参加国を属国とする形で、かなり発展しているとか」

「ええ、盟主たる四か国は大きく発展を遂げ、参加国も更なる進歩を遂げている。同盟全部を敵に回せば、単独では常任理事国も厳しいと言われているわ」

軍需部門との提携を結び、海軍力が大幅に強化されたとも言われている。

元々陸軍の兵器は時代を先取りしているって噂だけど、その海運業の優たるハルトナイン・オーシャンか。そういえば、本社のある国は同盟に参加してたな。

「……まあ、表の内容に異形側が首を突っ込みすぎるのもあれよね。その辺りの分はわきまえないと」

「そうだな。俺は戦災孤児の保護とかに金を回すぐらいが限界か」

ま、駒王町に住んでいるなら問題ないだろう。あそこは結界があるから、こちらに悪意があるなら気づけるだろうし。

油断は禁物。だが臆病になりすぎるのもあれだな。

ただ、その二人の方なんだが気になるな。

「……ただシルファって方、カズヒとなんか似てないか？」

「世界中を探せば、そっくりさんは二人は見つかるっていうでしょう？ 気にしすぎじゃない」

まあそうなんだけど。

似ていると言っても雰囲気とかだしな。ちよつと気にしすぎか。

……なんとなく、俺は飲んでいたさんびん茶のペットボトルをカズヒに向ける。

「カズヒ。アザゼル杯じゃ容赦しないぜ？」

「急に何を言うかと言えば……それは私もよ」

そう返すと、カズヒもボトルをもって俺のそれに軽くぶつける。

……これが終わって少しすれば、俺達も高校三年生。そして更に、アザゼル杯という大きな祭りが始まる。

ああ、そうになったら今度はどんなことが起こることやら。

楽しみにしつつ、警戒もしつつ、その上で、しっかりといつも通りやるとするか。

視界の隅では、イツセーとリアス先輩がゼノヴィア達に詰め寄られ

ている。どうやらいなくなったことに気づいて追いかけていたらしい。

……なんとなく口元が綻びながら、俺はさんぴん茶を口に運ぶ。さて、これからも楽しみだ。

新时期来訪編 幕間 準備期間は大事にしよう

祐斗Side

春休みも終盤。僕はリアス姉さん達がいる新生兵藤邸にお邪魔していた。

今後を考えると、アザゼル杯に備えた会議も必要だしね。イツセー君達が別のチームで出るなら尚更だ。

「……なるほど。彼にオファーをするのですね？」

「ええ。思ったより交渉はスムーズに進んだわ」

リアス姉さんも中々思い切った判断をするね。ただ、その思い付きを交渉で繋げるのが凄い。

そして彼なら、イツセー君が抜けた穴を埋めることはできる。正面戦闘なら今のイツセー君を超えるだろうし、シャルロットとの連携で来られても勝算がある。レーティングゲームだとシャルロットは使い魔扱いで運用に制限があるから、今回においてはイツセー君以上の戦力になるかもしれない。

最もイツセー君は日々成長する人物。龍神化こそ悪影響が多すぎて使えないけれど、近いうちにそれを克服する可能性は大きいしね。もし戦うとなったら面白いことになりそうだ。

「うふふ。ガブリエル様達から勧められた方とも話は済んでますし、優勝も狙える陣営になりそうですね」

朱乃さんが微笑みながらそのことについて語れば、小猫ちゃんが少し嘆息する。

「……イツセー先輩達が驚きそうな方ですけど」

だね。僕も話を聞いた時は驚いたさ。

まあ、顔を合わせた段階では大丈夫だろう。ガブリエル様達だけでなく、アジユカ様やシエムハザ総督も連名で太鼓判を押ししているし

ね。

さて、それはともかくとして。

「リアス姉さん。イツセー君達は此処には？」

来たけどイツセー君とその眷属に移った人達は誰もいなかった。ついでに言うと、九成君やカズヒ達もいなかった。

彼らもそれぞれのチームでアザゼル杯に参加するからね。それぞれがチームメンバーを探している。

こういったのも、国際レーティングゲームという一種のお祭り騒ぎだからこそだね。ふふ、僕たちも含めて面白いことになりそうだな。

だけど、新生兵藤邸は一段階進化を遂げているようだね。

建築物も増えているし、部屋の面積も全体的に広がっている感じがある。これも僕達が成果を上げたこともあるだろう。

それを実感しながらお茶を飲んでみると、リアス姉さんもお茶を飲みながら微笑んだ。

「イツセー達も色々と動いているわ。ふふ、この調子なら楽しい催しになりそうね」

「はいいい！ 僕達も、負けてられないですよ！」

ギヤスパー君も心強いことを言ってくれるようになった。

ふふ。これは今から腕がなるね……っ

カズヒSide

「で、鶴羽は緋音と一緒に住むの？」

ある程度の話を終えてから、休憩中に私はそれを聞く。

鶴羽もそこは分かっているから、ぼりぼりと煎餅を食べてから頷い

た。

「まあね。流石にいきなり、異形がたくさんいる兵藤邸はまずいでしょ?」

「そういうわけで、鶴羽の墮天使化はもうちよつと先ねえ」

リーネスもそういうし、まあそういうものでしょう。

シヨック療法じみたことである程度慣れたとはいえ、元々異形に対する潜在的な抵抗感を持ってしまったもの。そう簡単に二十四時間一緒にいるのはきついでしょうね。

そういう意味だと、気心の知れたメンツと一緒に住むのはいい事でしょう。無理に強引な真似をする必要もないし、当面はそれでいいでしょうね。

……それはそれとして、こっちのチーム構成もある程度は進みそうですね。

「あ、そういえばカズヒってアテがあるって言っていたけどどうなったの?」

オトメねえに振られて、私はちよつと苦笑した。

「全員快諾。特にカズホなんて、デュナミス聖騎士団の選抜を事前に断ってまで来てくれるって言っていたわ」

まさかそこまでストレートに来るとは思ってたわね。

正直、一人や二人は断ると思ってた。それぐらいの過去を私は持っているし、自分達側のメンツがメンバーを募集することもあるでしょうし。

でも、誘った皆は全員快諾してくれた。むしろ楽しみになっているようだった。

……本当に、私はあまりにも恵まれているわね。

「……そういえば、アンタの男友達は? あの二人参加しないの?」

鶴羽が効いているのは勇ちゃんとディーレンね。ま、そこも言ってくるとは思ってたけど。

「ディーレンは残念だけど無理だったわ。ほら、あいつは仕事の色々あるしね」

ICPOはいまだ忙しいってことね。勇ちゃんは逆に、職場のいい宣

伝になりそうだったからいい感じだった。

「ちなみに勇ちゃんからは部下の訓練にも使えないか提案があったわ。兵士はそっちで埋めれば……満タンにできるわね」

時間的に余裕が出来ている節もあるし、その辺りは大まかな作戦プランを立てる方向でどうにか出来そうだわ。ちよつと助かるわね。

鶴羽もオトメねえも、そこに関しては感心しているし。

「おおく。思ったより凄い事になるわね、それ」

「……プロのPMC、それも星辰奏者主体からかあ」

ええ、言いたいことはわかるわ。

リーネスもお茶を一口飲んでから、にっこり微笑んだ。

「人数も手札もかなり豊富に揃えられるわねえ。これは、優勝も狙えるかしらあ？」

「やるなら狙うわよ。そもそも、優勝賞品が狙いだもの」

そう、私の狙いは優勝賞品。運営側の神仏魔王によって、世界に混沌を齎さない範囲で願いを叶えるというもの。私はそれを狙っている。

その優勝賞品を使い、私は禍の団関連での復興資金を上乗せする。ポーズで済ませるような半端はしない。

瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻む。その決意は私を闇から引つ張り上げた。だからこそ、それを形にし続ける。

それに、私は和地と共にありたい。せめてそれは容認させてみせる。そのためにはやることはやっておかないと。

ミザリ・ルシファアの所業。その責任の大きな要素を持つ者として。かつて邪悪に染まり、下劣な悪意を振りまいた責任を取る。それは私の人生における必要経費。

だから、こそ。

「頼りにしてるわ。……力を貸してくれる？」

この言い方は卑怯かしらね。

ええ、だって――

「「もちろんっ」」

――分かり切っているもの。

イツセーSide

俺はレイヴェルと一緒に、いろんなどころに行ってメンバーになってくれないか探ってみてた。

見てたけど……思ったより芳しくないな。

「どうする、レイヴェル？」

俺がその辺を聞いてみると、レイヴェルも少ししよげた雰囲気だった。

「そうですね。イツセー様は指折りの実力者となっておりますから、そのチームというのは気後れするのも当然でしたわ」
なるほどなあ。

俺って、もはや神すら倒せる冥界の英雄になっちゃってるからなあ。やっぱ、その一員になるっていうのは心理的に負担がデカいかあ。

ううくん。できればそれなりの形にしておきたい。レイヴェル達眷属メンバーも十分頼りになるけど、多いに越したことはないからなあ。

さて、どうしたもんか？

「……ヒマリに断られたのが……きついな」

「ヒツギさんが先に確保してましたものね。……そっちになる可能性は十分ありましたわ」

そうなんだよなあ。

あく！ 何とかしたいけど、これは俺達が頑張っただけでどうにか

なるものでもないし！

「くっ！ 九成達は、今頃ハーレム軍団とか作ってるんだろ？ なあ！ 羨ましい！！」

俺は思はずぼやくけど、ただレイヴェルは首を横に振った。

あれ？ 違うの？

「そう簡単には行きませんわ。あの方々も、色々ありますもの」
そ、そうなの？

和地 Side

「……まず、二人が参加してくれたのはマジで助かる。助かるけど……っ」

俺はちよつと崩れ落ちかけていた。

「だよね。うん、あの二人がアウトなのはキツイよね」

「ま、カズヒ達が別チームなのは分かり切ってたけどなあ？」

そう、カズヒが別チームを率いる以上、鶴羽に期待はできなかつた。

ただ問題は――

「リヴァ先生と春つちが、それぞれ別チーム参戦なのがキツイ！」

――あの二人が、アウトなのはキツイ。

それもこれも、あの二人はそれぞれ別口のチームにスカウトされて承諾してしまったからだ。

リヴァ先生は立場が立場だから予想もできていたが、春つちは想定外だ。

というか――

「……冥革連合がチーム作るとか、想定外だろ!？」

「あいつら分かりやすいいから信用がおけるもんなあ」

ベルナが言う通り、とても分かりやすいところがあるからな。

はっはっは。まさか監視役がつくとはいえ、アザゼル杯に問題なく参戦とはな。

ま、ヴァーリもヴァーリで参加するらしいしな。それも監視役なしらしいし、なら尚更か。

これは、割と始まる前から大変なことになりそうだなあ……うん！

第二章 大会開幕編
大会開幕編 第一話 ニューフェイスも色物です！

和地 Side

「ん〜……っ」

始業式も一通り終わり、俺は一人で少し伸びをする。

ついに俺も高校三年生。ふう、なんというか感慨も多少はあるな。それはそれとして俺も色々忙しいけど。主にアザゼル杯関係で。

思わぬところで足元躓いているからな。チームメンバー関係で。

いや、結構なメンツが参加を決定していたうえ、安全牌だと思っていたヒマリがヒツギにとられたのが痛い。

さて、となるとどうしたものか。まだ時間はあるけど、どうせ参加するなら優勝の可能性ぐらいは欲しいからなあ。

その辺を考えていた時だった。

「てめえ、ふざけんなよ!」

「あ? んだとコラアツ!!」

「ちよつとそこ、喧嘩はやめなさいよ!!」

……喧嘩か? 聞きなれない声だが、一年生か?

入学でテンションが上がった時に、イラつときてどんどんヒートアップってところだろうか。あまり大ごとになるのもな。

仕方がない。止めに行くか

俺は足早に近づくと、喧嘩の現場に辿り着く。

男子数名と女子一名。見る感じだと、男子の一人が複数人と揉めていて女子が止めに入った感じか。

そして流れるように割って入る女と、揉めている男子一名の動きが違うな。これ、結構身体能力が高そうだ。

とは言っても、殴り合いになりそうだからそろそろ止めるか。見る限り一年生だけだし。

「おいその一年生共。入学式早々から喧嘩するな〜」

「……先輩の方っすか？ 関係ないですよすっこんでてくれませんか？」

おく。一人で揉めてる方は中々に言ってくれる。

ただそういうわけにもいかなくてな。

「先輩が校内で喧嘩してたら困るだろ。というか、喧嘩の原因は何だよ？」

入学式早々で暴れられても困るしな。とりなせる範囲内でとりなさないよ。

と、複数人側がこっちに勢いよく振り返る。

「この野郎が因縁つけてきたんだよ！」

「そうだよ！ 別に悪いこと難もしてねえのにいきなり「クズ共が」とか言いやがるし！」

「で、文句言ってきたら「クズの群れが吠えるな」とか言い返すんですよ!？」

……。

「そこだけ聞くと100%お前が悪いが、反論はあるか？」

想いつきり喧嘩を売ってるじゃねえか。

声の大きさによってはどう関わるが、この調子だと堂々と言っているみたいだな。周囲の一年生も少し引き気味だし。

なんだこいつ。いきなりそれとか、いったいこの連中は何をしたんだと――

「……女を見て鼻を伸ばす奴は屑以外の何物でもねえだろうが!!」

――ん？

なんか相当キレてるが、え、どういうことだ？

最近多いツイフェミとかそういう手合いだろうか。あれ、男女問わずいるとか聞いていたけどここにもいたのか。

まずいな。特にイツセーとか松田とか元浜とかが不安だ。絡ませるとまずい。

「うん。弟が不良に自転車とられたなんて騒ぎからどんなピタゴラス
イツチなんだろうな」

俺もその辺は本当に頭が痛い。

そしてもう、一年生達はドンビキ状態だし。

「おお〜っ！ 漫画みたいな展開ですね！ え、ここはバトル漫画の
世界なんですか!?!」

女子の一年生は割とノリがいいな。それはそれで困るんだが。
今後はないことを願いたい。いや、ありそうで怖いけど。

ただカズヒは肩をすくめると、ゼノヴィアの方に振り向いた。

「そうそうゼノヴィア。生徒会長の貴女に頼みたいことがあるのよ」
「なんだ、カズヒ。どうかしたのか?」

ん? なんだなんだ?

「どうしたんだ、カズヒ?」

「いえ、勇ちんとディーレンから頼まれたことがあって。それなら生
徒会長のゼノヴィアに聞くのが手っ取り早いから——」

俺にそうカズヒが応えた時……だ。

「……勇ちん? その人が接木勇儀のことなら、もしかして私の事で
すか?」

なんか女子の方がそんなことを言ってくる。

え、どういうこと?

俺とゼノヴィアが思わず顔を見合わせていると、カズヒがはたと手
を打った。

「貴女が勇ちんの娘、接木優華さん? ……となると、あとはディーレ
ン側の窪川蓮夜と接触すればいいわけね」

おお、勇儀さんの娘さんか。

なるほどなるほど。そりゃカズヒに一言言っておくよ。

しかも引岡さんの子供もここに来たのか。名前からすると男っぽ
いけど、誰なんだろう。

そんなことを思っていると、周囲の一年生達から手が上がった。

「あ、あの……」

「あら、貴方が?」

カズヒが聞くと、その少年は首を横に振る。
ふむ。つまり知っている奴がいたという事か。

なら誰がと思つたら、その少年は指をこちらに向ける。

「……窪川はそいつです。今先輩が鎮圧した奴……です」

俺達は、視線を集める。

この茶髪を坊主頭にした、こいつが？

「すいません。そいつ性的にも凄く潔癖な癖して根がスケベで。
ラッキースケベに巻き込まれそうになると凄く勢いでそういうこと
するんです」

……。

俺は、ふと空を見上げた。

今年も、色々と騒がしい学園生活になるな、これは。

Other side

「あく。たまの休日に昼酒……最高……っ」

「へいへい。お前もしかして苦労してんのか勇ちん」

「つたり前だろディーレン。こっちは大絶賛起業直後なんだよ、忙しいんだよー」

「そりやたまの休日のはしやぎたいか。……こっちはこっちで面倒なことになっててなあ……お姉さん、ビール三杯ぐらい持ってきてくれ
!!」

「……何があつた？」

「息子の方がかなりこじらせててなあ。あいつツイフェミじみてるよ

「というか、潔癖症こじらせて去勢が合法になることを絵馬に書くぐらい
追い詰められててなあ？」

「いろんな意味でヤバいなオイ。確かそろそろ高校生だろ？ どこ行
くんのだ？」

「……駒王学園高等部」

「お前のもか。うちも娘の一人がそこに決まっててなあ？」

「そっかあ。苦労かけそうだな」

「ま、あいつはトラブルメーカーじみてるがいい奴だからな。今度そ
れとなく言っておくよ」

「……」

「……」

「……やっぱ頼んだか？ 日美つちに」

「……ああ。だっているじゃん？」

「……頼んだぞ、日美つち……っ！」

和地 Side

で、暴走した窪川蓮夜及び、ついてきた接木優華を連れてきたのは
オカ研部室がある旧校舎。

「……っていうか窪川か。一応離婚してたから引岡じゃないんだな。」

「……で、申し開きはあるかしら？」

「女に情欲の視線を向けるやつは屑です。そんな奴は虐げられなくて
はいけないでしょう？」

「カズヒに真っ向から見られながら、堂々と言り返す根性はあるよう
だ。」

そしてその目には強い意志がある。これは何か言ったところで受け入れないだろう。そういう意思が見えている。

そして真っ直ぐに向き合ってカズヒを見据えー

「煩惱根絶っ!!」

—そのまま頭を床にぶつけるな!

「……なんか私、一週回って面白くなってきましたっ」

優華の方はもう楽しそうになってきてるな。はたから見てる分には確かに面白いかも。

ただ間違いないくこいつを放っておくと、ややこしいことになるだろうなあ。

「落ち着きなさい。今ので煩惱出てくるとか正気?」

カズヒもストレートに突っ込むけど、蓮夜の奴は真っ直ぐに目を見て反論の構えだった。

「当たり前です! スカートがあるから角度的に見えないけど確かにスカートがあるという事実。視覚距離からくるチラリズムに煩惱がわかなくてどうするんだ!!」

「お前実はスケベだろ!!」

俺はもの凄くツツコミを入れてしまった。

おい、こいつ絶対スケベだろ。性欲ありまくってるだろ。

今の状態でそつちに意識が向くとかスケベに決まっている。

「当たり前だ! 俺の親父は、母さんだけで性欲を発散しきれない性欲の奴隷なんだぞ!!」

「真顔で言うか?」

俺はストレートにツツコミを入れるが、蓮夜の奴は絶望の表情すら浮かべている。

「俺もいつかは性欲に吞まれて醜態をさらすかもしれないんだ。……それを断ち切る為にも、少しでも欲望が生まれない環境を作って去勢したいってのに……なんで、なんで「学費とバイト許可が欲しいなら、女子が多い高校に進学しろ」なんて言うんだ、母さん……っ」

「「それ絶対ショック療法!!」」

俺達全員、一斉に突っ込んだよ。

完璧にあれだ。父親に対する反抗心と自己嫌悪が絡み合って、徹底的なレベルで反発が強くなっている。

折り合いを何とかつけさせないとまずいな、これは。

つまるところ、引岡さんの方がカズヒに頼ったのはそういう事かあ。

自発的に去勢を目指すとか、こじらせてるなあ。坊主頭なのはあれか、当初は仏教系学校行って僧を目指すという事か。

「……はあ」

あ、カズヒはため息をついた。

「阿呆の極みね。そんな方法ではいずれ暴発して余計な被害を生むか、心病んで不幸な死を迎えるわ」

そう言い切ったカズヒは、その上で胸を張って宣言する。

「そんなに己を超えたいのなら、私が性根を叩き直してやる!! 特別風紀委員隊に入りなさい!!」

「……え?」

思わずきよとんとする蓮夜だけど、カズヒははつきりと断言する。

「特別風紀委員隊は、教室で堂々とコンドームを取り出し、まず子作りの練習をしようとはざいた実績を持つバカを止める為の部隊。あなたにとつても尊敬できるところがあるでしょう」

「そんな煩惱の権化が生徒会長つ!? そんな、あの女性ってそんな馬鹿なんですか!?!」

反論できない……。

頭はいいし勉強はできる。だがどこか天然で馬鹿なことをよくするんだ。

「貴方は貴方が立ち向かうべきものを見直しなさい。全てはそこからよ」

「……いいでしょう。その真意、見定めさせてもらいます!!」
……。

「大丈夫なんだろうか?」

「いやあ。見てる分には面白い毎日になりそうですよ?」

優華ちゃんは呑気だねえ。

俺は俺の最愛の女性が苦勞することを考えると、気が気じゃないつてもんですよ……はあ。

大会開幕編 第二話 忘れられがちだが、駒王学園は
偏差値高いのである。

イツセーSide

「なんてことがあった」

「始業式早々疲れたわ」

「……お疲れさんっ」

教室の席でダレる九成とカズヒに、俺はそう言うしかなかった。

引岡さんと接木さんの子供が来てるってのはともかく、引岡さんの子供が曲者すぎる。

え、マジで？ 年頃の男のくせして、なんでそんなに潔癖なの？

自分から性欲を断ち切る為に、去勢を目指す？ もう発想から理解できないしドン引きだよ。

あ、でも見えないんだけどきわどい角度のスカートが生むエロさには賛同する。あれは納得だよ。

「……まとめるけどさ。それって自分のエロさと折り合いつけてないだけじゃね？」

「でしようね。このまま拗らせて変な方向に行くか、逆にプツンいって馬鹿なことするかのと二択になりそうだよ」

カズヒが俺の意見にそういうと、すっごい溜息をついた。

「いやはや。また今年の一年生は……濃いのが来たね、色々」
木場もなんか苦笑してるし。

「一昨年入学して少しした時の、イツセー君関連の騒ぎを思い出すよ。いや、真逆だけど」

「悪かったな、エロくて」

ま、あの頃は俺も色々と周りが騒がしかったなあ。

……まあ確かに、冷静になると騒がしいな。最近はめつきり嫌われなくなっただけ。同情の視線は向けられている気がするが。

「それはそうじゃん？ 流石に公序良俗の類は無視したらダメだつて。……ひきつけ起こして倒れるほどつてのもあれだけだ」

「ふふん。男の子は基本的にエロですよ？ 男女関係に限らず、共存共栄は相互理解と配慮と寛容が必要なものです」

ヒツギに呆れられてヒマリにフォローされるけど、逆に言うとそのレベルかよ。

なんか凹むなあ。

「酷くね、全員」

俺はちよつとむくれて机に突っ伏すけど、ゼノヴィアはなんか思い出したのかうんうんと頷いていた

「ふむ。確かにかつての生徒会関連で資料を見ると、イツセー達に対する警戒度合いは酷かったね」

え、マジかよゼノヴィア。そんなに俺って悪目立ちしてたのか。

世界って、スケベに厳しい……っ！

「あ、ダーリンが更に凹んでる。大丈夫、おっぱい揉むって日本じゃいうのよね？」

「そ、そうだったんですか!? い、イツセーさんすっかりしてください」

なんか妙な日本文化にイリナとアーシアが動きそうになるけど、その後頭部をカズヒが素早くハリセンで張り倒す。

「落ち着け阿呆信徒共。それはネットだけの特殊文化と心得なさい」

「いやあ。だったらアーシア達が現実に示して痛い痛いイタイ!？」

ちよ、容赦なくアイアンクローやめて!？」

あ、カズヒの説教をまぜつかえした桐生が撃墜された。

カズヒもそろそろ堪忍袋の緒が切れかけているのか、割と容赦なくなってきたな。相手が一般人なんで、かなり加減はしてるけど。

「桐生? いい加減なアドバイスはそろそろ本気でやめなさい。何度も言うけど今後アドバイスをしたのなら、自分で実践して映像記録を

見せて解説しろと何度言えば……っ」

「その辺にしときなつてカズヒ。いやまあ、一回ガチでメた方がいい気もするけど」

キレかけてるカズヒを南空さんが宥めるけど、いやホントに騒がしいなコレ。

……とまあ、三年生になってクラス替えもあり、俺達も色々と変わっている。

今後、D×Dでの活動も考慮したクラス替えだ。俺達オカ研側の二年生は一か所に集まってるし、シトリー眷属は隣のクラスに集められている。南空さんも九成のこともあったから、こっち側に切り替えられた感じだ。

ま、松田や元浜もいるんだけど……あれ？

「イツセー、聞いているか？ このクラスに転入性が来るらしいぞ？」

「可愛い子かな？ ふふ、ちよつと楽しみだぜ」

と、俺より先に耳寄りな情報を持ってきただど!?

おいおいまじかよ。可愛い子だといいな……イタイイタイ。

「イツセーさん。スケベなことなら私達がいるんですよ？」

「そうだな。周りに目が行く前に、まずは私達にぶつけるといい」

「まったくですの！ ほら、おっぱいに触れて落ち着きますのよ〜？」

うおおおおお！ アーシアが嫉妬してゼノヴィアが説教してヒマ

リがおっぱいをおおおおとおおっ!?

「糞が……っ！」

「落ち着けお前ら、いやマジで」

松田と元浜に殺意を向けられるけど、九成がそこを止めてくれた。

ただ九成、割と頭痛を堪えてないか？

「落ち着け。人生初生○○○を見たばかりだろうがお前ら」

九成がそう言つて、松田と元浜を宥めてくれた。

………ん？

ちよつと状況がついてこれなくて、教室が固まった。

え、どういう事？

と、そこで二年生の時から同じクラスだった奴が手を挙げる。

さて、これから一年を過ごすクラスメイト達との始まりだ。僕も気を引き締めて迎えるとするかな。

「……それでは、早速ですがこのクラスは転校性を二人迎え入れます」
ロスヴァイセさんはどこか戸惑いながらそう言うけれど、少し違和感があるね。

おそらく、この流れならリアス姉さんが手を回したんだろう。つまるところ、鰐川亜香里と望月有加利の二人が転入してくるはずだ。

これまでの定番パターンだしね。リアス姉さんならそうするだろうし、相手が魔王血族ならなおのことだ。

「では、入ってきてください」

そうロスヴァイセさんに促され、教室のドアが開く。

……あれ？

そこに入ってきたのは見覚えのない二人。

ただ、一人はどこかカズビに似た雰囲気を持っている。

二人は仲良さそうに隣だつて教卓の前まで来ると、チョコレートをもつてきれいな日本語を書いた。

「初めまして、これから一年間お世話になります、ヴィーナ・ザンブレイブです。よければ今度、みんなで遊びに行きましょう♪」

「……シルファ・ザンブレイブです。同じく一年お世話になります」

……あれ？

和地 Side

「……一つ聞きたいんですけど、もしかして有加利と亜香里って学年

「違いました?」

俺はそつと席を外すと、リアス先輩にそれを確認する。

てつきりサプライズをまたやるのかと思ったら、思わぬ展開でちよつとびつくり。なので少し確認のために電話をしたわけだ。

すると電話の向こうで、リアス先輩が苦笑している雰囲気だった。

『……落ちちゃったの』

「はい?」

俺が聞き返すと、リアス部長はちよつと言いくそんな雰囲気だったが一

『亜香里の方は落ちちゃったのよ、転入試験』

——と、中々な情報をぶつこんでくれた。

いや、冷静に考えれば驚くほどのことではないな。

冷静に考えると駒王学園高等部は名門校だ。そりや普通の落ちる連中も出てくるだろう。

『ちなみに有加利は当時三年生だったから、大学入試試験を受けさせたら合格したの。私達が面倒を見ることになるわね』

「あ、そうなんですか。じゃ、あとでその辺りもつつきますか」

いやいや、まさかそういう流れになつてたとはな。

……なるほど、落ちたか。

カズヒも苦勞しているしなあ、それだけ難易度が高いというか。駒王学園は勉強ができるやつの場所というか。イツセーも平均点ぐらいは取れているから、高校生の全体で言うなら上側なんだよなあ。

ちなみに俺はかなり優秀側だ。自慢じゃないが英才教育を真剣に受けているから、ポテンシャルは高い。日本の国立大学に受かる自信がある。

ちよつと自分に自信を持ちながら入つてくると、既に教室はザンブレイブの二人に集まっている。

「二人つてもしかして姉妹なの? ちよつと似てないけど……二卵生の双子とか?」

「あ、義理の姉妹つてところかな? ちよつと説明すると時間がかか
るから……またあとでね?」

「なるほど、義理の姉妹。……興奮すべハツ!？」

「そこ、お姉ちゃんに変な色目を使わないで」

……とりあえず色々と人が集まっているな。

と、俺やカズヒの方に視線が合うと、二人とも会釈をしてくれる。

ま、この流れだとちよつと話をするってタイミングでもないな。後で時間を作るとするか。

のような才媛には負けるぜ。

ま、だからってそこまで気にする必要はないさ。

「あんまり気にすんなよ。学校が違うぐらいでそこまで酷いことにはならねえさ」

あんまりうまいことは言えないけど、そこは安心してほしい。

だってそうだろう？ 友達が進学する学校が違うなんて、そんなに珍しい事でもないし。それに一緒の家に住むなら、それぐらいのことで大きな変化はないって。

「俺は亜香里の友達さ。もうなってるんだから、学校が違うぐらいで態度なんて変えねえよ。そんなに器用じゃないし」

うん。そんな難しいことをする気はないし、したいとも思わないし。

……それを言ったら、既に大学に行っているリアスとかどうなるんだよって話になるしな。

うんうんと自分で自分に頷いていると、なんか亜香里は急にうずくまってる。

あれ、なんか気にしちゃったか？

「そ、そういうの、当たり前に言ったら駄目だと思うよ？」

……あれ？ なんか顔を赤くしてるぞ？

え、俺そんな怒られるようなこと言っただけ？

ちよつと戸惑っている、後ろから勢いよく抱き着いてくる感触が！

このおっぱいの感触は、ヒマリか！

「ふっふっくん！ イッセーったらハーレム王街道に妥協が無さすぎですよの？」

「え、どゆこと!?!」

なんでそこでハーレム王の道が出てくるんだ!?!

「むう。これがイツセーという事なのじゃな？ 油断も隙も無いとはこういう事か」

「……ええ。本当に、油断も隙も無いところがあるのよ」

九重がなんか感心しているし、リアスもなんか呆れてるし。

え、俺なんで責められ気味!? フォローしただけでそんなこと言われるとか、酷くない!?

畜生、マジでなんでだ!?

「……なんか、イツセー君がごめんね?」

「気を付けてください。イツセー先輩、こうなんですう」

木場とギヤスパーまで亜香里にフォローを入れてるし。俺のフォローをしてほしかった……っ

和地 Side

なんか、イツセーを基点として話が盛り上がる中、亜香里は顔を真っ赤にしながら一旦距離をとっていた。

「有加利ちゃん。ちよつとその、なんか……うっつ!」

「はいはい。亜香里も大変ね」

そのまま有加利に逃げ込むと、有加利も苦笑しながら頭をなでて落ちつかせる。

うんまあ、ナチュラルに口説いてたな。

ああいう事が言えるから奴はモテる。そして情に厚いから何とかする為に体も張る。なので惚れ直す。以下無限ループ。

本当に、スケベの度が過ぎるというガントリークレーンが無ければ優良物件すぎる。駒王学園高等部に入学して赤点回避し続けてるし、能力も優秀なんだよ。

……まあ、我慢するだけでひきつけを何度も起こすレベルのスケベだしなあ。周知されているうえにその上で我慢し続けている昨今、

イツセーの評価が大幅に上がるのも当然と言えば当然か。

俺はその辺りを紅茶を一口飲みながら考えると、あえて踏み込むことを考えてみる。

「因みにイツセーはハーレム王を目指し、ハーレムを作る為に上級悪魔を目指した男だ。性格上頑張つて全員愛そうとするだろうし、その為の努力は惜しまない」

うん、改めて言うが中々に良物件ではある。

一年足らずで上級に昇格した時点で、能力はある。子供に大人気のおっぱいドラゴンなんて存在でもある以上、魅力も財力も十分ある。もはやハーレム王の道は確定だ。間違いなくハーレムを作れる男だ。

割とお勧めできる男ではあるわけだ。

その辺り、ちよつと聞いてみよう。

「その辺どうなんだ？ 少なくとも、一緒になれば全力で愛してくれる男だぞ？」

「あく、そうなんだけどね」

お、顔が赤くなつてるところもあるし、これは脈ありか？

ただ、亜香里だけでなく有加利も含めて、少し雰囲気沈んでいた。

「歩人君のこともあるから、まだそんな気になれない……かな？」

……なるほど、な。

「……そうよね。歩人君も町も皆も、あんなことになったしね」

有加利も少し沈んでいるが、それもそうだ。

自分達が深く関与する形で、多くの人達が失われた。更に、仲の良かった男子が自分達を助ける為に犠牲になった。

つまるところ、歩人って奴は二人にとって大事な人だったんだろう。だからこそ、尚更重い。

そうだな。そこは時間が必要だろう。必要な時間だと、そう思う。「分かった。ま、無理に推し進めるような真似はしないさ」

俺はそう言うってから、話を打ち切る前に一つだけ。

「ま、あいつは本当に基本は優良物件だからさ？ 気に入ったんなら迫ってもバチは当たらないぞ？ ハーレム願望を叶える男だから、増

員は大歓迎だろうし」

その辺りは安心してほしい。いや、日本人としては安心できないかもだが。

「……君もだと思っけどね」

ちなみにぽつりとそんな有加利の言葉が聞こえてきた。

うん、俺はまあ……大歓迎ではないけど無理に追い払ったりはしないです。

カズヒSide

「……ふう。で、大学生活はどうなの?」

「始まったばかりだけど楽しみだわ。ふふ、新しくサークルを立ち上げようと思ってるの」

「ふっふっふ。その時はお世話になっちゃおうかな? 先生もお世話になっちゃおうかな?」

と、私が話を振るとリアスもリヴァもノリノリで返してくる。

リヴァも大学進学を考えていたけれど、これを機に実行。ノリノリで大学生活を楽しもうとしている。

まあ、本命は私達が入学してからになるでしょうけど。タイミングをそつちに合わせるつもりかと思っただけれど、この女最悪留年してもいいか思っけそうね。

ま、それはいいでしょう。

「で、どうするのかしら? どうも我らが二大巨頭、またしてもフラグを立ててるけれど」

私は肩をすくめるけれど、なんかジト目が向けられた。

「カズヒが言う?」

失礼な。

「私はむしろ大歓迎よ。自分の発言には責任持つわよ、私」

そもそも和地がハーレム作ってるのは、そういう事でしょうに。

しかもメンツは全員、日美子の過去真実を知っても受け入れてくれる。感謝することこそあれ、文句をつける理由はない。

ええ、和地にとつてとつても幸い。私にとつても悪い話じゃない。なら問題ないというか、問題が思いつかない。

何よりー

「それを受け入れられる私でいたいと、かつての経験から強く思ってたもの。素直に受け止められる自分に感謝したいわ」

ーそれが私の本音だ。

この価値観を、考え方を、あの時持てていれば何かが違ったろうか。いえ、私は今の自分を投げ捨ててまで過去をやり直そうとは思わない。なら、私にとつてはそれで十分だ。

だから、私はグラスを向けると笑みで答える。

「そういうわけで、今年度もよろしくね?」

「ふふっ。そういう事ならこちらこそ」

リアスがグラスを打ち付けてくれるけど、その瞬間に後ろから抱き着くリヴァが。

この女、何時の間に!?

「くう〜! ボスつてば感激すること言ってくれらるんだからあ〜つ!!」

「はいはいボスいうなく」

まったく、これは困ったものね。

……ん?

急にリアスが真顔になったわね。

どうしたのかと思ったら、こちらに複雑な表情で振り向いてきた。

「……フロンズから連絡が来たわ。なるべく早く会って伝えたいことがある……つて」

「……うわぁ」

面倒ごとの予感に、私とリヴァは同時にうめいてしまった。

大会開幕編 第四話 想定外の事態はいつ起こるか
わからないから想定外である。

和地 Side

そんな日の夜、思わぬ形で来客が現れた。

と言つても、数日前から「少し話すべきことがある」と前もって通達はあつたようだ。

で、地下に俺達が集まつたうえで話をするのは――

「……まあ、手短に済ます努力はさせてもらう」

――フロンズ・フィーニクスだ。

「兵藤一誠の上級就任祝いなどもするべきだろうが、私達は世間話をする間柄でもないのですね。それは書状にして送り、ここでは要件からさせてもらう」

そう前置きするフロンズは、少し疲れている表情だった。

いや、こいつはここ最近とにかく忙しいだろう。大王派の実権を殆ど握っており、その分の仕事は多い。その上で、万が一にでもひっくり返されたりしないように内にも外にも対応をしているわけだ。

その上で、わざわざここちに来て伝えることがあるという。嫌な予感がする。

「……想定外の事態が起きて、厄介な連中が発言力を増してしまった。そちらにちよつかいをかけるかもしれないので、気を付けてほしいという事だ」

「どういうこと?」

リアス先輩が促すと、フロンズは頷いて魔法陣を操作する。

「実は和平直前に滑り込むように、大王派である計画が進められていた」

そう言いながらフロonzが映し出す文字は、「サウス計画」

「……南？ どういう名付け方だよ？」

「いや違う。これは略称で正式名称はこう書くのだ」

イツセーにそう訂正しながら、フロonzは魔法陣を器用に操作すると、映像に文字が映し出されると。

「……正式名称、サウザンドスレイヤー計画。時間流を操作した特殊結界領域内で鍛錬を積み、一騎当千の実力者になる……という名目で作り上げた計画だ」

「つてことは、本命の目的は別にあると？」

俺がその辺を突つくと、フロonzはためらうことなく頷いた。

「ああ、はつきり言えばただのガス抜きだ」

ガス抜き、か。

つまり何らかの不満を抑え込む為、はけ口となる禿口を立てることで思考を誘導したという事か。フロonzらしいやり口だな。

そしてフロonzは肩をすくめる。

「どの勢力にも過激派はいる。特に和平においては「結ぶにしても悪魔有利にすべきだ」という意見が大王派こちらの若手に多くてね。……我が一族の尽力により、悪魔の出生率が右肩上がりなのが仇になった」
「なるほどね。悪魔そのものの復興が加速しているのなら、和平をすすめるにしてもそれを後ろ盾に自分達が支配する形にしたいというわけね」

リアス先輩がそう呟くと、フロonzは頷いた。

なるほど、な。

フロonzの家が行った数多くの手法により、全体的は発言率が大王派寄りになるほど大王派主体で出生率が向上した。

必然、若手悪魔はそこから生まれた世代。言い換えれば、種の存続すら危ぶまれた時代を知らない。復興が始まり、これからどんどん富んでいくという安心感ばかりがあるわけだ。

となれば、貴族であることもあって傲慢になる者もいるだろう。そういう連中からすれば、教会や墮天使と和平をする必要性すら思い至らない者も出るかもしれない。むしろ、自分達に少しでも優位にした

いというある種当たり前の方向でとどまっているだけ感謝すべきぐらいだろう。

だが、何よりも絶滅戦争の再開を避けたい側からすれば困ったことだという事か。

「そこで私は口八丁手八丁で、そういつた貴族達を現実時間で半年ほど隔離させてもらったのだ。……もつとも、手違いで更に三か月ほどかかってしまったがね」

絶対手違い違う。計算づくだ

ほぼ全員の心が一つになっていると理解できる。いやマジで。

「……手違いねえ？ 誰かが設計段階からいじつてたのかしらあ？」

リーネスがさらりとつついてみるけど、フロンズは微笑みで受け流す。

その上で素早く操作をして、結界の情報を明かしていく。

「因みに説得内容は「無能のサイラオグがバアル次期当主の座を掴めたのなら、真に才能ある者が同じように鍛えれば、もつと短い時間でそれ以上になって当然。その力を見せつけければ天界や教会、神の子を見張るも跪くだろうさ」と言ったのだ。彼を引き合いに出せばプライドの折れてない純血悪魔は乗せやすいものだ」

わあ、凄い冷笑。

「あらあら。簡単に踊ってくれるなんて可愛らしい方々ですわね♪」

ドSな笑顔でいじりがいのありそうなやつを見つけた朱乃さんが怖い。

とはいえ、だ。

本来は、フロンズもこれで成果が出るなんて思ってたんだらう。むしろそれにより、結界から出た連中にマウントをとるのが目的かもしれない。

なにせサイラオグ・バアルの鍛錬は、奴の精神力が卓越しているからこそそのものだ。生半可な奴では到底耐えられないような心身をいじめる所業、そう簡単にできることではない。

だから結界が解除されたとしても、奴を打倒できるものなどまずいないだろう。九か月で鍛え上げられる前のサイラオグにすら劣る

連中が出てくるはずと踏んでいた。

つまるところ、半分詐欺だ。最初から「これは無理だろう」という条件を付けたうえで、「出来たらいいよ♪」とかいうようなものだ。むしろこれで失敗してもらおうことで、「できなかつたからダメ」という為に言質とつたようなものだろう。

元々純血上級悪魔とは、生まれ持った才覚を自然な成長で高めていくもの。それができるからこそ、それ以外をする発想がまず出ない。D×Dに参加している若手ルキーズ・フォー四王や、あの手この手で組織力を高めるフロンズ達みたいな、優れた努力家の方が少ないわけだ。

だから、こそ。

俺が悟っている内容を、リアス先輩も思い至つたらしい。

小さく冷や汗を一筋流し、リアス部長は真っ直ぐにフロンズを見る。

「……成果、出てしまったのね？」

「……痛恨の、失敗だといえるな」

ああ、それは確かに問題だ。

何より時期が悪い。具体的には、「運営側の神仏魔王が、願いを叶える」って優勝賞品のあるアザゼル杯が悪い。

世界の混乱をもたらす願いは叶えないだろう。だが、混乱を齎さない範囲で各勢力に冥界政府への従属を命じる可能性はある。例えそうでなくても、そんな奴らが大手を振って暴ればある程度面倒なことになるかねない。

フロンズもかなり困っているのか、額に手を当てて俯きだした。

「彼らの暴走を避ける為、和平に伴う各種情報を物資と共に定期的に送っていたことが仇となった。応用すれば、人員を輸送することも可能だと気づいた時には遅かった……っ」

おいおい、なんだそれは。

何がどうしてヤバくなったと言いたい。

ただ、そこで額に手を当てたのがロスヴァイセさん。

「……なるほど。つまり後天的な強化もしてしまつたのですね？」

こ、後天的な強化？

「それって、まさか王の駒……？」

木場がそう呟くが、俺達が戦慄するより先にフロンズが首を横に振る。

「それは安心していい。ゼクラム殿も、暴発しかねない連中に王の駒によるブーストは危険と判断していたようだ。その辺りは禁止を厳命する文書が送られている。……問題は、英雄派や、彼女だ」

「……へ？」

そう言ったフロンズは、視線を給仕を担当している春つちに向けてる。

え、どういうことだ？ 春つちも困惑してるし。

俺達が戸惑っていると、盛大な溜息をルーシアがつける。

「……つまり、マルガレーテさんの経験を人為的に行ったと？」

あ。

俺達が全員納得していると、フロンズが小さく頷いた。

「計画はデコイとはいえ大王派の主導故、当時の私ではカバーしきれなくてね。マルガレーテの情報は何とかシャットアウトしたが、外の支援者達が英雄派の人為的禁手と成田春奈の禁手の併用を考えたのだ」

そう告げるフロンズは、素早く魔法陣を操作すると幾人もの人間の情報を映し出す。

その彼らは一様に神セイクリッド・ギア器を保有していると書かれている。

「ここに書かれている者達は、一部の大王派がリストアップしていた神器保有者だ。彼らは荒事への抵抗や種族の拘り、神器という異能に対する忌避から誘いを断っている」

そう前置きしたフロンズは、その上で肩をすくめる。

「だが何かが転べば代価を用意して交渉する余地があるだろう。そう踏んでリストアップされていた彼らの存在。それが英雄派が広めた禁手の到達方法と成田春奈という前例を踏まえ、思い至ったのだよ」
盛大にため息を一旦吐いてから、フロンズはげんなりをした表情で告げる。

「……己の神器を他者に適合する形に仕立て直して植え付ける。そん

な禁手に至らせれば、他種族を転生させる必要もない。そんな発想に至ったのだ」

あくなるほど。それはやる。そういう連中出てくるよ。

どの種族にも純血主義や他種族嫌いはいらるだろう。人間だって外国人や人種の違いを嫌悪する連中にはいるし、種族がマジで違うなら当然いる。悪魔ってそういう奴らが割と多いし。

だからこそ、神器に価値を感じて転生悪魔にすることがトレンドであるからこそ思い至った。

神器さえ代価を払って受け取れば、その方がいいじゃないかと。

「……フロンズさん」

そこでイツセーが、少し冷えた声で声を出す。

状況次第じゃ、殴り込みをしかねない雰囲気だ。

「その人間の人達、大丈夫なんですか？」

緊張感が、増した。

確かにそこは警戒するべきだ。

その人達は無事なのか。もしそうでないのなら、大王派にとってのスキャンダルでは済まないかもしれないし、俺達にとっても無視できるものではない。

ただ、フロンズはしつかりと頷いた。

「流石にその心配は杞憂だ。そもそんなことをする連中なら、強引に無理やり転生させているだろうに」

なるほど。どうやらその心配はないと。

俺はちよつとほつとするが、だが問題はそこではない。

それを改めて告げるように、フロンズは眉をしかめている。

「神器の移植と体感時間で一年か二年の拘束。それに伴い彼らは日本円換算で平均一億円以上が約束された。……転生悪魔にして何百年も囲うよりは安上がりだからな」

なるほど、つまり――

「そいつら、どいつもこいつも生身のサイラオーグ・バアルを倒せる連中だらけということか？」

――そういう事だと、俺は当たりをつけた。

「……大半は勝算すらない者止まりだ。割合で言えば一割以下で、更にその大半が不利を強いられるだろうな」

「フロンズはそう否定するが、そういう事だ。」

「つまるところ、一割はサイラオーグ・バアルでも生身だと苦戦するレベルという事か。」

「成功といえるのは二十名いるかいな。だが全員が素で最上級悪魔を超えている。神器含めてなら魔王クラスは、条件付き三名を含めて合計七名……うち一人は、超越者になりうるとされている」

「……うわあ」

誰が言ったかは分からないが、まさかそれほどの連中が過激派とは。

大王派がデイハウザー・ベリアルの告発で大きく発言力を下げている。でないと本当はややこしい。主導権をフロンズが握っていることありがたい。

「……流石に他の者達に刺激を与えたくない故、情報は絞る。だがある程度の情報を前もって伝えておくので……メタを張つても叩き潰してくれ。鼻っ柱を折ってくれないと私達もだが君達にも不利益になりかねん」

「……この男がここまで言うほどか。」

控えめに言って、かなり最悪なんだろうなあ。

Other side

冥府の底にて、ハーデスは資料を確認していた。そしてその近くには、二人の女性がいる。

「……どうでしょうか、ハーデス殿。この調子なら一年もかければ50万體は用意できますが？」

そう語る鎧を着た女性に、もう片方の刀を刷いた女性はため息をつく。

「……あまりそういう言い方は好きませんね。悪魔である以上ある程度の罪はあれど、幼子相手には加減するべきでは？」

その言葉に、鎧の女性は肩をすくめる。

「それは失礼。とはいえ、容赦がないのはそちらも同じでは？」

「でなければハーデス神の配下とはならないさ。私はお前達の価値観は好かないと知っているだろう？」

棘のある言葉の応酬が繰り広げられるが、ハーデスがぼんと資料を置くとそれを遮る。

両者は共に理解している。自分達はそりが合わないが、しかしハーデスと手を組むことを選んだ事実は変わらない。そしてお互いに利用できる関係でもあると。

ゆえに、ハーデスがまとめてくれる分には従うことを互いに決めている。

『……三か月だ。三か月で少しでも性能が高い者を生み出せるか？』

「いいのですか？ そうなると限界を超えて壊死する可能性があります。治療して持ち直すにしろ、一年は安全を確保したいですが」

『構わぬ。あまり多くてもこちらが管理できぬしな。何より、数より質の方が重要だ』

その言葉に、提言をした鎧の女性は一步を下がる。

その上で、刀を刷いた女性はハーデスを真っ直ぐ見据える。

「ハーデス殿がそう言うのなら構いません。ですが、その数で世界の覇権を握れますか？」

その質問は、彼女にとって最も重要な点だ。

「私は、貴方以外に世界の覇権を握るべきものがないと判断したからここにいます。そしてチームD×Dやほかの神々が油断できない実力者だというのも、忌々しいですが認めています」

そこまで告げ、そして真っ直ぐに問い詰める。

「勝てますか？ それで」

『……勝つ為だ。奴らほどの実力があるのなら、有象無象を集めたところで勝率は上がらぬ』

ハーデスははつきりと断言する。

『最優先するべきは質じゃ。魔王クラスを増やさねば意味がない』

その言葉に、女性は一步を下がる。

「承知しました。なら、私も神滅具保有者を倒せるように己の牙を研ぐとしましょう」

その言葉を受け、ハーデスは頷いた。

『うむ。……まずは例の祭りだ。いい機会ゆえ、奴らの力がどれほどか身をもって体感するとよい』

そう語り、そしてハーデスは鎧の女に視線を向ける。

『そして貴様は準備をせよ。……人造惑星^{プラネテス}とサーヴァントは不本意だが、貴様がそれをもってして力を成すのならそれを借りるとしよう』
「承知しました。では、いずれロキ様を迎える為にも勝たせていただきます」

そう返す女性に頷き、そしてハーデスは含み笑いを漏らす。

『戦力は相応にある。ゆえに……動き出す準備をするとしようか』

かつて、ヴァーリ・ルシファーは兵藤一誠にある言葉を語った。

「君にとっての平和が苦痛に感じる者もいるという事さ。」

その真理が、牙となって彼らに向けられるのも時間の問題だった。

大会開幕編 第五話 新たなる出会いは（敵味方問わず）突然に

和地 Side

朝、俺は目を覚ますと伸びをする。

「あく。よく眠れた」

そう言いながら左右を見ると、そこには一糸纏わぬ姿で眠る、春つちとリヴァ先生。

うん、俺って本当に酒池肉林。

まあそれは置いておいて、だ。

「……そろそろ、ガチで参加メンバーを探さないとなあ」

新生兵藤邸は色々な意味で拡張されている。

本館は五階建てになり、敷地面積も二倍を超え、棟数も増えている。イツセー達が暮らし基本的な設備がすっかりとある本館。五郎さんと三希さんが住まう離れ。上にヘリポートまで用意しているガレージ。加えて他のメンツが住まう別館。

……そして、俺用の第二別館が設定された。

どこから突っ込めばいいというか、とりあえず俺とカズヒを含めた俺達用のスペースだ。追加されることを前提として設計されている三階建て。どこに力を込めているんだオイ、と言いたい。

ちなみに一階にはある程度の共有スペースがあり、LDKや風呂まである。まあ本館で食べたりした方がまとまっというから問題ない

が。

とはいえ使わないのもあれなので、たまに作ったり食べたりしているわけなんだけどー

「……チーム構成、マジでどうしたもんか」

ー俺は卵かけご飯をかき込んでからため息をついた。

いや、本当にチームどうしよう。

他のメンバーは他のメンバーで動いているけど、さてどうしたものか。

「ゴメンねカズ君？ 私も私なりのしがらみってのがあつてねえ」

「いやホントゴメン、和っち。ちょっと冥界の上級悪魔がケンゴさん達との連名で要請してきて」

と、一緒に食べながら二人が謝ってくるけど、それはいい。

誰だつてしがらみや関係はある。当然、俺以外の関係を持っていて当然だ。

リヴァ先生は世界各地を渡り歩いているし、主神の娘。春っちは春っちで冥革連合にとつて相応の強い人物でもある。二人とも俺以外にも関係があつて当然だ。

そっちが先に接触すれば、それは呑むだろう。俺がこういうことをするという印象が無いのも当然だろうしな。これは仕方ない。

ただ、俺は一体どうしたものか。

カズヒはカズヒで独自にチーム作ってるし。他の頼れるメンツも凄まじく他でチームを作ってるし。

これマジでどうしたもんか。

「……で、どうすんだよ？ アタシらだけで出るってのは舐めプだろ？」

「ああ。絶対勝てない」

神まで出てくるんだぞ？ レーティングゲームの指折りプレーヤーまで出るんだぞ？ 勝てるか。

そもそも俺の参戦コンセプトは「極晁を否定した者としての責任」だからな。参戦するからには遊びじゃなく、可能な限り勝利を目指さねば。カズヒに勝てるチームを目指したいしな。

つまるところ、頭数はある程度揃えたい。もちろん質も揃えたい。でもどうしたもんか……っ

「流石に緋音さんを異形まみれの戦いは避けた方がいいしなあ」

あの人はまだ異形慣れしてないし、その辺りを気を付けないと。異形まみれの国際レーティングゲームとか、避けた方がいいだろう。メンタルがゴリゴリ削れるはずだ。

ただオカ研のメンツはほぼ壊滅。殆どのメンツが埋まっている以上、俺達はどうしたもんか。

さて、どうしたもんか。

「いっそのこと募集でもしたらどうだよ？ お前絶対人気あるし、募集すりゃ集まるんじゃないか？」

「うーんどうだろう？ 只集めればいいわけじゃないでしょ？ コンセプトに則って、優勝も狙えそうな質も考えないとさ」

ベルナとインガ姉ちゃんがああでもないと言いつつ、実際どうしたもんか。

「優秀な人物でかつ協力してくれる人か。そう簡単には探せないよな……」

真剣に悩みどころなんだが、どうしたものか。

ただ集めるだけでは優勝は狙えない。だが優勝が狙えて俺達とは別の連中にいる実力者は、当然別のチームに参加するだろう。

困ったものだ。さて、どうしたものか。

真剣に悩みだす俺達に、足音が聞こえてきた。

「……お早う。そっちは早かったのね」

と、カズヒが下りてくると素早く流れるように卵かけご飯を作り出す。

「おはよお。……さて、卵かけご飯を」

そしてリーネスも下りてくると、これまた流れるように卵かけご飯を作り出す。

「そーいやお前らはチーム完成したのか？ いや、夜更かししてんならできてねえのか？」

「いえ、夜遅くまでしてたのはゲームの研究ね。チーム人員はリザー

ブ梓まで確保しているわ」

さりとベルナに返すカズヒは、逆にこつちに首を傾げる。

「そつちはまだ集まってないの?」

「そうだね。オカ研のメンバーがほぼ埋まってるから」

苦笑するインガ姉ちゃんだけど、実際これって困っている。

カズヒもカズヒで少し首を捻ってくれている。

というより、割と困り顔だ。

「それは困るわね。流石に歯応えの一つは欲しいし、どうしたものかしら」

なんだよなあ。

真剣にどうしたものか。流石に三人で参加とか舐めプすぎる。勝算という概念は流石に欲しい。

うくん。朝食が楽しめないぐらい悩みどころなんだが。

困っていると、リーネスもこつちに視線を向けて首を傾げている。

リーネスも流石にちよつと困るってことで――

「なら、懲罰隊の人達からスカウトすればあ?」

――と思つたら提案だった。

「……大丈夫なのか? ぶつちやけ、メイドの連中って私らが三強でぶつちぎりだろ?」

ベルナがそう言うけど、リーネスは小さく首を横に振る。

「増員組は戦力も考えられているわよお? それにこれまでの件があるから、実力が相応になるメンツから選ばれているしねえ」

「……あくなるほど。その手があつたか」

面接はきつちりしているから人格面は保証がされている。そういう意味では安全牌。

そして増員は基本的に、五郎さんと三希さんの護衛も兼ねている。当然だが戦力として考えられており、同時に俺達の戦ってきた敵を考えている。つまり実力のあるメンツも少なからずいる。

……うん。これ、案外いけるんじゃないか?

イツセーSide

「……どうしたもんか」

俺はちよつと悩んでいた。具体的に言うと、アザゼル杯でのチーム構成だ。

とりあえず、俺の眷属とボーヴァが確定。というより、ボーヴァの押しに負けたって言った方がいいな。

ただし、それでも合計で六人。ちよつとこの人数で国際レーティンゲームに出ても優勝はきついよなあ。

出るからには優勝するぐらいのつもりでいきたい。少なくとも、神が相手だろうと無様な試合はしたくない。

できればあと一人か二人は欲しい。それも、強い奴なら尚更いい。……だからこそ、俺は決意した。

ただ――

「なんでお前までこっちに來てるんだよ?」

「俺にだって事情があるんだよ、事情が」

半目で返す九成だけど、こいつまでアジュカ様のところに行くとは思わなかった。

「……まさかと思うけど、チームメンバー候補の当てがないか聞くんじやないだろうな?」

「誰がそこまでするか。候補にしたいメンツ関連で、一応許可をとった方がいいかと思っただけだ」

そう返す九成は、肩をすくめた。

「で、アポイントメントを取ろうとしたら來たらどうかって言われた

んだよ。お前もそんな感じだろうに」

あく。こいつもそう言われたのか。

なんでも、今日はシヴァ様と話をしているけど、半分世間話で短いからちよつと会ってみたらどうかって感じらしい。

俺、シヴァ様に気に入らているみたいだしな。なら話をする機会が増えてもいいだろうって感じなんだろう。

電車を降りて駅から歩きつつ、俺達は世間話をしながら話している。

「で、そっちはチームメンバーでどうするんだ？ 俺は家の懲罰人事な人達からスカウトするって方針になってるけど」

「あ、そういう方法があったか。……俺もそっちにした方がいいのかな？」

なるほど。その手があったか。

ならそういう方向で話を持っていった方がいいだろうか？ アジュカ様から紹介してもらおうより、よっぽど角が立たない気がするし。

あ、でもアジュカ様が紹介できる人なら絶対頼れるしなあ。そういう意味だとちよつともったいないか？

うくん。ちよつと迷うな――

「……なんでダメなのおおおおおっ!!」

――なんか絶叫が聞こえて、俺達は視線をそっちに向ける。

なんか、自販機の前ですごく苛立ってる女の子がいるな。

金髪の女の子だけど、どうしたんだ？

「こ、こうなったらぶっ壊してでも――」

「待った待った!!」

なんか物騒なことを言っているから、俺は思わず止めに入ったよ。いやなんだよ全く。むしろ怖いって！

慌てて割って入って止めると、なんていうかすっごく可愛い。

人形かってぐらい整ってるその女の子は、こっちをまじまじと見ると目を丸くした。

「……うわっ!? え、なにになに?」

「何々じゃねえよ。何物騒なこと言ってるんだよ」

九成がツツコミを入れて、俺もちよつと首をかしげる。

「どうしたんだい、君？ 自販機が壊れたとか？」

本当に何なんだろうと持つてると、女の子はお札を一枚突き付けた。

「これ！ 入れても買えないし出てくるの！」

俺達はそのお札を見て、納得した。

ああ。なんかお嬢様のな感じなんだ。

「……自販機つて、基本的に千円札までだぜ？ それ一万円札だし」

一万円札OKな自販機つて少ないからなあ。

それで反応しなくて出てきてたりを繰り返して、我慢ができなくなつてたりしたつてわけか。

九成も納得したのか後ろを向いて、うんうんと頷いていた。

「ああ、これは五千円札までだな。どっちにしても無理だ」

あ、そうなのか。

女の子の方もお札を見てから、愕然となっている。

「ガーン!? そんな、コーラつての買って飲んでみたかったのに!？」

本当にお嬢様なんだな。コーラを飲んだこと無いのか。

俺はそつと財布を確認すると、千円札が二枚あった。

「九成、あとで返すから三千円貸してくれよ。お札で」

「ん？ ……ああなるほど」

納得して千円札三枚ほど渡してくれたので、俺も自分の二枚を足してそれを女の子に向ける。

「ほら、これとその五千円札を交換してくれ。そうすりゃ買えるから」

ま、これぐらいならいいだろ。

お金の総額は変わってないしな。問題ない問題ない。

そう思つてると、その子はぱあつと笑顔になった。

うん、女の子は笑顔が一番！

「わーい！ ありがと、ウエルシユ・ドラゴン 赤龍タイタス・クローウ 帝に涙換救済！」

—え？

俺達はちよつと顔を見合わせるけど、まあそれもそうか。

異形って意外と人間界でも活動してるからな。俺達だって有名人だし、そりゃ知ってー

「——ツ!?!」

——そう思った瞬間、凄まじい寒気を感じた。

なんだこのオーラ。間違いない、最上級悪魔とかそんなもんじゃないオーラだ。

低めに見積もっても魔王クラス。下手すりゃ、武闘派の神様に匹敵するんじゃないか？

しかもそいつ以外にも複数はいるだろ、コレ。まずくないか!?!

「……イッセル、行くぞー！ そのアンタはここで待ってる!!」

「分かってるー！ 危ないから追いかけてちや駄目だぞ!!」

九成と俺は女の子に釘を刺すと、急いで走り出す。

オイオイオイオイ!

こんなタイミングでアジュカ様に襲撃とか、いったいどんな連中だ。

ワンチャン勝ち目があるかもってオーラなのが不味い。まさか禍の団か!?

ああもう！ なんだってこんなタイミングで!!

Other side

「え、ちよ………いっちゃった」

少女はそう啞然とすると、その上で首を傾げる。

「でもこの気配、そういう事だよね……ボクが行った方がいいかな？」

そう考える少女は、しかし更に首を捻る。

「でも、追いかけてやダメとか待てとか言ってたし……どうしよう
くっ!!」

頭を抱えて困る少女だが、この数分が問題を更にややこしくするこ
とに繋がるとは、まだ誰も気づかない。

世界のまだ見ぬ強者達が集う、アザゼル杯。

その中でも最も驚愕を持って語られるだろう少女が、そのきっかけ
を掴むことになることをまだ誰も気づかない。

大会開幕編 第六話 真徒顕現（前編）

Other side

「へえ。赤龍帝と^{タイタス・クロウ}涙換救済が来るのかい？」

「ええ。どうやらアザゼル^{カツテ}杯でのチームメンバー集めに苦勞しているようで」

「それ、僕達があまり口利きできないんじゃないのかい？」

「そうなのですが、彼らも苦勞しているのでしょう。もつとも、九成君は面白い発想を得ているようですが」

「なるほどね。それはちよつと気になるけど……」

「なるほど、まあ当然気づくか」

「……三人も入ってくるとはね。ここの結界もそれなりに強化したはずなんだが」

「悪いが無駄だ、アジユカ・ベルゼブブ。立地が悪すぎる」

「へえ？ つまりこの立地が君達の侵入に手を貸している……と？」

「その通りだ、破壊神シヴァよ。もつとも、あまり多用できる手段ではないがな」

「それで、君達はどちら様かな？ もっとも、友好的ではないようだが」

「そうだね。まさかと思うけどハーデスの配下とかかい？」

「いや、私は禍の団の新たな象徴をすることになった者だ。……今日の用事だが、一つは交渉だ」

「へえ。あの禍の団に新たな象徴が着くとはね。……リゼヴィム皇子ですらリリースをもつてして制御に難があつたのに、よくやるものだよ」

「それだけの存在という事でしょう、シヴァ様。それで、交渉とは」「いわゆるダメ元というやつだがな。ある条件を飲んでくれるのなら、私達は禍の団から手を切ってもいい。……まあ、確実に無駄だろうがな」

「なるほど。いったい何だろうか？ 聞くだけ聞いてみるとしよう」

「単純なことだよ、アジュカ・ベルゼブブ。各勢力との折半でいいので、この地球という星から人類の九割九分を引き取ってほしい」

「……論外だね。それをするには人類全体に異形を明かす必要があり、それはまだ時期尚早だと僕達は判断している」

「だろうな。まあ、万が一を考慮した者のついでだよシヴァ神。では本命に移らせてもらう」

「……ほう？」

「流石に悟るか。では本命の目的たる、私が主神や超越者と比較してどれだけの性能があるかを試させてもらおう」

「……一つ聞いてもいいかな？ 君達は、いったい何だい？」

「気を付けてください、シヴァ様。……俺の覇軍の方程式が悟つています。奴らはこちらが知るとの存在とも違う。近しいのは死徒ですが、根本からして完全上位互換だ」

「ふむ。実を言うと我々も全てを分かっているわけではないが、まあ生物とはそういうものだ。……なので、雑に答えておこう」

「我らは真徒。星と繋がる共生者にして代行者。そして――」

「この力は……っ」

「アジュカ、最初から本気で挑んだ方がいい。この力は、有限となったオーフィスに迫るだろう……っ」

「そしてその一派たる人類の裁定者。疾風殺戮・c o mの後援者、洗殺隊と名乗っている」

和地 S i d e

なんだこの気配は。シャレにならない……っ

急いで走っているが、近づくごとに気配がやばいことになっている。ついでに言うと、結界で一般人は分からないだろうが凄まじい戦いが巻き起こっている。

なんだこの超絶バトルは！ 下手すると俺達とミザリの最終決戦に匹敵するぞ!？」

「どうすんだよ九成！ これ、アジユカ様と戦ってるやつは今のオーフィスやリリスに匹敵するだろ!？」

イツセーが言いたくなるのも分かるが、間違いなくまずい。

この時期にこれだけの強者が、アジユカ様に攻撃を仕掛けている。どう考えても致命的にまずいつ!？」

間違いなく非常事態だ。こんな時期にそんなことをするバカは誰だ!？」

俺達はちよつと混乱しながらも、急いでアジユカ様のいるビルに走っていく。

とにかくこんなことを察知した時点で、動かないわけにもいかないだろう。ああもう、なんだこの事態は！

とにかくビルは見えて——ッ!？」

「分かってる!！」

俺とイツセーはすぐに反応し、素早く迎撃の大勢をとる。

瞬時に障壁を俺が張り、イツセーが飛龍をつけることで倍加を発動。

圧倒的に高まった障壁は、放たれた攻撃を受け止めた。

氷塊、だが絶大な力が籠っており、おそらくタングステンすら超える強度だろう。それも、大型のダンプカーに匹敵するサイズだ。

それが同時に十数個。それも亜音速で飛んできた。

質量、強度、速度の全てがやばい。直撃すれば最上級悪魔でも悶絶することは間違いなく。受け止め損ねれば周囲の被害も大きいだろう。

それを、俺は上手く受け流す。

器用に流れるように障壁を張り、レールのように使うことで速度を殺す。

結果として真上に飛んだそれは、地面に着弾する前に消滅した。

……投影魔術か？ いや、それにしたってこれは効率が悪いしろ

んなものがおかしい。

「……いきなり何しやがる!! つていうか誰だ!!」

既に禁手の鎧を纏いながら、イツセーが吼える。

そして俺が素早く変身していると、姿を現す者がいた。

……まるで芸術品のように美しい、眉目秀麗な男が二人。こちらを興味深そうに見ていた。

同時に警戒心も見える。どうやら、あれで仕留めるつもりだったようだ。

「なるほど、これが? 誠の赤龍帝と涙換の救済者。殺せるかは望み薄だったが、こうもたやすくしのぐとはな」

「この様子では、明星の白龍皇や悪敵の聖銀弾も相当の者達だろうな」

関心と評価をする連中だが、コイツら、まずいな。

間違いなく性能がやばい領域だ。おそらくグレンデルやロードウンでも手古摺るレベルだろう。

「悪いがここから先は進ませんよ。我らが王が試しを行っているのにな」

「かの超越者や破壊神に、我らが力がどこまで通じるかは把握するべきでね」

声も間違いなく美声だが、問題はそこではない。

コイツら、アジユカ様やシヴァ神を相手に一戦交えるのが目的だと?
?

この情勢下でそんなこと、まともな勢力なら絶対にしない。その瞬間に全勢力を敵に回すからだ。ハーデスですら、もうちよつと考えて立ち回るだろう。

つまるところ、ろくでもない連中だという事か。

「ふざけやがつて! お前ら一体何者だ!!」

カオス・ブリゲート

「禍の団の残党か? それにしたって無謀だと思うがな」

俺とイツセーにそう言われ、目の前の連中は戦意を滾らせる。

そして同時に冷静だ。こちらの足止めはできると踏んでいるのか。

「我らは洗殺隊。疾風殺戮 c o m の後援者というところだ」

「そして我らが王こそ、禍の団の新たな盟主にて象徴となる方でもあ

る」

なるほど、な。

毎度毎度ボコられたにも関わらず、禍の団のトップにまたなろうとするやつが出てきたわけか。

しかも盟主だけでなく象徴も兼任。リゼヴィムですら同時は不可能であり、スファイアルシフアー星辰弄奏者になったミザリで漸く両立できた立ち位置。無限のオーフィスの代役となりえる存在。

そんな奴がこの世界にまだいたとはな。まだ見ぬ強者が多すぎるだろう。

まったく、奴らもいい加減懲りてほしい物なんだがな。

「ふざけやがって。どんだけ平和が嫌だってんだ」

イツセーも苛立っているが、しかしだからこそ遠慮は無用だ。

俺達が市街地から出てきたにも関わらず、遠慮なく直線に攻撃を叩き込む連中だ。遠慮なんて考えはないだろう。

だからこそ、遠慮なく相對する。

「やるぞイツセー、叩き潰す！」

「分かっているって、ぶちのめす!!」

俺達は頷き合うと、同時に仕掛ける。

そして相手もまた同時に動く。

感応されるアストララル星辰体。間違いなく高い出力のそれは、アステリズム星辰光の発動だ。

ただ、この力は……なんだ!?

イツセーSide

「創生せよ、地より溢れし星辰を——我らは煌く星の使徒」

その起動詠唱は、今までに聞いたことがない。

だけど、間違いなくヤバイ。

「青き宝珠、命育む奇跡の星。今ここに、その輝きを代行せん」

現れたのは四本二対の剣。それがこっちの攻撃を迎撃してくる。

頑丈だな。たぶんだけど、聖剣創造や魔剣創造の禁手クラスはある。それも、発動値ドライブになっていくから更に増している。

しかも数まで増えている。間違いなく本気モードってか。

「無尽に広がる星の海。その砂粒の一つにある、この奇跡に宿る我らが幸運。そこに感謝をささげよう」

増える剣は大きく固い。更に早く精密に動くことで、俺と九成の動きを制限する。

しかもこいつらの戦闘能力もヤバイ。デカイ氷を固くして超高速で放ってくるから、その迎撃も必要だ。

撃ち漏らせば街に当たるように撃つてきやがる、しかも手元から離れた地点で作って放つこともあるから、気が散りまくる。

「抜刀せよ、星の刃。その煌きは至宝の如く。その一閃は神仏魔王に傷をつけると保証しよう」

こいつら、人間を巻き込むことに躊躇がない。ただ、殺意を感じないのはなんでだ？

まるで命を奪うんじゃないやなく、飛んでいる虫に殺虫剤を巻いている感覚だ。

シャルバ達が人間に向ける感情とも違う、機械的な排除思想。そんなものを、奴らは人間に向けている。

「故に我らが怨敵よ、その愚行を悔いるがいい。この刃、汝を屠る得物足りえると知るがいい」

得体の知れないその力に、寒気が走る。

間違いない。コイツら、何かがやばい。

「汝、この星の敵であるか？ その真偽、剣ツルギによって審問する」

「超新星——畏敬に能う母星の輝き、平伏せよ」

その瞬間、十本二対の刃が俺達に襲い掛かってくる!!
間違はなく、こいつら本気で強敵だ!!

「……………スーパー……………真徒……………キイイイイイツクウウウウウウウツ
!!」

と思ったら、なんか蹴り飛ばされた!?

大会開幕編 第七話 真徒顕現（後編）

イツセーSide

な、なんだなんだなんだ!?

っていうかあの女の子……さっきの子か!?

自販機で五千円札使った女の子。なんでこんなところに!?

「あ、ごめんね？ 追いかけてダメって言われたけど、やっぱボクの方が適任だし？」

「え、どういう事？ どちら様?!」

俺はもうわけわからないっていうか、マジで何なの!?

と、とりあえずさっきの連中も思いっきり警戒して下がっているけど、なんだこりゃ。

「……そう来ますか、姫君」

「王に反旗を翻す、という事ですか」

なんだなんだ？ 知り合いなのか？

いや、そんなことを言ってる場合じゃない。

あの子は今、俺達を助けてくれた。理由は分からないけどそれで十分だ。

今ここで俺達を助けてくれたんなら、俺だってあの子を助けるさ。

「……助かった！ ただ危ないから、気を付けとけよ？」

俺は割って入ると、目の前の二人に拳を突き出す。

……ただ、向こうの連中はかなり警戒しているな。

「……え、と、ありがと？」

あれ？ なんか後ろの子、戸惑ってる？

「……そういうところだぞイツセー」

「どういふことだよ!?!」

九成も呆れてる雰囲気だし！ 仮面越しで分かるぐらいの雰囲気

だし！

え、ええい。この際そこは置いておこう。

今は目の前の事態をどうにかする、そっちが優先だ。

気を取り直して俺が拳を握り締めた時、なんか急にオーラが近づいてくる。

そしてすぐに俺達の目の前に、新たなる姿が何人も現れた。

「……なるほど。これが超越者、そして破壊神か」

そういうのは、これまた芸術品じみた美しさを持つ男。

雰囲気で分かる。あいつ、目の前の連中と同類で、連中より遥かに強い。

なんて奴だ。あんな強者が禍の団に残ってるってのか。

「さて、いきなり狼藉を働いたのはこちらだ、何か質問があるなら守秘義務の範囲内で答えるが……ふむ」

その時、そいつは後ろの女の子を目ざとく見つけていた。

「なるほど、お前はそちらに着くか。……なら、我々の種族的なものは質問に入れない方がいいだろうな」

「ま、そっちはちゃんと説明するよ。兄さま」

に、兄さま？

つてことは、つまり兄妹ってことなのか？

いや、そんなことより――

「……なら一つ聞こう。君達は何故禍の団に協力する？」

――シヴァ様の言う通り、こいつらの目的だ。

そして目の前の男は、特に気負うこと無い態度でシヴァ様達に向き直る。

「そうだな……風呂や蚊取り線香といったところか？」

な、なんだと？

言ってる意味がさっぱり分からない。なんだそりゃ？

ただ、アジュカ様はその言い分を理解したのか、かなり興味深そうな表情になっている。

「なるほど。つまるところ、君達にとって人間とは汚れや蚊と同じような感性なのかな？」

な、なんだそりや!?

俺がイラつと来ていると、男達は平然とした様子で頷いていた。

「地球にとってというべきだな。当然の判断だろう?」

笑みすら浮かべて、そいつははつきり言い切った。

「地球の歴史から考えれば、四十代後半になった日の午後に現れた蚊も同然なのが人間だ。大量に繁殖して全身に虫刺されができているが、それだけで死ぬことはまずない」

そんなこと言う野郎は、肩すらすくめている。

「どうせすぐに死ぬし十数万^数年^日も経てば治るだろう。しかし人間はそのまま刺されっぱなしで放っておかず、蚊取り線香を焚き藁を塗る。そしてそんなことに命を懸けるのは酔狂な奴だけだ」

こいつ、本気で言ってるやがる。

なんていうか、視点が違いすぎる。今までの連中とは全く違う視点で人間を語ってやがる。

シャルバは明らかに見下していた。曹操は自分を人間だからと誇っていた。リゼヴィムは悪意を向けて弄びながら、自分と比較して評価もしていた。

だけどこいつらは違う。害虫扱いじゃなく、本気でうつつとうしい羽虫とみなしている。

「……ただ、個人的に皆殺しは望まない。だが同時に、極^{スファイア}星という概念を踏まえれば命を左右する脅威になってしまっている」

そう肩をすくめ、そいつは俺達に宣言する。

「だから地球には数億人も必要ない。そして異形^{君達}が自分の世界に引き取らないのなら、そこまで駆除して滅らしたい。……ゆえに、疾風殺戮・c o mに支援をするのが我らの基本判断だよ。……蚊取り線香やキン○ヨールを提供しているだけさ」

こ、この野郎……っ

今まで禍の団を動かしてきた連中とは、何もかもが違う。

アジユカ様やシヴァ様も、興味深そうにしているけど同時に警戒している。たぶん周囲にいるのはアジユカ様の眷属で、彼らはかなり警戒している。九成や俺も、当然警戒している。

目の前にいるのはたったの五人。だけどその五人は、その気になれば俺達の多くを道連れにするぐらいのことはできる。それを避けたいからこそ、俺達もすぐには手が出せない。

こいつらは、間違いなく最大クラスの脅威だ……っ

ただ、そいつらはそのまま小さく微笑んだ。

「まあ、そういう事なので命大事にだ。今日は失礼するよ」

その瞬間、そいつらはそう言って一瞬で消えた。

なんか一瞬冷たい風が吹いたけど、いったいどこに消えやがった!?

「アジユカ、探れるかな?」

「いえ、今の段階では全く探れません。……俺の方程式で探れないとはどういう転移だ?」

アジユカ様やシヴァ様がいぶかし気にしていると、後ろの女の子がポリポリと頬をかいている。

「……あく。たぶんかなり寒いところに転移したと思うよ? シベリアとか南極とか?」

「な、なんで分かるんだ?」

俺が聞くと、その子は何でもないような雰囲気になった。

「寒い空気が流れてたでしょ? あいつらはその空気と自分を入れ替えたんだよ。で、体積が五人分なのに冷たい空気がこつち来たから、相当寒いところって感じで当てずっぽう」

お、おう?」

「置換魔術の応用か? それにしたって距離的に異常だがな」

九成が納得してるようで納得してない奮起になる辺り、魔術的なあれなのか。

ただ、相当無理があるって雰囲気だな。

でもその女の子は、何故か自信満々に胸を張る。

「しつかり感知さえできれば、時間を掛ければできるのがボク達真徒だからね! ま、やるようになったのは最近だけ!!」

「ふくん。よく分からないけど、お前ら凄いな……ん?」

俺は感心してから、ちよつと首を傾げたくなった。

そういえば、あいつらもこの子がいれば種族の説明はしなくていい

的なこと言つてたけど……ん？

「さて、我々の英雄たる二人に対する助太刀に感謝し、荒っぽい真似はしないで尋ねよう」

と、アジユカ様が割と真剣な雰囲気でその子に向き合った。

「君達は、いったい何者かね？ その辺りの説明をお願いしたいのだが」

うん、それは必要だよなあ。

「オツケー。じゃ、まずは自己紹介からが礼儀だよな？」

そう返した女の子は、小さく微笑みながら頭を下げる。

「アルティーン・スタードライブと言います！ 種族は真徒とボクらは呼称してるよ♪」

Other side

禍の団が保有する移動拠点。トルネード級神器力潜水艦。

搭乗員全員を使用者とする形で起動する人工神器。その力で原子力潜水艦サイズを原子力潜水艦並みの運用で、更なる省スペース化を確立して運用できる。禍の団の誇る移動拠点である。

その新造された一隻で、疾風殺戮 comの一人であるハヤテは苦笑すら浮かべながらデータを確認していた。

そして同じように確認していた一人の男が、面白そうな表情を浮かべている。

「……で？ 奴さん達が神祖の言っていた真祖って連中か？ ……ややこしいな」

そう尋ねるのは、混沌回帰旅団を率いるオイケス・ハン。

禍の団に残留する英雄派のトップである彼は、今の禍の団において明確な有力者。このトルネード級も彼が確保している。

「少し違うな。神祖が定義する真祖と、彼らはだいぶ異なっている」
そこに間借りするハヤテは、それもあって雑な対応はしないという。

思想は相容れないが、しかし過程に共通するものがある。そんな関係だからこそ、余計な軋轢を避ける対応は心がける。

そういった対応をしながら、ハヤテはモニターを操作してオイケスと情報を共有する。

「そもそも真祖とは死徒の源流とのことだ。だがザイアに参与する死徒は、神祖達が独自の方法で確立させていたもの」

そう語るハヤテは、いぶかしげな表情を浮かべてしまう。

「だから何故、神祖は真祖の存在を仮定し、「生まれているかもしれない」などと思ったのかがさっぱり分からん。だが、地球を生命としてその存在に死を齎す存在を迎撃する彼らなら、交渉次第で疾風殺戮^{我々}・comとは共闘できると考えていた」

「……で、見つけたのが真徒って連中だったと？」

オイケスがそこをつつくが、ハヤテもそこは頷くしかない。

「ああ。彼らは明星戦乱とタイミングを同じくして、急激に自我を確立させたらしい。それまでは自我が薄かったので自覚はないが、千年近く無為な生命活動を送っていたそうだ」

その説明に、オイケスは眉をしかめる。

「原因は極^{スファイア}晃星^{スファイア}って奴か？ タイミングよく高次元と直接繋がる連中が出てきて、バグったとか？」

「さてな。データがないから分からんが、結果としては好都合だ」

オイケスにそう返しながら、ハヤテは小さく微笑んだ。

「彼らは人間の大半を、人間にとって皮膚炎を発症させる存在として見ている。いうなれば酷い汚れや蚊のような虫だ」

「おゝ酷い酷い。霊長類様の事をなんだと思ってるのやら」

「地球の半生に合わせれば一日未満の歴史なぞ、彼らにとってはその程度だろうさ」

嫌味に対して皮肉で返し、ハヤテは更に話を進める。

「だが、人間だつて死なない程度の皮膚炎だからと無視はしない。そういう対応を選んだ数十名が後援者になることを表明し、極晁星に対する警戒もあつて割と力を貸してくれているよ」

冷笑を浮かべるハヤテは、それだけの確信を持っている。

彼らがいれば、禍の団はまだまだ終わらないという確信がそこに在った。

「……ま、奴さんの力は認めるさ」

つまらなさそうにオイケスはそう答えるが、しかし真剣さがそこにはある。

「二人一人の戦闘能力は、最底辺でも最上級悪魔クラス。しかも地球で戦う分には、そこに眷属フルメンバークラスの上乗せといつていい異能が振るえる。……魔王クラスでも最低レベル一人に手古摺るだろうさ。至った神滅具保有者並みに頼れるねえ？」

「そういう事だ。そして王族スタードライブ、その頂点にて協力者筆頭のアルファルスは、推定完全性能はアジュカ・ベルゼブブでも眷属を総動員するレベルだと証明された」

そう語り合う中、トルネード級は少しだけ揺れる。

『浮上完了。これよりアルファルス様との合流を開始する』

そのアナウンスを聞き流しながら、二人は小さく微笑んだ。

「……ま、俺らは別に地球でなくてもいいんでな。当分は力を借りるとすつか」

「それでいい。我々も地球から人類の大半を駆逐できるなら問題ない」

それこそが、新たな禍の団の方向性。

……禍を齎す集団は、未だ消え去つてはいない。

真徒王族が頂点、アルファルス・スタードライブ。

地球上に限定すれば龍神に次ぐ存在が、禍を統括し人類に牙をむく日は、遠くない。

「……って感じなのがいるんだけど、みんながみんなそうじゃないんだよ?」

と、コーラを飲みながらアルティーンとかいう真徒は説明する。

「っていうか殆どの人達って引きこもりだし?」「別に人類が暴れて自滅しても、一億年もすればほぼ回復するっしょ?」って感じなんだよね。でも積極的に人類駆逐しようぜって連中が勝手に動いてる感じ?」

「なるほど。どうやら我々と視点が異なりすぎているようだね」

と、アジユカ様はうんうんと興味深そうに頷いている。

「個人的に無責任なことを言えば非常に興味深い。是非データを取りたいところだが、君は何故独自に行動しているのかね?」

そう踏み込むと、アルティーンは何とかげんなりした雰囲気になる。

「いや、なんていうかさ? こんなに面白いことが広がっている人間の世界に何も思わないって……ないわーって思ってる? それで、なんとなく見えた人達と会いたいからそれっぽい雰囲気の場合に来たってわけ」

そう言いながら、アルティーンはふと何かに気づいて慌てます。

「あ、お金は本物だよ? なんか不良? っていうのが変なこと言ってきて追っ払おうとしたらキレて来て、怪我しない程度に懲らしめたら急にお札渡してきたの。「もうしないのでこれで勘弁をー」って」

……どこから突っ込んだ方がいいのか。

そもそもその程度の金額で命乞いするって、不良にしても金がない

だろ。カツアゲするならもつと持つてるだろ普通。

絶対なんちやって不良だ。イキがつて暴走して懲りた感じだ。

そのまま折れてくれた方が平和だな。相手も変な一線を踏み越えないよりましだろう。

「そっか、お前も大変だったな。不良にからまれるとか」

イツセーはイツセーで同情してるけど、まあそこはいいだろう。

「そ、そう？ えへへ……なんか新鮮かも」

なんとというか、イツセーになつていてるな。

ま、こいつは俺達と違って普通の女の子として扱っている感じはするな。

「ちよつとはマジになつとけよイツセー。つていうか話を聞いたら千歳いつてるっぽいぞ？」

もうちよつとシリラスというか、警戒心を持つても罰は当たらないだろう。

ただイツセーは特に気にしてない感じで、むしろちよつと無然としている。

「いや、オフィスやリリスみたいなものだろ？ それにこいつ自身は利用されてもないんだから気にできるかって」

「いやまあそうなんだが、もうちよつと慎重になつても罰は当たらないだろ」

俺はどう突っ込んだらいいか分からなかったが、まあ……いいのかな？

「えへへ。でも僕強いよ？ 真徒の中でも上澄みだよ？」

「関係ないつて。俺達のことを助けてくれた女の子だぜ？ そりや俺だって助けるつて」

……ナチュラルに口説いてやがる。そしてなつかれてやがる。

まあ、こういうのがイツセーのいいところなわけだが。ついでにいうと、それが大きな要因となつてオフィスやリリスを平和的に取り込めたところはある。

「どうします？」

「そうだね。彼女自身に敵意がないなら、ある程度の監視はつけるが

平和的に済ませるべきだろう」

アジユカ様に聞いたらこんな感じだし、ならいいのか。

「……そうだ。真徒全体を排斥する運動を避けるに越したことはない。将来的に平和的な対応ができる為のアクションとして、イツセー君のチームになってアザゼル杯に参加させるのはどうだろうか？」

そしてそうなるかあ。

あ、イツセーもアルティーンもなんかいい感じの表情だ。

「いいんですか?! いやあ、ちょうどチームメンバーで困ってて……
いいか？」

「オツケオツケー♪ あれ面白そうやってみたかったんだー」

そしてとんとん拍子で話が進んでいる。

まあ、リアス先輩もそういう時に文句は言わないだろう。アジユカ様から許可が出てるなら尚更か。

「でもいいんですか?」

「構わないさ。そのイツセー君のこれまでの実績なら、彼女を平和的に取り込めるだろうしね」

あ、割とシビアな判断もしてみたんだ。

ま、それでいいなら俺もいいか。

少なくとも今すぐこっちをどうにかするってわけでもないしな。

俺達D×Dの精鋭で見とけばいいだろう。

「……で、実は俺もチームメンバー関係で相談があるんですよ」

「ほう? どういう事かね?」

とりあえず俺も相談しておくか。

結論から言えば、ここに関しては許可をしっかりとることができた。

ただ、二つほど問題も発生している。

一つは俺が厄介ごとをついでに頼まれた点。

「……これはあとでリアスにも説明する予定だったが、彼女達を君達の視点で見定めてほしい。まあ、誘ってみて了承されたらの話だが」
なんてこと言っていたが、中々困ったことになりそうだな。

そしてもう一つは――

「あ、サンプル欲しいんだって？　じゃ、これでいいかな？」

「うわあっ!？」

「……アルティ―ネ。死徒の上位種なら復元呪詛もあるのだろうか、いきなり腕を引きちぎるのはやめておきたまえ。周囲の心象によくない」

――アルティ―ネの世間知らずは、後々ややこしいことになりそうだなということだ。

異形と関係ない場所で天然でやらかさないよう、しつかり釘を刺しておかないとな。

大会開幕編 第八話 どいつもこいつも準備中♪

カズヒSide

三年生になってから、もう二週間は経つ。

私達はそれぞれ、アザゼル杯で別のチームとして参戦する。つまるところ競争相手であり、お互いある程度の情報を隠す必要がある。

とはいえ友人同士であり仲間達。それぞれ別々の時間は増えたけれど、割と問題なく過ごせている。

「……で？ イッサーと和地は一通りの準備は整ったと？」

「ああ。まあこちらは最低限の形になったといったところだけだね。無様な試合にはならないと思うよ」

ゼノヴィアとその辺りを話しているけど、まあうかつにボロを出したりはしないわね。

ま、なんだかんだで単独行動だっているゼノヴィアだもの。これぐらいのことはできるでしょう。

さて、これで競争相手としては終了。これからは友達兼お目付け役として話をするべきね。

「それはそれとして、本来校則で暴力沙汰は厳禁だから。なるべく非暴力的な競争で決着をつけさせる方向にしてくれない？」

部活同士のもめ事殴り合いで解決とか、生徒会長としてどうなんだまったく。

かつてはアザゼル先生に話を通すという無自覚の鬼札を切っていたようだけれど、私が監視担当になったからにはそれは論外。まあ、先生もいないしいてもまとめて鎮圧するけど。

この辺りはきっちりしたいところだけど、ゼノヴィアは不満がありあんな表情になっている。

「君は割と暴力的に仲裁するだろうに」

「失礼ね。余程のことがない限り、一般的な日本人が持つ権利の範疇内よ」

正当防衛と現行犯逮捕になるべくとどめているわ。その辺りが日本における一般人の限界だし。

というか、勘違いをしているんじゃないだろうか。

「言っておくけど、それ以上になる時は補導覚悟でやっていますから。状況だってちゃんと判断したうえでよ?」

「生徒から補導される者が出るのも問題なんだけどね」

ある意味で正論なのが腹立つわね。

ま、なるべく筋は通せるようにしているつもりだけど、荒っぽい手段はとっているから仕方がないか。

とはいえ、ここは言っておかないと。

「言っておくけど、殴り合いで解決とか腕つぶしの強い奴や武道経験者が圧倒的に有利すぎるわ。生徒会ならせめて、フェアな勝負を用意しなさい」

あまりに一方的な条件で決着をつけさせるわけにはいかないわね。その辺りはちゃんと考慮してもらわないと。

ゼノヴィアもそこは納得したのか、反発感情は消えている。

さて、どう出るのかしらね。

「つまり格ゲーか! なるほどね」

……それでいいのだろうか?!

凄く悩ましいけれど、改善の意思を見せているのなら少しはこちらも譲らないと……とりあえず様子を見ますか。

今日はオカ研を休み、俺は緋音さんに会いに行った。

「あ、和ちゃん。鶴ちゃん……ナイス」

「ふっふーん！……これぞ最高のお土産って奴よ!!」

だいぶ回復している緋音さんに、鶴羽も胸を張って自慢げになっている。

俺もその辺りを考え、お土産も持ってきた。

「お土産ってわけじゃないけど、カップ豚汁を買つといたよ。好物だったろ?」

ザイア時代、豚汁がメニューに出るとちよつと嬉しそうになってたしな。

コンビニのカップみそ汁だが、まあ高校生が家に来た時のお土産には十分だろう。

実際割とテンションが上がっているしな。

「うん。味噌と……豚肉の組み合わせは神だよね」

そのレベルなら味噌カツとか肉の味噌漬けも行けるかもしれん。

いつそのことちよつと頑張つて練習するか。愛する女性達の好物ぐらい作れるようになっておきたい。

……卵かけご飯を上手に作るコツってなんだろう。やっぱりあれか、ご飯を上手く炊いたうえで適度な温度で卵を落とせばいいのか。

……うん? 案外奥が深いのか?

「和地戻ってきなさい! それ絶対に深淵を不用意に覗き込んでるから!!」

「和ちゃん? それ、たぶん……踏み越えたらいけないところだと思うよ?」

はっ!

鶴羽と緋音さんが止めてくれないかどうなっていたか。

うかつに踏み込んではいけないところに踏み込んでいた。油断大敵だ落ち着け落ち着け。

「……ゴホン。じゃ、とりあえず近況報告から行こうか」

とはいえ、さほど複雑な話をする気はない。

緋音さんも今はリハビリ中。とりあえず、血液を摂取して対応力をつけながらの日常生活だ。

さて、どんなくだらない話でお茶を濁すか。

「そういえば……何かの大会に出るんだっけ、二人とも？」

と、緋音さんが話を振ってくる。

そういえば言ってなかったな。

「ああ。悪魔の競技でレーティングゲームってのがあるんだけど、それが国際大会になってな」

「いろんな種族が参加できるお祭り企画で、私達も別々のチームで参戦するのよ」

そう鶴羽と共に返しながら、俺はふと考える。

……そういえば、他の連中はどんなことをするんだろうな。

Other side

「……さて、一通りのチーム構成はこれでいいだろう」

「ふむ。妾はこれで構わんが、よいのかフロンズよ」

「仕方あるまい。如何に私が大王派の実権を握っているとはいえ、奴らは不正に全く関与していなかったのな。お目付け役を仕込むぐらいしかできんよ」

「……そうではない。例の魔王血族、あの者に丸ごと預けてよいのかと聞いておる」

「構わんさ。そもそも魔王血族など古い王族だった者なだけだ。お飾りとしての仕事をしてくれるのなら、問題を起こさない限り貢物を捧

「げてやるとも」

「はっはっは！ 流石は妾の同盟者、中々にやり手なようでも何よりじゃ！ ……じゃが、あの二人はあくまで妾の団員じゃからな？」

「分かっているとも。直下に置けずとも間接的に配下に数人も魔王血族がいるのなら、政治的な手段としては十分だとも」

「ならばよい！ ……しかし、中々に面白い趣向といえるのお？ これなら堂々と神々と一戦交えられるし、腕試しには都合がよい。ヴァーリの奴も楽しみにしておることだろうて」

「そうだな。そもそも殺し合いなど、合図を待ってフェアプレイで行う力の比べ合いではない。むしろルールに乗っ取って競い合うレーティングゲームの方が、ヴァーリにとっては好ましいだろうさ」

「……そして、その裏で着々と根回しを行うと？ まったく、ろくでもない奴じゃのう？」

「こういう時、ネットスラングでは鏡を見るよう勧めるそうだ」

「おっと、一本取られたわ！」

「……幸香あく！ 俺も参加していいってマジ？ ありがとう愛しているうっ!!」

「……済まぬなフロンズ。成果に見合った褒美のつもりが、話の腰が折られたわ」

「この程度は構わないさ。しかし、少し毛色が違う筆頭戦力がいたものだね」

「そうなのか？ 妾はむしろ、貴様を連想する子が多いのじゃがお、フロンズよ」

「……ふむ、第三者の視点と自分の俯瞰では違うという物かね？」

大会開幕編 第九話 準備完了♪

祐斗Side

放課後、ちよつとした時間に僕達は世間話に移っていた。

「そういえば、接木さんと引岡さんの子供達、どんな感じなんだい？」
僕が尋ねたのは、補佐として特別風紀隊に名義を貸しているルーシアさんだ。

彼女は彼女で各勢力の若い人を集めてチーム参加するそうだけど、それはそれで楽しそうだね。

ただ、ルーシアさんもちよつと疲れた表情になっていた。

「二年生から参加者が出たのはいいんですが、彼……その……発作が、かつてのイツセー先輩並みに酷いです」

凄く遠い目だった。もの凄くすすけていた。

どうやら凄く問題児らしい。いや、話は聞いていたけどね。

まあ、年頃の少年つてそういう事になったりするよね。自分の性欲に自己嫌悪して、性的なものに潔癖になる的なことが。そういうケースは間違いなくあるはずだ。

ただ、彼の場合はかなり行き過ぎているようだけど。

たぶん引岡さんがノイローゼで入院したのが理由だろう。妻に操を立てたのはいいが、それでエロを封印した結果心因性の要因で倒れるとか、滅多にない事態だろうし。時期から逆算して、性的なものに目覚めやすくなっている頃合いだから悪いかみ合わせだったんだろう。

実は既に有名だしね、エロアンチとかそんな風な噂があったはずだ。

「凄い頻度で発作的に自分に打撃を入れるんです。松田さんと元浜さんの紹介をした時とか、彼を止めるのに説明時間の八割を使いました

……」

そこまでか。

いや、まああの二人は色々とエロ方面で問題を起こしていたからね。カズヒもエロで上手く釣って更生させたようなものだし、彼にとっては刺激物という物ではないだろう。

ただ大変なんだろう。ルーシアさんの様子を見るだけで、かなり理解できてしまった気がする。

たぶんあれだ。イツセー君のおっぱい関係に近い。明後日の方向に何かをやらかしている気がする。

「バク転の応用で後頭部を強打しようし、三点飛びで天井に叩きつけられようとし、最近ではどこで調べたのか自爆装置の開発を試みていました」

……かなり大概の人物だね。

「そうなんスよね。いつそショック療法でイツセー先輩と二人きりって案も出たんスがね？ それやったらバーサーカーが誕生しそうですね。白紙にしました」

と、アニル君も戻ってきて僕に補足説明までしてくれる。

「どうやらとても大変らしい。かなりクセのある後輩ができたみたいだね。」

「……その、たまには愚痴を聞かせてもらおうよ？」

いや、本当に頑張ってるね？

本心で同情したけど、同時に二人は何故か不敵な笑みを向ける。

「……まあ、その鬱憤晴らしも兼ね、アザゼル杯では暴れさせてもらいます」

「そんな時は容赦しないっすよ？」

……なるほどね。

「大丈夫。競う相手に容赦はせず、全力で挑むことを礼儀にするのがグレモリー眷属だからね？」

その時は、お互い全力で挑もうか。

俺はふと、匙に会ってちよつと駄弁っていた。

「で、そっちはどうなんだ？ アザゼル杯でのチーム構成」

「たいしたことはねえよ。普通に俺達はシトリー眷属主体だからな。一人スカウトしたぐらいさ」

匙が俺の質問にそう答えると、逆に俺の方を向いてちよつといぶかしげな表情になっていた。

「つーか、そっちはどうすんだよ？ リアス先輩の眷属も半分になつてる感じで、メンツが集まってないんじゃないか？」

ま、そこはそうなんだよな。

「ま、そこは安心してくれよ。どっちも無様をさらさないぐらいのメンツはできてるしな」

ふふん。匙もそうだったけど、俺もうかつに内情を話したりはしないのさ。

なにせ匙とも戦うんだからな。下手に話すと、ソーナ先輩が戦術を組み立てそうでちよつと怖いし。

あと絶対レイヴェルに叱られる。うん、尚更言えない。

「……ま、新メンバーについては今度紹介するさ。つていうか、事情があつて紹介しないといけないって感じでな」

アルティイーネについては、OKは出たけど事情が事情だからある程度の情報は伝えないといけないし。もしかすると、開催前に紹介することになるかもしれないし。

うん。禍の団の新たな象徴と同種だからなあ。どう考えても言わないとまずいっていうか、言っておかないと何言われるか分からない

いっていか。

そんな俺の様子に、匙はなんかげんなりした様子で一步後ろに引いた。

「今度はどんな奴を引き当てたんだよ。まさか、乳神の使いとかいうんじゃないだろうな？」

「いや、一応この世界の存在です」

実際この地球の共成体だしな。何も間違っていない。

嘘は一切言っていないんだけど、匙の視線は全然変わらなかった。

「……つまり、この星にはまだまだ未知があふれてるってことか。世も末だな」

畜生、俺の信頼はどこに行った！

和地Side

緋音さんと別れて、俺はあるビルに入る。

流石にゲームのミーティングを、同じ屋根の下で行うのもリスクがあるだろう。盗み聞きする奴らではないだろうが、たまたま聞こえて戦術に組み込まれるのもあれだしな。

そんなわけで、無駄に金がある俺が金を出して買ったマンションの一室。そこに入ると、既に俺以外は全員集合していたようだ。

「お、漸く来たな？」

「遅かったね。とりあえず、ミーティング中に食べるご飯は用意できてるよ？」

と、ベルナとインガ姉ちゃんが食事の用意までしてくれていた。

簡単なサンドイッチになっているが、紅茶はいいのを使っていることもあっていい匂いだ。入れ方も日々成長しているってことなんだろうな。

そして、俺は追加メンバーとしてアジユカ様のツテで呼んだ二人の方に視線を向ける。

「……さて、依頼内容は確認しているわ。本社にもちゃんと許可を貰っているもの」

「異形の情報を得ることも兼ねて、アザゼル杯に参戦してくるようになりませんか？」

すました表情と苦笑交じりの笑顔。

相対的な表情を浮かべる二人に、俺は小さく微笑みながら挨拶をする。

「ああ、よろしく頼む。シルファ・ザンブレイブとヴィーナ・ザンブレイブ。……そして、そっちも頼むぜ?」

そう、残りのメンバーに声をかけたうえで、俺はリビングのテーブルに手を置いた。

「さて、それじゃあ最初のミーティングを始めようか」

Other side

「しかし中々思い切ったね、アジユカ」

「そうでもないですよ。所詮彼女達は末端の星辰奏者エスベラントですから、ナインハルト・コーポレーションが黒でもできる範囲があります。それに駒王町に入って何日も結界に反応しない以上、クロの可能性はほぼないでしょう」

「だけど、ナインハルト・コーポレーションそのものがシロを意味しない」

「ええ。なので的中してたら腹の探り合いです。……もともと、最大の理由は外れですがね」

「……悪魔のハーフと先祖返り。ただそれだけなんだって？」

「ええ。ザンブレイブ・チルドレンの性質上、たまたま拾ったといったところでしょう。彼女達が自らの意思で駒王学園を選んでいることようですしね」

「……例の真魔王計画。紛争と同時発生した異形のいざこざが原因で行方知れずになった、ルシファアのハーフ。……候補だったようだけど外れだったわけか」

「遺伝子の採取をしたうえでですからね、まあ、彼女達は優秀なうえ、真意はともかく彼らは異形との交流をある程度進める方針のようですしね」

「サウザンド・フォースのフロント企業、その候補であるナインハルト・コーポレーション。さて、これが腹の探り合いになるのか、只の無駄骨に終わるのか」

「さて、かけた労力が無駄骨になると笑えないので、当たってほしいぐらいですが……ね」

大会開幕編 第十話 アザゼル杯、開幕です！

カズヒSide

そして、その日は来た。

アザゼル杯の開会式。冥界魔王領に新設された、超巨大スタジアムで私達は集まっている。

……集まっているのだけれど、いないメンツが割といるわね。

イツセーがいないわね。イツセーの性格なら間違いなく自分が参加するでしょうし、女王役にスカウトした者だけを開会式に参加することはないでしょう。

まあいいでしょう。遅刻するようなら情けなさすぎるけど、同情ぐらいはしてあげるわ。

「お、そこにいたのかカズヒ」

と、和地がこっちに気づいて片手をあげてくれる。

私も片手をあげるけど、それはともかくとしてメンツが少ないわね。

というよりー

「……転校生のヴィーナとシルファって、疑似姉妹并する趣味があったの」

「酷い誤解だ!？」

ー軽いジョークのつもりだったけど、思ったよりドンビキだったわね。後で本気で謝っておきましょう。

でもまあ、ちよつと意外だったわね。

チーム構成で苦労していたとは聞いていたけど、まさかそういう方法で来るなんて。

でもまあ、渦の団との一件で実力はあると理解している。これは油断できないかしら？

「……う、うわあ。これだけの人がみんな、異形なの？」

ヴィーナは割と困惑しているわね。まあ、異形に慣れてないのなら当然かしら。

人間そっくりで人間じゃない異形。人間からだいぶ離れている異形。異形と一括りにまとめても、多種多様すぎるものね。

慣れないと抵抗がある物もいるでしょう。それは仕方ないことだと分かっているけれど、やっぱりこの数はちよつと抵抗があるかしら。

「落ち着いて、お姉ちゃん」

……あら、シルファの方は平然としているわね。

「仕掛けてくるなら倒せばいい。それに競技試合の開会式なら、来る人はいきなり暴れたりしないでしょう」

なるほど。その当たりについて落ち着いているわね。

と、シルファの言葉に納得したのかヴィーナも落ち着きを取り戻しているわね。

「それもそつか。むしろ今のうちに慣れた方がいいかな？」

と、適当にきよろきよろしていると私の方を見ていた獣人に手を振り始めた。

そして近づいてちよつと離すと、なんというか和やかな雰囲気で色々とお話をしている。

「……凄いわね、貴方の姉」

「ええ。自慢のお姉ちゃんだもの」

私を感じすると、シルファは静かにいい微笑を浮かべている。

つて、ちよつと待ちなさい。

「そういえばあなた達だけ？ 他のメンバーは？」

「あゝ。今回来てるのは俺達だけなんだ」

和地はちよつと視線を逸らすけど、すぐに腹をくくったみたいだ。「……アジュカ様に許可取ったうえで、懲罰メイドと従者の人達から集めたもんで。全員揃って開会式は自粛ってことになった」

「……英雄派とヴァーリチームは爪の垢を煎じずそのまま飲んだ方がいいわね」

納得したけど、私は割と離れたところにいる英雄派とヴァーリチームを見てそう呟いた。

双方共に「勝つのは俺だ」的な感じで軽い火花が散っている。そして周囲はすば抜けた強者の遊び半分な睨み合いに若干引いている。

ただし、その視線は畏怖だけじゃない。仮にも同じ大会に参戦しているだけあって、乗り越えるべきライバルという視線もある。そして同時に、ある種の崇拝や尊敬の視線もあるようだ。

いえ、運営も許可を出しているし、どうも下馬評で人気もあるようだけれど。それはそれとしてもうちよつと、なんかいいのかしら？

文化の違いという形で納得するしかないのでしょうね。この辺り、道理は強者に従うというか、妙なところで野生の理というか。

少しため息をつきたくなった時、感じた気配に私は視線を向ける。そこにいたのは一つのチームと思われる団体。ただ、その構成にどうも違和感を覚える。

多民族混合の複合チーム。これは少なからず存在しているからいい。だが、その構成員に違和感がある。

……死神に人間、そして悪魔や堕天使？

死神だってある種の神だ。本質的に死した人間の魂を迎える存在であり、崇拝する人間がいるのは構わない。そこまではいい。

だが死神と同じチームに悪魔や堕天使がいるというのは違和感がある。ハーデス神は三大勢力嫌いであり、わざわざ迎えるとは思えない。

死神も一枚岩ではない。それだけの規模で構成される集団だとは分かっている。だけど、それでも妙な違和感を感じる。

「……どうやらこの大会、波乱の一つや二つはありそうね」

そんなこと呟き、私は気合を入れ直す。

ただのお祭り騒ぎとも、私が和地と共にある為のケジメの一環とも思いきらない方がいい。

まったく、どうもややこしいことになりそうだわ。

イツセーは遅刻しているなあとは思っていた。

それでも何とか間に合わせるだろうとも思っていた。

ただ、この登場は想定外だった。

会場の真上に浮かぶ空飛ぶ船。

そこから飛び降りたイツセー達は、とても目立っていた。

既にリアス先輩達が集まっているけど、そろそろ開会式だし集まりすぎは禁物だな。俺が挨拶するのは終わってからでいいだろう。

そう思っていると、近くから盛大にため息が聞こえる。

「……本当に、異形の世は未ね」

その声に視線を向ければ、そこにいたのは女侍。

いや、格好は別に侍ではない。普通の格好、というより、国際大会の開会式であることを反映した礼服の類だ。

だが、その雰囲気はまるで侍。

常在戦場、そういうばいんどらうか。

近いものがあるとするならそれはカズヒ。もしくは俺。

まとめるならば、いつ死んでも悔いが無いよういつでも死ぬる生き方をしている。どう生きてどう死ぬか決めた者の気配。そういう、ガチ勢というか覚悟ガンギマリといった雰囲気の子だった。

少し警戒心が立つ中、その女はつまらなさそうに鼻を鳴らすと離れていく。

同じ空気もなるべく吸いたくない。そういう感情を俺は察した。

そして彼女が向かう先には、数名の死神と思しき連中がいる。その多くは、イツセー達に敵意を感じさせる視線を向けていた。

……先を見据えて動いている、か。

かつてシヴァ神が言ったことを思い出すが、やはりという事か。

ハーデス神からすれば、仕掛ける理由のないグレートレッド以外の頂点格が消え、数多くの和平側の強者が旅立ち、更に極晁星という特急の力を得られる可能性を知ったことで動き出す余地を悟ったようだな。

速攻で動くことはないだろうが、動き出す余地を見出しているか。禍の団も真徒とかいう連中の力を会得している以上、これからが油断できない。

……ま、ならば尚更動かないとな。

極晁星を否定した者として、極晁が無くてもやっていける世界を証明する責任が俺にはある。それはそれとして、D×Dとして抑止力足りえる存在でなければならぬだろう。

これは気合必須だな。やる気を出していかないと。

「どうやら、異形関連の騒乱は収まり切ってはいないようね」

と、ため息交じりでシルファが漏らしているが、反論できない。

ぐうの音も出ないところがあつたが、ヴィーナの方は宥めるように微笑んでいる。

「まあまあ。人間側だって、探せばどこかで争ってるしね？　むしろこれぐらいで住んでる異形の方が平和じゃないかな？」

「まあ、分母も圧倒的に違うしな」

結局どっちもどっちという事だろう。適度に理解と妥協をし合い、住み分けるのが吉ってやつだ。

共存共栄に相互理解は必須。理解できないにしてもある程度の住み分けて尊重する。これが重要だつてことだろう。

ま、その一環としてこのお祭りは効果的かもな。

なにせ参加メンバーの種族があまりに多すぎる。多種多様すぎるからこそ、どの種族がどういう感じかを調べるのにもいいかもしれないな。

「……そうだな。ま、その辺りも踏まえて少しずつ頑張っていくさ」

俺はそう結論すると、肩をすくめる。

「じゃ、まずは並ぶとするか。人数が少ないからこそ、悪目立ちは避け

ないとな?」

「了解です。ほら、そろそろ並ぼうシルファちゃん」

「それもそうね。さて、あそこだったかしら?」

さて、この大会はどんなことになるのやら――

「お、おい! あそこ!!」

「え? あ、マジか!」

――なんか騒がしいな。

って、おいおいまじか!?

イツセーSide

なんか向こうが騒がしくなってきたので振り向いたら、凄い事になってる!?

「ぐ、グレイファイアさん!」

思わず叫んだけど、あそこにいるのはグレイファイアさんだ。

おいおいまじかよ。あの人も参加するののか!?

「……お義姉様?」

リアスも驚いている辺り、これもしかしてリアスも知らなかったって感じかよ!?

しかも率いている連中、誰も彼もがオーラが凄い。

あそこにいる人達、もしかして半分以上が最上級悪魔クラスなんじゃないか?

「……悪いな。フロンズがその辺りの演出を担当してるもんでよ」

ちよつと離れたところから声が欠けられた。

振り返るとそこにはノア・ベリアルがいた。

「どういうこと、ノア。私の義姉に変なことをそそのかしたと、そう受け取っていいのかしら?」

リアスはキレかけてるけど、俺も気持ちちは分かる。

あのグレイフィアさんが、何の通達もなしにこんなことするとは思えない。

しかもノアが知っているってことか、フロンズ達も知っているってことでいいだろう。

何か吹き込んだと思うのは当然だ。嫌な予感すら覚えてきた。

ただ、ノアは両手を前に出すと首を横に振る。

「おいおい、むしろフロンズは無茶振りされた側だよ。多少こつちに色を付けたのは事実だが、そつちに恥じることはないwin-winの関係ってやつだぜ?」

……嘘はなさそうだな。

ただ、相手があつたフロンズだからな。

「では、どういうことなのか簡単にでもいいので説明をしてほしいですわね」

おお、木場がナイスな質問をした!

確かに時間も無いし、事情をある程度教えてくれないと困るっつてもんだ。

と、ノアもそれは分かっているのか肩をすくめながら頷いた。

「……簡潔にまとめると、フロンズがグレイフィア殿に九大罪王就任

を要望して彼女が交換条件を出した。それを大王派^{俺達}だけでできるか自信がなかったんで、手段としてアザゼル杯での活躍を持ちだしたって寸法だ」

……今のフロンズ達にできないことを、グレイファイアさんが要望した？

その時点でちよつと意味不明だけど、前半は何となく分かる。

グレイファイアさんは魔王クラスであつて不正もしていない上級悪魔だ。セラフォル様と同じぐらい魔王レヴィアタン候補で、最強の魔王でもあるサーゼクス様の妻。今残つてる純血悪魔で考えると、問答無用で女性最強の純血悪魔だ。

平等主義者じゃないって明言している大王派のフロンズ達からすれば、グレイファイアさんが九大罪王の一人になつてくれるのは都合がいいんだらう。グレイファイアさんは魔王派だけど、フロンズ達は大王派の不正もあるから強引に罪王は狙わないとは俺でも考えつくし。むしろ納得できる人を王様に据えようって目論見なんだろう。

それでグレイファイアさんが交換条件を出すつてのも分かる。タダでフロンズ達の要望を叶えてやる必要もないだらうし、どうせならなんか交換条件を引き出した方が得だ。今のフロンズは大王派のナンバー2だし、出来ることは多い。

で、そのフロンズとグレイファイアさんが組んでも無理なことつてなんだ？ アザゼル杯での活躍つてことは、最悪優勝賞品で願えばどうにかできることつてことだらうけど。

流石にこれ以上は教えてくれないだらうし、問い質す時間もないな。

「ま、大王派全体はともかく俺らからするとそこまで悪い話じゃねえ。だから相応のバックアップをさせてもらうんでな。苦勞するだろうが頑張つてくれや」

そう言うと、ノアは片手をひらひらと降りながら歩き去っていく。

……こりゃ、この大会も結構荒れそうだな。

「リアス、俺達つて今年も苦勞するんだらうか？」

「いやでもイベントが豊富なんでしょうね、今年も」

返事はため息だった。
ああもう！ 勘弁してくれよおおおおおおおっ！！

大会開幕編 第十一話 若手悪魔の大激戦（前編）

カズヒSide

アザゼル杯が開催するに伴い、ある程度の情報戦略もかねて勇ちんの起業したPMSCの会議室を使ってミーティングを行っている。

そして今回、大会が始まってから少ししている。

このアザゼル杯。予選は1500のレートを増減させるといふ流れになっている。

試合をしたい時に登録しておき、そういった者達で運営がマッチングをして行う。そして予選終了時のポイント数で、16チームによる本戦に参戦できる者達が決定する。

無駄にたくさん試合をしても、その分負けては意味がない。だからある程度の休憩期間などを用意する必要がある。

こういった戦略的なやり方を踏まえれば、戦術的に不利でもやりようはある。そういったところも試されるのだろう。

そして参加チームはかなり莫大。更に質でもまずいのが数多い。

帝釈天は四天王を引き連れて堂々参加。初代孫悟空も昔馴染みを集めてこれまた参加。更にアースガルズとオリュンポスの次期主神たる、ヴィーザル神とアポロン神が、魔獣達の頂点に立つテュポーンと組んで参戦。北欧の巨人スルトも配下を引き連れて参戦しているという悪夢。

もれなく優勝候補。神クラスのチームが参加を断念するそうそうたるメンツとなっているわ。

悪魔側も負けず劣らず、デイハウザー・ベリアルが堂々参戦。更にグレイフィア・ルキフグスマでもが、魔王派・大王派・更に冥革連合はおろか旧魔王派の投降者まで参加させての悪魔ドリームチームの王となっている。

どちらもフロンズの目論見がありそうだけど、これは良しとしましょう。

……まず現状はどのチームも一試合目。そこでいきなり大波乱が起きている。

「んじや、試合内容の確認はいるぞー」

「うーっすー！」

勇ちゃんが声をかけ、社員の星辰奏者が応じて映像が映し出される。

ただ、正直困りそうね。

「……で、これが例の試合ってわけね」

「そうでしょうね。こつちが危うく負ける所だった試合と同時タイミングのよね」

鶴羽と私はそう言い合い、軽くため息をついた。

「……まあ、あれは仕方がないでしょう。いきなりテクニカルなルールに当たり、プロのプレイヤーを相手に勝てたことが僥倖です」

眼鏡を付け直しながらディックがフォローを入れるけど、まあそこはそうなのよね。

いきなり複雑なルールを相手に、プレイヤーの上級悪魔数名の連合チームとぶつかってしまった。おかげでかなりギリギリだった。

如何に敵を倒さず目標となるブロックを多く発見して破壊するかとかいう糞ルール。慣れてない私達が勝てたのは奇跡と言えるでしょう。

これがレーティングゲームという事ね。洗礼を乗り越えれたのは好都合だといえるかしら。

……そして、これが同時タイミングで行われた衝撃的な試合。

『——さあ、ついにかのヴァーリ・ルシファーがレーティングゲームという大舞台に突入です!!』

実況がテンションを上げて始まるは、ヴァーリ・ルシファーが率いる明星の白龍皇チームの初戦。

……そしてこの試合がいきなり大波乱となる戦いの始まりでもある。

『さてー！ 本日の試合はかのヴァーリ・ルシファー選手のレーティ

ングゲーム初試合！ 対戦相手は大王派の若き悪魔達が集まった、魔道の継承者チームとなっております！』

そう、その魔道の継承者チームが曲者だ。

フロンズ・ファイニクスが伝えていたサウス計画の成功者達。

サウンドスレイヤー。すなわち千の敵を滅ぼせる一騎当千を成せる者に鍛え上げる計画。

本来フロンズ達が過激派を黙らせる為に、心をへし折る為のハードトレーニング。それを潜り抜けて成功してしまった連中の、更にその上澄みで構成される化け物達。

『そして解説として、大王派を取りまとめる若き俊英のフロンズ・ファイニクスさんに来ていただいております！』

『ご紹介に預かりました、フロンズ・ファイニクスです。魔性聖剣のオーダーメイド等はこちらの通信にお繋ぎ頂きたい』

さらりとコマースィナルをぶちかましたフロンズは、その上で軽くため息をついた。

『さて、この度は我々大王派の馬鹿が色々と炎上騒動を起こすでしょうが、色々な意味で申し訳ない』

『……いきなり凄い事をおっしゃいますが、彼らはそんな者達なのですか？』

実況が軽く引くと。フロンズは盛大にため息をついた。

『はつきり言いますよう。魔道の継承者チームは私目線で言えば、全員もれなく問題児です。はつきり言って胃が痛いです』

フロンズがはつきりという中、モニターが試合の土俵となるフィールドを映し出す。

廃墟の都市を模したフィールドで、向かい合うのは二つのチーム。

ルールはゴレム型のドローンが大量に展開され、その中の本体を探して破壊した者が勝利するといった者。

そして、ヴァーリ達を前にして、魔道の継承者チームは――

『では行くぞー！』

『あたぼうよー！』

――何故か二人ほど向かい合って拳を握り締めていた。

『……何のつもりかね?』

『フハハハハハ! すまんな凡人ヴァーリよ。ミーティングで決まる前に時間が終わってしまい、どっちがお前を倒すか決まってるのだよ!』

首を傾げるヴァーリに、ユーピ・ナーデイルがそう言うけど……頭が痛くなりそうね。

そして壮絶なじゃんけんが繰り返され――

『……負けたああああああつ!?!』

『……勝ったああああああつ!!』

――男女の戦いは、男の方が勝利した。

『畜生が! 今日は全部そっちに任せるからな!』

『フハハハハハハハハハ! 悪いがヴァーリ打倒は俺達が先にもらう! 残念だったな!』

捨て台詞を残して離れて座り込む女に勝ち誇ってから、悪魔の男は指を突き付ける。

『さて、貴様が我らがいない間に暴れてイキっている旧魔王血族だな?』

もうこの発言だけで、クセの強さが嫌というほど分かったわね。

『ああ、君も後継私掠船団のように俺をバカにしているのかな? 思い上がりもここまでくると反吐が出そうだ』

『まさか? ちょっとしたハンディキャップだよ。駒を全部埋めているこちらと埋めてないそちらの差を埋めなければ、勝ってもいいわけされそうだね』

お互いに挑発的な笑みを浮かべながら、ヴァーリと目の前の奴は睨み合う。

……とはいえ、もの凄く不満げになっている女を除いて全員が臨戦態勢となっている。

どうやら、ここからが本番らしいわね。

とはいえ、駒価値分のバランスは整っているけど人数的にはヴァーリチームが有利。

さて、そして大波乱の試合はどうなることやら。

『激しい睨み合いの中、今ここで試合が始まります!!』

実況が声を上げる中、試合が勃発する。

その瞬間、双方ともに正面から激突を開始する。

どうやら挑発もあって、まず敵を叩き潰してからゆっくり倒すというノリようだ。実際それでも勝てるのなら、選択としては十分だろう。

そしてどこでも激突が激しく鳴り響くが、真っ先に激しい戦いになっっているのはユーピ・ナーデル・モデウだ。

アスモデウスの先祖返りだと判明した彼を相手にするのは、明星の白龍皇チームの女王、フェンリルだ。

圧倒的な速度に、神すら殺す牙と爪。その二つを持つフェンリルは、チーム全体で見ても屈指の強者。天龍と並び立てる魔獣は伊達ではない。

だが、それに対してユーピは真っ向から渡り合っている。

星辰光による聖槍をもって、フリツカースタイルで攻撃を捌くユーピ。更に魔力と光力の波状攻撃で、フェンリルに反撃を仕掛けていく。

フェンリルの高い機動力で回避し続けるが、猛攻を回避しながらゆえに動きが牽制され、攻撃を捌かれ続けていく。

『流石はかのフェンリル。こちらも手を抜いているとはいえ、よく我

が才能に手加減しながら渡り合えるものだ!』

高笑いしながら挑発をするユーピに、フェンリルは苛立たし気になりながらも、激昂して仕掛けることはない。

それだけの相手であるということを理解しているのだろう。

当然と言えば当然だ。ユーピ・ナーデル・モデウは間違いなく才能の権化。才能だけならヴァーリすら足下に及ばない才覚の権化だ。

それに対し、互いが互いにけん制を仕掛ける形で食らいつく。封印を解除されていないとはいえ、あのフェンリルを相手に手を抜いて互角とは脅威というほかない。

そして同時に別の場所で、凄まじい戦いが繰り広げられている。

『……忌々しいですね。まさか聖王剣と切り結ぶとは……っ』

振られるコールブランドが、ゴレムや廃墟をたやすく両断する。

余波で尽く斬撃の渦を生み出すアーサーの剣劇は、しかし相對する敵を切り裂けない。

それどころか、素早く振るわれる一対の魔力が、逆にアーサーの服を軽く切り裂く。

そして双方の刃がぶつかり合い――

『なるほど。流石は音に聞こえしコールブランド。振るう相手が手練れなら尚更か』

――真っ向から、つばぜり合いを成立させた。

睨み合い、競り合い、そして距離が開けた瞬間に斬撃の嵐が巻き起こる。

一瞬で廃墟群が微塵切りのように刻まれ、そして塵のようになっていく。

恐るべし剣士達の戦いだ。アーサー・ペンドラゴンが才気あふれる剣士なのは知っていたが、それと競り合える刃を振るうのは、スライズ・ベルフェゴール。

『おおおおおっ! 凄まじい剣士達の戦いです! フロンズさん、かのアーサー・ペンドラゴンと切り結ぶ彼はどんな方ですか?』

『奴はスライズ・ベルフェゴール。ベルフェゴール家の分家に連なる悪魔だ』

実況に応え、フロンズ氏が話を進めていく。

『天魔の王剣と称す奴の本質は、ベルフェゴール家の特性たる「斬撃」を剣の形で凝縮。それにより近接戦闘に限定して魔王クラスのパテンシヤルを発揮する、近接戦の極致。むしろ魔王クラスとまともに切り結べるアーサー・ペンドラゴンとコールブランドを流石というべきか』

そう語るフロンズ氏の視線の先、スライズ・ベルフェゴールはその上で小さく微笑んだ。

『……だが、貴様は俺には勝てんぞ?』

『ほお? 根拠はどこにあるのですか?』

切り結びながら、アーサーは微笑みすら浮かべて余裕の態度をとった。

それは自分が戦えているということからくる自負だろう。

おそらく、アーサー・ペンドラゴンはまだ本気を出していない。

だが、情報が正しければ――

『人間でありながら神器を宿せぬ貴様が、悪魔でありながら神器を手にした俺相手に勝てる?』

――彼らは、神器を宿しているからだ。

そして同時に、別の個所で爆発が鳴り響く。

その爆発から飛び立つのは、ルフェイ・ペンドラゴンを抱えたゴグマゴグ。

だが追撃するように飛び出した騎兵が、回り込んで素早く魔力を放っていく。

それをルフェイが魔法で迎撃するが、その瞬間魔法を突き破って投げ槍が飛んでくる。

ゴグマゴグはそれを迎撃するが、投げ槍は装甲に突き立った。

質の差で砕け散る投げ槍だが、そんな代物でゴグマゴグの装甲を傷つけるとは。

そして瞬時に攪乱する相手は、四方八方を回りながら魔力攻撃や手に持った投げ槍でゴグマゴグを攻撃。ルフェイを庇い切るゴグマゴグだけど、破損は少しずつ確実に進められていく。

その事態に、アーサーは一瞬目を見開く。

その瞬間振るわれるスライズの斬撃を、咄嗟にしのぎながらも余裕が削れかけていた。

「……うっわあ。ジークのセンスもびっくりな剣士対決ですなあ。チャンバラ頂上決戦つすかコレ」

そう感心しているのは、ミカエル様達の推薦もあつて迎え入れた、リント・セルゼンさんだ。

セルゼンの姓名を聞いた時はちよつと驚いたし、イツセー君達も知ったら驚くだろう。

だけど、この試合映像の剣戟の方が驚くことは間違いないね。

「リントが驚くのも無理はないわね。祐斗でも苦戦するだけの剣士であるアーサーを相手に、あそこまで渡り合えるスライズは化け物だわ」

リアス姉さんもうだけのことはある。

アーサーの剣士としての力量は間違いなく傑物だ。僕も残神込みなら勝ち目はあるだろうけど、裏を返せばアーサーは自分の才覚だけで僕と同格だ。神器を至らせグラム以外にも四本の魔剣を持つ僕と互角というのは、自分で言うのもなんだけどかなりの難行だろう。

それと真つ向から渡り合える、スライズ・ベルフェゴール。

何が怖いかというと、あの魔道の継承者チームで参戦したサウス計画の成功者では、弱い部類だという事だ。

彼はあくまで接近戦なら魔王クラス。つまるところ、それ以外なら最上級悪魔の領域でしかない。

だがあそこでルフエイとゴグマゴグを苦戦させているのは、正真正銘の魔王クラス。

胸を張れる傑物。それこそが――

『奴の名はバース・フルカス。正真正銘魔王クラスに到達した、機動戦闘の猛者だ』

――フロンズが語る最強格の純血悪魔。

これが、明星の白龍皇と相對する魔道の継承者。その壮絶な前哨戦の始まりだった。

大会開幕編 第十二話 若手悪魔の大激戦（後編）

イツセイSide

のつけから壮絶な戦いが繰り広げられている。

あのヴァーリが。全員粒ぞろいのヴァーリチームが、真っ向から渡り合えられている……っ

「あれが、魔道の継承者チーム。サウス計画の成功者って奴かよ」

「同感だね。アーサーと切り結ぶスライズ・ベルフェゴール。あれが成功者全体では上の下レベルというじゃないか」

俺が唸るとゼノヴィアも続く。

そして、それ以外のところも壮絶な戦いが始まっている。

『……フン。目立たない男だと聞いていたが、もうバテたのか？』

『ん、んだとこらあ！ てめえこそ貴族の癖に、スタミナがありまくりじゃねえか!？』

美猴と渡り合って、体力の差を見せているのは赤毛の悪魔。

確かフェクス・グレモリー。大王派側についたグレモリー分家の出身らしい。

そいつはスライズ・ベルフェゴールよりも弱いらしいけど、それでも上の下側の成功者だ。

そして奴はその本領を見せつけることなく、美猴と渡り合い追い込んでいる。

『我々はサイラオーグ・バアルを打倒することを目標にしているのだぞ？ 奴と同格の修練を積むことを前提としたサウス計画被験者の成功者は、誰もが基礎体力も絶大と知るがいい！』

『なろうが！ だったら物量だぜいっ!!』

美猴が痛いところを突かれて、毛をちぎるとそれを分身にして一誠に襲い掛からせる。

だけどフェクスは肩をすくめると、ポケットからキラキラ輝く宝石のようなものを三つ取り出した。

そしてそれを砕くと投げつけ―

『うおおおおおっ！ 謎の粉末を作り出したフェクス選手、美猴選手の分身を薙ぎ払ったあああああっ!!』

―実況がびつくりするぐらいの大破壊を巻き起こした。

『あれがフェクスの極めた魔力運用、魔の宝物。フェクスは魔力を結晶体に加工することで、宝石魔術のように限界以上の魔力を扱えるのです』

どう考えても反則だよなあ。

つまり時間さえかければ魔王クラスどころか、超越者クラスの魔力を何発も放てるようになるわけじゃんか。俺で言うならロンギヌス・スマツシャーをなん十発も打てるようにできるわけじゃん。反則だろ。

しかも美猴の後ろから、更に人が増える。

その瞬間、美猴が咄嗟に動きを止めた。

そして頬がから血がにじむ。

『…………、てめえ…………っ！』

『なるほど気づくか。まあ、それぐらいはしてもらわないとな』

そう呟いたのは、どことなくサイラオーグさんに雰囲気が見えている男。

確かバル分家の奴だったな。

『お、おお？ 何が起きたのか分かりませんが、美猴選手に傷をつけたのは彼でしょうか？ タグマザイラ・バル選手ですね』

『タグマザイラはバルの特性たる消滅の魔力を扱うが、かのサーゼクス様とは別の意味で精密かつ複雑な制御を得意としているのだ。そしてこの映像を更に解説するところなる』

フロンズが素早く操作すると、美猴の周囲の映像がかなりズームされる。

よく見ると、魔力のようなものがめちやくちやく細く展開されている。それも、美猴を囲むように何本もだ。

『このように、極細のワイヤートラップを瞬時に展開することで仕留める算段という事になる。密度も壮絶に高い故、迂闊に突っ込めば重傷は免れなかつただろう』

フロンズの解説だけど、これ俺達にとって厄介だな。

美猴を倒せるかもしれないワイヤートラップとか、引つかかった瞬間にやられかねない。これが魔王クラスの精密制御ってことか。

「うーん。これは私が光力で相手をするべきかしら？」

イリナが首を捻るけど、たぶん無理だと思う。

いや、イリナもワイヤーみたいに戦えるけど、ワイヤートラップみたいな前は俺達に向いてないし。

ただ美猴は絡めとられそうになっているけど、素早く分身を出しなから攪乱に入っている。

結果的に魔王クラスとやり会える連中二人を足止めとか、かなりやばいよなあ。美猴が一番活躍してないか？

そして逆に、離れたところでは猪八戒と沙悟浄を襲名した二人が追い込まれている。

『……もつと、もつときれいなお姉さんにいたぶられたいけど……いいー！』

『ふむ、イシロ・グラシヤラボラスもそうだがマゾは厄介だな。まあ、消耗戦ならこちらも得意なんぞな』

マゾの豚な現猪八戒相手に。負傷を炎をまき散らして快復させる悪魔が真っ向から削り合いをしている。

『彼はカーパー・フィーニクス選手。フロンズさん、弟の活躍はいかがでしょうか？』

そう、あの悪魔はフロンズの弟！カーパー・フィーニクス。

あいつも魔王クラスとか、政治の化け物なフロンズといい、フィーニクス家は化け物だらけかよ。

ただ、解説のフロンズはため息をついていた。

『脳筋かつ武断派だからな。あれぐらいはしてくれないと損益が増すというものだ』

フロンズとしてはあんまりな奴らしいな。

ま、フロンズはサウス計画の連中に困ってるみたいだしな。弟だからって容赦するような奴でもなさそうだし。悪魔の貴族とかそういうのよくある印象だもんな。

そして沙悟浄の方を相手にするのは、ある意味最もとんでもない姉ちゃんだ。

『あつはつはつはあつ！ お互い陸地じゃ本領が発揮できない者同士、思う存分暴れましょうか、河童ちゃん！』

『河童っていうなあああああつ!!』

ブチギレてるのは現沙悟浄ちゃん。まだ中学生で、沙悟浄代々そうらしいけど河童扱いされるとキレル女の子。沙悟浄って仙人の類で河童は日本の創作らしいとかなんだとか。

そしてそんな逆鱗でタツプダンスしながら真つ向勝負しているのは、サウス計画じゃなくて後継私掠船団の方。

新しい筆頭戦力らしいけど、問題はそいつの名前が――

『そっちこそ、レヴィアタンなら蛇じゃないですか！ やーい、龍の完全下位互換！』

『ふつ。本来のレヴィアタンは龍なのよねえ！』

真つ向から返す女は、もうそのアレっぷりを壮絶にかましている。

そう、あの女はレヴィアタンの先祖返りだと判明した後継私掠船団の筆頭戦力。

『そしていずれ最強の女悪魔になる後継者！^{ディアドコイ} エペラ・ルキフゲ・レヴィアタン!!』

堂々と名乗りを上げた奴は、大量に蛇状の魔力を具現化させながら吠える。

『魔王クラスになってから出直してきなさあああいつ!!』

吠えるエペラの猛攻を、沙悟浄ちゃんはギリギリでしのいでいる。

……そしてエペラ・ルキフゲ・レヴィアタン。言い分から分かるだろうけど後継私掠船団のメンバーらしい。

癖が強すぎるよ、勘弁してくれ。

総合的に戦いは白熱しているけど、問題はここからだ。

そして俺たちが一通り確認した直後、盛大に区画の一つが吹き飛ん

だ。

そこから現れるのは、通常の鎧を纏ったヴァーリ。所々破損している鎧が修復する中、追撃するように姿を現す男女が現れる。

『行くわよダーリン！　ここで油断なんてしないからね！』

『そう通り！　まだD×Dどころか白銀の鎧すら出してないだろうしなあー！』

連携攻撃でヴァーリを追い立てるけど……これが曲者らしい。

『……あれ？　あの方は使い魔の契約をされていたのでしょうか？』
実況の人も困惑するけど、隣のフロンズはもつと酷い。

何とも言えない表情で、凄く色素が薄くなっている感じがする。

……うん。俺も話を聞いた時耳を疑ったもん。

「あれがイツセーと同じ領域に至った、超越者候補か」

「イツセー君と同等の領域、下手をするとそれ以上の変態さんだなんて」

「い、いいえ！　イツセーさんならきつと真似ぐらいは……しないでほしいですう」

ゼノヴィアもイリナもアーシアも酷い。

そして俺がショックを受けていると、フロンズは意を決したららしい。

『あれは、兵藤一誠と同格の領域に至った存在だ』

『……と、言いますと？』

聞き返す実況の言葉を遮るように、ヴァーリは苛立たし気に拳を握り締める。

『そのふざけた技にあの鎧を使えと？　心外だね』

そうとういらってきているみたいだけど、男の方は首を傾げた。

『何を言う。お前なら理解できないとおかしいだろうが!!』

そう吠えるやつは、本当に心外って感じた。

『お前は高々天龍止まりという現実に屈せず、圧倒的格上たる赤龍神帝グレートレッドと並びたつ、白龍神皇になるという理想を目指している!!』

そう指を突き付けた奴は、その上で自分を親指で指示した。

『俺は現実には縛られた女に屈せず、超越者が如き異能で理想を目指す俺に並び立てる理想の女を具現化した！俺達は同種の存在だろうが!!』

……………。

うん、聞いているだけで酷い。

そして実況の人も唾然となっていると、フロンズはため息をついて意を決したらしい。

『王たるオトー・ヴァプラは、己自身が魔王クラスの性能を發揮するのみならず、魔王クラスの力を持つ理想の伴侶を創造する異能を持つ。……力が解除されると塵と化すが、DNA検査の結果は毎回同じだがオトーとは全く異なる悪魔だった』

……………。

うん、地味に酷い。

俺ですら、命が危険な時でも当たり前のように裸の女の子達が語りかけてくる妄想をした時は自分に引いた。

けどあれはそれ以上だ。よりにもよって、国際大会の初戦で堂々と出すだなんて。

「イツセー様。おそろく乳語翻訳も大概ではないかと思えますわ」

レイヴェルのツツコミが酷い!?

ただ、ヴァーリは何か戦慄を覚えている。

『……そうだな。俺は理想のラーメンをもって、不可能を可能にできた。お前もまた不可能という理想を具現化した者である以上、俺の発言はあまりに無粋だったか』

え、そつち？

『……ダーリン、あの子も分かってくれたみたいね』

そしてニーハが涙まで浮かべている。

自分のことをラーメン扱いされてそれかよ。それでいいのかと言いたくなる。

『そうだな。いや、俺も指摘する部分が間違っていたな、すまん』

そしてオトーもなんかヴァーリに謝っている。

「ほうほう。なら私も理想のコーラとかやってみた方がいいかも？」
ボーヴァとアルティーンはボケないでね!？」

と、その攻撃をヴァーリが弾き飛ばし、魔力が四散する。
そして周囲を盛大に吹き飛ばしていつて――

『……馬鹿、そこはダメにやん!!』

――なんか黒歌が慌てました。

っていうかどこにいたんだって感じなんだけど、上手く隠れてたのか？

でもなんでと思ったとき、なんか急にブザーが鳴り響いた。

『……オトー選手の魔力によりターゲットの破壊を確認。魔道の継承者チームの勝利です』

あ、そういう事か。

これが色々アレな内容の正体だ。

……なんか戦っている最中にうっかり勝利条件が成立したみたいらしい。

より具体的に言えば、ヴァーリが対応していたオトーの魔力が、たまたまターゲットを壊してしまったということになる。

このゲーム、大量のゴーレム型ドローンから、ターゲットとなるゴーレムを打倒したチームが勝つというルール。

ルール上これが勝ちなんだよなあ。

『……勝っちゃいましたね』

『冷静に考えると、このルールで真っ向勝負をする方がおかしいのだ。

……双方ともに負けているようなものだが、ルールガン無視に真っ向勝負で戦ったのだから自業自得だろう』

実況もフロンズも、何とも言えなくなっている感じだ。

ステージのメンバーも、誰もがなんともいえない雰囲気になっている。

そんな中、バース・フルカスは馬から降りた。

その瞬間、乗っていた馬が泡を吹いて痙攣しながら倒れる。

そしてバースは魔力を紐にして吊り下げると、苦笑交じりで微笑んだ。

『……さて諸君、ここで宣伝を挟むとしよう』

素晴らしいながらテロップを出す。

―サウス戦勝馬肉シチュー。一食分日本円換算五千円。

俺達がテロップの文字を呼んでいると、バーズは小さく頷いた。

『さて、今回俺が使用した馬だが、この後捌いたうえで一日煮込んでレトルト販売することを宣言しよう。このサイズなら50食限定となるのでお早めに』

なんかつらつらと凄い事言っているんだけど。

『……待て。そんなもつたいたいことをしているのか？』

ヴァーリも流石に呆気に取りられてツツコミを入れたよ。

『そ、そうですよ！ ゴっ君と互角に立ち回れるお馬さんなんて貴重です、もつたいたいです！』

ルフェイも傷だらけでツツコミを入れるけど、バーズは得意げにはほ笑みながら首を横に振る。

『いやいや、ウチで育てている食用馬の一頭だ。戦わせる分肉質が劣るので上質なものでカバーしているが、この程度なら毎日二頭は捌けるとも』

……そう、信じられないことにこれがマジらしい。

既に今日、郵送されているらしい。ちなみに下処理の段階で色々頑張っているらしく、値段相当の味はしているとかレビューされてた。

『ちなみに本当だ。バーズは魔王クラスの力をもって、駄馬を使い捨てにする代わりに最上級悪魔クラスに強化する『焼魔の命』と呼ぶ異能を振るうのだ』

凄く頭を痛そうにするフロンスに同情する。

……濃い。滅茶苦茶濃い。

戦闘に使った食用馬を戦勝記念シチューにして売る魔王クラスに、脳内妄想の女を具現化して二人の魔王クラスとして戦う超越者クラス。この調子だと他の連中もヤバイだろう。残りは後継私掠船団だし。

俺達、もしかするとあんなのと戦うことになるのかなあ？

俺達がちよつといろんな意味で戦慄していると、レイヴェルが時計

を確認してはつとなる。

「イツセー様、そろそろ九成さん達の試合が始まりますわ!」

「マジか! もうそんな時間かよ!」

ヤバイ、意外と熱中してたな!?

……ついに九成達も試合を始めるのか。

さて、あいつはどんな試合をするのかな?

カズヒSide

「さて、そろそろ和地の試合ね」

「そうねえ。和地ってどんなチームにしたのかしらあ?」

「私達はもちろん、春奈やリヴァも別チームなんですよ? どうすんのかしら?」

思わずそんなことを言い合っていると、オトメねえが小さく微笑んだ。

「どうしましたか?」

「うん。三人とも恋する乙女の顔だなあって」

……ディックに聞かれてそんなことを言ってくるけど、まあ惚れた男の試合だしね。

「アファファファファア! ちょ、恥ずかしいこと言わないでよ!」

「あ、あうあうあうあうあうあうあうあうあう」

鶴羽とリーネスが瞬時にバグったわね。

「まったく落ち着きなさい。そんなことで一々慌てる年齢でも……前

世込みならぬでしょう」

私がそういうと、勇ちんもしたり顔でうんうん頷いている。

「まったく。そういう照れくさはさつきとぶっ飛ばして、初めてイチャイチャできるんだぜ？」

いまだ倦怠期は来てないようね。これが義理の姉を妻にして子だくさんの男の強みか。

私も感心しているけど、カズホやラトスも関心の表情だった。

「既婚者の発言は重みがありますね。……お姉さまもいずれはそうなるのでしょうか」

「すげえ。これが立派な父親って奴か……っ」

「皆さん。本当に試合が始まりますよ？」

おっと、ディックが指摘してくれなかつたら脱線したままだったわね。

さて、和地はどんな試合を見せてくれるのかしら。

ふふ。ちよつと楽しみになってきたわね。

「……見せてもらうわよ、タイタス・クロウ涙換救済のゲームという物をね」

さあ、見せてもらうわよ、エルダーゴッド愛しの旧済銀神。

貴方の果たす責任を、この目に焼き付かせて頂戴！

た、多種族を中核とする教会の特殊部隊であるプルガトリオ機関！

その長官を務めるクロード・ザルモワーズさんです！』

『よろしくお願ひします。今回の試合は両チームともに知り合いがいますので、フェアに解説ができると思います』

クロード長官が解説を担当するのか、これは意外だね。

かつては教義上明かせない人物が多く在籍する部隊。それもあつて暗部部隊も数多く存在するプルガトリオ機関。そんなプルガトリオ機関が限定的にはいえ姿を明かせるようになるなんて、これも和平の成した一つの形だろうね。

そして九成君達と戦うのもまた、各勢力からの合同チーム。

悪魔はもちろん、人間の術者や神器保有者、更に仙人まで参加している。かなりの多種族複合チームで、これもまた和平の形だろうね。「あらあら。五大宗家から複合チームに参加する者が出てくるなんて」

「吸血鬼からもいますう。和平も進んでますねえ」

朱乃さんやギヤスパ―君が感慨深くなるほど、鎖国的な集団からも参加者がいるのか。

これも和平が進んだからこそだろう。アザゼル杯は和平の象徴にもなっているね。

そしてリアス姉さんは微笑みながら、紅茶を一口飲む。

「さて、和地達は実戦でいくつも成果を上げている。……さて、どうなるかしらね？」

ああ、そこは僕も気になっているよ。

彼らは見事な戦いを成し遂げてきた。だけど、レーティングゲームは必ずしも実戦の強みが活かせるわけではない。

さて、彼らはどういう戦いをするのかな……？

なのだ!!』

『そしてレーティングゲームは多くて本来十六人！　つまり桁が多くすれば我らの勝利！』

『半数がルールに抵触しない範囲で物量戦術を可能とする者達で構成されたこのチーム！　圧倒的に……有利ッ！』

『そして残り半数で彼らを守る！　あとは物量が潰すのみ！』

『そう千は一を打倒する！　忌となるがいい、少数よ！』

なんか凄く胸を張っているよ、相手チーム。

「……真理ですわね。競技試合で合法的にそれを成すのは不可能に近いのですが」

感心しているのかちよつと引いているか分からないレイヴェルの評価だけど、これ本当に無体だよなあ。

そう思いながら見ていると、試合が本格的に始まっていく。

そしてそのまま大量の軍団が襲い掛かり――

『甘いな。異形の世界は量より質だ』

――すれ違うように、一人の男が突貫する。

すり抜けるように走りぬくその男は、迎撃する相手をすり抜けていく。

動きに無駄もないし判断も早く正確な対応をしている。間違いないことができる人だし、ちよつと見たことがあるかも。

……確かどこかのゲームの試合だったな。最上級悪魔同士の試合だったかも？

「動きが早いし、あの攻撃は聖なるものだな」

「そうね。神器かしら……？」

ゼノヴィアとイリナが気にしている中、走り抜ける男に攻撃が集中しようとした時、後ろからデカイ剣が何本も飛んできた！

男の方に警戒が集中していた所為で、一息倒千チームの物量がごっそりやられた。

そして踊るように飛んでいる大剣の中心には、二十歳ぐらいの女性が一人。

あ、あの人メイドの人だ。っていうかめっちゃ強いな！

あの二人は敵の海をすり抜けながらかき回していく。

そのままフィールドを二人で走り回りながら、残りのメンバーは残った連中を相手に防衛戦を展開している。

「……なるほど。おそろくあの二人はゲームの玄人でしょう。動きと立ち回りに隙がありませんね」

ボーヴァも感心する動きだけど、あのままだと削り倒されないか？数があまりに多すぎて、九成達も本体を狙えてない。それにあの二人も、流石にあのままだと最終的に押し潰される。

っていうか既にフィールドの端に追いつめられてるな。……まずくないか？

「おお。あんだだけ強くても追い込まれるんだ。レーティングゲーム、怖……っ」

「そうですね。九成さん達があそこまで苦戦するなんて」

アルティーネやアシアも、不利になっている雰囲気なのを悟っている。

ただ、俺はちよつと違和感を感じるんだよなあ。

「なあ、なんか九成達の動きって妙じゃねえか？」

なんか妙な雰囲気があるっていうかなんて言うか。

「……そうですね。あの二人以外のメンバー、数に押されているにしても動かなさすぎです。何人かは戦闘に参加していないようだし」

ロスヴァイセさんも同意してくれるし、俺よりよく把握している。

そうなんだよな。なんていうか、動きが消極的すぎる。

あの二人だけでも勝てる……ってわけでもないだろうしな。なん

ていうかおかしさが強い。

そうこうしていると、二人で戦っている男女がかなり追い詰められている。

フィールドの端の端に追い込まれる中、相手チームの王が二人の前に姿を現す。

ちやっかり数十体の護衛をつけている状態で、そいつは不敵な表情を浮かべている。

『ふはははははっ！いきなり振るわれるとは中々に厄介だったが……そろそろ終わりというものだ！』

そういう王の周囲に、更に何人も姿を現すチームメンバー。

『その通り、やはり世界は質より量！』

『数が多い方が勝つ、これ基本！』

『物量の圧殺こそ正義なのだ！』

なんていうか調子に乗っている雰囲気だけど、なんだかんだで警戒はしているから即座に倒すのも難しいな。

これは九成達、まずいかなあと思った時だ。

「……まさか」

レイヴェルが急にハツとなって素早くメンバー表を確認し始める。

俺達がそれに首を傾げていた時だった。

追い詰められているはずの二人が、小さく笑った。

『ん？ 負け惜しみでも』

『――未熟者が釣れたとはこういうんだな』

そう割って入ると共に、男が消えた。

その瞬間その場にいたのは、パラディンドッグに変身している九成の姿。

そしてその手には銀に輝く剣が振りかぶられて――

『カリブリス・シルバレット
誓約成す勝利の銀剣オツ!!』

――カウンターで一気に薙ぎ払われたああああああっ!?

「……やはり。伝えるのが間に合いませんでしたが、あの二人は戦車^{ルイック}で登録されていますわ」

レイヴェルがそう言うけど、それってつまりそういう事か。

「……キヤスリングですか！ その手がありましたな」

「なるほど。あの二人はかく乱すると同時に、大技を最適に叩き込む為の位置確保が役目だったのか」

ボーヴァとゼノヴィアも思い当って声を上げる。

キヤスリング。チエスの駒を模した悪魔の駒についている、戦車の駒と王を入れ替える機能だ。

レーティングゲームでも一回だけ認められているけど、それが狙いだったのか。

「……えつと、つまりどゆ事？」

「えつとね？ 多分あの二人で敵をを引き付けている間に防戦して、少しでもチームメンバーがいそうな場所を探してたのよ」

首を傾げるアルティイーネに、イリナが様子を見ながらそう説明する。

俺もそうだと思うけど、これってつまりだ。

「そしてそっちに注意が引かれている間に、他のメンバーは防衛しながら本体の位置を探ったんだ。そして、タイミングを見計らってからキヤスリングからの砲撃で奇襲を仕掛けたって感じだろうさ」

俺もそれぐらいは分かる様になってきたんだよなあ。

既に試合は趨勢が決まっている形だ、

人海戦術を担当するメンバーの殆どが今のでごっそり吹き飛ばされ、あとは実力差でひっくり返せる状態になっている。

慌てて集中攻撃で九成を潰そうとしている相手チームだけど、難しいだろう。相手は九成だし、カバーしている女の人も手練れだしな。

「……思い出しました。あの戦車の方々、武山黒狼たけやま ぐろろうさんと行船ゆきふね三美みつみさんですわね」

「知ってるのか、レイヴェル？」

いや、懲罰関連の人達なのは知ってるけど、詳細まで知ってたのか。

レイヴェルはすぐに頷いて、タブレットを操作するとデータを移す。

……あの、最上級悪魔候補とか書かれているんだけど。

「不正を働いて逃亡した最上級悪魔、お二人はその眷属であり、上級昇

格を成されていますわ。逃亡後は他の配下や眷属を宥めて投降に貢献してくださったこともあり、人格に問題なしとして配備されました」

なるほどな。つまりゲームにも慣れている二人と。

「二人とも神器と星辰奏者の資質を併せ持ち、行船さんは準神滅具、武山さんはずば抜けた星辰光の才覚をもって、最上級悪魔到達も狙えるとされた逸材です。あれで何年もゲームをしておりますし、これはかなりの戦力となりえますわ」

「……なるほど。ベテランがいるというのはそれだけで強みだね」

「そうですね。実力もある経験者となれば、戦術においても力になりえますからな」

ゼノヴィアやボーヴァが、レイヴェルの説明に舌を巻く。

ああ、これは……九成、凄い事になるんじゃないか？

大会開幕編 第十四話 ブラフや引き抜きも立派な
戦略的手段である。

カズヒSide

『これは、十中八九で涙換の救済者チームの勝利ですね』

『そうですか？ 今だ数では一忌倒千チームが有利ですが？』

解説隻のクロード長官の言葉に、実況は疑問符を浮かべている。

ただ、これは観客に理解させる為の段取りでしょうね。趨勢は大きく傾いているのは、プロの選手や武闘派なら分かるはずだし。

『残念ながら、場の流れが完全に傾いています。一忌倒千チームも士気が一気に崩れ、連携も取れていませんしね』

『なるほど。数の優位を活かせる環境にない……という事ですか』

「むしろ、あの状況では足かせになってますね。この密度で統率が乱れれば、相手の攻撃から逃れるのも困難ですし」

デイツクは眼鏡をかけ直しながら、クロード長官達の会話に頷いた。

勇ちんも納得しているので、同情の視線を相手チームに向けているぐらいだしね。

「あく。数が多すぎると無駄が増えるしな。乱ればそれが一気に邪魔になるし、こりやマズいわ」

同感。数の多さが完全に混乱を生んでいて、和地達は端から削り取り続ければいいだけといった流れね。

物量の差は確かに脅威だけど、有効に機能しなければ無理がある。相手が考えて立ち回れるのなら尚更ね。

だからこそ、数で劣る時は如何に連携させずに減らすかが肝。何より恐慌状態や混乱状態で統率が取れなければ、逆に足の引っ張り合い

になるから削り放題になりえるわ。もちろんそれができる實力あつてこそだけど、それなら和地は完璧にできる。

物量による圧殺。本来なら人数が制限されるレーティングゲームで反則に近い手段。間違いなく、一忌倒千チームは勝率も高いでしょうし相応の評価がされるでしょう。

ただ、マツチメイクの運が悪かったようね。

数の利をひっくり返される経験。それをそのまま一気に潰しに行けるチームとの戦いで思い知らされる。これでは持ち直す余地もないでしょう。

「……ってというか、和地ってつまり……プロのゲームプレイヤーを引き込んだってわけ!？」

と、鶴羽がはつとなつて画面に視線を戻す。

もはや決着はついたと言つてもいい中、和地達は確実に敵の数を減らし続け、更に敵チームのメンバーを打倒している。

そしてその動きを補佐しているのは、四人の追加メンバー。兵藤邸の懲罰メイド及び従者からスカウトされている以上、レーティングゲームの経験者でもある。

もつと早く気付くべきだったわ。これ、レーティングゲームの特殊ルールに対する対応力で私達は負けていると言つてもいいわね

……これは、中々面白いチーム構成になつてるじゃない。

「和地……頑張つてるね……っ」

オトメねえは感極まつて涙目だし。まあ、実際頑張っているわけだけどね。

「ふふ、競いがいがあるのかしらねえ？」

リーネスのその微笑に、私も笑顔を抑えきれずに頷いた。

「ええ、とても楽しみだわ……っ」

待つてるわよ、激突する、その日を！

なんとか全員無事で相手を全滅させての勝利。俺達「涙換の救済者」チームは初試合を大金屋で飾ることができた。

いきなりあの大量の敵が出てきた時は正直困ったが、経験者の提案もあつて逆に圧倒することができた。

これがレーティングゲーム。実戦とは違った戦い。

まあ、何はともあれ初勝利。俺がリーダーである以上、言うべきことは決まっている。

控室に戻ってから、俺は振り返ると腕を突き上げた。

「何はともあれ初勝利！ お疲れ様でした！」

「「「「「お疲れ様でしたー！」「「「「「」」」」」」」

一斉に返事も返ってきて、俺達はとりあえず一息をつく。

「とりあえず和地様。まずは水分補給にしましょう」

そう言いながらスポーツドリンクを人数分取り出すのは、今回俺がスカウトしたメンバーの一人。

便宜上の懲罰で新生兵藤邸を守ってくれる男性従者。最上級悪魔すら狙えると言われた、若き上級転生悪魔ただし悪魔水準。

名前を武山黒狼^{たけやま こくろう}。はつきり言つて、このチームにおけるブレイン一号だ。

「いやホント、助かりました。素早く作戦まで提案してくれなきゃ、ストレート勝ちは流石に無理でしたしね」

「いえいえ、ああいうパターンはこちらも慣れてませんから。……それと敬語は無しでいいですよ」

感謝の言葉に頷きながら、武山さんはそう釘をさしてくる。

「貴方はこちらのリーダーですし、私達は罪人です。それにあなたは神の子を見張る者で上級堕天使相当の地位にいるのですから、正真正

銘の目上ですから」

正直少し慣れないが、いくなれば「上下ははっきりしておく」という一種の儀礼だろう。

少し気後れするけど、筋は通ってるな。

「……OK、黒狼さん。まだ慣れないが、その辺りは気を付ける」

「ええ。少しずつ慣らしてください」

……外見は俺ときほど変わらないけど、異形だから外見年齢はあてにならない。資料を確認はしているけど、人間としては今から三十年少し前に生まれているしな。

そういう意味でも敬語を使いたいが、異形社会で十数年程度の年齢差は、階級より軽いという事だろう。こういうところは実力主義だ。

慣れた方がいいんだろうが、まあ大変ではあるよなあ。

そんなことを思っていると、後ろから背中をバンと叩かれる。

「ま、そういう事でお願いますねっ！でも和地様、あの一撃やバイですよー！」

「……貴女はちよつと軽すぎるわよ、文香」

三美さんがたしなめるのは、文香・ヴォルフ。

黒狼さんや三美さんと同じ悪魔の眷属で、二人とはそれなりの付き合いでもある。

「その辺にしときなよ？文香はもうちよつと礼儀作法に慣れた方がいいって」

と、更にたしなめるのもまた同じ眷属のおおがみ大上ふみお文雄。

いつそのこと実力と連携を踏まえ、同じ眷属関連だった人達からある程度スカウトした結果、とりあえずこの四名が選ばれた形だ。

状況次第では更に増やすこともあり得るが、それをやるのもリスクが大きい。そもそも兵藤邸や夫妻の警護が主眼だからな。

だからこの人数だが、しかしおかげで助かった。

「それで、今後この構成が主体なのかしら？」

と、そこで汗を拭いていたシルファ・ザンブレイブが髪をかき上げながら振り返りの質問をする。

「兵士の駒担当をとにかく埋める方針で進んでいるけれど、戦略的に

は他の駒を埋めた方がよくないかしら？　メンバーの入れ替えは可能なんでしょう？」

「あ、それアタシも思った」

ベルナもそれが疑問だったのか、軽く首を捻る。

「慣れてるやつ 의견だからスルーしてたがな？　昇格に手間がかかる奴より最初っから強化される駒に人回した方がいいんじゃないかねえか？　女王も空クイーンきにしてるだろ？」

ま、それはそうだろう。

今回、俺達のチーム構成はこんな感じだ。

王：九成和地

女王：未登録

戦車：行船三美

戦車：武山黒狼

騎士：未登録

騎士：未登録

僧侶：ヴィーナ・ザンブレイブ

僧侶：ベルナ・ガルアルエル

兵士（2駒）：枉法インガ

兵士（2駒）：シルファ・ザンブレイブ

兵士（2駒）：大上文雄

兵士（2駒）：文香・ヴォルフ

とにかく兵士の駒を全部埋め、次に戦車の駒を埋めるといった形だ。

正直、俺も最初は疑問だったんだ。ただし、今は違う。

「いや、おそらく着眼点はそこじゃない。だろ、黒狼」

「はい。これはより戦略的な視野をもって動いてのものです、和地様」
黒狼はそう言うと、俺達全体を見回した。

「……とはいえ質問に答えよう。まあ、今回の試合を経験すればこういえば分かるだろう。……このチーム構成はキャスリングを視野に入れたものだ」

王である俺以外相手ということ、年長者としてため口で語るのは、今回のゲームを大きく揺るがした一手だ。

「戦車と王を入れ替えるキャスリング。これは王のリタイアが即敗北となるゲームにおいては間違いなく大きな要素となる。一度のゲームで一度しか使えないが、一度は決定的な敗北を吹き飛ばせるという事だからな」

「……あく、なるほど。つまり兵士を増やせば増やすほど、いざという時戦車にできる人が増えるんですね？ それで、選択肢を増やすと」

ぽんと手を打ったヴィーナの言葉に黒狼は頷いた。

「その通り。付け加えるなら、このチームにおける最大火力は和地様
のあの禁手。キャスリングと組み合わせれば、一撃で戦局をひっくり返す戦略的手札を奇襲に運用できる」

黒狼の主眼はそういうことか。

俺の制約成す勝利の銀剣は、間違いなくこのチームにおける最大火力。キャスリングと組み合わせれば、瞬間的に発射箇所を変えて奇襲じみた運用が可能になる。

いざという時、最も守るべき王の安全確保が可能。場合によっては決定的一撃を効果的に叩き込める。そういう意味ではキャスリングは、一回しか使えない代わりに下手な戦力以上の価値がある。王が火力を誇っているのなら、それもまた一つの方針といふことか。

「最重要防衛対象かつ最大防御力と攻撃力の持ち主を、必要時に一度だけだが瞬時に移動させれるキャスリング。これを如何に運用するかがどれだけ戦略的に価値があるか。今回のようなちやぶ台返しじみた相手との闘いでは尚更重要だ」

「……つまり、神クラスと戦うことも踏まえた戦術を最初から念頭に置くか?」

インガ姉ちゃんも理解したらしい。

俺ははつきり言つて、優勝するぐらいの心持ちでやるつもりだ。そこに關して意をくんでくれている。

だからこそ、帝釈天やらテュポーンやらスルトといった、頂点中の頂点格すら倒すことを踏まえなければならない。

黒狼はその点まで踏まえて、当初の頃からその為の戦術に慣らす予定という事か。

ありがたい。つくづく俺はいいメンバーを持った。

「OKだ。つまり今後も、可能ならキャスリングをあえて使つて慣らしとブラフに使うつてことだな?」

一割ぐらい冗談で言つてみると、黒狼は微笑みながら頷いた。

……あ、そういう事も使うんだ。

「はい。手札というのは「使うかもしれない」と思わせるだけでも効果があります。場合によつては和地様より有利に戦えるメンバーを、和地様を囷にして寄せるということも可能ですしね」

怖いぞこのブレーション。最重要護衛対象たる王を囷にすると宣言しやがった。

ま、それぐらいの腹積もりでなければ主神を打倒するなど不可能という事だ。

よし、それで行くべきだな。

……ま、今は勝利を祝うとするか。

「じゃ、初試合初勝利を祝つて打ち上げだなっ」

「おおう!」

「うわっ!」

俺はあえてはしやぎ気味で、ベルナとインガ姉ちゃんを抱き寄せながらそう提案。

それに対して、他のメンバーもハレの雰囲気の話が進んでいく。

「……そうね。なら高級な日本食を紹介してくれると嬉しいわね」

「いやいや、シルファ? ちよつとリーダーに金をゆすりすぎじゃない

い？ 文雄もなんか言ってるやいなさいよ」

「別にいいんじゃないかな？ ほら、和地様って最初に「金を使う手段があるなら言ってくれ。むしろ数億円は使わせてくれ」とか言ってるし」

「あ、あはは……。でもちよつと気になるかも？」

文香と文雄の言葉尻を捕らえたヴィーナに苦笑されるけど、そこは勘弁してほしい。

とはいえ、シルファを皮切りに打ち解けた会話が弾む。そんな中、俺はちよつとだけ視線を黒狼に向ける。

黒狼も、それを悟って小さく頷いてくれた。

……このメンバー構成は、俺がアテにしていたメンツを他に取られたことが大きい。

だが同時に、アジユカ様からある依頼を受けていたからだ。

『――事情の多くは情報統制もあって言えないが、シルファ・ザンブレイブにはかの真魔王計画で生まれたルシファア関係者だった疑いがあつた』

それそのものはこっそりした検査でハズレだったが、どうもトップ達は何かしらの懸念を持っているらしい。

『彼女達を見定めて、可能ならニンハルト・コーポレーションからこちらに引き抜けないか試してほしい。もちろん、リアス達にはあとで俺から言っておく』

どういう意図かは分からないし、無理強いをするようなこともしない。

ただ、それなりの何かがあるのだろう。それも、俺の立場では情報統制が敷かれるレベルの可能性が。

……まったく。色々と忙しいお祭りになりそうだな。

大会開幕編 第十五話 蟒蛇は星を宿す

和地Side

スタジアム近くの飲食店で祝勝会をすることになり店を見繕った。選んだのは高めの焼き肉店。この辺りなら金も使えて騒がしくても問題ない。日本風だから色々あるだろうしな。

「……なるべく高いのを注文してくれ！ むしろ俺の為を思って注文してくれ!! あ、お姉さん値段が高い順に肉を三種類人数分お願いします！ カードで！」

「落ち着け！ 違う意味で金に振り回されてっぞぞ？」

ベルナに後ろからツッコミを入れられるが、この程度で揺らぐ金じゃないから安心してくれ。

今年だけであの量なんだ。来年からも定期的に入る以上、金を使わないと経済の流れが滞ってしまう。

何としても金を使わないと、困る！

「……そうだ、出資しよう。日本の後継者不足とかに悩んでいる中小企業や町工場に土下座して、一億円ぐらい出資させてもらうんだ」

「……本当に落ち着こう。やるのはいいけど、ちゃんと報告、連絡、相談しようね？」

インガ姉ちゃんにもツッコミを喰らった。

うくん。そこまで言われなければならないというのか。

さて、試合があつたコロシアムの近くなだけあり、割と混んでるな。これは隣の席の人とかいるだろうから、その辺りを気を付けないと

「『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』」

「ヴァーリチームがいたのかよ。」

それから三十分後。

「……うっぷ……っ!？」

「トイレはあっちよ、早く行きなさい」

黒歌にため息をつかれながら、美猴がトイレに向かって足早に向かつていく。

「……だから異能込みにしろって言ったんだ」

俺はそうため息をつきながらジョッキを置く。

事の発端はヴァーリチームと席が隣り合った状態で焼き肉をすることになったことだ。

この辺りは飲酒可能年齢が17歳。それもあつて美猴から飲み勝負を持ちかけられた。

あまりにしつこかったので、俺の飲める限界を図るのも兼ねて付き合った結果、美猴が敗北した形になる。

異能抜きというルールになったのが仇になったな、阿呆め。仙術で調律すればまだ勝ち目はあつたろうに。自爆したとしか言いようがない。

「エスベラント星辰奏者は基本的にザルなんだよ。異能なしで時速100km以上走れる奴がザラにいるレベルの強化が、臓器に対しても働くからな」
だからこそ異能ありにしたかつたんだが、美猴が拒否つたからこの結果だ。

それでも酒に弱い奴はいるらしいが、まあ基本的にはザルだ。なので度数が高い酒が主体になりやすいわけだな。だつてそうじゃないと酔えないし。

ま、割と回っているからこの辺にしておこう。まだ味に慣れてないし、残りはウーロン茶でいいだろう。

「……念為為にシジミの味噌汁頼んでよかったな。飲んでおこう」
肝臓の負荷もあるので、念の為民間療法。

「……う、うん……そうだね……？」

と、そこでヴィーナが戦慄を覚えた表情になっている。というより、俺の飲んでいるシジミの味噌汁に戦慄を覚えている感じだ。

「ああ、味噌汁って外国人は引くこともあるとか？」

「う、うん。色がその……ちよつと引くかな？」

異文化コミュニケーションは大変だつてことだろう。

念の為さつさと飲んでおくか。他人の食欲を削るのはマナーとしてあれだ。

……あれ？ 更に味噌汁がこつちに來たぞ？

「豆腐の味噌汁のお客様は——」

「——あ、私です」

何故かシルファがそれを受け取った。

「し、シルファちゃん……凄いな」

「いえ、日本じゃメジャーだし慣れた方がいいでしょう？ ……なるほど、こんな味なのね」

と、ヴィーナが感心している中、シルファは割とあつさり飲むと満足でもない感じだった。

「何というか、味が複雑に混ざり合っているわね。これがオリエンタルジャパンつてもものなのかしら？」

「だよなあ？ 最初見た時は面食らったが、日本の伝統調味料つて中々イケるぜ？」

と、こちらはこちらで味噌汁を頼んでいたベルナがうんうんと頷いた。

……まあ、焼き肉店で味噌汁はメニューにないことも多いんだが。日本風の焼き肉店だが冥界のそれなので、ちよつと誤解もあるのだろう。

ただ味噌汁は割と美味しい。腕もいいし理解もあったところか。

「ちよ、ちよつと味見を。……あ、美味しいかも？」

そしてヴィーナも試してみたけど、意外と気に入ったらしい。

この辺り、素直というかなんとというか。やっぱいい子だな。

そして、そのきっかけを作ったシルファもいい奴なんだろう。異文化コミュニケーションに積極的というか、自発的に歩み寄ってるな、意外と。

「そういえば、そっちの初戦は大変だったね」

と、インガ姉ちゃんがヴァーリチームに話を振る。

ヴァーリもそこには同意だったのか、苦笑交じりで肩をすくめている。

「勝ち負けはともかく不完全燃烧だね。俺達もまだ出し切っていないが、相手もそうだから尚更だよ」

そういうヴァーリは、その上でこっちに視線を向けてくる。

なんとというか目がキラキラしている。面白そうなおもちゃを見つけた目だ。

「そして、勝利おめでとう。中々歯応えのある相手だったけど、見事に絡めとって撃破したじゃないか」

その視線は、黒狼さんの方にちらりと向く。

「そちらの提案かな？ キャスリングというゲームのルールを上手く使った策だと思うよ」

「まあ、ゲームだからこそその策だという自覚はあるさ」

そう返す黒狼さんは、ちびりと焼酎を飲んでさらりと流す。

ヴァーリは逆にそれに面白そうな表情を浮かべるが、やがて小さく頷いた。

「面倒な制約もままあるが、強者相手に邪魔を入れられることなく戦えるのはいい機会だ。もとより君とは戦ってみたかったし、いずれ戦う機会がくることを願っているよ」

「そりやどうも。ま、俺も天龍打倒ぐらいはできないとって感じなんで容赦はしないがな」

俺はヴァーリの挑戦的な言葉に、あえて挑発的な言い方で返す。

実際問題、極晁を否定した責任を取るのが俺の目的の一つだ。その点を考えるのなら、チーム単位でなら龍神をいなせるだけの成果を上げられるに越したことはない。天龍如きにビビっているわけにはいか

ないのだ。

「なるほどねえ？ ヴァーリや赤龍帝ちゃんと真つ向からやりあえないとつてのが目標なのかしら？」

「ふふ、それは面白い。いえ、それぐらいの気概が相手に欲しいと思つていたところですよ」

乗っかる黒歌やアーサーをスルーしながら、俺は水を飲んで口の中をさっぱりさせる。

……さて、あんまりピリピリした雰囲気で食べるのも論外だ。

よし、ここからはもつとはしやぐか。

ちようどよく肉も焼けているので、俺はそれを箸でとりー

「……よし、インガ姉ちゃん、あーん」

「……はええっ!？」

ーインガ姉ちゃんに差し出してみる。

その瞬間、後頭部をベルナに張り倒された。

「何やってんだ、カズ!？」

「待ってくれ。俺も順番は考えたが、アルコールも回ってるし掴み取った順番という感じにしたんだ！ ちゃんとするから!」

素早く俺は弁明するが、今度は左右から同時に張り倒される。

「そっちじゃない!!」

「じゃあなんだ!？」

あれえ？ なんか会話がかみ合っていないぞ!？」

「……ねえ、もしかして割と酔いが回ってませんか？」

美文にそんなことを言われるけど、そうなんだろうか？

うーん。酒そのものに慣れてないからそのあたりの感覚がさっぱりわからん。

「むう。分った、あーんは明日の朝食とかにした方がいい感じだな」

とりあえず、酔いがさめたときにやった方がいいか。

でもお昼とかだと学校だし、ベルナやインガ姉ちゃんにするタイミングがなあ。

そのあたりを悩んでいると、なんか全員があきれている雰囲気だった。

「あ、これ天然だわ。酔いとか関係ないわ」

文香酷い。天然って何がだよ。

「ふふっ。愛されてますね、お二人とも」

「正直、愛され方に困るときがあるかな?」

「まあ、これもカズの味って奴なのかな?」

ルフェイに応える二人の言い分に、何かが釈然としない。

むう、なんかやらかしてしまっているんだろうか俺は。

「……文香」

と、そこで何か考え込んでいた文香が美文の声をかける。

「え、なに?」

「あくん」

と、振り返った文香に箸でつかんだ肉を向けた。

「……あむ。……うん、焼き加減はもうちよつと緩い方がいいかも」

「そっか。僕はウエルダンの方が好きだから、ちよつと焼きすぎたかな?」

「……」。

なんか妙な沈黙があるな。

「やっぱり問題ないだろ、これ」

「あるから」

ベルナとインガ姉ちゃんのシンクロツツコミは釈然としないなあ。

「……和地様、あの二人は参考にしない方がいいですよ?」

三美さんがなんか苦笑しているけど、そんなにダメかな?

「……どうなんだろう?」

「いや、俺に言われて困るが?」

……ヴァーリに聞いたのは確かに間違いだな。まずこいつはエロ作品で興奮できるようになってからが重要だし。

一方その頃、アザゼル杯の別の試合が行われていた。その試合は注目株。優勝最有力候補たる、帝釈天が率いるチームの戦いである。

隔離結界領域に向かっていない神々の中では最強格とされる神々。間違いなく最強格の力を持つ神仏の筆頭。その力は間違いなく絶大であり、相手になるチームは初戦敗北が間違いないとすら称されていた。

……だが、その結果は逆となる。

「H A H A H A H A H A！ レーティングゲームを舐めてたZE！ ルールに絡めとられたとはいえ負けるとはな！」

ゲームは熾烈を極めたが、その結果は帝釈天の敗北。この事実には、多くの観客が大きな歓声を上げる。

それは大いなる結果はもちろんだが、冥界の悪魔領で行われたゲームであることも大きい。

「まあ、特殊ルールでしたからね。もっとも真つ向勝負でも勝ち目は十分ありました」

そう答えながら、勝利の決定打となったボールを拾いつつ、グレイフィア・ルキフグスがそっけなく答える。

この勝利における大きな要因な二つ。

一つはランページ・ボールというルールそのもの。ファール行為有の球戯といえるこれは、一時的に戦闘不能になってリタイアしても復帰できる。その為、直接戦闘能力が決定打になりにくい。

初手のルールでこの特殊なゲームになったことが、帝釈天にとって大きく不利な展開となった。

そしてもう一つの要因。それは人員の質である。

直属の四天王を引き連れた帝釈天は、間違いなく最強格の質を揃えている。

だがグレイファイアのチームもまた、ずば抜けた者達が揃っていたことでこの差を埋めきっていた。

「……」苦労様、皆。おかげで助かったわ」

振り返りながらそう告げるグレイファイアに、チームメンバーの一人が小さく微笑みながら頷いた。

「なあに。これぐらいはできないと、冥界の民に顔向けできませんからね」

そう返す男に、グレイファイアではなく帝釈天が苦笑いを浮かべる。

「……まさか、純血の魔王血族に生き残りがこんなにいるとな。H A H A H A！ これは面白い戦いになりそうだぜ！」

「おかげで助かりました。貴方を私と彼の二人がかりで抑え込めたからこそ勝利ですからね」

そう答えるグレイファイアは、しかし表情を厳しいもので維持している。

所詮この勝負は勝利の一つでしかない。予選がレートの取り合いである以上、勝数が多ければいいという物ではない。

無理な連戦や不利な相手との勝負で負担をかけ、連敗に繋がることは避けねばならない。また同時に、勝利を何度も積み重ねてレートを増さなければならぬ。

その調整こそが必須である以上、優勝候補を一度の試合で倒した程度では油断ができない。

それだけの決意を籠め、グレイファイアは真っ直ぐに帝釈天を見据える。

「天は二人もいらないと、貴方はアザゼル元総督に仰ったそうですね。……その通り、そして冥界において天の帝を名乗っているのは、断じてあなたではないのですよ」

その言葉で、帝釈天は一端を悟る。

そして面白そうに口元を歪める。それだけの内情を彼は掴んでいた。

「……なるほどNA！ あの坊主は権威欲はそこまでないみてえだし、フロonzの坊主と連名で推薦しても辞退されるって踏んだのか」
政治の傑物であり、大王派の実権をほぼ握ったフロonz・ファイニクス。現ルシファアの妻であり、レヴィアタンの襲名者候補でもあったグレイファイア・ルキフグス。この二人の連名で要望を掲げれば、悪魔側が拒否できることはそうそうない。

だが、本人が辞退すれば話は別。そして、そうするほどのことがいくつもある。

それをあえて、グレイファイアは帝釈天にだけ聞こえるように告げる。

「兵藤一誠こそ、この冥界で天の帝を名乗るに相応しい存在。彼を罪王にすることこそ、私の使命です」

その宣言と共に、彼女は後ろを振り返る。

そこには、あくまで構成される彼女のチームがいる。

彼女自身の努力とフロonzの支援で集まった、元魔王派・大王派・冥革連合投降者で構成されるチーム。

そして、戦力において中核となった三人の悪魔。

「ルシファア、ベルゼブブ、そしてアスモデウスの末裔をもってして、私は赤龍帝を悪魔の王にする。……貴方はその為の踏み台です。断じて邪魔は、させはしない……っ」

今ここに、「光掴む殲滅女王」チームは、最も鮮烈なるデビューを飾ることとなった。

大会開幕編 第十六話 恋する乙女とマッチング!?

和地Side

バリボリと煎餅を食べながら、俺達はレーティングゲームの試合映像を見ている。

……それはグレイファイアさんが王を務めるチームである「光掴む殲滅女王」チームが、帝釈天が率いる「ヴァジュラ」チームと競い、そして勝利している映像だ。

ルールは一回入れるごとに転移するゴールにボールを入れ、そのポイントで勝敗を決める「ランページ・ボール」。

このルールでは撃破されたプレイヤーもある程度の時間が経てば復帰できる為、直接的な戦闘能力が決定打になりにくい。それも勝利に繋がっていると思う。加えて「ヴァジュラ」チームはメンバーの性質上人数が少ない為、このルールだとかかなり不利ではある。

だが、それを踏まえても「光掴む殲滅女王」チームはヤバイ。

何よりヤバイのは、相手チームの王である帝釈天をたった二人で抑え込んでいることだ。

グレイファイアさんは魔王クラス。そして帝釈天は、かつての四大魔王が全員で挑むべき相手とされる。つまり真っ向勝負ではグレイファイアさんでも分が悪すぎる。

それを、足止めに徹したとはいえ二対一で完全に抑え込んだ。

連携があまりに卓越しているわけではない。光掴む殲滅女王チームは急増が否めない故、帝釈天と直下の四天王で構成されるヴァジュラチームの方が数段上の連携だ。

だが、帝釈天がたった二人に抑え込まれているのに引つ張られ、四天王が出し抜かれることも多かった。単純な人数差がもろに出たこともあるが、これも大きい。

……そう、戦えているのだ。

帝釈天をたつた二人で抑え込んだうえ、残ったメンバー同士もある程度の要素が絡んだとはいえ戦いになっている。これが怖い。

「なんていうか、あの女王クイーンの人……やばいね」

「同感。あれ、スペックだけならグレイフィアさんより上じゃないか？」

緋音さんに同意する俺だが、これはまずいだらう。

単純にスペックがやばい。おそらく純粋な性能に限定すれば、奴はグレイフィアさんを超えている。女王に配分されていることもあるだろうが、それを踏まえても魔王クラスはある。

俊敏な動きで帝釈天の攻撃を回避し、魔力で牽制しながらの打撃は帝釈天に手傷を負わせている。

更に他のメンバーも中々だ。

グレイフィアさんを集った魔王派。フロンズが根回しして集めた大王派。更に双方が手を回した冥革連合の投降者。これだけの各勢力から悪魔を集めているわけだ。

本来、そんな複合部隊で即座に連携が組めるわけがない。お互いに価値観が違う以上ギスギスしてもおかしくない。

それでも戦えているのは、誰もが高い練度を誇っている点。そして四天王を一人で足止めできるだけの性能を誇る奴がいる点だ。

それは二人。どちらも一対一で四天王の一人を足止めしている。

帝釈天をグレイフィアさんと共に抑え込んでいる奴も含めた三人。その三人が活躍すれば活躍するほど、グレイフィアさんが活躍するのと同じくらい悪魔側の士気が高まっていく。

そして時間が終わり、ポイント差で勝利が確定。それに伴い悪魔側を中心に、大きな歓声が上がっていく。

そう、何故なら――

『試合終了ううううううううううっ!! 新たな魔王の血族と、我らが銀髪の殲クイーン・オブ・デイバウア滅女王が、かの帝釈天を下して初試合を勝利で飾りましたあああああああつ!!!』

――その三人は、もれなく魔王血族なのだから。

「……フロンスの奴、しかるべき人物に魔王血族を預けてると言っていたが……グレイファイアさんとはな」

思わずぼやくが何をもつてして契約が結ばれたのやら。

ただ一つだけ言えるのは。あのチーム配分はフロンスの策でもあるんだろう。

まず一つ。メンバー構成。

大王派、魔王派、冥革連合。この三つの混合チームにしているのは、悪魔が融和を進めていることのコマーシャルとしては十分すぎる。更に魔王血族までいるのだから、旧魔王派とも折り合いをつけていいと思っっているいい証拠となるだろう。

もう一つ。魔王血族を三名も、グレイファイアさんの下につけている点。

これはかつてルシファーに仕える一族だったルキフグス家、その配下として魔王血族を入れることによる印象操作だろうな。魔王血族はもはや悪魔を従えるものではなく、実力があれば逆の形になると思わせたいんだろう。

そして三つめが、おそらくグレイファイアさんの目的だろう。

まだ噂の段階だが、あまりにも早く広まる形で「光掴む殲滅女王チームは、全員がグレイファイア・ルキフグスに優勝賞品を使わせる為に集った」と流れている。おそらくフロンスの仕込みであり、的外れではないだろう。

つまるところ、大王派のメンツも魔王派のメンツも冥革連合のメンツも納得できる、そんな目的をグレイファイアさんは持っている。全員がそうとは言わないが、各派閥から納得できるやつが出るような目的を持っているわけだ。

「なんていうか、とんでもないことになってるもんだ」

「そうなの？ あの人……それだけの人ってこと？」

緋音さんはその辺り、まだ慣れてないだろうな。

ただ、グレイファイア・ルキフグスとはそういう人だ。

「最強の魔王の妻にして側近であり、当人も魔王につけるだけの人物だ。おそらくフロンスは、九大罪王の一人についてもらいたがって

るだろうからな」

俺もそれぐらいの予想はついている。というか、まず間違いなくそうだろう。

純血悪魔、それも名門一族であり、女性悪魔としては現状最強の存在。九大罪王を認定する場合、フロンズからすれば絶対に入りたい相手だろう。

そしてその交渉の結果がこれなんだろう。グレイフィアさんは条件を出し、フロンズは「アザゼル杯の優勝を支援するので優勝賞品で」といった形で叶えることにしたんだろう。最もそのついでに、真魔王計画を踏まえたいくつかの目論見も併用しているといったところだ。グレイフィアさんもそこは分かっているながら、それで目的成就を目論んでいる。

そういう風に考えるべきだろうけど、また凄い事になっているな。「……優勝賞品をフロンズにいい様に使われても叶えたいグレイフィアさんに、相当の支援をグレイフィアさんにしてでもフロンズが叶えていいと思った願い。いったい何なのか」

思わず俺はそう愚痴るけど、そこで同じようにテレビを見ていた鶴羽が首を傾げる。

「でもさ、グレイフィアさんの願いをフロンズがオツケーするなら止められる悪魔っていないくない?」

言われてみればその通りだな。

大王派の実権を殆ど握っているフロンズと、魔王派にとって相当の発言力があるだろうグレイフィアさん。

この二人が連名で願いを言えば、余程ろくでもない願いでもない限り悪魔社会なら通るだろう。それこそ拒絶するならアジユカ様とゼクラム・バアルが連名で出張る必要がある。そしてそれだけのレベルなら、世界に相応の混乱をもたらしかねないからアザゼル杯では無理のはずだ。

あの二人ならその辺りは読みはできるだろう。それぐらいのことはできる二人のはずだ。

「うーん……?」

なんか訳が分からなくて、俺も鶴羽も首を傾げてしまう。
そんなとき、緋音さんがそつと手を挙げた。

「あの、もしかすると……断らせない為かも？」

「え？」

思わず振り向くと、緋音さんは自信なさげな雰囲気だった。

「悪魔社会は、よく分からない……けどね？ 二人がかりで頼んでも、相手が断ることって……あるでしょ？ だから断れないようにってことじゃ……ない？」

ふむ、なるほど。

「えっと、つまり？ 世界に混乱は生まないけど、普通に頼んでも二人の頼みでも断りそうな人をお願いごとを飲ませる為ってこと？」

鶴羽はかみ砕いて理解して、尚更首を傾げた。

「どこの誰にどんな願い事するのよ？ もしかして、隔離結界領域からサーゼクス様を引っ張り出す研究とか？」

また突拍子もないこと思いついたな、鶴羽の奴。

「あく、そんなこと願うかはともかく、それならアザゼル杯の優勝賞品レベルはいるか？」

「よく分からないけど、旦那さん……だっけ？ 一万年も……離れ離れなら、確かに願っちゃうかも？」

俺も緋音さんも、そうだとするならそれぐらいいるとは思う。

ただなあ。俺からするとそれはないだろとは思う。

だって、フロンズにしたってグレイフィアさんにしたって、理性でそれはしない方がいいと思うだろう。そしてフロンズは感情でそこまでする理由が無いから、なんか理由をつけて諦めさせるぐらいすると思うし。

世界そのものに混乱は生まないだろうが、リスクがデカいし各勢力から反発も出るだろう。その当たりのことは考え突きそうだしなあ。
むう。さっぱり分からん。

いつそのこと直接聞くべきだろうか。でも、言って素直に教えてくれる願なら俺達に誘いをかけるだろうしなあ。

そんなことを思っていると、インターホンが鳴った。

「あ、来たかも？」

そう言って鶴羽がインターホンを確認しに行く。

俺も時間を確認すると、ちょうどいい時間帯だな。

と、ドアも空いてちよつとがやがやしてきたら、扉を開けて部屋に入ってくるカズヒが。

「お待たせ。色々買ってきたわよ？」

さて、今日はその……俺のハーレムでちよつとしたパーティだ。

緋音さんの異形慣れも兼ね、本格的に始めることになったわけな。

さて、みんな仲良くやれるよう、俺もしっかり頑張るか！

カズヒSide

「くっは〜！ とりあえず全員全チーム、初戦は勝ったからお酒が美味しい〜！」

「……はいはい。飲みすぎないでね？」

「ま、もうちよつと飲んででもいいだろ。ほら、リヴァ先生もインガ姉ちゃんもビール注ぐぞー」

一気飲みする前からテンション高めのリヴァにインガがそれとなく抑えをかけ、そんな二人のグラスに和地が流れるようにビールを注ぐ。

とりあえずちよつとしたプチパーティだけど、まあ今のところはいい感じのようね。

そしてこつちも無事終了。

「はいはい。本命のパエリアもできたわよ。……ま、もうちよつと

色々作りたかったけれどね」

「全員分作るにや流石にキッチンが足りねえしな。出来合いのもんも美味しいいいバランスだろ」

と、私とベルナで作ったパエリアを持ってきて、ここからが本番。交流会というか親交を深め、かつ緋音に異形慣れを進める為にこうしてちよつとしたパーティーを開くことにしたけど、掴みはいいかしらね。

「でも、レーティングゲームの試合は初めてだけど……凄いな」

「いやいや、アザゼル杯はお祭りだから。流石に普通のゲームはもつと地味よ?」

「そうねえ。質が凄まじいというか、本来参加しないレベルの強者もどンドン参加しているものお」

緋音にそう春奈やリーネスが語るけど、実際凄まじい戦いが始まっているわね。

……既に途中退場を表明したチームもいるみたいだし、それほどまでに壮絶な戦いが始まっているわね。

既に映像は色々と変わっているけど、やばいチームは初手から目立ってきているようだわ。

「例の真魔王計画とサウス計画といい、この調子だと更なる強者が姿を現しそうね」

「冥革連合としては、純血悪魔で強いのが増えるのはいい事なんだけどね。師匠としては頭痛い?」

春奈にそんな返しを受けるけど、まあそうね。

「グレイフィアさんが首根っこを掴んでくれるだろう魔王血族はともかく、サウスの連中は困った奴ら多そうなもの。元々タカ派の連中でしょう?」

その辺りがとても危険ね。

元々和平の必要性をあまり持っていない連中を押さえる為の策だったもの。それが寄りにもよって成功してしまっている連中である以上、和平に対していい印象を持っている気がしないわ。

変に勝ち続けられると増長しそーうなもの。暴走でもされたらいい

迷惑だわ。

「ま、こんな催しにわざわざ参戦するなら余程の阿呆はしないだろ。神クラスを負かしたらボロツカスに言いそうだがな」

「ま、その時は私達の誰かが負かしてボロツカスに言い返してあげましょう！ 身内の暴走を止めるのも、D×Dの仕事のうちってね？」
和地が同意するように苦笑するけど、そこにリヴァが割って入って明るく言う。

……ま、それもそうね。

それに緋音を不安にさせるのも問題でしょう。明るい話題にするべきだったわね。

失態を内心で恥じ、私は話を切り替える。

「さて、リアス達も大体のメンバーは初戦を勝ちで飾っているわね。……誰かどこかと当たるチームってないの？」

そういうのも含めてがこのお祭りだしね。ちよつとその方向ですらし見るべきだわ。

実際、鶴羽もすぐに乗つかって首を傾げてるし。

「ん〜。確かそろそろ発表になるんじゃないかなかったっけ？ どうなの、その辺？」

「そうねえ。……あ、ちよつど発表みたいよお？」

と、リーネスが番組表を確認し、そしてチャンネルを変える。

と、そこではスロットのような形で新しい試合の発表が進んでいった。

一応私達は全員登録しており、そしてメンバーが切り替わっていく
けれ……ど……。

「「「「「あ「「「「」

思わず、そのマツチメイクに声を上げてしまった。

試合が確定したチーム名は、「涙換タイタス・クロウの救済者」と「王道の再興者」の
チーム。

涙換の救済者チームは当然、和地が率いているチーム。

そして王道の再興者チームとは、王の駒を正式採用することを要望している、悪魔が率いているチームだ。

つまるところ――

「……いいじゃない。ちよつと楽しみになつてきた」

「……そうか？ 俺はちよつと戸惑つてるぞ？」

――和地と春奈が激突する。そういう事になつたのだ。

そして、春奈は和地とは異なり嬉しそうだ。

ちよつと戸惑つている和地に対し、春奈はだけど笑顔を向ける。

「私の誓いは変わつてない。……ううん、思い出したことでもつと強くなつた」

それは、戦意。そして好意。

ふふ。和地も大変なことになりそうね。

何故なら――

「……和つちに胸を張れるぐらい強くなりたいもの。だから、思いつきり全力で挑んであげるわ」

――恋する乙女は、ヤバいわよ？

大会開幕編 第十七話 睡眠の覚醒

イツセーSide

俺は気分転換も兼ねて、地下のトレーニングルームで汗を流していた。

トレーニングに関しては専用の異空間をオカ研は持っているけど、こういうところで軽く運動するのはいい感じだ。気分転換なら風呂場も近いしこっちの方が便利な時もあるよなあ。

軽く体を動かさないと、ちよつともやもやしそうだったからなあ。と、そんなことを思っているとトレーニングルームに入ってくる人がいた。

「あら、イツセーくん？」

「あ、有加利さんですか」

トレーニングスーツを着た有加利さんが、俺に気づいて声をかけてくれる。

「ふふ。最初の頃は普通に話してくれたのにね？」

「いや、あの時は年上だって気づかなかったから」

色々あつて分かつてなかったけど、年上だったとは気づかなかったぜ。

「それで、有加利さんはどうしてここに？」

「うん。ちよつと体を動かしておこうかと思つて……ほら、強くなりたいから」

そう苦笑する有加利さんは、静かに自分の手を見つめている。

「……何かできるよになりたいっていう、強迫観念かな？ そうでないよ、自分を許せないから」

「……大変つすね」

いろんな意味でだ。

色々な意味で被害者といえる有加利さんだけど、実働として被害を増やしてしまっているからな。白い目で見ると見るやつもいるし、罪悪感も出るんだろう。

しかも魔王血族で、準神滅具の保有者。力を持っているというしかない。

……そう思われたことも、こうなってる理由なんだろうな。

「で、検査の結果はどうでした？」

「……それがさっぱり。準神滅具のはずなのに、性能が明らかに低いって」

そうなんだよなあ。

亜香里や有加利さんは、魔王の血を引いているだけでなく準神滅具まで持っている。はつきり言って滅茶強い人のはずなんだ。

ただ、検査してみると性能が明らかに低いと出た。アザゼル杯換算だと精々が4駒レベルで、魔王血族と準神滅具のコンボだと思えないぐらい低いってなっている。

元々かなり特殊なこともあって、戦場には出さない方がいいとは言われている。言われているけど、それとは別の意味で不安にはなる。なんだろう。墮天使化までしているんだから、もつと強くてもおかしくないはずなんだけど。

……うくん、分からん！

「よし！ こういう時は鍛えましょう！」

「そ、そういうものなの？」

ちよつと困惑されるけど、難しいことは俺には分からんしな。

「とりあえず、体は鍛えておいて損はないです！ 基礎体力がある方が日常生活も楽ですし、やせやすいし疲れも溜まり難く取りやすいですから！」

「やろー！」

俺が経験則を言うと、凄い勢いで食いついた。

え、どこのそんな食いつくところが……あ。

日本人女子なら、大半が食いつく部分があったな。

「……いえ、出るところ出てるだけでむしろすらっとしてますけどっ！」

セクハラかもしれないけど、とりあえず思ったことを言ってみる。そしたら有加利さん、そつと目を逸らした。「イツセー君。私、これでも結構体重には気を使ってこれなの……っ」じよ、女性に体重の話は降らない方がいいな。知識じゃなくて経験で実感したよ。

和地 Side

気分転換も兼ねて本館の屋上にいたら、妙なものを見つけた。

魔力で出来た綿のような物体。それが二メートル強の潰れたラグビーボールみたいな形で屋上に鎮座している。

控えめに言ってるんだこれ。得体が知れなさすぎる。

何の通達も警報も無いから敵ではないだろうが、こっちの警戒網が優秀だろうと、敵がそれ以上ならすり抜けられるだろうしな。

「……すまん皆。なんか妙な物体を本館屋上で見つけた」

俺はショットライザーを展開しながらそれを伝え

『「もこもこした物体だったら安全よ？」』

『「あ、それならたぶん亜香里だと思うよ？」』

—そんな、リアス先輩と有加利の返事を聞いた。

……んん？

俺は首を傾げながら、念の為確認をするべく近づいてみる。

そつと覗くと、なんていうかいい寝顔の亜香里がそこにいた。

「……すびっ……っ」

見てるこっちがほっこりするほどの寝顔だな。

訳も分からず微笑みそうになったが、すぐにその寝顔がうなされる様になっている。

これ、起こした方がいいかもな。

「おい、亜香里起きー」

「……ひゃあつ!?!」

言い終える前に飛び起きた。

そして見事にその額に迫りくる。

「うおつとおつ!?!」

「……はえ?..」

だがその前に高速バク転で俺は回避。これまでの経験を積み上げて鍛錬を重ねてきたことが、俺にこの回避を可能とした。

素早く一回転しながら後退すると、着地して周囲を念の為確認してから俺はホツとする。

亜香里も亜香里で困惑しているが、周囲を確認するとこれまだ心安のようだ。

「あ、ごめん。三回に一回ぐらい、まだこんな感じで」

まあ、嫌な夢を見てしまうのは仕方がない。それにあんなことがあったんだし、トラウマにもなっているだろうしな。

ただ、お昼寝が趣味なのに嫌な夢をよく見るのは大変だろう。そこは同情する。

「ああ、それはいい。それより聞きたいのはだな?..」

それより俺が聞きたいのは、だ。

綿状になっている、謎の物体で亜香里は寝ていた。そしてリアス先輩と有加利の返信から、これが亜香里によるものだと推測できる。

「……それ、何?..」

真剣に俺はそこを質問する。

凄く気になる。とつても気になる。

「あ、これ? イッセー達から魔力について教わってたら思いついたの」

亜香里はそう言うと、ちよつと自慢げに微笑んだ。

「ふんわり柔らかか、それでいて気温も調整します!.. これぞ、お昼寝用

に作った私の魔力！」

……お、おおう。

ついに睡眠欲が魔力で技となったか。

イツセーの性欲、ヴァーリの食欲、そこに続くは睡眠欲。

……この女、いずれは第三の天龍になるかもしれない。

ちよつと戦慄覚えながら見ていると、亜香里はポンポンと魔力を広げながらその部分を叩いてみる。

「寝てみる？ すっごい眠れるけど？」

「……………あ、じゃあちよつと試しに」

俺は素早くアラームを30分設定したうえで、気になったので試してみた。

気づいたら眠っていた。なんだこの安眠誘発力は…………つ

カズヒSide

私は兵藤邸のリビングで、一息をついていた。

特別風紀隊としての仕事もこなしつつ、低い学力で何とか駒王学園の勉強についていく。その上でD×Dとしていざという時に備えた鍛錬を積み上げつつ、アザゼル杯の準備も行っている。

やることが多いわね。イツセーやリアスは此処に上級悪魔としての各種活動もあるというのに、よくやるわと言いたいわ。

なんとなく感心していると、私の空になったコップに水が入っている。

「お疲れ師匠。どう、次の試合の準備は？」

「ありがとう春奈。まあ、及第点は貰えるレベルかしらね」

何時の間にか水を持ってきてくれた春奈に礼を言いつつ、私はそう返す。

まあ、小規模とはいえ一PMCをメンバーに加えられたのは大きい。バックアップ体制が割と大きいから、こういう時は比較的手間が少ないもの。

そういう意味では、春奈達の方が最高でしょうけどね。

「で？ 王の駒を限定的にでも正式採用させる為のチーム様は、どれぐらい頑張っているのかしら？」

「ふっふうん。仮にも現役の上級悪魔様が何人も参加してるからね。そういう作業は簡単にできる土壤が万端って感じ？」

春奈がそう返すけど、実際面倒なものね。

春奈が参加しているのは、王道の再興者チーム。

デイハウザー・ベリアルによる告発で負の側面が大量に明かされ、それゆえにガレシオンといったTFユニットの採用すらちよつと文句が出ているレベル現状。それを打開する為に結成されたチームだ。

最も文句が出ている止まりのTFユニット採用を超え、ある程度の条件をクリアした者に限りとはいえ、純血悪魔に直接使うことを前提としている。優勝賞品クラスを使わなければ難しいのが現状でしよう。

そんな目的をもって、冥革連合及び彼らの監視役も兼ねた現政権の若い上級悪魔が中心となったチーム。現状においては連戦連勝で、有力チームの一つとなっている。

冥革連合からのメンバーは王の駒を停止させられているが、それでもあのヴィールに付き従う者達。練度は非常に高く、既に弱体化した自分にも慣れている。停止されているのが王の駒だけなので、神聖血脈というアドバンテージは残されていることもあって、全員が最低でも上級悪魔の上位レベルだものね。

そして若い悪魔達も、冥革連合が共闘を選ぶだけあって練度は高い。きちんとした才能をちゃんと高めているうえで王の駒を使うといった形のようなだ。

……冥革連合は自肅もあってチーム構成で半分程度だけど、彼らがコーチとなる形でブートキャンプをやっているらしい。その為練度が試合ごとに高まっており、神クラスが参加しているチームすら打倒している。

もつとも、打倒の要は春奈と双竜健也だったけれど。

「それで、神滅具化した神器の検査とかも終わったのよね？ どうなったの？」

「それはもう。完全上位互換って感じで、将来的に神滅具認定は確實って感じね！」

私が振ると、春奈はそう言って胸を張る。

「その名も赫焰フレイズ・エンブレス女帝！ ま、神滅具化したことで禁手がリセットされてるけど、つまりまだ伸び代があるってことだしね」

「……また難敵が誕生したという事かしらね」

ちよつと苦笑するレベルでだけれど、かなり難儀な相手になりそうね。

とはいえ、これまでの手合わせとかも含めてとにかく強い事だけは分かる。

神滅具は二つの特性を持つことが多いけれど、春奈の場合は割とシンプルだ。

全身を基点とする形で高出力の炎を具現化する。そして炎の運用方法を特化した特殊な形で高効率・高出力で放つ「焰技」の発生。

つまるところ、かつての禁手の機能を拡張発展させている。加えて一つの統合されたことで、赤き炎の腕を取り込んだ数とは無縁になったと思われ、手数においては破格と言っていいいでしょう。

まったくもって末恐ろしいわ。大概ね。

そして上位神滅具たる双竜健也と共に、王道の再興者チームの切り札となっている。まったく、ヴィールもこれは誇らしいんじゃないかしら。

まあ、それと激突することになる和地は大変でしょうけど。

「で、和地との試合を前にどんな感じ？」

「冥革連合側は燃えてるわよ？ ヴィール様が聖血を託した男との戦いだしね」

なるほど。それは大変ね。

「ま、和地も和地で手は抜かないでしょう。お互い、悔いが残らないような試合をすることを期待するわ」

「もちろんよ！」

春奈はそう胸を張るけど、少しだけ神妙な雰囲気になった。

「……まあ、万が一和地が無様な試合したらキレそうだけどね……皆」

「……する気は流石にないでしょうけど、ゲーム慣れしてないものね、和地」

冥革連合、どいつもこいつもなまじ意識が高いから、その点は不安ね。

いえ、和地は間違いなく自己研鑽を欠かさないけれど。その辺り、本当は問題なんて欠片も無いんだけれども。

大会開幕編 第十八話 連・戦・直・前

和地Side

非常にいい睡眠がとれた。亜香里の奴、ちよつと怖いぐらいセンスがあるな。

おかげで今日のトレーニングもしっかりとできそうだ。むしろ調子がいいから効率も上がってるかもな。

魔剣を創造し、魔術で補佐をしながら、素早く振るう。

仮定する難易度は高めに設定しつつ、現実的に攻略の余地があるレベルに設定。ここを誤ると都合のいい展開を妄想しそうになるし、何より本当にやばい時に引き際を見誤る。

その上で全力を振り絞ること数十分。俺は一息を入れるべく、休息をとる。

取れる時にきちんと休む。そもそも取れる時間をとる。これができるやつが普通は勝つ。そして普通でない方法は普通無理だからこそ、参考にしない。

そういう異常は異常であると、きちんと理解して自制しないとけない。これが曖昧になると人に押し付けるからな。人は自分にとつての当たり前を、他人にも当たり前だと思ひ込みたがる悪癖があるしな。

だからこそ、過酷ではあつても異常ではない範疇内で収めた訓練でまとめつつもだ。そこから先を踏まえる必要もある。

残念なことに、世界初の残神到達者であり、二番目の極晃到達者は普通ではない。となると俺の今後を踏まえた場合、普通ではない領域も考慮して立ち回るべきだ。

……そして残酷なことに、次の試合は色々と懸念事項が多すぎる。

「……はあ」

思わずため息をついた時、だ。

「……どうしましたか、和地様？」

ジャージ姿の三美さんが、トレーニングルームに入ってきた。

さりと他に人がいないか確認している辺り、そこを考えてトレーニングを積んでいたんだろう。気遣いできる方だ。

「あく、どうも三美さん。いえ、ちょっと次の試合で気が重くて」

隠すのもあれかと思ひ、俺は素直にその辺りを白状することにする。

ストレッチで体をメンテナンスしながら、基礎取れをしている三美さんの横で、俺は素直な不安を吐き出した。

「次戦う王道の再興者チームは、冥革連合の参加者が数多いチームです。……いろんな意味で、俺は彼らが意識する奴ですからね」

そこは考えないといけないわけだ。

なにせ、冥革連合盟主であるヴィールは、俺達が打倒した。更にその前には春つちを貰い受けており、春つちの評価は冥革連合でも高い。とどめに奴からは鮮血パブテマス・ブラッドの聖別洗礼を植え付けられており、別途で神聖血脈の余地を一つ上乘せされる大盤振る舞い。

冗談抜きで、無様を見せるようなら俺は奴らに殺される。あいつら基本生き方がガチだから、情けないところは見せられない。

つまるところ、俺がヴィールを打倒するだけの価値があることを証明することは必須だ。いかなれば、小姑軍団を相手にすることになるわけだからな。気合を入れねばならんだろう。

だからこそ、だ。

「……俺、聖血の方はまだまだな状態なもので。焦ってはいませんが懸念事項でして」

「なるほど。冥革連合にとって、聖血それは重いですからね」

理解してくれてありがたいです。

敬愛する盟主の使っていた神滅具。それも、その盟主自らの意思で託された男が使っている。これを軽く考えるとは思えない連中だからなチームだからな。

まして春つちとの正面戦闘だ。春つちも俺を意識するだろうし、冥

革連合なら尚更だろう。

それなりのものは見せるべきだし、俺も見せたいとは思っている。だからこそ、だ。

「相応のものを聖血をもって成したい。だが現状では難しい……と、そういう事ですか」

三美さんはすぐに納得してくれてありがたい。

そう、出来ることならあいつらには、俺が聖血をヴィールから託されるに相応しい男だと納得してもらいたい。

まだ数か月しか経ってないとはいえ、数か月经っていることも事実だ。

せめて本体側の神聖血脈は掴めないと、あいつらも失望するし春っちも思うところが出るかもしれない。

そう思うとなあ、ちよつとなあ。

そんな感情が実は渦巻いているわけだが、基礎取れを終えた三美さんは小さく微笑んだ。

「……何も、力の発現に拘る必要はないと思いますよ？」

その言葉に、俺ははつと気が付いた。

「そうか、神聖存在への変化はある程度はできてるんだ」

「はい。鮮血の聖別洗礼は、自己の肉体を神聖存在という形で聖遺物化しての強化及び、神聖血脈という固有の異能を獲得させる神滅具です。片方ができているのなら、それを研ぎ澄ますだけでもだいぶ変わるでしょう」

俺に頷く三美さんは、そして寂しげに微笑んだ。

「生物はできることしかできません。無理にできることを増やすより、出来ることをより研ぎ澄ます選択肢があります。冥革連合とは何度が戦っておりますが、自分なりに力を研ぎ澄ますことだけでも評価する者が多い印象がありますから」

「あ、戦ったことあるんですね」

だとすると苦労しただろうなあ。

あいつら、全員もれなく強いからなあ。貴族だから上級悪魔で才能ある。意識高いから鍛錬も欠かさない努力家だし。とどめに当時は、

キング
ディアボロス
王の駒か真魔の駒も使っているわけだし。

マジで戦って生き残っているとか、本当に優秀な人だよなあ。最上級悪魔の眷属だけあって、トレードされないだけのポテンシャルはあるんだろう。

……それはそれとして、本当に大変だったろうに。心底同情するぞ。

俺のその感情が分かっていたのか三美さんも少し苦笑していた。

「自己研鑽を欠かさないの、取り逃がすと必ずそれ以上の手合いに化けるんですよね……」

「……人のことは言えないけど、敵に回すととても厄介な連中だ」

俺達もそんなところがあるから、戦っていた奴らからするととても厄介だろう。こんな形で敵の気持ちに分かるとは思わなかった。

そうだな。基本的にはそれだろう。

土壇場で限界を超えるのではなく、限界を鍛錬で拡張し、出来ることを増やして磨いていく。基本はそれがベターであり、俺はそれが人より卓越しているタイプだ。

ならまずはその道。一足飛びに進化する必要はない。

……いかな。ちよつと迷走してたか。

「ありがとうございます、三美さん。おかげで少し頭が冷えました」

「いえ、チームリーダーのサポートもメンバーの務めですから」

イヤホンと、割と本気でありがたいってもんだ。

カズヒSide

私は呼吸を整え、そして四肢を振るう。

想定するのは和地の卓越した守りの動き。そしてミザリの圧倒的な理解と反応に裏打ちされる対応だ。

二人はそれぞれ別の意味で、ディフェンス面で鉄壁といえる。本質的にオフェンスに特化している私だからこそ、この二人を超えるイメージトレーニングは必須だろう。

……同時に、自分に都合のいいことを考えずに突破する光景を見抜けないのも難点だ。

まったく。私が愛する男はどいつもこいつも守りが固い。妙なところで相性がかみ合っているといかなんというか。

そして二十分ほど繰り返していたが、都合のいい妄想無しで防御を突破するイメージは結局掴めなかった。

さすがにイメージとの模擬戦で覚醒はできない。裏を返せば、覚醒しての急成長無しで二人の対応を突破することは今の私にはできないという事だろう。

だからこそ、ネットクはそこだ。

覚醒という手段は断じて当たり前のことではない。そもそも意志の力で急成長を遂げ、肉体までそれに引っ張られるのは異常事態。不可能はできないから不可能であり、限界は超えられないからこそその限界であり、超えてできればそれが致命に繋がるはずなのだ。

それができるやつは特例でしかない。そんなものを基準にしてはいけない。

だからこそ、覚醒は使わずに済むなら越したことはないものでなければならぬ。必要な時に使うことは変わらないが、必要としない力を得る努力が必要なのだ。

だからこそ、私は己を鍛え続ける。

覚醒せずに耐えられる力を得る為に。それを成す努力もないくせに、覚醒でどうにかしようというのもそもそも問題だろう。

……ゆえに、私は必ず強くなる。

かつての愚かな自分を戒め、和地に誇れる、みんなと共にある自分でい続ける為に、必ず成長して見せる。

その決意と共に、私は拳を握り締めた。

イツセーSide

よし、準備はできた。

やるだけのことはいつもやってる。鍛錬は毎日積んでいる。

その上で、俺達はいつもそれ以上を目指してきた。

次の試合、相手は雷光チーム。バラキエルさんとの闘いだ。

バラキエルさん。朱乃さんのお父さん。

ハーレム王を目指すに当たって、いろんな意味で攻略しなくちゃいけない相手だ。腹もくくるし準備もするさ。

そしてその上で、俺は勝つ。

色々と複雑になるかもだけど、競うのならば本気で挑むべきだ。それが相手への礼儀だと、俺は思ってるし思っている相手とばかり競ってきた。

だからこそ、俺もここからが本番だ。

最初から数試合しているけど、俺達は色々と言われている。

戦闘能力はあるけど、ゲームの特殊ルールに引つかかることが多い。その所為でテレビでも色々と言われている。

だからこそ、ここからだ。

レイヴェルが示したとんでもないアンサーを、俺が形にして見せる。

ああ、勝つし示すぜ、俺達は!!

「……三人とも、気合が入っているようですよ?」

「そうね。むしろそれでこそだわ」

僕がそれとなく探った情報を聞いて、リアス姉さんは微笑んだ。

競い合う仲間達が、全員本気で先を目指している。その事実がたまらない。

だからこそ、僕も目指す。

「ではリアス姉さん。僕達も目指しませんとね」

「ええ。だからこそ……示してみないといけないわね?」

そう微笑み、リアス姉さんは戦意を見せる。

「ええ、示して見せるわよ。……私達が並び立てるのだとね」

そしてリアス部長はそれを見せー

「私もまた、それに恥じない仲間だということをおね?」

——完成度を増した新技を、見せつけるのさ。

大会開幕編 第十九話 悪魔重鎮胃痛案件

イツセーSIDE

さあて、今日は色々忙しいぞー！

リアスのチームも俺のチームもカズビのチームも九成のチームも暴れるからな！ 更に九成のチームは成田さんがいるチームと激突するし、本当に忙しい！

試合はなるべく全部観戦したいし、俺もバラキエルさん達に勝ちたいし。とにかくやることが多いぜ！

そんな感じで、ちよつとリビングで気を静めながら今日のことを考えていると、掃除機を持った成田さんが入ってきた。

「……あ、イツセー。そっちは準備いいの？」

「そっちもだろ、成田さん。メイド業務までしていいのかよ？」

むしろそっちこそ休んでいた方がいいと思うんだけどなあ。

だって、メリードは従者として色々厳しいというかなんというか。リアス達は基本的に家事を手伝う分、メリードは仕事を目ざとく探して何とかしてるからな。

壁の掃除や、町内会のボランティア活動に参加するとか色々やってるし。割と重労働だと思うんだけど。

ただ、成田さんはどうってことないように肩をすくめる。

「一応私、メイドが今の基本よ？。そもそもガチでテロってたわけだし、きちんとかなしてからやらないとね」

う、うくん。確かに言ってることはあってるけど。

「ヴァーリとか曹操とか、普通に出てるしいいんじゃないか？」

「いや、あそこまで神経太くないわよ？」

おお、容赦ない。

「私達だって、それなりの後見人や身元保証人としてしつかりとした

貴族様達がついているからこそその参加だしね。それだって納得してない奴は多いだろうしね」

あく、確かに。

冥革連合って、禍の団の同盟組織だったしな。それもかなり大規模で一大派閥レベルの発言力もあつたし。王の駒も裏の事情があつたのを知っていた上でやっていたわけで、考えようによってはもみ消しじみたことを狙ってたわけだしな。

そういう意味だと、やっぱり不満や敵意を持っている奴は多そうだな。

「特に、監視役が参加してないヴァーリチームは不安ね。一応和平会談の時だって、死傷者は一桁じゃきかないでしょ？　監視役ゼロで参加って、ヘイト稼がない？」

「どうなんだろう。アザゼル先生達が連名で推して最上級悪魔だし、案外何とかなるんじゃないか？」

実際問題、冥界では英雄の一人だしな。

実際ヴァーリがいなかったら、ミザリの打倒はもつと被害が大きかったはずだし。アジ・ダハーカの打倒だって、ヴァーリが挑まなければもつと被害が出てたはずだ。

だから大丈夫だと思うけどなって思っていると、成田さんは掃除機を掛けながらため息をつく。

「因みに、王道の再興者は脅迫状とか送られたわよ？　私も名指して殺害予告とかされてるし」

え、マジかよ。

俺がちよつと引いていると、成田さんは肩をすくめる。

「ま、私の場合は神器を強引に篡奪して強化したクチだしね。……相手は選んでるけど、そんなことした奴が一度はテロまで起こしたら当然でしょ」

「……あく、それもそうか」

確かに、言われてみるとそうなんだよなあ。

神器を強引に摘出すれば、基本的に死に至る。神の子を見張る者の技術でもそうなるから、やっぱり成田さんの件もそうなるわけか。

ただ、そこは安心ではないけど確信はあるんだよ。

「でも成田さん、っていうかヴィールの監修ありだろ？ 罪もないただ毎日を生きている人から強引につて想像できないんだけど」

あのヴィールで、その眷属の成田さんだからなあ。

レイナーレとかコカビエルなら分かるけど、ヴィールがそういうやり口を選ぶとも思えないっていうか。あいつのことだから、下劣な手段はしてないと思うんだよ。

その眷属であることを今でも誇っている成田さんなら、こつそりそういうことをするっていうのも無いと思うし。だから今まで、その辺りを突つつく気にもならなかったんだよなあ。

俺がそんなことを考えているのに気づいたのか、成田さんも肩をすくめる。

「……ま、そこはあってるけど。敵対したちんけな犯罪者集団を叩き潰すついでにかき集めたって感じね。……あれはついていると言っているのかしらね」

犯罪者集団か。

人間側でも、お国柄でそういうのの容赦とかが変わるしな。異形社会は遠慮なくその場の判断で殺せる時とかも多いし、尚更か。

「因みにどんな犯罪者集団だったんだ？」

「赤き炎の腕保有者だらけで構成された、金を貰って放火を繰り返す連中よ。割とこっちの関係者も被害受けてて、そいつらを壊滅させたことがヴィール様にとってかなりの評価になっていたわね」

……凄いな、オイ。

神器って本当に悪用されることが多いな。聖書の神様が死んでることもあって、教会も堂々と神器を公表できないってのがキツイのかもな。

ただ、赤き炎の腕保有者だらけか。

成田さんは十個以上の赤き炎の腕を統合して、最近には禁手通り越して神滅具級の進化まで遂げたけど、凄い数だよな。

「赤き炎の腕だって、神器全体で見たら比較的凄い方なんだろう？ 使い手ばかりたくさん集められるのか？」

「ボスも禁手に至ってたのよ」

成田さんは嫌なことを思い出した感じの表情で、ちよつと遠い目になった。

「赤き炎の腕を保有している奴を感知する、索敵機能に特化した禁手ね。で、放火して金稼いで人口密集地に言つてスカウトして更に放火して金稼いで……の無限ループ」

「うっへえ」

そりや大変だ。

つまり、神器保有者が十数人もいる連中なわけだ。しかも神器の性質が性質だから、警察だと放火の道具が見つからないってことになる。

また面倒な奴もいたもんだな、オイ。

「……ま、それは別として冥革連合が反乱を起こしたことは事実。自らの意思でそれをしたのなら、業は背負えるだけ背負わないとつてことね」

そういうと、成田さんは掃除機をかけ終わったので片付け始める。

そして、俺の方を向くと拳を握り締めて突き付けた。

「そういうわけだから、ぶつかるときはお互い遠慮なしよ。我が主ヴィール様の最後の命に賭け、悪魔の富国強兵を目指す私達に容赦はないわ」

「……もちろんさ。お互い試合の場では全力でぶつかるのが礼儀ってもんなんでな」

ああ、成田さん達が相手の時だって容赦はしない。

全力で挑んで、必ず勝つき。

ま、九成もいるし大丈夫だろうけど……な？

「しっかし、オカ研主体のチームが軒並み試合とは意外な展開ね」
「そうですね。それにどのチームも強者ですし、偶然にしる意図的にしろ、お姉さま達の力を見せなければいけない日ではないでしょうか？」

私の眩きにカズホが応えるけど、実際そうね。

私達と相對するのは、悪魔祓いの中でも対上級を優先的に拝命する手練れだらけのチーム。

リアスと相對するのは、レーティングゲームのランキングでも上位をキープする強豪。

イツセーと相對するのは、現墮天使副総督であり純血墮天使としては最強格のバラキエルさん。

そして和地は、春奈を擁する王の駒正式採用を目指す、若き悪魔達のチーム。

全てのチームが現段階で連戦連勝。本戦出場も不可能ではないとされるチームが激突する試合だらけだ。

誰が勝つかは分からない。ただ、誰が勝ってもおかしくない。

そういう、三大勢力の実力者達同士のぶつかり合い。どの試合もかなり注目されていると聞いている。

だからこそ。無様な試合は見せられない。

……とはいえ、面倒なことも多いようだけれどね。

「で、私宛の脅迫状ってきたの？」

「……いきなり何を意味不明なことを？」

意味不明なことを言われて困惑しているように言うけれど、動揺が隠せてないわね。

「誰が何と言おうと、ミザリ・ルシファア道間誠明の始まりにカズヒ・シチャースチエ道間日美子は深く関与している。その時点でヘイトなんていくらでも生まれるでしょう」

だからこそでもある。

今後私と和地と共にいることを容認してもらおう為には、相応のこ

とを必要がある。

ただ同時に、あれだけのことが起きた以上どこまで行っても私に負の感情は向けられる。そういう奴は必ず出てくるし、感情の問題だから嫌悪を完全に消すことも現実的じゃない。

だからこそ、復興支援金目的と堂々と公言したところで嫌悪感に向けられるでしょう。偽善者とか売名行為とか言われるでしょうしね。だからまあ、そこは実感しておくべきだものね。

「……七通ほど来ていたようです。数枚にはカミソリや血文字まであつたと」

「……それだけ？ 少なすぎないかしら？」

本音が出たら信じられないような視線を向けられた。

……ミザリ関連の被害や日美子のしたことを考えれば、桁が二つは少なくないかしら？

「……おいおい、マジか？」

「うっそお……」

「え？」

と、少し離れたところで今回のメンバー達がなんかどよめいているわね。

何かあつたのかと覗いてみれば――

「……また、面倒なこと……っ」

「お姉さま、気を確かに！ いえ確かに大問題ですが!!」

真剣に胃が痛くなる事態が乱れ撃ちに……っ

崩れ落ちるは、三大勢力の精鋭達。

神の子を見張る者が擁する、準神滅具を宿すハーフ墮天使。

教会から参加した、上級クラスの異形相手に動かれる、精鋭悪魔祓
い。

そしてレーティングゲームのレートでも3000に届くレベルの
最上級悪魔。

和平により意気投合する機会を得た者達で構成されるチームは、こ
こに至るまで連戦連勝。優勝候補とは言わないまでも、好成績を収め
るだろうと確信すら持たれていた。

……そのチームが、誰一人倒すことなく全滅して敗北した。制限時
間が八割も残っている段階での決着である。

まさにワンサイドゲーム、完全試合。圧倒的な勝利をもって、その
チームは会場に帰還する。

そのチームはあまりにも特殊だった。

王がここに至るまでフードを被っていたチームは、これまた連戦連
勝ではあったが目立たなかった。

それは参加チームの中では下馬評が低い者達とばかり当たってい
たこともある。そしてその試合運びも、決して圧倒的とは言えないよ
うな立ち回りだった。

それゆえに下馬評では圧倒的に相手が上。それがこの圧倒的完封
勝利。観客は誰もが戦慄すら覚えている。

……そして、一部の者はこれが演出だと感づいていた。

おそらくは、マッチメイクで強いチームとぶつかるまで本気を出さ
なかった。そしてそれが巡りめぐって、想定以上の成果を上げてい
る。

これまでパツとしなかったチームが、強者と認められたチームを相
手に圧倒的な勝利を飾る。これはどうあがいても強い衝撃を与える
ものであり、必然として有名になるだろう。

……そして問題はその王。

フードを取り払ったその男は、悪魔だった。

中性的な容姿を持つその悪魔は、何故か手を傷つけると血を採取する。

その奇行に観客の注目が集まる中、彼は宣言する。

「改めまして、初めまして……諸君っ！ 我が名はラツイーカ・レヴィアタン！ 初代レヴィアタンの血を引く、純血悪魔なり!!」

その宣言に、会場は思わず沈黙する。

「嘘だと思われないよう、ここに血液を提供するのでぜひ調べてほしい！ そして同時に……私は此処に二つを宣言する！」

そう言いながら血を入れた小瓶を掲げ、そしてラツイーカは胸を張る。

「私は、偉大なる主ハーデス様に相応しくなる為、九大罪王の一角を狙う！ 優勝の暁にはその地位を要求させてもらおうと、これを見る全ての神仏に誓約する!!」

その映像をたまたま見ていたフロンスは、思わず腹部に手を当てていた。

「……やってくれたな……ハーデス……っ」

「おい、大丈夫か？」

「しつかりせい。ポーズの意図が全く感じぬぞ？」

近くにいて話をしていたノアと幸香が思わず気遣うほど、フロンスは精神的にキている。無自覚に胃を心配しているほどにキている。

彼は大王派の実権を握っているも同然であり、同時に暴発による内乱を防ぐ為に責任も苦勞もしい込んでいる。そしてそれだけでもない。

グレイフィア・ルキフグスの要望を叶える為の潤沢な支援を確保する為の手腕。

サウス計画の成功者達を何とか収める為の各種暗躍。

そして幸香達と共に目論む願望成就の為の根回し。

全てにおいて多大な苦労が必須であり、フロonz・フィーニクスは多忙の権化だ。シユウマ・バアル亡き現在では彼は大願成就の為の集団の長にもなっており、はつきり言って忙殺されてもおかしくない。圧倒的に優れた手腕と根回しによる分散対応でのいであるが、過労で倒れても驚かれない程度には仕事をしている。

そこにこの一手を撃ち込まれたことで、フロonzは無自覚に胃痛を気にするレベルに達していた。

実際、フロonzはノアや幸香の言葉を聞いていなかった。

「くっ！ シャルバをそそのかせたことから言って、旧魔王派にコネがあることは分かっていた。真魔王計画も掴めるだろうし、一人や二人確保されている可能性は覚悟していた。……だがここで堂々と切るとは……っ」

フロonzは入念に思考し、二手三手先を読んで動く男だ。真魔王計画を知った時点で、禍の団やハーデスが先に一人二人を確保することは想定していた。

だが、ハーデスがここまで素早く切るとは思っていなかった。札として使うのなら、本格的に三大勢力と激突するそのタイミングで使つての動揺を誘うと踏んでいた。

……老獪な老人を常に出し抜けるほど、フロonzも経験が足りていない。つまるところそういう事だ。

フロonzも冷静さを取り戻しながらそれを身に刻むが、幸香はその時首を傾げている。

「思い切つてはおるのお。ここぞというタイミングで切っても良さそうじゃが」

幸香の意見はまさにフロonzも思っていたことだ。

そしてその時、ノアはピクリと肩を震わせる。

「……あく、俺なんか嫌な予感がする」

「というところ？」

思わず二人同時に問いかけてしまえば、フロonzは冷や汗を一筋垂らす。

「戦闘でこれ使うならどうするかって考え方なんだがな？ 奴さん、本命じゃない可能性があるぜ？」

「……なるほど。インパクトが強いのを良いことに、そちらに意識を向ける為の陽動が奴の役目ということか」

幸香が速やかに納得する中、フロンズは小さく考えこむ。

……確かに、ラツイーカ・レヴィアタンの戦闘能力は、魔王クラスにはまだ届いていない。

最上級悪魔としては上位クラスだが、神仏魔王と一対一で真っ向勝負ができるかと言えば疑問が残る戦い方だった。おそらくだが、シャルバやカテレアと同程度……といったところだろうか。

それでは、血筋による強みぐらいしか札としての価値がない。そしてそれだけでは現悪魔政府をどうにかするには力不足だ。シャルバ達旧魔王派は蛇で強化してなお惨敗を喫したことから、それはうかがえる。

そして、そう仮定した場合が更に怖い。

「……つまり、本命があるという事か？」

「少なくとも戦力的にはアテがあるんだろうさ。でなけりやこんな挑発行為は流石にしねえだろう」

フロンズに應えるノアは、画面に映り派手に身振り手振りを見せるラツイーカを見据える。

「こんなことすりや警戒されるのは目に見えてる。例えそれが本命を隠すブラフにしろ、意味もなく警戒心を高めるような奴じゃねえだろ、あの骨は」

その言葉に、フロンズは呼吸を一つ入れながら一瞬の思考を入れる。

「……なるほどな。よし、ではこちらにも派手に動くべきだろう」

そう語り、フロンズは視線を幸香に向ける。

「こちらは手はず通り動く。そちらも次の試合では、相手に関わらず本気を出してくれ」

「よかろう。私掠船団の本領、相手に関わらず見せてやるとしようではないか」

どの勢力も、先を見据えて一手を出し続ける。

そしてそれが更なる相手の一手を引き出し、世界は揺らぎ続ける。

三大勢力の和平と禍の団の決起。その二つをきっかけに動き始める世界は、いまだ止まる様子を見せないでいた。

大会開幕編 第二十話 光狂いとは覚醒する前から強くなり続けるからなおヤバイ

イツセーSide

なんか今日の試合、初っ端から凄いの出たなあ。

「やっぱり真魔王計画って奴か？ それもハーデスが確保するのはヤバイよなあ」

正直バカだからよく分からんけど、それでもやばいのは分かる。だって、堂々とハーデスに仕えているなんて言ってたからなあ。

レイヴェルも眉間にしわが寄るぐらい警戒しているし、絶対まずいだろう。

「そうですわね。純血の魔王血族であることも判明されたようですし、これは警戒が必須ですわ」

あ、そうなのか。もう判別できたんだ。

見ればレイヴェルはタブレットで素早く情報を確認していた。こういう時できる子だよな。

ただ、ハーデスの配下に純血の魔王血族があ。これって絶対やばいよなあ。

「うくん。でもさ、今の政権って魔王血族を何度もぶちのめしたり迎えたりしてるんでしょ？ 一人嫌ってる奴に仕えてる程度でそんなに問題？」

と、アルティーンはちんぷんかんぷんな様子で首を傾げている。

あ、確かに。

俺も馬鹿だからだと思うけど、今更魔王血族が一人ハーデスにいるだけならそこまでって思いたくなる。

ただなあ……。

「魔王血族って、純血の悪魔にとつては凄い有名なブランドみたいなもんじゃないよ。ほら、悪魔って寿命が長いから初代魔王に従っていた人がたくさん現役にもいるみたいだし」

俺は馬鹿なりそこは分かってる。だからちよつと心配だ。

実際、性格が糞の権化だったりゼヴィムが動いただけで内通者も出てきてたしな。デイハウザーさんも王の駒の告発をする時、リゼヴィムの野郎を後ろ盾にしたからこそあそこまで効いた感じだったし。

となると、純血の魔王血族がいるかないかかって意外とデカいと思うんだよなあ。

「確かに。家柄という物はそういうのが尊ばれる文化であればあるほど、それだけで強力なものだ。悪魔は貴族主義の階級社会である以上、その影響力は無視できんだろう」

「そうですね。名門貴族の出ならそれだけで価値を見出すものは数多いものです。初代魔王の子孫、それも純血ならば純血悪魔にとって畏敬の対象となりましょうぞ」

ゼノヴィアとボーヴァも頷くけど、やっぱり油断できないか。

レイヴェルもかなり真剣に唸っているし、相当のヤバいかな。

「……レイヴェルに具体的に聞くけど、どれぐらいヤバいと思う？」

「そうですね。ややこしいヤバさでも言いましょうか」

俺に伝えるレイヴェルは、モニターに図を起こしながら説明してくれる。

「まずラツイーカ様が堂々とハーデスに仕える者として名乗りを上げた今の段階ですが、この時点でそれなりの影響力は避けられませんわ」

そう語りながらレイヴェルは、魔王血族と大きく書いて、十の記号を挟んで冥府と書く。

「この時点で冥府は冥界に対して交渉カードを確立しています。もし冥府が悪魔に戦争を仕掛けた場合、ラツイーカ様が堂々と協力を表明し悪魔側の説得や懐柔を試みるだけで従う者は増えるでしょう。場合によっては禍の団残党の旧魔王派を引き込むことも可能ですわ」

なるほどなるほど。

やっぱりそれだけの価値があるってことか。魔王血族は侮れないな。

更にレイヴェルはラツイーカの下に「大義名分」「説得力」とまで書いている。

「王族の血を確かに引く者が柱となって反乱が起きれば、その王国はそれだけで大きな危機を迎えることになる。これは人間界の歴史でもままあることです。国に対する反乱に見合った御旗があるかどうかは大きな差となります」

……あとで歴史を勉強し直そう。たぶんだけど、古い悪魔と関わる時にも役立つだろうし。

ただその上でレイヴェルは、まるの下に――の記号を入れて「悪目立ち」と書いた。

「ですがこのタイミングはデメリットも多いです。事前のコマーシャル活動にはなっておりますが、それはすなわち対応する立場に警戒や対処の余裕を与えることにもなりますもの」

「それもそうね。和平前に堕天使や悪魔に大司教がこつそり内通していたなんて知られたら、それだけで教会は大規模作戦を起こしたでしょうし」

イリナが即座に納得すると、レイヴェルはしっかりと頷いた。

「ただでさえ冥府は反和平姿勢で禍の団にも協力しています。ことポセイドン派と内乱まで起きていたことを踏まえれば、ここで敵対方向に懸念されれば相応の準備期間をこちらに与えてしまう悪手となるでしょう」

そういえばそうだ。

ポセイドン様が酷い目に遭ったっていうのに、ハーデスはその元凶の禍の団を利用して暗躍していた。むしろ清々したなんて言う言質まで取られたもんで、ポセイドン派が冥府に乗り込んで内乱になったぐらいだ。

そういえば、その内乱が収まった……というより、冥府側が事実上勝ちを拾ったって形で収まってたな。

ハーデス直下の星辰奏者部隊が大暴れしてポセイドン派が壊滅的打撃を受けた上、回復したポセイドン様がとりなして収まったとか。ポセイドン派も戦う力が残ってなかったらしい。

……そもそもそれだけのことが起こった時点で、既にハーデスは警戒されてるわけだ。

そんな状態で余計な警戒心を招けば、内乱というか軍事的侵略が勃発しかねない。

「ここまで考えれば、ヤバイようできてヤバくない。……ハーデス側にその意志があるならこんな手は打たないと熟慮できる者は考えられません」

なるほど。でもレイヴェルは危険視している。

「つまり、どういう事なんだ？」

「私が警戒しているのは、ラツイーカ様はブラフ。既に確立された本命がある可能性ですわ」

本命。つまり魔王血族以上に価値のある切り札を持っているってことか。

「……本命って、いったい何なのでしょう？」

アーシアがそう尋ねるけど、レイヴェルは静かに首を振る。

「分かりませんわ、アーシア様。忌々しい事ですが、ハーデス達冥府は老獪ですもの。……ですがことを起こす前提なら、相応の切り札が別に無ければこんな目立つマネは致さないでしょう」
なるほどな。

つまり、もつとやばい切り札をハーデスは持っている可能性がある。だからこそあえて囿として、ラツイーカを見せたってことか。

……上等だ。

「そんな時はそんな時だ。むしろ分かり易くなつてスッキリするさ」

俺はそう言つて、拳を握る。

「ハーデス達が俺の大事なものに危害を加えようっていうなら、その時は誰が出てこようと叩き潰す。その為に今からしっかりと鍛えておけばいいって、ただそれだけだ」

今更だ。

ハーデス達とはいつか決着をつけるだろうし、相手だって勝つ為の備えは当然する。当たり前のことだ。

なら、俺達だって当たり前のことをする。

何時仕掛けられてもいい様に、備える。そして仕掛けてきたのなら、返り討ちにしてぶちのめす。

ただ、その前に――

「――とりあえず、まずはバラキエルさん達との試合だよな」

そつちも大事だしな。

相手も本気で来るだろう試合だ。俺達も本気で挑まなきゃ失礼つてもんだ。

俺達はいつもそうだしな。まずは目の前の問題にぶつかっていくのが先つてもんだ。

「それもそうだね。いくらハーデスでもいきなり仕掛けはしないだろう。まずは目の前の問題に対応しようか」

「そうですね。これまでの行動から見て、ハーデスは動きが遅くなるでしょうからすぐ何かとはいかないでしょう」

ゼノヴィアとレイヴェルも納得してくれたし、ならこっからは試合だな。

「俺達は後回しだけど、必ず勝つぜ……皆！」

和地Side

なんかハーデスが面倒な一手を打ってくれた。

純粋な魔王血統を確保するとかやってくれる。それも、優勝賞品で

「九大罪王就任」を求めるような奴だ。

アレは色々騒がしくなるだろう。リアス先輩とかフロンズとか、考える立場は胃が痛くなってもおかしくない。

……ただ同時に、俺は試合に見入っていた。

今見ている試合は、カズヒが挑む新たなゲーム。

日本の土地神が王として参加しているチームとの戦いだ、中々な妙手を打ってくれた。

その土地神は風水師などを参加させることで、レーティングゲームのフィールドを自分に有利な土地に変えるという芸当をかましている。前回のゲームで固有結界使いと戦ったが、土地そのものに加護を与えることで結界の発動を阻害して勝っていた。

そういう意味でカズヒにとっては相性が悪い。土地の支配で勝負されると固有聖域が使えないし、固有結界封じはできるから。実際、実際の体験で更に煮詰めて強化している。

『ふふふ。如何に神仏すら打倒する悪祓銀弾であろうと、その本領を抑えれば勝機はある。神を打倒することが本当に困難だということ、を、改めて知るといい！』

そう吠える土地神の猛攻を、カズヒはしのいでいる。

対神特化のアヴェンジングシエパードを使ったうえでの戦い。しかししのいでいる止まりだ。

それほどまでに、土地の支配権を奪われたのは痛い。

地の利を完封する聖墓だが、それに対してメタを張られている。更にカズヒは植え付けられているうえに、適合値は気合と根性で補っているだけで実はそこまで高くない。習熟期間が短いこともあり、実は苦戦中だ。

至るほどに習得すれば話は別だろうが、今の段階ではきついという事か。

他のメンバーも土地神の加護を与えられた者達が相手なので、手古摺っている。というより相手のチーム、土地神が王^{キング}なだけあってそういった者達が主体。土地を守護する場末の霊獣や精霊が多く、割と有望なチーム構成だ。

正直ちよつとハラハラしているし、下馬評で不利と言われていたので一人でこつそり見ている。変な声が出そうだからな。

くっ！ カズヒが、カズヒがこんな序盤で敗北を経験するのか……っ。

そんな不安に駆られた、その時だった。

『なるほど、確かにこれは相性が最悪ね』

そう、カズヒが呟いた。

一見すると負けを認めたかのような発言。

だが、付き合いが深い俺は気づいた。

彼女の表情は、負けを認めたものでは断じてない。

むしろその逆。あれは――

『……ついてないわね。最初の試合で仕掛けていれば、私を倒せたでしょうに』

――勝機を見出している表情だ。

『ほう？ 確かに固有結界だけが貴殿の本質ではないがね』

そう語りながら、土地神は絶大な力を放つ。

覚醒により急成長を遂げられるカズヒに対して、長期戦は実は微妙な策だ。

覚醒の連発にだって限界はある。覚醒による急成長は急成長ゆえに、必然として肉体が先に音を上げる可能性があるからだ。意志の力が肉体を凌駕する故の欠点ともいえる。

だが、カズヒは微笑みすら浮かべている。

あれは違う。覚醒じゃない。

『ここで潰せばそれで終わりだ!!』

その瞬間、嵐のような土地神の猛攻がカズヒに迫り――

『いいえ、一手遅いわ』

――その瞬間、猛攻をカズヒが突き破って一撃を叩き込んだ。

驚愕を覚えるのは、一撃そのものではなくカズヒの姿。

仮面ライダーシルバーバードーマなのは変わらない。

だが同時に、その全身に外套を纏っている。

毒々しい色の禍々しさを基調としながら、真逆の印象を与える銀の

細工が浮かぶ外套。

どこかあやふやなそれを纏ったカズヒは、間違いなく動きが変わっていた。

体勢を立て直して迎撃する土地神だが、しかしカズヒはその上を行く。圧倒的な猛攻が、土地神の猛威を弾き飛ばしていく。

え、ちよ、あれ何いいいいいいっ!?

大会開幕編 第二十一話 女傑大暴れ

カズヒSide

ついてないにもほどがある。

私じゃない。相手チームのタイミングの悪さに、私はちよつと同情している。

今回の戦い、間違いなく難敵といえる。相性が悪いにもほどがある。

固有結界対策。間違いなく相手を選ぶけれど、決まれば勝ち目が見える類の戦術だ。実際に一回勝っている。

固有結界は短期決戦を押し付けるとはいえ、短時間なら圧倒的有利な空間を作り上げることができる。魔術の最秘奥と称されるに値する奥義。それを封殺できるというのは、その時点で厄介だ。

固有結界最大の利点は、瞬間的に展開できるという点にある。要は己の力を最大限に発揮できるホームをどこにでも作れるという事だ。これは大きい。

固有結界の性能そのものは、確かに強大だけどそれだけだ。超一流の魔術回路保有者なら、時間・資材・立地の三つを用意できれば、同様の効果を発揮する拠点を作ることは不可能じゃない。むしろ一度作ってしまったら持続が楽である為、その方法の優位性もある。

だが固有結界は、それだけの代物が必須な空間を瞬時に作り出せる。仮説だけれど、鶴羽の固有結界を施設として再現する場合、資金だけでも数億や数十億円でも足りないだろう。国家プロジェクトや国際機関レベルの事業になるのは間違いない。

だからこそ、固有結界は強力なのだ。それだけの代物を瞬間契約^{デンカウント}で出せるのは絶大だ。

……ただし、固有結界はその性質上当たりはずれもある。

私の場合はある意味でそれだ。確かに強力極まりない固有結界だけれど、固有結界にする必要性が薄い点がある。私個人の魔術回路を超強化するだけである以上、劣悪な燃費を齎してまで世界を侵食する必要性は実は薄い。

ゆえに固有聖域という裏技を確立したけれど、時間をかけて幾人もの協力者と練った固有結界封じはそれすら防ぐ。

だからこそ、タイミングの悪さにちよつと同情してしまう。

……寄りにもよつて、固有結界の新たなアプローチが完成した直後にぶつかるのだ。かませ犬になる為に出てきたと思うレベルで同情する。

そしてその力により、私は全力で相手を殴り倒す。

「ぬおおおおおつ!! 馬鹿な、これが覚醒……ッ!!」

なんていうか、既に覚醒が固有スキル扱いされているのにちよつと引くわね。

いえ、幸香とか後継私掠船団も含めてでしょうけれど。それにしたつてなんかツツコミどころが豊富すぎるというか。それでいいのかと思う。

第一これは違うし。

「いいえ、これは普通に魔術で殴り倒しているだけよ!」

そう、固有結界の強化魔術で殴り倒しているだけ。今のところ、覚醒を遂げる必要もない。

そしてそれゆえに、ここからが本番だ。

……私の固有結界は、その性質上固有結界にする意義が薄い。これはさつきも語った通りだ。

私の魔術回路を絶大に強化するだけなら、広域フィールドを莫大な魔力を消費してまで展開する意義が薄い。空間転移という魔術回路の利用で行うのは神業レベルの所業をポンポンできるのは利点だけれど、それだけだ。

だからこそ、研究の果てに編み出したのがこの新たな奥義。これは固有結界のある種の裏技の発展形だ。

固有結界はその性質上、魔術的に最も外界からの影響を受けない自

身の体内に展開するのが最も低燃費だ。それもあり、固有結界使いは固有結界を展開しなくても固有結界に由来する魔術特性に長ける。私の場合、属性が極めて希少かつ価値のある五大属性アベレージ・ワンな点もある。それを利用して裏技として、本来大規模な準備を必要とする魔術を自身の体内で完結させることで、便利な小技として使用するという物もあった。これはその発展形だ。

つまるところ、浸食する世界を己の極々周囲に限定しての展開。能力強化率を下げる代わりに、固有結界の燃費を大きく改善する。結果として、私は外套を纏っているように変化している。

これが、個人戦闘に意識を向けた固有結界の新たな運用方法。

「外套型固有結界……固有外套とでも名付けようかしらね!!」

ちよつと得意げになりながら、私は土地神を殴り飛ばす。

悪いわね、私は常に進歩するのよ!!

Other side

「なるほどおう。こういうやり方もあるのかあああああつ!!」

「……お主、もうちよつと聞きやすい話し方出来ぬか?」

「……独り言だとしても、それならトーンを下げてくれ」

「あ、すいません団長にフロンズ様。つい癖で」

「幸香。後継君私掠船団部下なら癖は強いだろうが、ある程度は世渡りを意識してくれ。私がフォローするにも限度がある」

「承知した。あまりに阿呆な理由で敗れるのは、流石にゴメン被るの

でな」

「いや本当にすいません。とつても参考になつたもので、テンションが上がりました」

「確かに。あの技は妾わらわにとつても興味深い……が、お主はそういう意味で言ったのではなからう？」

「無論です、団長。私の神器を利用すれば、面白いことができるとは思つてたんですよ……ふふふ、インスピレーションが広がるなあ」

「ふむ、今後のアイディアになるかもしれないな。リザーネに時間を作るよう言つておこう。それはそれとしてだ」

「どうしました、フロンズ様？」

「君の研究を推し進める為、話を通した上級悪魔が何人かいる。……王の駒キングに代表されるゲームの不正は、こういう時に役立つな」

「それは助かります。私で十代目になりますけど、一代で一つも増やせないのは残念だったので」

「構わんさ。いい機会だし、次の試合で本格的に動くといい。……と、私が言う事ではないか」

「構わぬ構わぬ。そろそろ齒応えのある相手と戦えるのでな」

「ゆえに団長として命を下すぞ、道間どうま・禅譲ぜんじょう・信姫のぶひめ。……掲げる字あてなに見合ひし力、次の試合までに会得して振るうがよい」

「承知です、団長。……次の試合、七天魔王オダ・サタンの真なるデビュー戦にして見いせええええまあすうっ！」

「いや、口調」

「はうあつ！ す、すいません!!」

祐斗Side

妙に寒気がするね。風邪でも引いたかな？

このゲームでということはないだろう。何故なら、今回の対戦相手は火を得意とする者達が中心だからね。

最上級悪魔だけでなく、火の魔獣や精霊などが中心となった混合チーム。炎での戦いを押し付ければ、高位の神にすら通用するだろう。

だが、その炎はもはや風前の灯火だった。

「……温いわ。イツセーやライザーに比べれば、まるでぬるま湯のように熱さが足りないわ」

そう告げるリアス姉さんは、ため息をつく余裕すらあった。

残念に思っていることだろう。これでは本気を出す必要すらない。それほどまでに僕たちは強くなった。もはや、神クラスですら無策では半端な存在は試金石にもなりはしない。

どうやら、今回は隠し玉を見せる必要すらないようだ。

……イツセー君。僕達はここまで己を高め、そして勝利を積み重ねてきているよ。

僕達は知っている。君達のチームが酷評されているという、中々に困ったことを。ゲームという環境では、その突破力は生かせない。そんなことを言われているということ。

だけど僕達は知っている。君は僕達の想像もつかないような方法をもつてしても、そんな困難を乗り越え続けてきたことを。

見せてくれよ、イツセイ君。リアス・グレモリー眷属のエースたる君は、この程度で終わるようなものではないのだと!!

大会開幕編 第二十二話 世界公開大告白（第一弾）

祐斗Side

試合終了後、僕達は続いて開始されたイツセー君達の試合を観戦している。

イツセー君とバラキエルさんの試合だけど、やはりイツセー君は苦戦しているね。

今回のゲームは「オブジェクト・ブレイク」という特殊ルール。指定されたオブジェクトを探し出し、過半数を壊すことができた、もしくは王を撃破したチームが勝者となるゲームだ。

現段階では、バラキエルさん達が多めにオブジェクトを撃破。その上でイツセー君達にちよつかいをかけ、集中させないようにしている。イツセー君達は主導権を握られがちだ。

直接戦闘ではイツセー君達が若干有利だけど、このゲームでは直接戦闘が決定打になり難い。ゲームはともかく戦闘での経験値が圧倒的に上回っていることもあり、バラキエルさん達が主導権を握っているようだ。

事実、ゲームのルールを生かした戦術である「インブリッジメント投 獄」を逆手に取り、この作戦の要であるロスヴァイセさんを潰しにかかっている。

「……流石は、神の子グを見張る者ゴの現副総督。かつての大戦から生きている、歴戦の墮天使なだけあるわね」

「あうう……イツセー先輩……」

リアス姉さんは感心し、ギヤスパー君はイツセー君を心配している。

確かに、イツセー君はこの試合でも絡めとられ気味だ。ここ最近、試合では本領を発揮しきれず酷評され気味でもある。これは批評家が厳しい意見をまたつきつけそうだ。

そして、情勢はどんどん不利になっている。

『グリーイイイイイゴリイイイイイッ！ その程度の魔法など恐るるに足らず、神の子を見張る者のアンチマジックは、異形一いいいいいいいっ！』

『くうっ！……ここまでとは！』

ロスヴァイセさんを押し込んでいるのは、神の子を見張る者でアンチマジックを研究している、最高幹部のアルマロスさん。

バラキエルさんのチームで女王クイーンを担当していることもあり、その力量は絶大。更にアンチマジックを想定した装備を生かし、ロスヴァイセさんの魔法を逐一破壊している。

ロスヴァイセさんはこのゲームにおいて、探知魔法を用意するなど要に近い。投獄をどうにかするにはキャスリングが必須とはいえ、ここまで読んだハメ手になっている。

このままではまずい、そんな時だった。

『スー………パー………』

ん？

なんか、大きな声が聞こえて――

『……地球、キイイイイイックウウウウウツ!!』

――なんか飛んできたあ!?

ロスヴァイセさんの後方から飛んできた誰かが、防御態勢に入ったアルマロスさんをそのまま押し込んでいく。

一瞬で数百メートルも押し込まれたアルマロスさんは、しかし斧の一撃で強引に振り払う。

振り払われた存在は、しかし着地するとともに後ろに手を突き出し

『お、おとおおとおお!? 突如として割って入ったアルティーネ・ス

タードライブ選手。突如として自分とロスヴァイセ選手の後ろに、巨大な氷の壁を作り出したああああ!?!』

冰山というべき巨大な氷をもって、ロスヴァイセさんへの道を阻んだ。

その光景に誰もがびっくりしている中、無邪気な笑顔を浮かべたア

ルティーンネ・スタードライブは勢いよく拳を突き出した。

『ふっはっはー！ こっから先に進みたいなら、この私を倒してからにするがよーい！』

その表情は余裕のそれであり、まだ本気を出してないことの証明だ。

そして、アルマロスさんも目を見開いてから、ものすごく悔しそうな表情を浮かべている。

『おのれ！ 格好の好機に割って入り、ものすごく邪魔をする悪役ムーブ！ このアルマロスへの挑戦と見たぞお！』

そっち？

『……フハハハハハハハ！ 脆弱な墮天使如きが、この赤龍帝の女王に挑まれるなどー、おこまが……がら……とにかくくしいぞー！』

相手も乗っかって悪役ムーブを取り出した！ でも色々と残念だ！ あと答えはおこまがましいだと思っ！

だが次の瞬間、更に壮絶な戦いが繰り広げられる。

先ほどまでのイツセー君とバラキエルさんの戦いすら超えるだろう、圧倒的な規模。しかも、それはアルティーンネ・スタードライブにアルマロスさんが挑む構図となっている。

……これが、イツセー君が巡り合った星の共成体。真徒の姫君。

「ふふ。イツセーの巡り逢いも、ここまできると異次元の領域ね」

リアス姉さんは面白そうに言うけれど、僕はどっちかという苦笑いだよ。

禍の団の新たな盟主として名乗りを上げた、未知なる存在。星の共成体、真徒。

その王族というべき存在。その一角がイツセー君を気に入ってくれるとはね。本当、イツセー君はどこに向かっているのか。

「あいやー。なんか超人バトルになってますな。これ、自分なんか割って入って大丈夫なんすかね？」

「リアス姉様と共に戦うのはそういう事です。頑張ってください」

と、面白そうにしているリントさんに、小猫ちゃんがポップコーンを渡しながら告げる。

うん、このレベルの出来事って意外と多いんだよね。
ただ、白熱した試合は続いていく。

さて、イツセー君はどうやって切り抜けるのか。それともバラキエ
ルさんに呑み込まれるのか。

「……………」

ずっと無言で朱乃さんが見守る中、試合は続いていく。

和地 Side

また凄い事になっているな。

イツセーとバラキエルさんの試合だが、ちよつと戦慄を覚えてい
る。

固有結界にメタ張った敵を、新技で打倒したカズヒ。

安定して強い敵を地力で明確に凌駕したりアス先輩。

そして続いてがイツセーの試合だけど、これまたやばいことになっ
ているな。

今回の試合における特殊性を的確に生かしてハメてくるバラキエ
ルさんに対し、イツセーは超大技でフィールドごと大雑把にターゲット
トをぶち壊すことで対応した。

フィールドの広範囲をまとめて吹っ飛ばすことで、そこに点在して
隠されているターゲットをごとっそり破壊。これにより王手をかけた
と言ってもいい。

バカも極めればなんとやらとかいうけれど、極めすぎだ。散々パ

ワーバカ言われて酷評されたうえでこれだ。脳筋といひかなんといひか。

「……これ、イツセー君のアイディアかな？」

「いや、たぶん違うんじゃないか？」

インガ姉ちゃんが首を傾げるけど、俺はそれに八割ぐらひの確信を覚えてる。

イツセーは割と、不利な状況やデメリットを逆手に取ることもある。基本的には熱血一直線だけど、そういう方向に発想が浮かぶこともあるから厄介なんだ。

だが、これはちよつと方向性が違うだろう。発想の方向性が違う感じがする。

「……おそらく、レイヴェル様の発案ではないでしょうか？」

と、黒狼が俺達に聞こえるように呟いた。

「どういふこと？」

シルファが問い返すと、黒狼は小さく頷いた。

「実はかねてより、相手の思考をプロファイリングする為兵藤邸の方々は機会があればその日の試合について話をするように努めておりました」

「……抜け目ねえな、オイ」

ベルナがちよつと引き気味の関心をするけど、俺は褒めた方がいいんだろうか。

というより考えたな。ゲームそのものの手札や戦力の開示は互いに避けているが、他者の試合での感想とかなら話になる可能性はあるか。

「その際戦術的な視点で話を振るように努めておりましたが、レイヴェル様には他にない要素がありました」

そう前置きしたうえで、黒狼は息を？んでいた。

戦慄、そう形容した方がいい表情だ。

それに俺達が息を呑んでいると、黒狼は得意げな表情になっている。レイヴェルに視線を向けている。

「己の強みによる全域の制圧。敵エースでも敵チーム全体でもなく、

そもそもゲームの流れたるルールすら、自分達の手で押し通す。……ある意味で覇者の思想が見受けられました」

「な、なるほど。確かにそんな印象がある戦術だね」

ヴィーナが感心しながらゲームの映像を確認するけど、確かにその通りだ。

今回のゲームは、広大なフィールドに隠されたオブジェクトを一定数破壊した方が勝利になるゲーム。その性質上、戦術などで格上に勝つチャンスが多いゲームでもある。

その大前提を、隠されているフィールドごと薙ぎ払うことで強引にぶち壊す。これは確かに覇者の思想だろう。

ルールにのつとる気がなく、破らない範囲内で無体な真似を遠慮なくする。相手と競う合うようなスポーツマンシップやリスペクト精神が皆無。劣るのならば支配されろといわんばかりの圧政者思想。イツセーの精神性とはなんか異なっている。

正直、本質を見抜いた者はドンビキするかもしれないな。

「お気を付けてください、和地様」

俺達が少し戦慄を覚えていると、黒狼は俺達全員に聞こえるようにそう告げる。

「レイヴェル様はこちらに合わせるつもりはないでしょう。ゆえに赤龍帝チームとのゲームは、ルールそのものは片隅に置くぐらいでちょうどよいかもしれません」

……怖い怖い。

レイヴェル・フェニックス。フェニックス本家の長女であり四子。兄の眷属としていくつかのゲームを経験し、イツセーの眷属となった少女。

とんでもないのが控えていたもんだ。これは要警戒だな。

と、思っていたら。

『朱乃はいったいどうなると?!』

……なんか展開が白熱してきたな。

壮絶な殴り合いなんだが、これ試合中に別件が始まっている気がする。

既に流れは大將戦も同然。王手をかけられたバラキエルさんは、流れから言ってイツセーを潰すのが最善主と化している。

そしてイツセー達だって、ゲームをきちんと理解しているはずだ。王が王を打倒して勝つというのは、基本的にゲームでも受けがいい展開ではある。

そういったこともあつて王同士の最終決戦と化しているが、流れが微妙というか。

先ほど、バラキエルさんはイツセーを誘導する為の思考ジャミングを兼ねて、戦いの流れを娘の恋人と父親という流れにもっていった。だが、今回はマジな流れだ。

まあ、父親としては心配なんだろう。

それを俺は悟りつつ、そつとインガ姉ちゃんの手を握る。

それに気づいたインガ姉ちゃんはこちらとびつくりしていたけど、そつと握り返してくれた。

「……ありがとう、和地君」

ああ、気にしないでくれ。むしろ余計なお世話かもしれないとちよつと不安だったし、俺が礼を言いたいぐらいだ。

親子問題では非常に難儀なことになっているインガ姉ちゃんに氣遣いをしたつもりだったから、ちゃんと受け取ってくれたのはありがたい。

そして、それはそれとしてだ。

「杞憂だろ」

「杞憂だね」

「杞憂だな」

俺もインガ姉ちゃんもベルナも、ほぼ同時に言うしかなかった。

いや、男親で妻と死別している身としては、娘の未来を案じたいつてのは当然だと思う。はたから見ても考えて当然だと思うのは当たり前前だ。

当たり前なんだが、イツセーにその辺の指摘は杞憂というほかない。

周りのメンツはちよつときよんとしているけど、しかし実際杞憂

だからなあ。

イツセーが？ 惚れた女を？ 切り捨ててる？

そんなことが必要でもできるような奴なら、むしろ俺達は苦勞してないっていうかなんて言うかー

『ーなら、俺は朱乃さんを愛します!!』

「「ほらっ言うう」」

ーそこで全員何とかするっていうのがイツセーがイツセーたる由縁だからなあ。

うん、これ絶対朱乃さんが感極まり流れだ。

「全員幸せにするだろハーレム王だぞとか言うに一億円」

「賭けになんねえだろパス」

ちよつと冗談を言ったらベルナにすっぱり切られたし。

と、その間にもイツセーは力強い言葉を拳をもって宣言する。

『責任取るし誰にも渡さん！ 俺はハーレム王、兵藤一誠!! リアスもみんなも全員まとめて幸せにしてやりますよ!!』

凄いでこいつ。 国際生中継の競技で、父親の前で娘をめとるハーレム王宣言ぶちかましている。 いうと思ったけどまじで聞くとクるものがあるな

見ているこつちがなんかにやけて恥ずかしくなる。 そんなレベルで宣言したよ。

そして勢いよくバラキエルさんを殴り飛ばしたイツセーは、そのままクリムゾンブラスターの体勢に!!

『朱乃さんの幸せは、俺がこの手で保証します!! 嫁に来てくれ朱乃さ……朱乃!! 大好きだあああああああつ!!』

ヤバイなんか凄いとしか言えない。

俺が戦慄すら覚える中、クリムゾンブラスターは狙い違わずバラキエルさんを包み込む。

『……朱璃。 朱乃は、良い連れ合いを持ったー』

『雷光^{ライトニング}チーム、王^{キング}のリタイアを確認。？誠の赤龍帝チームの勝利です』

いや、なんか……こう……。

「見ているこつちが恥ずかしくなるな、これ」

俺は素直な感想を言うしかなかった。

ただその瞬間、左右から後頭部を勢いよく張り倒される。

「どの口が!?!」

しかも口でも言われた。

酷いぞベルナ、インガ姉ちゃん!?

カズヒSide

「……イツセー、これで和地のことを笑えなくなったわね」

私は素直な感想を呟いたわ。

和地も大概、恋愛^{こゝろ}ことが絡むと変な方向に行くけれど……イツセーもイツセーね。

元々アグレアス攻防戦の一件で、割と素直に告白プロポーズをしていたりとかやらかしていたけど。それにしたってこれはスケール

アップしてないかしら？

いえ、正真正銘命がけの激戦と、安全に配慮した競技試合はまた別の観点だけど。それにしたって限度があるというか、なんというか。「すっげえな、オイ。いろんな意味で度胸ありすぎだろ」

「同感っすわあ。同じドラゴンとして、感心っすわあ」

勇ちんとラトスも戦慄しているけれど、これはもう凄い事をしてるわね。

他のメンバーも大なり小なり戦慄しているけれど、いや本当に凄い事しているわね。

世界生中継の試合真っ最中で、ハーレム王宣言。それも相手の父親がいる目の前で、ピンポイントの告白までしている。

凄まじいことをしているわ。珍プレー大百科とかいう特番があれば、絶対に何度も選ばれる内容だわ。

そして、私は一つの確信を覚えている。絶対に起きると言い切れる、そんなことを思い至っている。

「絶対、近い試合でゼノヴィアが便乗した逆プロポーズをしてくるわね」

「あ、確かに」

鶴羽が素直に感心しているけれど、そうなのよね。

これは確実にする。あの女はそういうことする。むしろイリナとアーシアを巻き込んでしかねない。

「そ、それはどうでしょうか？ その、感極まりそうですけどそれ以上に恥ずかしいですよ？」

カズホがツツコミを入れてくれるけど、相手はゼノヴィアだもの。

「……あ、あはは……。凄いね、イツセー君」

「そうですね。勢い任せのようできて、覚悟を持つてのことでしょ。……並みの胆力ではできません」

オトメねえやディックも感心しているけれど、さてこれはどうしたものか。

「リーネスとしてはどんな感じ？ カズヒと同じぐらいイツセーとつきあ……いいいいっ!？」

急に鶴羽が慌て出したけど、何かあったのかしら？

この部屋、相応に警備もしているのだけれど。あとリーネスがどうしたの？

と、振り返って見て私は呆気にとられた。

「あ、あわあ……」

凄い顔を真っ赤にして、なんかあらぬ方向を向いて悶えている。

私は呆気にとられたけど、しかしすぐに思い至った。

「……確かに、和地もやらかしそうね。これは覚悟しておいた方がいいかしら」

「……え？　そ、そうなの？」

戦慄しているオトメねえには悪いけれど、和地ってそういうことするから。

その辺りは素直に考えた方がいいわね。作戦とか無関係に、感極まってゲーム中に連続告白プロポーズとかあるわね。和地はそういうことを意外とするのよね。

これは、その辺りのフォローを最初から作戦に組み込んでおくべきかしら。

いえ、それよりー

「は、ハバラララララララ……あつ」

ー奇声をあげながらバグってる、鶴羽を正気に戻しましょう。

大会開幕編 第二十三話 戦いの直前

イツセーSide

よっし！ 何とか勝った！

「お疲れ様でしたわ、イツセー様」

「ああ、レイヴェルもありがとな」

差し出してくれたタオルを手に取りながら、俺はレイヴェルにお礼を言う。

今回のゲームで勝てたのは、レイヴェルの策があったからだ。

イヤホンと、怖いこと企むなあレイヴェルは。

俺達がパワーバカだから、そのパワーで小細工ができないぐらいフィールドを破壊するとか、発想が凄い。

そのぶんちょっと戦慄をもするけどな。俺の眷属になってくれて感謝感激って感じだけど、怖いところもある。味方で良かったよ本当に。

俺が上級悪魔に昇格し、レイヴェルを眷属としてトレードしたときのことを思い出す。その時レイヴェルの王だったフェニックス夫人から、釘を刺されていたからな。

ーレイヴェルの本質は霸道です

確かに、今考えれば納得だ。今回の試合運び、その戦術から言っただけそういう気質を感じる。

番外戦術を通り越して、盤面そのものを半ば破壊する戦術。これはなんていうか、圧政者というかそんな感じの奴がする戦い方だ。

……昔レイヴェルに、グレモリー眷属の戦い方で新鮮な指摘をもたらったことも思い出す。

力押し主体でテクニクタイプが少ない。レーティングゲームでは無からず苦手な敵が出てくるタイプ。策に絡めとられやすい。

俺もリアスも理解していて、改善をしなければいけないと思っ
た。だけどレイヴェルは違う観点だった。

苦手なタイプが出るのはどのチームも同じ。短所のカバーにリ
ソースを割くより、長所を伸ばし続けて強引に突破できるぐらいがい
い。そんな感じの評価だったと思う。

そして、レイヴェルは赤龍帝眷属としてその持論を形にしようとし
ている。

……怖いところもあるけど、ちよつと楽しみだ。

俺はリアスの眷属だけど、リアスとは違う自分の眷属も持ってい
る。リアスが自分やアザゼル先生の持論を元に戦術を組み立てるの
なら、俺はレイヴェルの持論を体現するってのもいいかもしれない。
ちよつとだけど、リアスとの試合が楽しみになってきた。

ま、それはともかく次の試合の方が大事だよなつと。

「それでレイヴェル。九成達の試合はどれぐらいなんだ？」

「予定では二十分後ですわ。まずはシャワーを浴びて、汗を流しても
よろしいと思いますわよ？」

そうか、意外と早いな。

今日、俺達オカ研メンバーの殆どが何らかの形で試合をしている。

カズヒは新技で派手に勝った。リアスは成長した地力で堅実に
勝った。俺もレイヴェルの作戦勝ちで、何とか勝った。

そして最後は九成だ。それも、相手は成田さんが参加しているチー
ムだ。

王の駒を積極的に採用させる為に参戦したチームだけど、だからこ
そ士気の高い上級悪魔が揃っている。

冥革連合からも手練れが結構参加していると聞くと、大王派はもち
ろん魔王派からも王の駒の正規使用を求める人達が何人も参戦して
いるとか。

全員が相当の実力者。雷ライトニング光チームと同等以上の下馬評だ。

……これは、九成達も苦戦しそうだな。

でもちよつと見ものかもな。

なんとつて、相手は新規神滅具候補の成田さんに、上位神滅具保有

者の双竜健也だ。他のメンバーも純血の手練れが揃っていて、戦力の質はもれなく高い。

それを九成がどうしのぎ、勝利を狙うか。
ヤバイ、ちよっと楽しみになってきた！

祐斗Side

「どう見ます、リアス姉さん」

「そうね、やはり和地がどう動くかによるでしょう」

リアス姉さんはそう呟きながら、下馬評を確認している。

冥革連合から手練れを多く招き入れている、王道の再興者チーム。彼らにとって九成君は、無視できない存在だ。こと冥革連合からのメンバーにとって、重要視されるだろう。

冥革連合盟主たる、ヴィール・アガレス・サタンを討ち取ったものの一人。そして彼の眷属たる成田さんを娶った男。さらには、彼が会得した神滅具である聖血の新たな宿主でもある。

あらゆる意味で、無視できる相手ではない。むしろ情けない姿を見せれば、高確率で殺しにきかねないだろう。

……まあ、彼のことからそこは大丈夫だろうけど。

「神滅具保有者二名、それをどう切り抜けるかですわね」

「そうですね。九成先輩のことですし、何か新技を用意してそうです」

朱乃さんとギヤスパ―君も思っているだろうけど、そうだろう。

パラデインドッグによる禁手の切り替えは、それをもってしても超高等技能。少なくとも、あれだけの数の禁手を適宜入れ替えるなどということは想定以上だったはずだ。

更にゾーンの到達や、前人未踏の領域たる残コスモス・ボルト神の発現。イツセー君も色々と前人未踏に到達しているけれど、やろうと思えば他の人でもできることをいくつも成し遂げている彼も大概だ。

問題は、その彼がどうやって勝利を掴むかだ。

王道の再興者チームは、王の駒の正規採用を優勝賞品で願うことにしているチームだ。それはすなわち、王の駒を正規運用していない現状に配慮していることを指す。

ゆえに冥革連合からの参加者も王の駒を停止させている。しかしそれを踏まえてもなお、最上級悪魔に届く者達が何人かいる精兵だ。油断ができる相手ではない。

特に純血でないにも関わらず参加している主力の二人、双竜健也と成田さんは間違いなくエース。神滅具保有者とはそれだけの価値がある。

それをどう絡めとるか。これが最も重要だろう。

「……問題は、相手チームがどう動くかですね」

「そうね、小猫。最上級悪魔候補の上級転生悪魔二人を擁し、更に神滅具を宿す和地がいる。そんなチームを相手にすると分かっただけ、無策で挑む者ばかりじゃない」

リアス姉さんは小猫ちゃんにそう言ったうえで、小さく微笑んだ。

「でも、大まかな方針はある程度読めてはいるわ」

そう、リアス姉さんははっきりと宣言する。

「ほほおう？ リアスさんは相手の方針を読み切っちゃってるんですねえ？ 自信のほどはどれぐらいでえ？」

リントさんが面白そうに軽口を叩くけど、リアス姉さんは自信満々に頷いた。

「少なくとも、冥革連合側がどんな提案をしているかは読めているわ。それを王が認めるかどうか……ね」

その言葉に、僕達の多くは何となくだけど納得した。

納得しているメンバーは、僕を含めたりアス姉さんの眷属と、もう一人。

「……なるほど。確かに冥革連合の者達なら、どう動こうとするかは読めるな」

そう答える、ミスターブラックで登録された最後のメンバー。

今回の試合に興味があったことから、試合終了後とはいえこうしてミーティングに来てくれたこともありがたい。

そして彼もまた納得できるだろう。むしろ彼の方が納得できるといえる。

なぜなら、彼はある意味で僕たち以上に冥革連合を知っている。

だからこそ――

「――」

――リアス姉さんと同時に告げる彼の推測は、異口同音ゆえによく響いた。

カズヒSide

和地の試合開始まであと少し。私は何とか、事前に予約していた席に辿り着くことができた。

最も、割と人気があったことから出遅れたこともあり、小さなボックス席。メンバーは最小限だけだ。

「おおおおおおお……っ。和地を応援したいけど、春奈も応援したいしちよっと迷うう〜！」

鶴羽が既にハラハラしているけど、まあそこはそうね。

私も素直に和地を応援するけれど、春奈にも頑張つてほしいと思うもの。そこは同感だわ。

それはそれとして、冷静に俯瞰している者もいるけれど。

「和地がどんな禁手を用意できたか。そして春奈がどれだけブレイク・エンブレス赫焰女帝に習熟しているか。その当たりが勝負を分けそうねえ」

リーネスは冷静にその辺りを踏まえて俯瞰しているけど、まあそうでしょう。

私もちよつとは思うところがあるけれど、それ以上に試合を参考にしつつ楽しんで観戦したいところね。

「流石に聖血を至らせてはいないでしょうし、それ以外をどう仕上げたが和地側の要点でしょうね」

「そ、そうなの？」

オトメねえが私の言葉に反応するけど、実際そうなのよ。

あの和地に限って、今の時点で聖血を至らせているとは思えない。流石に至らせているのなら、リーネスは知っているでしょうしね。

そして和地だってそこは想定できるはず。まずやるべきことをやる男だからこそ、至らせるより他の習熟にリソースを回すでしょうし。

「うくん。私は素直に和地の応援だけど、必ず勝てるって相手じゃないもの。不安ね……」

オトメねえとしてはそうなるでしょうね。

私達にとつては春奈はハーレム仲間だけど、オトメねえにとつては息子の恋人だもの。息子と相争うんなら、この場合は素直に息子を応援するでしょう。

とはいえ、流れの予想はできているわ。

「まあ、どんなルールになるとしても、十中八九方向性は読めているわ」

私はその辺り確信ができています。

何故なら――

「あのヴィール・アガレス・サタンの遺志を組んだチームと言っている

もの。なら和地に対する挑み方は、ほぼ確実に一つでしょうね」
—それだけの男の配下だったのだから。

「……それはそれとして、卵かけご飯の準備はできているわよね」
「待ってました!!」

「いや、冥界来てまで卵かけご飯……そもそも大丈夫なの？」

パってる!?

「落ち着いて、インガ。ほら、私の言う通りに深呼吸して」

「試合が開始したら少しの間はこっちが先に動くから、その間に気を取り直してね?」

と、ヴォルフと大上がフォローしているけど、俺もフォローしたい。フォローしたいけど、そんなみんなと俺との間には三美さんと黒狼が!

「心配なのは分かりますが、ここはぐつと我慢してください。王が困キング惑していることあること無いこと書かれます」

「相手チームもその方が威圧されるでしょう。まあ相手が相手なので気休めでしようが」

「……了解。経験者のアドバイスは反映します」

まあ、俺って結構目立っているから妙なことすると変なのが湧いて出てきそうだ。

これも有名税っていうのかねえ? 今後対策チームとか、上がった権限で用意してもらおうべきだろうか?

そして俺達がスタジアムの半ばに進んでいく中、実況は更に声を張り上げる。

「そして迎え撃つはあ! 冥界の未来を憂い富国強兵を願う者達!

王道の再興者チームだあああああつ!!!」

『『『『『『『『わあああああああつ!!!』』』』』』』』

そして入ってくるのは、春つちを連れた悪魔達の集団。

王の駒を正式に採用させる為、それを優勝賞品に願って参戦したチーム。若き悪魔達による、富国強兵を目的とするチームだ。

今のところは互いに連戦連勝。そして下馬評ではこっちが少し不利といったところか。

リザーブメンバー含めてかなりの人数がいる相手の方が、まだメンバーに空きがある俺達より厚みで上回っているからな。これは仕方がない。

とはいえむぎむぎやられる気はない。全体の傾向から大筋の戦闘プランは黒狼が考えてくれている。俺も事前にある程度探ったうえ

でいくつかの提案はしている。特に今回、ある予感がしたのでそこについてはかなり話し合った。

そして確立した大筋は決まっている。サブプランの類もいくつか擁している。その上で参戦を決定しているわけだ。

さて、鬼が出るか蛇が出るか、だな。

『今回のゲーム、特殊ルールの一つである「アナザー・キング」で行われることとなっております!』

そう、懸念点はこのルール。

レーティングゲームのこの特殊ルール。このルールを相手がどう対応するか、そこが懸念だ。

『改めてこのルールを説明しますと、このルールでは各チームともに、王と同じように討たれば敗北が確定するメンバーを一人選出することになっております』

そう、これがこのゲームの中々に面白いところだ。

誰にするかの裁量はそれぞれのチームに明かされており、基本的に教えることもない。だが同時に、王以外に絶対に倒されてはいけないものが出てくる。これが厄介だ。

タクティクスの面である種の縛りをつけられる為、その揺らぎが生まれやすいようにするのが難点だ。サクリファイス犠牲戦術を基本とするものは気づかれやすい。そうでなくても、普段より倒されてはいけなさと悟られやすい為、勘づかれるリスクは生まれやすい。

そういう意味では、気づかれなような絶妙な塩梅でいつもとは違う戦術を組み立てる必要がある。戦術面での対応がとても重要になる特殊ルールらしい

幸い、いくつもゲームを経験している黒狼達がいる。

大筋は彼らに任せれば十分だ。俺もリーダーゆえにある程度は手綱を握るべきだが、ある程度で十分。できるやつを見出して任せるのも、リーダーの仕事の方法だろう。

このルールで普通にやる分にはそれでいい。俺はゲームに慣れてないから、一から十までやるのになんて限度があるしな。

だが、それはあくまで普通にやればの話であり――

「……試合開始までに、まず言っておくべきことがある」

「ヴィールの薫陶を受けた者だらけの、この試合では通用しないと思っていた。」

相手チームの王がそう告げたことで、俺の予感確信に近くなる。そして、相手チームは一斉に春つちに視線を向けてから向き直った。

「我々、王道の再興者チームはコアの担当に成田春奈を選出する」
ほら、こうなった。

会場がざわめくが、俺は正直想定していたので驚かない。俺のチームメンバーも、開始前のブリーフィングで俺達（インガとベルナ含む）が告げていたので、さほど動揺はない。

『な、なななんとお！ 王道の再興者チームは、コア役を開始前に発表したああああ!!? こ、これはブラフでしょうか!』

実況が困惑するけど、俺は言いたいことは分かっている。

ああ、それだ。

「言いたいことは分かった。……つまり、俺と春奈で一騎打ちしておいてくれることだろうか?」

「そういう事だ。その間に、我々は残りのチームを全滅させる気概で挑ませてもらうがね」

俺の確認にあつさり頷いてきたし、まあそういう事だ。

王道の再興者チームは、ある意味でヴィール・アガレス・サタンの薫陶を受けている。

そのヴィールの眷属であり、俺が貰い受けた春奈の心情を配慮したのだろう。で、このルールならそういう事にするつもりだったと。

なので、俺は後ろを振り返ると肩をすくめる。

「悪い。打合せ通りになった」

「あ、あはは……。頑張つてね?」

苦笑まみれな中、一人応援はしてくれているヴィーナにちよつと涙が浮かびそうかも。

ある意味そつちの方が大変だろうけど、頑張つてな?

「ま、そういうわけだ。いい機会だしぶつかつとけよな?」

「ええ、思いつきり胸を借りる……いえ、吹っ飛ばすぐらいのノリでいくわ」

春っちは春っちで、ベルナに激励されて物騒なこと返してるし。え、俺、胸を吹っ飛ばされるの？

「……ま、頑張つてね、和地君」

インガ姉ちゃんが肩を叩いてくれるけど、ちよつと物騒なこと言われてたんですが。

いや、レーティングゲームは死なないだけで殴り合いだしな。物騒なぐらいでちよつどいいか。頑張ろう。

さて、ならそろそろ気合を入れないと……な！

祐斗Side

『な、ななななんとお!? 今回のレーティングゲーム、アナザー・コアのルールを逆手に取った一騎打ち!! 九成和地選手と成田春奈選手の一騎打ちが始まりましたああああ!!』

実況が驚愕する中、僕はリアス姉さんに振り向いた。

「お二人の予想通りになりましたね」

「でしようね。まあ、それはそれとして容赦なく残りを潰しに行くでしようけど」

優雅に紅茶を飲みながら、リアス姉さんはそう言つて微笑む。

ヴィール・アガレス・サタンと何度も戦い、更にグレモリー家次期当主として色々な悪魔を見てきた。その経験が生きたのだろう。

同じように見抜いた彼もだけど、禍の団に少なからず関わっていた

こともあるんだろうね。

そしてスタジアムからゲームのフィールドに移る両チーム。その様子を見ながら、リアス姉さんは真剣な表情に切り替わっている。

「問題はここからね。今のチーム全体で見ると、王道の再興者チームが数段上手よ」

実際、その評価は間違っていないだろう。

なにせ相手チームはフルメンバー。更にリザーブ枠も多数擁している。その上、成田さんと同じく数少ない転生悪魔として参戦しているのは、上位神滅具にノミネートされるだろう双竜健也だ。

勝ち筋を見出すのなら、九成君が上手く障壁を生かしての全体力バーを担う必要がある。そうでない場合、圧倒的に不利となりえるだろう。

それをあえて排除した状態で、果たしてどこまで立ち回れるのか。……いうまでもなく、九成君が成田さんを早い時間で打倒できるかどうか。それが勝敗を左右するだろう。

「さあ、どんな試合になるか楽しみにしながら見せてもらおうよ?」

微笑を浮かべるリアス姉さんは、この先を見通しているのか。

そんな気持ちになりながら、僕は始まった試合を観戦する。

見せてもらうよ、成田さん、九成君。

君達の、並び立つ為の戦いを……!

大会開幕編 第二十五話 試合開幕、和地VS春奈
(その二)

イツセーSide

フィールドに転移する両チーム。そして大歓声を上げるスタジオム。

俺も結構ドキドキしているぜ。こうなるんじゃないかって気持ちもあつたけど、そうだったか。

「……面白い展開になったものだね。あの二人が一騎打ちか！」

「愛する者同士の競い合い。これも一つのロマンかしら！」

テンションが上がり気味のゼノヴィアとイリナだけど、俺もちよつと興奮してる。

流星はヴィールの配下や感銘を受けた連中だ。心配りまでしつかりしてやがる。

このルールなら、成田さんが九成と一騎打ちをすることで勝利を争うこともできる。そしてそれはそれとして、真つ向から残りを潰しに行く算段か。

俺が感心していると、成田さんはデカイ火柱を上げながら一人離れていく。

そして別の映像では、九成がそれを悟つて疾走ソニック・チャリオット車輪に乗って走り出す。

そりやそうだ。この流れで一騎打ちそのものを投げるようなら、俺だって文句をつけるだろうしな。

『黒狼さん、そっちは任せる!!』

『かしこまりました。ぶ武運を』

なるほど。最初のゲームもそうだけど、あの黒狼って人が参謀役で

ブレーンか。

となると、俺達が戦う時は黒狼さんを真つ先に潰すべきだな。

と言つても他にも三人ぐらいゲームを何度も経験している人がいる。残りの三人がどこまで指揮が取れるかは不明だけど、九成も馬鹿じゃない。ある程度の参考意見があれば色々できそうだな。

「皆はどう思う？ いや、九成と成田さんの一騎打ちじゃなくて、残りの対決」

「単刀直入に言えば、王道の再興者チームの方が有利になりますわね」
レイヴェルが即答で俺に応える。

やはり俺達のブレーンなだけあって、作戦指揮には適任だな。

もうレイヴェルには先の流れも見えているようだ。

「……そもそも平均的な質では王道の再興者チームが上ですわ。戦術的に対応できない差ではありませんが、涙換の救済者チームの戦術プランはキヤスリングを念頭に置いているので、九成さんが動かせない状況では戦術面で不安が残ります」

「なるほど。つまりそれ以外の戦術プランを練つてない限りは不利のまま……か」

ゼノヴィアがレイヴェルの意見に納得しているけど、となるとやっぱり九成と成田さんの決着が早く付くのが条件か。

ただ、成田さんが九成に勝つ可能性だつて十分にある。そういう意味だと、総合的に見て九成達が不利つてことになるな。

「……失礼ながら、王道の再興者チームの発言がブラフという可能性はありませぬか？」

「あ、確かに！ 素直に鵜呑みにするつて大丈夫なの？」

ボーヴァとアルティーンはそう言うけど、それはたぶんないだろう。

俺達全員が首を横に振る中、レイヴェルも頷いている。

「あのヴィール・アガレスの薫陶を受けた者達が多い中でそれはありませんわ。そんなことを決定すればチームが空中分裂するでしょう。ヴィール・アガレスは必要な腹芸はしても、競技試合でそんなやり方は好まない御仁でしょうし」

「そういうことだ。あのヴィールの眷属や配下が何人もいるなら、こんな状況でそんな騙しはしないだろうさ」

腹芸はするし策略もある。実際、王の駒を自分達が開発したように見せかけていたしな。

でも、競技試合で真つ向勝負を挑んでおいて、その大前提が全部嘘……なんてマネはしないだろう。

誇り高く苛烈な男。そんなヴィールの配下や眷属が、そんな真似まです肯定しない。そして無理にしたところで、本領なんて発揮できない。

そういう心をないがしろにする奴が王なら、むしろ九成達が圧倒的に有利。だけどそうでないから厄介なんだ。

「頑張れよ。九成、成田さん」

俺も、どつちも健闘することを願ってるぜ！

カズヒSide

ここまでは想定通り。

ヴィール・アガレス・サタンは真つ直ぐな気性の男だった。腹芸も政治の世界で学んでいるけれど、粋な計らいもできる男。そんな男の薫陶を受けた者達こそが、王道の再興者チーム。

だから、どんなルールであつても春奈を和地と一騎打ちさせる方向に持つて行くでしょう。その可能性は十分すぎるほどあつた。

それに序盤なら、一敗ぐらいしてもリカバリーの余地はある。下馬評で有利であることも踏まえれば、それぐらいの真似はするでしょう

し。

とはいえ、ここからが本番ね。

『前に出るぞ、文香、文雄！』

『了解！』

『三人をタンクにして対応してください。多少の流れ弾は自力で対応できる人達ですので、遠慮なく』

なるほど、あの4人は付き合いがあったわね。その辺りの連携は出て来ていると。

……どうやら和地を生かせない状態でのある程度の戦術プランは練っていたようね。対応速度も比較的早い。

ただ問題は、あのヴィールの薫陶を相手が受けているという点ね。

『突っ込む、援護を！』

『『承知！』』

上級悪魔四人の魔力砲撃を援護に、その射線ギリギリを縫うように冥革連合の男が突貫する。

ちよつとずれれば上級悪魔の本気の砲撃が当たる、そんな弾幕をガードレールじみた形にすることで、冥革連合は一人切り込んだ。

名前はケンゴ・ベルフェゴール。京都ではホテルの方に仕掛けてアザゼル先生達とやり会った奴。更にアグレアスではヴィールに率いられ、アーサー・ペンドラゴンと切り結んだ経験もある。

間違いなく冥革連合のエースね。王の駒は封印されたとはいえ、その実力は最上級悪魔クラスが確実にある。

真つ向から切り結ぶ場合、相手も相応の力量が必要になるけれど――『……させない！』

――迎撃できるだけの戦力はいるようね。

突貫したのは、涙換の救済者チームで戦車を務める行船三美。

確か最上級悪魔すら狙えるとされる、準神滅具保有者だったわね。

そしてその手に具現化された大剣が、ケンゴ・ベルフェゴールと切り結ぶ。

……なるほど。反応も動作もかなり上質。当然として、優秀故に迎撃を成立させている。

私が感心していると、隣のリーネスも興味深そうな表情になっている。

「そういえば、あれはどういう神器なのかしら？」

「準神滅具、大剣乱舞^{バスター・ダンシング}。見ての通りの大剣だけど、ここからが凄まじいわよお」

そうリーネスが応えた瞬間、行船三美は弾き飛ばされる。

だがその瞬間、ケンゴ・ベルフェゴールに二本の大剣が叩き込まれた。

防御こそギリギリ間に合っているけれど、かろうじてのレベル。その為勢いを殺しきれず、盛大に吹っ飛ばされていく。

更に大剣は、そのまま飛翔すると戻ってきた三美が持つ一本と共に、王道の再興者チームを引つ掻き回していく。

「あれが大剣乱舞の本領。大剣そのものが飛翔能力を持っていてえ、それを複数本具現化できるのよお」

「あくなるほど。オールレンジ攻撃したり、手に持ったの動作を補助したりとかできるわけね」

感心している鶴羽の横では、オトメねえが少し分かってない風だった。

「えっと、それって持っている意味あるの？」

まあ確かに、それなら持たずに全部オールレンジに使えばいいとも思うでしょうね。

ただ、あの戦い方は上手いというほかないわ。

「準神滅具じゃ限度があるってことよ。……おそらくだけど、小技の類は手持ちで出来る技ね」

そう答える私の視線の先、三美はコンパクトな連撃を叩き込みつつ、オールレンジ攻撃で生まれた隙に大振りを叩き込んでいる。

大剣とは文字通り、大きな剣だ。必然的に質量も重心も、小技を入れるのには向いていない。

それが片手持ちで出来ているのは、ひとえに大剣乱舞の性能あつてのもの。その飛翔特性の応用だ。

飛翔特性と手による動作を組み合わせることで、本来軽量な片手剣

できないような動きすら可能としている。大剣でそれを振るわれるというのは、理解できる奴なら震えるレベルだろう。

ただ、オールレンジ攻撃でそれはできていない。そこが準神滅具としての限界。そういう事だ。

「大剣乱舞の飛翔能力は、飛ばして使う場合慣性の影響を殺しきれないわあ。でも、身体能力の動作でも大降りになるのが大剣だからあ、合わせた場合はああなるのよお」

「流石は準神滅具。そしてそれを十全に使える才覚と技量ですね」

リーネスの解説にディックも感心している。

そう、若干大振りだが多角的に対応できるオールレンジ攻撃。そして本来大剣ではありえない動作で戦える手持ち攻撃。その二種類こそがあの準神滅具の本領。

純粹に剣としての性能も、聖魔剣に切り結べるぐらいはあるようだしね。あの多角的対応力は十分な脅威だわ。

……そして、他のメンバーも上手くしのいでいる。

インガとベルナも頑張つて迎撃しているわね、やるじゃない。

「お？ 日美つち、旦那がそろそろ戦うみたいだぜ？」

と、勇ちゃんが指摘して私は別の映像を確認する。

そこでは和地が春奈と合流している。

なるほど、どうやら二人の戦いはあそこから本番のようね。

……さて、見せてもらおうよ？

二人の戦い、高みの見物とさせてもらおうわね。

とりあえず、みんなは今のところしのいでいるようだな。

となれば、俺は俺のやることをしつかりこなすか。

ソニック・チャリオット
疾走車輪から降り、俺は星魔剣を創造する。

「待たせたな、春っち」

「問題ないわ、和っち」

そして着地する春っちも、炎を刃として構えている。

思えば、俺も惚れこまれたものだ。

何年間も、その本来の意味を忘れても、心の底から消えることがなかつた願い。

俺と胸を張りたい。その一念を持って、彼女はここまで強くなつた。

その果てに辿り着いた境地。後天的に神滅具化した、焰の具現。

ブレイズ・エンブレス
赫焰女帝

俺もまた、それに応えたい。向き合いたい。

その想いを朽ち果てさせること無く進んできた先にある彼女に、俺も胸を張りたいと思うから。

だからこそ、俺は遠慮なく刃を構える。

「行くぜ、春っち。……互いに遠慮は一切無しでだな」

「行くわ、和っち。……今の互いを包み隠すことなく」

そして、俺達は互いに微笑み合い――

「……………はあああああつ!!」

――真っ向から、互いと競い合う。

振られる炎の群れに、俺は魔剣を持って対応する。

切り裂き、いなし、受け流す。

その炎は龍王の一撃に匹敵するが、俺はそれを全力で迎撃して潜り抜ける。

そして、一太刀を俺は叩き込んだ。

「まだよー！」

「まだだー！」

そして反撃を掻い潜りながら、俺も反撃を開始する。

急激に覚醒を遂げたりはしない。俺達はそんな柄じゃない。というより、カズヒの専売特許だからな。

ただし、春つちには神聖血脈による不死性がある。限度はあるが、それはフェニックスを打倒するレベルの難易度。俺の手札で一撃必殺など、させてくれるわけがない。

そして俺もまた、ゾーンに入る。

微弱ではあるが常に行われる最適化。それにより攻撃を更に掻い潜り、そして攻撃を入れ続ける。

神聖血脈による不死性で押し切るか、ゾーンによる最大効率で追い抜くか。この戦いは現状、その形だ。

だが甘い。そんなことは分かっている。

「……やるわね和つち。なら、ギアを上げるわ！」

その瞬間、春つちの周囲に大量の火炎弾が生成。一斉に俺に向かって投射される。

だが甘い。俺としてその程度は想定している。

「撃ち落とせー！」

既に疾走車輪は禁手に到達。更に当然だが残コスモス・ボルト神も発動させ、サルヴェイティングアサルトリックを装丁させている。

その援護射撃で弾幕を多分に相殺。更に星光の障壁でいなし、安全地帯を作り上げる。

ここまでは互いに予定調和。それぐらいは分かっている。だから、こそ！

「ここから先が……！」

本番だ！

大会開幕編 第二十六話 試合開幕、和地VS春奈
(その二)

イツセーSide

戦闘は本当に激しくなっている。

王道の再興者チームは容赦なく攻めかかり、涙換の救済者チームはそれを凌ぐ。

ただ、このままだと競り負けるのは間違いない。

だからこそ、九成達が勝つには成田さんとの一騎打ちに九成が勝つ必要がある。

……ただ、それにしたつてと思う展開が起きている。

「これは、中々な展開になりましたわね」

「そうですな。おそらくレーティングゲームの歴史でも滅多にないのではないのでしょうか？」

レイヴェルとボーヴァが感心しているけど、この二人は悪魔歴長いからな。ゲームもたくさん見てるだろうから、尚更新鮮なんだろう。

「……イツセー、今度私と模擬戦をしないか？ 羨ましくなってきた」

「あ、ずるいわゼノヴィア！ ダーリン、私もお願い！」

ゼノヴィアとイリナは赤面しながら、俺の方をチラチラ見てきている。

まあうん。こんなの見たら、そういう気持ちにもなるかもな。

そう、今二人は――

『な、ななななあんとおおおおおお！ 九成和地選手と成田春奈選手、互いに互いを強化しながら、真っ向勝負だあああああ!』

――お互いにバフをかけながら戦ってる!!

いや、二人ともそういう技持っているよ？ ヴィールとの最終決戦

でも、相互に同調しているよ？

でもそれはお互いの共闘だからだ。断じて互いが互いを倒す為に使ってるわけじゃない。

だからまあ、今観客席もちよつと沈黙している。「え、マジで？」って感じた。

ただ、画面に映っている二人はマジだ。

『どうした春っち！ エンゲージフレアは絶対調だぞ？ その程度か？』

『ごつちのセリフよ！ 焰技・熱愛をもってしてその程度？ 本気？』
お互いに挑発すらしながら、二人の戦闘はどんどん激しくなっている。

な、なんか燃える展開だけど、同時に凄いことしているからちよつと困惑している。

「……なるほど、お互いがお互いを高め合いながら競い合う。恋人でありライバルだからこそなのでしょいか」

と、俺の隣でシャルロットはちよつと困惑しながらも微笑んでいる。

いや、俺に言われても困る。

とはいえ、どんどん観客の人達も我に返って興奮して喝采している。

俺もどんどん燃えてくるっていうか、見てて震える試合ってこういうの言うんだろうなあ。

「おおおおお！ そこ、パンチ……いやキック……うわあ炎!」

アルティーネも楽しんでるようで何よりだな。

と、シャルロットはみんな様子を見ながら、俺を見て微笑んだ。

「リアスさんとの試合でやってみます？ 二人なら相互ブーストできると思いますよ？」

「あ、確かに」

俺の赤龍帝の籠手はそれができるし、リアスもおっぱいの力で俺をいつも高めてくれた。

なら、俺達も似たようなことができるかもしれない。

ちよ、ちよつとやってみたいかも――

『……やめておけ、相棒』

――ドライブの、悲しそうな声がそこに待ったをかける。

『目に見えるようだ。相互強化によってごっつそり減ったリアス・グレモリーの胸を見て、落ち込む相棒の姿が本当に見えるぞ』

「「「「「……あ」「」「」」」」

思わずみんなで声が出たよ。

そうじゃん！ あ、危なかったあああああつ！！

和地Side

俺達の戦闘は白熱している。そして、接戦となっている。

春つちの優位性は不死特性だ。神聖血脈による不死特性、こわれずのみはしら不崩壊之主柱と名付けられたそれは、フェニックス家の不死特性に匹敵する。

更にライダー・オブ・ファイヤ赤き情熱の憧憬の焰技版である焰技・情熱により、真つ向からこつちに迫りくる。

それに対し、俺は既にパラディンドッグで対応中。サルヴェイティングアサルトドッグを使用させている従者との併用で、多角的に対応している。

更に神聖存在のポテンシャルを可能な限り煮詰めて磨き上げることで、俺の基本性能は向上している。この発想に至ったのが三美さんとの会話がきつかけだから時間は短いが、それでもだいたい何とかできた。

そしてこの戦いが注目されるだろう最大の点は、俺達がお互いにバフをかけながら戦っている点。

俺は春つちサポート用に開発したエンゲージフレアを展開しているし。春つちも赤き熱愛マリッジ・オブ・ラァイヤの餞別の焰技バージョンである焰技・熱愛で俺を強化している。

そしてそれゆえに、俺達は双方のチームで最強戦力が確定している。周囲の環境を溶岩に変え、それを断ち切りながらの戦闘が継続中だ。

そんな真つ向からの、互いに塩を送り合いながらも激突。だが同時に、それこそが俺達にとって望むところだ。

だってそうだろう？

春つちがここまでこれたのは、俺に胸を張りたいたからだ。

俺に守られるだけが嫌だった。今度は俺と守り合いたいと願った。それを幼きゆえに成長と共に忘れながらも、その根幹は決して消えなかった。

俺が道間日美子カズヒの笑顔に誓い、その本質を半ば忘却しながらも進んできた道。笑顔に誓った勝利を刻む、その為の人生。それと極めて酷似した、その成長。

ヴィール・アガレス・サタンによって朽ち果てることから救われ、そんな男の元で鍛え続けてきたこの成長。

同胞達にも、俺達にも、決して情けない姿など見せられない。

ああ、だからこそ――

「惚れ直したぜ、春つちー！」

――その決意と共に、更に上を行って見せる！

ゾーンの集中力と感覚で見切り、一撃を入れる頻度を少しずつだが上げていく。

もちろん相手の反撃も研ぎ澄まされるが、それを俺は捌いていく。時として、紙一重で。時として、大振りで。また時として、わざとタイミングをずらして当たることだ。

そんなばらつきのある回避パターンで、なれと突破を許さない。

そして、その上で――

「こっちのセリフよ、和つち！」

―成田春奈は、俺に一撃を入れていく。

ゾーンで高まっていく俺の戦闘に、再生力によるごり押し込みで春つちは食らいついていく。

負けられない。追いつきたい。むしろ前を歩くぐらいの気概で挑む。

それが感じられ、俺の胸は熱くなる。

きつと、春つちもそうなんだろう。

だからこそ！

「これで終わると思うか、春つち！」

「当然ないでしょう、和つち！」

更にギアを上げていく。

……本当に、本当に強くなったな。見違えたよ、春つち。

どこか感動すら覚え、俺は攻防を繰り広げる。

真つ向から振るわれる炎を、炎特攻の魔剣で掻い潜るといふ手法もあつただろう。

だが、あえてそれを選ばない。

俺は真つ向から春つちと競い合う。そうしたいと願うし、そうすべきと悟っている。

ここまで鍛え上げるほど、俺は想われている。俺を思う気持ちだが、ここまで春つちを高め上げた。

もちろん迷走もあつたし、結果として血も流れた。その責任はあるし、これからも背負い続けていく業だろう。

だからこそ、せめて俺は成果だけでも受け止めよう。

俺を想い、そして磨き上げ辿り着いた到達点。そしてその先を行くだろう道筋。

俺は、そこに並び立てるだろうか。

その疑問を、俺は踏み込むと共に突破する。

並び立つのではない、共に歩き続けるんだ。

振られる炎の斬撃を、俺は掻い潜る。

追撃の魔剣を春つちは瞬時に迎撃するが、俺はその瞬間に魔剣から

手を放す。

再度魔剣を創造する。そして、俺はそれを掴まずに踏み込んだ。

「っ！」

とつぎに迎撃の体勢をとる春つちだが、しかしその隙は大きい。

ああ、創造系の神器は瞬時に武器が作れる。当然だが、破損されてもすぐに魔剣で対応することが可能だ。まして、あえて一旦手を離れたことでそれによる隙を狙ったものと思っただろう。

だからそこをついた。

フェイントをかけての攻撃と見せかけて、それこそが本命のフェイント。

俺はその瞬間、指先にリングで保持する形の爪状の魔剣を瞬時に創造。そのまま抜き手で春つちに一撃を叩き込む。

悪いな春つち。俺はザイアで、魔剣創造以外の戦闘手段も徹底的に叩き込まれている。ついでに言うと、俺自身すっかり真面目に講習は受けている。

神器は確かに凄い力で、増して俺の魔剣創造は強力な部類だ。だからこそ、それ以外の戦闘手段を持つことは戦術の幅を広げる。

ショットライザーを中心とする射撃戦闘は当然。剣以外の武器においても、一通りのものは習得済み。そして徒手空拳の技術だって当然収めている。

それらを魔剣創造と組み合わせての攻撃。要は五本抜き手を主体とする打撃戦ならぬ爪撃戦。

だがその上で、春つちは瞬時に突っ込んだ。

「舐めんなあ！」

「まさか！」

最高出力のジェット推進で、春つちはそのまま俺に組み付いた。

瞬時に全身から炎が具現化する。赤き炎の腕では到底できないだろう全身からの火炎放射も、今の春つちなら到達できる。

当然俺の従者で攻撃の体勢をとるが、春つちは高速軌道と俺を盾にするような立ち回りで、攻撃を許さない。

ならば、俺が自力でどうにかするしかないだろう。

「……甘いな春っち。この程度なら！」

俺はその瞬間、応用で全身に魔剣を展開する。

リング状のパーツで固定する形で、全身に魔剣を固定。それをもつてして、強引に春っちの拘束を断ち切った。

「ぐ……それでも……っ！」

折れないな、春っち。

ただこっちも結構きつい。というより、はつきり言って全身火傷だ。

あまり長期戦は避けるべきだろう。そろそろ、決着をつけるべきか。

それを覚悟し、俺は瞬時にショットライザーをベルトに装填する。

同時に、春っちも全身に炎の装甲を纏って突貫する。

『BALANCE SAVE!』

プログライズキーが起動し、俺の脚部に魔剣創造の流用で強化装甲ユニットが展開。

そして、一旦離れた俺達の間合いは一気に迫る。

「和っちいいいいいいいいいいっ！」

放たれる蹴りは、赤き情熱の憧憬を昇華した焰技・情熱によるもの。

それに合わせるように、俺もまた迎撃の蹴りで真っ向から迎え撃つ！

「春っちいいいいいいいいいいっ！」

『パラディンブラストファイバーツ!!』

イ デ ラ パ

ン
ブラストファイバー

ぶつかり合う蹴りの激突は、周囲に破壊をまき散らしながら一時的な拮抗を齎す。

だが、俺が一手早い。

『BALANCE SAVE!』

素早くプログライズキーを起動させつつ、俺はショットライザーを引き抜いた。

更に魔剣と障壁を大量に展開し、春つちに迎撃と回避を許さない状況にもっていく。

その詰み手に対し、春つちは小さく微笑んだ。

「まだこのぐらいか。……待ってて、絶対追いつく」

「ああ、先に行きながら待ってるぜ」

俺はそう応え、そして引き金を引き絞る。

『パラディンソードブラスト!』

パ
ラ
デ
イ
ン
ソードブラスト

放たれる魔星剣の一斉射撃が、春つちに全弾突き刺さった。

悪いな、春つち。

今回は俺の勝ちだ。次に備えて、牙を磨き続けてくれ。

お前が胸張って並び立ちたい俺を、俺自身磨き上げて待ってるぜ？

大会開幕編 第二十七話 決着とこれからと

和地Side

転送の光に包まれる春つちは、そのまま俺の方に倒れこむ。

それを俺が咄嗟に支えると、彼女はその赤毛を揺らしながら、大きく息を吐いた。

「……まだ届かないかあ。これ、ケンゴさんたちに謝らないとなあ」
そう苦笑交じりに呟いた春つちは俺の顔を覗き込む。

「でも、結構強かったでしょ。……強く、なったでしょ？」
そんな、ちよつと自信なさげな春つちに、俺は愛おしさと軽い怒りがあふれてくる。

こんなに彼女は強くなった。迷走もあつたし、原点を見失つたこともある。だが、取り戻し俺を此処まで苦戦させるぐらい強くなった。俺がずっとずっと強くなり続けて、そんな俺を苦戦させたつてのに。

春つちは自信なさげなのかよ。ちよつとそれは怒るぜ？

だから、俺は行動で示す。

「春つち」

「……んっ!?!」

その唇をしっかりと奪うと、俺は春つちを抱きかかえて宣言する。

「お前は俺の強くて可愛いお嫁さんの一人だろうが！ 今ここで証明しときながら、そんな態度は春つちにだって認めないさ！」

俺ははつきりと宣言し、この試合を見ている全員が分かるように宣

言する。

まったくもって失礼な。今更そこで弱気になるんじゃない。
そして俺は変身を解いて、まっすぐに顔突き付けながら言い切った。

「ここまで言わせるだけのことを、春っちはしっかりしてのけたんだ。
……胸を張ってくれよな?」

「……………」

ん、なんかもの凄く真っ赤になって――

「……………このおバカあああああつ!?!」

――消えるその瞬間、もの凄く勢いの乗った拳が俺に叩き込まれた。

……ホント、春っちは強くなったなあ

イツセーSide

な、なんて奴だ。

あの場で堂々と嫁さん宣言して、公衆の面前で愛していることを突き付けるだ?!?

「や、やりやがったな九成っ!」

見てるこっちが恥ずかしいぞ!

「……………え?」

なんか全方位で「お前が言うな」の視線が集まった!?

……そうだね。俺も似たようなことしたばかりだったよ。

でも、お義父さんの前で嫁にする宣言するのと、本人を抱え上げてお嫁さんだと紹介するのはちよつと違うと思うんだ。

ただ、俺のそんな気持ちを察したドライブから呆れの気持ちが向け

られている。

『相棒、日本には目くそ鼻くそを笑うという比喩があるはずだぞ?』

「チヨイスのセンスがひでえよ!?!」

なんでだああああ!!

和地 Side

『王道の再興者チームのコア、リタイアを確認。涙換タイタス・クロウの救済者チームの勝利です』

……呼吸を整えて残心をとっている中、アナウンスが鳴り響く。

まあないとは思っていたが、ブラフだった可能性を踏まえるとこれで安心という事か。

ほつと息をついたその瞬間、俺はぐらりとふらついた。

思わずへたり込むが、これはかなりダメージが入っているな。

防衛特化と再生能力。性質上ある種の消耗戦を強いられるわけで、競り合いで勝った以上は消耗も大きい。ひいき目抜きで互角の競り合いだったからな。こうもなるだろう。

というより、全身火傷状態だ。星辰奏者ゆえに放っておいても治るだろうが、回復するに越したことはない。

とりあえず魔力量ごり押しごり押しの治癒魔術で気休めをしつつ、俺は大きく息をついた。

「まったく。強くなりすぎだよなあ、春っちは」

思わず眩くと、つい苦笑してしまう。

その理由が俺に胸を張りたいたいなんだから、男冥利に尽きるって奴

か。モテる男はこういう時苦勞するわけで、何とか乗り越えないといけないいな。

さて、祝勝会は必須だけど、いつそのこと王道の再興者チームも巻き込んでの健闘パーティにするのもありだろうか。

そんなことを思っていると、なんかこつちに凄い勢いで近づいていく。

「あ、あそこですー！」

「……和地様！」

つて、三美さんとヴィーナか。

三美さんが抱える形でヴィーナを運び、そして俺の隣に着地する。

「……勝利したようで何よりです。こちらも凌ぎがいがありました！」

三美さんはそう言うのと、その上で周囲を見て小さく頬を引きつらせている。

まあ、言われてみると被害が甚大だな。

地面はごつそり削れているし、ところどころ赤熱化している。というより、溶岩みたいな状態になっているところもあるしな。

我ながら、こんな戦いをして勝つんだから強くなったもんだ。

ま、これでもまだまだだろうけどな。

最低でも主神や超越者と張り合えるようにならないと、極晁を否定した責任なんて到底背負えない。

今後も精進だな。色々と考えておくとしよう。

ま、それはともかくだ。

「ありがとう、一人とも。みんなで祝勝会しようか」

こういうことはしつかりやつとかないとな。金あるし。

そんなことを思っていると、頭の上から液体が墜ちてくる。

「それより早く治療しないと！ ほら、全身火傷してるしね!？」

ヴィーナがそう言ってかけてくる液体を浴びると、痛みが引いて傷もどんどん回復していつている。

アーシアの神器に比べれば微々たるものだが、確かに効果が見えてくるな。

「本当に凄いですね、ヴィーナさん。……悪魔の私達にも回復が作用

していますし」

「まあ、再生治療の応用というか延長線上ですから。悪魔の方でも効果があるんじゃないでしょうか？」

「三美さんにそう返すヴィーナは、今金属の盃を持っている。
フェアリー・カップ

妖精の杯。赤龍帝の籠手に対する龍トウフェイス・クリティカルの手の幽世の聖杯、ある程度の生態調整能力を持つ神器だ。

それを応用し、高速で再生治療が起きる薬液を生成している。それによる回復がヴィーナの編み出した神器の扱い方だ。

流石に神器そのものとの同調もあつてのことだが、やろうと思えば薬の大量生産ができる。……一財産築けそうだな、オイ。

だけど、三美さんも含めて本当に頼れる戦力だ。これならやりようはいくらでもありそうだな。

うん、素直に感謝をするべきだろう。

「美人で頼れるチームメンバーが来てくれて、いや本当に感謝だな」

「え!?!」

……いかん、今はアカン。

なんというか、意味もなくフラグを立てたかもしれない。

「……いや、シルファや文香も含めてだけどね!?! それに黒狼や文香も頼れるし! インガ姉ちゃんはベルナも愛してますから!?!」

よし、これでフォローできたはず――

「……あ、そうだよね! シルファちゃんって、勘違いされがちだけどいい子だし! 可愛いもん!」

「和地様。文香は文香がいますから、落ち着いてくださいね?」

――違う方向にヤバイ!?!

Other side

「……なんというか、凄いな彼ら」

「兄さんも大概その枠に入っていると思うんですけど？」

「いや、ルーシア？ 俺はまた方向性が違うけどね？」

「……」

「ど、どうしたのかな？」

「いえ、兄さんが人と違うことを当たり前に認めているのが新鮮です」

「ま、俺も反省はするし改善はするさ。というより、それが取り柄だしね」

「ふふ、そうですね。なら私も、ルーシア・オクトーバーとして私なりに頑張ります」

「ああ、そうだね」

「フハハハハ！ お主の連れ合いと息子は、素晴らしいではないか！

主よ、見ておられるのでしたらどうか慈しみを！」

「ちよ、団長!? 恥ずかしいから勘弁してください！」

「よいではないか！ 愛とは本来尊ばれるものだぞ？ 誰かを愛して慈しみ、そしてよりよく共にあろうとするのは善なるものではないか」

「そうですね!? そうですけどね!? いや、マジ勘弁してくださいよ〜」

「……まあ、相対するのなら中々に難敵だがな。特に今回、我らはリュシオンを欠いておるしのお」

「その割には、残念そうに見えないですね」

「当然だとも、ヒツギよ！ リュシオンが更に一步を踏み出し、そして

民草を顧みれるようになった証ではないか！ 祭りの参加者な時ぐらい、家族の願いを優先しても罰は当たらぬだろう！ 否、与えるよ
うな邪神など認めるわけにはいかんのである！」

「……そうですね。なら、私ももうちよつと楽しんだ方がいいですか
ね？」

「もちろんである！ デユナミス聖騎士団が新たな一步を踏み抱いた
ことを示しつつも、しっかりと楽しんで交流せねばならぬぞ？」

「了解です、我らが団長、ストラス・デユラン殿！」

大会開幕編 第二十八話 秘密のお話

イツセーSide

バラキエルさんとの試合も終わって、ちよつと経ってからだ。

俺と九成は、アジュカ様に呼び出されて冥界の施設に到着していた。

「何があつたんだろうな？」

「さてな。ま、悪い事じゃないだろうさ」

九成はそう言うけど、俺はちよつと首を傾げる感じなんだよなあ。アザゼル杯も慣れてきているし、最近はトラブルも少ないけど。月に一回あるかないか程度だし。

……いや、月に一回もトラブルに巻き込まれるのは多いのか。多い時は一か月に二回ぐらい大きめのトラブルに巻き込まれるから、感覚がマヒしているかも。

ああもう！ 平和にエツチな毎日が送りたいだけなのに、なんで毎回毎回大規模トラブルの方がこつちに来るんだよ！

思わず文句を言いたくなるけど、そこは我慢我慢。

「とはいえ、わざわざ俺達だけつてのは気になるな。人数を絞っていると考えるべきなんだろうが」

九成は首を傾げているけど、本当に何なんだろうか。

そう思いながらも、待機するように言われた部屋で待っているとアジュカ様が入ってくる。

「待たせたね、イツセー君、和地君」

そういったアジュカ様は、素早く魔法陣を操作すると映像を映し出す態勢に入っている。

「手っ取り早く本題から入ろう。……ちよつと休憩時間なのでね」

休憩時間？

俺達が首を傾げたその時、映像が映し出される。

『よう、和地にイツセー！ 元気してるか？』

『久しぶりだね、和地君。イツセー君も、最後に見たのが倒れた状態なので心配だったよ』

あ、アザゼル先生にサーゼクス様!?

!? 隔離結界領域に旅立ったはずの二人が、なんで映像に映ってるんだ

いや、そもそもー

「なんでマツサージチェアに座ってるんですか!？」

ー滅茶苦茶ゆったりしているううううう!?

浴衣を着てマツサージチェアに座っている。いったいなんでどうしてそうなった!?

俺が絶叫していると、九成も面食らっていたけどなんかため息をついた。

「そんなものまで持ち込んでたんですか？ まあ、一万年も娯楽無しなんて無理だとは思ってましたけど」

「あ、そういう事か!」

俺は咄嗟に納得した。

そりや、一万年間もトライヘキサと戦い続けなんて無理があるよな！ 心も体も保たねえよ。

食料とかは突っ込んでるだろうし、当然息抜きの道具とかも持ち込んでたのか。

そう納得した俺達だけど、アジュカ様は小さく首を横に振った。

「いや、そもそも物資と情報のやり取りはある程度可能に設計していったんだ。長期戦を考慮するなら兵站は無視できないし、情報のやり取りでより短期間で打倒できる方法も確立できそうなのでね」

な、なるほど。

『……ただし、その辺りは最小限の人数に絞ることは確定でね。すまないが、リアス達にも伝えなくてくれたまえ』

サーゼクス様がリアスにも言わないでって、大変だな。

「つまり、休憩用の設備とかも準備してたんですか?」

俺はそこも気になったので質問する。

と、そこでサーゼクス様もアザゼル先生も苦笑していた。
ん、なんなんだ？

『休憩設備は事前に用意したというよりは、流用だな』

先生がそんなことを言うけど、一体どういう事なんだろうか？

「……まさか、フロonzズ案件ですか？」

「半分正解と言おう。この件に関して彼らにはなるべく伝えないようにしているね」

と、アジユカ様が九成にそう答える。

え、どゆこと？

首を傾げていると、アジユカ様が追加で魔法陣を操作。別の映像が映し出され、そこにタンカーみたいなデカイユニットが見えた。

あ、内部図解も出てきたけど……なんか豪勢だな、オイ。

お風呂やサウナだけでも数種類ずつ。更にプールやフィットネスジム、バツテイングセンターといったスポーツ系の娯楽設備でいい汗も流せる。加えてシアタールームや図書室、自然豊かな中庭といったインドア系の娯楽設備も完備だ。

更に食生活も万端にしているのか、野菜工場や小規模だけど牧場に養殖場まである。これなら新鮮な食事もとりに放題。

なんだこの豪華客船。

『フロonzズの野郎が王の駒が明かされた瞬間に色々動いてたのは知ってるだろ？ その一環の交渉材料として、サンタマリア級艦首ユニットの一つを無償で提供してきたのだよ』

『で、コンセプトが「移動可能かつ長期間無補給で運用できる居住区」だったんでな。ちよちよいと改造して俺らの生活拠点にしたって寸法さ』

サーゼクス様と先生がそう言うけど、ちよちよいとできることなのか……？

「え、そんな簡単にできるの？」

「冥界驚異の技術力すぎるだろ……」

俺もだけど、九成も結構困惑してるな。

「フロンズ・フイーニクス達大王派の実権を握る者。……革新衆と呼ばれ始めている彼らには情報を絞っているが、遅かれ早かれ伝えることにはなる」

と、アジユカ様がそう告げる。

『ユニットの長期間持続を踏まえると、いずれ話すしかないからね。もう少し時間を置く予定だが、これはもう仕方がない』

サーゼクス様も少し残念そうだけど、まあ必要だよなあ。

今、フロンズは大王派の実権を握っている。権限だけならアジユカ様の次ぐらいには高い人だ。いつまでも黙ってるわけにはいかなってわけか。

ちよつと不安になるけど、先生も苦笑い気味で肩をすくめている。

『ま、対龍神クラスを念頭に置いた兵器である ギガンティック・フォートレス G F の相手にはちよつどいいのがトライヘキサだ。……今後を踏まえると、あるに越したことはないんでな』

「ぶ、物騒なことを言わないでくださいよ〜!」

俺は思わず文句を言ったよ。

漸くここまで来れたつてのに、そんなポンポン龍神クラスの脅威が出てきてたまるかよ!

極^{スフィア}晃星だつて九成のおかげでだいぶ何とかなつたんだから。流石に当分あのレベルの事態は起きないでほしい。

……あのレベルじゃなければいくらでも起きそうだけど。

禍の団はまだ結構組織として残ってるし。むしろ新しい象徴もできてるし。ついでに言うと、サウザンドフォースとかもいるし。

それにハーデスや帝釈天もあれだしなあ。どつちかは絶対なんか企んでるだろうしなあ。

……あれ? もしかしてまだまだ世界は大ピンチ?

「そ、それで! 今日俺達を呼んだ理由は、なんなんですか!」

俺は気分を切り替えるように、そう元気よく訪ねた。

と、そこでサーゼクス様がもの凄く真剣な表情になる。

『要件は三つだ。まずはイツセー君に対する、ちよつとしたお願いから解決しよう』

お、俺に対するちよつとしたお願い？

「……これは以前から考えていたことだが、将来的に我々は、人間界でいうCIAやMI6のような組織を作ろうと思っている。裏の世界で連携を取り、不穏分子を動き出す前に探り当て摘発する組織をね」
な、なるほど。

そういう組織も、国家クラスとなるとやっぱり必要だよな。世の中、本当に大変っていうかなんて言うか。

アジユカ様の言葉にそんな感想を持っていると、今度は先生が俺に視線をしっかりと向けた。

『で、だ。俺達としてはイツセー、お前にその長官を務めてほしいと思っっている』

先生がそんなことを言うと、サーゼクス様も頷いていた。

『簡潔に言うのなら、今後世界に害をなすだろう組織を未然に止める、そういった組織の中核になってほしいのだよ』

え、俺が、秘密組織の長あ!?

「……いや、そういうのはカズヒみたいな奴の得意分野では？ イツセーに向いてると思いませんけど」

お、九成良い事言った!

「同感です！ っていうか、そんな重大な組織の長とか、世界の命運を左右する善悪の判断とか、自信なさすぎます!!」

自分で言うのもなんだけど、俺に向いてると思えないんだけど!?

俺も九成もそんな感じだけど、アジユカ様達は違った感想らしい。

「そうだろうか？ サーゼクスのような超絶な力とアザゼル元総督の顔の広さを両立するのなら、君が適任だろう」

え、ええ、マジですか？

アジユカ様の評価に俺が困惑していると、先生も力強く頷いた。

『別にお前ひとりではれとは言わん。ただ、EXEエグゼと呼ばれるだろうその組織は、お前達が結果的に動かしてほしいと思っている』

『君にもやりたいことや叶えたい野望があることは理解している。ただ、同時に脅威となりえる者も数多い。……どうか君の夢の一つに、世界を守る役目を含めてほしい』

サーゼクス様までそんなこと言うけど、マジか。

上級悪魔にもうなれたってだけでもちよつと困惑なのに、下手な最上級悪魔でもなれないような大役を期待される。

いや、自信全くないんだけど!?

「……個人的にはどうかと思いますかね。イツセーのようなタイプは、デユナミス聖騎士団のような立ち位置につけるべきだと思いますし」

と、九成はそうたしなめるように言ってくれる。

おお、持つべきものは友だ!

「……まあ、やるとするならもつと堂々と動く国際連合部隊のエアツてところですかね。ちなみに俺は、NGO団体の顔役ぐらいがいいです」

「ちやつかり自分の要望ねじ込むなよ!」

思わずツツコミ入れたよ。ちやつかりしてるなオイ!

と、とりあえずこれは保留でいいだろう。すぐなれつてことでもないし、そもそも発足させるのもまだ先みたいだし。

「それで、残り二つは何なんですか?」

とりあえず話を変えよう。そこが重要だよな、うん!

和地Side

なんだろう。イツセーに暗部は向いてないと思う今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。

異形は何足の草鞋を履くのが当たり前っぽい感じだけど、もう

ちよつと年功序列を考えてもいい気がする。年季の厚みって大事だと思います。

ま、俺に関しては牽制球は入れたから当分は大丈夫だろう。スポンサーならともかく、そういうのは俺の柄じゃない。

ま、そこは一段落をつけて次の話になるわけだが、サーゼクス様の表情は少し暗いな。

『はつきり言えばこちらは私事だ。……グレイフィアのことだよ』

あ、あゝ。

確かに、なんとなくいかかなり妙なことになっているからな。夫としては気になるだろう。この人愛妻家だし。

フロンズの後援を受ける形で、アザゼル杯に参戦したグレイフィアさん。

旧魔王の血を引く者達を従えて、帝釈天をルールを活かしたとはいえ下したその大活躍は、冥界でも大騒ぎになっている。

ただ同時に、違和感を覚えている識者も多い。リアス先輩もその一人で、多少なりとも付き合いがある俺達も違和感がある。

ただ、いい様にフロンズに使われる人でもないはずなんだがなあ。

「……その件なんですが、一ついいですか？」

俺はそこで思い出したことがあるので、ちよつと話題に出してみる。

「……旧知の仲な女性が、「フロンズとグレイフィアさんの連名で要望しても断りそうな人物に、アザゼル杯の優勝賞品で願いを強制させたのでは」といった趣旨のことを言っていました。……心当たりは？」

緋音さんの推測が必ず当たっているとは言い難い。

ただ、決して頓珍漢でもないと思う。

『……ふむ。少なくとも、彼女にそこまでさせるような願いは託した記憶はない。できればミリキヤスの傍に居てほしいぐらいなんだけどね』

サーゼクス様も心当たりがないか。となると、どこでどうなったのやら。

「うーん。言っちゃなんだけどフロンズって大王派の顔だし、そこにグレイフィアさんが連名で頼めば、悪魔なら断ることってめつたにないんじゃないか？」

イツセーも首を傾げているんだが、魔王様二名の連名で伝えた要望を保留にしているからな。説得力が。

……まあ、その辺もおいおい探っていけばいいだろう。となると、だ。

「……気を取り直しまして。三つ目は何でしょうか？」

『ああ、簡単なことだよ』

と、そこでサーゼクス様は本心から微笑んだ。

『君達が助け出した初代魔王の血を引く二人だが、仲良くしてあげてほしい』

そう、心の底から人のいい微笑みで彼は言い切った。

『一悪魔として魔王の血を引く者がこちら側に来てくれるのはありがたいということもあるが、私は親で兄なのでね。妹とそう変わらない年の少女には、真つ当な青春を送ってほしい』

サーゼクス様はそういうと、俺達に向かってほほ笑んだ。

『そういう意味では、君達は適任といえるだろう。……まあ、別の意味で少し不安だけどね』

「『どういう意味ですか!?!』」

思わずシンクロで突っ込んだよ、俺達は！

「……どう思いますか、リアス姉さん」

「そうね。これはこれで面白い展開だわ」

通達が起きた新しいマッチング。今現在僕らが予定を入れている期間にどんな相手と試合をするかが通達される。

そして僕たちは、とても注目されるだろう試合を痛感する。

？誠の赤龍帝チームVSデユナミスの新生チーム

悪祓の聖銀弾チームVS光掴む殲滅女王チーム

リアス・グレモリーチームVS巨人達の戯れチーム

涙換の救済者チームVS若人の挑戦チーム

僕達オカルト研究部同士の激突もあれば、僕達が神話に名を残すレベルの相手と戦う試合もある。

これがアザゼル杯。国際レーティングゲームというお祭りの側面。

「うふふ。私達も大物と戦うことになりそうですわね」

「まったくね。まさかここまでの大物と、こんな早い時期に相まみえるなんて。……震えるわ……っ」

朱乃さんにそう答えながら、同時にリアス姉さんは注意の色を顔に浮かべる。

何故なら――

「そして、お義姉さまがカズヒと戦うのね。……読めない戦いが起こりそうだわ」

――リアス姉さんと縁深い、二つの銀色が激突する。

この戦い、本当に何が起こるのかが分からなくなりそうだよ……っ
！

大会開幕編 幕間 激戦の予感

和地Side

朝日を感じて、俺は目を覚ます。

そして小さく顔を動かすと、胸元で眠っている春つちを見つけ、微笑んだ。

……ここ数日、俺は春つちとぼっかり寝ている。というより、周囲がもの凄くそういう方向で進めている。

ついで言うと、メリードは当面の間春つちを俺の専属メイドとして重点的に立ち回らせている。この俺用別館をそういう方向にしようとしているが、インガ姉ちゃんやベルナを入れずにしている。

なんとというか、空気読みすぎだろうに。

ただまあ、悪い気はしないから乗っかってるけど。

赤い髪をそつと手ですきなから、俺は寝ている春つちを見て小さく微笑んだ。

ああ、俺と一緒にいて、そんな顔をしてくれるんだな。

男冥利に尽きるってもんだ。いやほんと、もうちよつと寝顔を見させてもらおうかって感じだ。

……ちなみに時計を見て、既に9時ぐらいになっていることに気が付いた。

あれ、他のメンツは？

カズヒSide

「はいそれでは！ カズ君ハーレム親睦会（ただし公衆告白された春奈は除く）を行います！ ……拍手っ！」

「「「「あ、はい」「」」」」

もはやいつも通りのテンションで騒ぐリヴァに、私達はちよつとついでに行けずにまばらな拍手をする。

「もく。そんなんじや、春奈に負けない告白をさせてもらえない……ZO?」

「い、いえ。そんなことされたらあ……死ぬわねえ」

茶目つ気たつぷりなりヴァには悪いけど、その時点で顔真っ赤になっっているリーネスは既に死にそうね。

控えめに言つて、死んでもおかしくないぐらい揺らついているし。いえ本当に大丈夫？

「……こ、告白……試合中に、告白……うおろろろつろろ!？」

鶴羽は鶴羽でバグツているし。落ち着きなさいよ（中身）年長組。

駄目ね。ここは私が動くしかないでしょう。

「あの告白は食らう側もきついででしょうに。というより、たぶんあなたも喰らったらテンパるでしょうに」

私が当然の指摘をすると、ズビシと指が付きつけられる。

「それはそれとして欲しい！ 誰もが見ている中で、自分への愛を向けてくれるつて、なんか最高じゃない?」

う、うくん。

確かにある意味ロマンチックだね。乙女心がときめくシチュエーションと言つてもいいわ。

でも実際にされたらキツイでしょうね。真つ当な感性なら恥ずかしくてパニックになりそうだわ。下手すると逆に分かれる理由になりそう。

つまるところ、ぶっ飛んだ感性を持つ者同士でないと、OKできそ

うにないでしようね。

見えるわ。実際にやられてパニックを起こす、顔を真っ赤にするリヴアの姿が。

よくはっちやけているけれど、リヴアは基本的に計算ずくなもの。いわば計算されたボケをウリにする芸人であり、だからこそ天然が過ぎるとどうしようもない。はつきり言って、常識も良識もわきまえている側だもの。

こんなこと言っているし本音ではあるでしょうけど、言われたら絶対にパニックを起こして顔が真っ赤になるわね。

そんなことを想いながらお茶をすすっていると、何故か周囲から一斉に半目を向けられた。

「……なに？ いえ、私はたぶん受け止める女だとは思わけれど」

反論すると、何故かほぼ全員に盛大な溜息をつかれた。

……もの凄く失礼なことを思われている気がするわね。

そう思っていると、緋音がポンと手を打った。

「あ、されてるんだね？」

「……そうだったかしら？」

私がそう返すと、また盛大にため息をつかれた。

「ぶっちやけて言うがな？ あいつはリアルタイムでお前に愛を謳いすぎだろ？」

ベルナが半目でそんなことを言ってくる。

「同感。自然体でカズヒに愛を謳い続けているし、時々カズヒもやっているよね？」

そこにコンボを入れるようにインガまで言ってくる。

……このイツセーのレベルでやっていると思われているのかしら？

反論しようと思ったけれど、そんな私の両肩を左右から掴むのは鶴羽とリーネス。

「流れるように学園でもいちやついてるしい？ 魔獣事件が終わった直後とか、割と頻繁に騒がしかったじゃない」

「そうねえ。カズヒも平然と受け止めているものねえ？ ……怖いわねえ」

そんなことを言い合いながら、二人は顔を見合わせて身震いする。ただ、普通そういうことをすると青い顔なのに、真つ赤になつてゐる。

ど、どういう身震い？

「……えつと、なんで顔が真つ赤なの？」

首を傾げる緋音に、ベルナとインガが首を横に振りながらぼんぼんと肩を叩く。

「決まってるんだろ。何かの拍子に自分も学園で愛をささやかれるかもしれねえからだよ」

「二人とも駒王学園生だからねえ。そこはほら、私達より危険というか」

あ、なるほど。

私は思わず納得したけれど、確かにそうね。

流石に日本の事情もあるから、まだその辺りは制御していたわね、和地も。

ただ、リアス達の故郷が一夫多妻OKだということもある物ね。いつ八茶けるか分かったものではないわ。

フオローの準備はしましょう。変なやつかみは鎮圧しなければ。

「ヘイボース。たぶん明後日の方向に気遣い向けてますぜえ？」

え、そうなの？

リヴァのその発言に、何故か緋音以外の全員が頷いていた。

ええい、なんか集中砲火がきつい!!!

「うふふ……うふふふ……イツセー♪」

ニコニコ笑顔の朱乃さんに、僕達はちよつと苦笑気味だ。

隣でリアス姉さんがピキピキしているのと対照的だ。軽く寒気を感じている。

きつかけはもちろん、先日の試合だ。イツセー君がバラキエルさんと戦い、そして倒す直前の発現だろう。

国際大会の真つ最中に、嫁に来てくれ宣言だからね。あのレベルの愛の告白は、そういう点で乙女な朱乃さんにとってストライクだろう。

しかも朱乃さんは不倫狙い。なので婚約の必要もなく、ここ最近は完ぺきに妻ムーブだ。リアス姉さんとしては面白くないだろう。

「ふふふ……朱乃？ 私のイツセーにちよつときめきすぎよ？」

「あらあら……リアス？ 不倫は妻が相手にいるから成立するのよ？」

僕らはそつと距離をとる。

というより、これ以上近づくと僕達に盛大な被害が生まれそうだ。具体的には大火力攻撃に巻き込まれる感じの。

ミスターブラックこと我らが最終兵器すら、興味深そうにしているけど距離はきちんと開けている。今のあの二人の喧嘩に巻き込まれれば、火傷では済まないと悟っているらしい。懸命だね。

「いやあく。こちとら恋愛経験零つすけど、恋愛って凄いつすね。痴情のもつれで死人が出るのも納得ですぜ」

「……気を付けて。時々、本当に壮絶な戦いになるから」

目を丸くしているリントさんに、小猫ちゃんがそう指摘する。

うん。この二人は喧嘩する時、時々攻撃が本格的になるからね。僕達全員強くなっているから、結果として攻撃もシャレにならないし。

うん、二人は置いておいてちよつと先を見据えておこう。

「そういうえば、ギヤスパー君に小猫ちゃん。ルーシアちゃんやアニル君は、どんな感じなんだい？」

僕はその辺りを建設的に進めることにした。

僕達がこれから激突する相手。現段階のマッチメイクで最も注目しているのは、若人の挑戦チームだ。

ア Nil 君やルーシアちゃん、各勢力の若者達。平均年齢十五歳程度の、若い者達で構成されるチーム。

ただ、このチームは二つの意味で注目されている。

一つは、メンバーの王がリユシオン・オクトーバー^{キング}だという事。

ルーシアちゃんが珍しく食い下がってお願いしたらしい。……本当に珍しい。

あの子は筋が通ってない真似はあまりしないからね。まして自分のわがままで、しつこく食い下がるようなことはしなかった。それも、チーム構成の骨子から外れている助っ人要請はしない印象がある。

ただ、それもある意味で彼女の成長だろう。兄に甘えたり我が儘を言うことを覚えたのは、あの子にとって成長だと思う。うん、先輩としても仲間としても、ちよつとは温かく見守りたい。

ただ、間違いなくその所為で戦力の平均値は引き上がっている。というより、神クラスが参戦したチームを打倒した戦績は、間違いなくリユシオンさんのものだからね。

そしてもう一つの意味は、それまではリユシオンさんは出張ってこなかったことだ。

基本的には助っ人枠。可能な限りチームの理念に会ったメンバーで挑み、なるべく彼らだけで勝とうとする。そして実際、今のところリユシオンさんが出る必要になった試合は神クラスが出てきた一回のみ。

……僕達もそうだけど、各勢力にも若手が育ってきているという事だろうね。

だからこそ、油断できない。

「うふふ。実は里からも若い子が参加してるらしいの。ギヤスパーは知ってた？」

「え、そうだったの!？」

ヴァレリーさんがギヤスパー君を驚かす情報を伝えているけど、本

当に油断ができない。

子供は思い込みが激しい時もあるけど、時として先入観がない時もある。だからこそ、彼らは時として喧嘩をしながらも上手くまとまっ
ているらしい。

そういう意味では和平の象徴になりそうなチームだ。基本的には
エンジン勢だけど、腕利きも多いし油断できない。

「さて、僕達もすっかり鍛えておかないとね」

「……同感です。負ける気は、ありません」

小猫ちゃんと言葉を交わし合いながら、僕達も戦意を滾らせる。

さあ、楽しませてもらうからね……二人とも！

「もおいしいわ！ 表に出なさい、朱乃！」

「いいですわ！ 来なさい、リアスツ！」

……その前に、そろそろ二人を止めるとしようかな？

イツセーSide

「うおおおおお！ この、こなくそ！」

「おーい、リロード忘れてるぞー」

俺はゲームセンターで、アルティーンとゾンビゲーをプレイしている。

アルティーンは自我をしつかり確立させてから日が浅い。そういう意味だと、オーフィスに近い子供っぽいところがある。

オーフィスが純真無垢なら、アルティーンは天真爛漫って感じだろうか。元気いっぱいいろいろなことを試したがっついて、まあ責任もって俺が色々と紹介しています。

なんていうか、ここまで毎日を楽しめるってのも才能だよなあ。俺も見習おう。

それはともかく、俺達は頑張ってノーミスで全クリに成功した。

ま、俺達って戦い慣れしているからな。反応速度とかも凄まじくなっているし、動体視力だつて人間離れだ。リロードのタイミングさえしつかりしてれば、民間人がプレイする前提のゲームはノーミスクリアも狙えるだろう。このゲーム、どこを狙っているか分かるようにできているタイプだったし。

「面白かったー！ ねえねえ、他にもいろんなゲームがあるんだよね、こー！」

「おう！ ゲームセンターはデカイ筐体が使ええるからな。家庭用とは違った味があるぜ！」

そんな感じで、俺はアルティーンと次のゲームを探そうとする。

そんな時、ボックス型になっているタイプのゲーム筐体から、二人組が出てきた。

「……兄さん兄さん、次はあれやりましょうー！」

「分かった分かった。……おや？」

その二人組が俺達に気づいて、俺達も気づいてちよつと面食らう。はしやいでいる妹に引っ張られる兄。そんな二人組だった。

問題は、その妹の方。あと兄の方もよく知っている。

っていうか、ルーシアにリュシオンさんじゃねえか!?

そう思っていると、後ろの方から声が聞こえてくる。

「あ、あっちも終わったみたいよ?」

「そうか……って、イツセー先輩?」

俺達に反応するその声に振り向くと、そこにはアニルが年上の女の人を連れていた。

「……アニル、お前彼女が!」

「戦慄しないでください。あと誤解でさあ」

俺が衝撃を受けているけど、アニルの言い分だと誤解らしい。

ってことは、どちら様――

「そういう紹介してなかったツスね。……俺の姉貴ですぜ」

――なにい?」

俺がちよつと困惑していると、その人はにっこりと微笑んでいる。

「いつも弟がお世話になっており、宗家の兄妹がご迷惑をおかけしました。……ペンドラゴン分家に連なる、メローナ・ペンドラゴンです」

「そんな美人の姉貴がいたなんて!」

「本っ当にブレないっすね、先輩」

悪かったな、おい!!

第三章 戦愛白熱編

戦愛白熱編 第一話 新たなる戦士たち（前編）

和地Side

俺は呼吸を整えながら、ランニングを介している。

たかがランニングと思うなかれ。星辰奏者のランニングは、一般人で言うドライブに相当する。つまるところ、車レベルの速さで走れるわけだ。

まして俺は、墮天使化までしているわけなんだな。必然としてその走行速度は、高速道路で走る車のそれと比べていい。神聖存在にまであっているから、もはや普通に時速100kmを超えている。

とりあえず、そういった強化された身体能力に慣れておくに越したことはない。基礎体力は維持するに越したことはないし、毎日基礎トレをきちんとする蓄積は、それだけで力になる。

できる範囲内ですべきことをきちんとやる。これが意外と難しいが、こなすことができれば相応の手合いにはなれるだろう。だからこそ、きちんとやり続ける。

そしてとりあえずいつもの時間をこなし、俺はランニングを終了。軽くストレッチをしてから汗を流そうと風呂に向かってしていると、きやいきやいと声が聞こえてきた。

ん？ なんなんだ？

「うふふふ。イツセーつたら、本当に……もう♪」

「ふおおおおおお！ 和地バりにやっていますの。やっていますのよー！」

「あ、あわわ。いつ見てもドキドキするじゃんか」

……朱乃さんを筆頭に、ヒマリやヒツギまでいる中で録画されたイツセーの試合を見て楽しんでいる女性陣だ。

よし、女子の時間は邪魔しないでおこう。

俺は流れるようにそのまま移動すると、そのまま風呂に入ることにした。

イツセーSide

俺はシャルロットと一緒に、ちよつとした外出をしていた。

……デート扱いされているから、間違いなく帰ってから忙しくなるな。というより、そろそろ皆ともデートに行かないと。

「それで、今日は人に会うんだったね。それも、アニル君のお姉さんと」

「ああ、ちよつと前に会ったんだけど、個人的に話があるんだってさ」とはいえ、一人で女の人と会いに行くとなんか言われそうだからな。そこで相棒であるシャルロットに頼むことにしたわけだ。

アニルの姉のメローナ・ペンドラゴンさん。どうも俺と話がしたいみたいだけど、リアスの情報が欲しいとかだろうか。

いくら試合とはいえリアスを売る気はない。というより、アザゼル杯の件もあるからあまりそのあたりの情報は出していないところもある。まあ、アニルのお姉さんならそんなことをするというイメージもないけど。

……ま、その辺りのフォローもシャルロットに頼みたいけどな。俺はその、腹芸とか苦手だし。

「情報戦とか、そういうの苦手だから頼んだぜ？」

「アサシンのサーヴァントはそこにも向いてますけど、私も腹芸は苦手ですよ？」

でも俺よりは大丈夫だと思うから、そこは任せるよ。俺はもうちよつと真つ直ぐにぶつかる方で。

と、合流箇所指定された喫茶店で、メローナさんがいた。

気づいて小さく手を振ってくれたので、俺も手を振り返してそっちらに行く。

「すいません。お待たせしました？」

「あ、いいのいいの。時間より早いから気にしないで」

そう朗らかにいうメローナさんは、店員さんを呼んでメニューを頼み始めている。

俺とシャルロットはコーヒーを頼んで、メローナさんは小さく苦笑した。

「……いつもアニルがお世話になってます。あと、宗家の兄妹がご迷惑をおかけしました」

「あ、いえいえ！ アニルにはむしろ世話になっているぐらいです。アーサーさんは苦手だけど、ルフエイは俺の大事な契約者だから大丈夫っす！」

素直にそう答えると、メローナさんはちよつときよとんとしながら小さく笑った。

「ふふ。聞いていた通りの誠実な人で良かったわ」

そういつてから、メローナさんはちよつと居住まいを直すと――

「今日は、アーサー・ペンドラゴンについての見解を聞きたかったの。……あの男、手段と目的がこんがらがっている節があるもの」

――俺はその時、アーサーのことを思い出す。

確か、恋人関連も理由の一つだったな。メイドのエレインさんとの関係がばれると、家柄的な理由で引き離されそうって話だったっけ。

……あれ、もしかしてとつくの昔にばれてる？

「……ちなみにどんなこんがらがりだど？」

「持つていくものを取り違えているのが特にね。いえ、家宝持ちだし

「テロでもすれば、廃嫡してくれると思ったのかしら？」
あ、これバレてるわ。

カズヒSide

「……つぶしっ！」

と、隣で小さくくしゃみの音が聞こえた。

「どうかしたのかしら？　噂話をされるとくしゃみが出るそうだけ
ど」

「……ふむ、出来れば優れた剣士として噂されたいですね」

と、私の隣でくしゃみをしたアーサーが首を傾げる。

自分でも何が何だかという取り合わせだけれど、たいしたことでは
ない。

ここは教会関係者の星辰体研究設備。私は基本的に教会暗部だっ
たこともあり、時折顔を出したりはする。

今回は新型技術のテストターが募集されており、その一環で来たわけ
だ。

そしたら偶然こいつに出会った。そして今は待合室で待機中だ。

「……もしかして、星辰奏者エスベラントにでもなるつもりなの？　意外ね」

まあ、ここに来る理由なんて星辰体関連でなければおかしいのだけ
れど。

もしかすると敵情視察も兼ねているかもしれないけれど、わざわざ
研究施設に出向くタイプでもないだろうに。

「言わんとすることは分かります。今までの私は、この剣の才覚とそ

れによってコールブランドの性能を引き出すことを主眼としていたもので」

そう返すアーサーは、ただ表情を変えていた。

「……ただ、先日のことがありましたね。私も少し視点を変えるべきかと思ひまして」

……ああ、なるほど。

「そういえば、先日の試合で貴方だけ負けてたわね。……ああ、なるほど」

「ええ、流石にあれは堪えました。そういう意味では迷走かもしれないですね」

私が聞くと素直にそういうあたり、思うところはあったみたいね。

初戦でいきなり馬鹿の群れと阿保な戦い方して間抜けな負け方をしていたけれど、それ以外においてヴァーリチームは連戦連勝。間違いなくハイスペックな集団であることを証明している。

ただし、アーサーだけが一試合だけ撃破された。その件があるのだろうか。

試合内容はダイス・フィギュア。かつてリアス達がサイラオーグ・バアルと競った特殊ルール。

そこでアーサーは相手の騎士ナイトと一騎打ちになり、敗北。それ以外はすべてヴァーリチームの勝利であり、まあ凹みたくもなるでしょう。

しかも負け方が酷い。

「……まあ凹みたくもなるでしょうね。聖王剣再現能力の星辰奏者にやられるとか……プライドが地に落ちているわね」

「ええ、屈辱的敗北です」

いろんな意味で死にたくなる敗北よね。

まあ、神滅具の再現能力が星辰光で出てきているもの。当然だけど、聖王剣の再現を星辰光で出来てもおかしくない。当然と言えば当然ね。

だが星辰光の再現能力には限度がある。魔星ではなく星辰奏者だとするなら尚更だ。流石に現物の聖王剣コールブランドと同格は難しいでしょう。

……つまり、あらゆる意味で下位互換の相手に星辰奏者というアドバンテージで負けたわけだ。流石にシヨックは受けるでしょう。「元々、黒歌からも誘いはかけられていたのですよ。ただ私としては、ヴァーリのように持った力を研ぎ澄ましたかったのですがね」「……家宝を持ち逃げしてそれっていうのは、個人的にどうかと思うけれど」

まあ、個人差があるからこの程度にしておきましょうか。

「ま、ここ最近とんでもない星辰奏者が多く出ているものね」

いえ本当に、最近はとんでもないのが出てきているから……困るわね。

祐斗Side

「中々に厄介なことになっているね」

僕は私的に、気になった番組を確認して内心で警戒する。

アザゼル杯で出てきた星辰奏者特集だけど、中々に興味深い。

ユーピ・ナーディル・モデウの神滅具再現能力。アーサー・ペンドラゴンを破った聖王剣再現能力。そして、更に恐るべきは――

『貫かれるがいい……弓張月ッ！』

―その宝具によって敵を討つ、一人の星辰奏者。

……間違いない。あれは源為朝。その宝具だ。

星辰奏者として大勝利を収めたこの力。恐るべしというほかない。

そう、あの星は間違はなく英霊・源為朝再現能力・弓兵型。

クラスカードと同等の英霊再現を、自らの星でやってのける。

星辰奏者も世界的に広まっている。これは更に注目されそうだ。

……この大会、今後もかなり荒れそうだね……っ！

戦愛白熱編 第二話 新たなる戦士たち（中編）

カズヒSide

暇を持て余して顔見知りにも会ったので、一緒にお茶をすることになった。

……まあ、こいつらも処罰は受けさせたしそれぐらいはいいでしょう。むしろ半分ぐらい監視する気概でいくべきでしょうね。

「で、星辰奏者になりたくて来たわけ？ それともただ研究の為？」
「両方ですね。ほら、悪魔側はまだ適性を持つ志願者全員がなれたわけではないでしょう？」
なるほどね。

アーサーはおそらく、敵情視察も兼ねているのでしょう。今後星辰奏者になる悪魔の中で、アザゼル杯に参加する悪魔の中でどこまで出てくるか。そういう、化ける可能性を考慮している。

星辰奏者はその点、かなり面倒なところもあるからね。
「星辰感応奏者は文字通り、星辰体と感応して奏でる者。その性質上、駒価値が変動する可能性は薄いしね」

つまりところ、星辰奏者の才能がずば抜けているだけの人間を転生させた場合、準神滅具級の星辰光アステリズムを持っていても一駒で転生できる可能性がある。

アザゼル杯において駒価値がだいぶ緩く設定されている場合でも、それは変わらない。実際、件の星辰奏者はアザゼル杯では駒価値一だったので歩兵ポーンで登録されていた。

そしてそれは、かなり駒価値が緩くなっているアザゼル杯の騎士ナイトなら、もつと確実だ。つまりアーサーは星辰奏者になっても、騎士枠一つで参加できる。

「……神クラスが適性を持っていれば、このタイミングにこそぞばかりになるでしょうね」

「それはそれで面白いですが、強い存在であつても星辰奏者になれるわけではないのが難点ですね」

ま、その辺りが痛し痒しだ。

星辰奏者の適性は、戦士になりうる存在かどうかで決まるわけではない。星辰奏者になれるからって、必ずしもなりたいわけではない。なることでそれなりの責任や注目が齎される以上、嫌がる者だって多いものだ。

そしてなりたいからと言ってなれるわけでもない。なれたからと言って、喜べる力が必ずしも得られるわけではない。

出力格差が三段階あると、使った後が酷いことになるものね。その情報だつてだいぶ広まっているだろうし、博打嫌いは避けたがるでしょう。私みたいな特例メンタルは少数派なのだから、尚更だわ。

「とはいえ、貴方は適性があるのならやるのでしょうか？」

「そうですね。今のままではと思つてしまつていますし……思うところはあるですよ」

そう返すアーサーは、小さく微笑んだ。

「ヴァスコ・ストラード殿。あの一瞬の煌きは、剣士達の憧れでしょう」

そう、夢見る乙女みたいな雰囲気^{ネオ・ディバインクルセイダース}で納得できる言葉が返された。

ストラード殿下。今はまだ、アザゼル杯には参加していない。

けれど、それを多くの者に望まれているのは事実。スカウトしたがつている者も数多くいるでしょうし、教会としても参加して入ったチームを勝ち上がらせてほしいでしょう。こと、^{ネオ・ディバインクルセイダース}神聖糾弾同盟案件で大活躍だったし。

「真正正銘の全盛期、更に星辰奏者としての強化が上乘せされた状態一瞬とはいえ、私はそれを味わいたい」

アーサーはららんと燃える渴望を覗かせながら、小さく微笑む。

「だからこそ、私も同じ領域に到達したいのですよ。であるのなら、一切の気後れなくその刃は振るわれるでしょうからね」

「戦闘狂も大変ね」

私はそう返すと、軽く肩をすくめる。

さて、猊下はこのまま不参加を決め込むのだろうか。

それとも、誰かが猊下を口説き落とすのだろうか。

もし口説き落とす者が出るのならば。

……私も、本気の競い合いを願いたくなるわね。

星によって一瞬だけとはいえ蘇る、かつての極点。教会の生ける伝

説の戦士。あまねく教会の戦士達を感動させるだろう、あの一閃。

かつて私は、間違いなくそこに到達しなかった。

その一閃をもってようやく倒せた男。そいつに対し、私は二人がかりで後れを取った。

今、私はその域にどこまで近づけたのか。

その域に近づけなければ守れない者は数多い。そして私は、近づいて守れるようになることを誓っている。

だからこそ――

「そうね。その光景だけは私も見てみたいものだわ」

――私が振るわれる側でもいいと、そう思いながら返しておいた。

イツセーSide

いろんなことを話しながら、結構時間が経ってるな。

「ルフェイの方は落ち着いているようね。……正直、そのままかどわかしてくれている方がありがたいわ」

「まあ、一族の者としては頭が痛くなることをしていましたからね」

苦笑しているメローナさんに、シャルロットも苦笑している。

「……特にアーサー、色々とテロつてたからなあ。」

最近はずびがちよくちよく目を光らせているから、だいぶ落ち着いているけどな。なんというか、自由気ままな連中だよ。

俺もどう反応したらいいかちよつと困つてると、メローナさんは小さく息を吐く。

「まあ、人づての情報はここまででいいわね。あとは剣士として、剣で語りますか」

その言葉に、俺はちよつと面食らった。

「……アザゼル杯に参加するんですか?」

「ノミネートはしていたわ。仕事の都合でまだ参加はしてないけどね」

な、なるほど。

アザゼル杯は普通のレーティングゲームと違い、チームメンバーを入れ替えることが可能だ。もちろん複数のチームに名義貸しすることはできないけど、チームに登録されたメンバーを交換することはできる。

例えば、最初の試合で騎士だったメンバーを戦車にするってこともできる。その為リザーブメンバーが用意されることもあるわけだ。

そして同時に、俺は記憶を洗い出す。

ヴァーリチームの試合予定もある程度は把握している。そして、確実に決定している試合で教会関係者が出てくるとなると、だ。

「……聖都守護連隊。その一人でしたか」

シャルロットが真つ先に気づいて、メローナさんは小さく頷いた。

「因みに最年少ね。あそこ、基本的にベテランが配属されるから」

「そうだったんですか!」

すげえええええ!

俺も詳しくは知らないけど、聖都守護連隊つてバチカンの警護を担当する異能の部隊だったはずだ。確か、去年の夏に話を聞いたよ。

アニルもできるやつだけど、お姉さんもマジすげえ!

本家のアーサーやルフエイも凄いし、ペンドラゴン家、すげえ!

俺が割と感心していると、メローナさんはちよつと照れ臭そうにしながらも自慢げな笑みを浮かべている。

「ま、そういうわけだから―」

「―ちよつと真剣に剣で語る気なのよね♪」

Other side

「……まったく、胃が痛い事態がこうも早く出てくるとはな」

「ま、同情はしてやるぞ？　ハーデスも相応に札を持っておるようだしのうち？」

「同情するなら悪目立ちは避けてくれ、幸香」

「よく言うわ、フロンズ。お主も相当の札を切っているではないか？」

「おやおや。我々はノアをもってしても勝率は7割程度だぞ？」

「公式ルールの方じゃ。そろそろ手回しが始まるのじやろうて」

「といつてもな。アジュカ様達の監修は入っているし、えこひいきをさせないよう厳命もしているが？」

「そんな次元でもなかりうに。……とはいえ、ハーデスは今後どう動くのかのお？」

「ラツイーカ・レヴィアタンがデコイなのは間違いない。問題は、動かざるを得ないデコイに人手を割いて、本命を悟れるとも思えん点だ」「主はどう思っている？　いくつか推測はしておるのだろうか？」

「……あり得る可能性としては、アザゼル杯で何人かをスカウトする、というところだろう」

「なるほど。全員もれなく和elmanサーなわけでもなからうし、そういった手合いを探す手段としていくつかチームを送ったと」

「ラツイーカも誘蛾灯を兼ねているのだろう。もつとも、あからさまに警戒を促しているのだからそこによるようでは有象無象止まりだろうがね？」

「……ふむ、これは思ったより戦の始まる時は早そうじゃのお？」

「そうだな。色々懸念点も多いことも踏まえて、だ」

「……例の件、裏が取れたのか？」

「ああ。かつて英雄派が誘拐・洗脳・投入し、後継私掠船団君達の情報提供迷惑料で死を免れた、生きて捕縛された英雄派のメンバー。その何割かがハーデスによっている」

「……なるほどな。現政権の対応では納得がゆかぬと」

「人間、だからな。人類社会の法律ならば、少年少女であることを踏まえようと、一年経たずに国際競技大会参加は緩すぎる……と感じるだろう」

「異文化コミュニケーションは理解と寛容が肝心。だが、寛容になれるわけがない相手を理解せよと言われても無理があるか」

「何人かはハーデスの息がかかったチームに参加し、既に大会で動いている。……ラツイーカのチームにも数人が確認された」

「……ふむ。妾としては迷惑料程度でしかなかったがな。憎悪はモチベーションとしては強力であるうえ、その英雄派によって至る方法は確立された」

「更に英雄派はここ最近、異能関係者の人間を中心に人気が高まっている。これは激突すると考えるべきだろう」

「……やれやれ。こんなことが起きるのなら、ザイア共の価値観もある意味で道理なののお？」

戦愛白熱編 第三話 新たなる戦士たち（後編）

祐斗Side

「まったく、朱乃ったら……私のイツセーを独占しすぎだわっ」
リアス姉さんが少しピリピリしているけど、それでもきちんと仕事はしている。

その点は、今日の補佐を担当している僕としても気が楽だね。イツセー君関連の女性問題は、ちよつと距離を置いた方が安全だし。

……物理的に危険だからね。下手をすると流れ弾を喰らって大怪我を負いかねない。オカ研の女子は基本的に、男子に負けず劣らず武闘派だし。

不幸中の幸いは、あまりに酷くなるようならカズヒが止めに入る点だ。あの鋼の女傑はこういう時もブレないから、とつても頼りになる。

まあ、それはともかくだ。

「……祐斗。どう思うかしら？」

「そうですね。やはり要警戒かと」

僕達が確認していたのは、これまでのアザゼル杯で行われた、エスベラント星辰奏者が関わる試合の数々。

元々、星辰奏者の本質たるアステリズム星辰光は千差万別。人工的に作られた魔星でもない限り、同じ星は存在しない。そしてその性質上、プラネテス人造惑星でもない限りは駒価値も変動はまずない。

ゆえに、星辰奏者の勝ち爆増し、多くの星辰奏者がこの大会にも参戦している。

千差万別。それは分かっている。分かっている……つもりだった。

「……なんでもありませんよね」

「そうね。ここまで多種多様だとは思わなかったわ」

僕のリアス姉さんも、そう言うほかない。

神器の再現。英霊の再現。更に伝説の武器を再現することもあり得る。これでは他にどんな異能が出てくるか、分かったものではない。

分かってはいた。星辰光の極限……いや、限界突破ともいえる極^{スファイア}晃星。その文字通り次元違いの凄まじさすら体感しているのだから。

だが、この特性は千差万別にもほどがある。戦慄すら走ると言っていない。

……これは、僕達もうかうかしてられないね。

大会で活躍する星辰奏者。あまりにも多種多様で、信じられないような力すら発現する星辰光。

星々の瞬きといえるその光景を見たことで、自らもそれを欲する者は多いだろう。きっと、星辰奏者になることを希望する者は大幅に増えていく。

これから、異形の時代は大きく動くかもしれないね……っ

和地 Side

風呂上がりに戻ってみると、まだやっていた。

「もうイツセーたら♪ あんなどころで言ってくれるなんて……うふふ♪」

「羨ましいのですの！ 今度の試合では逆プロポーズで迫りますわよ、ヒツギー！」

「ちよ、ちよっとまって!?! こ、心の準備が一年ぐらい!?!」

……とりあえず、ヒツギの援護をした方がいいだろうな。
なんだかんだで勢い任せで引つ張られそうだが、とりあえずここで押し切られたりするのはいかかわいそうな気がする。

「はいはいその辺にしておきましょうねー?」

仕方ないのでそう言いながら場に入ると、視界には繰り返し流される、つい先日の試合の映像が。

「っていうか朱乃さん? もうちよっと恥ずかしがってもいいと思いますよ?」

その映像はイツセーがバラキエルさんを倒す直前。つまるところ、嫁に来てくれ宣言のあたりだ。

まあはたから見ればとてもテンションが上がりそうだが、当事者だと恥ずかしくて死ぬんじゃないだろうか。

そんな指摘だったけど、帰ってきたのは三人がかりでの半目だった。

「「……え?」」

もの凄くシンクロされた。今までの空気が全部吹き飛ぶぐらいのシンクロぶりだった。

まるでクジラが空を飛ぶんだと言われ、実際に飛んでいるクジラを見せつけられているかのようだ。空前絶後をその目に焼き付けてしまったかの如くだ。

あまりの流れに、正直俺は一步後ろに下がる。

そしてため息をついたヒツギが、ポンと俺の肩に手を置いた。

「……人のこと、いえないじゃんか」

五秒ほど、俺は自分を思い返す。

……まあ、確かに。

「実はあの後、もう一発張り倒された」

「ですよね」

うん、ヒツギの発言が真理かもしれない。

嘘なんて何一つない本音だけど、言われる側は恥ずかしいんだろう。後悔は何一つないけれど、反省はした方がいいのかもしれない。

でもなあ。心の底からの意見だしなあ。むしろあの場で言った方

がいい気がするしなあ。

あんなところであんなことを言われたら、あんな返しをするしかないだろう。衆人環視の場で言われた以上、言い返すのも衆人環視にするべきだ。周囲の認識が関わっている以上、きちんと周囲が認識できるようにするのもありだしなあ。

「あらあら。あんな素敵なお話を言われたのに、照れ隠しにしても酷いですわ」

「気にすることありませんの！ もっと、もっと勢いよくやるぐらいでいいですよ！」

ただ、朱乃さんとヒマリがダブルで言っているけど、それはそれでどうなのか言われそうだ。

ポニーテールが二人がかりで襲い掛かる。

うくん。たぶん状況次第でやっちゃうだろうけど、俺はどうもこの辺を問題視されているしな。勢いに吞まれるのもあれかもしれない。

……それ以前に、この流れだと公開告白タイムに持ち込まれそうでヒツギが顔真っ赤にしているし。

「とりあえず落ち着こうか。……それに、あまりはしゃいでばかりでもいられないし」

というわけで、話を変えよう。

「具体的にはハーデスとか。絶対何か企んでるだろ、あれ」

「……そうですわね」

よし、話を逸らせた。

ありがとうハーデス。もの凄い癩だが、今ここで心の中でお礼を言っておこう。

……まあ実際、それ以外にも警戒対象はいるんだろうがな。

アザゼル Side

交代制で少しずつトライヘキサを削りながら、俺達は一旦小休止のついでに情報の受け取りを行っていた。

『……というわけだ。グレイフィア・ルキフグスは圧倒的な勝利を誇っている。夫としては鼻が高いか?』

「そうだね。とはいえ、今の流れだと不安も覚えるがね」

今回はサーゼクスとアジユカが、グレイフィアの現状について話し合っているのが主題だがな。

「しかし、どういう事なのでしょう? こういう言い方はあれですが、フロonz・フィーニクスと彼女が結託すれば大抵の要求は通りますよね?」

ミカエルもそこは気にしているが、本当にな。

的確なかじ取りで上役を納得させていることもあり、大王派の実権をほぼ握っているフロonz。

今や数少ない純血の魔王クラスであり、かつてはレヴィアタン候補でもあったグレイフィア。

民衆の後押しも含めりや、大王派と魔王派の2番手同士が結託している状態だ。アザゼル杯の優勝賞品を使うまでもなく、優勝賞品の制限である「世界に混沌を齎さない」にかすらない願いは要望できる。優勝する必要もないはずだ。

グレイフィアだってそれぐらいは分かるだろうし、フロonzなら尚更。むしろフロonzならリスク管理もあり、わざわざ優勝という手段で博打を打つわけがねえ。

にも関わらず、大御所まで連れて参戦とか、何を考えてやがる?

「……しかし、グレイフィアもだが暗躍してるやつが多いってのも不安だな。ハーデスのシンパを堂々と名乗るレヴィアタンの末裔までいるんだろ?」

そこばかりってわけにもいかねえのが、やっぱり難点なんだよな。

『そうですね。ラツィイカ・レヴィアタン。あの存在により、冥界も揺

れている点が多いです』

アジユカも困り顔だが、まったくだ。

ハーデスの爺が冥界を敵に回したとしても、ラツイーカがいる所為で世論の一割ぐらいはハーデスにつきかねない。そういうヤバい状況になりやがった。

あの爺のことだ。既に何らかの寝返り工作はしているかもしれない。そうなりや奴が動いた場合、冥界は対外戦争じゃなく内乱に陥りかねない。

そして、あの爺がここまで見え透いた真似をしているのが不安を誘う。

賭けてもいい。あの爺は他に切り札を持っている。出なけりや、こんな早すぎるタイミングでこんなでかい札を切ったりはしねえ。

……懸念事項はラツイーカか。

奴がどんなことを考えているかで、難易度が数段変わるぞ畜生が……っ

Other side

『それで、話をつけることはできたのか?』

「ええ、数人程度ですが。……素晴らしい新時代のエインヘリヤルになつてくれそうです」

『……ふん。まあよい。儂は英^{サーヴァント}霊も魔星^{ブラネテス}も好かんが、お主との協力体制がある故、お主の手勢に限っては許そう』

「承知しました。まあ、機嫌を損ねすぎないよう気を付けます」

「……おや、そちらはもう終わりですか?」

『ラツイーカか』

「はい。一通りの仕事と鍛錬はこなしましたので」

『フアフアフア。言いぐさに比べれば真面目に働いておるではないか？』

「そんなことはありません。私はボロ儲けしかしたくないので、報酬未満の仕事しかいたしませんとも」

「それはまた。でも報酬はその程度でいいのかしら？」

「どうやら勘違いを成されているようですね」

「と、いうと？」

「私はボロ儲けがしたいのです。……20の努力で80の対価を得たいのです。100の対価のために100の努力がしたいのですが、10の対価で我慢して10の努力で済ませたいのではないのです」

「……変わってるって言われない？」

「それが何か？ 私は労力の数倍ほど対価が貰えるのなら、その為の努力はいくらでもします。……努力に見合わない大きな対価が得たいのですよ」

「……ハーデス様、こいつ味方にしていいんですか？」

『構わぬ。少なくとも、アジュカ・ベルゼブ達三大勢力ではこやつが目論見は叶えられんだろうしな。魔王血族を引き込めるだけで冥界に楔を打ち込めるのなら、これぐらいの手間賃は安い物よ』

「そして我が労力は更にその数分の一。……ふふふ、努力の甲斐がありますねえ」

戦愛白熱編 第四話 テスト明けの日常

和地 Side

大会はまだまだ予選が続くが、俺達は学生でもある。

そんなわけで、ただ今中間テストをこなした直後。ほっと一息つきながら、まったりとした時間を過ごしている。

ふつつふ。日々毎日勉強をしている俺にとって、無理のない偏差値の高校で赤点をとるなど無理な話。既に自己採点ですべからく高得点を確立しているので、こうしてのんびりとした空気でまったりと過ごせるのだ。

ちなみに、カズヒは凄く苦勞していたので打ち上げに行っている。これまたリーネス採点で補習回避は確実視されているので、かなりはしゃいでいる。

カズヒ Side

「よっし！ 四人で歌う歌をつるべ打ちで入れるわ！ 歌いまくるわ

よー！」

「「おおーっ！」「」

なんだろう。もしかするとちよつと見応えのある姿を見逃したかもしれない。

ま、気の置けない親友達との時間は大事だろう。俺はその辺り、ちゃんと気を使える男でいたい。あと母親のプライベートをずけずけ踏み荒らすのもアレだろう。

それにまあ、一人の時間つてのも大事だからな。

ふふふ。ちよつとシャレた喫茶店で、こうして一人で優雅なティータイム。なんだろう、意識高い系がこういうところで仕事をしたくなる気持ちも分かりソうだ。

だが、俺はそんな自己アピールはしない。しつかり全てを終えているからこそその優雅な時間を楽しませてもらうとしよう。

そう思いながら、紅茶のお代わりを注文しようとした時だった。

「……へえ、こんなところにしゃれた喫茶店がある物ね」

「そうだね。うん、いい香りだし期待できそうかな？」

と、入ってくるのは見知った顔。

「……あ」

思わず顔を見合わせていると、今度は外の方で振り返る気配が。

「……あ」

そして更に顔を見合わせると、外の奴が指さした。

「お前、ついに姉妹丼か!？」

「死にたくなければ我が身を振り返れコラ」

とりあえずイツセーに釘を刺しておいて、俺はため息をついてから軽く振り返る。

「奇遇だな、シルファにヴィーナ」

これは、一人の時間は終了っぽいな。

イツセーSide

なんとなく一人で散歩をしてたら、九成がザンブレイブの二人と一緒にいる所を見つけた。しまった。

「お前モテるから、てつきり今度はそういう事かと思ったぜ」

「……黒歌にモーシヨンかけられているお前が姉妹丼とかいうな。お前の方がよっぽど狙えるだろうが」

九成が鋭い視線で俺を睨んでくるけど、悪かったな畜生。

コーヒーを飲みながら俺がその視線を交わしていると、コーヒーを同じように飲んでいたヴィーナが首を傾げる。

「姉妹どん？ 親子丼のお仲間かな？」

「まあそうだな。似たようなもんだな」

俺はそういうけど、直後に九成から肘うちが叩き込まれる。

咄嗟にガードするけど、割と鋭い本気気味の一撃だなオイ！

「なんだよ！ 間違ったこと言ってねえだろ!？」

「間違ってるからな!？」 意味が違うぞ!!」

え、そうなの？

「……ふむ、肉も絞めるタイミングで味が変わるといけど、そういうのを楽しむ料理が日本にはあるのね」

あれ？ シルファがなんか変なことを……ハッ!?

俺はぎこちなく九成の方を向くと、露骨に顔を背けられた。

「無自覚セクハラの責任は自分でとれ」

そ、そんな!?

いや頑張れ！ 俺は女子の着替えを覗き続けてきた男。今更颯感を
を買う程度、なんのそのだ！

「……すいません下世話な話です！ す、スラング的な!？」

「え？ ……ん〜……どんなスラング?」

ヴィーナの視線が痛い！ 悪意がないからこそ、俺の心が痛い！

「……お、親子丼は鶏肉親と鶏卵子を同時に食べる料理だろ？ そ、そこから
転じたスラングがあつて、姉妹丼つてのはそのスラングからさらに
転じたスラングで……」

うおおおお！ 恥ずかしい、これは恥ずかしい！

芸人が滑った芸の笑う点を説明するのつてこんな感じなんだろう
か。いや、バレた後の冷たい視線を考えると、もつときつかもし
れない。

まずい、ここ一年近くひきつけと戦つて築き上げてきた、わずかな
がらの信頼がここから崩れるかもしれない。

シャルロットになんていえばいいんだ。畜生、俺の周りの女の子つ
て、どんどんエロエロに理解を示してくるから……感覚がマヒしてい
たかもしれない。うかつだった。

え、ええい！ こうなれば気合を――

「……ああ、そういう事」

――入れようとしたその時、シルファの方が何かに気づいたらしい。
「つまり、私とお姉ちゃんが和地のお手付きになってしまったのかと
邪推したわけね?」

おっしやる通りでございます。

「なんかごめんなさい!」

とりあえず俺は勢い良く頭を下げる。

と、なんか急に慌てだす雰囲気だ。

「え……え、ええええ!?! そ……ちよつと兵藤君!?!」

あ、ヴィーナの方が顔真っ赤になってるな、これ。

九成は九成で、隣でため息をついてるし。

いや申し訳ない。エロエロで申し訳ない。スケベな発想が真っ先に出て申し訳ない。

「男と女は基本的に、別の生き物なんだからな？ そんなだからお前、女子から鬨蹙を買ってたんだろうが」

いや、なんか本当にごめんなさい。

「……というより、これでよくモテてるわね」

「奇人変人でもなければ只の人間にはモテないけどな。リアス先輩達は……ほら、文字通り人じゃないし」

シルファに九成がそう言うけど、悪かったな。

ただ、俺の悪魔としてのお得意様って変人が多いからな。そういうのを考えると、反論が全然できやしない。

……いい人は多いんだけどなあ。ただ、へんてこりんなんだよなあ。俺も変態な自覚はあるけど、そういう側なんだろうか。

首を傾げていると、シルファはため息をつきながらコーヒーを一口飲んだ。

「とりあえず、お姉ちゃんにセクハラをするのはやめて頂戴。張り倒すわよ」

「はい、気を付けます！」

かなり視線がマジなので、今後気を付けます！

シャルロットに顔向けでもできないしね、そこは頑張るよ！

「まあ、変態が過ぎるようなら言ってくれ。俺がとつちめるから」

「う、うん。……悪い子じゃないみたいだけど、ちよつと大変かな？」

九成とヴィーナもごめんな？ 今度は気を付けるからっ！

ふう。テスト上がりは天国の気分だわ。

久しぶりにカラオケを思う存分謳ったら、だいぶスカツとしたわね。

やはり、多少はストレス発散をするに越したことはないようだわ。

「ふい〜。四人で一緒に歌ったのって、何年ぶりだったっけ？」

「かなり前だよ。ほら、七緒とアイネスが英国に行く前だから……二十年超えてるよね」

鶴羽とオトメねえがそんなことを言い合うけど、本当にね。

……今でも苦いものがあり、ケジメはつけても背負うべき私の業であることに変わりはない。それが、かつて道間日美子がなした所業の責。

ただ、そんな私を彼女達が支えてくれること。その事実は否定しない。私は、私を許してくれる人がいることは許すと決めた。

だからこそ、私は目を伏せて決意する。

瞼の裏に焼き付いた、私の運命がくれた笑顔。

道間田知の、九成和地の、比翼連理の旧済銀神。エルダー・ゴッド

瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻む。

尊ばれるべき勝利笑顔の為に、守り戦い死んでいこう。

その誓いがあつたからこそ、私はここまでこれたのだ。そう信じているし、これからもそうあり続けたいと思っている。

「ふふっ」

「あらあ？ どうしたのかしらあ？」

小さく笑った私に、リーネスが首を傾げてくる。

「いえ。二周目が孤児から始まった私が、こんなところではしゃげているのも中々驚くべきことかと思ってね」

実際問題、そういうほかない。

政情不安定なソ連圏で生まれ、ストリートチルドレンをまとめて何

とか生活を確立。ストリートチルドレンが多い地域では害獣扱いされやすいことを踏まえれば、それだけでもよくやったといえるだろう。

その後内乱において、腐敗した政権を打倒するべく少年兵として参加。決着がついた後、教会に拾われて暗部部隊を選び、その結果としてここに来た。

……波乱万丈な第二の人生ね。最初の人生もそうだけど、我ながら驚天動地の人生を送りすぎと言いたいわ。

「……そういえばあ、カズヒって孤児だったのよねえ」

「ええ。我ながら引きが悪いと思うわね」

肩をすくめるけど、まさにそうだ。

世界中を探せば孤児は多いけれど、それにしたって限度はある。

前世のやらかしに見合った来世と言えばそうだけれど、ついてないとは言えるのかしらね。

そう思っていると、リーネスは少し考えこんでいた。

「ん？ リーネスってばどうしたのよ？」

鶴羽が気づいてそう尋ねると、リーネスは小さく頷いていた。

「いえねえ？ カズヒの今生の家族について考えてたのよお」

そのリーネスの言葉に、私はちよつと首を傾げる。

「……正直今更なことよ？ やむを得ない事情があるにしても、今更前世の記憶持ちでしかもやらかしている娘とか……重いでしょうし」私としてはそういうほかない。

孤児という物は環境が生む要素が大きい。学も財も無い方が、望まぬ妊娠は多いからだ。

性教育を早くに受けている方が、意図しない妊娠が少なくなるという話を聞いている。それに学が無ければ、確実な避妊法を試みなかったり、避妊具の必要性をよく理解しないこともある。

また財が無ければ中絶を受けることも困難だし、避妊具を購入するのも気後れするだろう。そして財が無いからこそ娯楽が少なく、手っ取り早い性交に走りやすくなる。金に困った女性が風俗店で働くというケースがままあるのも一種の形だろう。

つまるところ、貧困はそういった負のスパイラルを生み出しやすい。そんな中では、綺麗ごとを言い切れないこともあり得てしまうのが難点だとは分かっている。

だから、やむを得ない理由で子供を手放すしかない場合もあるだろう。できることならしたくない者もいれば、したことを悔やむ者もいるだろう。そこは否定しない。

私においても幸香のケースはある意味で近いだろう。まあ、実の兄との子供を高校生の時から育てるとか、あらゆる観点から見てもややくくなるからまた違うかもしれないけど。結果的に捨てたと言ってもいいようなことになってしまったのは事実だ。

……とはいえ、だ。

世界の命運を真剣に揺るがした男が誕生したきつかけ。闇に落ちて迷走した末に、親友を地獄に引きずり込んだ悪女。道間日美子は業が深すぎるがゆえに、並みの人間では支えきれない。

今更今生の家族と再会したとしても、はつきり言って重荷過ぎるだろう。私もそれぐらいの気遣いはできるし、避けた方がいいとは思っただけけれど

だから別に探さなくてもいいのだけれどとは思っけれど、リーネスは少し違うらしい。

「こう言っただけだけれど。カズヒってエスベラント星辰奏者の才覚が凄まじいでしょお？ ……なんというか、その点においてはある程度強大に……なりかねないかなあと思ったのよお」

「……そこは盲点だったわね」

思わず唸ってしまった。

星辰奏者がどのようなアステリズム星光になるかは、完全に千差万別だ。

血を分けた双子だろうと同じ星を振るえることはないと言われており、実際現状では確認されていない。

ただ、ある程度のは肉体の影響も出るらしい。血筋的に近い者が類似性のある星を振るうことはある。また、強力な星辰奏者をよく輩出する一族というのもあり得る話だ。

……ハーデス辺りが余計な知恵を振るう可能性はあるわね。

「そうね、ならちよつと調べてみようかしら。……ただ、意味もなく明かしたりはしないでよね」

そこはしっかりと釘を刺しておかないとね。

自分が手放した娘が、前世でもの凄くやらかしており、世界の危機に間接的に関わっている女傑です。

そんなことを言われたら、並大抵の奴はキャパオーバーを起こすのは見えているもの、ね。

戦愛白熱編 第五話 魔王の血筋も、大変です！

イツセーSide

「……ぷしゅ……っ」

「だ、大丈夫ですか、亜香里さん？」

家でちよつとなんとなく歩いてたら、アーシアに介抱されている亜香里がいた。

なんというか、頭から湯気が出てるような感じだ。知恵熱でも出るのかもな。

でもどうしたんだ、一体？

「どうしたんだ、二人とも」

「あ、イツセーさん」

俺に気づいたアーシアに続いて、ゆつくりと亜香里が振り返った。

「て、テストが……テストが……っ」

ん、ん？

うわ言の様に呟く亜香里に、俺はちよつと首を傾げる。

さっぱり分からないでいると、アーシアが困り顔で苦笑していた。

「亜香里さん、中間テストでいっぱいいっぱいのようなんです」

あ、なるほど。

中間テストって言っても、どの高校でも全く同じってわけじゃないか。俺達はもう終わったけど、ちよつと時期がずれるぐらいならおかしなことでもないだろう。

で、テスト勉強やテストそのものでもういっぱいいっぱい」と。

「う……。テスト嫌い……難しい……頭使うのやだ……」

相当いっぱいいっぱいらしい。なんというか、へタレてる。

あはは……。こりゃ、勉強でかあなあり……疲れてるな。

「ま、テスト勉強とかテストって面倒に感じるやつも多いよな」

俺は近くのソファアに座りながら、ちよつと同情。

イヤホンと、テストつてのは学生にとつて嫌なことだよなあ。テスト勉強とか面倒くさいし、テストそのものが嫌な奴も多いだろうし。亜香里はそういうタイプなんだろうさ。珍しくもないか。

「つていうか、イツセイ達はなんでそんな平気なのさ？ いや、有加利ちゃんも割と平気でやってるけど」

亜香里からは八つ当たり気味にそんなことを言われるけど、ま、そんなことを言われてもなあ？

「ま、俺は駒王学園の高等部に試験を突破して入学したからな。女の子が多い環境に行く為、一生懸命頑張つて偏差値を上げたもんさ」

ああ、俺のあの時の頭で、よくぞ入学できたつてもんだよ。

あの時は、松田や元浜と共に頑張つたもんだ。偏差値を一生懸命上げて、やつとの思いで合格したもんだ。

今でもテストは基本的に、赤点は取らないけど平均値を引き離す高得点でもない。言っちゃなんだけど、オカ研だと俺は頭悪い組だ。

ま、それでも毎日勉強するようにしているけどな。

「悪魔やつてると、覚えなきやいけないことも多いからな。馬鹿だからって頓珍漢なことを言ったらリアスに恥をかかせるし、俺を婿にする気満々のグレモリー家から教師をつけられてみっちり勉強させられたこともあるし」

うん、あの頃はなんでそこまでするんですかって感じだったよ。

でも、馬鹿だからって何も知らないままでもいいわけでもないからなあ。リアスはグレモリー家の次期当主で、俺はその眷属だし。いつの間にかやら上級悪魔な上、いろいろと偉い人とも縁があるからなおさら覚えることも多いし。

「まあ簡単に言えば、頑張る理由があるからかな？ それにテストでいい点とつたりするとリアスが誉めてくれるし……ぐふふっ」

おっばいで包み込んでくれたりとか、そういうご褒美もあるから尚更頑張れるつてものです。

うん、今後も頑張つて勉強するよ。だつておっばいが待つてるし！ つと、いかんいかん。こんなところでそんなこと言ったら、アーシ

アちゃんが拗ねてしまう。

実際ちよつとむくれてるし。これはあとで謝っておかないとー
「り、リアスお姉さまじゃなくても、私もご褒美出せますからね!? そ
の……パンツはファーブニルさんにあげるので、ブラジャーでどうで
すか?」

ーなん、だと!?

「……え、ええええええっ!?!」

亜香里なんてこの発言に真っ赤になってるし!

ああ、なんてことだ! 最初の頃はまさにシスターだったアーシア
ちゃんが、リアス達の影響でエロエロに!

これはこれでいい……いいけど、絶対に教育には悪いよ! でもブ
ラジャーは欲しい!

……じゃない。これは亜香里に言っても意味ないし!
とりあえず話を戻すか。

「魅力的な提案はいったん置いとくとして。勉強つてのはしたくなる
理由が無いとやる気は出ないもんな。そういうものを見つけないこ
とには大変だよなあ」

そつちが大変だからなあ。

いや、だつてさ? 亜香里にとってはこれからいっぱい学ぶことが
増えるわけだし。

たぶん、並みの高校で中間テストをするだけでへばつてると大変に
なるぞ。

「……真面目な話、お前や有加利さんは色々これから学ぶことが増え
るぞ?」

「え、なんで!? テストでもないのにお勉強するの!?!」

割とショックを受けるけど、でも絶対やらされるぞ。

「俺も去年の夏休みは、リアスの眷属つてことで色々といっぱい教育
を受けたからな。冥界の一般常識や言語、あとテーブルマナーに社交
マナーとかも」

「そんなのもされたの!?! え、私も!?!」

思いつきり驚かれてるけど、そんなもんじゃないだろ。

「いや、むしろ当時の俺よりやらされると思うぞ？　ほら、亜香里ってベルゼブブの末裔だし」

冥界、悪魔にとって魔王の血族ってかなり重要だしな。

なにせ、悪魔って血統とかとつても重要視されてるからな。魔王の血族は特にブランドと言つてもいいから、こちら側に引き込めるのなら引き込みたがっている。ヴァーリが最上級悪魔になつてるのもそこに在るしな。

で、亜香里はベルゼブブだ。

「……内乱で追放したとは言つても、今の悪魔にとつても魔王の名は重要なんだ。特にベルゼブブはマルガレーテさんが徹底的に固辞してる上、フロンズがそれを了承して取り立てているから尚更つて感じだろうし」

奇跡的に発見された、ベルゼブブの末裔。

いくら大王派がベルゼブブの末裔を確保しているとは言つても、多いなら多いに越したことはないだろう。魔王派としてはフロンズの息がかかっているかもしれない奴とか別の意味で不安だろうし。

真魔王計画でどれだけの魔王血族が新しく生み出されたか分からないし、ハーデスの下にレヴィアタンの末裔がいるし。保護を通り越して、お飾りでもそれなりの地位につけられるのならそれに越したことはないだろう。

「覚悟しとけよ？　まとまったお休みが手に入ったら、みっちりスパルタで教育期間が始まるぜ？」

「うえええ〜？　やだなあ、それ……」

俺が前もって伝えておくと、亜香里は絶望の表情でテーブルに突っ伏した。

イヤ、本当にそうなるだろうからな？　冗談じゃないから覚悟しとけよ？

……そういえば。有加利さんの方はどうなんだろうか？

リアス達とお茶をすることになって、話になったのは最近の勉強事情。

特に高等部は中間テストなので、基本的には私の苦勞話になっていくわね。

「……それにしても苦勞しているのね。二周目だからもう少し楽にできそうだけれど」

「体感時間で十年以上前の領域、それも十年以上経って洗練されてるし、そもそも基準となる偏差値が全然違うのだけれど？」

勉強できる側と一緒にすんな。

今生がどれだけ勉強面で困難かを考慮してほしいわ。むしろストリートチルドレンから、先進国の名門校で最低限やっていけるレベルまで持ち堪えたことを誉めてほしいぐらいよ。

十年以上昔の授業の内容を、あつさりと思いつける奴だって少ない方でしょう。少なくとも多数派じゃないはずだわ。……ないわよね？

ま、それはともかくとしてね。

「そういうリアスはどうなの？ 大学となると羽目を外す阿呆とか出てきそうだけれど」

「イツセーがいる身ではしやぎすぎたりはしないわ。それに、サークルは自力で作っているから尚更ね」

行動力があってよかったわね。

ま、それはともかく。

「……そういえば、鰐川亜香里と望月有加利はどうなのかしら？」

「そうね。今のところは順当に学生生活を満喫しているわ。……それ

が問題と言えば問題かもだけれど」

その辺りの認識は一致しているようで何よりだわ

「実際問題、魔王血族がこうもつるべ打ちになつていゝものね。他の連中が懸念事項が多い以上、確実にこちら側が擁立できるものがないに越したことはないわ」

そう、そこが最大の問題点。

真魔王計画やそれ以外もあり、壮絶なレベルで魔王血族が増えていゝる。

グレイファイアさんに預けられているのは三人。それぞれ純血だけれど、安心はできない。大王派、それも革新衆と称されるフロンズ達が見つつけて保護したのだ。グレイファイアさんがフロンズ達と何を目論んでるのかも分からない以上、手放して味方扱いはできない。

挙句、ラツローイカというやつはハーデスの配下。元々旧魔王派の計画である以上、禍の団に一人ぐらい残つていてもおかしくない。控えめに言つて頭痛の種だ。

だからこそ、魔王派にも魔王血族を擁しておきたいと思う者は多いだろう。ヴァーリは一応こちら側と言つていいが、元テロリストなあげく性格的に向いていない。もう一手欲しいのが本音でしょうね。

実際、現魔王であるアジュカ様も同意見のようだし。

「取り込みをするにしても、ろくに異形も知らない以上は今後の教育が必須ね。その辺り、大丈夫かしら？」

「そうね。個人的にはある程度は普通に生活させてあげたいけれど、来歴が来歴だしある程度は学んでほしいわ」

リアスからしてもこの意見だもの。三大勢力全体から見れば拒否の余地もない。

さて、今後二人はどうしたものか。その辺りも気にしていかないかね……。

「さて。彼らの教育は順調かね、ハツシユ?」

「そこは安心していい。なにせ、直接面倒を見ているのが彼女なのだからな。こちらにも相応の教育体制を用意している上でだ」

「それは重畳。仮にも魔王血族であり、純血なあの三人。今後の為にはそれなりの出来になってくれないと困るのでね」

「よく言うな、フロンズ。お前からすれば旧王族に頼らない社会制度の確立が本音だろうに」

「現実を考慮すれば無視はできんよ。なまじ寿命が長く血統の影響がもろに出る悪魔社会は、どうしても血統主義がはびこりやすい。純血の王族はそれだけで影響力が大きいからな」

「確かに、九大罪王に移行しても、無視できない影響力がありえるわけだ。……だからこそ、か」

「そう。罪王の一角となるグレイファイア殿、それも本来魔王ルシファーの配下だったルキフグス。彼女の配下としてルシファー含めた純血の王族をつけければ、いやでも民衆の無意識に刷り込めるものがある。魔王はかつての王族だ、とね」

「まったくもって恐ろしい限りだ。最も、こちらにも教育制度の過程で旧王族直系がどういうことをしたのかの啓もうは広めているがな」

「もつとも、それをもつてしても完全に初代魔王の威光を消すことはできぬだろうがね。しかし、その時は後継私掠船団だ」

「アスモデウスの先祖返りたるユーピ。ルシファーの先祖返りたるラムル。レヴィアタンの先祖返りたるエペラ。ベルゼブブは契約上^{マルガレテ}擁立できないが、これだけいれば十分だろう。……あの三人も、可能なら取り込みをかけるのだろうか?」

「可能ならな。……とはいえ、旧王族を頼りにするのは革新衆のやる

「ことではない。ゆえに――」

「こちらも少しずつ動くぞ？ いい機会だ、マーケティングやデータ取りを徹底的に行うとしよう」

「了解だ。補佐はやる故、主導してもらおうぞ？」

戦愛白熱編 第六話 穏やかなテスト前

祐斗Side

テストそのものが終わって少し経つけど、そろそろ帰ってくる時期でもある。

とりあえず、自分達で自己採点した分では赤点はない。カズヒにおいても赤点は回避できたろうし、なら全員大丈夫だろう。

だからこそ、ある意味で空いた時間帯に自己鍛錬は欠かさない。

大きな戦いは何とか終わらせたけど、アザゼル杯で情けない姿を見せる気はない。

それにハーデス神や帝釈天は懸念事項だ。禍の団もまた持ち直しているらしいし、サウザンドフォースも不穏要素。そうでなくても、D×Dは今後も対テロ部隊として動くときがあるだろうしね。

とはいえ異空間でするほどじゃないトレーニングもある。例えば体を動かす基礎トレとかは、地下室でも十分だ。

もしかしたら、他のチームで参戦しているメンバーもいるだろう。最近はずゼル杯のこともあり、手札をある程度隠す為にそれぞれが別の場所で重要なトレーニングをすることが多いからね。

基礎トレぐらいは普段通りにみんなでしたい、そういう時もある。そんな期待で動いていた。

すると、既に何人かがトレーニング機材を使ってトレーニングを進めていた。

「お、木場じゃねえか。お前さんもトレーニングか？」

「……お疲れ様です、祐斗さま。お先に失礼しています」

と、そこではトレーニングウェアを来たベルナが、もう一人とランニングマシーンで走っている。

もう一人の方は、確か行船ゆきふね三美みつみさんだったね。最近入ってきた懲罰
人事の人で、今は九成君のチームで戦車ルークをしていたはずだ。

同じチームということは、親睦を深める意味もあるのだろう。僕は
そう納得する。

「他の人達はいないのかい？ 特にインガさんとか」

「他のメンツは仕事があつてな。手が空いてるメンツだけでも基礎ト
レしとこうかって話になつたんだよ」

ベルナは僕にそう答えると、ちらりと行船さんの方を見る。

「ま、他の業務もあつてアタシらだけだがな？」

そう振られ、行船さんも小さく苦笑した。

「そういう事です。そういう祐斗様も、お一人ですか？」

「たまにはチームメンバー以外ともしたくてね」

僕はそう答えると、そのまま隣のランニングマシンを起動させて
走り出す。

「そういえば、そちらも連戦連勝だね。お互い勝ち進んでいるようで
何よりだよ」

「そちらこそ。もつとも、序盤から勝ち進むと警戒され、一度の敗北で
大きく点を取られそうです」

「ま、勝ち続けてりやあポイントは溜まるし、一回二回負けてもリカバ
リーは聞くだろ？」

そんな風に他愛のない話をしながら、僕達は基礎体力向上の為のト
レーニングを進めていく。

うん。こういう日常もいいものだね。

過酷な戦いを何度も乗り越えているけれど、やはり平和な日常が
あつてのものだ。こういったものを守る為にこそ戦いたいよ。

「そういえば、ふと気になりましたが」

と、行船さんが僕の方をちらりと見る。

なんだろうか。そう思った時だ。

「祐斗様は、恋愛に興味はないのですか？」

「……どういう意味かな？」

思わず、こけそうになった。

いきなりなんでこんなことを言われるのだろうか？

本当に突拍子もないとかかなんというか。

ただ、隣のベルナはむしろ凄く納得したかのように頷いてる。

「そーいやそーうだな。なんでお前、付き合ってるやつとかいねえの？」
なんでそんなことを言われなければならぬのだろうか。

というより、イツセー君はイツセー君で真羅先輩を僕とくつつけようとしているところがあるし。いったいなんだというのだろうか。

「特に積極的に付き合いたいという人はいないね。今はそれより、アザゼル杯の方が大事だよ」

これが僕の素直な感想だ。

ただ、二人は顔を見合わせると微妙な表情になっている。

あれ、答えがおかしかったかな？

いや、これはさつさと話を切り替えた方がよさそうだ。下手に手を出さないでいると、ややこしいことになるかもしれない。

「そんなことより、終わったたら休憩するだろう？ チーズケーキを焼くつもりなんだけどどうかな？」

「そうですね。……では、お言葉に甘えてもよろしいでしょうか？」
行船さんはすぐ乗っかってくれた。

うん、手作りの料理を味わってもらうのは中々にいい気分だしね。その流れで話も逸らすとしよう。

ただ、ベルナの方はちよつとだけ沈黙している。
えっと、どうしたのかな？

「因みに、あとでイツセーにも食わせるのか？」

「もちろん！ イツセー君はチーズケーキが好物だからね。腕によりをかけて作るとも！」

力強く頷きながら即座に伝えてみたら、顔を見合された。

「……………こーうやつなんだよ」

「そーうなのですか……………」

な、何か酷いことを言われている気がする……………っ！

テスト終わりの比較的楽な時間帯、俺は何となく散歩をしていた。ここに来てからまだ一年も経ってないから、土地勘もあまり育っていない。一応結界を常々張って更新もしているが、俺達相手に動く連中は毎度毎度潜り抜けてくるからな。いざという時に備えると町に慣れておくに越したことはない。

とはいえ、今日はちよつとした買い食い程度にとどめておくか。そんなことを考えながら歩いていると、視界の隅に見覚えのある女性の姿が。

「どうも、有加利さん」

「あ、九成君？」

俺が挨拶すると、有加利さんも俺に気が付いた。

「かしこまらなくてもいいのに」

「ま、一応年上相手なんで」

そんな風に軽く言葉を交わしてから、俺は有加利さんの様子を見る。

少し顔が青いな。やはり完全な回復はまだ先……か。

ただ、その手にはいくつか荷物があつた。

「買い物ですか？」

「ええ。少しはこの町にも慣れたかったから、散歩のついでにいくつか買い物ね」

そう答える有加利さんは、やはり少し表情が厳しいな。

俺はそれを確認したうえで、荷物をいくつかひったくるように持つ。

「え、九成君？」

「いくつか持たせてください。ほら、男の沽券的にも俺のスタンス的にも、女の子にばかり荷物を持たせるのはアレなんで」

ちよつと早口で俺がそう言っていると、有加利さんはちよつと考えてから小さく微笑んだ。

「ありがとう。男の子だね、うん」

……この感じだと、氣遣ったことにも気づかれてそうだな。

ま、素直に持たせてくれるならいいか。いくつか残しているからこそ、本人も比較的素直に受け取れたということにしておこう。

その後は、それとなく何でもないような話をしながら一緒に帰路に就く。

ただ、一つだけ確信できることがある。

笑顔で相槌を打ってくれる有加利さんの表情は、やはりどこかに影がある。

それほどまでに失ってしまった。それほどまでに深く傷ついた。そう、分かってしまう。

だからこそ、俺も色々と考えてはいるわけだ。

「有加利さん、よければ少し鍛えますか？」

と、俺はそれとなく話を振る。

「そうね。……ダイエツトにもなるし」

かなり真剣な答えが返ってきたが、女性に体重関連の話はかなりリスキーなのであえてスルー。

いやまあ、それはそれでいいんだけどそうじゃない。

「こう言っただけですけど、魔王血族ってかなり偉業にとって重要ですからね。俺達もカバーしますけど、護身の技術は持っていた方がいいんですよ」

「そうなの？　一応……心得は持たされているけど」

あ、そういえばそうだったな。

真魔王計画の関係者が、色々と騙して経験を積みさせていたのは聞いていた。

もつとも、旧魔王派らしく結局とんでもないことになったのが今なわけだが。あいつら基本的にスペックだけはある無能だよなあ。

ま、それは置いてだ。

それなりの心得はあるだろう。だがしかし、だ。

「……この町の現状って割と重要地点なので、潜り抜けてやらかす手合いつて、基本的にどいつもこいつも精鋭なんですよ。……なんで、数段上ぐらいにはなった方がいいかと」

「……大変だね、君達も」

そうなんです。

ま、それは半分ぐらいだ。

もう半分、本命はちよつとした考え方の切り替えだ。

今のままだと、やはり半分ぐらい塞ぎ込んでいる。自己嫌悪に呑み込まれるリスクもあるだろう。

だからこそ力をつけて、何らかの貢献をもつてして心を切り替えさせたい。

かつて道間田^俺知が、何気ない心配と笑顔で道間日美子^{カズヒ}の心を照らしたように。その後、カズヒ・シチャースチエが誓いをはたして邪悪を穿つ銀の弾丸となったように。

強い決意とその実績は、支えになることがある。

治療の過程で墮天使化も施された以上、有加利さんや亜香里は永い人生を生きることになる。その長い人生を、俯いてばかりというのはやはりどうかと思う。

それは、俺としても見過ごせない。

瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻む。嘆きで流れる涙の意味を、笑顔に変えて見せると決めた。この、俺達の勝利の答えに誓つて。

俺は、俺達が助けた女の子達に、笑顔で生きれる可能性を渡したい。「ま、あれですよ。世の中ないよりある方がいいことが殆どで、強さつてもその一つですから。……その強さが、嘆きを切り開く力になればなおいいんですけどね」

なんとなく、俺のスタンス明言的な感じでそんなことを言った。

ただ、ちよつと夕日が逆光になって見にくくなっている彼女の表情はきよとんとしていて――

「……そうね。私も、前を向いて歩きたい……わね」
—どこか華やぐ笑顔に変わったそれは、少しだけ安心できた。

イツセーSide

「よっしやあ！ その調子だ！」

「うんオツケー！ 頑張るよ！」

俺が馬鹿なりいろいろアドバイスした結果、亜香里は高難易度のドリルを高得点でクリアーした。

いやあ、勉強つて大変だけど、しないといけない立場も多いからな。魔王の血を引いていると、いやでも面倒ごとが起きそうだし。最低でも悪魔の一般常識や知識は及第点が取れないとまずいし。

なので、そういった転生悪魔用の一般常識の資料とかを渡して一緒に勉強会をした見たけど、何とかなかったか。

「案外できるじゃん。俺がその部分を覚えるの、もっと長かった気がするぜ？」

「そうなの？ え、じゃあ来年まで頑張れば、駒王学園の大学部とか……いけるっ！」

あ、俺が褒めたらちよつと調子に乗っている。

「いや、一般常識と勉強はまだ別口だし。……あとたぶん、亜香里達はダンスとかの練習もさせられるだろうし」

大学の合格はまた別だからなあ？

「ダンスかあ。……体育でもあれは選びたくないなあ」

「いや、創作ダンスじゃなくて社交ダンスな？ 転生悪魔の俺でも教

えられたし、魔王血族の亜香里だと必須科目だと思うぞ?」

うんうん。転生悪魔ってそういう事をする場合もあるから大変だ。いやまあ、リアスの眷属であり、あの時点で婿候補と見なされていたからこそってところもあるけど。

ただまあ、王族ってことだし、亜香里もそれなりにやらされるかもしれないしな。

「ま、相手役なら俺だけじゃなくて、木場やギヤスパーもできるから。事前にちよつと練習しておくといいぞ?」

俺がそう言うと、亜香里はちよつと顔を赤らめていた。

「……イツセーでいいかも」

え、俺でいいの?

うん。ギヤスパーはともかく、こういうのは木場の方がいいような気もするけど。いや、イケメンに可愛い女の子が取られるのはまだたまにイラつと来るけど。

いや、俺も結構踊りには慣れてるからな。その当たりを直感的に感じたのかもしれない。……本当に、結構色々踊ってるよなあ。

よし、そういわれたのならやつて見せるか!

「よっしゃ、任せとけ! これでも結構練習させられたし、魔王様から直々に及第点はもらってるんだ!」

いや、及第点だとやっぱダメかな?

そんなことを思ったけど、亜香里はクスリとほほ笑んでくれた。

よ、よく分からない女心だな。

ま、いつか!

「ただいまー! お土産買ってきたぞー!」

「亜香里はいるく? 好きそうなのを買ってきたわよ?」

お、九成と有加利さんの声だ。

二人とも別々に出てたはずだけど、たまたま出くわしたんだろう。

……おのれ九成、年上キラーめ。あいつはなんで無自覚に年上の好感度を稼ぐ。

思わず嫉妬心が燃えているけど、なんか入ってきた九成は俺に半目を向けている。

「そういうところだぞ、イツセー」

「どういふところだよ!?!」

思わず絶叫したよ!

戦愛白熱編 第七話 姉妹がわかるテスト返還！

祐斗Side

中間考査のテストが返却される日になった。

こういう時、学生はドキドキしたりするものだね。僕も自己採点は終わっているけど、ちよつと気になる時もある。

だから、もの凄く平然と受け取って平然と戻ってくる九成君達には感心するよ。

九成君、ヒマリさん、南空さん。この三人は本当に平然として受け取って、そのままあっさり戻っていく。

ザイアの英才教育のたまものだろうか。比較的テスト勉強をしな側で、その上で点を取ってくる。こういうところは優秀なんだなあ、彼ら。

とはいえテストもほぼ返却され、その流れでクラスメイトはそこかしこで雑談を始めている。

「……ふふつ。ふふふ……補習は回避……平均点もいくつかは取れたあつ!!」

そしてバグッているカズヒは、多くの者が暖かい笑みを浮かべて流している。

学習法面においては劣悪な環境にいるだけあって、彼女は赤点回避で苦労している側だ。テンションがおかしなことになるので有名で、いい加減学友は慣れている。いちいち驚くこともないというわけだね。

ただまあ、慣れてない人からすると違和感も大きい光景なわけで――
「……その、大丈夫?」

―ヴィーナさんは素直に心配して駆け寄っていた。

「……大丈夫、大丈夫よ」

「その間は!?! 本当に大丈夫か違和感しかないよ!?!」

気恥ずかしくなった所為でカズヒの反応が遅れ、ヴィーナさんは更に心配になったようだ。

うん。普段とは全く違う雰囲気というか、妙な悲壮感が漂っているからね。

見ていて凄く、引くよね。僕も最初は戦慄すら覚えたよ。

ただまあ、「勉強関連で弱いから、こういう時おかしくなる」とは言いつらい。なので回りも指摘する雰囲気が出せないでいる。

ただ、誰かは指摘しないといけないだろう。そろそろ九成君辺りが動くと思うけど、場合によっては僕も動かないといけないかもしれない。

「……落ち着いて、お姉ちゃん」

と、その時シルファさんがヴィーナさんの肩に手を置いた。

思わぬ展開になってきたと、思わず僕達は息を呑んで――

「たぶん勉強ができない人なのよ。だからこう、負担からの解放でハイになつてるの。察してあげて」

『『『『『『『『お前がカズヒの気持ち察しろよ!?!』』』』』』』』』

凄いや人数が凄くツツコミを入れたね。

うん、察して止めてくれるのはいいけれど、それを言ったら台無しだと察してほしいかな?!

ただ、シルファさんは肩をすくめて気にしてない。

「見る限り、大体知っているメンツのようだから大丈夫と踏んだわ」

その通りだけど、はつきり言うんだ。

「そうね。言い難いところを言ってくれる人はありがたいわ。私は勉強が苦手なのよ、ストリートチルドレン上がりで、優れた教育環境の時期が短いから」

「そうね。私も割と貧しい時期があつたから、その辺りは少しは分かるわ。勉強がいっぱいできるって、本来いい事よね」

そしてカズヒとシルファさんは何か分かり合っている。

それでいいのか、カズヒ。いや、カズヒはむしろそこはいいと思うタイプか。

うん。ちよつとシルファさんは引かれているけど、悪い人じゃないよね。ある意味カズヒに似ているっていうか。

ただ、ね？

「……………」

タイミングを逸して、妙なポーズになっている九成君には触れないであげてくれることを願うよ。

和地 Side

昼休み、俺は今回学食の方でお昼をとっていた。

毎回毎回お弁当を用意してもらうこともできるけど、学食にも美味しそうなものがあるからな。たまに食べるのはいいものだ。

そう思っていると、珍しくヴィーナが一人でお昼をとっている。

ヴィーナは人当たりが良い事もあって、学園内でも急激に人気を伸ばしている。その為、割といろんなクラスメイトとお昼を共にすることが多い。

それが一人とは、珍しいな。

「近く、いいか？」

「あ、九成君」

ヴィーナはすぐに気づくと、微笑んで頷いてくれている。

……ただ、俺の感覚が少しかき取ったものがある。

「何か悩みがあるのなら、少しぐらい愚痴も聞かせて？」

俺は、それに対して素直にそう答える。

俺個人の主義信条として、嘆きに対して無頓着でいる気はない。またチームメンバーである以上、コンディションに影響するだろうこと

はなるべく解決したい。

と、いうわけでその辺りを軽く聞いてみる。

断られる可能性はあるだろう。俺とヴィーナはそこまで親しいわけでもないし、プライベートなことは深入りできない関係だろうしな。

とはいえ、ちよつとぐらいの愚痴でスッキリする程度の貢献はしたいんだが。

「……そうだね。ちよつと、相談してもいいかな？」

と、ヴィーナの方から踏み込んでくれた。

それとなく、俺は魔術で意識誘導などを行い、踏み込んだ相談も聞けるようにする。

そして、ヴィーナは思いっきり俯いた。

「その、ね？ 私、いっつもシルファちゃんに引つ張ってもらってるの」

……ふむ。

俺は短いながらも見てきた、ザンブレイブ姉妹の関係性を考える。

ある意味で対照的な姉妹であり、一見するとヴィーナがシルファをとりなしている風にも見える。というより、大半はそう思っているだろう。

ただ、あえて俯瞰的に見ると少し違う可能性にも思い当れる。

「つまり、シルファはわざとあんな対応をとっているってことか？」

「……半分ぐらいかな？ シルファちゃんって、素がああいう感じだから。ザンブレイブチルドレンでも、友達は少ないし」
なるほど。

雰囲気と言いい外見と言いい、カズヒに近いところがあるからな。孤高の雰囲気をおぼせるところはある。

当人も陽キャのノリはあまり好んでないだろう。頭を空っぽにして多人数で騒ぐよりは、実のある内容を少人数でもできる方が好んでそうだ。

ただし、意図的に自制をしてないのなら話は少し変わってくる。

「……私はさ、周りが思うより固いんだ。周りの人達と仲良くしたいのは本当だし、歩み寄ろうとも思っているけど。ただ、想像のできないことを見たりすると、二の足を踏んじやうの」

言われてみると、確かにそういう事もあったな。

なるほど、柔らかいようで固いのか。そういう人は確かにいるな。第一印象や外見からの雰囲気と、異なる本質があるっていうのはよく聞く話だ。

それがチャームポイントになる場合もあれば、逆に引かれる理由になることはある。そういう意味では、ヴィーナがここまで人気があるのはもしかするとおかしいかもしれない。

なまじ最初に好感度が高まっていると、そこから反転したことになる場合がある。それなりに付き合いが長くなっても無理なこともあるし、時期的にそのカバーが難しいところもあるだろう。

こういつては何だが、日本は文化的に中々特殊なものも数多い。まあ世界全土を見ればどこも似たようなところはあるかもしれないが、ただでさえ島国なんだ。八百万の神々信仰や鎖国の影響もあり、ネットでは日本面（日本独自の技術的魔改造による、迷走もしくは革新的影響のことを指す）なんて言うスラングまである。卵かけご飯とか、間違いなく独特だしな。

だが、それは――

「……そっか。つまり、シルファはそれぐらいヴィーナのことが好きなんだってことか」

――それぐらい、シスコンな妹がいるってことなんだろう。

「え、そういう方向なのかな!？」

「そういう方向だろ。つまるところ、シルファはヴィーナが引かれないうよう、わざと機先を制して注目を集めてるわけだしな」

なるほど納得。そういう意味では、いい妹を持っているものだ。

ま、そういう事ならやることは一つだろう。

「他人事の無責任な言い方かもしれないが、ならヴィーナもシルファをフォローしてやればいいさ。お互いがお互いをフォローすれば、そういう隙間もなくなるんじゃないか？」

「だ、大丈夫かな？ シルフアちゃん、とつつきにくいというか、割とずけずけ踏み込んだんじやうのは素だし、治す気なさそうだし」

ヴィーナはちよつと不安そうだけど、まあそこは大丈夫だろう。

「大丈夫大丈夫、カズビで慣れてる人も多いし」

カズビに比べればまだ緩い緩い。

あの女傑はそういうところがすさまじいからな。あれで慣らされている分、俺たちはまだ比較的慣れている。

というわけで、俺は安心させるように微笑んだ。

「その辺り、駒王学園はだいぶ緩いぜ？ それに、だ」

駒王学園はその辺りが妙に緩い。……覗きの報復で集団リンチ（凶器有）で解決させるのは緩いというより問題な気もするが。さつさと裁判を起こせよ、集団私刑にしる過剰防衛にしる、やればそつちも捕まりかねんぞ。

まあ、そんな奴らが多いからか、割と緩いところは徹底的に緩いからな。まず間違いなく普通の一般人間社会よりは異形に近い。癖の強い連中にもある程度の融和性はあるはずだ。

そして、それとは別の意味で言い切れることもある。

「……それに、ヴィーナが良い奴であることも変わらないしな。だつたらどつちかが泥を被るより、一緒にフォローしあう方が、気分的にもいいんじゃないか？」

ああ、短い付き合いだが彼女が良い奴なのは分かっている。

よほど悪意を持って隠しているのならまた別だが、さつきの言いぐさや普段から考えると、そんなこともないだろう。

だからまあ、そういう方向性がお互いにとって思っていると思うけどな。そう思ったんだが、なんか急に顔が赤くなってる。

……よし、予防線を張っておこう。後ろから誰かに刺されるような真似は避けたいしな。

「言っておくが口説いてないからな？ 素直な感想だからな？」

「も、もつと酷いよ!?!」

そんな!?!

俺は何となく一人の時間を満喫していると、シルファと出くわした。

「あら、あの子達と一緒にじゃないのかしら?」

「ん? ま、俺以外にも付き合いがあるからな」

俺達にだってそれぞれの人間関係とか、あるからな?

ま、それはともかく……どうしたもんか。

あんまり話す関係でもないからなあ。ちよつとこう、なんていうか……?」

そう思っていると、シルファは俺の方をちらりと見る。

「そういえば、ヴィーナお姉ちゃんは大丈夫かしら?」

「ん? どういう意味だ?」

俺がそう問い返すと、シルファはちよつと言いつらそうにしていた。

「お姉ちゃんは、優しいし一歩前に踏み出そうと思える。でもその……見ていて危なっかしいところとかがあるの」

もの凄く言いづらそうだけど、そういう物なんだろうか。

うーん。俺はこういう時、馬鹿だからさっぱり分からん。

ただまあ、これは言っているだけだ。

「つまり、シルファは本当にヴィーナのことが大好きなんだな?」

「……そうだけど、はっきり言うのね」

なんか真顔で言われたけど、変なこと言ったか?

なんていうか、普段の態度にしても今の言いぐさにしても、シル

フアはヴィーナのことが本当に大好きだって思えるしな。

だからおかしなことは言っていないと思うけど、まあいいか。

「いや、だってお前ヴィーナ大好きじゃんか。俺も大好きな人の為ならいくらでも頑張れるしき、親近感が湧くけどさ」

うんうん。俺も愛するリアス達や信頼する仲間達の為にも、一生懸命頑張ってます。

もちろんハーレム王になることも目指しているし、だいぶいいところまで来ているとは思ってる。ただそれはそれとして、仲間の為なら命賭けられるからな。

あ、でも一つ言った方がいいことがあったな

「ただ経験論だけど、あんまり自分を誰かの為に犠牲にすると怒られるぜ？ 俺も何度もやって、説教されたり泣かれたりしてるからなあ」

「……常習犯が言っても、説得力に欠けてないかしら？」

ぐ、痛いところを突かれた。

ただ、説得力に欠けるのは違うと思うぜ？

「自分にできないことも、誰かならできることってあるだろ？ カズヒもそういうところはしっかりしてるから説得力があるしな」

カズヒは本当にそうだからな。

気合と根性で限界を超越するし、隙を見せれば毎度毎度やらかすし。

うん、その上で説教されてなお説得力があるしな。

ま、これは経験しているかどうかもあるだろうし、いいか。

今言うべきは――

「俺はしないで済むように頑張ってるけどする羽目になってることが多いしな。お前もヴィーナのことが好きなら、ヴィーナが大好きな自分のこともちよつとは気にしてやろうぜ？」

――うん、これだ。

これからも俺は、自分が腕一本捨てるとか代償を払うことでみんなが助かるのなら、やっちゃまうだろう。

ただ、好き好んで命を捨てる気はない。生き残る目がほかにないこ

ともあるし、一度盛大に皆を泣かせてるからな。そこは気合入れて何とかしてきたいです！

だから、その為に大事なことをしないとな。

「……皆で頑張りや、一人だけじゃできないこともできるってもんだ。まずはヴィーナと頑張ることから始めようぜ？」

実際、そこは大事だよな。

やっちまうにしても、そこまでの心構えはしっかりしないと。カズヒもよくやるけど、あれでしかないように気を使つてるところはあるし。……しててあれだけだ。

「ま、それでもまずいんなら俺や九成に相談してくれ。九成は色々できるし伝手もあるし、俺も腕つぶしと伝手には自信があるからさ？」
なにせ神様からスカウトされたり、いろんなところのお偉いさんに気に入られているからな。

この調子ならグレモリー次期当主のお婿さんだし、コネもヤバいぜ、絶対。

そして、シルファもなんか小さく嘖き出すと、小さく苦笑してきた。「そうね。ま、その方がヴィーナお姉ちゃんの為になるなら……そうするわ」

その笑顔はなんていうか、晴れやかだな。

「お、普段からそんな風に笑ってる方が、絶対可愛いぜ？」

うん、こういう笑顔はいいことだよな。

可愛い女の子の可愛い笑顔。もはや栄養素だぜ！

と思つたら、なんか急にすまし顔になった。

ただ顔を赤くしているけど、風邪か？

「……そういう事ばかり言ってるから、そういう事なのね」
「どういふことっ!？」

言ってることがさっぱり分からん!？」

戦愛白熱編 第八話 男子会と女子会

和地 Side

「「あ〜……っ」」

俺はイツセーやアニルと共に、別館のサウナで一息ついていた。

男同士のゆったりとした空気、最高……っ！

同性同士で阿保をやることでしか得られない心の栄養素はある。確かにあるんだ。

そう思いながらまったりしているけど、こういう時間は必要だよなあ。

「ああ〜。日頃の疲れが熱気で溶ける〜」

俺が思わずそう告げれば、イツセーも頷いている。

「ほんとにな〜」

そんな風にイツセーも呟き、アニルも頷いていた。

「ツスねえ。競技試合は実戦とはまた違うっすねえ〜」

アニルもそう言うほど、俺達は意外と疲れている。

実戦に比べれば死亡のリスクは大きく減じているが、それでも鍛えられた者達との闘いだ。やはり疲れる時は相応に疲れる。しかもインターバルも短いしな。

それに衆人環視というのも、また意識の上で負担があるものだ。競技試合だからこそその感覚と言えはいんだろうな。

そもそも実戦と競技試合では、強さの種類が違ったりところもある。その辺りも、実戦に慣れ切っている俺達には負担になっているだろう。ルールに則った戦いには、則った戦いにしかない負担もある。つまりるところはそういう事だ。

だからこそ、こういう休息も大事なんだろうなあ。

「で、とりあえずは俺達連戦連勝なわけだ。ま、手古摺ることも数多い

けどな」

「ほんとになー。ゲームはやっぱり、実戦とは違うところも多いよなあ」

俺もイツセーもついついぼやくけど、実際なんとか勝っていることも多いわけだ。

ま、リザーブメンバーも用意できるのがアザゼル杯。にも関わらず俺達は、駒をまだ全部埋めてもないわけだからな。駒を全部埋めていたり、ゲームに習熟している奴らなら付け入るスキはあるだろう。

ポツポツとだが、予選の段階でリタイアを表明しているチームも出てきている。今後は心身ともに精強なチームが残っていくわけで、更に苦戦することにもなるだろう。

いや本当に、大変ではあるよなあ。

「でもま、オカ研主体のチームはほぼ連戦連勝だよな。アニル達も全戦全勝だし」

イツセーがそう誉めると、アニルはちよつと苦笑していた。

「王がリュシオンさんですぜ？ そりゃそう簡単にはやられないでさあ」

なるほど確かに。

神の子ディア・ドロローサに続く者。新規神滅具の保有者であり、前人未踏の至った状態から至つてない状態に戻る事ができる化け物。歴史に残る枢機卿から、直々に傑物中の傑物と証明された男。

間違いなく教会の歴史に残る手練れであり、現役の戦士に限れば片手の指が余るほどの上位だろう。

そんな人物が王キングである以上、王を倒す必要のあるルールにおいてはめつぼう有利。とはいえ、時間切れで判定負けもないわけだが。

つまるところ、他のメンバーも高水準なものが多くという事だ。基本的に若手の戦士達が主体でありながらこれは……控えめに言つて凄いだらう。

「ま、口さがないものはワンマンチームというだろうが、リュシオン抜き質も全参加チームで中堅じゃないか？ よくもまあ、そんな若手が集まったもんだ」

「そうだなあ。アニルもルーシアも頑張ってるし、俺も鼻が高いぜ」俺とイツセーが口々に誉めると、アニルもちよつと照れ臭そうだった。

「ま、そういう連中の言い分を否定できるぐらいのこともしたいっすけどね。激戦でちよつと心が折れかけてるメンバーもいやすんで、その辺りの交代も含めて頑張りますわ」

「あ、そうなのか。……いや、そりゃそうだな」

俺はちよつと首を傾げたが、すぐに納得する。

二代目主神やら巨人の王やら天帝やら、名だたる神話の頂点達が参加しているしな。

それ以外にもやばいのも多い。俺やイツセーも大概だし、神滅具使いがゴロゴロ参加しているし。

たぶんだけど、神クラスが参加していてもさほど有力でない神のチームは、俺達なら勝ち目は十分あるだろう。実際カズヒとか勝ってるし。

案外、D×D主力メンバーが多ければ本戦出場チームになれるところもありそうだな。ヴァーリチームとか、ほぼ確実にできるのでないだろうか。

……だからこそ、俺達も色々とするべきだろうな、うん。

カズヒSide

なんとなくリビングの片隅にいたメンツで、ちよつとお茶会をすることになった。

「……とはいえ、意外なほどに勝率が高いのよね、D×D参加チームって」

話のネタはアザゼル杯。その中でも、私たちD×Dが関与するチームの勝率だ。

流石に神クラスが出張ると負けるチームも多少はいるけれど、そういった場合でない時は基本的に連戦連勝。そして神クラスが相手でも手古摺らせるケースが多い。総じて勝率の高いチームとして評価されている。

おそらくだけれど、本戦出場チームは結構な割合がD×Dが関与するチームでしょうね。神クラスが所属するチームも多いでしょうけれど、それを踏まえてもかなりの数を占めることになるでしょう。

「そういう事ね。とはいえ、ある意味では当たり前でもあるのでしようけれど」

そう返すリアスは、少し遠い目になってカップを見つめている。

「それだけの戦いを潜り抜けたのだもの。今となってはコカビエルが弱い部類といえるほど、私達の敵は強大な者達が筆頭となっていたわ」

カップ越しに見ているのは、それだけの敵達。

墮天使最高幹部で数少ない武闘派でもあるコカビエル。思えばオカ研が他勢力混合集団となったのは、あいつが余計なことをしたからでしょうね。

そしてオフィスの蛇や亜種聖杯で強化された、旧魔王血族三人。神滅具保有者を三人も擁し、主力は全員至っている英雄派。その間にはあらゆる要素で底上げされた、北欧の悪神ロキ。

クリフォトとの戦いも同レベル。戦闘特化型の人造惑星ステラフレームや復活させた伝説の邪龍。それを率いる超越者リゼヴィム・リヴァン・ルシファア。かすめ取った天龍クラスの邪龍や超越者クラスたるヴィール・アガレス・サタンとの、トライヘキサを巡る三つ巴。

そして、極晁奏者ミザリ・ルシファア。……誠にいとこの戦いは、文字通り熾烈だったわ。トライヘキサを核とした隔離結界領域全てを力に変えたあの男の弄奏を、衛奏抜きで打倒するビジョンはいまだに

見えない。

冷静に考えると、戦闘型でない神クラスならタイムンでも負けかねない連中ばかりが筆頭になっている。

間違いなく、奴らがチームを率いれば、アザゼル杯でも高い勝率を誇ったことでしょう。それほどまでの難敵だと今でも確信できる。

「……勝率が高くて当然ね。そうでなければ私達は死んでたわね」

「そうね。異形の歴史を振り返っても、一年足らずでここまで驚異的な難敵を戦闘を繰り返した者は極僅かでしょうし」

私とリアスが思わずため息をつく、参加している最後の一人が苦笑していた。

「アハハ……。その、オカルト研究部に参加していて、よく私が生きてたなあって思えて来ました」

ルーシアはそう言うと、少し額に冷や汗を浮かべている。

まあそうでしょうね。一手は何だけれど、ルーシアって私達全体で見るとその……戦闘面での強みが薄いわけだし。

神器を持つているわけでもないし、星辰奏者の適性もない。加えて魔術回路や異能の特性も無い以上、本当にスキルはある悪魔祓いの若手でしかない。

……よくぞ、心病まずに生き残れたわね。

「本当に、頑張ったわね」

「同時に言わないでください。自分でも納得ですけど」

言いたくなるわよ。

まあ、終盤で夢幻召喚^{インクルード}を獲得してからはだいぶ底上げされたけれど。それにしたって、よくぞここまでついてこれたわ。

むしろリユシオンの歪みが漸く対応され始めて、一皮むけたところもある。そういう意味では、ブラコンというのも大変ね。

……本当にそこは大変ね。

「私も毛色は違うけれど経験があるから分かるわ。こじらせたブラコンをよく持ち直したわね」

「すいませんカズヒ先輩。カズヒ先輩と比べられるのは、もの凄く失礼な言い方ですけど何か違います」

……本当に言うようになったわね。ド正論だから反論しないけれど。

「ふふふ。ルーシアも人間として成長しているようね。うかうかしてられないんじゃないかしら、カズヒ？」

追加でよく言ってくれるわね、リアス。

「ふふふ。コンプレックスがつかない程度の兄大好きで済んでるからって、あまり偉そうにしないでくれるかしら？」

「ふふふ。知ってますよ、隔離結界領域が隔離したあと、それとなくサーゼクス・ルシファー様の写真が載った雑誌を多く見るようになってるリアス先輩のことを」

私の切り返しに乗ったルーシアに、リアスの頬が若干引きつった。

ほんと、いい性格になってるわねルーシアも。

ま、あまりすぎすぎした空気もあれね。

そんなことを同時に思ったのか、三人揃って紅茶を一口。

さて、再び共通の話題に戻るとしましょうか。

「で、それぞれ規模の大きな戦いになるわけだけでも、どうなのかしらね？」

今後の試合に関しての話が、一番穏便に済みそうね。

「……そうね。オリュンポスとアースガルズの二代目主神が敵なうえ、その王は魔物達の王テュポーン。……こちらも切り札を用意するべきでしょうね」

「ミスターブラックさんの投入ですか？ たぶんですけど、全盛期の天龍クラスはありますよね。……誰かという以前に、どこから見つけてスカウトしたのが気になりますね」

ルーシアが若干呆れ気味の表情を浮かべるけれど、まあ確かにその通りね。

アザゼル杯の駒価値で兵士八駒全部埋めるとか、どんな化け物なんだか。魔王クラスでも八駒は極僅かだし、それこそ主神クラスの化け物にはなるでしょう。

その上で、いやでもイツセーと比べられるポジション。心理的な抵抗もあることを踏まえれば……誰も参加したくないわね。複数人な

らともかく、たった一人でだもの。

とても気になるけど、リアスは微笑むだけ。

「ふふ。それは試合を見るまで待つて頂戴。彼も流石に、次期主神や魔物の王を相手にするなら出てきたがるでしょうしね」

なるほど、かなり自由にやらせているようね。

裏を返せばそれだけの実力者が揃っているという事。……今後が気になるわね。

まあ、それはそれとして。

「ルーシアは和地が相手でしょう？ ……勝ち目、あるかしら？」

と、リアスはそう伺うように聞いてくる。

まあ実際問題、和地はかなりの強敵ね。

神器を二つ宿し、魔術回路を持つ、星辰奏者。更に神滅具を新たに宿し、極晁星に至っている。

間違いなく最高峰のポテンシャルを持っている。如何にリュシオンとて、和地が守りに徹すれば崩すのは困難でしょう。

そして人数ではフルメンバーを揃えられる若人の挑戦チームが有利とはいえ、涙換の救済者チームは手練れが多い。数では有利をとれども質では有利をとられることになる。

「和地は強いわよ？ ……さて、どう挑むのかしら？」

そう挑戦的に私が告げれば、ルーシアは小さく微笑んだ。

「ご安心を。こちらは無様な試合をする気はありませんので」

ふふ、戦える自信はあるようね。

なら、深く聞くのは野暮ということにしましょうか。

そう思っていると、今度は二人の視線が私に集中する。

「そういうカズヒ先輩こそ、あのグレイフィアさんが相手ですよ？」

「そうね。魔王血族を従え、更にフロンスズの支援まで受けているもの。

……何を考えているのかしら、お義姉さまも」

ルーシアもそうだけれど、特にリアスはやはり渋い顔ね。

まあ、そうでしょうね。

政治的には対立していると言ってもいい、大王派の実権を握ったフロンスズ。

それを魔王サーゼクス・ルシファアのシンパを丸ごと抱きかかえることもできるだろうグレイファイアさんが協力する形で、チームとして参戦している。

疑問が多すぎて頭を抱えなくなる。そういう事態なのは分かっているけど――

「まあいいわ。最近話をさせてもくれないのでしょうか？」

――なら、私のやることは一つだろう。

「乱暴な言い方だけれど、拳で語り合うとするわ。……大丈夫、私は荒事に強いもの」

いい機会だし、リアスの心配の種を減らせないか試してみてもいいでしょう。

……覚悟しなさい、グレイファイア・ルキフグス。

ちよつと暴走が過ぎていると、ここで教えてあげるわね。

戦愛白熱編 第九話 聖騎士と激突です！

イツセーSide

よっし、新たな試合の幕が上がるぜ！

気合を入れてスタジアムの控室を歩いているけど、やはり緊張感の一つや二つは湧いてくるな。

「さて、相手はデユナミス聖騎士団か。……ふふふ、腕がなるね」

「そうね、ゼノヴィア。教会武闘派の顔たるデユナミス聖騎士団、彼らなら相手に不足がないわ！」

ゼノヴィアとイリナが戦意満々だけど、本当になあ。

相手はデユナミス聖騎士団。しかも、今後の和平を考慮して、各勢力から星辰奏者をスカウトしての複合チームだ。

ヒマリがヒツギにスカウトされたのも、それが大きい。神の子を見張る者のエージェントだから、墮天使側の担当になっているそうさ。

いろんなところに属している星辰奏者をスカウトしているらしいし、面白いことになりそうだなあ。これも和平の成果って奴か。

「主、この戦いも勝ち、主の名を更に知らしめましょうぞ！」

「その通りですわ。デユナミス聖騎士団の方々には悪いですが、先の試合で拵んだ勢いを次でいきなりなくすわけにはいきませんもの」

ボーヴァとレイヴェルがそれぞれ戦意満々なことを言うけど、そう簡単にはいかねえだろ。

なにせ相手は教会の精鋭部隊。色々あつて人も減ったようだけど、だからこそ心技体揃った実力者が残っている。それも、各勢力から星辰奏者が参加しているぐらいだしな。

間違いなく強敵だ。これは油断できないぜ。

……そして、ヒマリとヒツギがいるんだよなあ。

ヒマリ・ナインテイルとヒツギ・セプテンバー。道間乙女から分かれた二人の生まれ変わり、俺によって準赤龍帝といえる状態になった子達。

外側だけ見ると口調もあってお嬢様に見える時もあるけど、元気いっぱい天然が入っているヒマリ。

一見するとギャルっぽい雰囲気を持っているけれど、振り回され気味でしつかり者のヒツギ。

二人が二人としてしつかり確立しているからだけど、結果的に仲が良すぎる凸凹コンビ。ま、そんなところも愛しく思うけどさ。

そんなわけで、あの二人の連携攻撃はかなりヤバイ。星光も仮面ライダーも連携前提になっているから、タッグ状態なら神クラスにも届くだろう。

つまり、強敵ってわけだ。

俺の周りって、本当に強くて可愛い女子が多いって思うなあ。いや、ホント。

「ヒマリさんとヒツギさんを、何とか引き離せば有利になりますか？」

「そうですね。ですが、相手だつてそんなことは承知ですわ」

アーシアが思いついたことを言うけど、レイヴェルがそれを認めたくらうえで首を横に振る。

「デュナミスの新生チームは、デュナミス聖騎士団のメンバーが連携を補佐する形で他のメンバーを生かしております。数においては明確にこちらが不利ですので、なおのことそれを崩すのは困難でしょう」

そうなんだよなあ。

デュナミスの新生チームは、今後新生させることも含めたデュナミス聖騎士団のチーム。だからこそデュナミス聖騎士団が主力だし、彼らの高い練度が俺達にとって脅威になる。

そしてそれを踏まえても入れていいと判断した他勢力の星辰奏者。つまり、それだけの価値があるメンバーで構成されているわけだ。

油断できるわけがない。間違いなく、強敵だ。

だからこそ――

「勝つぜ、皆」

――俺は、それを言つてのける。

振り返り、俺を見てくれる皆に拳を突き出して見せる。

「俺達はいつだつてそうだった。相手が全力で来るなら、俺達も全力で挑むだけだ。それが礼儀で……勝つ気でいくぜ！」

その言葉に、皆も力強く頷いてくれる。

ああ、挑ませてもらうぜ二人とも。

俺は、俺達は……勝つ！

和地 Side

関係者コーナーにうかつに入れないので、俺は一人で近くの自販機コーナーにいた。

と、そこに飲み物を買いに来た二人組。

期待通り。来てみて正解だったな。

「よっ、二人とも」

「あ、和地ですの」

俺が手を挙げると、真つ先にヒマリが反応する。

「もしかして応援？」

と、ヒツギの方がそう言うけど、まあそういう事だ。

「どっち中心で応援するかは悩んだけど、イツセーの方が比率は多いだろうしな。俺は元相棒達を応援させてもらいます」

冗談交じりでそういうと、ヒマリは小さく首を傾げる。

「んもう？ 何回も何回もS〇Xした仲ですのに—」

「シヤラップ」

素早くヒツギと共に、俺はヒマリの口を塞いだ。

そうだけど。そうだけどね？ そういうのはもうちよつと隠しなさい！

俺とヒツギが視線を合わせて肩を落とすと、ヒマリはそこから抜け出した。

「あ、ごめんなさいですの」

お、珍しく反省—

「ヒツギは一回だけでしたわね。今のは説明がおかしい」

「そこじゃない！」

—してるけどそうじゃない。

嗚呼全く。こいつザイアの生活が長すぎて、この辺の感性がぶつ壊れているなホント。

この辺りの矯正ができなかったのはきつい。いや、本当にきつい。「今後とも、イツセーと一緒に苦労させると思う。……いざとなつたら手伝うから呼んでくれ」

「りよーかい。期待してるからマジで頼むじゃん？」

半目でヒツギと同情しあつてから、俺は肩をすくめつつ二人を見る。

「ま、どっちが勝つか分からないけど……胸張れる戦いを目指すんだな。それなら無念はあつても悔いはないだろ」

なんとというか、ありきたりのない言葉になったかもしれない。

ただそれでも、胸を張つて戦えたといえるのなら、割とすつきりした結果になるだろう。

やらずに後悔するならやってから後悔した方がいい。そんな言葉がある。

やって後悔するぐらいなら、最初からしない方がいい。そんな反論もある。

そのどちらにも言い分はあるんだろうが、俺が言えることは一つある。

全てに勝つなんて不可能に近い。負ければ嫌な思うもするだろうし、無念も出るだろう。ただ、悔いは残らないように戦い抜くことは、競技試合ぐらいならできよう。

なら、大事な仲間にそういった試合ができることを願いたい。俺はそう思う。

だから、まあな？

「……思う存分頑張ってこい。そこは間違いなく応援できるからさ？」

ああ、そこははつきり断言できる。
なんとたってー

「仲間の健闘を願うのは、当たり前のことだしな」

—そう、心の底から言えるから……さ？

「もちろんですわ！ むしろイツセーの首級を上げるぐらいでいきま
すわよ！」

元気いっぱい笑顔でヒマリはそう言ってくれるけど、首級を上げるな。

「たはは……。ま、変に出し惜しみはしないじゃんか。ほら、イツセー
が相手だし？」

そう言ってくれると助かるぜ。ヒツギはそれぐらい冷静な方がいい
だろうしな。

ああ、そこは心から応援してるからな？

『さあ、アザゼル杯もそろそろ序盤は終わり、激闘は更に激しくなりま
す!』

スタジアムに響き渡る、実況の声。

そしてそれに呼応するように、対を成す入場口から選手たちが舞台
に向かう。

『さあ! みんなのアイドルおっぱいドラゴン率いる、? 誠の赤龍帝
チーム! そして教会の誇るデュナミス聖騎士団を中核とするデュ
ナミスの新生チーム!!』

『『『『『わあああああああああつ!』』』』』』』』

鳴り響く大歓声に応えながら、舞台上上がる二つのチーム。

双方が笑みと共に向き合う中、それを見据える者達も数多い。

「さて、教会の顔役たるデュナミス聖騎士団に、D×Dの顔たるおっぱ
いドラゴン。双方ともにどんな戦いをするか、見ものだね」

「個人的には^{エスベラント}デュナミス聖騎士団に注目ね。アマゴフォースも彼らと
同じで星辰奏者が中核だから、戦術には参考にできる点が多そうだも
の」

並び立ってそう語り合うは、英雄派の曹操とサイリン・アマゴ・ドウ
ルーヨダナ。

共に英雄派でありながら、比較的自由に動けるメンバーでもある。

ゆえに、直接試合会場まで足を運んでの試合観戦。

今後の難敵となりえるだろう者達を調べるのは、対策として当然。
こと敵を調べ上げてから挑む傾向のある英雄派にとって、それは何ら
おかしいことではなかった。

と、そこに足音が響く。

「……ほお? おぬしらも来ておったのか?」

視線を向ければ、そこに歩み寄るは九条・幸香・ディアドコイ。

「やあ。フロンスの子飼いは自由みたいだね?」

「天帝の子飼いや自由のようじゃのお?」

軽い皮肉の応酬をするが、双方ともに本題はそこではない。

そのまま視線を向ければ、そこでは試合のフィールドに転移される

両チームの姿が。

かつて英雄派という同じ組織に属していた者として、強者との戦いに心躍る精神性が双方にある。

ゆえにこそ、まづこうこと無き強者であるおっぱいドラゴンとデュナミス聖騎士団。

その競い合いに心が躍る。

「さて、この試合はどう動くのかしらね？」

そう、二人の反応を見るようにサイリンが話を振った時――

「……ふっ。さあ幸香、呼ばれる前からビールを買ってきたぜ？」

――滑り込むように、一人の男性が曹操と幸香の間に割って入った。

曹操もサイリンも目を見開く。それは、男が高速で割って入りながら必要以上の空気の揺らぎを生んでないという事実。

手に持っているビールもこぼれていない。それは、彼が超高速域で高いバランス感覚を保てるからこそその力量。

その一瞬で、この男は手練れであることを無意識に証明した。

「うむ！　だがこの程度で妾の心は射抜けぬぞ？」

「もちろんさー！　この程度で射抜ける安い女に惚れてないぜ？」

そして同時に、変人の類出であることも理解した。

「……蓼食う虫も好き好き、と君の故国では言うんだっけ？」

曹操のその皮肉に、幸香は苦笑しながら頷いていた。

「ふっ。その蓼はこの世で最も美味だからな。そこのハンバーグでは足元にも及ばないだろうさ」

そして男の方は、頓珍漢な返答を返していた。

「……で、どちら様かしら？」

「ディアドコイ・フライベーター後継私掠船団筆頭戦力新メンバー！　いづれ幸香と添い遂げる

男、ひとつばし一橋・ゆきお幸雄・キャプテン・マケドニアディアドコイ！　帝国船長と呼んでくれ！」

サイリンが尋ねれば、無駄に濃い自己紹介が返ってきた。

五秒、曹操とサイリンは沈黙する。

そして胸を張ってどや顔になっている幸雄をちらりと見てから、幸香は微笑んだ。

「モテる女はつらいものでな。そうは思わぬか？」

「自分で言うのか……」

当たり前障りのない返答が返ってきた。

とりあえず、曹操とサイリンは五歩ほど二人から距離をとったことを明言する。

戦愛白熱編 第十話 激突！ デユナミスの新生
チーム（その1）

祐斗Side

イツセー君達が転移される中、実況の人はルールの解説を行おうとしている。

さて、今回はどんなルールだろうか。

半端な特殊ルールやテクニクなら、問答無用で吹き飛ばす。イツセー君達はそれができるチームであり、下手な神クラスより強大な存在だ。

だがデユナミス聖騎士団も、まごうことなき精鋭集団。

純粋な個の性能ではイツセー君に劣るだろうけれど、連携でそれに対応可能だろう。何より、状況次第では神クラスとの戦闘も視野に入れた部隊のはずだ。イツセー君が相手でも苦戦させれるぐらいの戦闘は可能だろう。

そんな彼らがどう出るか、それはとても気になることだ。

『さあ、皆さんお喜びください！ 今回のルールはアザゼル杯が初運用になる特殊ルール！ その名も、サード・スコードロンだああああっ！』

その実況の言葉に、僕は少し驚いた。

アザゼル杯がお祭りであり、また新しい形のレーティングゲームの模索であるとは知っている。だからこそ、アザゼル杯だけの特殊ルールや新しいルールのテストもするとは思っていた。

ただ、映される映像に多少の予想外が生まれている。

そこに移されるのは、30人前後のデビルレイダー部隊。それも、三か所に投入されている。

「……フロンスの発案？」

「なるほどなるほど？ あの大王派肝いりのレイダー部隊をどつちが早く全滅させるかつすかね？ あ、でもそれだと部隊の数が多いですなあ」

小猫ちゃんとリントさんが首を傾げる中、解説映像が展開される。『ルールは簡単。第三勢力の介入を想定した特殊ルールとなっており、デビルレイダー一個中隊が存在するフィールド内で、彼らとも戦いながら敵の王を撃破するという、ある意味では単純なゲームとなっております！』

その説明に、観客の皆は湧き始める。

デビルレイダーは、フロンズ達大王派の若手が提供した新兵器だ。一体一体の性能はさほどではないが、共通の星辰光アステリズムを連携で運用することで、高い戦闘能力を発揮できるようになっている。

彼らを第三勢力とした状態での、乱戦を模したルール。実際その通りなのだろう。

実戦の練習を兼ねている側面。ゲームにまだ残っているその部分を重点的にしたものだろう。フロンズ達の見が入っているんだろうけど、彼らしい。

僕が感心していると、リアス姉さんは少し渋い顔をしている。

「そういう事ね。……やってくれるじゃないん？」

確かにフロンズらしいルールだけど、渋い表情をするほどだろうか？

そう思っていると、朱乃さんも少し考えこむ表情になっている。

「もしかして、本命はそういう事かしら？」

「……そういう事だろう」

と、朱乃さんに呼応するように、ミスター・ブラックが感心している。

「レーティングゲームに実戦の練習という側面がある。それを逆手に取り、一個中隊のデビルレイダーに乱戦の経験を積ませるのが狙いか」

そうか。その手があったか。

レーティングゲームは実戦の練習という側面もある。ゲームだからそのルールもあるけれど、シンプルなルールなら実戦練習の要素も多分に含まれる。

つまるところ、このルールの本命はデビルレイダーの実戦練習。それも多勢が入り乱れる乱戦を視野に入れた練習になるわけか。

確かに、和平が結ばれたこともあり勢力が入り乱れる乱戦は少なくなる。またデビルレイダーは十数人程度で運用するコンセプトになってない為、レーティングゲームでは実戦練習にしにくい側面もある。

それを、レーティングゲームの敵役として出すことで克服したとは……っ

「ルールを逆手に取ったんですか。あの人達、いつものことですけど抜け目がなさすぎですう」

ギヤスパ―君が感心するけど、同時にちよつと引いている。それもそうだね。

彼らが根本的に政敵であり、背中を預けきれない手合いではないことはすでに僕らもわかっている。

そして政敵ということは、万が一の場合は内乱の形で殺し合いになる可能性もあるという事だ。

その際、少数精鋭の部隊として運用されるだろう王と眷属による編成。それに慣れたデビルレイダー部隊が多数投入されれば。相当の被害がデビルレイダー部隊だけでもたらされることになるだろう。

背筋に寒気が走る。フロンズ・フィーニクス達はどんな可能性まで視野に入れているというのか。

「これは、私達もうかうかとしていられないという事ね」

リアス姉さんはため息をつきながら、そう言い切った。

「気合を入れ直すわよ。次の試合、私達もそろそろ本気でいきましよう」

イツセーSide

『それでは、試合開始は五分後となります！ 両チームともに準備をお忘れなく！』

実況のアナウンスを聞いてから、俺達は集まって会議を開く。

「で、どうするんだこれ？」

俺が真つ先にレイヴェルに聞くと、レイヴェルも少し考えこむ様子を見せた。

「さほどの問題はありませんわね。要はデビルレイダー一個中隊が第三勢力であり、優先目標でもないのですから」

お、レイヴェルは強気な意見。

不敵な笑みすら浮かべて、レイヴェルは指を立てる。

「デビルレイダーの一個中隊程度、イツセー様やアルティーネさん、ゼノヴィア様やイリナ様なら鎧袖一触ですわ。アーシア様もそれぐらいの数から捌き切れるでしょうし、私やボーヴァさんでも圧殺されることはないですから、鬱陶しい以外の何物でもないかと」

容赦ないけど、確かにその通りだ。

デビルレイダー部隊は数と連携で挑んでくる戦力。だけど中級悪魔の十や二十程度なら、俺やアルティーネならまとめて吹っ飛ばすこともできる。ゼノヴィアやイリナでも、手古摺りはしても倒されることはないだろう。

だからこそ、一個中隊のデビルレイダーはそれだけなら物の数じゃない。

それに、ルールを確認する限りデビルレイダーの撃破は明確なポイント変動もない。いくなれば、「目的とは関係のない邪魔者部隊」にとどまっている。

つまりだ。旨味のない第三勢力がいるという、ただそれだけの特殊ルール。レーティングゲームが最大でも30人前後の戦いになるから100人を超える乱戦になりえるこのルールは目立つけど、それだけなんだ。

というよりだ、たぶんだけどフロンズ達の狙いはそこにないだろう。

細かいところはリアスやレイヴェルが考えるだろうし、俺はゲームに集中するか。

「となると、相手チームを潰すことに集中してればいいんだろうか？」
「そうですね。もちろん横からつつかれると邪魔ですが、それは相手も同じこと。あまり深く考えない方が得策でしょう」

なるほどなるほど。まあ、俺も深く考えるのは苦手だしな。

要は乱戦。それも優先順位が低い。そこだけ考えて惑わされるなっってことか。

ああ、それなら分かりやすい。

「皆。ぶつちやけて言うとなフロンズは相いれないけど、それでも一応味方だ。なんか企んでいるだろうけど、むやみやたらと冥界を揺るがせたりはしない。……そこはちゃんと考えていいだろう」

俺は皆を見渡すと、そこをまず告げる。

「あいつらが何を企んでるかは今はいい。それは分かる人達に任せて、俺達はこの試合に集中するぜ!!」

待ってろよ、ヒマリにヒツギ。

デユナミス聖騎士団。相手にとって不足は……ない！

俺は敵情視察も兼ね、一人試合会場に足を運んでいる。

なるほど、実戦を主眼に入れた特殊ルールという事か。そこにデビューレイダー部隊の訓練を踏まえている、と。

フロンズも抜け目ないことで。まあ、今回のメンツならさほど問題はないだろうがな。

「それで、どう思うんだ？」

よく知っている気配がしていたので、俺はそんなことを口に出す。

「第三勢力が増えた程度でやることは変わらんだろう。俺ならただ殴り倒すだけだな」

そう返すのは、俺と同じで敵情視察に来ていたのだろうサイラオーグ・バアル。

そして同時に、ちよつと見知った人も来ていた。

「お久しぶりだな、サイラオーグ。……それと、マグダランさんも」

「ああ、久しぶりだ」

そう返すマグダランさんは、眷属を含めてサイラオーグ・バアルのリザーブメンバーに収まっている。

どうやら兄弟関係はそれなりに修復できたようだ。例のバアル城襲撃事件が、お互いに腹を割るいい機会になったんだろうとしておう。

それはそれとして、だ。

「フロンズも色々と動いているようだが、バアルとしてはどれぐらい掴んでいる？」

「軍事力の刷新に力を入れているようだ。使われている技術の見直しを進め、技術面でもコスト面でも古く遅れている分野を更新しているな。あと、浮いた分の数割を給金にも回しているようだぞ」

サイラオーグ・バアルもやることはやっているようでありがたい。そして、フロンズ達も動いているな。

これまで旧態を維持したうえで利権を独占する方向が強かったのが大王派。だがフロンズが大きく実権を握ったことで、一気に改革が進んでいる。

王の駒やゲームの不正で、大王派の古い権力者が大きく失脚したこ

とが大きい。更にフロンズがバアル本家の危機を救ったこともあり、残った大王派に対する影響力が大きくもなっている。そのフロンズの立ち回りもあり、生き残った旧家もあまり反発しないているしな。

それを利用して、変えられる部分を急激に刷新。その空いたリソースを人心掌握に回している。やり手なようで何よりだ。

今回のゲーム新ルールもその一環。おそらくだが、サンタマリア級を攻めるミッションやGFを仮想敵とするミッションも提出しているだろう。

……きな臭いところもあるが、同時に冥界全体に益が出る動きでもある。政敵の範疇を出ない程度の立ち回りだな。

まあ、各勢力が和平で大体まとまっているのが現状だ。衛奏によりスファイア極暁星というちやぶ台返しも難しくなっているしな。フロンズも馬鹿なことをする発想はないだろう。

冥界の未来を自分なりに考えている。その一点においては間違いない。俺もそこは考えている。

とはいえ、だ。

「政敵つてのは、完全に背中を預けられるものでもないからな。隙あらばどこかにとつてもない權益をねじ込みそうなやつらだし」

「そうだな。悔しいが、ソーナ抜きでは政では俺達は苦戦必須だろう」
だろうな。

ソーナ先輩、前回の自爆戦法でフロンズのボーダーラインを感覚的につかんだらしい。ギリギリの塩梅でせめて、向こうとやり合っているとか。

あの人本当に頼りになる。戦力部分では一歩劣るが、頭脳面ではD×Dの主力だしなあ。

ま、それは置いておいてだ。

「ま、兄弟仲はましになったようで何より。血の分けた家族が変にいがみ合うのも嫌な話だしな」

「……その節は、心配をかけたようだな」

マグダランさんは悪い人じゃないだろうし、サイラオーグ・バアル

も合わないところはあがあるが好漢だ。

面倒な家に生まれて面倒なことが多いだろうが、ま、これぐらい仲がいいならこつちが援護すればある程度は乗り越えられるだろう。

フロンズに関しても考えすぎは良くない。奴は政敵だが、政敵の範疇内に収まっているのなら敵の敵ではあるし歩調もある程度は合わせてくれる。

サウザンドフォースは底が見えないし、禍の団も新たな盟主を獲得した。流出した技術による各種テロリストはもちろんなこと、ここ最近は出所不明の技術までもが現れている。

注力するならそこであり、そして今はそこでもない。

「ま、今は素直に試合を観戦するか。ちなみに俺は今回、デュナミス聖騎士団側につかせてもらおうがな」

「俺はもちろん兵藤一誠だ。あの男に魅せられた者としてそこは譲れんのでな」

「……とはいえどちらも凄腕。果たしてどちらが勝つのやら」

「さて、素直に試合を楽しむとするか。」

戦愛白熱編 第十一話 激突！ デュナミスの新生
チーム（その2）

Other side

「そういえばよ？ サード・スコードロン、初試合がおっぱいドラゴンとデュナミス聖騎士団だよ？」

「そうか。それは実にありがたい」

「ありがたい？ どう考えてもちよつと邪魔な雑魚どまりだろ？
ある意味デビルレイダーの価値が下がるんじゃないかね？」

「あれは化け物に負けさせる経験を積ませるのが目的だと言っただろう？ むしろ調子に乗って暴走させないように、神クラスが出てくるような試合を経験してもらいたかったのにな」

「……ま、あれは一個中隊や一個大隊、それこそ連隊規模や師団規模の運用を視野に入れてるからな。統率をとる集団戦術に変な野心はあると困る」

「そう。デビルレイダーはいうなれば、雑兵の蹂躪や人海戦術による圧殺が本命だ。つまるところ、野心や功名心で変な動きをしない者達に与える武装なのでね」

「だからこそ、少数でヤバイ連中に挑むなんて考えを捨てさせるってか？ 怖いねえ、フロンズは」

「ふふ。分ったうえで兵士を調子に乗らせたのは君だろう、ノア」

「後継私掠船団みたいな光極めたメンタルならともかく、有象無象は鼻っ柱が粉碎されるような挫折経験があつた方がいいだろ。命令を順守して余計なことをしないってのが、数担当の連中には必要だからな？」

「そういうわけだ。精々、冥界の英雄と教会の精鋭集団には彼らの増

長するリソースを削ってもらおうか」

和地 Side

俺達が見守る中、ついに試合は始まった。

デビルレイダー部隊はそれぞれ分隊に分かれつつ、外周を囲むように展開し中央部に向かって動いていく。

包囲の形をとることで、あえて乱戦を避ける狙いだろう。またこの形式が本質的に二チームの争いである以上、イツセー達やデユナミス聖騎士団は連携をとるという選択肢は取りにくい。その心理的圧迫も含めているな。

やはり、このルールはデビルレイダー部隊の訓練を兼ねているな。そうでなければ、二チームが決着をつけることを重視しない自分達が両方倒すような策はしないだろう。

さて、イツセー達はどう動くかと思ったとき。デユナミスの新生チームに動きがあった。

『おおっとお!? デユナミスの新生チーム、全力で後退しております!?! どういう動きでしょうかあ!』

デユナミスの新生チームは凄いい勢いでフィールドの端に移動している。

……なるほど、そういう事か。

「背水の陣、という事か?」

サイラオーグ・バアルも気づいたようだが、おそらくそうだろう。

ただ、マグダランさんの方は首を傾げている。

「背水の陣は知っていますが、レーティングゲームでする意味があり

ますか？」

言いたくなる気持ちは分かる。

レーティングゲームは限られたフィールドでお互いが競い合う競技だ。背水の陣以前に逃げる事がほぼ不可能であり、態々そんなことをする意味が薄く感じるだろう。

だが違う。あれにはもつと意味がある。

「マグダランさん、実は背水の陣は堅実な策なんです」

そう、あの策は案外理に適っている。

「元になった逸話では、あれは敵を城からおびき出すのが目的の一環。その後別動隊で城を落とすそうです」

そう、背水の陣は逃げ道を断って気合を入れさせるだけではない。

むしろ川を後ろにするという事は、逃げる事ができない代わりに敵に後ろをとられる余地も薄くなる。そうなれば集中して戦うことができ、別動隊が城を落とすまでのぎやすい。

そう、フィールドが制限されるということは、後ろをとられない場所をとれるということになる。

加えて――

「自分達は後ろをとられない中で、攻めに転じた兵藤一誠達と攻撃を仕掛けるデビルレイダー部隊が入り乱れたところを攻撃できる、という事だろうな」

サイラオーグ・バアルはその辺りをしっかりと読んでいる。

自分達が乱戦になることを避け、敵の仕掛けてくる方向を制限する。ある意味で正当な作戦だろう。

さて、イツセー達はどう出る――

『喰らえ∞ブラスタアアアアアッ！』

――と思ったら、盛大に大火力砲撃がいきなりぶつ放された!?

そして砲撃はそのまま一片を吹き飛ばす。

巻き込まれたデビルレイダー部隊は瞬く間にリタイアし、安全地帯が完成してしまった。

大味な作戦だが、これは読み切れなかったかもしれないな。

なにせ、疑似龍神化は一分も持続できない切り札中の切り札。可能

ならある程度取っておきたいと思うだろう。雷光チームとの闘いでも、速攻で使ったりはしなかった。

だからこそ、速攻の発動は想定外になる。

そして一方を盛大に吹き飛ばしたことで、イツセー達も安全地帯を確保したようなものだ。

既にそこに向かい進軍してから、時計回りにチーム一丸になって走っている。

やっぱりあの火力、反則じみているな。

今後イツセー達のチームと戦うのなら、あの火力をどうにかする手段かイツセーを完全に抑え込める戦力が欲しいところだ。出なければ、圧殺されるのが目に見えている。

となると、俺達の場合は俺がイツセーを抑え込むしかないだろう。しかしそうになると、俺とキャスリングの組み合わせをブラフにすら利用する俺達のチーム的に扱いが難しいところはある。

やはり人材の確保は急務か。今後を踏まえると、俺一人が極点ではいけないということは確定的に明らかだしな。

そんなことを考えていると、どうやら各チームはそれぞれが集まっているな。

二個分隊ほど吹っ飛ばされたデビルレイダー部隊は、あえて圧殺される可能性を覚悟して一回合流。そのまま移動を開始する。

イツセー達はそのまま時計回りに移動し、しらみつぶしでデユナミスの新生チームを探している。

さて、既に待ち構える形のデユナミスの新生チームはどう動くか。そんなことを考えながら、俺はちよつとだけ目を閉じる。

ヒマリ・ナインテイルとヒツギ・セプテンバー。俺の母親たる道間乙女の成れの果てともいえる、二人の少女。

長年ザイアで相方になっていたヒマリや、出会ってからすぐに苦労人な感じで同調していたヒツギ。二人の少女がイツセーに恋い焦がれていることは分かり切っている事実だ。

だからこそ、俺は二人の方を応援している。

勝ち負けはこの際置いて、悔いが残るような無様はさらすな

よ。そう願う。

さて、どうなるかな？

そう思った時、デュナミスの新生チームも動きを見せた。

……へえ、そう来るかつ！

カズヒSide

試合は序盤から大技が飛び出すような、インパクトのある展開になっている。

最もそこから少し落ち着いているけれど、デビルレイダー部隊を含めた全チームが集まり、そこからといったところね。

「……デビルレイダー部隊に引つ掻き回されることを避けた、といったところかしらね」

私が映像を見ながらそう呟くと、隣の鶴羽も頷いている。

「ま、複数勢力が入り乱れるなら挟み撃ちとかは避けたいしね。当然っていえば当然？」

「安全地帯を確保してから、そこまで集まって囲まれるリスクを減らす。ま、適格だわなあ」

勇ちゃんもそう言うけれど、まあそう来るわね。

……レイヴェルの作戦傾向は、自分達の強みを如何に押し付け続けるかに集約されている。

弱みをカバーする為にリソースを割くより、長所を押し付け続ける為にリソースを集中する。一つの選択肢ではある。

まあ実際、明確な強みがあるならそれを押し付け続けるのは有利だ

もの。それを押し付け続ける戦術ドクトリンはある意味で正道。覇者の在り方といえるだろう。

態々相手の土俵に付き合つてやる義理はない。どちらかと言えば私よりだけれど、そこにどう折り合いをつけれるかが今後を分けるかもね。

そう思いながら試合を見つつ、私は視界に映るオトメねえに意識を向ける。

「で、オトメねえはどう？　大丈夫？」

「その言い方は、おかしくないかな？」

ちよつと不満顔だけれど、この辺りは色々と考え込まざるを得ないから仕方ないもの。

ヒマリとヒツギは、かつての乙女ねえが分かたれて生まれた存在。そしてイツセーはそんな二人の心を射止めている。

だからこそ、気にしないのも無理があるだろう。というより、少しは気にして当然だ。

「ま、どう転ぶかは分からないけどねえ？　それでも、イツセーの場合は安心よねえ」

リーネスもそう言うけれど、オトメねえは寂しげに笑いながら首を横に振る。

「彼はその……そういう風には見てないから。いい子なのは分かるけどね？」

ふうん。

ま、誰も彼もがイツセーに夢中になるわけじゃない。というより、普通の人間にはモテてるわけじゃない。

とはいえ、もうちよつと気にしてもいいかと思っただけだ。

思わずまじまじと見つめていると、オトメねえは少し俯き気味だった。

「私には、ちよつと明るすぎるかな？」

……。

誠には落ち着いているタイプだ。イツセーとは反対の方向性といえる。

そんな誠にいを愛していた乙女ねえからすれば、イツセーは食指が動かないのかもしれない。私が和地というまた違ったタイプと添い遂げたことから、ちよつと失念していたかしら。

そう思っていると、映像の方で湧き上がるような大歓声が響き渡った。

視線を戻すと、デュナミスの新生チームも激突を選んだらしい。既に？誠の赤龍帝チームとぶつかり合っている。

やはりやるわね。というより、大火力砲撃を封じればデュナミス側の勝率は大幅に上がるもの。

更なる追加砲撃がくるより先に、一気に接近して制圧にかかる。そういう判断に映ったという事でしょう。

さて、イツセー達はどう動くかしら？

今後の参考も兼ねて、しっかり見させてもらおうわよ？

イツセーSide

くつ！ そう簡単に思い通りにはいかねえか！

デュナミスの新生チームは俺達に対して真つ向勝負を仕掛けてきやがった。それも、文字通り全チームでだ。

「そう来ましたか。確かこの位置取りなら、デビルレイダー部隊が仕掛けてきても乱戦になりにくい。こちらより早く気付きましたわね」

レイヴェルも歯噛みするけど、なるほどな。

俺達は今フィールドの外延部にいる。一方向だけでもシャットア

ウトすることで乱戦になりにくくする為だけど、相手もそれを考えて動いていた。

そして俺の∞ブラスターで部隊も三分の二になっているから、デビルレイダー部隊は全方位からの圧殺なんてしたくてもできなくなる。純粋に戦力を分散させて対応できる質じゃないからだ。

そしてこの試合は俺たち2チームのどちらかが勝つかという戦いだ。なら、比較的危険度が少なくなったこのタイミングで仕掛けるのは当然。

こつちもゆつくり時計回りで移動しながら対応するつもりだったけど、対応はあつちの方が早かった。

流石は精鋭部隊が母体のチーム。こういう時なノウハウや経験の差が出るってか。

だけど、なあ！

「真っ向勝負は望むところさー！」

俺達の戦いは、そつちの方がやりがいがあるからな！

真正面から打ち破る。いいじゃねえか、お祭り騒ぎにはもってこいだ!!

だからこそ、俺は拳を握り締める。

「行くぜ皆！　こうなれば、小細工無用でいくべきだ!!」

「そうだな！　こちらの方が私達らしいというものだ!!」

「ははあつ！　我が主達の望むとおりに!!」

俺に応えるように、ゼノヴィアとボーヴァもついてくれる。

ああ、この方がいいってmondらろうさ。

勝つ為の作戦は大事だ。だけど、やるなら真っ向勝負の方が性に合っている。

それに、俺もぶつかるべき相手ってのがいるだろうしな!!

「さあ、かかって来いよ……ヒマリ、ヒツギ!!」

俺はそう言い、そして拳を握り締めて突っ込んでいく。

そんな俺に、小さく微笑んでいるのが分かる二人組。

ヒマリとヒツギがそこにいて、そして――

「よかろう！　だがこの戦いはチーム戦である!!」

―降り立った騎士団長。ストラス・デユランさんがメイスを振り上げる。

「何より貴殿は、女体相手にはめっぼう強い！ 一人ぐらいは補佐がおらんとな!!」

「ぐうの音も出ないのでOKです!!」

ああ、それぐらいはかまわないさ。

何より相手も王^{キング}なんだ。それぐらいはなあっ!!

さあ、本格的な戦いを始めようか!!

戦愛白熱編 第十二話 激突！ デュナミスの新生
チーム（その3）

祐斗Side

『創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌く流れ星いつ!!』

その瞬間、ストラス・デュランは星辰光を発動する。

両手の拳を握り締めて攻撃を仕掛けるイツセー君に対して、彼はメイスを巧みに操ってそれら全てを裁いて見せた。

『主の愛に応えるがために幾年月、磨き上げたはこの力。代行として悪を討つ、天の武は此処に参上する』

早い。その対応速度はあまりに早く、それゆえに異常すら感じてしまふ。

そもそもメイスとはその性質上、小ぶりの連続攻撃には向いていない。攻撃を当てる打突部が大きくなる性質上、慣性の法則や重心のバランスが一撃に重視しているからだ。

だが、その上で言える——早い。

『怒りの裁き。慈愛の許し。矛盾を併せ持つ威光こそ、我らが主の輝きなり』

真女王状態のイツセー君は、単独で魔王クラスの力を保有する。それはスピードも尋常ではないということ、龍神による肉体がそれを後押ししているの言うまでもない。

そんなイツセー君の戦闘技術は、かなり高まっている。初代孫悟空殿の教えを受けて力の配分を上手くコントロールできるようになり、無駄もだいぶ省けた。つまり、動きがスマートで流れるようになってきている。

だからこそ、両手に蹴りまで入れた連撃をメイスで捌き斬るのは不可能に近い。

『汝が罪を悔いるなら、今が改める時である。決してたやすくはない贖罪、我らが支えとなろうとも』

そう、ゆえにそれが彼の星。

『恥じぬというなら是非も無し。代行されし裁きによつて、お主を審判へと送り出そう』

それすら補う動作の速さ。それこそが彼の星の性質だ。

『僭越なる代行の重さを背負い、聖なる騎士がここに立つ。主の裁定が下るその時まで、恥じぬ生き様見せようぞ!!』

動作高速化能力。とても分かりやすい星辰光が具現化した。

『超新星―祈りの守護者、聖なる勇士は此処にツ!!』

更に、その力は瞬く間に増大する。

発動値に到達したうえで、さらに感応する星辰体が増大化する？

まさか、これはつまり―

『人造惑星化する禁手って、ありなんですか?!』

『前人未踏を何度も行うよりは妥当である!』

―正論でイツセー君を切つて捨て、今ここに恐ろしいまでの力が具現化する!

ストラス・デュラン

祈りの守護者、聖なる勇士は此処に (括弧内は禁手発動時)

基準値：D (B)

発動値：A (AAA)

収束性：A (AAA)

拡散性：E

操縦性：E
付属性：C
維持性：C
干渉性：E

その豪快かつ俊敏な連撃は、イツセー君を縫い留めるだけでなく翻弄する。

更にそれを掻い潜るように、一対で挑む紅の仮面ライダーが割って入る。

間違いない、クリムゾンラクシュミーにクリムゾンナジーダ。連携戦闘を絶対とする代わりに、大きな進化を遂げた二人の仮面ライダーだ。

ただし、それを無条件で許すわけがない。

そう、そこに滑り込むは二人の剣士。

『三対一とは無粋だな！』

『ふふ、私達も混ぜて頂戴！』

ゼノヴィアとイリナさんが割って入り、戦闘は三対三の様相を示していく。

「……流石はかのデユナミス聖騎士団。相応の者でなければ選ばれないとは分かっていたけど……ね」

リアス姉さんがそう呟くと、素早くタブレットを操作する。

「彼の神器は公表されているわ。準神滅具ロンギヌスである現世を照らす十の宝玉」

準神滅具。教会が誇る精鋭部隊の団長なら、それぐらいはあっても不思議じゃない。

僕が感心していると、ギヤスパー君が唸るようにその戦闘を見つめている。

「僕もある程度聞いてます。幽世の聖杯の下位互換といえる神器で、

「自分の生命と魂を強化する神器だって」
なるほどね。

幽世の聖杯と違い、自分だけを対象にしているという事か。
とはいえ、それはすなわち必要に応じて適した存在に己を作り変えるという事。

その禁手ともなれば、己を人造惑星にする程度はできるだろう。
やってくれるね。

これは中々厄介そうだ。彼も本当に大変だね。

だけど、そう簡単にやられるような人じゃないだろう？

！
さあ、見せてくれイツセー君。僕達が最も信頼する赤き龍の帝王を

和地Side

戦いは激しくなり、更にデビルレイダー部隊まで合流しての三つ巴
へと変化していく。

どちらのチームもそちらに人員を割く必要ができ、必然として激し
い戦いは混乱の様相を見せていく。

『うおりゃああああああ！ 地球う……パンチッ！』

『甘い！ 正面から競り合うな！』

アルティーンが絶大な力をもってして暴れば、それをデユナミス
聖騎士団が、数人で上手くいなしている。

？ 誠の赤龍帝チームとは違い、デユナミスの新生チームはメンバー

の数が多い。数人を割いて対応する程度は余裕でできるという事か。さて、それを踏まえても質ではイツセー達が有利に見えるのも実情。なにせD×Dの中核たるオカ研は、俺が言うのもなんだが若手の化け物揃いだからな。

星辰奏者の完全上位互換たる人造惑星を同時に複数相手どれる連中だ。もう一手ぐらいは欲しいところだろう。

だが同時に、そこにデビルレイダー七個分隊が襲い掛かっている。位置取りから一面を抑え込むのが限界だが、それでも嫌がらせには近いわけだ。

『ぬうん！ 我が主の戦いを邪魔はさせんぞおっ!!』

『我が隊は奴らを止めるぞ！ 天然ものを舐めるなよ!!』

『『『『『おおっ！』』』』』』

ボーヴァや騎士団がデビルレイダー部隊に対峙するが、あつちも連携戦闘でいやらしい立ち回りをしている。決着がつくのにはかなりの時間がかかるだろう。

さて、その状況を抑え込む要たるは、アーシアだ。

レイヴェルがカバーをしながら上手く回復をかける中、それを割つて入るように突っ込んでくる少女がいる。

彼女は悪魔の翼を広げながら、黒い狗に跨りつつ槍を持って攻撃を開始する。

『フェニックス本家の令嬢とはいえ、試合ならば容赦はしません!』

『何者かは知りませんが、それでよいのです！ これはレーティングゲームなのですから!』

高い不死性のレイヴェルと鬼回避のアーシアをもってしても、その攻撃は油断できない。

槍そのものは聖なるオーラを纏っており、更に乗っている大きな狗を基点として刃が生えて迎撃している。

それをカバーするべくロスヴァイセさんが魔法のフルバーストを放とうとするが、そこに残っている騎士団が仕掛けてきて、それも叶わない。

これは、二人が勝てる可能性も決して薄くないな!

「よっし！ それぐらいはやってくれないとなっ！」

「なるほど、君は今回あちらを応援していたのか」

俺が思わず歓声を上げていると、マグダランさんにそう言われる。

「ま、イツセーには悪いですけどね。俺としてはどっちかになるならあの二人の方が重いんで」

「……色々と珍妙な関係と聞いている。だが、そういうのもいいのかもしれないな」

マグダランさんとそんなことを言い合っていると、サイラオーグ・バアルは腕組みをしながら小さく笑みを浮かべる。

「だが、兵藤一誠もこの程度で終わるわけがない。まだ乳技を放っていないだろうしな」

ま、そこはそうだろう。

女の衣服を粉碎する洋服崩壊。着用物なら素手で壊すよりよっばど効果的にぶち壊せるのが恐ろしい。

おっばいと対話して相手のことを知る乳語翻訳。心を読まずにおっばいに話してもらおうというアプローチがやばい。

その二つはイツセーの代名詞。実際、老若男女の観客からも発動を願う声が聞こえている。……男女問わないのがちよつと引く。

それゆえにイツセーは対女がやばい。敵も基本的には女をぶつけない方向でいくからな。マジでやばい。

だがしかし、俺はため息と共に首を横に振る。

「残念だが、アンタはヒマリを舐めている」

俺はそこに関しては言い切れる。

ああ、だつて――

「というより、俺達がどれだけトチ狂った環境で育ったか分かってない」

――その大前提がやばいから。

ほら、今イツセーが鼻血を吹いて倒れた。

一瞬だが、鼻から大量出血したのでちよつと意識が途切れた。

クソツタレ！ いやな予感はしていたけど、出し惜しみもヤバいでやっっちゃったよ。失敗だよ！

『おおつとおおおおお!? 乳技を発動したかと思いましたが、おっぱいドラゴンが急に血を流して倒れたあああああ!?』

『これは、まさか……?』

実況の方が続いて、解説の人が何かに気づく。

俺はそれに反応する余裕もなく、追撃の攻撃を躲してゼノヴィアとイリナがカバーできるところに行くのに精いっぱい。

ただその間に、解説の方が考えをまとめたみたいだ。

『かつて後継私掠船団は、おっぱいドラゴンの乳技の力を逆利用する形でエロ動画を彼の脳内に流し、力を勝手に消費させることで無力化したと聞きます』

そう、あいつらはそんなことをやってのけた。

恐ろしい力だ。俺は自撮りエロ動画を見てそれはそれでラツキー。だけど効果がないから実はピンチ。そんな技を振るってきたからだ。

それは後継私掠船団だからこそその、トチ狂った連中だけができる技だと思っていた。

トチ狂った技だと思ってたのに――

「なんで一人でエロいことしてるんだああああああつ!!」

――お前らが使ってるんだよおおおおお!?

特にヒツギ！ お前なんでそんなことしてんの!? お前はそんなキャラじゃなかっただろ!?

クソツタレ！ そんなに追い詰められてんのかこら！ お祭りの試合でそこまでするってのか!?

「ふ、服はちゃんと着てるじゃんか！ イッセーしか見ないからって、それでもできることそんなないんだからね!？」

顔が真っ赤になってるのは間違いないヒツギがそう反論する。

あ、それもそうか。

いやそういう問題じゃないと思うんですけど!?

「ちよつとストラスさん!? 疑似姉妹レズ動画を人の脳内に送るって、信徒的にどうなの!？」

いや、天使も俺が天使とエロいことする為の部屋とか開発していたけど!?

一応貞淑とかが美德ですよね!? リアルでそれやっていいの!?

「がっはっは！ 産めよ増やせよというではないか！ 愛がある睦言を全否定するほど、狭量な信徒ばかりではないぞ?」

豪快に笑ってあっさり肯定したよ、ストラスさんってば。

あ、ダメだ。この人も天然だ。結局はこちら側の人間だったのか。も、もう前向きにいこう。エロい映像を見れて満足ということで行こう。

ただ、ゼノヴィアとイリナから、ちよつとピリピリとした雰囲気だ。

「おのれヒマリ！ 私でもそんなものを見せることができないのに、そんな方法で一步先を行くとは許さんぞ!」

「その通りよ！ あと一步まで行つてと思っただけであるいる状況で、疑似双子プレイで出し抜くなんて酷いわ！ ヒツギって最低!」

「風評被害じゃんかあああああつ！ 私は服着て揉まれたりしたただけだし！ バニーガールで胸揉まれて気が狂いそうだったのに!」

「おほほほ！ エロとは脱ぐだけではございませんのよおおおおおおっ!!」

そしてそのまま、それぞれ別の相手と戦闘しながら口論に。

あれえ？ 信徒との試合って、こんなエロい会話をしていいのお？ 怒られないい？

ま、まあエロ動画とはいえ、ヒツギは裸にはなってなかったな。
バニーガールのヒツギを逆バニー姿のヒマリが、胸を揉み合ったり
している程度だ。いや、ヒマリはかなりきわどい映像とかを見せてた
けど。見せてたけどまあ……ヒツギはそこまでは。
でも、これでいいのか教会いいいいいい！

リアスSide

「……やってくれる……っ」

凄まじい三人分の殺気に、僕達は涼しい部屋なのに汗をかいてい
る。

最終兵器たるミスターブラックですら、リアス達に戦慄の表情を浮
かべている。

イツセー君とヒマリさん、間違いなく後が怖いことになるよ。

ヒツギさんは……流石に庇うしかないね。八割被害者だろうし！

戦愛白熱編 第十三話 激突！ デュナミスの新生
チーム（その4）

カズヒSide

「……………でも、本当に私だったのか不思議なぐらい強いよね」

と、オトメねえはそう感嘆の声を上げる。

ちなみに少し遠い目になっている辺り、三割ぐらい現実逃避ね。うかつにつつくのも危険だし、ここは関与しないことが優しさでしょう。

まあそうね。オトメねえは武闘派って印象からかなり離れてるし。ベアトリーチエの力をもつてして、漸く戦闘を可能としているし。

そういう意味でも氏より育ちというべきかしら。

「ま、ザイアは思想がトチ狂ってるけど教育のスキルは凄まじいし。……だからヤバいんだけどね」

「それに、教会の戦士育成機関も相応に優秀よ？ つまりオトメねえも、頑張ればそれなりにできると思うわね」

鶴羽と私が続けざまにそう言うけど、まあそう思うところはある。

かたや、対異形組織の主力候補。かたや、教会の顔役部隊の一員。どちらも無能がなれるような領域ではない。環境もいいうえに努力もしたとはいえ、才能が皆無で至れる領域ではないでしょう。

実際、3V3の戦いは白熱している。

『さあ、行きますわよグリド達！』

『甘いぜ、いけ、デイベイディング・ワイバーン・フェアリー白龍皇の妖精達!!』

駆け巡り地龍と飛び回る飛龍。その群れが激突し、戦場をかき回す。

だが同時に、そこを縫うようにいくつもの砲撃が放たれる。それら

が更に連携を難しくし、イツセー達は押し込まれていく。

連携戦闘を前提にしたクリムゾンユニットにより、ヒマリとヒツギの連携戦闘はかなり優勢。更に本来の目的である、神器の調律により更なる力を現状発揮できる。

『クッ！ 更にできるようになったな！』

ゼノヴィアが強引にデュランダルとヘキサカリバーでかき分けようとすれば、砲撃の半分が収束されたことでそれも難しい。

思わず愚痴るゼノヴィアに、素早い斬撃でヒツギが仕掛けていく。

『ま、こっちも正式に準神滅具に登録されたんでね……つと！』

真つ向からの打ち合いは当然のように避けつつ、ヒツギは聖剣から手を放しての射撃でゼノヴィアに傷をつける。

……そう、ヒツギとヒマリの神器は、この度正式に準神滅具に認定された。

ドラクナイト・メイ ドラクレイ・カノン 龍の外装と龍の咆哮。八面王とリントドレイクを封印したそれは、イツセーの赤龍婚乳により変化を遂げ、全く別物へと進化してしまつた。

その名も、ブリストメイ ブリストカノン 赤妾龍の鎧群と赤妾龍の砲兵。

自身は龍のオーラを纏い、更に鎧で出来た龍の群れを率いる赤妾龍の鎧群。背中に八つの龍の砲門を展開し、更に八つの龍が絡みついた大砲を具現化する赤妾龍の砲兵。

共に本来の状態なら禁手でも片方ぐらいの代物を、同時に展開する進化形態。そこに常時覇を発動できる二人のポテンシャルが加われば、龍王クラスと真つ向から渡り合える性能に到達している。

如何にイツセーがゼノヴィアやイリナと連携しているとはいえ、準神滅具クラスが三人もいればそう簡単には倒れない。

……さて、とは言えここで終わるほど甘い男でもないでしょう？

そんな男にヒマリとヒツギを託すのは不安だもの。もうちよつと見せてもらおうよ。

どの口が言うと言われそうなことを思いながら、私はこの戦いを見守っていく。

さあ、見せて頂戴。？誠の赤龍帝、兵藤一誠。

あなたの煩惱と根性と努力と予想外の爆発力、この程度で済むわけがないでしょう？

和地Side

『ぬううううううん!!』

『おりやあああああっ!!』

高速で振るわれるメイスと打撃による攻防は、いまだに激しい。時として距離が開けてもすぐにつまり、更に龍の群れと砲撃が入り乱れる。

時として相手が入れ替わることもあるが、基本はストラスさんがイツセーを相手にしている形だ。

援護しようとするゼノヴィアとイリナだが、多重砲撃と大量の龍が邪魔になる。

そして、そこを機敏に動きながらヒマリとヒツギが相手を目まぐるしく変えつつ戦闘を行っている。

……これ、勝てる可能性かなりあるだろ。

何よりストラスさんがこの連携を乱していないのが大きい。結果としてイツセー達は連携面で割って入ることができず、ポテンシャルの差を押し返されている。

うん、これはちよっと手に汗握る。

何より連携面が上手くいっているな。あれが大きい。

「……意外だな。あのマッチメイクなら、連携は兵藤一誠達の方が有

利だと思っただが」

サイラオーグ・バルも首を傾げるけど、確かにな。

一年前後とはいえ、極めて密度の高い死線を潜り抜けてきたイツセー達の連携はいい感じになるだろう。

ただ、ストラスさんとヒマリがここまで連携をかけられるかというところ……そこがなあ。

あの二人、殆ど縁がないからすぐに連携ができるとは思えない。いくらなんでも連携がスマートすぎる。

だからこそイツセー達もここまで苦戦しているわけだ。そして二人を応援する俺にとっても好ましい。それは変わらない。

だけど、それにしたって何か違和感があるんだよなあ。

うーん。これ、もしかすると意外なところに地雷が埋まつてるか？

「……頑張れよ、二人とも」

俺はそう、聞こえないのを分かっていると言っても言うしかなかった。

祐斗Side

戦いは互角になっているけれど、人数の差もあってデユナミスの新生チームが若干有利といったところか。

イツセー君を抑えらえているのも痛い。その状況下では大火力で戦略的に塗り替えることも難しい。またイツセー君が抑え込んでいるからこそその状況ゆえに、キャスリングを使うわけにもいかないだろう。

「……やはり、懸念点はあの連携ね」

そう眩くりアス姉さんもまた、怪訝な表情になっている。

「他の戦闘を見ていると分かるけれど、デユナミス聖騎士団とそれ以外外では、どうしても連携に揺らぎが生まれている。……だけどイツセー達は完全に連携で抑え込まれているわ」

「そうですね。完成度が高い連携になっているのは違和感がありますわ」

朱乃さんも考えこむほどに、あの連携は完成されている。

仮にも何度も死線を潜った、イツセー君達の連携が高い練度なのはいい。だけどチームに入ってから日も浅い状態で、ヒマリとストラス団長がここまで高い連携をとれるのか？

それが気になる中、声が響く。

「なるほど、そういう絡繰りか」

そう眩くミスター・ブラックの言葉が響く。

「だが、そろそろ赤龍帝なら気づくだろう。……ここからが本番だ」

その言葉と共に、戦局は動き出す。

戦愛白熱編 第十四話 激突！ デュナミスの新生
チーム（その5）

和地 Side

その瞬間、イツセーの動きが切り替わる。

相手の攻撃を強引に無視し、相手の被弾を覚悟のうえで――

『そういう事かああああああああつ!!』

『やば、気づかれた!』

――ヒツギに向かって突貫した。

放たれる砲撃も回避せられず、文字通りの強引な突破。

その体当たりが、ヒツギをそのまま数百メートル押し飛ばす。

そしてその瞬間、連携が確かに乱れた。

『ツ！ 今だイリナ!』

『オツケー……っ!』

そしてそれを逃さず、イリナとゼノヴィアが連携でストラス騎士団長を抑えにかかる。

それに対し、ヒマリの対応は迷いが見えた。

そういう事か。なるほどな。

「……これは、連携が乱れた？ どういう――」

「――単純な話だ。基点が抑え込まれたという事だろう」

マグダランさんにサイラオーグ・バアルが答え、俺もそれに頷く。

ああ、答えはシンプルだ。

「あの三人の連携は、ヒツギを基点とすることで初めて高い完成度を持っていたわけだ」

「互いに縁のないヒマリ・ナインテイルとストラス・デュラン。その二

人の共通の知り合いであるヒツギ・セプテンバーこそが連携の核だったのだろう」

俺もサイラオーグ・バアルも、見たことでそれに気が付いた。

ヒツギ・セプテンバーは、人に気を使える人物で立ち回れる少女だ。その少女が連携の基点となることで、本来完成度の高い連携をとれない二人を繋いで連携を組み込んでいた。

裏を返せば、あの二人だけでは連携の完成度は低い。タネさえ分かれば付け入るスキは十分ある。

最も、イツセーレベルの使い手が他にハイレベルな連携で戦っている時だけの手段だけだな。

さて、このままだとデユナミスの新生チームが不利。どう出るか。

『行け、ヒマリ・ナインテイルよ!』

そう思った時、ストラス団長は声を張り上げる。

ゼノヴィアとイリナの連携を真っ向から押し返しながら、ストラス団長はヒマリに声を投げかける。

『ここにきて臆するな! ヒツギと共に挑むがよい!!』

『え、ええ!?! でも大丈夫ですよ!?!』

思わずヒマリも動揺するが、ストラス団長は震脚を思わせる踏み込みでそれを断ち切る。

その勢いでイリナとゼノヴィアを弾き飛ばし、その上でヒマリに振り返る。

『行くのだ! いい機会だろう、お主達二人の想いを、思う存分赤龍帝にぶつけるがよい!!』

その張り上げるような声に、小さく微笑む音が俺に聞こえる。

『同意見だ! かつて教会の戦士だった者として、音に聞こえしデユナミス聖騎士団の団長に胸を借りさせてもらおう!』

『その通り! むしろ邪魔しないでくれると嬉しいわね!!』

ゼノヴィアとイリナすら答えるその声に、ヒマリは一瞬躊躇し、そして走り出す。

……ここが大一番だな。

見てるぞ、二人とも。

そしてイツセー。見せてくれ。
その二つの願いを持ちながら、俺は試合の流れを見据えていく。

カズヒSide

趨勢が僅かにイツセー達に傾く中、戦いは二つの二対一が左右する状況になったといえるわね。

ヒマリとヒツギがイツセーをどうにかするか。ゼノヴィアとイリナをストラス団長がどうにかするか。そのどちらが先かで状況は変わる。

他の戦いが二つの戦いに割って入る余裕を作っていない以上、この戦いはそのどちらかに集約されると言ってもいい。どうにかすることが出来なければ、三対一になってしまうだけだから尚更ね。

だからこそ、私はヒマリとヒツギの戦いを意識する。

合流したヒマリはヒツギと素早い連携で、イツセーとの戦闘を敢行する。

クリムゾンユニットは二人及びイツセーを同調させることで、バグを起こしていた二人の神器を制御する為のユニット。最近はいぶ落ち着いてきたけれど、それでも連携戦闘特化型のあれを使った状態が一番強い。

そしてイツセーは乳技を封じられた以上、その力をもって突破するしかない。

押し寄せる龍の軍勢と砲撃の嵐。それを縫うように振るわれる、二

人の連携。その二重の猛攻を突破しなければ、兵藤一誠に勝利はない。

そしてイツセーはそれを性能で強引に突破しようとしながら、しかし突破しきれない。

当然でしょう。訓練の年季が違う以上、技量でイツセーが二人を圧倒することはまずない。そして以下にイツセーの真女王と言えど、二人がかりの連携ならば通用されてしまう。

『……本っ当に！ 強いよなあ、二人とも！』

『当っ然!! それに相手がイツセーだしさ!』

『頑張りますわよおおおおおっ!!』

笑顔で言ってるのが分かる言葉を交わし、その上で二人は一気に仕掛ける。

イツセーの拳をヒマリが左の聖剣で受け流し、そして構えられるはシヨットライザー。

『クリムゾンブラスト!』

至近距離からの射撃を喰らい、イツセーは鎧をへこませて血を吐いた。

その隙について、二人がかりの連携攻撃は一気に攻勢に転じていく。

それを真っ向から食い止めるイツセーは、感極まったんだろう。

『本当に……俺の女は強いのが多いよなあ!』

そんなことを口にした。

天然でしようけど、これはヒツギ辺りがバランスを崩しそう。いつもの流れだとそう思う。

だけど、今回だけは違う。

『そうだね……愛してくれるんだよね、イツセーは!』

ヒマリが何かを言うより早く、ヒツギがそれに応えつつ攻撃を放つ。

意外に思う中、ヒツギは吹っ切れたように猛攻を追加していく。

『こんな面倒なものしよい込んでる私達のこと、私達として愛してくれるって……なんつーかも、惚れちゃって当然じゃんか!』

至近距離からの砲撃で、イツセーを余波による衝撃が縫い付ける。
『そういう事ですわね!』

そこにグリドを筆頭とする鎧の龍が押しかかり、イツセーの動きを縫い留めた。

『FREE BOOST』

そして飛び上がり、必殺技の構えを見せる。

真女王と言えど、あの拘束を一瞬で吹き飛ばすことはほぼ不可能。
回避は許されず、受けるしかない。

『だから言うよ……言っちゃうじゃん!』

『イツセー……本気で愛してますの!』

その上で、二人の攻撃は完全にシンクロする。

『勝ったらお嫁さんにしてください!!』

『クリームゾンブラストファイバー!!』

だ、ダブル告白キック!?

思わぬ展開に呆気にとられてると、そのまま蹴りが叩き込まれる。
お嫁さんにするつもり満々なところに、二人が勝つたらという条件付きの攻撃。

これは回避しづらいし耐えるのもメンタル的につきいわね。

そう思っていると、視界の隅にオトメねえの顔が映る。

もう二人の自分といえる者達のタッグ告白攻撃に、オトメねえはちよつと顔を赤くしているかと思っただけ、それは違った。

「……うん、それでいいよね」

そう寿ぐように、だけどどこか寂しそうな表情だった。

それを聞こうかと思っただ、その瞬間だ。

『違うだろ、馬鹿野郎!!』

その言葉と共に、画面越しでも分かるようなオーラの奔流が吹き荒れる。

イツセーSide

俺はちよつと我慢しきれず、その蹴りを受け止めながら大声を張り上げる。

「つたく。いい加減にしてくれよな。」

「二人が色々ややこしいことは俺も当然知ってるし、本気で言ってるのは分かる」

放たれた一対の一撃を、俺は右腕を盾にして受け止めていた。

衝撃は強い。鎧にも骨にもヒビが入っている。だけど、受け止められた。

真女王では無理だ。疑似龍神化は消耗が激しく、出すのは危険だ。

「だけど、俺はその種明かしより前にはつきり言う。」

「勝つたらじゃねえよ！ 関係ねえよ！ 俺が惚れた女二人を嫁さんにするのに、そんな条件なんて必要ない！」

少し力の入りにくい右腕に、左手を添えて力を籠める。

ああ、ふざけんな――

「どつちが勝とうが負けようが、ヒツギもヒマリも俺の嫁さんになってくれなきや……困るだろう……がつ！」

—そんなことぐらい、いちいち言わせんなっての！

そして俺は強引に、龍を振り払って飛び上がる。

そして俺の姿を見つめたヒツギが目を見開いた。

「右腕だけ……龍神化？」

そう、俺の鎧は右腕だけが龍神化の鎧になっている。

圧倒的な力を持つ、俺の到達点。それがD×D G。龍神化の

鎧はそれだけの強大な力を持っている。

だけど、それは人間のままなら赤龍帝の籠手を暴走させると断言されるレベルで才能のない、俺にとってはあまりにも強すぎる力だった。

限定的に発動し、それでも一分も持たない疑似龍神化という形が精一杯。けどあまりにも短すぎる。

だからこそのもう一つの方法。それがこの偽りではなく寸刻の時。部分龍神化だ。

リゼヴィムですら生身では壊せないこの鎧。いくらクリムゾンユニットと言っても、一撃で粉碎できるほど甘くはない。

俺はアスカロンを込めた左腕と、部分龍神化の右腕で二人と撃ち合う。

二人はどちらも龍を封印した神器保有者。更に赤龍婚乳パス・トライクで赤龍帝化している。

なら右腕の疑似龍神化と同じぐらい、アスカロンのオーラが籠った左腕も強力だ。

渾身の一撃を押し返し、流れは掴んだ。

ああ、この際だ言つてやる。どうせバラキエルさんとの試合で、思いつきり言つてるからな。

「俺は二人を愛している！ だから勝つたらなんて遠慮をすんな！

っていうか負けても嫁に来てもらうから覚悟しろよな！」

「へ、あ、わわわ……っ！」

迎撃している二人だけど、ヒツギはもう慌ててどんどんペースが乱

れている。

それでも連携で仕掛けるけど、今の状態なら通用しない。

俺は一気に弾き飛ばすと、クリムゾンブラスターの体勢に入る。

動揺しまくり顔真つ赤のヒツギじゃあ、対応は間に合わない。

「これが俺のプロポーズだ！ 二人まとめて……嫁にこおおおおおおおおおついで!!」

「え、いいの!? やった……あ」

喜んでから我に返るヒツギだけど、もう遅い。

俺のクリムゾンブラスターは発射された。今からじゃヒツギの迎撃は間に合わない。

「呆けてたああああああ!!」

絶叫やヒマリと共に、ヒツギは砲撃に呑み込まれていく。

そして、クリムゾンラクシユミーの装甲が砲撃に吹き飛ばされ、ヒマリの顔が見える。

……おお、涙目で頬を赤らめているのはちよつとレアかも。

「ふふふ。言質は取りましたのよ……」

「ああ、こんなことで嘘なんて言わねえよ……」

砲撃を撃ちながら、砲撃を撃たれながら。

俺達は小さく笑いながら頷き合う。

そして砲撃は遠くまで延び、二人はリタイアの光に包まれていった。

『デュナミスの新生チームの僧侶二名、リタイア』

アナウンスを受け取る勢いのまま、俺は試合中だけど感慨深く、そつとフィールドの上を見上げている。

つたく。この調子だとマジで九成のことを笑えねえぜ。

でもまあ、嘘は何一つ言っていないから……さ?

その後、俺達は流れを掴み、一気呵成に相手を責め立て―

『試合終了。勝者、？誠の赤龍帝チームです』

何とか、勝つことに成功したぜ。

戦愛白熱編 第十五話 激戦の余韻

和地Side

試合終了により歓声が響く中、俺は小さく息を吐きながらも微笑んでいた。

試合そのものは二人の敗北だけど、あれはあれでいい結果だろう。たぶんだけど、ストラス騎士団長もそれを考えての発言だったのだろう。だからこそ、この決着には価値がある。

ふっ。イツセーのことだからこの言葉を嘘にするなどありえない。命がけて幸せにしてくれるだろうさ。

俺はたまらず拍手すらしながら、試合内容をまとめるようにダイジェストになっているモニターを見る。

他の戦いも熾烈を極めていたが、イツセーがフリーになったことが大きな要因となったのは間違いない。

今のイツセーは魔王クラスや半端な神に通用する領域。ついでに言えば、その中でも上位側だ。

更に部分龍神化。あんな隠し玉まであるのでは、魔王クラスや半端な神では、むしろ不利といえるだろう。

真つ向勝負で有利に戦えるのは、主神や超越者クラスだろう。それほどまでに、今のイツセーは強くなっている。

「……ふっ。いい試合を見たものだ」

サイラオーグ・バアルもそう告げながら、小さく拍手をしていた。「そして俺達は超えて見せる。その気概を持って挑もうというのだ。……そうだろうか?」

「まあな。龍神化無しのイツセー相手に、後れを取っては意味がないしな」

この一点においては、俺達は意気投合できる。

さて、俺も帰ってトレーニングをするかな？

イツセーSide

ふう〜。何とか勝てたあ。

「しのぎ切りました。あのデュナミス聖騎士団相手に、何とかしのぎ切れましたなあ」

ボーヴァも息を吐くけど、本当に大変だったぜ。

「ホント疲れたー。あの人達とつても強いよね〜」

アルティーネも疲れてるのか、ベンチにへたり込んでいる。

ああ、強かったよなあ。

教会武闘派の顔ともいえる、デュナミス聖騎士団。更にそこから別勢力の星辰奏者まで迎えてるんだ。強いわけだけ。

でも、今回も勝てた。

ルールが比較的シンプルなのも良かったな。俺達って、特殊ルールだと未熟が祟って色々とぼろが出るし。

今回は素直に褒められそうだなあ。うん、ちょっと気分がいいかも。

「しかし、少しズルく感じてしまうな。一度ならず二度までもとは」

「そうね。なまじ味方だから、言われる機会があまりないのよねえ」

なんかゼノヴィアとイリナは凹んでる気がするけど、ある意味大金星だろうに。

「俺がいない間、ストラスさんを真っ向から押さえてたのは二人だろう？ 凹むこと無いじゃねえか」

俺が合流してからも粘られたしなあ。連携にミスがあつたら、一人ぐらい倒されてただろうし。俺だったら敗北じゃん。

そんな中、よく頑張ったと思う。本当に助かったしなあ。

ただ、何故か俺に同情の視線が向けられた気がする。

あ、あれ？

首を傾げていると、ドアがコンコンとノックされた。

この辺りは関係者以外立ち入り禁止だし、タイミングも早いな。

たぶん相手チームなんだろうけど、誰だろう？

「おそらくヒマリ様がヒツギ様ですわね。……どうぞ、お入りください」

レイヴェルが推測しながら声をかける。

ま、流れるにはそうなるのか。

……いや、ヒツギがいきなり入れるか？ たぶんまだ動けない可能性だつてるけど。

そして実際、ドアが開くと覗き込んだのは別人だった。

「……えっと、デユナミスの新生チームの方ですよね？」

アーシアが首を傾げながらそう言うと、その子は小さく頷いた。

「はい。今回の女王を^{クイン}担当した、ロルル・エルーシアと申します。？誠の赤龍帝様の胸を借りれ、この上ない栄光を得られました」

な、なんか恭しいな。

「……え、俺ってそんなに敬われる人なの？」

思わず後ろを振り返りながら、そう聞いてしまう。

いやいや、そんな王様とかそんな凄い人に傳えているわけじゃないんだし。

ただ、レイヴェルはむしろ呆れ顔だった。

「イツセー様。グレモリー本家の跡取りたるリアス様の婿同然では、人間でいうなら王配に値しますわ」

え、そんなレベル!?

いやいやいやいや。そんなこと言われてもなあ。

「お、俺はまだただの上級悪魔だし……?」

「主よ。上級悪魔はその時点で偉いお方ですよ?」

反論しようとしたけどボーヴァにそう言われる。

そ、それもそうか。

上級悪魔って、基本的に貴族だもんな。それに俺は転生してから一年足らずでなってるから、異例の出世頭だし。

転生悪魔からしたら、憧れる対象なのかもしれないな。

まだ一年ちよつとしか転生悪魔をやってないから、こういう時なんかずれてるなあ。

「そもそもイツセーは英雄以外の何物でもないだろう。超越者であるリゼヴィムの打倒など、悪魔全体でもできる者はサーゼクス様やアジユカ様ぐらいだろうしな」

「更に邪龍アポプスを討伐し、極兇奏者ミザリ・ルシファー討伐の立役者が一人ですわよ？ 注目しないでいる方が難しいですわ」

ゼノヴィアとレイヴェルにそう言われるけど、なんだかなあ。

俺は一生懸命頑張ってきただけだし、アポプスはともかくリゼヴィムとミザリは一人でやったわけじゃないし。

……倒した奴の一人つてだけで、十分つてことなんだろうか。まあ、最上級悪魔クラスでも余裕で倒せるような連中とばかり戦ってはいるけど。

うーん。一年足らずの異形歴だから、まだまだ実感が足りないところが多いってことか。でもそこまで崇められてもなあ。

「ロルルさんだっけ？ そっちだつて、デユナミス聖騎士団の正規構成員を差し置いて女王の担当になったんだろ？ 十分凄いなと思うけどなあ」

「……いいえ、私達のチームは割とメンバーの交代や役職替えが多いです。本来は恐れ多いですから」

俺の言葉にそんな暗い顔をするけど、何かあったのか？

そう思っていると、レイヴェルがそつと俺の袖を引いて耳元に口を近づける。

「立場もあるのでしよう。ロルル・エルーシアさんは、つい最近になってからロスト・ミドル・デビルズに入られた方ですので」

そう耳打ちするけど、とつても申し訳ないけどすぐに思い当たらな

い。

うくん。ここも悪魔になって——というより異形に関わって——まだ一年ちよつとつていう弊害だな。悪魔の最低限度の常識や基本的な異形知識はともかく、ちよつと離れたところになると苦しいところが多い。

ただ、ロストつてついでなのかな。ちよつと不吉というか、嫌な印象を覚えている。

ただ、その耳打ちをロルルさんは聞いていたらしく苦笑している。

……星辰奏者つて、五感も強化されるからなあ。小さい声でも近くならずに聞こえるってことか。

「……冷遇ではないですけど、参加者が参加者ですから。自信にはできませんし、まだちよつと割り切れてないんです。あ、教えてくださつて結構ですよ?」

ロルルさんがそう言うけど、レイヴェルもボーヴァもちよつとバツが悪そうだった。

あとゼノヴィアやイリナ、ロスヴァイセさん達異能に前から関わってる組も首を傾げている。つまり、悪魔のあまり広まってない立ち位置なんだろう。

うくん。ちよつと申し訳ないけど、素直に聞いた方がいいような気もする。人によつては逆鱗になりそうなことだろうし。

俺がそう思ったのに気づいたのか。それともレイヴェルに言わせるよりはいいと気遣ったのか。ボーヴァがコホンと咳払いをした。

「ロスト・ミドル・デビルズは、あのシュウマ・バアルが魔王様に提案したことで結成された組織です。戦いで主を失った転生悪魔から、試験を受けて合格した者が属する特殊部隊です」

……あゝ、なるほど。そりゃ言い難い。

あとシュウマ・バアルの発案つて時点で、なんていうか裏事情が分かった気がする。

主を守れなかった転生悪魔とか、大王派とかが冷遇しそうだ。そしてサーゼクス様は何とかしたいと思うだろう。シュウマ・バアルはフロンズを見守り育ててきた人だし、その辺りも聡いはずだ。

だからあえて大王派の自分から提案することで、魔王様に恩を売りつつ、大王派がよい印象を持てるようにしたんだろう。ゼクラムさんならその辺りを読めるだろうし、上手く大王派を説得してwin-winにできたと思っただろう。

ま、ある程度厳選されてそうだけど。その辺りはうるさいだろうしなあ。

ただ、その一因になるってことは二つ分かる。

ロルルさんが優秀だという事。そして最近になって入った以上、少し前に主を失ったってことだ。

「その、ロルルさんの主は……?」

「明星戦乱の時に、ステラフレームとサテライトフレームの軍勢に押し込まれました。……私は奮戦で同胞を守った功績で推薦されましたが、肝心の主を守れなかったので、自信は持てないです」

「……そっか」

それは、きついだらうな。

俺はちよつと考え込むけど、軽く屈みこんでロルルさんに視線を合わせる。

「怒られそうなことを言うけど、ちよつと気持ちは分かんと思う」

「……そうですか?」

かなりきよとんとされたけど、少しぐらいはわかると思う。

「……なんだかんだでリベンジマッチで何とかしたけど、俺もリアスを守れなかったことがあるしさ。それに近い経験も多いから、ちよつとぐらいは分かるさ」

ほんと、俺ってそういう経験が多いからなあ。

婚約者騒動のレーティングゲームでは、そのあとサーゼクス様の計らいを活かされたから良かった。でもゲームそのものは俺達の負けで、リアスは一度泣いた。

それにアーシアを助け出そうとした時は、リアスが悪魔の駒を使う決断をしなければ意味がなかった。それが無ければアーシアは死んだままだったろう。

それに、俺達の戦いつてそういう事が多いからなあ。最終的に何と

かひつくり返せたけど、仲間達が傷つき倒れたことは数多い。完勝できたことの方が少ない気がするしな。

それに、だ。

「そもそも、邪龍戦役ではアザゼル先生やサーゼクス様を犠牲にしたようなもんだ。傲慢な言い方かもしれないけど、俺がもつと強ければ……そう思うことはよくあるよ」

だからこそ、俺達の平穏を邪魔する奴は、絶対に倒す。例え滅ぼしてでもだ。

だからこそ、俺は言える。

「冥界の英雄なんて言われる俺でもそうなんだ。ロルルさんも、深く考え込みすぎないように……な？」

「……歴代最優、？誠の赤龍帝にそこまで言われると、そうしないとって思えちやいますね」

まだ寂しげだけど、ロルルさんはそう微笑んでくれる。

うん、ちよつとぐらい気休めになるといいけど――

「イツセー様。誰彼構わずそういうことをしては……後ろからいつか刺されますわよ？」

――俺のマネージャァはこういうところも厳しい!!

「あ、それで……サインくださいー!」

あ、ロルルさんはそういう目的だったのか。

「……ふむ、流石は？誠の赤龍帝。やってのけるのお？」

「同感だな。神滅具を持つだけの凡人でありながら、あの高みにまで至るとはな」

「ほお、ユーピも流石に気になるのか？」

「当然だろう、幸香。気になるさ」

「まあそうよなあ。……前人未踏の禁手の先を、何度も切り開いた男。気にならぬわけがない」

「未開明日をかける俺達が、後塵を拝するのも困難ではな。……とはいえ、いつまでもとはいかないだろう」

「それは当然。いずれ必ず極晁星を掴むように、禁手のその先も会得せねば話にならぬ」

「で、その辺りはどうするんだ、幸香」

「おまこそどうするのだ、ユーピ？」

「知れたこと。俺に関しては一つ当てがある。だが、お前はどうかんだ？」

「ククツ。残念ながら手探りじや。だが……必ず掴む」

「そうだな。後継私掠船団は、そうでなくては話にならないのだからな……」

ヒマリ・ナインテイル。ザイア時代の俺の相方であり、いろんな意味で公私を共にしてきた間柄。ある意味で妹のようであり、姉のようである。そして前世の俺のお袋が前世だ。

そんなヒマリが本気で幸せそうにしているんだ。相手も文句なしな男でもある。

……うん。心の底からほっこりできる。

なんだかんだでザイアの影響も大きいからな。いい相手ができるかどうかちよつと考えたこともあった。その時は知らぬとはいえ前世のお袋だから、どうしても恋愛の目線で見れなかったし。

それに、ヒツギとは割と気も合っている。ヒマリとも仲が良いしこれまで前世のお袋だし、幸せを願うぐらいは当然する。

だからまさに、これは良い事だ。

俺は心から祝福しつつ、ジュースを一口。

ああ、これがいい人に恵まれた家族を見送る気持ちかあ。

うん、良いものだ。

「……おんやあ？ カズ君ってば、歳に合わない顔してるわねえ？」

と、何時の間にやらリヴァ先生に気づかれたようだ。

すつと寄られるとそのまま抱き寄せられ、頭を撫でられる。

……うん、これはこれでいいかもしれない。

「うくん。小姑のジレンマかもしれないなあ。素直に祝福してるんだけど、複雑かもしれないな」

「わあおう。これで照れないってこの子マジで傑物」

甘えたらなんか戦慄された。

え、これ俺が悪いのか？ なんか照れて動揺してなかったら減点なのか？

勘弁してくれ。好きな人に甘やかされるってのは、たまになら人生の彩りだつてのに。

っていうか、少なくともリヴァ先生にそんなことは言われたくないぞ。

「甘えさせてくれるんじゃないか？」

そんなことを言ってたはずだけどなあ。いや、もう半年以上前のこ

とだけだ。

甘えていいと言われてるんだから、甘えてもいいじゃないか。俺だって、甘えたい時の一つや二つぐらいある。

ただリヴァ先生はちよつと詰まりながらも、もの凄く顔を赤くしている。

「そうなんだけどね？ この甘えっぷりはとても戦慄が走っちゃうかなあ？ ジゴロの才能あふれまくりよ、カズ君」

そんなに凄い事をしているのか。まったく分からんが、人からそう言われる余地はあるんだろう。

ジゴロの才能か。持つてても別に嬉しくないというか、悪用の余地があふれすぎている。前世のクソ親父を思い出すし、悪用するとあなるんだらうと納得してしまった。

うん。絶対に悪用しないように気を付けよう。

「心の底から気を付ける。それはそれとしてもうちよつと」

しつかりと思考を整理したうえで、悪用しないという決意と共に俺はリヴァ先生に頼ずりを。

あく。普段とは違う感じで癒される。この人時はなんだかんだで貴重だあく。

「うゝん。戦慄しまくりだけど役得役得。このポジションは死守しないかね」

リヴァ先生もなんかほっこりしているけど、微妙に冷や汗が流れている。

そんなに戦慄することなのか。自分ではさっぱり分からないけど、とりあえずリヴァ先生相手の時だけにしておこう。

そういえばイツセーはこういう事を、リアス先輩達によくしているな。なるほど、確かにいいものだ。

よし。そこそこ堪能して、今度イツセー達と駄弁る時のネタにしよう。

俺はそんなことを思いつつ、まったりとした空気を味わうことにした。

あいつ、俺達の視界に映ってるって自覚あるんだろうか？

九成がリヴァさんから来たのを良い事に、かなり甘えている。まるでリアスや朱乃さんに甘やかされている俺のようだ。

なんだろう。はたから見ていると分かる衝撃というかなんとか。俺ってば、周囲からこんな感想を思わせるようなことをしてもらっていたのか。

……なんとというか優越感だな！ 九成はリヴァさんぐらいにしかあんな感じで甘やかしてもらえないだろうけど、俺はリアスと朱乃さんの二人だ。つまり俺は九成より上か！

……その分、取り合いになるとちよつと怖いけど。一步間違えると巻き添えで痛い目を見そうだし。二人とも、ヒートアップすると魔力や雷光が出てくるんだよなあ。

うん、そう考えると嫉妬が湧いてくるよな。九成ならこういう時、変な争いに巻き込まれないし。俺とは大違いだ。

何故だ。俺と九成の何が違う。俺だって最近ハレム王秒読み段階だというのに、あいつと違っていまだに女の子とエロいことができなないし。

いや、あいつはかなり特殊だからそれは別にいい……わけないな。今の段階でもエロエロできるのは本当に羨ましいぞ！

どうしてだろう。何故か、凄い敗北感と共に涙が出てきたぞ……？

「むむ？ イツセーってば和地に嫉妬しますの？」

そんな俺に気づいて、ヒマリは俺をぎゅつと抱きしめてくれる。

ああ、側頭部に当たるおっぱいの感触……。俺の心から負の感情を取り除いていく……。っ。

感動で涙を流していると、ヒマリは隣でガチガチになっていたヒツギを掴むと、そのまま俺に引き寄せる。

左右でおっぱい。左右でおっぱいが！ おっぱいが……。あっ!!

高ぶってくる俺の耳元に、ヒマリが顔を近づけた。

「……いい機会ですし、今夜はたっぷり女の子を教えてあげますわ♪」

……。なん、だと？

今、俺の耳がとんでもなく最高の提案を聞き取ったような――

「ちよつと待ちなさい、ヒマリ！ 聞き捨てならないことを聞いたわよ!!」

――と理解するより早く、リアスが聞きつけて消滅の魔力を滾らせているうろうううううううっ!!

俺は速攻で命の危険を覚えるけど、ヒマリは俺を力強く抱きしめながらムツとした表情になった！

「いいではありませんの。私は半年以上もお預けされて溜まってますのよ！ 嫁にしてくれるって言質も取ったのですし、それぐらい構いませんわよ！」

真つ向から反論するヒマリに対し、リアスはしかし引かなかった！ 「私達を差し置いて独占だなんて納得いかないわ！ 朱乃、貴女の方が先に言われてるんだから文句を言いなさい！」

朱乃さんとの連携で仕掛ける流れだ！ 判断が早い！

そして朱乃さんも既に状況を把握しており、バチバチ雷光をたぎらせている！

「まったくですわ。婚約者のリアスや先に言われた私の方が優先されるべきでは？」

ニコニコ笑顔でキレている朱乃さん、怖い！

「ちよ、ちよちよちよちよ!! まって、これ私も巻き添え喰らう流れになってるじゃん!？」

我に返ったヒツギが顔を真っ青にしているけど、ヒマリは引かなかった。

ゼノヴィアの反論に華麗な切り替えしが！

っていうかちよつと待て！ 言ってることは筋が通ってるけど、めちゃくちゃ頓珍漢なこと教えてるんだなザイア！

みんなの視線も思わず九成や南空さんの方に向くけど、何時の間にか九成の姿はない。

野郎、止めるの無理だと判断して逃げやがったな!?

しかも逃げたってことは、間違いなくそこまで本当だな。……なんて倒錯的な教育環境なんだ。

思わず誰もが何も言えなくなっていると、ヒマリは勝者の余裕すら見せて胸を張る。

「多人数プレイの講習も受けているので、まずはイツセーに技術を教えてあげますわ！ それができるのはきちんと講習を受けている人と実際に経験をこなしてきた、このヒマリ・ナインテイルですの！」

「ぐ、ぐぐぐ……っ」

反論を封じられ、リアスがものすごく齒噛みしている。

っていうか、それを隠すことなく堂々と言うのか。それでいいのか、ヒマリ!?

け、経験者とだからこそできるエロもあるのか。というか、確かに失敗するのはそれはそれで嫌だから、経験値やスキルを積めるのならそれはそれでほしいと思う。

エッチな女の子に手取り足取り教えられますか。教えられちゃうのか。リアス達をとろけさせる手練手管の類を教えてもらっちゃうのか!?

「あ、あわわわわ……っ」

至近距離でそんなことを聞かされているからか、俺とヒツギはもう困惑状態だった。

ヒツギはがくがく震えてるし、俺は鼻血がだくだくと流れている。失血で倒れないようにしないと。

「お、おおおお落ち着いてください！ 座学、座学で済ますという手もありますよ！」

戦愛白熱編 第十七話 地下室、死闘中！

和地Side

「……今頃、ヒマリが暴走特急になつて頃だろうなあ」

俺はそつと抜け出し、そしてため息をついた。

地下の方が騒がしくなっているし、間違いなく当たりだろう。

ザイアの教育は特殊なのは、俺は体感しているし客観視もできる。

特に問題なのはエロ方面。精通や初潮が始まれば、近いうちに経験人数が二ケタ到達もあり得る。そんな環境は特殊すぎる。

むしろ、幼少期からそんな環境にいてトチ狂つてない俺がどうかしている。普通は価値観歪むだろう。瞼の裏の笑顔に交わした誓いが、よくここまでしのぐことを成し遂げた。

なんだろう、自分でも少し戦慄を覚えてきたぞ。性的観念が確実に歪んでないとおかしいだろう、俺。

ま、それはともかくだ。

「なんか疲れたし、ちよつと水を飲むか」

地下には当分戻れない。まず間違いなく騒がしいことに巻き込まれるからだ。

君子危うきに近寄らずと言うし、見えている爆撃地点に近寄る気はない。嘆きの涙が流れないと分かつてるからな。

いや、別の意味で流れるかもしれないな。後でイツセーの愚痴ぐらいは聞いておくべきか。

そんなことを思いながら、俺はキッチンに向かう。

……ちよつと食い足りない感じでもあるな。いつそのこと、簡単な料理でも作るか？

そんなことを思いながらキッチンに入ると――

「あ、和地様」

「三美さん」

三美さんが作業をしているところに出くわした。

「一人で作業ですか？」

「いえ、ちよつと練習をしようかと思ひまして」

俺の質問にそう答えると、三美さんは死角にあつたものを取り出した。

……飾り切りの練習をしてたのか。

「仮にもこの家は、グレモリー本家のご令嬢が住んでいるのです。この手の技法を用いるべきではないかと思ひまして」
なるほど、確かに。

日本の本州に匹敵する直轄領を持つ、名門グレモリー本家の次期当主。それがリアス先輩だ。

そんなリアス先輩がホームステイをする、事実上の婚約者の実家。当人がいる状況下なら、そういう芸術的手法も考慮するべきかもしれない。

クックスは確かに超優秀な料理人だ。だがザイア、それも俺達実働部隊の料理担当だったこともあり、料理そのものとはかく芸術的付加要素はさほど慣れていない。精々が食欲を誘う盛り付けレベルだ。

その観点を踏まえたのか。考えてるな三美さん。

「上手ですね。芸術に造詣があるのは知ってたけど」

「いえいえ。独創性には欠けてますから」

苦笑交じりで俺の賞賛に返す三美さんは、どこか寂しそうだった。

「昔からそうなんです。模倣は得意でも独創性に欠けてまして」

それは、かつてを懐かしむ旅人のようにだった。

同時に、過ちを告白する罪人のようだった。

そんな雰囲気を纏う三美さんは、どこか寂しそうだった。

「……割り切って、自分に見切りをつけられればよかったですけどね」
その言葉に、俺は何を返すべきだろうか。

さっぱり分からない以上、迂闊なことは言えない。だが同時に、彼女が俺の愛する人達を思わせる。

己自身が辿ってきた旅路、その過程の出来事。それに振り回され、嘆いているように見えた。

だからこそ。

「少なくとも、俺から見える今の三美さんは素敵な人です」

これだけは、言っておこう。

真つ直ぐに彼女を見据えたうえで、俺ははつきりと告げる。

「今現在の、今に至るまでの道を歩いてきた貴女は素敵な人に見えます。少なくとも、貴女が助けを求めれば助けたいと思えるぐらいに」
今、俺が彼女をどう見えているか。それは言ってもいいだろう。
嘆きで生まれた涙の意味を、笑顔に変えたと掲げた誓い。

かつて道間日美子が嘆き、カズヒ・シチャースチエとして歩き出せた出来事。彼女が俺の笑顔に誓い、俺も彼女の笑顔に誓った、その決意。それは決して揺るがない。

だから、これだけは言っておく。

俺が、九成和地が、道間田知が。タイタス・ククロウ 涙換救済から至りし旧済銀神。エルダーゴッド。その俺が掲げた揺るがぬ誓い。

俺の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻め。

その決意は、俺が俺である限り揺るがない。

そして、それは俺だけじゃない。

「あと、イツセーもリアス先輩も、当然カズヒも助けますよ。貴女達はそうされていい人だと、俺達は思っていると確信してます」

そういう人だけが、いくつもの審査を潜り抜けて懲罰従者に選ばれる。

それを俺たちは知っている。だからこそ、俺達はそういうことをする。

それだけは、信じてほしい。

俺たちはそういう連中だ。貴方達はそうされるに値する。そういう者だけが、この屋敷に住む資格を得るのだと。

「……そう、ですな」

そして、それは届いたようだ。

小さく、どこか華やかに微笑む三美さん。

その上で、三美さんは小さく苦笑いをする。

「よければ、愚痴を聞いてもらってもよろしいでしょうか？」

「もちろん」

チームリーダーとして。オカ研の一人として。

そして何より、涙換救済である俺として。

それぐらいはさせて欲しいぐらいだな。

祐斗Side

目の前で、壮絶な死闘が繰り広げられている。

ヒマリさんが勢い任せでイツセー君と初夜を迎えようとしたのがきっかけ。だけど方向性が頓珍漢なことになって、揉めに揉めている。

……ザイアの教育環境、本当に碌でもなかったんだね。九成君はむしろ、なんであそこまで高水準でまとまっているんだろうか。

彼、前世の経験は二年あるかどうかレベルのはずだけど。当人も前世という明確な判断ができないレベルだったのに。

むしろカズヒの影響力として考えるべきだろうか。良くも悪くも強烈だから、記憶や潜在意識に残りそうではあるしね。

まあ、いい方向に向かっているならいいんだろう。そういう感じに割り切ろう。

「覚悟しなさいヒマリ！ イツセーの初夜は渡さない！」

「落ち着いてくださいリアスさん！ いえ、争奪戦は興味が……その……」

「譲りませんわよー！ イッセーの初夜はトチらせませんのよおー！」

「誰か助けてえええええっ!?」

リアス姉さんとシャルロット相手に、ヒマリは真っ向から立ち向かい、イツセー君とヒツギは悲鳴を上げている。

……現実逃避も難しくなってきたしね。

死闘がそろそろ、かなり本気になってきている気がする。

中心部で巻き込まれているイツセー君とヒツギの悲鳴も、かなり深刻になっているしね。そろそろ攻撃に加減が無くなってきている。

止めたいけど、あの人数は命を覚悟しないと。まして主たるリアス姉さんを止めるのだから、遺書をしたためてからにするべきだろうか。

「落ち着きなさい、祐斗」

と、カズヒがちよっと遠い目をしながらそう言ってきた。

見ると、かなり魔力を滾らせている。

「とりあえず固有結界で安全地域を作るわ。そこである程度ガスを抜いてから鎮圧しましょう」

「鎮圧するのは確定事項なんだね……」

リアス姉さん達とイツセー君には同情しよう。

これは物理的に鎮圧される流れだ。せめて、イツセー君とヒツギが被害を受けない形にする努力はするべきだろう。

盛大にため息をついているカズヒは、その上で拳を握り締める。

「ウォーミングアップは整えておいて。二十分は暴れさせておくから」

「その、無理はしなくていいよっ」

固有結界って、十分や二十分持たせるのも大変らしいけど。そんな長時間使っているのかな？

いや、カズヒの固有結界は展開するだけなら長時間できるけど。それにしたって負荷が少なくはないと思うんだ。

そんな時間、態々待つてあげる必要があるんだろうか。

「……不完全燃焼させると、明日も揉めそうなもの。ある程度発散さ

せるべきよ」

僕の視線に気づいたカズヒはそう言うと、更に肩をすくめる。

「ま、ガスは抜く機会を無視する必要はないのよ。……溜め込んでいると、碌なことにならないもの」

「説得力があふれるのが、なんていうかね」

彼女のかつての人生を知る者として、ぐうの根も出ない結論だね。

実際、鬱屈した物を正しい意味で発散できなかつたからこそその彼女の所業だ。肯定することも無条件に容認することもあり得ないが、そうなつてしまったことに説得力がありすぎる。

「まあ、九成君がいるなら君は大丈夫なのかな」

「イツセーも別の意味で大丈夫でしょうけどね」

そんなことを言い合いながら、僕達は事態の鎮圧を行う為に準備をし始めた。

アザゼル Side

俺は休憩スペースのスパでゆったりとしながら、ふと勘が働いた。

「今、イツセー達がからかいがいのあるバカ騒ぎをしている気がする
！」

「……それは残念じゃのお。リヴァと共にいれば引つ掻き回しがいが
ありそうじやろうに」

オーデインの爺も酒を飲みながら、馬鹿にせずを受け答えしてくれ
る。

ありがたいぜ。ミカエル辺りだと呆れを全身で表しながら切つて

捨てそうだからな。

あく畜生。是非ともこの目で見たかったぜ。きつとめちやくた見ていて面白い展開になってるんだろっうなあ、残念だ。

ま、それはともかくとして、だ。

「あんたの娘も息子も、今のところは連戦連勝だな。鼻が高いんじゃないか？」

「ほっほっほう。お主の教え子共もじゃろお？ お互い様じゃ」

そう言い合いながら、酒の入ったグラスをぶつけ合う。

ま、アジユカの好意でアザゼル杯の試合とかもある程度は見れるからな。

流石にリアルタイムは無理だが、ある程度まとめたうえで送ってくれる。あとはこの施設のシアタールームで、休憩時間にまとめた映像を見るぐらいはできるわけだ。

サーゼクスなんて記録映像だったのに、手に汗握って応援してるからな。セラフオールも我を忘れて応援してるほどだ。

今のところ、チームD×Dが中核となってるチームはどこも好成績だ。純粋な勝率なら神が参加しているチームにも引けを取らないのが大半。この調子なら、本戦出場チームの大半はチームD×Dか神々のチームになるだろうさ。

「戦を司る神々としちゃあ、参加できなくて残念だったな」

「構わんわい。当分は若いもんに幅を利かせてやらんとな？」

おうおう。減らず口叩いてるなあ？

俺はもちろん、アンタが参加しても本戦に出るのは苦勞するだろうに。それぐらい、強者がゴロゴロ参加してるじゃねえか。

ま、フロンズやハーデスの息がかかった連中もその強敵に入ってるのがあれだがな。

フロンズは足並みのある程度は揃えてくれるだろうが、問題はハーデスだ。

奴らは間違いなく強敵で警戒対象だしな。特にハーデスは、俺達にとって最大の懸念事項だ。

俺達という抑えが無くなった以上、動き出すリスクが一番デカい。

フロンズ達や帝釈天はまだまじだが、あの爺は確実に動きを見せるだろう。実際、既に牽制球は入れてるしな。

ただ本命はまだ別にありそうだ。ラツイーカ・レヴィアタンなんて言う爆弾を、こんな早く見せてるから間違いない。

「あの爺さんには勘弁してほしいぜ。大昔の勢力争いの恨みつらみなんて、今のガキどもを巻き込んでまでするんじゃないやねえっての」

「確かにのお。うちのロキと手を組まなかったことだけは感謝じゃない」

そんなことを愚痴り合いながらも、俺達はそれを酒の肴にする余裕はあった。

なんだろうかねえ。今のイツセー達に喧嘩を売って、ハーデス達にただで済む姿も見えないってのが理由だ。

……懸念はしてる。だが、心配しすぎる気はしない。

大会でも実戦でも、あの爺さん達に見せつけてやれ、イツセー。

お前達が困難を乗り越えて到達した地平は、例え冥府の神でもどうにかできるものじゃないって……な！

戦愛白熱編 第十八話

和地 Side

気づけば、ちよつとした飲み席になっていた。

最も酒はないが。俺も三美さんも、年齢や立場もあるからジューズにしている。

で、適当に用意したスナック菓子を摘まみ代わりに、俺は三美さんの過去語りを聞くわけだ。

うん、しっかりと聞いて、しっかりと受け止めたいところだな。

「私の家は、昔から芸術家志望が多いうえ、実際になる人も多い家です」

そう言うと、三美さんはメモ帳にさらさらと綺麗な字を書く。

行船↓ゆきふね↓雪舟

その図式を書くと、小さく苦笑していた。

「平民が苗字を名乗れるようになった時に、こんな感じにつけたと言われてます」

「……ああ！ そういうことか！」

ちよつと反応が遅れたけど、何とか思考が追い付いた。

確か、涙でネズミを書いたら本物と間違われたとかいう絵の得意な坊主だったな。雪舟せつしゅうって！

雪舟の文字をゆきふねと読む形で捻った苗字なのか。芸術だけじゃなく勉学にも理解がある人だったんだなあ、三美さんの先祖って。

そこから芸術家の多い家柄になるってことは、倒幕や明治維新の前からある程度は力があつたのかもしれないな。まあ、今現在になるまでに色々あるだろうからそこはいいか。

名字の由来も眉唾物だろうし。話のタネとかその程度でだしたっ

て考えるべきだな。

なので頷くことで促して、俺は話を先に進めてもらう。

「……私が生まれた時も、父も母も芸術が縁で結ばれて生まれたので期待はされました。名前の由来も、そういうところが大きいみたいですね」

まあ確かに。三美……美が三つだしな。

そんなに珍しくなるような名前でもない気がするけど、考えてみるとインパクトも大きく成りえる名前だ。芸術家一族がそんな名前を付けたというなら、その辺りの願いは強かったのかもしれないな。

それが転生悪魔、それも武闘派か。

何があつたのか分からない。そして、それをこれから語るんだろう。

その上で、こんなことで語る以上は重いものがあるとは察していた。

だからこそ、下手に続かずに話を聞く。

「芸術って独創性とかが必要ですけど、その辺りが全くなかつたんですよ……私」

そう言う三美さんは、さらさらとメモ帳に絵を描く。

シャープペンシルで綺麗に書いている気もするが、どこことなく……コピー機のような印象を感じた。

「昔から、風景画や模写ばかりが得意でした。芸術には独創性は重要ですけど、その辺りが全然駄目でして」

ああ、なるほど。

つまりこの絵も、どこまで見たものを正確に再現しているだけなのか。

そういえば、そんなことを言っていたような気もするな。

これはこれで凄いなと思うけど、芸術家という観点で見れば凹むところはあるか。

芸術家とは、作る者だ。オリジナリティが多分に重要視される業界である以上、ある物の模倣ばかり上手では自信はつかないだろう。

「父も母も、残念には思っても愛してくれましたけどね。……ただ、

生まれた時から感極まって、「未来の三美」なんて言うシリーズを作られていたので……ちよつと重く感じてました」

「それは、プレッシャー感じそうですね」

何やってんのご家族の方々。

しかもシリーズって、いくつも作ってたのか。まさかと思うが一歳ごとに未来予想図を作ってたのだろうか。下手したらグレルぞそれは。

正直ちよつと頬が引きつっているが、三美さんは気にせず話を進める構えだ。

「今でも電話で話すぐらいには、繋がってはいるんですけどね。一念発起して武闘派転生悪魔に切り替えたことで、私も家族も踏ん切りがついたので」

そう空気を変える様に、三美さんは言う。

ただそれは、そこまでしないと生き方を切り替えられなかったという事だ。

実際、今でも気にはしているみたいだしな。長年のコンプレックスだろうし、人は気にしてしまうことはある物だ。仕方ないとは言えるだろう。

だからあえて深く聞かず、俺は小さく頷いた。

「……踏ん切りがつくまで、大変だったでしょう」

家族関係も、ギグシャクしていた時期があったのではないだろうか。

そんなことを思いながら俺は労り、三美さんも頷いた。

「幼馴染の子とか、中学から付き合いのあつた後輩は才能があつたので尚更ですね。表に出さないぐらいはできましたけど、我慢できずに海に向かってバカヤローって叫んだりとか本当にしちやったこともあります」

「……想像するだけでメンタルがゴリゴリ削れそうですね」

自分が欲してやまない物を、近くの人達が何人も持っている。

想像するだけでストレスが溜まりそうだ。実際、そういった理由で腐る人も多いだろう。

考えようによつては、カズヒもそうだといえる。

カズヒの方がどす黒いし、呪われているといえる。これはどう客観的に見てもそうなるだろう。

だが、カズヒ自身が言っていたことがある。それは、俺のような立場にとつても大事なことだ。

―下には下がいることと、今下にいるという事実とは別のこと。

それはとても大事なことだ。より不幸な者がいるのなら、今不幸にいる者がないがしろにしているわけではない。何故なら不幸であることは変わらないのだから。

涙の意味を変える者として、そこはないがしろにしていいわけがない。それは、とても大事なことだ。

少なくとも、三美さんは鬱屈した感情を抱えそうになる状況だった。それはまごうこと無き事実だろう。

それを胸に刻み込んだうえで、俺は真っ直ぐに三美さんの独白に向き合う。

それぐらいしかできないからこそ、そこをいい加減にはしないでください。

その意識をもつて、俺は彼女に向き合う。

「……ただ、色々あって限界がきて、美大は自主退学しました。その時にかつての主と会つて、自分を変える為に転生悪魔になったんです」
「そう、ですか」

思い切りが良すぎる気もする。例えるならゼノヴィアみたいだ。

ただ、ゼノヴィアにとつては聖書の神が実は死んでいるという事実の直後だ。精神的にかなりの衝撃を受けていたことは間違いない。

だからこそ、三美さんにとつても大きな衝撃が走っていたのかも知れない。そう思えてしまう。

「……今日はこの辺にしましょう。その、寝る前に聞いていい気になる話ではないですから」

そう、三美さんは話を打ち切る。

こつちを気遣っているのか。それとも、話す勇気を持ってないのか。もしくはそのどちらかか。

まあ、俺も強引にしなくていいところを強引にするのはちよつとな。

気長に少しずつでいいだろう。少なくとも、今急ぐ理由が無いのならばな。

「ええ、今度時間が空いた時にでもじつくり聞きます」

俺はそう返すと共に、しっかりと時間を空けておくことも決めている。

最低でも週に一時間は開けておこう。それをしているかどうかでだいぶ変わるだろうしな。

イツセーSide

つ、疲れた。

もう今日は一人で寝る。たまには一人の時間が欲しいから。

それぐらい、壮絶な死闘だった。命の危機を感じそうになったよ。

「大丈夫かい、イツセー君」

木場がそう言ってくれるけど、本当に大変だった。

リアスもヒマリも星を振るうし、互いに高ぶったのか「専用異空間表出る！」なことを言い出すもん。他の子達も参戦状態で、シャルロツトすらちよつと冷静じゃなかったし。

最終的にカズヒ降臨いっもの展開で収まり、罰としてヒツギ以外は俺との接触を今夜禁止されることに。

そしてヒツギはヒツギでオーバーヒート気味で、俺と同じで一人で寝たい状態だった。

……お互い、今夜は大変だったな。

ベッドに倒れこんでいるだろうヒツギを思い、俺は共感して涙した。

そして今夜も結局、俺は初体験無し。まあそんな精神的余力もないけど。それはそれとしてまたお流れかあ。

「俺、何時になったら童貞を捨てれるんだろう」

ぽつりと、俺はそんなことを言ってしまう。

おっぱいいっぱい夢いっぱい。ハーレム王に俺はなる。そして、出来ることなら最強最高のハーレムを。

それが俺の夢だ。色々あって他にもいろんな願いや決意はあるけれど、この願いは割と根幹で悪魔をやっている。

でも童貞だ。

そして俺は今、嫁に来てくれる子達まで何人もいる。グレモリー本家の婿もほぼ確定だ。九割がた、この夢は叶っていると書いてもいい。

でも、童貞だ

むしろ俺を取り合い、最初に俺とエッチをしたいと考える女の子達は数多い。男としては処女にロマンを感じることもあるし、もはや夢とロマンにあふれた日常を過ごしているかもしれない。

でも……童貞なんだ……っ。

周りのお偉いさんも割と応援してくれている節がある。グレモリー家は今になって考えれば、かなり前から俺を婿にする方向で話を進めてたし。天界だって、天使であるイリナが俺とエッチしても問題ないよう、専用のアイテムを作り上げた。墮天使側だってそれをコピーし、朱乃さんが持っている。むしろ俺の周り、お偉いさんが俺のスケベに理解を持ってくれるどころか、かあなありエロエロな人も多い。環境は整っている。

でも……まだ……童貞なんだ……っ

俺は耐え切れず、崩れ落ちた。

「イツセー君!? 大丈夫だよ、絶対時間の問題だから！」

「具体的にどれぐらいなんだよ。教えてくれ……っ」

分かってるならまだ耐えられる。

でも分からないんだ。いつか来るって、何時なんだ。教えて……くれよ！

「畜生。きつと今頃、九成は女の子といい雰囲気になってるんだろうなあ。そして、俺の住んでいる家の敷地内でエッチしてるんだろうなあ」

「いや、九成君は決してそこまでがつついてないし、一人の時間もちよくちよくとつてるからたぶん大丈夫じゃないかな？」現実是非情である

そういうことを言ってるんじゃないんだよ、木場あああああつ!!
うわあああああん！ 早く非童貞になりたあああああつ!!

カズヒSide

「……もう本当に、いい加減にきなさい」

正直いい加減にうんざりなので、私はハッキリ言っておくことにする。

いや本当にいい加減にしろ。なんで童貞を捨てたい男と、そんな男とエロいことをしたいと考える女がゴロゴロいてこうなのか。

「イツセーが可愛そうでしょう。まず順番を決めなさい。そしてそれを順守しなさい」

「え〜？ それを横からかつさらうのがオツなんじゃないツトオツ!？」
妄言を吐き散らかさそうとした黒歌に魔力弾を叩き込んでおく。

まったく。もうちよつと秩序を保ちなさい、アンタら一応政府側でしようが。

これはもう、釘を刺しておくべきかしらね。

「あんまりグダグダやるようなら、和地の許可をとったうえで私がイツセーの童貞を食べるわよ」

「な、なんだと?! お前正気か!?!」

ゼノヴィアがなんか絶叫するけど、なんでそんなことを言われなければならぬのだろうか。

なんで全員全裸になってイツセーと一緒にエロゲをするなどという、変態としてもハイレベルな行為をする奴に言われぬといけぬのかしら。……あ、真剣に殺意が湧いてきそう。

「まあ別に私じゃなくてもいいのだけれど。このままだと拉致があかないからハニートラップ専門部隊と連携をとるって手段もあるし」

「え、ちよつと待って?! 私初耳!?!」

イリナが話に割って入ろうとするけど、私は流れるように華麗にスルー。

世界規模の組織となると、綺麗ごとだけでやっていくのは困難だよ。人数も多ければ腐敗もあるし、そういった手段は持つておくに越したことはない。清濁併せ呑む度量を今後とは鍛えることね。

つていうかダーティジョブ専門部隊があるなら、ハニートラップ専門部隊だつてあるでしょうに。想定しなさい。プルガトリオ機関は幅広いニーズに応える暗部組織なのよ。

まあそこは置いていて。

「そもそも未経験同士の初夜なんて、トチってもおかしくない定番だもの。更に初物を取り合つて不毛な争いで無駄に時間をかけている以上、原因を取り除きつつ失敗のリスクを減らすのは理に叶っているでしょうに」

その当たり、はつきりと釘を刺しておく。

「言っておくけど、本気でシヤクってるからね? 実際初体験がグダグダになってギクシヤクするつて話もあるし、いっそのこと気持ちのいい初体験を得るためにいさかいの元を排除してもらうのはありで

しょう?」

「そんな! イッセー君の童貞を頂きながら処女をささげたいのに!?!」

朱乃までそんなことを言うけれど、ロマンにあふれすぎて現実を見てないわね。

「事前学習無しの未経験に夢を求めすぎよ。誠にいだって、私が童貞を頂いた時はされるがままで割とすぐ出るんだし。経験と知識と技術はある程度あるに越したことないのよ!」

「こちらに非があるのは事実ですが、なんか素直に受け取れないですね」

「……へビーすぎる過去を持ち出さないでください」

「経験に基づく意見ですが、その経験は出さない方がいいと思います」

比較的良識のあるシャルロットや小猫にロスヴァイセさんがそう言うけれど、だったらもうちよつと滑らかなルート構築してもらいたいものだな。

こつちだって人のエロ関係にここまで強引に割って入るのは不本意よ。なんでそんな下世話なことをしなければいけないのか。

グダグダかつ騒がしいのが悪い。もうちよつとこう、滑らかに進める為の努力をしてほしい。

「つたく。次の試合は色々と頭が痛いってのに、こつちに頭痛の種を増やさないで頂戴」

そういうと、周囲が一瞬静まり返った。

まあ、確かに静まり返るわね。

次の試合で私のチームは、あのグレイファイアさんの率いるチームと戦うことになっている。

純血の魔王一族を三人も加えたチーム。フロンズの手が入った、グレイファイアさんのチーム。

あの人も一体何を考えているのか。ガブリエル様達も思惑が掴めず、対応に苦慮していると聞く。

「……お義姉さまは、一体何を目的としているのかしらね」
リアスも苦慮しているのは分かる。

私にとつても、あの人はただの他人ではない。それなりに付き合いもあるし、気になることは数多い。

だからこそ、だ。

「ええ、いい機会だし拳で語り合ってくるわ。……そういう意味ではいい催しね」

まったく、勘弁してほしいわよグレイフィア・ルキフグス。

貴女の真意、探らせてもらおうから覚悟しなさい。

戦愛白熱編 第十九話 魔王、超集合

イツセーSide

冥界のバアル領で行われる、カズヒとグレイフィアさんのレーティングゲーム。そんな日がやってきた。

俺達は早めに来て、それなりにゲームの名所で有名なこの町の観光とかもやっている。みんなで分散して、試合を見る前に楽しんでる感じだ。

それぞれが思い思いでグループに分かれてるわけだけど、他にも色々あったりするわけで――

「へえ、君達が……ね」

「……え、つと……」

――俺は今、ヴァーリのオーラに気圧されている亜香里と有加利さんのフォローをすることになっている。

どうせいつかは会うだろうしということ、冥界の体験学習も兼ね二人を連れてきたわけだ。

冥界にも慣れておいた方がいいと思ったから、ここに関しては満場一致。で、冥界の英雄で子供の人気の莫大な俺なら万一の護衛にぴつたりつてことになった。もちろんレイヴェルも補佐についている。

ただ、ついでにヴァーリと顔合わせするって流れはちよつと不安だった。

自分に流れるルシファアの血を誇り、最強の白龍皇を超えてグレートレッドに並ぶ白龍神皇になろうっていうヴァーリだ。おかしな状態だと俺や九成と渡り合っていた二人に興味津々だろう。読めていたからこそ、フォローができるタイミングで合わせるようになった。

ただ、威圧してはいないだろうけど興味津々すぎなんだよ。

「そこまでだぜ、ヴァーリ。色々訳が分かってないから、当分戦闘はさ

せられないんだからな？」

一応釘は差して置いたけど、やっぱりだけど意に介してないな。ドラゴンって、基本的に自分のペース。ヴァーリチームは全体的に自由人だし、こういう時はやっぱり自分のペースになるか。

「分かってるさ。だが俺と同様の魔王血族と二人も出会えたんだ。気になって当然だろう？」

ま、そりやそうだろうけどな。

自分の血と宿った力を誇り、それを極めようとしているのがヴァーリ・ルシファーという男だ。必然的に魔王の血筋、それも神器を宿したハーフってのは気になるだろ。

まして、魔王の血は神器に対するドーピング剤に仕える。実際ヴァーリは、龍神の肉体を得た俺とは違い己の血筋と友情でディアボロス・ドラゴンDX・Dに至った。ドーピング剤はシャルバの血が材料だったろうし、特に亜香里には興味があるだろうなあ。

流石に今のヴァーリなら、俺の時みたいに変な喧嘩を仕掛けたりはしないだろう。ただ、妙なちよつかいはかけそうだしなあ。

安心半分不安半分でいると、レイヴェルがゴホンと咳払いをした。「ヴァーリさん。カズヒさんから念の為、伝えておくようにと言われたことを伝えておきますわ」

ん？ そんなこと言ってたっけ？

俺が首をかしげていると、レイヴェルは再び咳払いをしてからまっすぐにヴァーリを見据えた。

だ、大丈夫なのか、レイヴェル。半端な出任せはヴァーリには通用しないぞ。

そう俺が思う中、レイヴェルは口を開いた。

「妙なことをするようなら、五感が察知した瞬間に知覚するより早くアナフィラキシーになるレベルのラーメンアレルギーになる呪詛を開発ちゅー」

「この世全てのラーメン、そして白龍皇アルビオンと魔王ルシファーの名において誓おう。この場でそちらの二人に余計なちよつかいは一切かけない」

食い気味でヴァーリが力強く宣言した。

な、なんてあほくさい呪詛なんだ。ヴァーリに効果覲面なのが悪質だけだ。

っていうか、ラーメンの後にアルビオンとルシファーの名を出すつて、慌てすぎだろヴァーリ。アルビオン、泣くぞ？ 魔王ルシファーも草葉の陰で泣くぞ？

なんだろう。効果覲面だけど、微妙な気分になるなあ。

『言つとくが相棒。おそらくその呪詛、相棒のおっぱいアレルギーから着想を得たと思うぞ？』

いろんな意味で最悪だ……！

「え、おっぱいアレルギー？ 何それ？」

「アレルギーって色々なものがあるけど、おっぱい……？」

亜香里と有加利さんも困惑している。

ですよね！ 自分でもショックは受けるけど、それはそれとして聞くだけで訳が分からないと思うよ。

でも最悪の事態だった。見ることも触ることも口に出すこともできなかつたからなあ。あれが続くようなら、俺の心は死んでいた可能性があるレベルだしなあ。

あ、思い出しただけで涙が……？

「お、あれは噂の赤龍帝じゃね？」

「お、赤龍帝に……お前らもか！」

「ほお？ こんなところで赤龍帝とはなあ」

ん？

なんか声をかけられたので、思わず振り向いた。

振り向いたけど――

「初めまして、赤龍帝。血族が迷惑をかけたね」

そんな風に片手を挙げて挨拶するのは、グレイファイアさんのチームにいる魔王血族の一人。

確かベルゼブブの人だけど、後ろにルシファーとアスモデウスの人もいる。

「よつす、赤龍帝！ それに望月に鱈川だっけか？」

亜香里と有加利さんにまで挨拶してくれるのは、以前であった
後継私掠船団のラムル。
ディアドコイ・フライベーター

「ほお？ 凡人達もいるとは、面白い趣向だな？」

「そういうわけじゃないんじゃない？」

そしてユーピ・ナーディル・モデウに、あとレヴィアタンの人もい
る。

「ふふ。噂の赤龍帝や白龍皇と会えるとはね。ハーデス様から話は聞
いているとも」

更にフードをおろしながらそういうのは、ハーデスの参加だと堂々
明言したラツイカ・レヴィアタン。

俺はちよつと深呼吸をして、空を見上げる。

ふふふ、紫の空にもだいぶ慣れたなあ。じゃ、もういいつか。

「旧魔王の血族、大集合じゃねえかああああああああっ!!!」

和地 Side

なんか今、イツセーの絶叫が聞こえた気がする。

「……まずいわね、こんな時に幻聴なんて」

そして隣にいたカズヒも聞こえたらしい。

「もしイツセーの声だったら、本当に叫んでたのかもな」

「彼、巻き込まれツツコミ属性だものね。後で念の為に連絡しておき
ましょう」

そう言いながら俺達は、シャワールームに入るとそれぞれお湯を浴

び始める。

観光もそこそこに、俺はカズヒのウォーミングアップに付き合っ
て軽い組み手をしていた。

これでもザイアでは色々な戦闘技術を教えられてたんでな。格闘
戦もお手の物だ。星辰奏者のポテンシャル込みなら、素手で戦車ぐら
い壊せます。

そして汗をかいたので、そのまま待機ブースのシャワールームを
使っているわけだ。いい汗かいたあ。

「試合までないなら、ちよつといたしてもよかつたんだけどね」
「男のスケベ心をそそらせることを言ってくれるねえ」

そんな他愛のない会話をしながら、俺達は汗を流してリフレッ
シュ。

ただ、やはり試合が気になるな。

「で、勝算のほどは？」

「4：7ぐらいで私達が不利ね」

厳しめだけど、間違いない想定はしているってことか。

「総力戦だと年季の差で押し切られかねない。やるなら短期決戦で、
私がグレイフィアさんを叩きのめすべきでしょう」

「二対一でか。ま、仕方ないところはあるな」

グレイフィアさんが率いるチームは、基本的に純血悪魔の集団だ。

固定メンバーとしてはグレイフィアさん及び魔王血族。それ以外
は相手チームの傾向に依じて、中級悪魔八人に上級悪魔から最上級悪
魔の四名というのが基本パターンだ。

初期の段階で帝釈天が率いるチームを打倒したが、あれは戦闘の勝
利が試合の勝利に直結しにくいランページ・ボールだったことも大き
い。とはいえ魔王クラスが率いる魔王血族のチームであり、間違いな
く平均水準が強い。

グレイフィアさんとフロンズがその気になれば、最上級悪魔だけで
チームを組ませることも可能だろう。とはいえあまりそれをすると、
余計な勘繰りを催すはず。だから数を用意できるギリギリのライン
で戦力を集めたって推測がある。

とはいえ、たいした実力が無い連中では帝釈天が率いる四天王はしのげない。この時点で、率いている連中が強いのは間違いない。

……だから、カズヒが厳しめの評価をしているのは当然だ。

カズヒは聖墓を宿しているし、鶴羽は聖槍・聖杯・聖十字架を使う余地がある。聖遺物が四つもあるなら悪魔相手にマウントが取れるが、それだけだ。

中級悪魔と星辰奏者ならほぼ同格。八人がかりは抑え込めるだろう。

とはいえ残りが全員、最低でも最上級悪魔クラス。そうになると、リーネスとお袋は言つて劣るのが難点だな。

……となれば、勝率を上げる札はカズヒによる大将同士の一騎打ちに誘導すること。

国際大会というお祭りなら、これを使えばグレイフィアさんも無視はできないだろう。彼女の立ち位置ではそれをガン無視し続ければ、色々とまずいことになる。それはフロンズも避けたいだろう。

……それも踏まえての勝率だがな。今のカズヒは超越者に届くミザリに勝算があるとはいえ、グレイフィアさんは年季が違う。決して楽に勝てる相手ではないだろう。

真つ向勝負で負ける可能性はある。更に、誰か一人でも落とされれば魔王血族が援護に來かねない。そしてお袋とリーネスが先に落とされる可能性は高い。

うくん。リーネスもお袋も弱くはないんだけどなあ。最上級悪魔クラスが相手だと、一対一はきついからなあ。

「どうする、カズヒ。新兵器の一つや二つぐらいは欲しい感じだけど」「流石に今は隠し玉はないわね。気合と根性でごり押しするのは避けたいし、不利は否めないわ」

ま、そんな簡単に新兵器の一つや二つなんて用意できないか。

バランス・ブレイカー
「禁手はどうなんだ？ まだ二つ残ってるだろう？」

思いつくのはその当たりなので、一応聞いてみる。

セイクリッド・ギア
禁手。神器の究極とされる段階。それをカズヒは、まだ二つ残している。

広大な異空間に物体を収納し任意で取り出せる、スペース・カーク異界の蔵。そして
カテドナル・グレイブ現世聖域の墓標。

三つも神器を持つというアドバンテージに、後天的に獲得したのは
ロンギヌス神滅具という反則具合。俺が敵ならふぎけんなど言いたくなるレベルだ。まあ、俺もなんだけど。

全部至らせることができれば、その時点で下手な魔王クラスを超える戦力になるだろう。カズヒの基本的な戦闘能力込みなら、超越者相手でも真っ向から渡り合える性能になるはずだ。勝ち目は一気に増えるだろう。

ただ、カズヒは少し考えてから首を横に振った。

「気合と根性を入れれば至れる自信はあるわ。でも、こういうのはきちんと考えたうえで至りたいのよ」

「……なるほど」

勢い任せじゃなくて、真剣に先を考えたうえでどう至らせるかを考慮した仕様にするのか。確かにそれは、大事だろう。

禁手はその性質上、土壇場での覚醒があり得る。だがそれは後先を考えている余裕がない状態になりやすく、長い目で見るとリスクもある。リュシオン・オクトーバーみたいなマネは特例枠だろうしな。

となれば、真剣に考えて吟味したうえで至らせるのも一つの手だ。英雄派がろくでもないことをしたおかげで、意識的に至らせることは十分可能。まして光極めてるカズヒなら、至らせようと思えばいつでも至らせられる余地はある。なら慌てることもない、か。

「……競技試合で勝ちたいからって、事実上不可逆の進化を遂げるのもね。その辺りはもつと慎重かつガちな事態を考慮して至りたいわ」となると、現状の手札でやりくりするしかない、か」

ガチのダーティジョブを担当していたカズヒとしては、競技試合に勝つ為の禁手を用意するのは抵抗がある。そういう事か。

「となると、かなり苦戦しそうだな。勝算も低いみたいだし」

「ええ。まあ、負けたとしても深刻な事態にならないもの。今ある手札でどこまでできるか、真剣に考えてやっていくわ」

ま、そこは止めることでもないか。

……とはいえ、それをもってしても見ものな試合ではある。

あの銀髪の殲クイン・オブ・デイバウア女王と、悪祓銀弾シルバーレットの激突。

チームD×Dとも縁が深い、二人の銀の激突。

ま、俺がこの場合どうするかなんて決まり切っている。

「応援してるぜ、カズヒ」

「ええ、貴方に恥じない試合にするわ」

応援してるぜ、カズヒ。

……それはそれとして、なんか微妙な胸騒ぎがするな。後でイツ
セー達に連絡を取っておくか。

戦愛白熱編 第二十話 スーパー魔王フェスティバル

祐斗Side

僕は観光ではなく、リアス姉さんの護衛として立ち回ることにした。

一応、リアス姉さんに護衛はいるだろうからね。流石にすぐに禍の団が動くことはないだろうけど、警戒はしておくに越したことはないだろうし。

それに、だ。

今回、詰問の為にリアス姉さんは動いている。荒事にならないとは思うけれど、眷属としては護衛の一人は欲しいところだ。

だからこそ、こうして顔を合わせている義姉妹の気配に、僕は戦慄を少し覚えている。

「……お義姉様」

「リアス……」

静かに互いを見据えるのは、リアス姉さんとグレイフィアさん。

既に仲間達との連携で圧倒的な力を振るえるリアス姉さんは、実力的には魔王クラスに近い。

対し、グレイフィアさんは真正銘魔王クラス。セラフオール様が襲名していた魔王レヴィアタン。その襲名も可能だと言われている人物だ。

その二人が、義理の姉妹でもあるのに睨み合いに近い状態になっている。まるで一触即発といえる雰囲気、ピリピリしたものを僕は感じている。

「……深くは聞きません。でも、こんなことをする必要があるほどの

願いなのですか？」

メイドとお嬢様の関係ではない、姉妹としての関係でリアス姉さんはそう尋ねる。

それに対し、グレイファイアさんは真っ直ぐにリアス姉さんの目を見た。

「ええ。冥界の未来、その為になると信じています」

はつきりと、彼女はそう宣言した。

そこに嘘は何一つない。そして、誰かにそそのかされた者が持たないだろう、強い決意すら感じる。

「フロンズ・フィーニクスの要望、その交換条件を叶える為の策がこれです。それ以上を聞きたいのなら、分かっているわね？」

「ええ。挑むとなれば、その時は遠慮はしないわ」

そう見据え、二人は踵を返す。

僕はそれに続きながらも、これでいいのかと考える。

もう少し聞き出すべきではないだろうか。そして、内容次第では説得するべきかもしれない。

「……よかつたんですか？」

だから聞くが、リアス姉さんは首を横に振った。

「頑なになっていているもの。問い質すのなら、こちらにもそれなりの覚悟と力があるわ」

そう返し、リアス姉さんは拳を握り締める。

後ろについている僕には、リアス姉さんの表情は見えない。何うことも今はしない。

ただ、悔しい想いを感じていることは間違いない。

「お義姉様、貴女がすることは本当にそれなの……っ？」

何がどうしてこうなった……？

「ほお？ これは中々素晴らしい感触ですね。眠る為の魔力行使とは、意外性のある発想です」

「え、えへへ……。そうですか？」

亜香里が魔力で作ったよく眠れる繭。それを、グレイファイアさんが率いているベルゼブブの末裔が興味津々で触れている。

べ、ベルゼブブの末裔がベルゼブブの末裔を誉めている。なんだこの状況。

亜香里と有加利さんをヴァーリに会わせていたら、なんかこの大会に参加している魔王血族が軒並み集まってきた。

なんなんだ、この状況。もう俺はどう反応していいかさっぱりだ。

「レイヴェル。場違いなんだけど帰っていいか？」

「待って、ここから離れないで。この空気に耐えられないからいて、お願い」

レイヴェルに聞いてみたけど、それより早く有加利さんが冷や汗をかきながら割って入る。

まあ確かに。王族だって言われても実感ないだろうし、そこに王族がゴロゴロ集まってきたって、キツイ人にはきついだろう。

俺は何というか、もう慣れた気がする。そういうのが分かる前にお偉いさんと縁がありすぎたからなあ。今じゃ俺も貴族だし。あと魔王血族なんて、殴り倒し慣れてるし。

ま、冗談交じりで言ったからそれは別にいいんだけどー

「温度と感触……つまりは触覚に特化していますね。なら次は別の五感に手を出してみては？」

「え、ど……どうする……んですか？」

「魔王血族同士ですし、堅苦しくなくて結構。あと例えるなら、眠る時

に音楽を流したりアロマを焚く場合もあるので、それを魔力でしてみるのです」

「あ、そっか。快眠グッズでもそういうのはあるよね。でも、どんなのがいいかな?」

「例えばですが、そこの赤龍帝は女性の乳房と対話する技を魔力で作りました。その応用で、触れた者の聴覚と触覚に、眠れるそれを感じさせる魔力の散布というのは?」

「おおおおお! いいね、それやってみたい!」

……話が弾んでるなあ。あのベルゼブブ達。

「でも勉強とか訓練とか多そうだし、正直ちよつと苦手かも。頑張るけど」

「気の持ちようでだいぶ変わりますよ。例えばあなたは眠るのが大好きなのでしよう?」

「え、うん。お昼寝とかは好きだけど、それが?」

「良質な睡眠には適度な疲労が効果的です。つまり勉強の目的をよく眠れる為に疲れることを主眼に置いてみては? モチベーションは上がるでしょう」

「……そっか、そうだね!」

話が弾んでいて、割って入るのも大変だね。

「はっはっは。ベルゼブブの末裔達が仲良くあるのは、冥界にとってはいいことだね? さ、お近づきの知るしにジュースでも」

と、ハーデスに仕えているレヴィアタンが、何時の間にか面白がりながらジュースを買ってきてくれた。

確かラツイーカだっけ? えっと、いいのかこの人。ハーデスのシンパだろ?」

「あ、どうも」

とりあえず受け取って少し舐めてみるけど、普通に売ってるジュースだ。

なんとというか微妙になっていると、今度は純血のルシファーの人がこつちに頭を下げてきた。

「連れがすいません。彼、知識欲に忠実で貴方の乳技やそちらの麵技

に強い興味を持っていたので」

「ほお？　ならラーメンをぐちそうするか」

ヴァーリが妙なところで食いついたし。

ただ、すぐに視線をルシファアの方に向けてきた。

「確か、ブンガーといったね？　君もルシファアの血を継いでいるなら、もっと覇気を持った方がいい」

あ、そうだそうだ。ブンガー・ルシファアって名前だった。

ヴァーリも自分の親戚になるし、やっぱり興味があるか。

なんというか、借りてきた猫のような雰囲気だしなあ。そういう意味でも気になるのかも。

同じくルシファアの末裔っぽい、ラムルも複雑な表情だし。

「つたくだ。王族の末裔で、しかも純血なんだろう？　もうちつと胸張ってくれよ、こっちの肩身まで狭くなるじゃねえか」

文句を言うってくるけど、ブンガーさんは困り顔だった。

ま、確かにちよつと分かるかもな。

純血の魔王末裔って、俺が知ってる限り皆偉そうだったし。むしろ根拠のない自信まであるぐらいだし。

カテレアにしろクルゼレイにしろシャルバにしろ、どいつもこいつも自分は偉くて他人は下って感じた。リゼヴィムも超越者の自負や扇動のセンスもあつて、こっちは一応見合っている感じはそれなりにある。何ならヴァーリやラムルもそうだし。

むしろこの場の魔王末裔って、誰もかれも自信があるっていうか、みなぎってるって感じがするし。いきなり知らされて自覚の薄い亜香里と有加利さんより弱いブンガーさんは、むしろ弱気すぎだろ。「失礼ながらブンガー様。もしかして、魔王の末裔だと教えられずに育てられましたか？」

レイヴェルも気になって聞いてみたけど、ブンガーさんは首を横に振る。

「いえ、僕達は皆、魔王の血筋であることを教えられたうえで育っています」

ふうん。ならなんでだろう。

あの旧魔王派の連中なら、育て方だつて偉そうになる方向だろうに。「貴方は純血の魔王であり、すなわち悪魔を好きにしているはずなのです！　なのに偽りの魔王が擁立されて……」とか吹き込んでそう。そんなところばっかり見てきてるし。

ただブンガーさんは、思い出したかのように辟易の表情になった。「本当にうんざりな生活でした。……仕え捧げてくれる民を、使い捨てても勝手に増える雑草のように考えているのが丸分かりでしたから」

おお。滅茶苦茶まともな人だ。

確かに、シャルバつてそんなところがあつたな。そういうやつを崇めているなら、そういう教育になるんだろうなあ。

思い出したらなんかイライラしてきた。あいつ、本当に碌でもなかったからなあ。

そんな俺の様子を見て、ブンガーさんはなんか力強く頷いていた。「そういう感じなので、何とか抜けられないかとは思ってたんです。それにグレイフィア様を見れば、僕達如きが偉そうにできる社会じゃないってすぐ分かりますよ」

確かに、グレイフィアさんって強いしなあ。魔王クラスは伊達じゃない。

でもまあ、そんなグレイフィアさんのチームメンバーとして、名前負けしていないのがブンガーさん達だ。実際、帝釈天相手では結構戦えてたし。

そんなに低く扱うこともないと思うんだけどなあ。

ヴァーリもそんな感じなのか、ちよつと眉間にしわを寄せているし。

「シャルバ達も大概だが、君も別の意味で大概だね。そこは改めるといい」

ヴァーリはため息をついたような表情で、ブンガーさんにそう突き付ける。

「誇り高い血を持つのなら、生き方も誇り高くするべきだ。シャルバ達も論外だが、君のその卑屈さも問題だぞ」

自分の血と宿した力を誇っている、ヴァーリらしい言い方だな。ただ、そんなヴァーリの言葉にブンガーさんはすぐに反応し……肩を落とした。

「ええ。正直そんな来歴とか荷が重くて胃が痛いです」

お。おおう。凄く嫌そうに自分の血について語ったなあ。

多分だけど、この人ってマルガレーテさんと気が合いそう。

たぶんあれだ。王族の生き方とかに興味がない人だ。偉くなるとかそういうことに、興味を持ってない。むしろ面倒ごとが多いから嫌がりそうなタイプ。

しかも責任感はあるから、むやみやたらに投げ出したりしない人だ。苦勞人って感じをひしひしと感じてきたぞ？

「覇気がねえなあ。夢とかこじんまりとしてたりするんじゃないか？

豪遊とか興味ねえだろアンタ」

ラムルも悟ったのか、そんなことを聞いている。

そしてブンガーさんもすぐに頷いていた。即答のレベルだった。

「資産や地位は皆無でも大変ですし、ちよつとぐらいいは遊びたいですけどね。ただ、僕としてはたまに有休をとつても怒られないぐらいの地位と能力で十分です」

そういつたうえで、ブンガーさんはどこか遠くを見ながらすすけた表情になる。

「そこそこの生活を平穩に送れるのが一番で、辺境で静かに暮らしているとか言われたかったなあ……はあ」

そして思いつきり肩を落として俯いた。

もう嘘偽りない本音だつてことがよくわかる。心の底から苦悩しているトーンだ。ガチの発言だ。

これ本気で言ってるよ。シャルバ達みたいになりたくないし、見合つた能力を得るのも責任が重いから嫌だつて感じた。向こうからのスカウトなら、飼いや殺しでも多少は遊ばせてくれるだろうからいいかあ……って感じで誘いに乗ったんだ。

それが国際レーティングゲーム大会で、魔王の後継者最有力候補の率いるチームに魔王の末裔として登場だもんなあ。良くも悪くも注

目的のだよ。想定外にもほどがあるよ。

心の底から、現状より低いところを望んでるみたいだなあ。

「……真面目な話なんですけど、僕の地位と血統を欲しがっている野心家の実力を持つ女性っていませんか？ 必要な時以外は静かに暮らさせてくれるのなら、余程の悪条件が無ければ即婚約したいんですが。……代わりに背負ってくれる配偶者が欲しい」

死んだ目でそんなことを言ってくるけど、これどうしたらいいんだよ!?

「ふっ。心根が凡人寄りではそうもなろう。安心するがいい、ブンガー・ルシファー」

と、そこでユーピが憐憫の表情を浮かべながらそう言ってきた。

お、思わぬところから助け船が来たのか？

「最近の後継私掠船団も多種族化が進んでいるのでな。冥界でのし上がる為に爵位持ちの旦那と政略結婚したい純血女悪魔をリストアップしておこう。同胞が彼方明日を掴む手伝いも、たまにはしてやらんと」

「—本当ですか？」

その瞬間、音もなくブンガーさんはユーピの目の前に立っていた。で、できる!?! でもこんな形でそんな素質ところを見せなくても!?!

あまりの勢いとその理由に、ユーピはもちろん誰一人として動けなかった。

あと、ガラスに映っているブンガーさんの血走った目にちよつと怖くてツツコミを入れられないのが俺だったりする。

「虚言じゃないですねリストもらえますねお見合いですよねこの面倒の塊を欲しますよね……!」

「ま、まだだ！ その程度で終わらせん！」

こんなところで覚醒するなユーピ!

いや、ブンガーさんに気圧されそうになるの分かるけど!

怖いよこの人! 自分の血筋を重荷に感じてる上、マルガレーテさんと違ってちよつとは俗世的な欲望あるから、結果的に結婚願望の奴隷になってるよ!?!

カズヒばりの光を極めてるやつでも気圧されてるよ！ ラムルとエペラすら一瞬気圧されてたし！

「細かい条件を送るがいい！ 適切なものを見繕ったうえ、順位付けしてリストアップしてやろう！」

「ありがとうございます！ では時間が許す限り説明を！」

……あ、また別の方向に話が進んでいく。

「……あの、イツセーくん」

と、有加利さんが俺の方を向いてきた。

冷や汗が流れている上、なんとというか戦慄を感じるような顔だった。

「魔王の血族って、こういったのが基本なの？」

……………。

「すいません、否定できません」

「イツセー様！ 頑張ってくださいまし！」

レイヴェルが俺をたしなめるけど、無理だよ。

だって魔王血族って、どいつもこいつもアレだもん！

ぶつちやけヴァーリですら比較的常識人だよ！ マルガレーテさんは良識はあるけど、妙なところでぶっ飛んでるところあるし！ 残りはぶつちやけあれな奴らばっかりだし！

シャルバはもちろん、カテレアとクルゼレイもどっこいどっこいなろくでなしだったし！ あとリゼヴィムも別の意味であれだったし！ 何なら襲名しているだけの、サーゼクス様達も変人って方向性でアレだったし！

ぐうの音も出ない。魔王の字あやなを持つ人達って、アレという形容詞をつけたくなる人格してる奴らばかりだ。反論したくでもできやしねえ。

「……落ち着けよ。そうすると、自分も同類って言っちゃまうことになるぜ？」

「そう思いそうだから、聞かずにはいられないの……っ」

ちよくちよく会ったことのあるラムルがそうたしなめるけど、有加利さんはそう呟いて崩れ落ちる。

あ、そつか。魔王血族が揃いも揃ってアレだと、血を引いている自分もそうなるって考えちゃうのか。

ただでさえ、メンタル的に結構追い詰められてるところがあるからなあ。だいぶましになったけど、まだ負担も大きいだろうし。

亜香里みたいになちよつとはっちやけられるところがまだ出てきてないからなあ。むしろ現在進行形で、トロイド・ベルゼブブさんにノリノリで新たな睡眠技の開発研究をしてるし。ヴァーリの麵技のノリだ。

……あれ？ その流れだと、乳技を使う俺も同類？

「あら、どうかしたのかしら？」

エペラに声をかけられて、俺はショックで崩れ落ちていたことに気が付いた。

いや、だって……さあ？

カズヒSide

「そろそろ時間ね」

私はシャワー浴び終え、既に控室に向かっている。

相手は間違いなく、今までで最強のチーム。不利なのは間違いなくこちらの方だった。

私がちよつとほっこりする彼氏との会話をしている間にも、この試合に参加するメンバーは思い思いの時間を過ごしているでしょう。

シリアスなこともあるかもしれない。コメディじみたこともあるだろう。そして、私は間違いなくいい時間を過ごさせた。

ええ、だからこそ一つだけ言える。

「無様な姿は見せられないわね」

呼吸を整え、意識を切り換える。

まあ大丈夫。私はそもそもそれが得意だ。

常在戦場、覚悟完了。想いを力に変換し、限界を超える覚醒を遂げる。

それでも負けることもあるけれど、死力を尽くすのだけは得意だから。

だからこそ――

「相手をしてもらうわよ、グレイファイア・ルキフグス……っ」

――全力でぶつからせてもらうとするわ。

戦愛白熱編 スーパー才能フェスティバル（料理編）

和地Side

『さあ！ まだ前半ながら熱い試合の多いアザゼル杯予選！ 今回の試合は注目のカードであっ！』

実況の人が声を張り上げる中、観客の人達もテンションが高い。

まあ、俺もちよつとテンション高めに見ているけどな。

『我が冥界が誇り、そして新統治者制度たる九大罪王の最有力候補！ 銀髪の殲滅女王！ グレイファイア・ルキフグス選手率いるう

……光掴む殲滅女王チームがまず入場おおおとおおっ！』

『わあああああああああっ！！』

大歓声が鳴り響く中、グレイファイアさんを戦闘に、何人も悪魔が入ってくる。

あのグレイファイアさんがチームを率いて参戦した。しかも初戦であの帝釈天率いるチームを打倒した。純潔の魔王血族を三人もチームメンバーに入れてる。

注目を集める要素しかないチームだから、これも当然。まして冥界の悪魔領で行われる試合だ。ホームも同然だから大歓声になるだろうさ。

だが、相手チームに対する注目だつて負けてない。

『対するはあつ！ 悪を穿つ聖なる銀弾！ かのチームD×Dが誇る女傑の代表格！ 音に聞こし悪敵銀神、カズヒ・シチャースチエ選手率いる悪敵の聖銀弾チームも入場だあああああっ！！』

『おとおおとおおとおおっ！！』

さつきに比べれば一段劣るが、これまた大歓声が鳴り響く。

カズヒは堂々として入場しているけど、内心苦笑い気味だろう。

大活躍しているのは事実だけど、特に大きなのはミザリの打倒だ。だがミザリ・ルシファアがああなつたのは、道間日美子が道間誠明の起こしてはいけない性質を目覚めさせたことに由来する。

マッチポンプじみた理由で大人気とか、内心複雑だろう。もうちよつと批判的な発言とかが来てもいいだろうにとか思ってるはずだ。

ま、殺害予告も来ているわけだけど。流石にこんなところでブーイングを鳴り響かせるほどではないらしい。

俺達と共にいることを容認してもらおう為にも頑張っているカズヒとしては、この大人気はどんなものやら。結果に関わらず、ちよつとゆっくり甘やかすかね。

そんなことを思いつつ、並び立ち睨み合う両チームを俺は観察する。

おそらくだが、殲滅女王チームはまだ本腰を入れていない。

帝釈天の打倒は確かに偉業だが、その試合はランペイジ・ボール。幸か不幸か戦鬪の勝敗が試合の勝敗に直結しないからな。

そこも踏まえて、この試合がどう動くか。

しっかりと見据えさせてもらうぜ、お二人さん。

「……………和地。シリアスな雰囲気のところ悪いけど、サイリウム両手に応援体勢をとってたら台無しよ」

「え、マジですか!?!」

嘘でしょ、リアス先輩!?

僕達はそつと、九成君から視線を逸らす。

今回僕達は都合もついたので、オカ研メンバー全員が応援に集まっている。

そして九成君はアイドルのコンサートに集まる親衛隊のような恰好で準備万端になっている。

うん、彼つてこういうところあるよね。

「なるほど。では私もイツセーの試合はそれで行きますわ！」

「やめてあげてください。イツセー先輩にツツコミの労力を使わせないでください」

「……むしろ試合妨害です」

ヒマリが何かしら感銘を受けているけど、そこはルーシアちゃんとお猫ちゃんの頼れる二年女子達に任せよう。

それはそれとして、今回の試合はどう動くのかが気になるね。

努めて九成君から視線を逸らしつつ、僕はモニターに注目する。

『本日の試合は……ライトニング・ファスト！ ルールはシンプル、制限時間が一時間で行われる通常ルールとなっております！』

……へえ。

「あらあら。グレイファイアさんも今回はついてませんわね」

「これはカズヒ達に圧倒的有利だろう。特に、カズヒにとっては最良ともいえるね」

朱乃さんやゼノヴィアがそう呟くけど、さもありません。

カズヒが唯一至らせている、アーム・ザ・リッパ剣豪の腕の亜種禁手。

エンド・ザ・リボルバー銀弾の決戦兵装。今回あの禁手バランス・ブレイカーに有利すぎるルールが適用されたしね。

銀弾の決戦兵装は、聖遺物系神滅具を五つも保有していくつも至らせていた、ミザリ・ルシファーの打倒を考慮したもの。能力は六つの亜種禁手を任意で切り替える、ある意味で破格の能力。だが通常神器でそれを成す為、禁手の継続時間を一時間きっかり、完全回復のインターバルを僅かに長い66分きっかりと、リソースの収束を行っている

る代物だ。

本来禁手とは、神器の上位形態。僕が至り立てで数時間が限界と聞いた時、研究の最先端にいるアザゼル先生はあっさり切って捨てるほどの短時間と見なしている。そして要求された持続時間は三日であり、比較対象として告げられたヴァーリの持続時間は月単位。数日レベル扱えて、漸く真つ当に使えているレベルなんだ。

神器の頂点たる神滅具を五つも疑似的に保有する、ミザリ・ルシファーを最悪一人でも何とかする。そもそも種族的地力の差ゆえ、長期戦が危険な奴を相手にだ。その圧倒的高難易度を大前提としたカズヒが、元々有無を言わせぬ短期決戦が求められやすいダーティジョブの観点をもつてすれば、当然長期戦を捨てるだろう。その思想の結実がああ禁手だ。

ゆえに長期戦が必須な状況では、適度に至るのをやめてインターバルを挟む必要がある。そういう必要性がある時は味方との連携か、徹底的にゲリラ戦に近い戦いをする必要があると踏んではいただろう。だが数時間が当たり前のレーティングゲームでは、多少リスクがある手札ではあった。

だけど、一時間で終わるライトニング・ファストなら話は違う。

このルールは間違いなくカズヒに有利だ。一時間だけ頑張ればいいのなら、遠慮なく速攻で至らせてから挑めるわけだ。

「このルールなら、カズヒ先輩に有利です！ 勝てるかもです！」
「そうですね。とはいえ、その程度であっさりやられるようなチームではないでしょう」

「あの帝釈天をチーム戦で負かしたわけだしね。一筋縄でいくわけがないわ」

ギヤスパークくんもロスヴァイセさんもイリナさんも、関心が高まっている。そういう状況だ。

相性の良すぎるルールを追い風に、カズヒが速攻で押し切れるか。向かい風をものともせず、グレイフィアさんがしのぎ切るか。

双方をよく知る者達が殆どである以上、やはり興味深いというほかない。

ただ、懸念事項もある。

先ほどあつたグレイフィアさん。どこか思い詰めているような、据わった眼をしていた。

あんな状態の彼女が、フロンズ・フィーニクスと手を組んでいる。ましてフロンズとて、グレイフィアさんが負けることは望んでないだろう。更にフロンズ達革新衆には、魔剣を鍛えるブレイ・マサムネ・サーベラや、聖槍を作り出すトバルカインことティバールがいる。

どんな隠し玉を持っているか分からない。そういう意味では、やはりグレイフィアさんの有利は動かない……か。

そんな僕の内心と、ほぼ同じことを思っている者は多いだろう。

VIPルームの空気は重くなっている。

「……雰囲気が不思議ね。どうかしたのかしら？」

首を傾げるヴァレリーさんに、ヒツギとアニル君がちよつと苦笑を浮かべていた。

「あゝ。まあ私達、基本的に戦闘要員だからね？」

「まして身内同士なわけで、やっぱり……ねえ？」

そうだね。それもあつて、どうしても雰囲気は微妙になってしまうね。

とはいえ、アザゼル杯は基本にお祭りだ。

この空気のままというのも問題があるし、そろそろ何かしらで空気を換えないと――

「……そういやあ、おっぱいドラゴンの旦那とマネージャーさんはまだですかい？」

――そう思った時、首を傾げたリントさんがそう言った。

あ、そういえばまだだね？

「……あの焼き鳥、まさか抜けがけ……っ」

小猫ちゃんが軽くキレかけているけど、それに対してロスヴァイセさんが首を横に振る。

「いえ、あのレイヴェルさんに限ってこの流れでそれはないでしょう。彼女はマネージャとして敏腕かつ真面目ですから」

確かにそうだ。それに、あの二人は望月さんと鱈川さんも連れてい

イツセー君。君はどれだけ人を引き寄せるんだい？ 彼自身分らないだろうけど言いたくなるよ。

イツセーSide

『試合開始前の作戦時間は十分！ それでは、試合開始まではこれまでの試合内容のダイジェストをお楽しみください』

実況の人がそう言って、画面にはカズヒやグレイファイアさんがこれまでアザゼル杯でこなした試合の映像が流れていく。

ただ、俺にはそれを見る余裕がない。

「美味しい！ お代わりしてもいいかね!？」

「いいとも！ はっはっは！ 才能がこんなところにもあつて本当にすまない!」

そんな感じで、流れるように握るユーピの寿司を食べたラツイーカが大絶賛してお代わりを求めている。

「……どうして、こうなった……っ!」

「あゝ、なんか悪いな」

ラムルがそれとなく謝ってくれるけど、お前は別に悪くないしなあ……。

なんていうか、試合よりこの部屋の方がキツツイ!

どうなる、これから!?

「……むう！ うどんと蕎麦でここまでのものができるとは！ ラーメンは、ラーメンはどうなるのだ、ユーピ・ナーディル・モデウ!？」

「ふははははっ！ 我が才能が豊富すぎて本当にすまない！ 作ってやるからしばし待つかいい、ヴァーリ・ルシファーなる凡人よ！」
……本当にどうなる!?

戦愛白熱編 第二十二話 死闘開幕!! 速攻波乱!
!?

イツセイSide

あ、美味しい。このお寿司は本当に美味しい。美味しいのが腹立つ……っ。

「どうしたのかな、赤龍帝?」

「味を堪能しながら苛立つのか?」

ラツイーカとユーピが続けざまにそう言うけど、苛立つさ。

なんで俺は、リアス達に囲まれながら試合を観戦するはずがこうなっている。魔王血族がゴロゴロいる環境に放り込まれながら、魔王血族が握った寿司を食べている。リアス達がいらない中で寿司だけ食べながらここにいます?

なんか泣きたくなってきたし。食わずにやっていられるか……っ

「しかし、混血や先祖返り込みとはいえよくぞここまでの者達が集まってるとはね?」

寿司を食べながら、ラツイーカはそんなことを言ってエペラの方をちらりと見る。

同じレヴィアタンの末裔として、やっぱり気になってるんだろっか。

ただ、エペラの方はさほど気にしてないみたいだ。どちらかというど、映像の方を気にしてる感じだな。

「きよ、興味があるんですか?」

と、有加利さんがそう尋ねる。

恐る恐るだけど、ここで変なちよっかいは仕掛けてこないと判断したんだらう。

ま、その時は俺が前に出るけどね。

俺だって上級悪魔の端くれで、冥界の英雄。これでもお偉いさんとのコネは豊富だし、アジユカ様に会いに行くこともできる。魔王血族が相手だろうと、ちよつとぐらいいは何とかなるさ。

ただ、エペラは特に気にすることなく頷いた。

「ええ、私の超える対象は彼女だもの」

……それはつまり、グレイフィアさんか。

「意外だな。初代レヴィアタン様を超えるとか、そんなつもりだと思ってたぜ」

俺がそう言うのと、エペラは小さく首を振りながら、挑戦者みたいな表情を浮かべる。

「超えるべきは今の最強。ロイガン・ベルフェゴールが王の駒を封印して退き、セラフォル・レヴィアタンは隔離結界領域へと去って行った。なら、今の女悪魔で最強たるはグレイフィア・ルキフグスただ一人」

ああ、それは確かに。

かつての冥界、女悪魔で魔王クラスは三人。超越者クラスは一人としていない。

そしてエペラの言う通り、今冥界でその座に残っているのはグレイフィアさんだけだ。そういう意味では目標といえるだろう。

ただ、エペラの目にはそれだけじゃないぎらついたものを感じる。

「私の目標は超越者の頂。だからこそ、まずはグレイフィア・ルキフグスを超えるのよ」

……超越者、か。

サーゼクス様、アジユカ様、そしてリゼヴィム。その三人だけが称される三強。悪魔という種族かどうかすら怪しいとされる、文字通り超越した強さを持つ存在。

リゼヴィムは間違いなく一枚落ちるだろうけど、それでもやばい強敵だった。そしてその頂に、新たに目指そうとする者がここにいる。

後継私掠船団らしい奴だよ。まったくもって油断できないつな……つ！

「さて、次は中華といこう。――麻婆豆腐とラーメンお待ちい！」

ユーピの奴はいつまで作ってんだよ!？」

「ほお? 痺れるこの辛味……四川風かい?」

「その通り! ふふふ、我が才能は戦闘だけに止まらぬのでな!」

「ふふふ、甘いぞラツイイカ。このラーメンも中々というほかない

……やはり豚骨ラーメンはある種の至高……っ。悔れないな、

ナレディル・イスカンドル
第三征王!」

……ユーピの相手はラツイイカとヴァーリに任せよう。

あ、本当に痺れる辛味だけど美味しい。

あとラーメンもうまい。なんというか、麻婆豆腐の後に食べると舌に辛みが残らなくなる感じがする。そこまで考えたのかな?」

「にしてもよお? グレイファイア・ルキフグスは何考えてんだ?」

と、同じように麻婆豆腐を食べながら、ラムルは首を傾げている。

あれ、こいつらも知らないのか?」

「フロンズの提案じゃなかったのか? なんて知らないんだよ?」

「あのなあ? 後継私掠船団は、契約を交わしたそれなりの繋がりがりつつつても元テロリストだぞ?」

と、俺に対してラムルが言い返す。

その上で調理器具を洗いながら、ユーピもしっかりと頷いていた。

ちなみにエペラも頷いている。あ、こいつら全員知らないのか。

「ま、幸香まで知らぬかは知らんがな。だが対外的には下った懲罰部隊が我々後継私掠船団だ」
ディアドコイ・フライベーター

「機密情報関係は、あまり聞かされないし聞かないようにしないとね」と、口々にユーピやエペラがそう言うのと、ラムルもしっかりと頷いた。

「ま、そういうこった。聞き出せないかってんなら残念だったな」

そつか。ま、仕方ないか。

フロンズは政敵だけど政敵で止まっているし、グレイファイアさんはその点は信用できるし。ま、冥界に悪影響は出ないだろうさ。

ま、それなら俺も試合を観戦するか。リアス達とじゃないのは残念だけど、あの二人の試合は気になるし。

と、俺はその上で亜香里と有加利の方に振り向いた。
ちよつと緊張している状態だけど、ま、そこは大丈夫だろう。

「よく見とけよ。間違いなく、三大勢力で最強女傑決定戦になるだろうから」

いや、割と冗談抜きで。

「あ、デザートの子エリーパイも焼きあがったぞ？」

全方位万能の料理人か何かか、ユーピ！

和地 Side

有加利さん達、大丈夫だろうか。

魔王血族とか、癖の強い性格ばかりな印象だからなあ。囲まれるとか精神的にきつそうだ。

試合が終わったら強引にでも連れ出すか。イツセーを含めてもメ

ンタルがごりごり削れそうだ。

ただ、事態はそこから更に動いている。

『お待たせしました、皆様！ ついに試合開始となります!!』

さて、そろそろが本番か。

「和地はどう思う？ お義姉さまとカズヒなら、お義姉さまの方が有利だとは思うけれど」

「同じく。ちなみにカズヒ自身もそう踏んできましたね」

リアス先輩にそう答えながら、俺は中継される映像を確認する。

展開されるフィールドは小島。それも集落そのものといえるような地点だ。

直径は精々が2kmほど。短期決戦を前提とするライトニング・ファストだからこそ、フィールド全体も小さく設定されているのだろう。

そして試合が開始するとともに、動きはシンプルだった。

『全員プラン通りに！ 本丸は私が対応する！』

そう言うなり、カズヒは全力疾走を行いつつシルバードームに変身。それに追従するように、ある程度の距離を開けながらお袋達は駆けだしている。

チーム全体の総合力なら、現段階では間違いなくグレイファイアさん側が有利。本気で勝ちを狙うなら、カズヒたちはグレイファイアさんに収束しての短期決戦ぐらいしかない。それは双方の認識だろう。

そこに速攻が求められるライトニング・ファストのルールがあれば、こうなることは双方ともに読んでいる。

だからこそ、グレイファイアさん達も迎撃が早い。真つ向から魔力弾が放たれ、カズヒ達をぶちのめそうと襲い掛かる……が。

『甘い!!』

それを、カズヒは正確に撃ち抜いて突破口を作り上げる。

銀弾の決着兵装に装填される六つの亜種禁手、シュート・ザ・スナイプ射手の慧眼。射撃武装を強化することに特化し、更にどこに飛んでいくかを感覚的に理解させる。

そこにカズヒのポテンシャル、更にアタツシユシヨットガンが加

わった結果はこの通り。弾幕であろうと突破口を作る程度の撃ち落としは可能となる。

そしてぶつかり合う両チーム。ここからは一気に乱戦になるだろう。

そして、カズビは目標と接敵する。

『挑ませてもらうわ、グレイファイア・ルキフグス！』

『掛かってきなさい……カズビ・シチャースチエ』

突貫するカズビに、静かに迎撃を返すグレイファイアさん。

その瞬間、一歩間違えば巻き込まれて両チームにリタイアが出るような戦闘が開始された。

「うっひょ〜！ なんとというか、三大勢力が誇る女傑同士、死闘っすなあ」

「凄い戦いね。あんな戦いができるの、ツエペシユの里にいたかしら？」

比較的慣れてないリント・セルゼンとヴァレリーが感心するが、まあそうだろう。

どちらも魔王クラスと真っ向勝負ができるレベルの女戦士だ。はつきり言って、この大会でも女選手に限定すれば上澄みレベルに到達するだろう。

その二人の真っ向勝負、果たして一体どうなるか。いろんな意味で気になる試合だ。

とはいえ、問題はそこだけでもない。

なにせチームの総合的に、グレイファイアさんの方が有利だ。押し切られてから圧殺というのも十分あり得る。

とはいえそれは、勇儀さん達も分かっているだろう。防戦よりでのいでいく方向になる。

幸い、基本的にグレイファイアさんのチームは魔王血族以外は兵士を中級、騎士と戦車を上級にするのが定番だ。おそろくだが、魔王血族をある程度目立たせる為に最上級悪魔は最小限にする形なんだろう。その辺りはフロonzの立ち回りかもな。

だから、鍛えられた星辰奏者^{エスベラント}との連携もある。リーネスやお袋は戦

戦愛白熱編 第二十三話 九大罪王の王冠

カズヒSide

「どういう隠し玉よー」

思わずそうぼやきながら、私はグレイファイアさんと真っ向から競り合う。

魔王クラスの基本性能に、歴戦の経験による立ち回り。

性能のゴリ押し込みならミザリが上でしよう。だけど経験値に物を言わせる戦い方の厚みが、彼女を強敵として完成させている。

そして、状況は完ぺきにこちらが不利。光掴む殲滅女王チームは、悪祓の聖銀弾チームを完全に圧倒している。

信じがたいわね。中級悪魔クラスが相手なら、星辰奏者だつてやりようはある。対異形を踏まえた訓練も受けているし、そう簡単に後れは取らない。その上で圧倒されている。

理由は単純。攻防速が明らかに跳ね上がっている。

もはやあれは、上級の上澄みか最上級の底辺といったところ。最上級悪魔換算で言うなら雑魚だろうけれど、最上級悪魔クラスは大半の雑魚にとつて悪夢でしかない。

更に上級悪魔四名も中堅に届くかどうかどうかレベルの最上級悪魔になっっている。

攻撃が強い。防御が固い。動きが早い。単純にすべての性能が強化されたことで、私達のチームは圧倒されている。

あれでは、一時間持たずに大半がやられる……！

明らかにおかしい。異常事態だ。

アザゼル杯はレーティングゲームの延長線上に位置する。その性質上、メンバーの強さは駒価値による制限を受けると言ってもいい。つまり、強さに応じた人数制限を受ける。

神クラスでもなければ複数にならない、僧侶ビショップと戦車ルークと騎士ナイトはいい。それぞれが一駒ずつ使っているが、それはつまり神や魔王でもない限りはそれで済む。実際、ブンガー・ルシファーとトロイド・ベルゼブは、それぞれ僧侶一駒で済んでいる。

だが兵士の駒は別だ。昇格のシステムもあつて厳しめに設定されており、上級悪魔クラスになると複数必要。最上級悪魔クラスなら三駒か四駒は必要になる。中級悪魔クラスが一駒で収まるギリギリのラインといえるだろう。

八人も最上級悪魔と競り合える性能を設置できるわけがない。これは明らかにおかしい。

駒関連は潜在的なものを含めた性能がものを言うとはいえ、テクニクで出力をあそこまで底上げできるわけがない。

そして反則はまずない。堂々とこのレベルを見せて言い逃れは無理だ。グレイファイアさんが不正を良しとする性格とは思えないし、フロンズも好き好んで不正をする手合いでもない。そもそも競技試合で不正する思考回路が双方にないでしょう。

つまり、結論は一つ。

「……バッファア前提のチーム構成、そういう事ね！」

言いながら飛び蹴りを叩き込み、同時に光力の槍を乱れ撃つ。

おそらく魔王血族の誰かが、バフ系の札を持っている。それもかなり強力なレベルだろう。

そして蹴りをはじめ光力を撃ち落としながら、グレイファイアさんは頷いた。

「ええ。そして強化率や効率を考えると、中級中位から上級下位の悪魔が最も有効なのよ」

「それがチーム構成の理由ってわけね！」

考えられたものだわ。

そしてフロンズらしい判断ね。おそらく、魔王血族のデモンストレーションを行いつつ、それをグレイファイアさんに従う形でさせる。それによる、民意の調整が狙いかしらね。

しかしまずい。その特性は反則一歩手前に近い。

レーティングゲームの制限を疑似的に崩壊する、そんなバフの極限じみた特性。シンプルに最上級悪魔クラスばかりで構成されたチームとか、半端な神クラスのチームなら力押しで圧勝すらできる。

ぬかった。こんな札を帝釈天相手じゃなくて、こちらに対して使うとはね。

「危険視されてる。そう受け取っていいですか!？」

「惜しいわね。インドラとの試合では、性能を底上げする必要はなかっただけよ」

なるほどね。

ランペイジ・ボールは倒されてもある程度経てば復帰できる。ファールありとはいえ球戯止まりだから、性能の底上げで真っ向勝負をする必要はなかった。だからあえて伏せていたのね。

その後の試合も、そこまでする必要がなかった。だから使わなかった。

フロンズもそれを了承した。おそらく、インパクトが強い戦いまで取っておきたいとも思っていたでしょう。

……確かに効果的でしょうね。

悪鬼明星ルシフェルたるミザリを打倒した私は、間違いなく注目されている。それが相手の真っ向からの競り合いなら、見せるだけの価値はあるってことかしら。

ただ、あまり舐めるなよ？

「つまり真っ向から、貴女を打倒すれば済む話よー」

まだ持つ。少なくとも鶴羽と勇ちゃんはしのげる。

その間に、一気に押し切れば済む話。そして私はそれができる女。フルスロットルで一気に――

『シンドライバー』

『ENVY!』

――その瞬間、私は視界にとんでもないものを見た。

高貴な装飾が施された、しかし最新科学技術で作られたと一目で分かる変身デバイス。そして、悪魔の姿が象られたプログライーズキー

うかつだった。考えてみれば当然だ。

元々大王派、それもフロンスの提案もあつて進められたのが九大罪王。

そこに、フロンスが手掛ける技術が一切ないわけがない。

「……変身」

『デビルライズ』

魔力がライダーモデルに纏わりつき、オーラの塊となつてグレイファイアさんに装着される。

だからこそ、私は一步を踏み込む。

「させるかあつ！」

その瞬間、私の蹴りが吸い込まれるが、しかし相手もさるもの。

腕でそれを受け止め、吹き飛ばされる腕のオーラ。

だがその瞬間、それ以外は装着される。

「デビルライズが完了される前を狙つたのは見事。ですが——私をあまり舐めないで欲しいわね」

その瞬間、魔力攻撃が私を弾き飛ばし、空いた腕に装甲が展開される。

『インヴィディアデビル！ It, s a k i n g o f e n v
y』

あ、これまずい。

私は見た瞬間にそれを悟る。

間違いない。断言できる。

目の前の化け物は——

「では、仮面ライダーシンインヴィディアの初陣といきましょう」

——冗談抜きでリスタートで挑むべき化け物だ。

イツセーSide

「これは、かの悪祓銀弾でも厳しいかな？」

ラツイーカ・レヴィアタンがそう言うけど、旗色が悪くなったのは間違いはない。

まさか、まさかグレイフィアさんが仮面ライダーに変身するなんて想定外だ。しかも、九大罪王ならドライバーって……罪王専用兵装かよ！

間違いなくフロンズの肝入りだ。まず間違いなく、罪王の専用装備として開発されている。採算度外視で最強戦力にするぐらいの超兵器だろ、あれは。

寒気が走る中、グレイフィアさんは即座にカズヒに猛攻を開始する。

カズヒも素早くアタツシユナイダーで迎撃するけど、まず間違いなくグレイフィアさんの方が動きが早い。

いや、早すぎるだろうあれ。走って音速を超えてないか!?

むしろなんでカズヒは対応できてるんだ。ソニックブームとかでそれどころじゃないだろう!?

『ま……ただあつー!』

その瞬間、猛攻を覚醒して弾き飛ばしたカズヒは固有結界の展開を試みた。

なるほど。空間転移も結界内ならできるから、それで高速移動に対抗するはらか。固有聖域や固有外套だと、そこまではカバーしきれなかったからな。

ただ、グレイフィアさんもそんなことは分かっている。

瞬間的に距離をとると、そのまま遠距離から圧殺にかかる。

かなり距離をとっての砲撃で、カズヒは固有結界の展開を一回諦めて対応する。あそこまで離されると、奇襲でも成立しなければ取り込められないと判断したんだろう。

おいおい、ここでそんな隠し玉が出てくるのかよ!?

「え、ちよつと……カズヒやばくない!？」

亜香里もそんなことを言うけど、俺はまず確認しないといけなことがあるのを思い出した。

「……知ってたか、これは?」

後ろを振り返って、俺はユーピ達をちよつと見据える。

そしたらエペラ・ルキフゲ・レヴィアタンがちらりとユーピを伺うように視線を向けた。

ユーピはそれに気づいてから、軽く肩をすくめている。

「まさか。先ほども言ったが、我々の立ち位置は微妙なのでな」
そっか。

ま、隠してたからなんだってわけでもないけどな。まあ、隠せるぐらい知ってるならそれはそれで懸念材料になった気もするけど。

俺はため息をついて、視線を試合映像に移す。

『ちっ！ バッファア系ならバフ役さえ落とせばいい！ 動きで大体読めるってもんだがー』

『させないよ。面倒だけど、わざと負けるのは問題だしね』

勇儀さんが、トロイド・ベルゼブブがこの強化現象の担い手だと踏んで仕掛ける。そしてそれを、ブンガーさんが迎撃していた。

やっぱり強いな、ブンガーさんも。最上級悪魔の上位、タンニーンのおっさんとも戦えそうなレベルだ。勇儀さんでもこれを突破したうえで、おそらく同格だろうトロイドさんを倒すのは難しいか。

っ！かトロイドさんがバフ役かよ。それも最上級悪魔クラスにまで底上げ可能とか、レーティングゲームのルールだと反則に近いぞ。

俺も似たようなことができるけど、人数制限はあっちの方が圧倒的に上だ。たぶん同じ土俵だったら数で押し切られる。

そして問題は――

『……のおっ！』

『甘いなあ！ その程度で俺は倒せねえ！』

――南空さんを追い込んでいる、フェイザーさんだ。

あの人滅茶苦茶強い。さっきから聖十字架で押し切ろうとしている南空さんを、真っ向から跳ね飛ばしている。

あの人本当に強いな。マジで超越者も狙えるんじゃないやねえか？
リゼヴィムが相手でもいい勝負できそうだよ。

他のメンバーはごり押しで、既に何人か倒されている。
このままだと、カズヒも押し切られるしマジでやばいだろ。

「……これが、魔王クラスの戦い、なの？」

有加利さんが戦慄を覚える中、戦闘は更に激しくなっていく。

『上等！ だったらい！』

『抜くか、固有結界を！ そう来なくっちゃなあ！』

その瞬間、フェイザーさんは距離を取り、そしてにやりと笑う。

その瞬間、周囲が僅かに光っている。

いや、あれはっ!?

『おおっとお!?! 周囲の光……星辰体の反応だとセンサーが感知しているようです！ 可視化するレベルで星辰体と感応するとは、どれだけなのかフェイザー・アスモデウス選手はああああ!』

冗談、だろ？

そんなの、極晃星レベルのヤバさじゃねえか!?

和地 Side

これは、グレイファイアさん側に趨勢が傾ききつたな。

冷静に、客観的に、俺はそれを理解する。

『流石に強い。だけど、その程度ならやりようはあるわ』

『こゝの……まだあつ!?!』

カズヒとグレイファイアさんの戦いは、完璧にワンサイドゲームに

なっている。

よりにもよって、覚醒するそのタイミングに正確な攻撃が突き刺さって出鼻を崩され続けるという、恐ろしい真似をカズヒはされている。

『この程度か！ なら、負けるわけにはいかねえなあ！』

『この……どんな星よこれは？！』

鶴羽も圧倒的に不利だ。フェイザーが星を開帳した途端、固有結界を使ってなお圧倒されている。

展開される英霊の影が、触れてもいないのに薙ぎ払われる。更に死角からの攻撃すら瞬時に回避し、これまた強化されすぎている身体能力に魔力の波状攻撃が鶴羽を襲う。

『数が……展開が、追いつかない……っ！』

『クッ！ 回復が間に合わないとは……っ』

更に最上級悪魔の群れに襲われているメンバーもまずい。

お袋が火星天で兵団を作って数でカバーするのも、ディックが味方を立て直すのも追いついていない。

最上級悪魔が駒の数だけ集まればどうなるか。その結果が、このタイミングで実証されてしまっている。

そして敵の要ともいえるトロイド・ベルゼブブは崩せない。

『つたく！ 波状攻撃を全部捌くんじゃねえよ！』

『ぬおおおおお！ 此畜生があー！』

勇儀さんはもちろん、戦力がある程度収束させるという判断で参戦したラトスの二人がかりでも、ブンガー・ルシファーはトロイド・ベルゼブブに攻撃を届かせない。

余裕を持って動いている。そう感じるぐらいにかなり動きがいい。

蛇抜きなら、シャルバ達でも一対一なら負けるだろう。そのぐらい、三人の純血なる魔王血族が強かった。

しかもおそらく、まだ全員全力じゃない。

変な手抜きはしてない。それはグレイフィアさんが許さない。だが、余力を残したうえで本気を出した戦闘をしている。そういう立ち回りだ。

だがその瞬間、あらぬ方向から光が飛来する。

「これなら、どうかしらあ？」

なるほど、リーネスによる奇襲か。

リーネスは戦士としての総合力なら最弱に近いが、超一流の魔術回路保有者だ。更にプログライズキーもあって、回避や迎撃に徹すればしのぐ余地はある。それにより、この奇襲をねじ込んだ。

如何に魔王血族とはいえ、光力なら多少の特攻は入る。

これなら揺らぎが見えるか。そう思ったが――

『悪いね。光は効かない』

――その瞬間、光の槍は速度を急激に落としながら明後日の方向に曲がっていく。

そしてその方向には、どこからともなく巨大かつ広大な光の玉があり、直撃。

途端、光の巨大な槍が形成される。

……なんだと？

「ど、どういうことだ？ 悪魔も支配エクスカリバー・ルードの聖剣を再現したのか？」

「……いえ、悪魔ですしカンカーラ・フォーミュラ覇軍の方程式を再現したのでは？」

ゼノヴィアと小猫が口々に怪訝な表情を浮かべながら推測する。

ただ、俺は違うと思う。

「ならそれ以前にも使っているだろう。光力だけってのが気になるな」

「そうだね。他の攻撃や異能に対して使う機会は多かつたはずだよ」

俺と木場がそれぞれ口に出せば、リアス先輩は眉間にしわを寄せながらため息をついた。

「……そういうこと。流石はリゼヴィムの血縁という事かしらね」

その言葉に、俺達の注目が集まった。

その上で、リアス先輩は画面越しにブンガー・ルシファーを見据える。

その視線は、間違いなく恐るべき相手を見ている者のそれだ。

「おそらくは光力の運用。それも限定的に自分以外のそれすら干渉でききる。そういう事ね」

「……確かに、あのリゼヴィム・リヴァン・ルシファーを思い起こさせますわね」

朱乃さんも戦慄するが、おそらくリアス先輩の推測で当たりだろう。

恐ろしいな、ルシファー一族。

ルシファーの血を引きながら、聖書の神が作り出した神器の究極たる神滅具を宿すヴァーリ。

その神器を基本的に完全無効化できる、超越者が一角たるリゼヴィム・リヴァン・ルシファー。

そこに悪魔の天敵にして神の使いの力たる、光力を支配するブングァー・ルシファー。

ルシファーの血はアンチ聖書の神に特化でもしているのか。そう言いたくなる錚々たるメンツだった。

そして、そんなメンツを率いるグレイフィアさんもまた、カズヒを圧倒している。

覚醒のタイミングを正確に狙い撃ち、限界突破を妨害する戦術。更に仮面ライダーとしてもシャレにならない力を纏った、魔王クラスの力量。そこに数百年はあるだろう積み重ねを用いて、グレイフィア・ルキフグスという女傑はカズヒ・シチャースチエを圧倒する。

『まだだ……まだ！』

カズヒは何とか反撃を試みようとするが、それをすり抜けるようにグレイフィアさんは懐に潜り込む。

『いえ、これで終わりよ』

その瞬間、魔力を纏った拳がカズヒに直撃。

『ま……』

覚醒して乗り越えようとした瞬間、更に展開していた魔力が滅多打ちにする。

『……だ……』

それでも覚醒を試みるカズヒに、魔力のひもが拘束してさらに放出される魔力で削りにかかる

『さつきも言ったでしょう。これで終わりよ』

『ENVY!』

そしてそれをカズヒが突破するより早く、グレイファイアさんはプロ
グライズキーを起動し、蹴りの大勢にはいる。

『……だー』

そして拘束を覚醒して無理やり破ったその瞬間。

それを正確に、グレイファイアさんは狙い打った。

『インヴェディアペナルティ!』

ア イ デ イ ヴ ン イ

ペナルティ

その蹴りがカズヒの胸部を正確に入り、その瞬間、カズヒは血反吐
を吐く。

『やりすぎとは思っけれど。貴女を殺さずに無力化するにはこれぐら
いする必要があるので。悪いわね』

そう告げるグレイファイアさんに、カズヒはしかし一歩を踏み込む。

拳を握り締め、そしてしっかりと踏み込んだ拳は、しかし届くこと
なく光となって消える。

それを冷静に判断したのか、グレイファイアさんは静かに見据えるだけだった。

……残り45分。想像を絶する短期決戦。

^{キング}王一人が真つ先に落とされて終了という、想像を決する短期決戦が終了した。

「……リアス先輩」

「勝手にしなさい」

まだ本題に入っていないのに、リアス先輩は俺の発言を切つて捨てた。

「どうせ、カズヒを慰めた方がいいのかとかそんなことでしょうか？」

カズヒも気合で乗り越えず、それなりにひたることを選ぶかもだし、バカツプルののろけは勝手にすれればいいのよ」

「リアス先輩に言われたくないです。バカツプルはそつちもでしょう!？」

思わず反論したよ。

戦愛白熱編 第二十四話 銀の激突の後に

イツセーSide

す、凄い短期決戦で終わった……。

思わず戦慄するほどの戦いだったけど、掛かった時間は十五分そこら。間違はなく、ライトニング・ファストであることを踏まえても短時間で決着がついただろう。

強者同士の戦いだと、逆に一瞬つてのがあるらしい。これつてつまり、そういう事なんだろう。

なんというか、衝撃的すぎてちよつと何も言えなかった。

デアアドコイ・フライベーター
後継私掠船団の連中も、割と沈黙してるからな。コイツラに沈黙させる試合とか、そうそうないだろ。

「……え、つと……凄い戦い……なの?」

「ああ。割とマジで凄いな」

亜香里が訪ねてきたので、俺はそこは答えておく。

思わずラムルとかが頷いている辺り、やっぱり後継私掠船団も衝撃を受けているんだろう。

いや、壮絶な戦いだった。というより、あのカズヒを一蹴とか信じられない。グレイフィアさん、マジでスゲエ……。

「フロンズ殿も面白い物を用意したわね。九大罪王そのものは魔王派中心にしつつ、その専用武装でこっそり発言力……かしらね」

エペラがそんなことを言うけど、それを聞いて納得だよ。

フロンズの奴、ちやつかり発言力を高める為の動きはしていたってことか。いや、もとからそのつもりで開発研究は進めさせていたんだろうな。あいつはそういうことをする奴だ。

本当に、本当に油断できない! あの男本当に油断も隙もないな!

「まあ、それぐらいできなければ困る。あの幸香の名目上とはいえ主

になっっているのだからな。こちらも超えがないものだ。……さて、食後のコーヒーだ」

そしてユーピはしたり顔で頷きながら、そつと俺達にコーヒーを渡ししてくる。

……なんだろう。よく分からんが美味しいというか良い香りというか。ナードイル・イスカランダ第三征王王って、どんだけ才能があるんだよ。

「あの、良い香りですけど……もしかして豆から?」

「そうだろうね。豆そのものより挽き方がいいね」

「まったくね。こんなところも優秀だなんて」

「だな。こいつ才能ありすぎだろ」

と、有加利さんもラツイカもオペラもラムルも感心している。

「そんなことはあるとも。ふふふ、才能が豊富すぎて本当にすまない」

こいつ、いろんな才能ありすぎない?

カズヒSide

あゝ。負けたあゝ。

思うところはあるとも。負けて悔しいことある。

ただ、全力でぶつかり全力で叩き潰された。その過程により、分かったこともある。

彼女が本気だという事だ。

おそらくだが、フロンズは彼女に引つ張られる形で協力している。推測するに罪王就任、その要望に応える対価として要請されたことをアザゼル杯の成果によって叶える形だ。

それが確信できただけでも、十分価値がある。勝てなかったのは残

念だけど、あのグレイファイアさん相手に負けるのは客観的に見ておかしなことでは断じてない。

むしろ、帝釈天相手で使わなかった隠し玉。それを使わせたのなら価値がある。それぐらいは分かるのが私だ。

状況は色々と変わるが、それでも使わせたことに意義はある。少なくとも使わせたという事実だけで、分かる識者には評価もされるだろう。

だから総合的にはマイナスではない。ゆえに、無念はあれど悔いはない。

もとより私はそういう女だ。精神論でどうにかなることは絶対にかできる。気合と根性で精神的な負担は大概どうにかできる女だ。

とはいえ、そんなことが良い事なわけではない。

どんなことも精神論でどうにかする。そんなことはできる方が少数派で、大半の者はできないのだ。それを当たり前に行使し続けることは、目にした他人に悪影響を与えかねない。

だから、リフレッシュする機会があるならきちんとするべきだ。私個人で見ればマイナスが目立っても、皆にとってはそちらの方が健全かつプラスに働くと確信している。

だからこそ――

「こういう時の温泉の元ね。あゝ、癒されるゝ」

「俺は癒されすぎて何かがプツンしそうだけどね!？」

――和地と一緒に、温泉の元を入れてお風呂に入っている。

「ぱらっぱらっぱらっぱらっ……あゝ」

「あ、あうあうあうあうあうあゝ」

ちなみに鶴羽とリーネスはバグを起こしかけている。一人で入るのはちよつと悪いと思っただけれど、この二人にこれは刺激が強すぎたかしら。

それとなくバグっている二人を溺れない様に位置を変えつつ、和地は軽く苦笑してきた。

「ま、そういうところもしつかりしてるけどな。とはいえ、これは俺に

とつてこそメリット多すぎないか？」

「Win—Winならそれに越したことはないでしょう？　ま、お礼をしなくていいのは気が楽ね」

そう苦笑しながら向き合う形でお風呂でぬくもる。

世間一般のバスタブより面積が大きいからこそ、温泉の元も二袋ほど入れている。まあ、おかげでリフレッシュはできているわね。

とはいえ、こういう時間はいい物でしょう。

「で、そちらは準備できてる？　相手がリユシオンだと苦戦は必須よ？」

私は今回負けた。それはまあいいでしょう。

ここから立て直す余地は十分ある。だから問題はその次だ。

そして和地達にも試合はある。それも、あのリユシオンという、壮絶な試合が確定する相手だ。

他の皆だって、楽な戦いばかりなわけがない。今後は神クラスやそれに類する相手との戦いも増えるだろう。ある意味で本番はまだ先なのだ。

それを思いながら湯に浸かっていると、和地も天井を見上げながら微笑んでいた。

「ま、そこは俺なりに頑張っていくさ。……負える責任は背負いたいからな」

「そうね。私もここで止まる理由はないしね」

小さく、互いに苦笑を交わし合う。

互いに難儀な理由で参戦したけれど、それが私達であることに否はない。

だからこそ、半端で済ますつもりはない。私達が私達として、これからこの世界を生きる為。それを成すことに意義はある。

極暉星スファイヤを否定した責任。それを必要とした責任。そこから逃げることを私達は良しとしない。

極暉星抜きで世界はどうにかなると示す為。罪人が今の世界を生きることを容認してもらう為。互いが互いに考えた、その上での決断だ。

だからこそ、私ははつきりと宣言しよう。

「お互い、まだまだここからね」

「ああ、まったくだ」

さて、そろそろ難しい話はしないで素直にいちやつくとしてますか。

Other Side

「…………ふう」

そう、小さく息を吐く。

兵藤邸のリビングの片隅で、九成オトメは一人ゆったりとしていた。

ちびりちびりとお茶を飲みながら、クッキーを食べる。

そんな一人のティータイムだったが、お茶を飲みほしたことに気が付いた。

お代わりを入れようと思った時、お茶の葉とはまた違った香が届く。

見上げると、そこには男性が一人ティーポットを持ちながら近づいていた。

「これ以上は眠りにくくなります。ハーブティーを入れましたので、こちらにするべきかと」

「あ、ありがとうございます」

微笑みながらそれを受け取っていると、更にリビングを覗き込む人がいる。

「お？ オトメじゃありませんの」

ヒマリ・ナインテイルが二人に気づき、ニコニコしながらリビングへと入ってくる。

「あと黒狼さんですわね？ 和地がいつもお世話になってますの」

「あ、それもそうだね。……本当にお世話になっております」

その言葉に、オトメもそれを思い出して微笑みながら会釈をする。

武山黒狼は、涙換の救済者チームの戦車。すなわち、和地が率いるチームに属しているメンバーだ。

相応にゲームの経験もあることから、チームのブレーンを担当しているところもある。その観点で言えば、和地と縁が深い二人からすれば、お礼の言葉の一つは言うべきだった。

「いえいえ。私達は懲罰従者ですし、和地様は優秀な方ですから」

そう返す黒狼は、その後少し寂しげな表情を浮かべている。

「それに、何かしらの目的を持てるのはいい事ですから。虚無的な人生を送るよりはね」

その言葉は、意識的に出したものではないのだろう。

だが何かが溜まっただけで、それがふとした拍子に少し漏れ出てしまった。つまりそこはそういう事だ。

「どうしましたの？ お悩みでも？」

ヒマリがそれに悟ったか否かはともかく、何かを感じ取って首を傾げる。

そこで初めて、自分が言ったことに気が付いたのだろう。黒狼はハツとなる。

ただ、黒狼はそこで小さく苦笑を浮かべていた。

「お忘れください。燻った物を、別の何かで発散しようとしているだけですよ」

それで話を終えるつもりだった。彼にとってはそのつもりだろう。

ただ、それをオトメは良しとできなかった。

「……聞かせてください」

そう、彼女は自然と口にする。

それに黒狼とヒマリがきよんとする中、オトメはカップに視線を落とすながらも言葉を終わらせようとしなかった。

「息子のチームで要といえるあなたが悩んでいるのは、いい事じゃないですし」

そこまで語り、しかしオトメは首を横に振る。

今のは誤魔化しだと、そう自分をたしなめる動き。嘘ではないが、もつと重要な理由があると、自分を見直す動作。

それをとつたうえで、オトメは小さく寂しげな微笑を浮かべる。

「たぶん、この眩しすぎる所では言い難い事ですよね？ 私もありますから、お互い愚痴って発散しましょう？」

そう。それが本音だ。

普段抑えている本音を、語り合える相手かもしれないと思った。だからまず、自分の方から聞くべきだろう。そういう理由だ。

ヒマリはキョトンと首を傾げるが、黒狼は小さく微笑むとソファア―に腰を落とす。

「そうですね。ぜひ、話をさせてください」

その言葉に、オトメもまた小さく頷いた。

戦愛白熱編 第二十五話 目の前でする自傷行為は
もはや脅迫である

祐斗Side

「バレーボール……飛び上がる女子……揺れる乳房……煩惱壊滅！」
「おーい！ また窪川の奴が自傷行為始めたぞー！ シチャースチエ先輩呼んできてええええっ!!」

そんな大声が続けざまに起き、僕は小さくため息をついた。

カズヒが特別風紀隊のメンバーにした、引岡さんの息子。窪川蓮夜君。

そして僅か数か月。彼の発作的な自傷行為は、イツセー君のひきつけに匹敵する駒王学園高等部の名物となっている。

日常の些細な言葉や出来事から、瞬く間にエッチな要素を見出す。そしてその煩惱を断ち切るべく、多種多様な方法で自らに苦痛を与えらる。多ければ一日数回、少なくとも週数回。

イツセー君のひきつけと同レベルのこの事態に、イツセー君のひきつけで訓練された二年生以降はすぐ慣れた。

ただ一年生はそうもいかないらしい。一度PTAが彼を呼び出して説教を試みたと聞く。

もつともすぐに諦められたらしい。スーツ姿の妙齡の女性達を見た瞬間「PTAの呼び出し……すなわち熟女の分らせ系逆レ○プ……煩惱虐殺！」と瞬時にやり出したことで、関わり合いになりたくないという本能が刺激されたようだ。子供達には「近づいちゃいけません」で済ませたと思われる。

既に彼においては、二年生は「兵藤先輩達の亜種」ということで納得しているようだ。彼らはイツセー君の煩惱抑制によるひきつけを

洗礼の様に見せられていた。だからこそ同類認定だろう。

三年生はもうちよつと穏やかではある。イツセー君が覗き行為を頻繁にやっていた時期もあり、「同類だろうけど印象としてはまだマシ」になったようだ。実害の方向性が割合的に違ったのが、いい方向にかみ合っているらしい。

窪川君はイツセー君達に敵視一步手前の感情すら浮かべているけど、頑張つて自制していることからとりあえずは様子見にとどめている。ただ二人が近くにいる時に同時に起きたこともあり、周りになるべく接触させない方向で行っているようだ。

「なんていうか……一年生も凄いい子が入ってきたよね」

「それは同感でさあ。いや、俺らの方が苦勞してやすがね？」

と、僕の呟きにアニル君が反応する。

まあそうだろうね。

対ゼノヴィア生徒会長特化型、風紀委員特別部隊。通称特別風紀隊。

カズヒを迎え入れた精鋭部隊であり、ゼノヴィア達が目に余る暴走をした際に武力をもって鎮圧する集団だ。

……うん。対生徒会に特化した風紀委員の精鋭ってなんだろうね。字面にすると意味不明すぎるよ。

そしてそのメンバーとして、オカ研と複合する形でアニル君とルーシアちゃんも属している。更に勇儀さんとのコネなどを使い、一般生徒から星辰奏者の適性持ちを引っ張り込むなど、かなり本腰を入れた精鋭部隊になっている。

それぐらいしないと取り押さえられないのが、現生徒会だけどね。ゼノヴィアはもちろんだけど、百鬼君とか間違ひなく最上級悪魔クラスと渡り合えるだろうし。

そしてその一人として、窪川君も属している。

引岡さんから頼まれたこともあり、彼女が面倒を見ている形だ。窪川君も性格上、自由人には口うるさくなるタイプなので割とかみ合っている。少なくとも、特別風紀隊としての活動は真面目にやっているらしい。

ただし、当人が性的なものに潔癖かつ根がスケベすぎる所為で、日常ではトラブルも多いようだ。些細なことから凄くエロスを感じるタイプらしく、自傷して血まみれになりながら相手をしかりつける所為で、駒王学園に妖怪が住んでいるという、笑えない都市伝説となりかけている。

「……大変だよ、本当に」

「いや、本当にまったくできさあ。ま、カズヒ先輩が可能な限り受け持つてくれてるんですがね？」

カズヒも大変だろうね。

今度、特別風紀隊に手作りのケーキでも差し入れしよう。ゼノヴィアに苦勞させられているという点では、僕も大概なところがあるからね。

イツセーSide

「というわけで、窪川君はとっても癖の強い方なんです。……イツセー先輩がまだマシと思えますね」

「俺、比較対象になるんだ」

「たまたま会ったルーシアの愚痴に付き合っていたら、とんでもないことを言われたよ。」

え？ 俺ってそんなレベルで問題児だったの？

男がエロを、女の子を求めることがそのレベルなのか。いや、シャルロットに顔向けできないとは思っているけど、そこまでとは思わなかった。

「変態性がストレートで、変に捻くれてない点。あと犯罪行為が軽犯罪寄りなのがあるですね。女子生徒の報復も大概なので、結果的に学園内では釣り合いが取れてるんです」

そう言うと、ルーシアは紅茶を一口飲んでからため息をついた。

「逆に窪川君は、変態性が捻くれて潔癖ですから。自己嫌悪に基づく自傷から排他的な罵倒及び説教なので、分かりやすい報復を与えづらいのも問題かと」

な、なるほど。

俺が学園内に残れたのは、女子に報復させられていたこともあったのか。

……そうでないことやばかったのか。本当に反省した方がよさそうだなあ。

この程度のことですごくまでしなくても、というような考え方はやめた方がいいんだろう。実感は沸かないけど、知識として知っとくだけでもだいたい変わるかも。

「まあ、あれはあれで集団リンチで警察が動きそうですけどね。捕縛した相手を法治機関の関与なく、しかも集団かつ武器を使って暴行とか、真つ当な法治国家なら裁判所に送られてもおかしくありません」
ルーシアはそう言うと、もう一度ため息をついた。

「結論から言えばどっちもどっちです。カズヒ先輩もそこまでは喧嘩両成敗にしたというより、生徒が数十人警察に連れていかれ、更に学園そのものが行政処分を受けて和平の象徴たる駒王学園に修復困難な深手を負わせるのを躊躇したからだと思います」

「本つ当に申し訳ありません！」

真面目なルーシアに説明されて、初めて分かるやばい事態だったよ！

ヤバイ。下手すると学園そのものを取り潰されることもありえたのか。流石にそんなことになる、俺もかなり心が傷つきそうだ。

畜生。人間世界はエロに厳しすぎるぜ。

そこまで考えて、俺はふと思ったことがあった。

「……なあ、だったら俺と木場をホモ同人にするのも大概問題じゃね

えか？」

女子に変えるなら、まんま同じ格好の女の子達でレズの同人誌を書いてばら撒くようなもんだよな？

これも大概じゃねえか。脳内でエッチな対象にするだけならまだ顰蹙で済むけど、周囲に分かる形でばら撒いたらアウトじゃねえかと、ルーシアもそつと視線を逸らした。

「……元々同人業界は、原典側が法的措置を取らないことで成り立っているグレーゾーンですから。もし訴えれば、肖像権の侵害で先輩に圧倒的勝率があります」

あ、そうなんだ。

ただルーシアは言いづらそうにこつちをチラチラ見ながら、気分を落ち着ける為か紅茶を再び飲む。

そして、凄く言いづらそうな表情で真っ直ぐ俺を見る。

「ただ、下手に司法を介入させるとイツセー先輩達の狼藉とそれに対する違法報復が明るみに出かねません」

……それは、最終手段すぎる。

核戦争の引き金を引くような大惨事になりそうだ。すっごい躊躇するんだけど。

「因みに、平和的に解決する余地はあるか？」

「……実は、ならいつそのことイツセー先輩と文芸部達できちんとした取引にさせるという案はありました」

取引？

俺が首を傾げると、ルーシアはちよつと顔を赤くしている。

「性欲が強すぎるイツセー先輩にネタを提供することで、肖像権の侵害ではなく使用料を払ったモデルという形にするという案です。この場合、お互いが裸になったりすることは確実にそれ以上もありえたかと」

……真剣にその取引は考えたい。

ただルーシアは今度は青い顔になった。

「ただその案が発生した際、文芸部で「兵藤一誠が木場きゅん以外と絡むの介錯違い」といった形で内乱が勃発し死人が出そうになりまし

た。あとリアス先輩達が割と露骨に圧力をかけており、別の意味で血が流れそうになりました」

……俺は、童貞卒業できるんだろうか。

「俺から突つつくのは、本当に最終手段にした方がよさそうかな？」

「そうしてください。おそろくですが、カズヒ先輩でも対処しきれない規模になってしまいかと」

ははは。俺が言えたことじゃないけど、駒王学園って変態の巣窟じゃね……？

カズヒSide

特別風紀隊に与えられた部屋で、私は必要な書類仕事を頑張って終わらせている。

学力において駒王学園では下側の私だが、書類仕事も苦労している。

最も、他のメンバーが協力してくれるからそこまで苦労はしないけれどね。

「で、窪川に対する苦情は今日で八件目？」

「厳密には同じことも含めてだから三件ぐらいだけだな」

と、元浜が私を捕捉してくれる。

特別風紀隊のメンバー案件で苦情の対応をするとか、本末転倒になっってきているわね。

頭痛を感じながら、私はまとめられた苦情内容を確認する。

1：目の前で自傷して血まみれになってから説教してくるのが怖い。むしろ気持ち悪いのでやめて欲しい。

2：友達が生理関係で相談した瞬間に、教室の隅から隅なのに聞きつけて頭を壁に叩きつけるのが気持ち悪い

3：昼休みにお経を唱えながらお灸をするのをやめて欲しい。怖いし匂うし夢に出る

……イツセーでもここまで頓珍漢ではなかった気がする。

「性癖をオープンにせず抑制しようとする、こうなるのね」

「俺達ってむしろ健康的だったんだな」

松田と共に思わず戦慄を覚えたわ。

ディーレンの血を色濃く引いている潜在的スケベ。それを肯定せず、全否定する為に人生を捧げるところなるのね。流石の私も軽く引くわ。

あいつ、そろそろ精神崩壊で入院するんじゃないかしら？

「いつそのこと、あいつの童貞を真っ先に卒業させるべきかしらね」

「ちよっと待った!？」

と、私の呟きを聞き咎めた二人が真っ先に食いついた。

あ、勘違いしているようだから訂正しないと。

「流石に私はしないわよ。ただ伝手でそういうことに長けている人達がいるから」

流石にこれ以上相手を増やすのは、和地のメンタル的になるべく避けたい。

そうなるのなら、まあ伝手を使うというのは妥当な手でしょう。実際にあるから問題ないし。

具体的に言おうとプルガトリオ機関関連ね。

暗部組織なだけあり、リマ部隊である私達ほどではないとはいえ、それなりのグレーな部隊は存在する。

例えば、異形案件の事件を表ざたにしない為のチャーリー部隊がそうね。リゼヴィムが野放しにした馬鹿が駒王学園に仕掛けてきた時とか、彼らのおかげでなんとか異形が知らしめられることは防げたわけだし。

そしてNATOフォネティックコードのSを冠するシエラ部隊。この部隊はハニートラップを専門としている。

性欲という物は種族で個体差がある、中には発情期がある種族だつてある。また、過去の経験で貞淑に生きてくてもできないぐらい性欲に悩まされるものだっている。そういう者達が集まってできた、毒をもって信仰を守る部隊だ。

個人的な知り合いがそこにいるし、幸か不幸か日本人と来ている。最悪の場合、真剣に相談するべきでしょうね。

……今思えば、最初から頼んだ方がよかったのかしら？

ふとそんなことを思う。ただし、私は発言には責任を負うタイプだ。有言実行を超え、徹底的にやりたいぐらいだ。

と、なると――

「二人とも。4Pに興味ある？」

「あるけど落ち着け」

―おかしい、何故かエロで二人にツツコミを入れられたわ

和地Side

なんだろう。カズヒがまた妙な暴走をした気がする。

光極めちやつてる精神性に、前世での壮絶な経験。二つの癖の強さが絡み合って、ことエロが絡むと変な暴走をしでかす悪癖があるからなあ。

俺はそんなことを思いながら、コーヒーを一口。

うん。手軽にコーヒーや紅茶が飲めるのは、中々いい文化だ。

そんなことを思っていると、人の気配が近づいてくる。

ちよつと忍び足なのが気になるな。気配を隠すそぶりもない以上、異形や異能関係者ではなさそうだが……。

そんなことを思いながら、俺は偶然を装う形で振り返る。

と、そこには一人の少女がいた。

「あ、九成先輩！ ちわっす！」

「……優華か」

勇儀さんの娘である、接木優華。

窪川と同じタイミングで知り合った、一年生。

窪川と違い、ノリが割と駒王学園に近いからか、割と評判はいいら

しいけど、一体なんだ？

まあ、インパクトのある窪川の方が記憶に残ってるけど。……い

や、本当にインパクトがなあ。

で、今度は一体何があるのやら……？

戦愛白熱編 第二十六話 伝統は時代とともに仕立て直されるものなり

和地SIDE

「では先輩！ お話を聞いてもらおうお礼に焼きそばパンです！」

「いや待て落ち着け」

速攻で頭下げながら渡された焼きそばパンを、俺はそっと押し返す。

話を聞くともまだ言っていない。いや、少しぐらいなら聞く気だったけど返事してないから。

きちんとお礼を用意するのはいいことだが、学生関係だということもあるとちよつと不安になるな。

「話は聞くから、とりあえず速攻で報酬を渡そうとするな。まず話を聞いてからもらうかどうか決めるから」

「分かりました！ で、相談なんですけどね？」

ふんふん。なんだ？

「オカ研に入りたいんですけど、どしたらなれます？」

……ん、ん？

こりやまた難題が来たな。

オカルト研究部。俺達が所属している部活であり、広義的なりアス・グレモリー眷属と言ってもいい。

そんな実態があるからか、基本的に裏に関わらない人間は入れない。その辺りはある種のボーダーラインであり、最低限の筋というべきものかもしれない。

勇儀さんは俺達の事情を知っているけど、その娘さんまで伝わっているかが気になるな。

「因みに理由は？ やっぱり木場狙いとかか？」

女子だとやはりそこだろうか。

ギヤスパーは女装趣味もあって彼氏にする方向性は薄い。イツセーはイツセーで、最近こそひきつけや後輩の面倒で評価を上げているが、犯罪行為（覗）為上等の変態迷惑野郎だったのが後を引いている。

アニルや俺という線もあるが、まあ最有力候補は木場だろう。

ただ、優華はそれには首を振った。

「いえいえ。確かにイケメンですけど、顔は金があれば美容整形で割と誤魔化せますから」

身もふたもないが確かに正論だな。

勇儀さんはもともと腕利き……を通り越して、人造惑星相手でもいれば勝算がデカいスーパー星辰奏者。かなりの高給取りは間違いない。起業してからもD×D関連で儲けているし、家に金はあるだろう。

そしてこの世の中、金があれば大抵のことはどうにかなる。美しさに対しても、美容整形である程度は補うことが可能ではある。

「私が男に求めるのはあ……一緒にいて楽しいかですね。それさえあるなら、大抵のことは寛容になれるんで」

なるほど。確かに一理あるかもしれない。

ただ同時に、無責任になつたり悪の道に行つたりしたらヤバイ思考でもある。

勇儀さんの娘さんなら心配は薄いけど、血縁が善良ならそれだけで善人とはいいがたいしな。ちよつと様子を見た方がいいかもしれない。そのあたりもあってカズヒに目をかけるよう伝えたのかもな。

ならまあ、俺も目をかけておくべきで――

「で、話を戻すけど理由はなんだ？」

――そこはしっかりと確認しないとな。

わざと見抜くような見方をして、相手に意識を誘発させながら俺は尋ねる。

なんでオカ研を選ぶのか。そこはしっかりと確認しないと、アーシアに話すのはばかられる。

元々根っこがいい子で争いを好まないからな、あの子。俺達も氣を使える部分は少しは氣遣っておかないと。

入りがつてる子を断るのも、心苦しく感じそうだし。俺としても、しなくてもいい苦労を人にしよい込ませるのは好まない。

だからこそ、見定めるつもりで俺は優華を見つめ―

「めっちゃ面白そうだからっす!」

―迷わないその言葉を聞いた。

うん、凄く澄んだ目だ。隠し事があるような濁りを全く感じない。

人間、ここまで真つ直ぐな目でこんな何も考えてないような目ができるんだ。俺、素直に感心してるぞ。

「部活動するんなら、とにかく楽しく毎日が送れる部活がしたいんです! あとトラブルに巻き込まれた時に頼れる人が多いみたいです!」

人を見る目があるな。

まあ、悪魔って何でも屋みたいなことしてるからトラブル対応も手の物だろうし。そもそも俺達、国際的な対テロ部隊だから後ろ盾としてはかなりのレベルだし。お人好きが多いから、身内に襲い掛かる理不尽には断固撃破になるだろうし。

あとトラブルに巻き込まれること前提な辺り、自分のことも分かってるっぽいな。ちよつと不安になるところがある考え方だし、自分を客観視して備えるのはいいことだよな。

その辺りを踏まえて俺が考えていると、優華は何かを勘違いしたらしい。

「あ、もちろん後輩として先輩に尽くすっすよ? これでも楽しくやりたいエンジョイ勢だけど運動部だったんで、パシリぐらいはお手の物っす! コーヒーも三分以内を買ってきます!」

そして対価をキチンと払う主義らしい

「いや、オカ研は紅茶が出るから。茶葉から入れるから」

これは、もはや伝統だろう。たぶん来年も続くだろうし。

ま、それはともかくだ。

……勇儀さんの娘さんが相手なら、ある程度話す余地はあるだろ

う。

勇儀さんに直接聞く必要もあるだろうが、まあそれを踏まえても話を通すぐらいいはしてもいいか。

「分かった。とりあえず今日の部活で議題に挙げてみる。……ただし却下されても恨むなよ?」

「やったあ! 先輩ありがとうございまっす! お礼に胸も見ます?」

それはやめろ。

イツセーSide

「つてなことになっているんだけど」

「どういう展開だよ」

九成がそんな話を持って来て、俺は思わずツツコミを入れたよ。

いや、オカ研って事実上の異形の集まりだぞ? 一般人を入れるのはややこしいことになるだろ。

リアスの時だってそれはしてなかったし、やるんだつたらそれこそ異能に関わらせた方がいい気もする。

ただ、異能に関わらせると余計な火種もきかねないんだよなあ。俺たちと同じ部活とか、変な連中のターゲットにされそうだし。

駒王町は和平成立の地だから、結界の強度や数は重要拠点レベルだ。それを突破してくるような連中は基本的に手練れといっている。そして厄介なことに、そんな奴らがあの手この手で侵入してくる。

コカビエルしかり幸香しかりユーグリッドしかりニーズホッグしかり。どいつもこいつも異形社会で言うなら上澄みレベルの化け物

だ。俺達、よく毎度毎度生き残ってるよなあ。

そりやそんな連中は相手を選ばないけど、だから開き直ってうかつに危険な橋を渡らせるってのもなあ。

「どうする、アーシア。俺は断るのも手だと思うけど」

俺がそう言うのと、九成も紅茶を一口飲んでからあつさりと頷いてきた。

「ま、俺もダメ元だから断っていいぞ?」

あ、流石にそうなのか。

ま、そりやそうだ。オカ研はある意味でグレモリー眷属の拡張と見なされてるからな。参加するだけで注目レベルは上がるだろうし。

九成ならそりや言うだろ。この件も、独断で動いて変な食い違いが出ないようにするってだけだろうし。

『しかし、あのおっさんの娘さんですかい? ちよつと会ってみたいですよ?』

「私も接木勇儀さんにはお会いしましたけど、兄やヴァーリ様が興味を引く方ですよ? 実はお強いのでは?」

「むう。初等部や中等部からも来ておるのじゃし、一人ぐらい民間人がいてもよくないか?」

新入りのベンニアやルフエイ、九重はそう言う。

まあ、あの接木さんの知り合いなら絶対強いとは思うけど。思うけどさあ?

凄い人の血縁だからって、必ず同じような凄さが得られるとは限らないし。サイラオーグさんや、同列に語りたくないけどディオドラがそんなわけで。

俺はその辺りの意見が聞きたくて、三年生組や二年生組に視線を向ける。

「難しい問題だね。少なくとも、リアス姉さんの代なら断っていただろう」

「……そうですね。異能や異形に全く関与してない人を入れるのは避けるはずですよ」

木場と小猫ちゃんは反対よりの意見か。

「私はいいと思うわよ？ これを機に信仰も広めたいわね」

「その辺にしとくじゃんか。……ま、あの人の娘さんなら別の意味でマークされてるだろうしき？ いっそ巻き込んで鍛えるのもありかも？」

イリナはノリノリで、ヒツギは安全の面から逆に賛成意見だな。

「よく分かりませんので、ここの判断は譲りますわ！」

「ぼ、僕も判断できる気がしないですう」

ヒマリとギヤスパーは判断を保留か。二人らしいというかなんというか。

「そうねえ。逆に一種のモデルケース……という考えもあるかしらあ？」

「ま、入れるならレイドライザーぐらいは護身用に持たせた方がいいかもね」

リーネスと、前生徒会の解散もあってオカ研にきた南空さんは、入れる入れないではなく入れる場合のアイディアを入れてくる。

九成は話を持ってきたけど断られると踏んでいたし、俺はちよつと断った方がいい感じと思っている。

ゼノヴィアは生徒会、リアスと朱乃さんは大学を今回は優先。カズヒもアニルもルーシアも、ちよつと窪川の奴がやらかしたみたいで今回は特別風紀隊としての活動に注力している。

と、なるのだ。

俺は残るメンバーと顧問の、レイヴェルとロスヴァイセさんを見やる。

この二人がどうするかで話は大きく変わりそうだけど……。

「あえて保留しますわ」

「私もです」

あら、二人とも保留か。

「え、保留でいいんですか？」

アーシアもきよんとしているけど、二人は真面目な表情をアーシアに向けてる。

「私は顧問ですが、大体皆さんの意見はよしあし含めてまとまってい

ます。ならやるべきは指針を決めるのではなく、決めた後どうするかに回るべきでしょう」

と、ロスヴァイセさん。

なるほど。顧問はあくまで顧問として部をわきまえる的なあれか。まじめだから今回反対に回りそうだったけど、教師らしいなあ。

で、レイヴェルはどうなんだろうか？

「個人的にはリアス様と同様に一般からの入部は避ける方がいいと思います」

そう前置きしてから、しかしレイヴェルはアーシアの方をもう一度見る。

「ですが、今後は人間との付き合い方も変わるはず。それに純粋な只の人間である桐生さんも、事情を知ったうえで時折顔を出していますしね。それも半ば入部しているようなものです」

あ、確かに。

生徒会選挙の時間が中心だったけど、桐生は年末からゼノヴィアのお得意様だ。それなりに事情を知ったうえで、時々顔を出している。

それも考えると、確かにありなのか？

「その上で、部の全体的な方針になりえます。なら決めるのはアーシア部長ですわ」

と、レイヴェルはそう言ってアーシアの方を向いた。

思わず俺達全員の視線が集中する。

アーシアはどうするんだろう？

俺から何か言うこともできるけど、レイヴェルの言い分も正しいし、あんまり深く言うのもあれか。

ただアーシアは、部長としてはまだ議事進行役ぐらいだしなあ。少しずつでいいとは思っているけど、結構重要なこの決断は大変じゃないだろうか？

ただ、アーシアは少し俯いて考えこむと小さく頷いた。

「……では、試用期間を設けてみてはいかがでしょうか？」

し、試用期間？

俺達は続きを促すと、アーシアは俺達を見回した。

「まずは週一日だけ、接木さんと呼んで表向きのオカルト研究部の活動をする日にします」

な、なるほど。

異形とかを表に出さない、表向きの活動なら連れてきてもいいのか。

その上で、アーシアは自分自身で考え直しながら続けていく。

「一学期の間続けてみて、私達の事情を話すかも接木勇儀さんとも話し合っただけ考えましょう。それなら、丸く収まると思います」

「……なるほど、その手があつたか」

「考えましたね。それならこちらは無理がありません」

九成とロスヴァイセさんが感心しているけど、確かに。

毎日事情を隠し続けることは難しいけど、週一日の部活動ならやりようはある。最初から彼女と一緒にすることを前提にしたりとか、やれるしな。

その上で接木さんと一緒に話し合っただけで、二学期以降から今後どうするかを決める。それならやりようはあるかもな。

それだけ期間を設けてダメっていえば、諦めもつくだろうからカドもたたないだろうし。

うん、いいかも。それならいいか。

周りを見渡せば、この案に反対意見はなさそうだ。

「来年以降は今のメンバーの半分以上が抜けますし、場合によっては事情を知らない方々を入れないと存続できないかもしれないかもしれません。そう言ったことも踏まえ、新しいオカ研の形を考えればいいと思います。……どうですか？」

「「「「「「異議なし！」「「「「「」」」」」」」」

うーん。これがアーシア新部長のやり方か。リアスとはまた味が違うなあ。

俺の愛するアーシアちゃんの成長に、なんか感慨深いなあ。

接木優華さんか。いい機会をくれたことには感謝しないとな！

よっし！俺も先輩としてきちんと面倒みるとするか!!

「と、言うわけで勇儀さんの娘さんを試験入部させることになったんだ」

「なるほどね。来年以降を踏まえた色々なテストを兼ねるのね。……できるようになったじゃない、アーシア」

と、俺の事後報告にカズヒは感心していた。

ゼノヴィアの方にはイツセーが行っており、それなりに伝えておくという流れだ。

ちなみにルーシアとアニルは、今後の予定についてオカ研の方に聞きに行っている。入れ違いになったけど、まああっちから連絡するだろうし問題はないだろう。最悪カズヒが言うか。

「で、そっちはどうなんだ？」

「割と頭が痛いわね。とりあえず指摘の方向性とかを見直させたいけれど、思考が硬直気味なのが厄介だわ」

なるほど。窪川蓮夜の方は苦労していると。

松田や元浜クラスの煩惱を、自己嫌悪するとああなるんだろう。自分の特性にコンプレックスを感じるという点では、朱乃さんや小猫が近いのかもしれないな。

と、俺はふと思いつきがあった。

「いっそのこと、オカ研の試験入部を窪川にさせるのはどうだ？」

「……イツセーと直接相対させるの？ 憤死しそうね」

まあそうなんだけど。

ただ、ああいうのは違う価値観を受け入れさせるのがある意味で重

要だ。違うものを受け入れるには、理解と寛容が必要不可欠。

言つちや悪いが、もつと癖が強いのに慣れれば結果的に寛容になれるかもしれない。性欲が強すぎて変な方向に暴発する点では、イツセーも窪川と変わらないし。

それにまあ、早々酷いことにならないだろう。

「松田や元浜ともそれなりにやれているんだろ？ ならいきなり大暴れってことはないだろうさ」

あの二人だって、イツセーほどじゃないが覗き常習犯の超スケベだ。エロ達数週間でノイローゼを起こしてるしな。

そんな二人と一緒に特別風紀隊として活動を共にすることもあるのなら、まあそこまで酷い事にはならないだろうし。

そう思ったのだが、カズヒはなんかさつきより三割り増しぐらい深刻な表情になっている。

「致命的な事態にはなっていないけど、複雑な感情は向けてるわね。……どつちも」

ふむ。

まあ、直接的に罵倒や危害を加えてないなら大丈夫の部類か。まあイツセーはその上を行くからそこは不安だが。

ただ、もう一つ気になる点もある。そっちの確認はしておこう。

「どつちもつてことは、あの二人もか？」

「ええ。おそらく同類の気配をかき取っているわ。猥談がしたくて堪らなくなってる様よ」

なるほど。それは不穏だ。

猥談なんて吹っ掛けられたら、窪川の奴がどんなことをするか予想がつかない。

むしろショックで失神ぐらいはしそうだな。奴ならあり得る。

……待てよ？

「ならやはり入れるべきじゃね？ アーシアとレイヴェルがいるなら、脳出血を起こしても何とかなるし」

「……本格的に絡ませるまでに、先にもつと酷いのでショック療法ね。一理あるわ」

戦愛白熱編 第二十七話 悪魔の微笑み

カズヒSide

「と、いうわけなんだけど」

「正気か日美っち」

真顔でディーレンに言われたけど、割と真剣ではあるのよ。

だってあいつ、曲者すぎるし。

「真剣にショック療法を考慮中だわ。あれは何とかしないと」

拗らせているにもほどがあるうえ、真剣に苦情が多い。特別風紀隊に寄せられる苦情のほぼすべてが、現状窪川に集約しているもの。

癖が強すぎる現生徒会に對抗する為の特別風紀隊。そんな組織にたった一人で對抗できる癖の強さがあつては本末転倒。風紀委員会からもそろそろ要請が来そうだしね。

一つの手段でどうにかできてないのなら、アプローチを変えるのは当たり前に対応。他に取れる手段があるのなら、手を変え品を変えるのは極めて当然。一行に成果のでない手段に拘るなど愚の骨頂。

そろそろ新しい手段に切り替えるでしようね。

「……で、ウチの娘も試験入部ってか？　なんか悪いな」

と、こちらの話を聞いていた勇ちんも、ビールを煽ってからそう話す。

ま、そっちは私はノータッチだけれど。それが基点ではあるからね。

私は比重としては特別風紀隊に寄っているし、部長のアーシアが決めたことなら、筋が通っているなら文句は言わない。

実際、いつまでもいつまでもリアス・グレモリー眷属の関係者がオカ研に入るわけでもない。何年も後のことを考えれば、そういうことも考えるべきでしょう。

だからまあ、そこは構わない。

「場合によつては、二人には異形についても話すことにはなるわ。その辺に關してはいいかしら？」

とはいえ、そういうことを考慮しないといけない。

今後の方向性を考えるにしろ、完全に区分けした形にするのもあれだしね。

「ま、いいんじやねえか？　俺は会社が異形と密接だし、今後は家にお呼びすることもあるだろうしよ？」

勇ちゃんはそう言うけど、ディーレンはちよつと俯き気味だった。

「……こつちは大丈夫かねえ？　異形のノリはあいつにはきつすぎねえか？」

ま、それはそうね。

老若男女が集まる競技試合の会場で、ストリップが行われる世界最低限の画像修正はしているだもの。

窪川にとって刺激が強すぎるのは間違いない。控えめに言つて、シヨック死の可能性を真剣に考えるレベルね。

と、言つてもねえ。

「あれは何としても矯正しないと、絶対ダメなことになるでしょうし。荒唐治は分かっているけれど、それぐらいしないと折り合いすらつけられそうにないわ」

「……だよなあ」

私がそう言えばディーレンもげんなりしながら頷いたわね。

まあ、ディーレンの息子が性的に潔癖になつたらあり得る話ではあるでしょう。

だってー

「二操を立てるのに心が耐え切れなかつたし」

ー思わず勇ちゃんとハモるレベルで断言できるもの。

「シスコンプラコンを拗らせたお前らに言われたくねえよ!？」

「拗らせてねえよ!？」　正統進化系だよ、俺は!!」

反論と反論の反論は聞き流しながら、とりあえず今後について考え始めるわね。

……そういえば、和地とリアスは試合の準備とかできてるかしら？

和地 Side

「さて、俺達も次の試合について考えないとな」

そんなことを思わず呟きながら、俺は次の大一番について考える。

参考の為に見ている映像では、かなり大暴れをしている低年齢な様々な人物が暴れている。

人間が主体だが、悪魔や堕天使もいるし、何なら吸血鬼や妖怪もいる。

それが若人の挑戦チーム。あのリュシオン・オクトーバーをあまり動かさずに、一応連戦連勝を遂げている連中だ。

まあ、神クラスと激突したりでメンタルが限界気味の人もいるようだけど。元々ある種の挑戦も兼ねていた為、予選途中でリタイアすることも視野に入ってると思われる。

……だからこそ、有終の美を飾る為にも勝ちを狙うだろう。

今後の予選期間や本戦を考慮しないでいい以上、全部を出し切ることだってできるはずだろう。そこも考えると、やはり難敵といえるだろう。

まして、最難関であるリュシオンがなあ。よりにもよって王だキングからなあ。

無体過ぎませんかねえ、ルーシアさんや。遠慮とか加減ツて概念を知っておられるはずでしょうに。

ま、それはともかくとしてだ。

「……お、試合映像か？」

「……ベルナか。ま、そうなんだけどな」

と、何時の間にかお茶を持ってきていたベルナが、お茶を擁してから隣に座る。

「で、どうすんだ？ リュシオン・オクトーバーの奴」

そう、そこがとても厄介だ。

あのカズヒと並び立てる傑物。デュナミス聖騎士団の最強戦力。間違いなく、人間の区分で言うなら最強に近い立ち位置だ。

神にすら通用する戦闘能力。人間性で先天的なずれがあったが、自覚したことで成長中。何より、文字通り戦闘中に強くなり続ける成長性の怪物だ。

本気で勝つなら、相応に気合を入れる必要がある。準備はしっかりと整えたい。

「……さて、これは俺も新技を確立させろべきか」

「毎度毎度確立してる気もするけどな」

ベルナ。真実な気もするけど言わないで。

ただ、ベルナは試合映像を見ながら呆れ顔になっている。

「ま、奴さんもそれができるのがやばいんだがな」

「それだよな」

至った状態から至ってない状態に戻して、別の禁手に至る。

俺が知る神滅具保有者は誰も彼もがやばい連中だけど、リュシオン・オクトーバーは間違いなくその中でも上級レベルでヤバい。

D×Dの域に到達した二天龍とは別次元。そしてそれを自覚したことで、更なる成長すら見込めるやばい手合いとなっている。

……俺も大概でヤバいとは思うけど、それとは別次元でヤバいからな。

と、言うかだ。

「最悪、リュシオンも残神を使えるようになってる可能性があるからな……」

「……それな」

口に出したうえで、ベルナと一緒にため息をついた。

俺が編み出した新たな神器の可能性。コスモス・ボルト 残神。禁手に至ったがゆえに余ったリソースを組み立てる、神器使いの新たな手札。使える手合いは極僅かだが、リユシオンなら絶対に到達するだろう。既に習得している可能性だって普通にある。はあ。これでもしかすると、かなり難易度が高い試合になるんじゃないか？

Other Side

一方その頃、リアス・グレモリーは一人の老人と向き合っていた。

「お久しぶりです、ヴァスコ・ストラータ助祭枢機卿殿下」

「はっはっは。リアス嬢も久しいですな」

にこやかに言葉を交わし、リアスは小さく苦笑を浮かべる。

「まさかクーデターを起こした咎が降格で済むとは、ウルバヌス二世はここまで読んでいたのかしらね？」

「そうですね。よもや枢機卿の一人として残れたなど、信じられませんぞ」

……クーデターの旗振り役となった者達は、三人そろって降格処分にとどめられた。

司教枢機卿だったテオドロ・レグレンツイ及び司祭枢機卿だったストラータは助祭枢機卿にとどまった。助祭枢機卿だったエヴァルド・クリスタリデイこそ枢機卿を除名されるが、それでも立ち位置としては高い水準を位置している。

これはひとえに、クーデターが全く異なる異常レベルの事態になっ

たことが大きい。ことストラダとエヴァルドは、事態解決の為に動いてくれたこともあって減刑が大きく働いていた。

あまりにもウルバヌス二世が大ごとにくれたこともあり、結果的にヘイトまで殆ど持っていた形になったのも大きい。残された戦士達の慰撫を兼ね、戦士達の尊敬を集めるストラダやクリスタリデイを残す選択肢をとったこともある。

……だが同時に、両者はアザゼル杯に参戦していない。

「さて、私をスカウトにしたということでもよろしいかな？」

そう告げるストラダは、しかし寂しげに首を横に振った。

「だが、私は参戦する気はないのだよ。今の強い若人との戦いに、心が沸くほどには戦士ではあったのだが――」

「―それに向き合える状態ではないと、そうおっしゃっていると伺いました」

リアスが遮るように、その理由を語る。

そしてその上で、リアスはアタッシュケースを取り出すとそれを開く。

そこに在るのは、デュランダルと酷似した一本の聖剣。

それを見て、ストラダは僅かに目を見開いた。

「これは、デュランダルⅡの改良型かね？」

「いえ、改悪型といえるでしょう」

リアスは首を横の振りながら、そう告げる。

意図を理解しきれないストラダに、リアスは苦笑を浮かべていた。

「各勢力の星辰体研究技術^{アストラ}。祐斗の聖魔剣の力。更に朱乃を経由して協力を取り付けた神道の鍛冶神に、小猫の仙術やギヤスパアの魔法知識を掛け合わせ、完成したデュランダル・メテオと名付けました」

そう語るリアスは、表情でストラダに握ることを促す。

デュランダルメテオを助かめるように、ストラダは柄を握って軽く確かめる。

本来のデュランダルのように手に馴染む。それを理解したストラダは、しかし次に悟った事実^に戦慄すら覚える。

「……もしや、これは……っ」

「その通り。これがあれば、貴方は自分の懸念を乗り越えられると思いませんか？」

のちにストラダは、これを「悪魔の微笑」と語ったという。

戦愛白熱編 第二十八話 驚天動地の隠し玉！

和地Side

さて、そんなこんなで今度はリアス先輩の試合だ。

相手は「巨人達の戯れ」チーム。このアザゼル杯における優勝候補の一角だ。

アースガルズ二代目主神ヴィーダル。オリュンポス二代目主神アポロン。更に魔獣達の王たるテュポーン。そんなとんでもない連中がチームで参戦した、欧州の地獄軍団。

……もうちよつと手加減という概念を覚えろというか、次からはアザゼル杯に階級制を設定するべきではなからうか。これ、どう考えても反則一歩手前だろ。

お祭りと言っても限度がある。この点、異形は緩いからなあ。人間社会とは一線を引いた付き合いが求められそうだな、オイ。

そしてそんな試合を――

「しっかし、リアス先輩達は勝てるのかね？」

「どうかしらね。まあ、そう簡単には負けないでしょう」

――カズヒと一緒に見ようとしている！

ちなみにお風呂だ！ 二人して裸だ！

わーい！ こういうのすっごくやってみたかった！ うっわーい！

もうテンションが爆上がりである。こういうのを凄くやってみたかった感じがある。

今日は我が世の天国だーい！ ノリノリで試合観戦しちゃいます！

そんな風に俺がはちきれんばかりの幸福感に震えていると、カズヒがこてんと俺の方に頭をのせてきた。

……いやっほおう！

「さて、相手は主神クラスが合計三名。他のメンバーも相応のポテンシャルがある以上、優勝候補になるのも当然ね」

そんなことを言いながら、体重を預けてくれることに感謝感激雨あられ。

だが実際、優勝候補は伊達ではない。

同じく優勝候補最有力のヴァジュラチームも、帝釈天及び四天王の鬼畜コンボだ。……もうちよつと容赦とありませんか、これ？

次回以降はもうちよつとチーム編成に厳しいところが来そうだな。もしくは強力すぎるとハンデが発生するようにするべきか。

改めて言うけど、これ絶対階級制というかランク制度を作った方がいいだろう。今後においては必須かもしれない。

ま、それはともかくだ。

「それをリアス先輩がどう食い破る気なのか……見ものだな」

「同感ね。例のミスターブラックといい、伏せ札の一つ二つは明かす必要になりそうだけれどね」

そこは同感。

ミスターブラックは未だ試合に参加していないが、流石に優勝候補との戦いでは出さないとまずいだろう。

どうも、リアス先輩たちで余裕をもって勝てると踏んだ試合は参加しない方針と思われる。裏を返せば、相当のバトルジャンキーという事だろう。その上でアザゼル杯換算の8駒といい、主神・天龍・超越者クラスといったところなのだろうか。

そう思った時、会場に両チームが入ってきた。

……………

数秒間、俺は目を疑ったりしている。

ついでに言うど、カズヒも二度見していた。

え、どうということ!?

「ど、どうなってんだあああああああつ!?!」

俺は思わず、VIP席で絶叫した。

え、ちよつと待って? マジでちよつと待って!?

ちなみに、VIP席にいるチームメンバーも、大なり小なり驚いている。

いやいやいやいやと言いたくなるっていうか、ちよつと待ってほしい。

「クロウ・クルワツハ殿ですと!?!」

「げ、げげげ猯下あ!?!」

ボーヴァとゼノヴィアの絶叫も当然だよ。

二人も出ている上に、二人ともヤバいんですけど!?

『な、ななな……なんとお!?! リアス・グレモリーチーム! メンバーに伝説の邪龍たるクロウ・クルワツハと、教会の伝説たるヴァスコ・ストラータ枢機卿を引き連れたああああああつ!?!』

実況の人も驚きを隠せてない。そりやそうだろう。

え、何あの取り合わせ。というより、相手の方々も結構面食らってるし。

『……ガツハハハハハハハッ! 我らと戦うなら札がいるとは思っていたが、楽しませてくれるではないか!』

『なるほど。ミスター・ブラックの方はクロウ・クルワツハということか。確かに天龍の域に届いたとされる彼なら、この大会でも駒価値8は狙えるだろう』

『いいじゃねえか。思った以上に楽しめそうだな、こりや』

テュポーン、アポロン神、ヴィーザル神の三名は気を取り直して楽しそうにしているけど、周りのメンバーはちよつと引いている人もいる。

ですよね。いやちよつと待ってって感じだよ。

というより、土壇場であのストラダー狛下を引き入れたのか。リアスって商談が上手だと思ってたけど、よくできたもんだよ。

「うっそ。狛下って教会や天界のチームから要請されても断っていったっていうの?」

イリナが信じられない感じになっているけど、まさにそんな感じだ。

どういう方法で了承させたんだよ。俺の主にして恋人は、ちよつと怖いぐらい才能を見せておりませんか!?

『……おっと。試合ルールはこれまたライトニング・ファストとなっております!』

そして速攻勝負! これ、ちよつととんでもないことになるんじゃないか!?

祐斗 side

試合時間が短いだけあり、インターバルになる時間も短い。

とはいえ、だ。

「では、貴方は誰と戦いたいかしら?」

「では、テュポーンにさせてもらう」

リアス姉さんが尋ねれば、クロウ・クルワツハは即座に答えた。

「フェンリルと並び称される魔獣の頂点。いうなれば魔獣における二天龍の領域だ。俺が天龍の域に届いているか、試すにはちよつどいい相手だろう」

クロウ・クルワツハはチームメンバーだけど、彼を細かく指示で縛ることはできない。

そういう契約だし、リアス姉さんもその方が本領を發揮すると考えている。

彼が兵士の駒なものも、昇格を使わなければ駒の影響を受けないからだ。彼は駒の力を利用するより、それに縛られない己の強さだけで挑むことを要望したからね。

それでも十分すぎるだろう。ドラゴンの高みは縛ろうとしても上手くないかねいしね。彼ほどの戦力を得られるのならば、それが最適解だし必要経費でもある。

そして、リアス姉さんは次にストラーダ猊下の方に向く。

「猊下は誰がいいかしら？」

「ふむ。私はあくまで貴殿が率いるチームのメンバーだ。方針ぐらいは示してくれたまえ」

と、こちらはリアス姉さんを立てる方針だ。

ただ同時に、それだけではないだろう。

配下をどううまく使うか。そういう面を見てるとともに、鍛える方針でもあるようだ。

ふふ、こちらもなかなか厳しいようだね。

そんな風に促され、リアス姉さんは口元に指を当てる。

「……順当にいけば、二代目主神であるヴィーザル様かアポロン様ね。となると……」

そして少し考えこんだリアス姉さんは、口元に笑みを浮かべた。

「……よし、決めたわ」

その方針を聞いて、僕達は苦笑を浮かべた。

どうやら、グレイフィアさんに意趣返しをするつもりらしい。

僕らの主は、強く頼もしくそして恐ろしいところもあるお方だね。

戦愛白熱編 第二十九話 対神激戦絶好調

イツセーSide

「リアスお姉さまにストラーダ猊下、それにクロウ・クルワツハさんが共闘なさるなんて……」

アーシアが感心というか戦慄しているけど、本当だよなあ。

というか、邪龍最強とデュランダル使い歴代最強。そんなのをどうやって味方につけたんだよ。リアス、恐ろしい女性……っ

ま、それはともかくだ。

「それでも確勝はないって思えるのが、相手のヤバいところだよなあ」
リアスを心から応援してる俺でも、そう言っちゃうぐらいの難敵だもんなあ。

二代目主神が二人に、リーダーは魔獣の王。はっきり言って優勝候補で、この試合もリアス達が圧倒的に不利だと判断されている。

もちろん、ミスター・ブラックがクロウ・クルワツハで、更にストラーダ猊下が参戦しているなら勝率は上がる。それでも、向こうの方が有利なのは間違いない。

「リアス達だと、どうやれば勝てるんだろうな」

俺は思わず、ぽつりと呟いた。

俺達が戦っても、勝ち目が薄い相手なんだ。当然、どうやれば勝てるのかは考えてもいる。

だからこそ、リアス達はどうか戦うのかが知りたい。

「……巨人達の戯れチームは、神やそれに類する者が多い優勝候補ですわ」

レイヴェルは、そんな俺をちらりと見てからそう答える。

「裏を返すと、突き抜けた強さと立場を持つ為、それぞれの連携は難しいでしょう。特にテュポーンは気性も龍に近い為、滾る相手を囲んで

倒すことに強い嫌悪感を抱いているでしょうから」

なるほど。つまり連携で挑めばいいと。

ただ、レイヴェルは小さく首を横に振る。

「ですが集団でのテュポーン撃破は、リアス様のチームでは不可能でしょう。何故ならテュポーンほどの相手がいるとなれば―」

そう言いかけた時、試合が始まる。

その瞬間、たった一人が凄い速度でリアス達の本陣から飛び出してきた。

『戦ってもらうぞ。魔獣の王、テュポーン!』

『そう来ると思ったぞお! 邪魔をするなよおつ!!』

クロウ・クルワツハを迎え撃つように、テュポーンも真正面から飛び出していく。

その瞬間、他のメンバーの戦いを邪魔しないつもりか、中央部でぶつかった二人はそのまま横に移動していった。

「―クロウ・クルワツハがこういうことをするでしょうから」

「……なるほど。だが、テュポーンに真正面から勝てるのは狛下以外なら奴だけでもある。奴が兵士であることを踏まえれば、十分な一手ではあるな」

ため息交じりのレイヴェルに、ゼノヴィアはそう言っとうんうんと頷いた。

ただ、問題が一つ。

「でも、二代目主神二人に女神様もいるんだぜ? 流石に……厳しいよな」

そう、そこだ。

主神の次代に指名される以上、あの二柱が弱いわけがない。たぶん、リゼヴィムでも生身だと勝ち目が薄いぐらいだろう。そしてアポロン神の妹であるアルテミス神も、相当強いはずだ。

それをまとめて相手にする。それって、かなり厳しいんじゃないだろうか。

でも、だからこそ俺達にとって価値がある試合だ。

あのリアスが、みんなが、負けること前提で挑むとは思えない。勝

つつもりがあつて、その為の準備だつて整えるはずだ。

だからこそ―

「……見せてくれよ、リアス。主神の倒し方つて奴をさ」

―期待してるぜ、愛しのリアス！

Other side

「さて、サーゼクス。タイミングがあつたのでリアスの試合を生中継したぞ」

『……リアアたんが！ リーアたんが主神と激突だつて!? まだ早くないかい!?!』

『落ち着いてください、サーゼクス。レーティングゲームのシステム上ですから、まあ安全でしょう』

『諦めるミカエル、シスコンは理屈じゃねえ。つていうかアジュカ、お前もうちよつとマッチメイクいじめなかつたのか』

「無理を言わないでください、アザゼル総督。俺が下手に干渉するのはこのアザゼル杯の趣旨に反してしまいます」

『ほっほっほ。にしてもヴィーザルの奴が相手とはのお? ……死ぬんじゃないか?』

『リアスううううううっ!?!』

『おい、オーデインのジジイ! 余計なこと言つて刺激すんな!』

『……オーデインとサーゼクスはアザゼルに任せるとして、この試合はどうなると思いますか、アジュカ』

『ミカエルてつめええええええええっ!!』

……だけど、それがどうしたというのか。

圧倒的不利な相手や、神仏に匹敵する存在とは何度も戦ってきた。そして、何とかしたり何とかする為に頑張ってきたのが僕達だ。

だから、これはその程度。

「あらあら。生贄前提の作戦だと思われてますのね?」

「……なめられたものです」

朱乃さんと小猫ちゃんがそう言い返し、そして僕も頷いた。

なめられては困る。だからこそ、僕も相応の札を見せるとしようか。

「では、その油断を此処で断ち切らせてもらいましょう」

そう呟いたうえで、僕は残神を展開しつつ夢幻召喚も併用。

三本のエクスカリバーと五本の魔剣を格納した鎧を身に着け、その上で聖魔剣を展開する。

そのオーラを察知し、アルテミス様の表情が鋭くなる。

「神殺し……っ」

「その通り。神を相手にするのなら、当然の備えです」

まともな成長では、僕でもまだその領域には到達していないだろう。

ただ幸か不幸か、九成君という段違いのテクニクタイプがいるおかげでね。これぐらいはできるようになってしまったのさ。

そしてそれを、八本の伝説の剣で底上げする。

それはもはや、至ってない状態の黄昏トウル・ロンギヌスの聖槍に匹敵する神殺し。

翻って、神であるアルテミス様と半神である今代ブリュンヒルデさんにとって特攻となる。

これを基点にすれば、勝算はある。抑え込むだけなら十分すぎる確信となる。生き残るだけなら、一切の問題がないだろう。

「うっひょ〜! まさか神の中でも指折りの方々がいるチーム相手に、勝っちゃえるかもって怖いっすねえ! 調子に乗りそうですね」

「うふふ。ツエペシユは男系一族だけど、これなら少しは自慢できるかしら?」

リントさんにヴァレリーも、この勝算にはテンションが少し上がってしまっているようだ。

そう、僕達が残りのメンバーを抑え込むことは十分可能。これは確定的に明らかだ。

だからこそ、だ。

「覚悟してもらいましょう。この戦いの決着に、貴方達は関与できないと知るがいい」

……勝利のカギは、僕達以外が握っている。

Other side

「……さて、面白い試合になりそうだな、幸香」

「ほお？ お主がそんなことを言うとはのお？」

「当然だろう。将来面を考えれば、懸念もあるがそれ以上に得られるものが多すぎる。二代目主神二柱に、魔獣の王が追い込まれる姿などは特にな」

「フロンズ。確かにあの調子なら勝ち目はあるが、そこまではつきり言っただよいか？」

「いいだろうさ。公然の発言でなければ問題ないし、この場の防諜体制がたやすく抜かれるのなら、我らの大願は成就せぬよ」

「……まあ道理よな。こちらとしても楽しみな試合じゃからのお？」

「その割には、少々困り顔な気もするが？」

「別件だ、別件。……ユーピがデートをすると聞いて、少し困惑してる」

「……………どうやら、少し疲れているようだ。お互い休暇をとろう」

「ユーピがデートをすると聞いたのだ。真実じゃ真実」

「真実か。あの男、お前にばかり夢中な気がしたのだが。人生万事塞翁が馬とはよく言ったものだ」

「そこまで言うか。まあ、妾も少し驚いたがおお？」

「まあいい。仕事に支障をきたさぬように気を使うのなら、こちらも関係が破綻しないよう気を使うとしよう。有給申請は早めにするように言ってくれ」

「うむ。できるのならばホワイト企業にするべきじゃからな！」

戦愛白熱編 第三十話 超常大激戦

和地Side

「壮絶な戦いになってきたな」

思わず、俺はそう呟いた。

というほかない。というか、約四か所で行われる戦いはその殆どが激戦となっている。

一ヶ所目、残りメンバー同士の激突。こちらは下馬評を大きく覆す戦いの一つだ。

木場が神殺しの聖魔剣を作れるようになっていたことで、オフエンス面が確立。全員がそのフォローを意識したことにより、巨人達の戯れチームは中々手こずっている。

というより、魔獣達が既に全滅している。どいつもこいつも上級悪魔クラスはあつたが、相手が悪すぎるといっほかない。

なにせ伝説級の邪龍やその量産型を何度も撃退してきたメンバーが多いからな。神クラスが相手だとしても、戦い方次第でどうにかなる余地がある。

そこに神殺しという手札があるから、その神もうかつに手が出しきれない。これを活かせば立ち回りは十分すぎるほどできるというわけだ。流石は俺の仲間達。

そして、問題となる戦いは壮絶すぎる。

『ガハハハハハッ！ お前も星辰奏者になれば、勝てたかもしれないぞ！』

『いらん。俺は俺の才覚のみを鍛え上げ、その領域すら超えるのみだ』
『壮絶な雷鳴が鳴り響く中、テュポーンに真っ向から言い返すクロウ・クルワツハ。』

なんという事でしょう。魔獣達の王であるテュポーンは、エスペラント星辰奏者となっていたのです。

……うん。無体過ぎる。

ただでさえ超越者クラスはあるだろう魔獣の王が、更にアステリズム星辰光のポテンシャルをぶちかましてしている。ついでに言うと、星辰奏者になった超越者とか反則だろう。

まあそれはいい。今のところはクロウ・クルワツハがちよつと押され気味だが、すぐにつく決着とも思えない。

そしてもう一つの死闘もマッチメイクされた。

『これが、神が許した暴力か。私の力すら断ち切るとは恐れ入った』
『驚くことではありませんまい。デュランダルは全てを切れるのですから』

ヴァスコ・ストラーダ助祭枢機卿が相対するは、オリュンポス二代目主神たるアポロン神。

アポロン神は高いポテンシャルと権能でまともに渡り合っている。そう、渡り合っている。

そう、戦況は互角に近い。

……なんなのあのご老体？

正直ちよつと二度見する。十度見ぐらいしたい。

人間のはずだ。ついでに言うとお老体のはずだ。もう一つ言うと引退しているはずだ。

何主神クラスと真つ向勝負して、戦慄させているんですかあの人！アポロン神も真つ向から渡り合っているし、何なら傷一つ負ってない。ただし放った攻撃の全てを切り伏せられているから、正直押されている感すらある。一応ストラーダ猊下は軽い火傷とかあるけど、たぶん間合いに入ったら勝つちやうだろあれ。

「……流石は、私とリュシオンの同時攻撃を一蹴した。パラシユラーマを打倒した猛者ね」

カズヒも戦慄しているし！

というか、だ。

ストラーダ猊下の姿だが、さつきから五十代のままだ。

あの人のとつて、自分の全盛期はそれぐらいだとは聞いている。ただし、その姿になることは極僅かではない。

既に80を超えており、信徒ゆえに聖書の教えに由来しない人の異能は心得がない。星光で若返ることはできるが、ハイロウの調整ができない星辰奏者の限界及び操縦性の低さもあって、あの人は星を発動させると二十歳前後にまで若返ってしまう。

真の意味での全盛期に到達できるのは、星が切れて元に戻る直前。そういう意味では、ここまで難儀な人もそうはいないだろう。

それが当たり前のように、50そこらの姿で主神を渡り合っている。

……勘弁してくれ。どんな手品を使った？

「どう思う、和地。おそらく、その手段を確立したことをネタに交渉したと思うけれど」

「交渉よりもどうやって作ったのかが疑問だな。まあ、冷静に考えるとできそうなやつが多いけど」

俺達はそんなことを語り合う。

実際問題、冷静に考えると不可能ではないだろう。

生命と靈魂を調律する幽世の聖杯。生命エネルギーに干渉する仙術。更に神道や日本の神々に由来する術式。そこに聖剣や魔剣の創造技術。

リアス先輩の手元にはそれだけの技術がひしめいている。応用すれば、確かに一つや二つはそれを可能とすることもできるだろう。

相変わらず交渉が上手いな、リアス先輩。あの人ポテンシャルがやっぱり高い。

そして、だからこそだ。

「問題はここからだな」

「ええ。リアスはある意味一番重要なポジションだわ」

殆どのメンバーのマッチメイクは完了した。だからこそ、リアス先輩は大変だ。

今浮いている札は、両チームともに二つずつ。

リアス先輩とギヤスパ。ヴィーザル神とミドガルズオルム。

どういうマッチメイクになるかが不明だが、間違いなくこの四人戦いが趨勢を決めかねない。

……リアス先輩、勝てるんだろうか。

「今すつづい失礼なことを考えた。謝った方がいいだろうか？」

「いえ、それはある意味で正論でしょう」

カズヒは俺が何を考えていたのかも読んだ上で、そう言い切った。画面を見る目つきは厳しく、戦いが厳しいことを現害に告げている。

そう、何故ならば。

「相手は二代目主神に龍王。リアスも最上級悪魔の上位かつ神滅具保有者を従えているけれど、流石に一段劣っているわ」

そうなるよな。

リアス・グレモリーは間違いなく傑物だ。才色兼備の女傑であり、加えて努力家。そのポテンシャルは、並みの最上級悪魔が相手なら返り討ち確定といったレベルだろう。

だが相手が悪い。なにせ、龍王・神滅具・主神が戦う状況だ。言っでは何だが、最上級悪魔クラスの上位では一步劣りかねない水準といえる。

とはいえ、だ。

「それをどう底上げするかが見ものだよな」

「ええ、少し楽しみね」

あの人が、そこまで分かっている何も用意してないわけがない。

アザゼル先生からも「自分自身がそこまで強くなろうとしなくていい」と言われた上で、それでも自分自身も強くあろうとしていた人だ。そのまままで終わるような無体をさらすつもりはないだろう。

だからこそ、ここから本番になる。

そういう意味では、本心から期待してますよ、先輩？

フィールドの片隅で、リアス・グレモリーはギヤスパ・ヴラディを伴い、ヴィーザルと対峙していた。

「……一応、妹が世話になってるといふべきかな？」

「いえいえ。妹さんには色々とお世話になっています」

そう小さく交わり、そして戦闘は開始される。

「仕掛けるわよ、ギヤスパー！」

『はい、リアスお姉ちゃん！』

闇の獣と化したギヤスパーと共に、リアスは消滅の魔力で攻撃を開始する。

それをヴィーザルは蹴りによって迎撃しつつ、小さく歯を剥いた笑みを浮かべる。

「やるな！ 流石はあのリリン達と戦って生き残っただけはある！」

「そうよ！ 私には貴方を……倒す！」

その瞬間、凄まじい攻防が繰り広げられる。

リアスとギヤスパーは連携で果敢に攻め立て、ヴィーザルはそれを魔法を纏った蹴りで迎撃する。

戦局そのものはヴィーザルがゆとりを持っているが、かといって無駄に油断ができる戦闘でもない。

だが同時に、このままなら一時間は確実にしのげる。そういったヴィーザル側に有意な戦況となっている。

そして、その上でヴィーザルは警戒心を見据えている。

「この程度じゃないだろう？ 噂のD×Dの主力が、なにも無しとは思えねえ！」

振られる更なる蹴りが、リアスとギヤスパーの攻撃を一気に砕く。

その瞬間、リアスは紅の全身鎧を纏って突貫する。

周囲に停止干渉を行いながらの魔力攻撃。これだけで並みの上級

悪魔なら群れて仕掛けても返り討ちに遭う。それこそが、リアス・グレモリーの応用技たる紅爵礼装。

それをもつてしてすら、ヴィーザルは巧みな攻撃でしのいでいく。油断はしていない。だが同時に、想定外に対する余力を残した配分で戦っている。

その事実を、リアスは悔しきこそあれど冷静に受け止めていた。

主神を継げるとはそういう事だ。あくまで例えるなら超越者クラスは確実にあり、全盛期の二天龍でも圧勝は困難だろう。最低でも魔王クラスでなければ、悪魔でも話にならない。

ゆえに、星を全力で振るうリアスですら届かないのは当然。それはまごうこと無き事実であり、本来悔しがる必要もない。

だが悔しい。素直にそう思う。

最愛の兵藤一誠は、超越者が一角のリゼヴィムや、天龍に届いたアポプスとも真っ向から戦えた。現状では命の危機すらある故封じているが、それでもある程度は渡り合えるだろう。

にも関わらず、主であり恋人の自分は油断されなければあしらえる程度にとどまっている。

認められるか？ いいや、否。

ゆえに、リアスも一切容赦しない。

「やるじゃねえか！ これなら、一時間はしのげるんじゃない」

「—その程度なわけがないでしょう？」

ゆえに、ヴィーザルの賞賛を切って捨てる。

「ここからが……本番よー」

イツセーSide

その光景を、俺は見た。

『……見せてあげるわ、これが私個人の切り札よ!』

リアスから紅のシズクが飛び散り、そしてそれが固まって生まれる、紅の龍。

その突撃は、ヴィーザルさんを放った蹴りごと吹っ飛ばした。

「あれはまさか―」

コスモス・ポルト
「―残 神か!？」

イリナとゼノヴィアが刮目する中、態勢を整えたヴィーザルさんにリアスとギヤスパークが龍と共に襲い掛かる。

その趨勢は、間違いなくヴィーザルさんが不利になっている。

というのも、龍が速いし固いし攻撃力もある。後ついでに、龍からも闇の獣が現れて数の圧殺まで仕掛けている。

あれ、どう考えても下手な神器の禁手を超えてる。その気になれば、一対一でグレンデルとも戦えるんじゃないか？

「うおおおおおっ！ すっごー！ マジですっごー!!」

その光景にテンションを上げてるアルティーネも、こつちを輝かせた顔で振り返ってきた。

コスモス・ポルト
「残 神 って、確か裏技だったよね？ それなの!？」

「おそらくは。ただ、かなり特殊な仕様でしょうが」

と、レイヴェルがアルティーネにそう答える。

うん。俺も正直ちよつと分かってないし、解説お願いします。

「……リアス様の星辰光アステリズムは、ある程度の繋がりを持つことで他者の異能を再現するという物。そしてそれにはもちろん限界があり、神滅具クラスの異能は完全再現が困難です」

うん、それは知ってる。

ただリアス本人のポテンシャルもあって、シャレにならないしな。

アーシアの回復も使えるし、小猫ちゃんの仙術もある程度は使える。何なら朱乃さんの雷光すら、ある程度は使える。しかも木場の禁手を両方とも再現できるし、ゼノヴィアの聖剣使いの適性すら再現できる。

仲間がいるほど強くなる。リーダーにとつてとつても最適な星だろう。しかもリアスは眷属の巡り合わせが凄まじいから、サイラオーグさんの眷属達を思いつきり圧倒してたしな。

ただ、俺もちよつと気になる。

「残神って、基本的に裏技どまりだろ？ それだけであそこまでの性能が出るのか？」

レイヴェルにそう尋ねるけど、そこが疑問だ。

残神はいうなれば「禁手のあまり」を組み立てて一つの異能にする超高等技能だ。性質上、禁手よりは劣った性能になる。

ヴィールは最初っからワンセット運用だったし、九成も割とそういう傾向が多い。木場は二つの神器を持っているようなものだし、更に伝説の剣を大量に併用する前提だからこそその性能だ。

だけどリアスの場合、明らかに出力が高い。あれはちよつと、残神だけでは説明がつかない気がするんだけど。

「答えは単純でしょう。おそらくは」

そう言つて一旦切つたレイヴェルは、ちよつと呆れた目を映像のリアスに向ける。

「イツセー様達四名以上の神器を再現し、それを残神で統合して再現しているのですわ」

……………。

「あ、あく、なるほど」

俺はちよつと納得したけど、ちよつと待つてほしい。

え、つまり……………全部盛り？

「言つちや悪いけど脳筋じゃね?!」

何やってんの、リアスううううううっ!?

戦愛白熱編 第三十一話 新たなる神魔の大戦

Other side

『こ、これはこれはこれはああああああ！ なんとという事でしょう！
リアス・グレモリーチーム、互角以上に渡り合っているううううう
うっ!!』

『『『『『『わあああああああああああああああああああ
!!!』』』』』』

実況が驚愕の声を上げる中、会場は大歓声に包まれる。

当然と言えば、当然だろう。アザゼル杯における優勝候補、巨人たちの戯れチームを相手に、リアス・グレモリー達が互角以上に戦っているのだから。

優勝候補、それも短期決戦の真っ向勝負という搦め手の使いづらい状況下。下馬評では圧倒的不利であり、どこまで食い下がれるかが焦点だった。

それが裏を返せば、損害を受けているのは魔獣達を失った巨人達の戯れチーム。更にその状況を維持しつつ、真っ向から渡り合えている。

競技試合で、このジャイアントキリング一歩手前の状況に湧かないわけがない。

クロウ・クルワツハとヴァスコ・ストラードがそれぞれテュポーンとアポロンと渡り合う。更にアルテミスとブリュンヒルデを相手に、リアス・グレモリー眷属を中心としたメンバーが抑え込んでいる。

そして、ギヤスパ・ヴラディを連れたリアス・グレモリーはヴィーザルと真っ向から競り合っている。否、押していると言ってもいい。

下馬評が覆される戦いぶりに、会場の者達は誰もが沸き立つ。そんな中、一人静かに試合を観戦している者がいた。

「……なるほど。これは厄介ね」

その表情は、高揚していない。

その目は、どこまでも冷めている。

そんな異質すら感じさせる中、その女は誰にも気づかれないうようにため息をついた。

「こんな連中が活躍していれば、ハーデス様も肩身が狭いわけだわ。

……反吐が出そう」

そう呟き、その女は踵を返すとトイレへと向かっていく。

そして個室に入り……本当に軽く吐いた。

「……まったく。これは相応の備えと準備が必要不可欠ね。異形つてのは基本、ああいう気質が基本なのか」

その瞬間、彼女は腕を振るう。

そして、舌打ちをすると虚空を睨んだ。

「覗き見はやめてくれる？ 次は当てるから」

そう吐き捨て、そして歩き去る。

その直後、角から一人の男性が姿を現した。

「……ふむ、やはり斥候や偵察は専門家に任せるべきか」

そうため息をつき、フロンス・フィーニクスはため息を吐く。

小さく頬から炎が飛ぶのは、彼が小さく負傷をしている証だ。

そして女の歩き去っていった方向を見て、視線は鋭くなる。

「ラツイーカのチームメンバーだったな。見せ札だとは思っていたが、それでも今までは加減をしていたようだ」

そう呟き、フロンスは小さく肩をすくめる。

「不自然だったので少し様子を伺ったが、どうやらハーデス以上にこちら側に批判的らしい。もう少し情報収集の頻度を上げるとするか」

そう呟いたうえで、フロンスは踵を返す。

同時のその表情は、鋭く険しい。

それは当然と言えば当然だろう。

「……幸香、どうやら要警戒対象が出てきたようだ。諜報員の準備も

しておきたい」

警戒に値するべき難敵が発見された。ならば警戒し対応するのは当然なのだから。

和地 Side

「……さて、そろそろどう出るか、だな」

「そうね。もう一波乱ぐらいはあるでしょう」

俺とカズヒは水分を補給しながら、戦闘を継続して確認する。

どの箇所も一進一退。熾烈な争いを繰り返していると聞いていい。

神殺しの聖魔剣を軸に、女神と半神を抑え込む木場達。

雷鳴の結界内部で激闘を繰り返す、クロウ・クルワツハとテュポーン。

逆に音楽芸術を思わせるような、魅せる戦いを繰り返すストラ

ダ猊下とアポロン神。

そして、戦いの大一番を担っていると聞いてもいい、リアス先輩及びギヤスパアの、ヴィーザル神を相手にした戦い。

間違いなく、壮絶極まりない戦いがそこで繰り返され――

『……なら、こつちも切り札つてのを切るとするか』

――そう、ヴィーザル神が呟いた。

「そう、リアスはそこまで主神を追い込んだのね」

心からの敬意を持ったカズヒの言葉は、しかし苦い物を見せている。

まあそうだろう。

裏を返せば、ヴィーザル神に奥の手を切らせてしまった。それができるときの戦いとはいえ、つまりはここからが本番だという事だ。

『契約通りだ、ミドガルズオルム！　そろそろ出番だぜ？』

『……ええ、出番が来ちゃったの？　面倒だなあ』

宝玉を取り出したヴィーザル神の隣に、ミドガルズオルムの幻影が浮かぶ。

それをリアス先輩はあえて妨害しない。

……いや、違う。

『そう来るのね。なら、こちらも行かよ、ギヤスパー』

『はい。ここからが本番ですね、リアスお姉ちゃん！』

あ、これ二人もまだ札を隠し持っている流れだ。

思わずちよつと戦慄する中、ヴィーザル神は宝玉を脚甲に装着させる。

『抜けよ、リアス・グレモリー。お互いに本領発揮でやろうじゃないか』

『ありがとうございます、ヴィーザル様。ですが容赦はありませんので……っ』

そう語り合い、そして双方が変化する。

ヴィーザル神は、どこかアザゼル先生がファーブニルを利用して展開した人工禁手の鎧に。

リアス先輩は、闇の獣となったギヤスパーと同化し、闇の獣人ともいえるべき姿に。

そして分かるのは、どちらもが圧倒的なオーラを纏っているという、その一点。

『準神族兵装、ラグナロク・アース・ベルセルク終末大帝の龍装。世界樹の力をグリゴリの研究と合わ

せて作った、アースガルズ版の人工神器つてところかねえ？』

『ふふ、素晴らしい力ですわ。ですが私達の再興到達点たる、フォービドゥン・インヴェイド・パロール・ザ・プリンセス真闇の滅殺獣姫も相応にできますよ？』

それぞれ誇りながら、その瞬間更なる激突が生じる。

ギヤスパーと一体化したりアス先輩は、消滅の魔星すら超える出力

実際フィールドがそろそろ限界を迎えそうだ。そんなレベルの死闘なんて、アザゼル杯でもそうそうお目にかかれない。

いや本当に、あれはマジヤバいって。仮面ライダーになったグレイファイアさんとも真っ向勝負できるだろ。

「凄まじい力だ。マスターリアス、あそこまで到達するか」

「流石は私達のリーダー！ 私達も負けてられないわね♪」

「お姉さま、頑張ってください……っ」

ゼノヴィアも、イリナも、アーシアも。それぞれがそれぞれの感想を思い浮かべながら感心している。

ああ、これが俺達のリーダー。オカ研初代部長のリアスだ。

俺が先に進んでも、負けじと追いかけてくれる。その果てに、超越者クラスにも通用する力をついに獲得してのけたんだ。

ああもう！ 俺ってば本当に愛されてる！ 生きててよかったあ！

「流石はグレモリーの次期当主ですな。我々も精進しませんと」

「そうですね、ボーヴァさん。ですが、このままだと……」

ボーヴァが感心していると、レイヴェルはどこか真剣な表情で深刻そうな雰囲気になる。

それに俺達が首を傾げた時、事態は動いた。

『そろそろ時間も限界ね。これで終わりとしましょう』

そう告げながら、リアスは消滅の魔星とは比べ物にならない巨大な消滅のオーラを集め、投擲する。

それに対し、ヴィーザルさんは回避をとらない。

真っ向から迎え撃つのか？ できるのか？

『いいだろう。なら、俺も必殺技つてのを見せてやる』

『Maximum Charge』

宝玉から音が鳴り響き、そしてヴィーザルさんは蹴りの構えを取り

『フィンブルヴェトル、ショット』

—その瞬間、真っ向から消滅のオーラを迎え撃った。

アザゼル Side

『フィールルドの大破を確認。試合続行は困難と見なし、この時点での判定を行います』

「凄いことになったのお」

他人事そのものの態度で、オーデインの爺さんは顎を撫でつけながらそうまとめる。

ああ、試合フィールルドが蹴り壊された消滅のオーラで丸ごと吹き飛んだからな。凄い事にはなってるだろ。

っていうか、どっちも大概じゃねえか。

テュポーンの奴は星辰光アステリズムだろう。面白半分で手を出したんだろうが、凄いことになってるじゃねえか。

リアスもストラダを参戦させるとは中々すげえな。クロウ・クルワツハと言い、交渉上手で何よりだ。

そしてそのリアスとヴィーザルの激闘。どちらもタツグを組んでの合体形態だが、その力は下手な主神を返り討ちにするレベルだろう。間違いなく、現段階における頂上決戦の一つだろうな。

「……………う……。立派になったな、リアス……………」

サーゼクスはサーゼクスで男泣きしてるし。

こいつ、シスコンで親バカで愛妻家と、逆に大変になるぐらい苦労してるなおい。

さくて。あの破壊、オーラがデカすぎて巻き添えで何人か吹き飛んでそうだよなあ？ それ次第で勝敗が分かれる感じだが――

『……判定が出ました！ 先ほどの破壊による被害者を踏まえて、2ポイント差でリアス・グレモリーチームの勝利です！』

—お、ぎりぎり逃げきったな。

「うおおおおおおおっ！ リアスうううううっ！」

「ほっほっほ。ヴィーザルの奴もまだまだじゃのお？」

父兄は楽しそうで何よりだが、確かに凄い試合だったぜ。

正直、ハーデスとか帝釈天とかが心配だった。あいつら、何かしらの動きをしでかしそうだったからな。

だが杞憂になりそうだ。期待してるぜ、お前らよ？

これまでの戦いでも強くなり続けてきたし、これはいい試合が見れそうだな。

「楽しみにしているよ。いい試合が見れると期待してる」

僕はそう返しながら、ちらりと視線を離れた方に向ける。

「向こうでは九成君が、ギヤスパ―君と話している。」

このあと少しすれば、今度は九成君の試合だ。

教会が誇る最強格の一人、リユシオン・オクト―バー。

ルーシアさんやアニル君も更に強くなり、全体的に強化されている。

そんな中、彼はどう戦うのだろうか？

ふふ、我ながら少し楽しみになっているね。

「健闘を祈るよ。まあ、九成君に対してもだけどさ」

さて、彼らはどう戦うのかな？

イツセーSide

「……さて、中々大健闘だったじゃない」

「ええ、ありがとう。最も、歯切れの悪い決着だけどね」

と、カズビにジュースを注がれながら、リアスはちよつと苦笑していた。

まあ、フィールドが破壊されたことによる判定に移行してたからなあ。そういう意味だと、ちよつと歯切れも悪くなるか。

でも、十分なんてレベルじゃない戦いぶりだった。判定とはいえ、優勝候補にギリギリで勝利したわけだしな。

「リアスは十分凄いよ。今の俺だと、チームでも勝てるビジョンが浮

かばないからね」

ホント、言ってる場合じゃないんだけどまずいんだよなあ。

正直、本当に頭を抱えたい。

だって、優勝候補の本気バトルを最近見せつけられてるもん。主神クラスが出張るレベルの激突を見せられると、俺たちが勝てるのかちよつと不安になるし。

仮面ライダーになったグレイフィアさんや、龍王の鎧をつけたヴィーザルさん。真っ向から戦って勝てる気がしないっていうか、返り討ちに遭うビジョンがありあり見えるぐらいだしなあ。

いや、俺もリゼヴィムやアポプスを何とか打倒したけど。でもそれは龍神化あつてのことだ。命の危険があるからとても使えない現状だと、手札がない。

せめて疑似龍神化がもつと長ければいいんだけどなあ。一分も持たない状態だと、どうしようもないところがある。部分龍神化でも限界があるからなあ。

何とか新技か新境地に到達したい。俺もだけど、仲間達も更に強くなる必要があるんだよなあ。

そう思うと、ちよつとしんみりしてしまう。

うーん。ここは新しいアプローチでもした方がいいんだろうか。

一度真剣に、教会の戦士達に師事でも仰ぐべきかなあ？

「……ま、大活躍なのは本当だよ。俺もなんかお祝いした方がいいかな？」

と、俺が気づかれないうちに誤魔化すのも込みで言った時だ。

「なら処女でも貰っておきなさいよ。周りの妨害は私が潰すから」

……何をおっしゃってますか、カズヒ様。

「またその話？　ちよつとごり押し気味じゃないかしら？」

リアスも半分呆れてるけど、ちらちら俺の見てきているのは半分乗り気ですよね？

俺も乗りたいビッグウェーブですけど！　そろそろエッチしたいですけど!?

「……一応聞くけど、本気か？」

「本気よ本気。というか、遅いぐらいでしように」

俺にため息で返したカズヒは、割と真剣な表情だった。

「いつまでもイツセーが童貞なのもあれでしょう。私達も気が引けるから、回数控えめだし」

……………あ、そっか。

俺、童貞。九成、非童貞。それが現実だった。

五秒後、俺は崩れ落ちた。

「ほら。イツセーも刺激したら落ち込むんだからさっさと互いに卒業しなさい」

「カズヒ、貴女って最近なりふり構わなくなってないかしら」

俺だつてなりふり構いたくないよおおおおおっ！

Other side

「奮闘、おめでとうございます猊下」

「凄かったです猊下！ ああ、主よ！」

子供のようにはしやぎながら、自分の健闘を褒め称えるゼノヴィアとイリナ。

その姿に微笑みを浮かべながら、ヴァスコ・ストラーダは二人の頭をなでる。

「ふふふ、これぐらいはしないといかぬからな。鳴り物入りで、超常の戦いを憂いなく行わせてくれるのだから」

そう語るストラーダは、持ち込んだ新たなる愛剣もなでる。

デュランダル・メテオ。ストラード専用にリアス達までもが手を貸して完成させた、新しいデュランダル。

その刀身を見て、ゼノヴィアはふと気づいたことがある。

「その剣、デュランダルとは材質が違いますね？」

「本当ね。これ……どんな合金かしら？」

二人が首を傾げるのも当然だろう。

デュランダル・メテオはストラード専用に鍛え上げられた、新たなデュランダル。必然として、その材質の違いこそが最大の肝といえるのだから。

そして、ストラードからしても隠すほどのことでもない。

「このデュランダル・メテオは、星辰奏者たる私のように設計された物だな。簡単に言うと、新たな星辰体感応合金といえるものだ」

「そうなのですか？　ですが、新しい星辰体感応合金ならもつと広まりそうですね？」

イリナがそう反応するが、ストラードは静かに首を振る。

「そうはならぬだろう。この合金は、アダマントイトと比べても星辰体との感応面では劣っているのだから」

「え？」

思わず首を傾げる二人の後ろから、覗き込む姿があった。

「……ああ。そういう事ですかあ」

リーネス・エグリゴリは、一目見たことでその本質を掴み取った。

「つまりこの剣は、猊下の星辰光を弱体化させる星なんですねえ。」

「ど、どういうことだ!？」

一瞬で理解したリーネスに、ゼノヴィアは思わず詰め寄った。

アダマントイトを使う時よりも星辰体が弱体化してしまう。それに意味があるのかどうか。

だが、リーネスは小さく苦笑をしながら指を一本立てる。

「簡単に言うとなえ。この剣は所有者の星の出力や収束性を下げることとで、効果を落としているのよお」

その言葉に、ゼノヴィアもイリナも一瞬分からなかった。

だが、すぐに思い至る。

そもそも、ストラーダの星は肉体を若返らせる。これにより二十代の肉体を取り戻すという点で、ストラーダが使う際の凶悪性が際立つと思われている星だ。

だがストラーダにとって、二十代の若さは精神に悪影響を与える物。彼はそれを全盛期とせず、精神と肉体の釣り合いをとれる50代が最適と見ている。だが、星の出力調整ができないアダマンタイトでは、50代の肉体は星の持続時間が切れた一瞬だけの奇跡だった。

つまるところ、このデュランダル・メテオは「ストラーダにとって微妙な星を、弱体化と引き換えに最適化させる発動体」としての機能が盛り込まれている。

それに気づいた二人に、ストラーダは苦笑を浮かべながら頷いた。

「この剣は、正真正銘私に最適化された改悪型だ。ただ発動体としての機能を組み込んだモデルや、純粋に新しく作られたデュランダルではない」

そう告げ、しかし笑顔をもって断言する。

「だが、このデュランダル・メテオなら私はすべてを切れるだろう。……そう、インドラであろうと諸君が愛する赤龍帝だろうと、な」

その言葉に、二人はすぐに意識を切り替える。

そこに在るのは明確な戦意。挑戦者としてのそれではなく、対抗者としてのそれだ。

「二では、その時は容赦なく」

その返答に、ストラーダは力強い頷きをもって返す。

「よかろう。お互いに死力を尽くそうではないか？」

「あららあ。では、私も新型プログラブライズキーでも用意しましょうかあ」

リーネスも楽し気に微笑みながら、和やかな時間は過ぎていった。

戦愛白熱編 第三十三話 リアス祝勝会（後編）

和地 Side

なんでカズヒの奴、遮音魔術張ってるんだ？

ただ指摘するとややこしくなりそうだ。俺は気づかないふりしてスルーしておくことにする。他のメンバーもスルーしているしな。

「因みに、お前はいいのかヒマリ？」

「この際、始まりが決定すればいいとしますの。そのあとは経験値の差でアドバンテージ確保ですわ」

強かなことで。

ま、ヒマリがスルーしているのならスルーしていいだろう。

いい加減イツセーに童貞卒業してほしいし。冷静に考えると、なんで家主の息子が童貞の家で、俺は女とエロいことしているんだろう。

真剣にイツセーに殺されそうな気がしてきた。むしろ全力でフォローした方がいいぐらいだし、今度真剣に計画を立てるべきだろうか。

ま、それはこの際置いとくとしてだ。

「さて、俺はそろそろルーシアやアニル達との闘いか」

どうも、あいつらメンバーの多くが割といっぱいばいっばいで途中リタイヤの可能性があるしな。

有終の美を飾るべく、気合を一気に入れてくるだろう。本来なら予選がまだまだゆえにセーブするところもなく、全力投入されると更に不利だ。

とはいえ、こつちもわざと負けてやる気はない。こういう時は全力で応えるのが礼儀ともいえるしな。

そこも踏まえて、ちよつと気合を入れるべきか。

そういえば、今イツセーにリアス先輩がカズヒと話してるわけだ。既に先発がそれぞれ激闘を繰り広げた後。なら俺は、それに恥じない戦いぶりをしないと。

まあアニルやルーシアも同じこと。これは凄い競い合いになりそうだな。

Other side

「……なるほど。では今回のマッチメイクが終わり次第、このチームはリタイアを表明するんですね、リュシオン・オクトーバー」

「そうなるね。ルーシアやアニルはいいんだけど、他の子が流石にメンタルに限界を迎えているみたいだからさ」

「そうですか。いえ、最上級悪魔クラスがいくらでもいそうな者がいるなら、心折れるのは当然でしょう。私の手の者もかなり憔悴している者がおりますし」

「昔の俺なら、「コツさえつかめば簡単だよ」と言いそうだね。いや、本当に知識として知ることが出来て良かったよ」

「なんというか、貴方も色々と難儀なお人なんですね」

「あはは、お恥ずかしい。……ただ、だからこそ次の試合は全力で行こう。カーミラとしても、その方がいいんだろうしね」

「そうですね。カーミラとしても変革の証となるこのチーム参戦。それなりの成果というか、活躍を見せないといけませんから」

「他人事みたいだね。もしかして乗り気じゃないのかい？」
「まあ、そうです。……正直、変革の顔みたいには扱われるのは不本意です」

「そちらも大変みたいだね。今度、愚痴でも聞こうかい？」

「お気持ちだけ受け取っておきます。ですが、次の試合により本気で挑んでいただけると幸いですわ、神の子ディア・ドロローサに続く者」

「ふふ、カーミラの吸血鬼、それも大貴族に言われては断れないね」

カズヒSide

ちよつと一息を入れる為、私は外の空気を吸っていた。

さて、連戦の激闘もあと一つ。和地がリユシオンと競い合う試合が残っているだけね。

間違いなく、壮絶な激闘になるでしょう。

ただ、もう一つ言えることがある。

あの和地が、無様な試合はしないという事ね。

きつと伏せ札の一つぐらいは明かすでしょう。その上で、恐ろしいレベルの競り合いをするかもしれないわ。

そう思うと、少しドキドキワクワクする自分がいる。

ふふ、私が誠にい以外の男に胸を高鳴らせるなんて。人生二周目は伊達じゃないわね。

そう思いながら空を見上げてみると、隣に立つ人影があった。

「……オトメねえ」

「どうしたの、カズヒ？ 一人で黄昏てるなんて」

どうやら、少し失敗したのかもしれないわね。

こんな風にオトメねえに心配されるのも、悪い気がしないのも意外だわ。

ええ、失ったものは多いし、背負った業も数多い。

だけど、この関係を取り戻せた。そのことは、嬉しい出来事だ。

……ありがとう、和地。

だからこそ応援しているわよ。

相手はあのリュシオン・オクトーバー。だけどあなたは、この世界

から邪神極晁エルダーゴツドを祓ロローサつた旧済銀神

神ディア・ドの子ロローサに続く者の道を、妨げてみなさい。私の愛しのタイタス・クロウ涙換救済！

戦愛白熱編 第三十四話 リュシオンという壁

和地 Side

あと数日で試合が始まる時、俺達はミーティングを進めていた。

「……と、これまでの試合情報などから算出されるメンバーそれぞれのポテンシャルはこんな感じだな」

と、俺が映像資料を見終えた後に告げる。

それに対し、黒狼は更に資料を確認しながら立ち上がる。

「リュシオン・オクトーバーがずば抜け過ぎている為ワンマンチームに思われることもあるが、メンバー全員が同年代で言えば上位に届く者達だ。この大会全体においても、平均より上のチーム構成といえるだろう」

そう、若人の挑戦チームはなんだかんだで高水準となっている。

間違いなく手練れが多い。経験値の少なさゆえに隙が無いではないが、それをつくの中々大変といえる。

若手の優秀な者達が集まったチームゆえに、経験を積むことで更に腕に磨きがかかっているしな。ある意味で俺達オカ研と同様のパターンといえるべきか。

そして、今回厄介な点はそこだけではない。

「最大の難点は、このチームがリタイアをそろそろ考えているという点だ」

そう。若人の挑戦チームは大会を途中退場する方向に向いている。

腕利きの若いメンバーが集まっていたが、神クラスすら跳梁跋扈する大会ではメンタルが追い付かなかったようだ。精神的にいつぱいいつぱいのメンバーも多く、そろそろ限界だと判断されたらしい。

ただ、それは俺達にとつて安心理由には全くならない。

「つまるところ、後先を考えず全力を出せるという事だ。相手も有終

の美ぐらいは飾りたいだろうし、こちらとしては更に厄介な相手になつているのを理解した方がいい」

そう黒狼はまとめ、その上で資料を確認しながら少し苦笑している。

「とはいえ、和平があつてこそそのチーム構成だろうな。三大勢力が主体だが、それ以外の勢力からも何人か参加しているのが困つたものだ」

「……確かにな。下手すりゃD×Dバリの異種族混合チームじゃねえか」

と、ベルナがそれに同意する。

ま、そこについて反論は欠片も無い。

神の子を見張る者が保護した神器保有者。教会の育成機関で学ぶ悪魔祓い見習い。更に悪魔の子供など、三大勢力も多い。

だが、そこにヴァルキリー見習いがある。妖怪の子供がいる。あるうことか吸血鬼までいる。

若い者達を中心にした異種族混合チーム。そういうと、確かにD×Dを思わせるな。

ちよつと感慨深くなっていると、シルファが資料を確認したうえで頬杖をついた。

「……とはいえ、最大の難点は王のリュシオン・オクトーバーでいいのかしら？ 相当化け物らしいけれど」

「そうだね。なんていうか、別格？」

と、インガ姉ちゃんが苦笑しながら頷いた。

まあ、実際そうなんだが。

ディア・ドローサー神の子に続く者の異名は伊達ではない。

空前絶後を思わせる、至つてない状態に戻ってから任意で別の禁手に至り直す真似ができる男。俺やイツセーも大概バグじみているが、それを踏まえても奴はヤバイ。

勝つというなら、あの男を倒すことを考慮する必要はしつかりある。

そして問題は――

「このメンバーで勝てるか……やっぱり和地君だよな？」

「だね。一対一でという条件は付くけど」

インガ姉ちゃんが俺に視線を向けると、文雄もそう言って頷いてくる。

まあ、そうだろう。

神滅具の保有者であり、当人の前人未踏レベルの傑物。必然的に、対抗戦力は神に対応することを主眼にするべきレベルだ。

となると、単独では絶対に俺になるわけだ。

「ま、一対一に限定すればだけどね。四対一ぐらいなら勝ち目はあるんじゃないかしら？」

「そうね。私達なら連携でマスターにも勝算はあるし、勝ち目がある程度はあると思うわ」

文香と三美さんがそう話し合う中、ヴィーナは映像を再確認して冷や汗をかいている。

「でも、この人凄すぎだよな？ 神クラスにも勝ってるんでしょ？」

「まあそうなんだよなあ」

俺は引きつっているヴィーナにそう言うと、とりあえず天井をなんとなく見上げた。

「更に俺の手の内も知っているルーシアとアニルがいるわけで、間違いない今までもトップクラスの難敵だぞ」

思わずため息をつきたくなるが、まあそこはいい。

勝算を捻り出す為、もうちょっと会議を進めるとしますか。

「で、九成達が勝つ場合どんな感じになると思うっ?」

俺はリアスやシャルロットと、そんなことを話していた。

オカ研主体チームの連続大一番。その最後の試合となると、やっぱり興味はある。

なんでお菓子を食べながらそう言うのと、リアスも考えこんでいる。「リュシオンを足止めしての判定勝ちが基本でしょうね。最も、彼は一人で戦局をひっくり返しかねないもの。倒すことを主眼に入れるべきではあるけれど」

「他のメンバーも片手間にどうにかできるわけではないのがネックですわね」

シャルロットもそう言うのと、真剣な表情を浮かべている。

「急成長を遂げているメンバーが多い以上、油断はできません。それは私達も同じなのでよく分かることでしょう」

確かに。

俺達も、まだゲームデビュー前としては凄いつてレベルが、何時の間にもやら神クラスとの闘いまで主眼に入れた精鋭チームの一角だしなあ。

そういう意味だと、俺達が強くなっているんだから似たようなケースがあってもおかしくない。

ただ、そんなチームが途中退場かあ。

「もったいないよなあ。予選終了までやってたら、絶対もつと強くなつてたろうに」

俺は心底そう思うけど、それも大変なんだろう。

割と精神的に追い詰められていたり、消耗が大きいってのが理由らしいし。神クラスや最上級悪魔が何人もいるチームとの戦いで、心身共に疲弊しているそうさ。

心が折れると再起するのは大変だから、そうなる前に手を引くってのは一つの手段なんだろう。そこは俺もわかる。

「やっぱり、普通は神話の戦いなんてきつすぎるってことなんだろうか」

「それはそうね」

と、俺の言葉にリアスが即座の肯定をする。

「当然のことだけど、熾烈な争いや命の危機は強いストレスを与えるわ。それに耐えられず心を病むのは、例え心構えを鍛えていてもあり得るもの」

そう言うと、リアスは俺の頬を撫でた。

その顔は、すっごい誇らしげなそれだ。

「だから、悪神ロキや超越者リゼヴィムとも戦って、心折れず戦えるイツセー達のような眷属を持たた私は幸せ者ね」

くうく！ 嬉しいことを言ってくれるぜ！

「それはリアスさんも同じでしょう」

と、シャルロットはリアスに微笑んでいる。

「むしろまとめる側として更にストレスがあるでしょうに。十代でそんな責任をきちんと背負おうとしているリアスさんも、主として持てるなんてイツセー達は幸運ですよ」

「ふふっ。褒められるのは悪い気はしないわね」

うんうん。リアスは最高の主様ですとも！

「つまり、最高の主様と最高の相棒を持つ俺は超幸せってことか！」

俺ってかなりついてるんだなあ！ テンション上がるぜ！

……と、リアスもシャルロットもちよつと顔を赤くしてため息をついていた。

「間違いなく、今年も増えるでしょうね」

「ですね。というより、増えて当然ですから」

何の話？

俺が首を傾げていると、二人は気を取り直したのか話を戻したようだ。

「そして三大勢力だけでなく、各神話や異形の勢力からも参加者がいる。それも若い才能あふれる子達が主体」

「相応に注目されていますね。だからこそ、途中退場は惜しまれていますけど」

あ、それは確かに。ヴァルキリー見習いや妖怪、吸血鬼の貴族様も

いるらしい。

「確か、吸血鬼はカーミラの貴族だっけ？」

エルメンヒルデを思い出すな。何度か会うこともあったけど。

あいつも最近、だいぶ丸くなってたよなあ。最初の頃はめちゃくちゃ高圧的だったけど、カーミラが大打撃を受けてからはそういうのも見えなくなったし。

プライドに拘ってる場合じゃないってこともあるだろうけど、それだけでもない気がする。それならシャルバみたいな方向にもなるだろうし。何か別の理由があるのかも。

ルーシア達のところにいる子はどんな吸血鬼なんだろうか。吸血鬼からも参戦者がいるみたいだけど、ちよつと気になるな。

そう思っていると、コンコンとドアがノックされる。

「あ、どうぞー」

俺が促すと、ドアが開いて入ってきたのはアルティーンだった

「やつほー！ 暇だから構って？」

素直だなあ。

戦愛白熱編 第三十五話 性能が高い＝強いとならないときがある

祐斗Side

「……と、言うわけだからそれとなく気を付けてくれるかしら？」

「なるほどね。これは苦勞を察してしまふよ」

と、僕はカズヒから受け取ったレポートを確認する。

内容は窪川蓮夜君についてだ。厳密に言えば、数多くの奇行の数々をレポートとしてまとめたものだ。

接木優華さんと窪川蓮夜君。カズヒの前世たる道間日美子の友人であり、今でも変わらぬ友情を持っている接木さんや引岡さんの、それぞれ娘と息子だ。

優華さんの方は大丈夫だろうけど、窪川君の方は警戒必須だからね。こうしてカズヒが、問題点をまとめてくれたことになる。

しかしまあ、かなりの荒療治というかショック療法というか。

「というより、僕より先にアシアさんに渡した方がよくないかい？」
「そこについてはシンプルよ。……あの子だと窪川が反発しちゃうもの」

そう答えるけど、そんなことがあるだろうか。

性的なことに非常に潔癖で過剰反応するところは知っているし、資料でも嫌になるぐらい書かれている。

むしろ今まで警察のお世話になっていない。イツセイ君に近しいレベルで問題児だ。

これはこれで、中々に癖の強い人物だよ。

そしてそれで、僕が適任扱いされた理由がよく分かる。

「アーシアさん達はイツセー君にぞつこんだからね」

「そういう事。余計なめ事を避ける場合、イツセー以外の男が最適なのよ」

なるほど確かに。

「でも、僕だってイツセー君のことは好きだよ？」

「あいつは割と保守的だから、ゲイはもちろん性欲関係なく男に夢中つても理解が遅れるでしょう」

手厳しい意見なことだ。

まあ、それならそれでいいだろう。

とはいえ、そこで話を終えるのもね。

「それで、九成君の試合はどうなると思うかい？」

そこは割と気になっている。

相手はなにせ、あのリュシオン・オクトーバーだ。

九成君もかなり強いけれど、彼の強さはある意味で常軌を逸している。

勝算は決して高くないだろう。そういう戦いだ。

だからこそ、割と最近までリュシオンさんのその性質を問題視していたカズビの意見を聞きたかった。

そして、カズビも少し考えこみ気味だが小さく微笑む。

「勝ち目はあるわ。そして、それは決して小さいものではないと思う」

その根拠を、彼女は僕が聞くより先に答えてくれた。

「和地は今までの全てを肥やしにしている。そこから生まれる強さは、決してリュシオンに届かないレベルじゃないのだからね」

イツセーSide

「リュシオンって、ルーシアのお兄ちゃんだっけ？　なんかすっごいんだってね？」

と、お茶菓子をもぐもぐと食べながらアルティーネはそう言った。俺たちの話を聞いての答えだけど、まあそうなんだよなあ。

あの人、ある意味で俺達よりやばいもん。最近は自分のヤバさを実感したみたいだけど、それまで全く実感してなかったってのも凄い。ただ、裏を返せば精神的に成長したってことだしなあ。たぶんだけど、俺達と共闘した時より成長してるだろう。あの人常時成長してるし。

「実際凄まじい実力者よ。おそろくだけど、教会の若い戦士で彼の右に出る戦力はいないんじゃないかしら？」

「おお！　つまり教会最強ってこと？」

リアスに反応してちよつと表情が明るくなるアルティーネだけど、そこにはリアス含めて俺達全員が首を傾げる。

「いえ、ストラーダ猊下とかクロード長官とか、凄まじい人物は他にもいますので……」

シャルロットが言い難いところを言ってくれたけど、本当にその通り。

いやあ、教会も層が厚いよなあ。

それにアルティーネは興味ありげに聞いていたけど、その視線が再びリアスに向いた。

「ストラーダって、リアスがメンバーにしてたよね？　どうやってスカウトしたの？」

あ、そこは気になる。

「たぶん、あの星辰光の調律だよな？　どうやったんだ？」

「簡単……ではなかったわ。ただ、彼が参戦しない理由を仮定して、それを攻略する手段として教会と合同開発したのがあのデュランダルよ」

リアスはそう言うと、魔法陣を出して映像を映し出した。

そこに浮かぶストラダ猊下のデュランダルと、ゼノヴィアの使っているオリジナルのデュランダルが映し出される。

ほおほお。あのデュランダルは星辰体感応合金を使用しているのか。

「あれは、元々猊下用に教会が作ったデュランダルⅡの発展形であるデュランダル・メテオ。発動体としての機能を持ち合わせている猊下のデュランダルだけど、再調整の際にわざと改悪させているの」
そう言うと、リアスは更にグラフを出して性能差を比較させてくる。

枢機^カの聖騎士^テよ、墮天^トを断ち切れ^ラ（カツコ内はデュランダル・メテオ^ル・メテオ^オ）
使用時）

基準値：E

発動値：C（D）

収束性：C（E）

拡散性：E

操縦性：E

付属性：D

維持性：C

干渉性：E

なるほど。本当に性能が下がってるんだな。

「総合性能は数段墜ちているわ。ただあの星はストラダ猊下を若返らせるという点に特化しているし、その上で星辰奏者^{エスベラント}のポテンシャルは与えられるから………ね？」

なるほどお。

そういえば、猊下って「自分の全盛期は10代や20代じゃない。

精神と肉体のバランスが取れた50代ぐらい」って言ってたな。

そうか！ 猊下はそんなアンバランスな状態で最高の戦士達と戦うことに引け目を感じていたのか！

武人の拘りってやつだな。

「流石リアス！ 交渉術では本当に参考になるぜ！」

俺が感心して褒めちぎると、シャルロットも感心して頷いている。

「クロウ・クルワツハを引き入れたことと言い、リアスは本当に交渉がお上手です。私も参考にさせていただきます」

「うふふ。おほめにあずかり光栄だわ」

リアスがそう自慢げに微笑むと、アルティーンもよく分かってないなりにぱちぱちと拍手している。

「そういえば、そのストライダーって人とリュシオンが戦ったら、どっちが強いのか？」

「二間違いなくストライダー猊下」

即答で一緒に答えられたよ。

いや、だつて……なあ？

そのリュシオンが、よりにもよつてカズヒと二対一で仕掛けて返り討ちになったパラシユラーマ。それを相手に真っ向から戦い、全盛期になった一瞬で逆転勝利したしなあ？

今の状態のストライダー猊下なら、リュシオンでも一対一じゃ厳しいだろ。

……とはいえ、そのリュシオンを相手に九成は挑むわけだ。

あいつ、どう戦うんだろうなあ？

さて、作戦は一応決まった。

とはいえ、それに甘えてばかりでもいられない。

そういうわけで、俺は今トレーニング中だ。

……リユシオン・オクトーバー。教会が誇る神の子ディア・ドロローサに続く者。若手悪魔祓いにおいて、おそらく最強と言えるだろう傑物。

札は用意したが、まだ足りない。こちらにも相応の一手が必要になるのは間違いない。

だからこそ、だ。毎日のトレーニングは決して欠かしてはならない。

結局、日々の積み重ねはいざという時に物を言う。基礎というのはしっかりとしておくことで窮地においても中々崩れなくなる。突破力とは違う、骨格の強さというべきか。

俺はかつてのリユシオンの動きを想定したトレーニングを行い、その上で少しずつレベルを上げていく。

日進月歩を二十四時間三百六十五日常に続けているあいつは、間違いない難敵だ。

更にア Nil とルーシアも油断できない。むしろずば抜けた札を持たずに俺達の戦いについてこれた、あの二人は間違いなく優秀なんだ。

そして、いっぱいいっぱいになっているとはいえ若手として優れている期待のホープ達が何人もいる。そこも苦戦必須の部分といえるだろう。

だから、こそ。

「加減はしないし容赦もしない。全力でいかせてもらうぜ、リユシオン・オクトーバー」

俺はそれを成すべく、更に動きを先鋭化させていく。

待っている、リユシオン・オクトーバー。

カズヒも見ているんな。無様な真似はさらさない……っ！

戦愛白熱編 第三十六話 カズヒの故郷

イツセーSide

俺達は今、外国に來ている。

元ソ連圏の小国、シルヴァスタン共和国。

なんでも独立成立の過程にはソ連時代の大手異能勢力と現地の異能勢力の軋轢もあつたとかで、今現在においても異能勢力との交渉を巧みに生かした独立維持が行われているとか。

今回は魔法使いの隠れ里にコロシウムを設立し、異形関係での外貨と後ろ盾の獲得を目論んだそうだ。色々困った隣国がいるからこそその対策だろうな。

大欲情教団によつて大打撃を受けて対策必須なうちに、国防面での強化を図つたつてところなんだろう。抜け目がない国家だなあ。この試合会場がある異形の区画、首都が目と鼻の先にあるらしいし。で、だ。

「九成達はもう、控室で待機だっけ？」

「みたいね。まあ、カズ君のことだから準備は万端じゃないかしら？」

と、リヴァさんが俺の質問に軽く答える。

ちなみにビールと揚げパンを既に購入している。抜け目がねえ。

まあ、俺達はいうなれば買い出した。

試合が始まる前に、色々買って置いて食べたりしながら観戦する。つまりそんな感じ。くじ引きでペアが決まりました。

……リアス達の壮絶な視線を笑顔一つでスルーする。リヴァさんって、本当に強者だなあ。

「アニル君やルーシアちゃんも、その辺りはそつなくこなしてるでしょうね。結局、あと三試合ぐらいで中途退場だったっけ？」

「そのようですね。思った以上にメンバーの多くが精神的に消耗していて、これ以上は健康に悪いと判断されたようです」

と、食材関係なので付いてきたクックスが、その辺りも把握していたのかそう教えてくれた。

「つていうか、クックスが一番詳しいんだ。ちよつとびつくり。」

そんな視線を俺とリヴァさんが向けてたのに気づいたのか、クックスは少し苦笑していた。

「気晴らしに美味しい食事を出したいとのことで、相談を受けてまして」

「あゝ」

納得。すつごい納得。

クックスつて料理担当のヒューマギアだから、作るのも教えるのも上手だし。地味に兵藤邸の料理長だもん。

アニルはいいとだからシェフにツテもあるだろうけど、それを差し置いて相談されるのも納得だよ。

で、アニル達も試合の準備は万端なんだろうな。

むしろ中途退場が決定しているからこそ、思いつきり全力を出せる所もある。気負う部分が減ると、逆に勢いが出るってこともあるだろうしな。

こりや九成も大変だ。相手にはあのリュシオンさんもいるからなあ。

なんてことを思っていると、ちらほらと耳の部分が特徴的な機械の人とすれ違った。

「……この辺り、ヒューマギアも多いのね」

リヴァさんがそう言うけど、確かにヒューマギアのモジュールだな。

「少しずつですが、ヒューマギアの流通も再開しているようですね」「そうなのかな？ 駒王町ではあまり見ないけど」

クックスに言われても、俺は思い返して特にヒューマギアを見かけた記憶がない。

なんとか思い出そうと首を捻っていると、クックスは苦笑してい

た。

「まだ部分的ではありませんから。近年では異形関係者での販売が広まっているそうですね」

「なるほどねえ。基本性能が違ううえ、多種族に慣れてるから抵抗が薄いつてことね。……アースガルズも提案してみるべきかしらね」

と、クックスの捕捉にリヴァさんはガチなトーンになっている。

でも納得だな。シンギュラリティに到達したヒューマギアの扱いかたが抵抗の元らしいし、元から自分達の種族でない自我を持つ人達に慣れてる異形の方が抵抗は薄いのか。

こんな形でヒューマギアの普及が進むとか、作ってたザイアの連中も思っていないだろうなあ。もともと異形を嫌ってる連中が多いはずだし、もしかしてサウザンドフォース的には苛立ち案件かもしれないな。

ま、それはともかくだ。

「そーいやカズヒはどうしたんだろうな？　なんか別行動らしいけど」

九成の試合だし、一緒に観戦するかと思ったら「ゴメン」の一言でそそくさと移動したし。

あいつのことだし、九成をないがしろにするとは思えないんだけど。つていうか、外国に単独行動する理由つてあるのか？

「ああ。イツセーは知らなかったわね」

リヴァさんはなんかしたり顔だ。

なんだなんだと思っていると、リヴァさんはちよつと苦笑していた。

「カズヒ、ここが出身国よ？」

……

「え、そうなの!？」

マジか！　ここがカズヒの生まれ故郷!？」

そういえば、旧ソ連圏で独立した国家のストリートチルドレンって話だったつけ。ここかあ。

「現首都アルドローラが生まれ故郷らしいし、色々と思うところがある

んでしょよね。ま、あとで合流した後色々お話ししましょうか」「なるほどなあ。観光旅行ができればいいけど」

でもこの国、観光資源はあんまりないらしいなあ。

ま、まずは九成達の試合だよな。

楽しみにしてるぜ、皆！

カズヒSide

この辺りも、だいぶ様変わりしているわね。

かなり近代化が進んでいるというか、ほぼ別物。

日本に比べると警察の重武装化が進んでいるというか、パトカー代わりに軽装甲車両が運用されているのはあれだけ。元々政情不安定地帯だったからそこは仕方ないわね。

むしろ良くやっている方でしょう。当時圧政を強いられていたことを逆手に取り、生活の改善をあえて一気に進めず小さく段階を踏むことで、余剰資産を確保。少しずつ確実に良くすることで、民衆の支持を確実に維持し続けた。

そしてそれで空いたリソースを地盤に財源や人材確保にいそしみ、それが成功したことで国家として確立するレベルの水準は確保できた。

積極的にストリートチルドレンを保護し、基礎教育を受けさせることで国民全体の識字率や就職における幅を確保することに成功。学力のある子供の海外留学や技能研修生に手厚い援助を行い、国外流出されること無く技術を国に持ち帰ることに成功。あと、星辰奏者技術を早期に確保したうえ、研究面での転用に力を注いだことも大き

かったでしょうね。

最近では地下資源そのものではなく、加工品の輸出も進んでいる。食料自給率も留学から帰ってきた農業学校生により上がり始めており、最近では源泉の確保に伴う観光産業も行っているとか。

どこの国も、今は他国に軍事的なちよつかいをかける余裕もない大欲情教団が原因し、この調子で発展してもらいたいものだわ。

ま、それはそれとして……。

「お姉さま。様変わりして困惑しましたが、そろそろ付くはずです」

カズホが地図を見ながら確認してくれたけど、私達は目的の場所に
つけそうだわ。

あんまり時間もかけれないけど、とりあえず顔を出しておきたいし
ね。あと、今日を貸し切りにできないかどうかもうかも考えないと。

試合終了後に打ち上げになるか反省会になるかはともかく、折角だ
から美味しい物を食べてもらわないと。味に関しては太鼓判を押せ
るから――

「……あら？」

――あ、これまじいかも

祐斗Side

「イツセー君達はもうすぐ着くそうです。ただ、カズヒが「トラブル発
生。いつ着くか分からなくなった」とのことですね」

「そうなの？ カズヒのことだし、地元のギャングやマフィアと一戦
交えているのかしら？」

いだろう。

……さて、なら彼女の分も試合を見届けるとするかな？

う立ち向かうのか。

「ほおおおおおっ！ 美味しい！ このパン美味しい！」

「あ、本当！ もう一個♪」

「二人はもうちよつと見てあげようね!？」

ヤバイ、買ってきたパンの美味さに亜香里とアルティ―ネが夢中になってる!？」

和地Side

さて、今回のルールは一体どうなるか、だな。

ある程度のパターンは組めたが、ルールが豊富すぎてそれ以上は無理だ。多少アバウトになるので、都合のいいパターンになってほしいんだが。

そんな気持ちを持ちながら、俺はルールが決定する瞬間を見守った。

そして設定されたのは――

『おおつとおー。今回のルールは試験採用された新規ルール、フォートレス・ハンティングとなりました!？」

――聞いたことのない新ルールだった。

会場でも騒めきが出るが、それが静まるのを待ってから実況が話を再開する。

同時に映し出される映像には、何やらデカい機械が映っていた。

『フロンズ・フィ―ニクス様提案のこのルール、彼ら大王派の革新衆が提供してくださったこのギガンティック・フォートレス G F をターゲットとする奪い合いとなっておりませす!』

フロンズの奴、色々手広くやっているみたいだな、おい。

正直ちよつと呆れたくなるというか、予算的に問題がないだろうか、それ？

内心で首を傾げながら、俺は気を取り直して説明に耳を傾ける。

『もちろん、相手チームの王を打倒することでも勝利となります。当然ですが妨害も自由自在であり、そういう意味では囚われすぎないことも重要な要素となりえるでしょう！』

なるほど。その辺りの比重をどう配分するか、それも大事となるわけだな。

となると、俺達がとるべき選択は――

祐斗Side

「ほら、亜香里。パンくずが頬についてるわよ？」

「あ、ごめん有加利ちゃん。……あと、食べ過ぎたかも……」

「美味しかったー！ 帰りにもお土産に買って欲しいかも」

有加利さんがそれとなく宥めて、二人とも戻ってきてくれたようだ。

とはいえ、今回は特殊ルールとなるだろうね。

「問題は、相手がGFという事だわ」

リアス姉さんも既に考え込んでおり、実際困ったルールといえるだろう。

このルール、最大のポイントは倒す対象がGFだという事だ。

GF。それは大王派が開発した、対龍神を将来的な目標とする大型兵器群の総称だ。

数体から百体以上。それらの大型兵器の軍勢で、龍神クラスを圧殺

する。その設計の元開発された大型兵器群。

必然としてコストも馬鹿にならないはずだが、こんな運用をフロ
ズが行うとは思えなかった。

それを分かっているからだろう。比較的経験の長いオカ研のメン
バー達は、程度はともかく困惑している。

ただ、リアス姉さんは何かに気づいたようだ。

「そういう事ね。やってくれるじゃない、フロonz」

「どういふことだい、リアス？」

イツセー君が首を傾げると、リアス姉さんは苦笑いを浮かべてい
る。

「要は一種のテストよ。相応の手練れが集うアザゼル杯で実働データ
をとり、更なる後継機の礎にするってこと」

「……なるほど、それなら少しは納得します」

ロスヴァイセさんがそれを聞いて、小さく頷いていた。

「GFはまだまだ発展途上であり、それだけで龍神クラスを倒せるほ
どではない。だからこそ、相応の力量を持つ者達とのデータを取
りたいという事ですか」

「かなりの大金が飛ぶでしょうが、それだけの価値があると判断した
のでしょね。……大胆な手を打ちますわね」

朱乃さんも呆れ気味だけど、確かに有効な一手ではある。

……とはいえ、あれだけの大型兵器となると相当の資金が飛ぶだろ
う。如何に異形の技術なら修繕費などは比較的軽いと言え、呆れたく
なる一手とは言える。

「その、よく分からないけど……何を考えているのかしら？」

と、僕らの話を聞いていた有加利さんがそう尋ねる。

「なんていうか、それを聞くと少し怖い気がするわ。少なくとも、この
大会を盛り上げる為じゃ、無いってことでしょ？」

「……私達が聞きたいぐらいです」

小猫ちゃんがそう返すけど、それが本音だろう。

フロonz・フィーニクス。大王派革新衆と呼ばれ始め、今の大王派
を掌握した傑物。

あの男は、
一体何を
見て行動
している
……？

戦愛白熱編 第三十八話 激突、GF撃墜戦(その1)

イツセーSide

なんつーか、ちよつと雰囲気が悪くなったな。

フロンズの奴、政敵であつて味方とは言いづらいところがあるから当然か。本質的に相容れないし。

ま、俺はその辺が馬鹿だから考えすぎてもあれか。というより、今はそこじゃないだろうし。

よつし、ちよつと気分変えるか！

「その辺は、D×D全体やアジユカ様もいる時に考えようぜ！　まずは九成達の試合を応援しないとさ！」

「そうだな。暗い顔で応援しては、九成もアニルもルーシアも喜ばない」

ゼノヴィアが真つ先に反応してくれて、いい感じで応えてくれる。

「ま、それはそうよね？　カズ君達の試合をしっかりと届けないと」

リヴァさんもそう言つて、缶ビールの蓋を開けるとグイっと一気飲み……一気飲み!?

「ぶっは〜っ！　じゃ、思う存分楽しみなから観戦しましよ〜っ！

色々買つてるから、好きな感じで楽しんで……ねっ♪」

ウインクまでするリヴァさんに引つ張られるように、場の雰囲気も明るくなっていく。

こういう時、すつごい助かるなあ。リヴァさんマジですげえ。

……そのリヴァさんを射止めた九成、恐ろしい奴っ！

「……人のことは言えませんよ、イツセー先輩」

小猫様!?!　人の心を読むのが本当に上手ですよ!?!

試合開始と同時に、俺達は移動を開始する。

ある程度グループを分けて散開し、距離を互いに保った状態で、相手のGFを捜索する。

派手に動いているので位置は分かっているが、それは相手チームも同じこと。このルール、基本的に短期決戦^{ブリッツ}を主眼に置いているな。

となるとすぐに乱戦となる。それを考慮しつつ、ある程度の即応性と一網打尽にならない安全性を考慮した形となる。

ちなみに俺が率いているのはベルナとヴィーナ。これはキャスリングを配慮したメンバー構成にしていることと、王の俺に対する安全を回復役であるヴィーナを配置して対応したといった形になる。

さて、相手はどう出るかと考えたとき。いきなり来た。

「右斜め上に流す、回避！」

声を上げると同時、俺は素早く障壁を多重展開。同時に左下に落ちるように回避行動をとる。

直後、正面の景色を吹き飛ばす勢いで砲撃が放たれた。

「……きやあああつ!？」

あまりの威力にヴィーナが悲鳴を上げるが、しっかり回避態勢は取っていたので無事だ。流石だな。

だがやってくれる。もう少し感づくのが遅かったら、今のでこつちも大打撃を受けていただろう。

実際、逸らした方向にある山の上半分がえぐられている。単純火力ならイツセーの真女王に喧嘩を売れるな。

俺がそう感心していると、今度は若人の挑戦チームを狙ったのか別方向に砲撃の余波が飛んでいる。

『若人の挑戦チーム、兵士二名リタイア』

向こうは捌ききれなかったらしい。そういう意味では幸先がいいか。

「勘弁してくれよあの旦那は！ とんでもないものを量産しようとしてるなあ、おい！」

ベルナがフロンズに悪態をつくけど、そこに関しては本当に同意見だ。

「だな。どこから金と資材を集めたんだか」

大型兵器を作るのは簡単なことじゃない。どんなものでも物体なら金と資材と時間がかかる。異能使いたい放題なら時間はだいぶましだろうが、金と資材は一瞬で湧いて出てくるわけでもないだろう。それを集めるのにまず時間がかかる。

戦闘機ですら新品なら百億円を超える場合がざらにあると聞いている。製造工程を異能で省略できるならそのあたりは安く済ませられるだろうが、資材を用意する関係上、あのサイズなら数百億円はかかるだろう。維持にだって金がかかるはずだ。レーティングゲームで壊していいような安物なわけではない。

その辺りの絡繰りも気になるな。あの野郎に限って捕まるような不正は可能な限り避けてると思うけどな。ほら、表立った活動で不正をするタイプじゃ断じてないし。

とはいえ、金も資材もありすぎだろ大王派。絶対何かしらの裏があるだろ、あれ。

「……よ、余裕だね。あんな砲撃が飛んできたのに」

ヴェーナがちよつと呆れてるけど、ねえ？

「あれ以上の火力持ちが、俺達の近くに何人いると思ってるんだ？」

イツセーとか、リアス先輩とか、ゼノヴィアとか。あとリヴァ先生もやろうと思えば一発ぐらい撃てそうだしな。

「クリムゾン・ブラスターぐらいなら模擬戦でも使う時あるからなあ？」

ベルナもちよつと遠い目をして言うと、ヴェーナは軽く引いている。

いや、模擬戦でも大技を撃っておいた方がいいからな。使い慣れるのはいいことだし、大火力攻撃に慣れておくと敵が撃つてきても対応しやすいし。

……まあ、イツセーのクリムゾン・ブラスターとかを比較対象にできるといのがシヤレにならないんだが。

さて、それは置いておいてだ。

「そろそろ接敵するぞ、気合入れろ！」

俺はそう叫びつつ、障壁を展開。

そこに攻撃が当たっていくが、やはり若人の挑戦チームが動いていないか。

相手は俺達より格下が多いだろうが、それでもアザゼル杯で更に鍛えられている。そこに出し惜しみなしで出し切る姿勢がある以上、脅威になりえることは間違いない。

油断は禁物。気合を入れていくとするか。

そう思った瞬間、上空から何かが飛んでくる。

あ、これルーシアだ。

祐斗Side

『さあ、両チーム接敵！ GFを狙いつつ互いが互いを妨害する戦いが始まりましたー！』

実況の方が声を張り上げ、そしてフィールドで戦闘が激しく展開される。

双方ともに戦いの練度は高く、熾烈な争いが繰り広げられる。

若人の挑戦チームはいつも通り、リュシオンさんはすぐに介入しな

い大勢だ。

この段階でどこまで若人の挑戦チームが消耗しないか。それが戦いのカギを握るだろう。

もつとも、リュシオン・オクトーバーは単独で戦局をひっくり返しかねない。彼はある意味で光を極めた精神性とは異なる極限。あの場においては間違いなく最強戦力といえる。

九成君のグループは、一番数が多い相手と接敵している上、更に別のグループが合流している。

ただし、戦局は優勢……というより、完全にしのげている。

「ルーシアの支援砲撃、完全にしのいでましたね」

「だよなあ。全部障壁を間に合わせて流すとか、相も変わらず九成は防衛に長けすぎだろ」

小猫ちゃんとイツセー君が感心するやら呆れるやらだけど、レイヴェルさんは警戒の色が濃い。

「いえ、あれは味方が合流する隙を作る為の陽動ですわね。あえて目立つ撃ち方をして気を引いてますわ」

なるほど。九成君達を最も警戒し、それに見合った対応をしているという事か。その辺りはルーシアさんらしいね。

そしてそのルーシアさんは、アニル君と一緒にそれぞれ一班を組織して、九成君達の別動隊に迫っている。

どうやら足止めを主体として動いているようだ。まあ、最上級悪魔も見えた行船三美と武山黒狼がいる以上、手練れが出るほかないだろう。

そして、GFの方には若人の挑戦チームの女王が動いている。

確かカメラミラ側の吸血鬼だったはずだ。上級吸血鬼でありハイデライトウオーカー。確かエルトーナ・バルトリだったか。

GFの猛攻をしのぎながら、打たれ強いメンバーで散発的に攻撃を当てている。

現状は様子見なんだろう。問題は、現在は膠着状態に近いところがあるという点だ。

「さて、リュシオン・オクトーバーをどうやって投入するかが肝でしょ

うね」

「そうですね。流石に九成君レベルとなると、リュシオン・オクトーバーが必要ですね」

リアス姉さんと朱乃さんが分析するが、確かにそうだろう。

G Fの性能は間違いなく高い。真つ向から撃破するとなれば、両チームともに九成君やリュシオンさんが必須となるだろう。

だが、どのタイミングで出すのだろうか。

『運がいいのか悪いのか。全て撃ち落とします！』

『特筆無しにあのメンバーと肩を並べただけはあるっ！』

ルーシアさんは行船さんの準神滅具のオールレンジ攻撃を、全て砲撃で弾き飛ばして膠着状態に持ち込んでいる。

『やるじゃねえですかい！ つーか、絡繰りあるっすね？』

『まあ、そうですね。だからこそ最上級悪魔候補でしたので』

ア Nil君はヘキサカリーバーをもってして切りかかるが、武山黒狼はそれを素手でいなしている。

聖剣を悪魔が素手でいなすとは、当然絡繰りがあると考えべきだ。

双方ともに膠着状態。さて、どちらもどう出るか。

そう思ったとき、動きがあつた。

『……なら、そろそろ出番かな？』

その言葉と共に、フィールドに広がる大きな力。

素粒子そのものが展開され、G Fが余波で一瞬揺らぐ。

「ここに来るのか」

「意外と早いわね」

ゼノヴィアと成田さんが気配を鋭くさせる中、光となって突貫した存在は、G Fの前に立ち塞がる。

「……いい機会だし、目に焼き付けると良いですよ」

シャルロットは、そうアルティナーや、亜香里さんに有加利さんを促した。

「あの男こそ、教会が誇る最強戦力の一角。神の子に続く者ことリュシオン・オクトーバーです」

降臨する、あの場における最大戦力。
リュシオン・オクトーバーが、ここに君臨した。

戦愛白熱編 第三十九話 激突、GF撃墜戦（その2）

Other side

その光景を、フロンズ・フィーニクスはVIP席で観戦していた。そのVIP席は彼のものではなく、九条・幸香・ディアドコイのものだ。

「さて、そろそろ実証実験に適切になってきたようじゃのお？」

「ああ。現段階では神滅具使い相手でもそれなりの足止めはできるレベル。だが、それぞれの神滅具が相手となると簡単にデータは取れないからな」

幸香と共に、フロンズはそう検証の姿勢を隠さない。

「……まあ、エルゴン・クラブ単体で至った神滅具使いを倒せるなんて考えないけどね。流石に毎度毎度やられているのを見るともうちよつと頑張つてほしい気はするよ」

そう返すのは、フロンズに連れられた妙齢の女性。

彼が眷属として抱える腹心。名をリザーネという。

「美しいものが汚れ朽ち果てるのは好きじゃない。必要とはいえ、毎度毎度だと心が痛むものさ」

そう役者ぶつた身振り手振りで語るリザーネに対し、幸香は首を傾げて見せた。

「……美しい？ むしろ無骨に見えるがのお？」

幸香の言い分も当然だろう。

今回投入された ギガンティック・フォートレス G F エルゴン・クラブと呼ばれたそれは

端的に言つてごつい。

はつきり言つて芸術品とは見えない機体だが、リザーネは首を横に振ると自慢げな表情すら見せている。

「美しいさ。芸術的な美と機能性の美は異なるものだ。あれはある意味で機能美の体現者といえるからね」

「まあ、その辺りは置いておこう。問題はリュシオン・オクトーバーだ」

フロンズはとりなしながら、その上で鋭い表情を浮かべている。

映像越しのリュシオン・オクトーバーは、エルゴン・クラブを相手に終始優勢に立ち回っている。

胴体の左右から放たれる砲撃をいなし、両腕のクローによる攻撃を弾き飛ばす。エルゴン・クラブはさらに全方位からのオールレンジ攻撃を仕掛けるが、これすら足止めにはなっていない。

エルゴン・クラブは、対龍神級用兵器であるGFの一種である。

三胴型の機体であり、左右の胴体は丸ごと疑似反物質粒子であるアザトースによる砲撃ユニット、更に挟むようにして大型のクローが装着されている。

もとより大型異形用で、人間サイズとのタイマンは用法からずれる。だが、下手な最上級悪魔なら押し潰せる性能がある。

更にそれらの対処の為、最大36機のスケイルビットを展開可能。一機一機がデビルレイダー三人分の戦力となり、その援護で有象無象を捌きつつ、大火力で圧殺ができる。

だが、それをもつてしてもリュシオンは慎重に立ち回っている。自身が王ゆえに慎重さが必須。だからこそもっているだけというほかない。

「……やはり複数機による連携が必須か。コンセプト上仕方ないとはいえ、神の子に続く者相手ではこれが限界のようだね」

「仕方ないねえ。ま、そこから先は要研究ということですか？」

互いに苦笑を浮かべながら、フロンズとリザーネはそう結論付ける。

だが、同時にそれで終わらない。

「さて、かの涙換救済はどう出るかな？」

「同感だ。彼は中々インスピレーションを刺激するから、楽しみだよ！」

「ふふ、まあそうじゃのお」

今度は幸香も加わりながら、彼らは試合を見守っていく。未来を見据え、勝利を望む。

大王派革新衆は、今この時も牙を研ぎ続けていた。

和地 Side

まずいな。リュシオンがGFと接触したか。撃破されるのは時間の問題。これは気合を入れて対応を考えるべきだ。

厄介なのは、メンバー全員がリュシオンやGFに近づけていないという事。その辺りも考慮した立ち回りをされていたようだな。

ようは、キヤスリングをされても問題ない位置取りの確保。どこにキヤスリングされようと、問題点が変わらないのなら対応できる。そういう戦術だろう。

……なるほど。なら、シンプルにいこう。

「総員、プランBに移行！」

俺は声を張り上げ、そして素早くショットライザーを装着。パラデインドツグを使用する。

リュシオンをどうにか抑え込む。これは俺達にとって必要最低条件といえる勝利の方程式だ。

単純に奴が強すぎる。そして抑え込めるのは俺ぐらいであり、だからこそ、俺が出張の必要があるという単純すぎる要素だ。

ゆえに、こちらも遠慮はしない。

「ベルナ、ヴィーナ！ 黒狼達と合流してプランBどりに！ 俺はリュシオンを抑える！」

「OKだ！ 行つてこい！」

「が、頑張つてね！」

ベルナとヴィーナの声を受け、俺は即座に対応する。

……さて、遠慮なくやらかすとしますか！

イツセーSide

ふと気づいた時、リュシオンさんの近くに九成が迫っていた。

え、速い!?

俺達すら気づくのが遅れる、超高速移動。リュシオンさんすらまだ気づいてない。

「——ッ!？」

「——チッ！」

ぎりぎりでリュシオンさんが気づき、九成の奇襲は防がれる。

ただ、九成も速度に振り回されていたところがあるな。だからこそ、気づくのに遅れながらリュシオンは捌けた。

裏を返すと、あの九成が速度に振り回されたわけで。どんな方法で移動したんだよ、あいつは!?

「パラディンドッグということは、禁手かしら？」

「……問題は、どの禁手を使ったのかという事ですわ」

リアスとレイヴェルが推察する中、九成は体勢を立て直すとリュシオンさんと真っ向勝負を繰り広げる。

流石に戦えているけど、リュシオンさんだつて歴戦の猛者で傑物中の傑物だ。九成の攻撃を的確に捌き、打撃と素粒子で反撃を加える。九成も障壁でしのいでいるけど、完全に九成が抑え込まれている状態だな。

……苦し紛れつてわけじゃないだろう。ただ、どうするのか。

そう、思つた瞬間だった。

『じゃあ、もう一つ行くぜ!』

—その瞬間、九成とリュシオンさんの姿が消える。

え、え……なに!?

「なんだなんだ?! 強制転移!?!」

思わず俺は声を上げるけど、実況が応えるように素っ頓狂な声を上げたのはその直後だ。

『こ、これはあ?! 映像を展開します!』

そう慌てた様子の実況が伝えると、そこに新たなる映像が映し出される。

……え、ちよ、これは一つ!?

O t h e r s i d e

その少し前、リュシオン・オクトーバーは間違いなく驚愕していた。傑出しすぎているその精神性ですぐに冷静さを取り戻しているし、動揺している時も十全の対応準備は取れている。だが、それでも驚愕に値する。

そこは、レーティングゲームのフィールドではない。

まるで青天の昼間のように、青く輝く星空。

幻想的とすら思える、銀に輝く雪原。

それが広大に広がる、寂しさのない誇らしきすら感じる世界。

そこに、九成和地はリュシオン・オクトーバーと向き合い構えていた。

リュシオンは、そのずば抜けた精神性ですぐに思考する。

そして、すぐに答えが出た。

「パプテマス・ブラッド鮮血の聖別洗札の禁手かい？」

「厳密には、残神との合わせ技だな」

そう返す九成和地は、星魔剣を創造すると素早く構える。

どこかもの悲しさを覚えてもおかしくない世界で、しかし寂しさは感じない。

それは、この風景がどこまでも前向きな思いに満ちた心象風景だからだろう。

そう、これこそが九成和地の固有結界。

鮮血の聖別洗札という、所有者を強化する神滅具。その禁手と残神により作り出される、タイタス・クロウ涙換救済の更なる真骨頂。

今ここに、壮絶な決戦の幕が上がる。

戦愛白熱編 第四十話 激突、GF撃墜戦（その3）

和地Side

結構前から考えていたことがある。

カズヒのように、俺も固有結界を使いたい。

好きな女とお揃いになりたいという、まあシンプルと言えばシンプルな考えだ。

だが困難だ。ほぼ不可能と言ってもいい。

固有結界はほぼ先天的異能といってもいい。似た様な結界を構築するだけなら可能だが、瞬間的に発動して世界を塗りつぶすとなると、才能の世界だ。

だから悩みに悩んで諦めようとはしていたが、状況が変わった。

パブテマス・ブラッド 鮮血の聖別洗礼。固有の異能を与え、所有者を進化させる神滅具。

これを応用すれば、疑似的に固有結界と同等の異能を発動することはできるのでは。俺はそれを思いついた。

更に残神という手段を俺は使えるということまで思い至り、割と数か月考え続けていた。

問題はただ一点。自力で至るのは困難に極大が付くレベルだという点。

だがそこで、俺は発想を転換した。

自力で至れないのなら、人工的に至ればいい。

神の子を見張る者的には、やはり天然の心の覚醒を尊びたいだろう。その方が可能性があると思う。

だが人工的な方法は、メソッドが確立されているがゆえにやり方さえ再現すれば至れる。そしてそれは、考えようによっては狙って禁手を選ぶ余地だってある。

ゆえに、これでもずっと考えてきた。

ウイルスが倒した褒美と成田さんを任せる為に押し付けたと言っていていい、神滅具の一角。

九成は無理やり移植されたからちよつと手古摺っているけど、神滅具だからかなりやばいよなあ。

で、それが何なんだ？

「いきなり固有結界なんてできんの？」

俺はちよつと分かんないで首を傾げるけど、リーネスも考えながら頷いていた。

「おそらくは、魔術回路の強化にリソースを振った禁手ねえ。残神も併用して使つてるとみていいわよお」
なるほど。

禁手を魔術回路に割り振った禁手にしたのか。それならまあ、出来るのか。

神滅具の禁手つてやつぱりすげえよなあ。九成もやるじゃん。そしてそんな九成は、リュシオンさん相手に激戦を繰り広げていた。

というより、九成のポテンシャルがなんか強化されてないか？
なんていうか、打撃力とか機動力とか防御力が数段上に跳ね上がっている。

更にリュシオンさんが素粒子砲撃を放つけど、九成は障壁でそれを防いでいる。

……結構デカイ威力な気がするけど、抜き打ちの二枚で捌いたぞ。

「あの固有結界、カズヒを参考にしているのかしら？」

リアスがそう言うと、リーネスも頷いている。

あと、なんか苦笑してるし

「ありえるわねえ。たぶんだけとお、あの禁手か残神は、カズヒとお揃いなりたいになりたいたい」
固有結界が使用したいが根幹でしょうしねえ」

『『『『『『『』』』』』』』

みんなで納得したよ。

「カズ君ったら、こういう所は素直に可愛いんだから」
「和っちって、こういうところ……その、凄いわよね」

ニツコリ笑顔のリヴァさんも、ちよつとむつつりしている成田さんも、顔が結構赤くなってる。

これが、モテる上にヤれる男の強みというのか……っ
思わず戦慄を覚える中、俺の視界の中でリュシオンさんと九成の戦いは更に激しくなっている。

『ならこれでいこうかっ！』

そう吠えるリュシオンさんは、九成が展開した障壁を断ち切って突貫する。

それを九成は星魔剣で受け流すけど、少し星魔剣が削れている。

素早く取り換えながら対応するけど、リュシオンさんは素粒子の放出をスラスターにしている。あれでは今の九成でも突破は難しいか。

というより、さっきのような大出力を發揮してないな。

「そーいや、固有結界は魔力消費が激しすぎるんだっけか？」

俺はふと思いついたことを呟いた。

燃費が滅茶苦茶悪いのが欠点だったよな。なんでも、結界の維持だけで魔力消費が尋常じゃないとか。

九成は魔力量が絶大だけど、固有結界の維持には限度があるってことなんだろうな。流石にそんなに無体なことはできないか。

カズヒの固有結界も、魔力量だつて大きくするけどそんなに全力戦闘はできないしな。

「固有結界。確かに強大な力だけど、限界はあるという事か」

ゼノヴィアも納得しているのか頷いているけど、なんか首を傾げている人もいる。

南空さんやリーネス、ロスヴァイセさんだな。

三人ともそういうのに詳しい側だけど、もしかして間違ってたのか？

俺が首を傾げた時、更に戦線は大きく動いていた。

あ、なんか凄いことになってる!?

九成君とリユシオンさんの戦いに気を取られていたけれど、他の戦いも大きく動いている。

最強戦力が隔離されたことで、双方のチームが戦術の変更を強いられている。そしてそういう状況において、即座に対応できるのはそれを想定しているチームだ。

結果として涙換の救済者チームは一時的に若人の挑戦チームの足止めを突破。GFを巡っての争奪戦に近い様相を示していた。

『なめんじゃねえってね！　こうなりや俺が切り捨てる！』

『させないよ！　君の足止めは必須だからね！』

ア Nil 君が援護を受けながらGFに切りかかろうとするけれど、割って入った枉法さんに妨害を受ける。

おそらく、火力的にGF撃破の可能性が最も高いのは、隔離された二人を除けばア Nil 君だ。

ヘキサカリバーの持ち主である彼は、単純攻撃力ならあのチームで三番手。更にヘキサカリバーの性質上、対応量は凄まじいと言っている。い。

だからこそ、当然だけど妨害を受ける。

枉法さんは星辰光の性質上、機動力において非常に優れている。だからこそ、その俊敏な機動性能でア Nil 君を足止めしている。

足止めしているけど、何かが妙だ。

振われる二刀流の刺突攻撃だが、当たると共にア Nil 君を大きく弾き飛ばしている。ヘキサカリバーで受けることはできているにも関わらずだ。

枉法さんは確かに腕は立つけれど、攻撃力は決して高い方ではな

い。あそこまでアニル君を弾き飛ばせるノックバックを生み出せるのだろうか？

……これは、他にも多数の隠し玉がありそうだね。妙な違和感もあるし。

『気を付けて、砲撃くるよ！』

『分かった、ヴィーナお姉ちゃん！』

そしてGFも両チームを狙い、火力の攻撃を逐一入れている。

両チームが警戒担当を用意するなどして対応しているが、当たれば一撃でリタイアするような攻撃が飛んでいる。

ザンブレイブ姉妹がそれに気づいて動いているが、これは厄介になりそうだな。

……個の質の平均なら涙換の救済者チームが上だ。だが数で若人の挑戦チームが上だし、連携で十分カバーができています。

どちらのチームも決定打を与えきれず、GFにも意識を割かないといけないので決定打を入れられていない。

この戦い、やはり長引きそうだね。

「……そういえば、なんでリスタートは使わないのですか？」

その時、ギヤスパ―君が首を傾げてそう言った。

そういえばそうだね。

仮面ライダーリスタート。九成君とカズヒが到達した、新たな仮面ライダー。

間違いなく強大な力を秘めており、二人の最強形態と言っても過言ではない。

それをいまだに使っていない。言われてみると、確かに違和感が大きいな。

開発者のリーネスにしても、少しは使って欲しいと思ってもおかしくないだろう。

そう思って振り返ってみれば――

「え？ 使えないわよお？」

――リーネスはそうきよとんと返していた。

え？

僕達が首を傾げていると、リーネスが逆に首を傾げ直す。

「どういうことですか、リーネスさん」

「いえ、だからリスタートバックルが使える状況じゃないわよお？」

レイヴェルさんにそう答えるリーネスに、南空さんがふと気づいてその肩に手を置いた。

「あの、リーネス。もしかして言っていないんじゃない？」

「……あく。そういうえば状況が状況だったから、説明が足りなかったわねえ」

南空さんの言葉で気づいたのか、リーネスはポンと手を打った。

「リスタートバックルはクリムゾンユニットと同じで、相互連携必須の追加ユニットなのよお」

「あく、そりや無理じゃん」

と、リーネスの説明でヒツギさんが納得の表情を浮かべていた。

「ゲームのフィールドが違うレベルで離れてたら、クリムゾンユニット使えないし。まして今、カズヒは全然別の場所にいるもんね」

ちよつと苦笑い気味で、ヒツギはクリムゾンユニットを取り出しながらそう言った。

なるほど。相互に同期させることで、初めて機能するユニットだったのか。それは使えない。

あのユニット、そんな弱点があったとは。

「……また不便な制限だね」

ゼノヴィアは少し同情の表情を浮かべているけど、リアス姉さんやレイヴェルさん、リヴァさんは違った表情だった。

「なるほど、コンセプトがそもそも今回の状況に合致してないのね」

「根本的に対ミザリ。カズヒさんがミザリと決着をつける為の切り札であり、攻撃特化の彼女に防御に長ける和地さんを組ませるの戦闘が基本だと」

「まさかアザゼル杯で、二人揃って別のチームの王になるなんて前提を立ててるわけがないわねえ」

なるほど確かに。

九成君とカズヒは、ポテンシャルが上手くかみ合っているからね。

安定性と防御性能の九成君。爆発力と殲滅性能のカズヒ。二人は方向性が正反対ながらも、相思相愛の関係であり、連携させる時のかみ合いが凄まじい。

そのタツグで、カズヒにとって最大レベルの目的ともいえるミザリ打倒を踏まえた決戦兵装を用意する。それが仮面ライダーリスタートの本質か。

つまり、アザゼル杯でリスタートは使えない。

連携で使用するのなら、アザゼル杯で使われることはまずないだろう。これはちよつと残念かな？

そう思った時、更に戦場は大きく動く。

イツセーSide

気づいた時、九成は大きく弾き飛ばされていた。

星魔剣は断ち切られ、仮面ライダーの装甲も浅くだが切り裂かれている。

それを成したのは、リュシオンさんが持つ二振りの剣。

二人は揃って着地して睨み合うけど、状況が大きく動いているのは間違いない。

つていうか、ちよつと待て。

あれは、あの剣は……っ!?

『な、な、なんとおとおおおっ!?! あれは、デユランダルだあああああああああっ!?!』

なんでデユランダルが、二本も!?!

戦愛白熱編 第四十一話 激突、GF撃墜戦（その4）

祐斗Side

振るわれる斬撃が、九成君の障壁と魔剣を切り裂いていく。

振られるその猛攻をしのぐ九成君は、しかし防戦一方になっているのが実情だ。

当然だろう。素粒子による圧倒的な砲撃。そこにデュランダルという圧倒的暴力が追加されているのだ。

デュランダルの性能は、間違いなく真に迫る。当人の気質と素質もあってゼノヴィアやストラード猊下ほどの切れ味を發揮していないが、それでも圧倒的な攻撃力だ。並みの最上級悪魔なら秒で撃破されているだろう。

そんな攻撃を前に、凌いでいる九成君が凄い。圧倒的な防戦能力は、あの猛攻を前にしても凌ぐことができている。

だが、それでも状況が不利になっている。

『……やってくれますね。ありえそうな禁手なのがまた厄介ですよ』
『まあね。こちらにも新技の一つ二つは用意するさ』

苦笑いを浮かべる九成君に、リユシオンさんも微笑で応える。

『オルランドウ・デュランダル聖剣の超錬成。見ての通り、デュランダルを聖剣因子ごと疑似的に作り出す禁手でね』

そう語るリユシオンさんは、デュランダル二刀流という、ある意味で悪夢を実現している。

デュランダルは伝説の聖剣であり、攻撃力に限定すれば魔帝剣グラムや聖王剣コールブランドという、頂点に位置する伝説の剣と並ぶ。反面、両者と異なり更に一手の特殊性が無いため、聖王剣に最強の聖剣という称号は譲っている。

裏を返すと、純粋な剣としての性能なら最強と同等という事だ。十

分以上に恐るべき力だろう。

そんな剣戟を、九成君は何とか捌いている。

これは九成君の対応手段である障壁と星魔剣が、無尽蔵に作り直せる点も大きい。

あの神の子に続く者相手に、真つ向から防衛戦を成立させる。これがどれだけの偉業かなんて、このアザゼル杯を見ている者ならすぐわかる。

神クラスすら打倒し、常に成長し続ける傑物。それに防戦に徹しているからとはいえないまだ通用している九成和地も、タイタス・シクロウ涙換救済の面目躍如といったところだろう。

いや、エルダー・ゴッド旧済銀神なんていう大仰な異名が追加されている以上、これぐらいできなければ話にならないといったところか。

とはいえ、このままだとジリ貧か。

そして固有結界外の戦闘も大きく動いている。

『……とつたあつー！』

『……くうつー！』

ア Nil 君の渾身の一撃が、枉法さんの星魔剣を断ち切った。

これで趨勢が確実に傾くだろう。このままいけば、九成君たちの決着がつく前に終わる可能性もある。

それを、九成君も悟ったのだろう。

彼は一呼吸を入れると、禁手を切り替える。

カリブリス・シルバレット制約成す勝利の銀剣。九成君の手札における、最大火力といえる切り札だ。

九成君でも連発困難な魔力消耗と引き換えに、絶大極まりない魔力斬撃を放つ対城宝具クラスの魔剣を創造する。絶大な魔力量を誇る九成君だからこそその禁手。

リユシオンさんもそれを理解し、迎撃の体勢に切り替える。

互いが互いに向き合い、そして呼吸を整えー

その瞬間、戦闘の趨勢がひっくり返った。

和地Side

この瞬間を、待っていた！

俺はためらうことなく固有結界を解除。それと同時に、念話で確認済みの対応をとる。

「キャスリングー！」

その瞬間、俺の視界に映るのは若人の挑戦チームの姿。

それを理解したうえで、俺は躊躇することなく振り返る。もちろん背中は従士にカバーさせたうえでだが。

そしてその方向には、しっかりと見えるGFの姿が。

判断は一瞬。躊躇することなくぶつ放す。

「制約成す勝利の銀剣おおおおおっ!!」

放たれた魔力斬撃は、一瞬でGFの片腕を断ち切った。

これがプランB。つまるところ「俺を囷にした俺を本命にする作戦」だ。

囷と本命を王に同時進行させる頭のおかしい作戦だが、あらゆる意味で俺のポテンシャルを前提にした作戦といえる。

まず、自分で言うのもなんだが防御性能が高いこと。事前に準備をしまくった上、隠し玉も複数切った足止めだ。かのリュシオン・オクトーバーであろうと、数十分はしのげると判断された。

次に攻撃手段だ。そもそも根本的な問題として、俺たちのチームで最もGFを打倒できるのは俺の制約成す勝利の銀剣。いくつかの伏

せ札もあるにはあるが、圧倒的にこれが一番効果的だ。

そして三つ目が、隠し玉である固有結界そのもの。固有結界によりリュシオンを俺事完全に隔離できるのは大きい。更に固有結界解除に關しても、ある程度は融通を利かせる余地がある。

つまり作戦はこうだ。

プランBに移行し次第、俺は強引にでもリュシオンに接敵し固有結界で隔離。

その間に位置取りを変更し、キャスリングして振り返ればGFが狙える位置取りを誰かが確保。その後、インガ姉ちゃんが星魔劍を弾かれるなり破壊されるなりを演じることで俺に合図を送る。

それに合わせて固有結界を解除してキャスリング。従士を盾にしつつ俺が制約成す勝利の銀劍で一氣に仕掛けに行く。

見事にはまり、俺はこうして一撃を当てること成功。ここまでくれば一氣に仕掛ける。

だからこそ、一氣に仕掛ける！

「速攻で、畳みかける!!」

俺はそう吠え、そして一氣にGFに接近する。

従士は後ろの連中の足止めに残しつつ、一瞬で足止めの攻撃を回避し、攻撃端末を引き離した。

そして一呼吸を入れ――

「もう一発!」

――制約成す勝利の銀劍、二発目。

イツセーSide

「二発目えっ!?!」

思わず、俺は思いつきり素っ頓狂な声を上げた。

え、二発目? もう二発目!?

九成の魔力量でも、それはちよつと難しいんじゃないか!?

だって、固有結界をさつきまで使ってた後だぞ!?! そんな状態で更にもう一発とか、間違いなくガス欠になってるだろ!?!

「チャージ速度が速すぎるって! あいつ、この試合で死ぬ気!?!」

「どういうこと? 魔術回路はその性質上、そんな簡単に供給量を増幅できるわけじゃなかったはずよ?」

南空さんもリアスも動揺している。っていうか、俺達だって動揺している。

ただ、動揺してない人も何人かいた。

「まさか……そういうことお?」

特にリーネスは、別の意味の動揺って感じがしている。

「な、何か分かったのリーネス!?! 田知……和地は死なない!?!」

気が気でない様子で、オトメさんがリーネスの方に振り向いた。

そりやお母さんだしな。息子が死にそうになってたらそうなるだろ。

顔もちよつと青いし。無謀なことをしてる風に見えるから、そりや血の気も引くって。

「だ、大丈夫なの!?! 武山さんなら無茶はさせないと思うけど……大丈夫!?!」

「はいはい落ち着いてー。たぶん大丈夫だからね、マママ?」

と、慌てているオトメさんをリヴァさんが宥めている。

さらりとママ扱いしているけど、こんな調子だからちよつと気が抜けるのがいいところだよなあ。

「そうですね。流石は九成君というか、そう来たかというか……」

ロスヴァイセさんの方は呆れ気味だ。まあこの辺りは性格の違い

が出るよなあ。

でもロスヴァイセさんが呆れるとなると、多分だけどころかなり滅茶苦茶なことしてるんだろなあ。

で、答えは？

そんな視線をリーネスに向けてみると、リーネスは苦笑を浮かべた。

「簡単に言うと、固有結界は禁手じゃなくて残神の方ってことでしようねえ」

「どういうことですか？」

アーシアが首を傾げると、リーネスはちよつと肩をすくめる。

「推測だけれどお、和地が至った聖血の禁手は「魔術回路中心の大幅強化」でしようねえ。戦闘中に攻防速が時折強化されていたあたり、魔力生成と魔力放出に特化したと思われるわあ」

まりよくほうしゅつ？

俺達が首を傾げていると、リーネスは更に小さく頷いた。

「要は魔力のジェット噴射。瞬間的に魔力で能力を増強するといったところねえ」

なるほど、瞬間的にブーストをかけているのか。

で、リーネスはそこで更に指を一本立てる。

「そして、その増強された桁違いの魔力量なら固有結界にも対応できる。だから残神で固有結界を作ったのよお」

「固有結界は確かに強力ですが、燃費の問題もあって粗もあります。だから禁手でまとめて固有結界を得るのではなく、残神で固有結界を獲得することを大前提とする禁手にしたという事でしょう」

ロスヴァイセさんが補足するけど、そういう事かあ。そりや呆れる。

つていうか、固有結界になってから魔力放出を使ってた辺り……リユシオンさんも騙すつもりだったな。

最初から固有結界は足止め目的で、解除して油断したところで更に戦術的に畳みかけると。怖いな、あいつ。

それとも、武山さんが思いついたのか？ 歴戦のゲームプレイ

ヤー、怖っ。

残神って超高等技能扱いされているんだけど、あいつポンポン作りすぎだろ。というか、思いついてからのあいつは禁手と残神が最初っからワンセット運用するレベルだし。あれ、アザゼル先生が呆れるぐらいの超高等技術なんだけどなあ。

さっすが先駆者。あいつ、俺のこと笑えないよなあ。

そしてリヴァさんは、小さく微笑みながら九成を見る。

「ふふ、頑張れ男の子。青春の青さってのは勝手に減っていくんだしね♪」

恋するお姉さんの顔だあ。九成、罪作りな男っ

ただそう思った瞬間、俺の横っ腹に拳が入った。

「人のことは言えませんよ、イツセー先輩」

……相変わらず、俺の心を読むが得意すぎですね小猫様。

戦愛白熱編 第四十二話 激突、GF撃墜戦(その5)

祐斗Side

想像を絶する禁手と残神を利用した戦術を見せられたけど、そこからの戦闘も激しくなっている。

『ヤバイヤバイヤバイ！ 押し切られるっ!?!』

『兄さん！ ここは私達で押さえます、かすめ取ってください!!』

ア Nil 君とルーシアちゃんが慌てて状況を立て直そうとするけど、そう簡単に行けるわけではない。

『そういうわけにはいかねえなあ!』

『ここは通しません!』

高速移動で動き回りながらのベルナさんの砲撃が足を止め、そこに行船さんが準神滅具で攻撃を仕掛ける。

これによりルーシアさんは砲撃を味方ごと足止めされ、手一杯。

更にア Nil 君に対して、シルファ・ザンブレイブが突貫を仕掛ける。

『足止め任せたよ!』

『任せて！ 期待には応えるわ!!』

他の相手を機動力で担当する枉法さんに答え、シルファ・ザンブレイブはマチェットを引き抜いてア Nil 君を抑えにかかると。

ア Nil 君はヘキサカリバーの天閃担当ゆえに機動力は高い。更にラツシングチーターを併用している事もあり、機動力なら最高峰。

……だが、シルファ・ザンブレイブはそこで本腰を入れた。

『創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌く流れ星!』

その瞬間、シルファ・ザンブレイブは一気に加速し、抜き去ろうとしたア Nil 君を食い止める。

『速いっ!?!』

『悪いわね、期待に応えるのは得意なのよ!』

更に全方位から刃が迫り、アニル君は支配を利用しながらも足止めされる。

……そして、鬼札であるリュシオンもまた抑え込まれた。

『創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌く流れ星』

星を開帳した黒狼さんが、真正面からリュシオンさんの素粒子を弾き飛ばし、デユランダルの斬撃すら凌いでいく。

というより、瞬間的な打撃に強い聖なるオーラを感じる。あれがヘキサカリバーとも打ち合った仕組みの正体か。

聖なるオーラに関係する星辰光。これは大きな要素となるだろう。

リュシオンさんもすぐに対応し続けるけど、武山さんはそれを強引に押し切っている。

打たれ強いな。戦車の駒で転生していると聞いているが、それにしても頑丈だ。星辰奏者である^{エスベラント}ことを踏まえても、もう一つぐらい絡繰りがありそうだね。

『この力……まさかっ?!』

『ほお? ぜひ後程に説明を伺いたるところですね!』

リュシオンさんですら、あれを突破するのは難しい。

実際相当に驚愕している。武山さんはそれを逆に興味深そうにしているぐらいだ。

そして、他のメンバーも殆どが抑え込まれている。

『……できれば、有終の美を飾りたいのですがね!』

女王であるエルトーナ・バルトリが突破して仕掛けるが、九成君は魔力放出で掻い潜りつつ、ショットライザーで牽制を仕掛けている。更にボロボロのGFが残った腕で打撃を繰り返し、二人は別々に回避して距離が開ける。

そんなエルトーナに、迫る相手が二人。

『和地様! ここは任せて頂戴!』

『短時間なら抑えられます! 行ってください!』

『任せる、文香、文雄!』

大上文雄と文香・ヴォルフ。

九成君のチームに属する二人が、連携でエルトーナ・バルトリに対して時間稼ぎを敢行した。

エルトーナは即座に反撃するが、それをごり押しするように二人は突貫して足止めを仕掛ける。

……やはり固い。耐久力に特化した能力のようだけど、これは足止めにおいては効果的だ。

強い相手に倒されない。戦術的にこれはいやらしい。特に、強引にでも突破したい時にはくるね。

そう思った時、九成君は素早く三回目の魔力斬撃の構えに入る。

だが、その時状況は動き出している。

『読めてきた……これなら！』

『そうはいかない！』

リュシオンさんの適応が上回り始め、武山さんはどんどん押し込まれている。

その瞬間デュランダルのオーラが弱まっているが、武山さんが何かしているようだ。

だが、微々たるものだから突破は時間の問題。

更に、GFもまた砲撃体勢を完了している。

……この瞬間、九成君の勝敗が決定する一瞬になっている。

さあ、どうするんだい、タイムス・クロウ涙換救済！

和地 Side

その一瞬に、俺はためらうことなく攻撃を選択する。

チャンスは一瞬。これを逃せば、リュシオン・オクトーバーの適応

が俺達を追い抜く。

だから、こそ！

『制約成す勝利の銀剣ッ！』

俺は斬撃、GFが砲撃を放つより早くぶっ放した。

そしてその瞬間、GFはそれに対応する。

まだ残っている片方の腕。それを俺の斬撃にぶち当てる。

拮抗は数秒。すぐにでも腕は断ち切られるが、威力が殺され時間も稼がれる。

そして、弱まった斬撃を相手の砲撃が吹き飛ばす。

だが斬撃により砲撃は殺された。

ゆえに、判断は一瞬。

「なめるなあー！」

俺は障壁を張り、同時に抜き打ちで銀剣を解放。

威力は大きく減衰するが、障壁で威力を殺されたことで、何とか弾き飛ばせる。

だがその瞬間、砲撃の反動を殺さなかったGFは一気に後退する。

俺は攻撃の反動ですぐには追いかけられない。

『和地様、抜かれました！』

更に凶報。黒狼が抜かれた。

リクション・オクトーバーが本気で移動を試みれば、到底黒狼では追いきれない。つまり、ほぼ詰みに近い状況が迫っており――

『BALANCE SAVE』

――俺が、一手早い。

既にショットライザーは起動済み。狙いをつける余裕は、ギリギリで間に合った。加え、GFには腕がないから防御も困難。

パラディンドッグは禁手を切り替えるが、その際ショットライザーによる必殺技も切り替わる。

ただ、制約成す勝利の銀剣の場合、威力的な問題から必殺技というよりは保険に近い。魔力斬撃が追い付かない時に、抜き打ちで対応する為レベルの威力しか出ないからだ。

だが、今この瞬間なら十分すぎる。

「……一手もらったあつ！」

『パラディンシルバーブラスト!』

パラディン

シルバー

ブラスト

その銃弾は、狙い通り。破壊された装甲の割れ目に吸い込まれるように着弾した。

瞬間、機能を停止して崩れ落ちるGF。

まさにその瞬間、俺の視界にリュシオンさんが現れる。

視線が合った時、俺はちよつと自慢げに笑みを浮かべてしまったのを許して欲しい。

「悪いですが、一手の差で俺の勝ちです」

「……そうだね。ちよつと悔しいかな？」

『GFの機能停止を確認。涙換の救済者チームの勝利です』

そのアナウンスと共に、俺はかろうじて逃げ勝ったことを確信した

戦愛白熱編 第四十三話 衝撃！ カズヒのコネクション!?

和地 Side

試合が終わり、俺達は控室で一休みした後イツセー達と合流する。するとそこには、既にア Nil やルーシア達がいた。

「……グス……ッ」

つてルーシアが半泣き!?

あれ、これまずい!? 俺が怒られる奴!?

ちよつと俺は慌てるけど、俺に気づいたルーシアは涙をぬぐうと後ろを向いた。

「……お見苦しいところを、お見せしました」

気まずそうにそう言うと、なんか急に小走りになると角の向こうに抱き着いた。

と、そこで気まずそうな表情のリュシオンさんが片手で謝る姿勢をとりながら現れた。

あ、付いて来てたのか。

「御免ね。八つ当たりをするような真似はしないから安心していいよ?」

うん。良いお兄さんやってるよなあ、リュシオン・オクトーバー。ルーシアもいい傾向と見るべきかもな。甘えられる時に甘えるのは悪い事じゃないし、若い時の特権ともいえるし。

さて、それじゃあそろそろ始まりそうだな。

「……それで九成君。あの新技はどういったものなの?」
ほら来た。

イリナが興味津々で聞いてくるし、他のメンバーも似たり寄ったり

の注目だ。

「まったくですわよ。あんな新技があるのなら教えて欲しいのです！」

ヒマリもポンポンしながら言うてくるが、まあ相応の新技だったしな。

「まあまあ。今は競い合う関係だし、出し渋りぐらいは仕方ないじゃん？」

と、ヒツギが宥めてくれてるうちに答えとくか。

「予想出来るだろうが、聖血の禁手と残神だよ」

ああ、あれが俺の新技だ。

「禁手は魔術回路の強化を行う、アンチエイン・パプテスマ・プライド血筋に依らぬ魔導聖人。残神はその状態を活かして疑似的な固有結界を展開する、アプソリュート・デイフェンダー絶対なる守とつけてる」

そう、それが俺の隠し玉。

パプテマス・ブラッド鮮血の聖別洗礼の禁手と残神。

鮮血の聖別洗礼は、簡潔にまとめれば自己強化と異能の獲得だ。それを利用し、俺は俺に宿る魔術回路の強化を行った。

更にその強化が施された魔術回路を活かすことで、残神で固有結界を作っている。

……ずっと固有結界を持ちたかった。カズヒと同じ固有結界持ちになりたかった。

ただ、固有結界を獲得してもしっかりと運用できないとあれだったからな。ソード・パース魔剣創造や疾走車輪だとそこが不安だった。

なので、神滅具の力を積極的に借りたわけだ。おかげでいい感じに効果的になったと断言できるな、うん。

まあ、冥革連合関係者にちよつと突っ込まれないか不安だけど。思いついた時は「固有結界は魔術の最秘奥だし、問題ないよね♪」と思っただけど。実際性能は凄いけど、動機が動機だからなあ。

ちよつと不安だ。後でお伺いを立てておこう。もしくはパラディンドッグでの別パターンを徹底するかだな。

「因みに、魔術回路は魔力放出の再現と魔力貯蔵量及び供給量の増大

に特化してる。あまり複雑にしても戦闘だと使いづらいと思ってな」「なるほど。固有結界そのものは別能力ってことだね」

木場が納得してくれたし、まあ解析はされるだろうからネタ晴らしもしていいだろう。

本来の固有結界は、得意とする魔術の発展形になることが多い。というより魔術回路の性質上、固有結界を体内のみに展開する縮小版が最も燃費がいいという方が近い。

ただし俺の場合は残神による疑似固有結界なので、この縛りは無視できる。ということではスルーする方向に向いた。

「絶対なる守の能力は「神器・魔術回路・星辰光を統合した障壁展開」だ。まだまだ慣れてないが、使いこなせれば結界系魔術回路保有者の頂すら狙えると思ってるぜ？」

ふつつふ。これを考えるのは苦労した。

いやあ！ これで俺も固有結界持ちかあ！ 疑似的なものとはいえ持つちやつたかあ！ すっごいテンション上がりそう!!

「とはいえ、固有結界は相手を異空間に取り込む技ですからね。数を相手にする場合は難しいところもありそうです」

「仕方ないでしょうねえ。まず最初に「カズヒとお揃い」があつてからの肉付けだものお」

……ロスヴァイセさんとリーネスの解説は勘弁してくれ。

それぞれ別のポイントで痛いところをついてくるから、正直ちよつとダメージが入ってるから。

欠点をしっかりと指摘されたうえ、男の純情をつついてくるんだもの。メンタルが、メンタルがごりつと削れる！

正直ちよつと顔が赤くなるけど、ええい押さえろ俺！

「ふふうん。ボス大好きつぶりが透けて見えるいい残神ですなあ。ああもう！ カズ君つてば青春してるんだ・か・ら♪」

リヴァねえが！ リヴァねえが更につついてくる！

助けを求めたいところだけど、そんな隙を作らずに春っちまで引き寄せた!?

「春奈も頑張りなさい？ 幼馴染特権じみた専用禁手まで仕立ててく

れるからって、油断しているとアドバンテージとられちゃうから？」

「ちよ!? こつちまで巻き込み……いや、そうだけど!?」

「否定する気は全くないけど! 加減、加減プリーズ!」

春つちも俺も顔が真っ赤になってるだろうなあ。

「こ、固有結界でお揃い……おそろそろろろろろろろろろろろつ!」

そして鶴羽がバグッている!?

固有結界は鶴羽も持つてるから、バグって当然か。後でフォローしない。

あれ? これつてもしかするとリーネスにもフォローがいるか?

俺はふとお揃いであることに気づいたリーネスをちらりと見る。

「……はわあつ!」

ああああああ! 気づいたのか顔を真っ赤にして倒れそうになつてるし!?

「お袋フォロー! リーネスが倒れる!」

「きや、リーネス!」

慌ててお袋に助けを求めて置いたけど、今の俺は墮天使だからね。リーネスとお揃いだからね。

しかもリーネスからした形だ。リーネス的にはかなり顔を真っ赤にする案件だろう。後でどうフォローを入れたらいいんだ。

「リヴァねえ、その辺にしてくれ。被害が甚大になる」

「えく? だって先生、そういう意味だとお揃いにならないし?」

あ、これもしかしてちよつと拗ねてる!?

「仮面ライダー繋がりでろ!? ほら、お揃い!」

「デバイス違いますー。エイムズショットライザーと神具アスガルドライバーは全然違いますー」

おおく! この人が珍しく拗ねてるんだけど!? 誰か、せめてアドバイスを!?

正直ちよつとパニックっているけど、その瞬間、リヴァねえはにっこりと微笑んだ。

「だ、か、ら♪ 今度お揃いのファッションでもしましょうか? ほら、先生大人だから学生服があれだしね?」

あ、そういう方向にもっていきますか!?

クソツタレ。掘ねてるところもあるけど、これをネタに一時間ぐらいからかう気だな!?

「……ちよつとトイレ行ってたら何やってんだよ?」

「それなら、ウチのメイドをバイトでやったら? 私達とならお揃いだよ?」

ベルナとインガ姉ちゃんが来てくれた!?! でもそういう方向じゃなくてさあ!?!

結局、一時間ぐらいこれをネタにからかわれた。この辺りの計算もしっかりできるから困ったものだ。可愛いけど。

でもまあ、リヴァねえとお揃いつてのもいいかもなあ。今度何かできなにか考えてみよう。

あとカズヒが見てくれないことを知って、俺は二時間ぐらいガチで凹んだ。

落ち込むだろこれはあああああつ!!!

カズヒSide

漸く問題を片付けたと思ったら、その時点で和地達がみんな来てしまった。

くっ！ 長丁場になってくれれば後半は間に合うかと思っただけど、短期決戦になったみたいね。

あとでしつかり謝っておかないと。これならさっさとリアスの力を借りればよかつたかしら。

「……とりあえず勝ちました。あと出番あるか？」

「見れなくてごめんなさい。しかもちようど終わったところだわ」

ちよつと気まずいけど、ここは私の責任が重いからしつかり謝らな
いとー

「おめでどうボースッ！」

——ここでリヴァが和地を巻き込む形で私に抱き着いてきた。

え、何がおめでどう!?

珍しくちよつとパニ食っていると、ニヤニヤしながらリヴァが私を
つついてくる。

「鶴羽も込みでお揃いになっちゃたわねー。墮天使繋がりだとリーネ
スを含めたお揃いよねー。うーらやまし〜っ♪」

……あ、確かにリーネスとは墮天使繋がりになるのか。

で、なんで鶴羽込みでお揃い？

「御免、状況がさっぱり分からないんだけど」

和地が何かしたんでしようけど、正直さっぱり分からない。

っていうか、後ろから追いついた鶴羽とリーネスが顔真っ赤だし。
完全にオトメねえがフロローに回っている状態だし。

え、本当に何が起こったの？

「っていうか、カズヒって試合を全然見てなかったのか？」

イツセーが指摘するけどそうなのよね。

「ついさつき問題が解決したばかりなのよ。それまでかかりつきり
だったわ」

「そうなの？　いつそのこと呼んでくれればよかったのに」

リアスがそう不満げに言うけれど、ちよつと気が引けたのよね。

リアスの社会的立ち位置を利用すれば問題は解決するけど、異形関係を使ったごり押しはちよつと横紙破りな気がするし。そこは最終手段としておきたかったわ。

まあ、その前に取ったこの手段も反則級だけど。この国限定なら最終決戦兵器と言っているいいものね。

まあ、そういうややこしい事態だったのよ。

「……お？　どうしたカズヒ？」

あ、落ち着いたようね。

「店内は落ち着いた、店長？」

「おう、一通り片付いたぜ！　で、そちらさんは？」

そう。ならまあいいでしょう。

と、いうわけで私は一回リヴァを引きはがすと、二歩後ろに下がって紹介することにした。

「皆。彼は私がストリートチルドレン時代にお世話になった、このレストランの店長よ。店長、こちら、私の……大切な友達」

ちよつと照れそうになったけれど、ここは素直に言うことにした。

「……そうか。お前がこんなに友達をなあ」

なんか涙ぐみかけているんだけど、店長。

ちよつと納得している自分がいるわね。おかげで突っ込めないわ。

と、そこで和地が我に返ったのか、急に店長に近づくとかなり真剣な表情になる。

ん？　何かあったのかしらー

「初めまして。私はカズヒさんと付き合っている九成和地と申します」

ーん？

「事実上の養父ともいえるあなたには一度お目にかかりたかった。以後お見知りおきを、そしてよければ今後のスポンサーにならせて下さい」

「総員確保ー！　カズ君大暴走よー！」

しないとな。

と思っていると、なんかさりと日本語で書かれたメモ帳が差し出された。

「簡単に日本語訳を用意したよ、使いたまえ」

……国家元首がメモくれたよ。親切過ぎません、この人。

「ありがとうございますいますわ、サハロフ首相。親日家と伺っておりますが、日本語もお上手ですわね」

流石リアス。こういう時も手慣れたもんだ。

そしてこの首相、親日家だったのか。そういえば、日本語も綺麗に書かれてるしな。

サハロフ首相も、につこり微笑みながらメニューを確認する余裕があるぐらいだ。

「日本には留学経験もあるのでね。あの経験があるからこそ、何とか国家を運営することができたものさ」

へえ。日本の留学で国家運営ができるぐらいに成功したのかあ。「君達の国にも問題がないわけではないが、それでも世界的に見て極めて高い水準のいい国だ。私達もそれを参考に、一歩ずつ目指したいと思っている」

そ、そんな風に言われると少し照れるな。

……でも、そうだよな。

悪魔社会や吸血鬼の里、そういつたところを見ると、俺って結構恵まれた生活をしていたんだって思い知る時は多い。

寝る時に凍死する心配までするなんて、俺には考えもつかないしな。

でも、この国だと数年前までそんな心配をする人達が何人もいる。

「その、俺って結構馬鹿なんで上手いことは言えないんですけど」

ほんと、その辺りは困ったもんだっていうかなんて言うか。

まだ二十年も生きてないガキで、知らないこともいっぱいある。それなのに上級悪魔になるとかで、ちよつとついでに行けてないところもある。

だけど、思ったことははっきり言った方がいいかもな。

「そんな良い国に生まれた者として、まあ世界に恥じない奴になりた
いって、そんな気持ちになりました」

うくん。自分でもどういったらいいのかちよつと悩む。

でも、俺達の国を良い国だっというのなら、そんな良い国に住んで
る人としては恥ずかしい真似はしない方がいいよなあ。

そんな気持ちを何とか言葉にしてみたけど、これでいいんだろう
か。

「……リアス嬢。良い連れ合いに恵まれましたな」

「ええ、自慢の愛する男です」

よかったみたいだ。よかった！

祐斗Side

「……なるほど、蕎麦掻もこんな風にするとこんな味になるんですね」
小猫ちゃんが一心不乱に、洋風にアレンジされた蕎麦掻を食べてい
る。

実際、実に美味しい。元々ロシア近辺は蕎麦粉を使っていることが
多いとはいえ、ここまで美味しく仕上げるとはね。

確か、カズヒが貰った蕎麦粉で蕎麦掻を作ったところから発想を
得たと聞いている。それでここまで美味しい料理を作れるのだから、
才覚も努力もしつかりと持っているんだろう。

この味はとても参考になる。今度アレンジしてリアス姉さんや
イツセー君に食べさせてみよう。

「……それで店長？ カズヒってばその頃はどんな感じだったんですか？」

「写真とか取ってあったりしません？ あるならちよつと見せて欲しいんですけどお」

と、その美味しい料理を作った店長は南空さんとリーネスに絡まれていた。

……この国の法律上、ここなら二人もお酒を飲める。なので飲んだ結果、からみ酒になったようだ。

「お、おう？ まああるっちゃあるが……そんなに気になんのか？」

「もちろん!!」

完全に押されているね。これはフォローを入れた方がいいのだろう。

「二人とも？ あまりご迷惑をかけないように。……カズヒもキレるよ？」

本当にキレそうだし、きちんと釘を刺しておいた方がいいだろう。カズヒにとって義理の親ともいえる人物。更にそんな彼らしか知らないカズヒの姿がある。となれば、二人がテンションをおかしくしてしまうのは仕方がない。

そこに酔っ払いのテンションがあればこうもなる。だから少しは見えて見ぬふりをした。

ただ、これ以上はカズヒが怒りかねない。そうなる前に止めてあげるのが人情という物だろう。

「そうだよ。二人とも、ちよつと落ち着いてね？」

と、そこでオトメさんも止めに入ってくれる。

困り顔だけどもツツとしており、ちよつと怒るようにたしなめてくれた。

「……ぐうっ」

二人揃って、オトメさんにまで言われたら強くは出れない。

しぶしぶ引き下がるのを確認してから、オトメさんは店長に頭を下げる。

「二人がすいません。カズヒのことが大好きなので、ちよつと抑えが

きかなくなつたみたいです」

「まあ、そういう事ならしやあねえか。で、アンタは気にならないのかい?」

と、店長はそう切り返す。

オトメさんもまた、カズビのことを大事に思っている。それをなんとなく察しているのだろう。

ただ、オトメさんは小さく首を横に振る。

「気にはなっています。でも、感謝している人に失礼な真似はできませんから」

その言葉に、後ろでリーネスと南空さんがもの凄く気まずそうな表情になっっているのが見えた。

カズビがストリートチルドレン時代、酷い犯罪行為に手を染めることなくやっていけたのは、ひとえにこの店のおかげともいえる。

相応に気を使ってくれた。より厳密に言うなら、一人の従業員として可能な限りちゃんとした待遇で扱ってくれた。その一本筋の通った接し方があつたからこそ、カズビ達は人として一線を引いた生活が送れたのだろう。

すなわち、彼はカズビにとっての大恩人だ。オトメさん達が感謝するのも当然。無体な真似は本来できない。

そういうわけでオトメさんは二人を引つ張つていったので、僕はフォローに回ることにした。

「本当にすいません。二人はカズビのことが大好きなので、色々ときたくてたまらなかつたんでしよう」

「そうか。……ま、それは良い事だな」

そう返すと、店長は離れたところで何やら人に囲まれているカズヒを見た。

……九成君達の対応で、今回この店での注文は全部九成君が持っている。

たまには大金を使わせないと、九成君がバグリかねない。なので、こういった形でお店の売り上げに貢献する方法をとつたらしい。

そして、そんなことになっている間に来たグループが、カズヒをも

みくちやにしている。カズヒの方も、無理やり引き離そうとしない当たり知った仲のようだ。

「彼らは？」

「カズヒと同じうちの元従業員だよ。独立して以来、孤児の類に支援事業が広まってんだ」

そういう事か。

教会も手を差し出したようだけど、政府からも支援がなされているわけだ。

そして、その結果が目の前の人達だ。

「大抵の連中は手に職つけてるんだが、結構な頻度でわざわざ食いに来てくれてんだ？ おかげでこっちも潤ってるぜ」

……流石はカズヒが面倒を見ていた子達だ。

かつての恩義を忘れず、更に世間様に恥じないような生き方もしている。

ふふ、それはもみくちやになるわけだよ。

カズヒ Side

……ふう。

二十分ぐらいもみくちやにされたけど、久しぶりに旧交を温めるのは良い事だわ。

もう少し頻繁に来るべきかしら？ とりあえず、何もなくても夏休みには一度戻ってきた方がいいでしょうね。

そんなことを思いながら、私はちよつと一息をついている。

……でも、今日は良い日ね。

そう思いながらほっと一息ついていると、空いたコップにウオツカが注がれた。

「良いダチに恵まれてんな、カズヒ」

「店長」

店長の方を振り向いていたら、テーブルの空いた部分に適度なつまみの盛り合わせまで置かれたわね。

「同意見だ。少しほっとしているよ」

「首相まで」

こ、これは困ったものね。

何かしらこれ。成人した子供が親にからかわれている図に近いわね。

「君を見ていると思ひ出すよ。こんな足になった時、命まで失わなかったのは君の奮戦あつてのものだ」

首相にそう言われると、少しこそばゆいわね。

あれはこの国の独立紛争。そこに少年兵として活動していた時。

たまたま配属部隊が近かった為、私は何度か革命軍幹部だった頃の彼を何度も見かけていた。

首相は政治的な立ち位置を重視しながらも、独立紛争後の支持率などを踏まえ、同志達と共に歩兵部隊に分散配置して戦っていた。同時に色々な国家や人と繋ぎをとり、例えば直接的な協力が得られなくとも、様々な視点や知識を得続けていた。

革命というのは起こしたら終わりではない。その後、政情をまとめて国を動かしていくことまでが必要だ。残念なことにそれを失念した反乱は数多く、幸運なことにシルヴァスタン共和国はそれを考慮した独立運動が起きていた。

後先を考え、それを成せるように官僚となる者達を海外に留学させる。同時に彼らから知識を得たり、諸外国の識者達と繋ぎを作って初期の中枢に座る者達は学んでいた。

その筆頭が彼だ。日本に留学経験がある彼は、歴史も学んだことでそれに気づいていた。だからこそ、革命後の政情をまとめる準備をし

ながら、そもそも革命を成功させ、まとめ役となる者達が支持を得られるように戦っていた。

そんな彼が、ビルの一階付近で機械化歩兵部隊戦車に随伴可能な移動手段を持つ歩兵部隊に追い詰められていた。私はそれを、隣のビルの五階ぐらいから見つけていた。

私が所属していた分隊がビルの制圧を試みていた時であり、部隊が壊滅的打撃を受け、練度の問題もあつて恐慌状態で散り散りになっていたのだ。可能な限り呼吸を整えて冷静さを取り戻している時に、私は隣のビルが奪還され返されたのに気づき、首相の窮地を悟った。

足を吹き飛ばされ身動きが取れず、随伴する兵も壊滅寸前。そして彼を失えば、勝った後が上手くいか不安になる。

なので、私は魔術まで併用して奇襲を仕掛けた。

こつそり神器に蓄え、宝石魔術用に魔力を込めてた小ぶりの宝石。それまで仕込んで奇襲を仕掛け、歩兵戦闘車の砲塔及び履帯の片側を破壊。動揺している隙について、三人ぐらい一氣に始末。結果として敵部隊は戦意をほぼ喪失し、増援も間に合った。

もつとも、足を骨折したりしたのでぎりぎりだったけれど。割と大博打を打った自覚はあるわ。

流石に足を失ったこともあり、首相は反乱軍からは除籍。他国との折衝で支援を取り付ける側に回り、そして最終的にこの国の首相に選ばれた。

ちなみに私は勲章ものだけど、本職の方々が嫉妬に燃えても困るので辞退した。首相達も、少年兵が現実に英雄になるとリスクがあると判断し、了承してくれた。

そこに至るまで、息抜きの場としてこの店を紹介したらこれだもの。流石に忙しくて一年ぶりみたいだけど、釣つかかってきたバカも馬鹿なことをしたもものね。

「しかしだ。まだまだ国家としての盤石性は緩く、ギャングに全力は出せなかったとはいえ、この店に目をつけるとは。これからはもう少し頻繁に来るとしようか」

「面目ねえ。最近になって急に幅を利かせてきやがってな？ 相談す

る前に突つかかられちまってなあ」

ほんと、どこの世界にも阿呆の一つぐらいいはいるものね。

首相も店長も頭を抱えているけど、いきなり出くわした私も頭を抱えたいわ。

「まあ、安心して頂戴。大雑把な事情を把握したりアス達がフオロ―するみたいだから。……あのギャング達、もう終わりでしょうね」

リアスは金も権力も豊富だし、何より基本的に正義の人物だ。あからさまな外道に容赦をするタイプでは断じてない。

あのギャングはもうおしまいでしょう。おそらく近いうちに、合法的に壊滅するわね。

……まあ、手伝う気も満々だけれど。我が古巣に邪悪が仕掛けて、只で済むなどありえない。悪敵銀神ノードェンズらしく神罰でも下してあげるわ。でも、それはまた今度。

「まあいいわ。さて、店長に首相」

私はそう言うと、微笑を消しきれないまま周りを向く。

そこにいるのは、私の大事な仲間達のどんちゃん騒ぎ。

ええ、もう一度言っただけでもいいでしょう。むしろ言いたくなってしまう。

「凄いでしよう？ 私の自慢の仲間達よ」

彼らを自慢したくなる。そんな気持ちに嘘はいらないでしょう。

和地Side

ふう。

ちよつとアルコールが回ってきていたので、俺は外の空気で冷まし

ていた。

日本より遥かに北に位置するこの国は、必然的に気温が低い。だからこそ、外の空気で涼むこともできるわけだ。

やっぱり、酒は気を付けて飲まないといけないな。ことスクリュードライバーは呑みやすくて、割と飲みすぎたかもしれない。

酒は呑んでも？まれるな。今後も気を付けた方がいいよなあ。

とりあえず、一度二日酔いになるセーフラインは見極めた方がいい。そうしないと、酒を楽しむのもちよつと苦労しそうだしな。

ただ、俺つては星辰奏者だしなあ。基本的に蟒蛇化しているだろうし、二日酔いになるまで飲むのも大変だ。うっかりすると急性アルコール、調整がとでも大変だろ。

そう思いながらため息をつき、とりあえず涼めたので戻ろうとした、その時だった。

「……………な……………」

「……………え……………」

そこには、小柄な少女と向き合つて、互いに絶句している三美さんの姿があった。

あ、これもしかすると結構あれな展開？

第四章 闇動神備編

闇動神備編 第一話 兵站とつても重要です

Other side

邪龍戦役と明星戦乱。禍の団に関わる二つの大きな戦いは、人間世界にも無視できない傷跡を残したと言ってもいい。

邪龍達による人間世界への侵攻。明星戦乱による極^{スフィア}晃星の脅威。この二つは、今後の世界の未来において大きな布石となったことは言うまでもない。

そして、その間にもう一つの脅威があった。

大欲情教団。彼らと多国籍軍による睨み合いだ。

世界各地で都市規模の淫行を繰り広げる、エロの秘密結社。ひよんなことから本拠地が日本にあることが分かり、いくつもの国家が叩き潰すべく連合軍を組織。

だが、先手を打ったのは大欲情教団。世界各地に存在し、何なら当時の米国大統領の娘までもが構成員だったことにより、カウンターを喰らってしまう。日本に至っては皇族すらターゲットにした淫行が行われようとしていた。

先の二つの事態もあり、殆どの国家が軍備強化と対大欲情教団が国策とした。

日本も同じ。否、皇族をターゲットに都心に大規模侵攻を受け、そもそも本拠地が日本にあったことが、日本人の危機意識をこれでもかと底上げした。大欲情教団が蜂起した本部近辺が、超大規模の鉱脈になっっていたことも大きく後押ししている。

自衛隊に回される予算は二倍を超え、自衛隊に志願する者達は例年の倍を超える。その後の振るい落としやそもそも育成の為の人材確

保もあるが、自衛隊の規模と質は凄まじいことになるだろう。

兵器開発が推し進められていることで経済も多少盛り上がり、にわかな好景気も生かされている。

そしてその一環として、日本政府はある擱め手を行った。

大欲情教団のそれを解析した形なら、異形側も認めた人工神器技術。日本政府は軍事兵器を国際共同開発しつつ、独自に開発を進めている物があつた。

それが工業開発技術。すなわち「より早く兵器を作ることができない下地」である。

工業製品は毎日多数製造されることも多いが、それは工業製のラインに流し続けるからこそ。自動車一つを製造するのに掛かる時間は、ひと月ほど掛かる場合もある。

だからこそ、より早く兵器を開発する技術は早急な軍備増強の必要不可欠。ここに日本は目を付けた。

そして同時に、日本政府は真つ先にスペインと交渉を開始。

目的は、スペインの海軍旗艦ともなっている一隻の船。ファン・カ
ルロス一世。

戦略投射艦とスペインは呼称し、あらゆる貨物に対応できるように設計された格納庫と、それに比例しての多用途任務に対応できる対応力。そこに目をつけ、オーストラリアやトルコでも準同型艦を運用する、優秀な設計を施された、事実上の強襲揚陸艦。

日本政府はわざと割高な代金の提供及び、ある程度の技術提供を引き換えにライセンス生産を取り付ける。

そして格納庫を再設計し、武装を自衛隊のそれに合わせて設計。ある程度形になった工業用人工神器と併用し、ついに一隻を完成させた。

それこそが、たけしま級戦略護衛艦。その一番艦であるたけしま。

現在、スキージャンプ甲板を生かしてのUAV運用など、今後の技術発展を想定した技術試験艦として運用が行われている。

そんな自衛隊の最新兵器に、チームD×Dからオカルト研究部を主体とするチームが同乗していた。

イツセーSide

「……自衛隊って、やっぱり女性がまだまだ少ないんだなあ」

「ま、基本的に男社会っすからね。人間世界側の軍事組織ってのは」

俺は食堂でお茶を飲みながら、アニルとそんな感じでだべっていた。

ロボットアニメみたいにたくさん女の子が出てくる世界は、まだまだ先のことなんだなあ。

そんなことをしみじみ思ってから、俺はそろそろ本題に入ることにする。

「つーか、自衛隊との合同任務って凄い事になってるよな」

「同感でさあ。ま、仕方ないところもありやすがね」

うん、本当に凄い事になった。

今回に作戦だけど、大欲情教団が無人島に作り上げた軍事施設の強襲作戦だ。

日本の首都である東京を、皇族までターゲットにして侵攻した大欲情教団。俺も日本人の端くれとして、呆れると同時に憤ったりもする。

そして日本はこれを機に、軍備拡張が一気に凶られている。自衛官志望も例年の倍を超える勢いだ。

そんなわけで、対大欲情教団という意味では日本はタカ派の極みだ。うっかり大欲情教団と勘違いされたなら、殺人の理由になりかねない。

流星にそれはまずいとしているけど、だからこそ「政府がしっかりと、大欲情教団を取り締まっている」と思わせる必要がある。

と、いうことで。

一生懸命日本政府や冥界政府が頑張つて見つけた、大欲情教団の秘密基地。これを自衛隊が大手を振つて制圧するのは当然ともいえるわけなんだな。

お上がきちんと仕事をしてるっていうのは、国民にとって安心感が違うってことだ。そういうのは、俺も冥界のヒーローになってるから少しは分かる。慰問のヒーローショーもその一環だしな。

だからこそ、日本政府はこの作戦でしっかりと成果を上げたいらしい。

ただ、大欲情教団は異形の大組織に匹敵する勢力。ついでに言うると、核兵器や原子炉の技術を獲得している。自衛隊でも大部隊を率いて返り討ちに遭いかねない。

だから対策として、日本政府は各国に対して協力を要請。以前から進めていた新型プログライズキーの試験も兼ね、連合部隊で仕掛けるつもりらしい。

たけしま級戦略護衛艦はその旗艦。だけどたけしま級に刷新される予定のおおすみ級とかも投入し、かなりの大舞台になっている。在日米軍からも増援が派遣されている。

そして、異形からも戦力が派遣されることになった。

その結果、「最も大欲情教団と関わっている」という理由で、俺達才力研に白羽の矢が立ったそうさ。実力も申し分なく、地元での事態なのも一役買ってる。

……本当に、あいつらとは切つても切り離せない関係になったなあ。

「あいつら、最近は大人しかつたけど絶対強くなってるよなあ」

「同感でさあ。そういう連中はきついツスからねえ」

俺もアニルもちよつとため息をつく。

そして、俺達にとってため息をつく理由は他にもあったりするわけ
で。

「アニル」

俺は、アニルが腰に携えている二つ目の剣を見る。

それは、以前カズビが言っていた「量産型のコールブランド」。

ついに完成し、アニルに提供された、新しいアニルの力だ。

「頼りにしてるぜ？」

本心だ。

アニルはここまで、ずっと俺達の戦いについてきてくれた。

特筆する異能の才覚こそなかったけど、聖剣を与えられたことでそれも補われた。そしてそれにおごらず、基礎をしつかりと鍛えている。

間違いなく、アニル・ペンドラゴンは頼りになる戦力だ。

そして、アニルもその自覚がしつかりとある。

「もちろんでさあ。頼りにしてくださいよ？」

ああ、期待してるぜ！

祐斗Side

僕はリアス姉さんの護衛として、たけしま級のブリーフィングルームで、ある一人の男性と話をしている。

「ハツハツハ！ 一目見ただけで分かる、修羅場を潜った良い目をしていますな！」

「そちらこそ。次期大統領候補の一角は伊達ではないと、雰囲気で見分かりますわ」

リアス姉さんと笑顔で握手をし合うのは、合衆国大統領候補。

アメリカ合衆国上院議員、ニールセン・キングスマンだ。

僕らが修学旅行で京都に来ていたのと同時期に、日本に来日してたこともあって、遠目に見たことがある。あの時はイツセー君の可能性が京都に痴漢の嵐を巻き起こしており、そこに連なる形だったから忘れてない。

……なんというか、申し訳ない気もしないではない。

「しかし、在日米軍から参加する部隊の激励をしに来られるとは、フットワークが軽いんですね」

「当然ですとも！ これから殴り返されるのを承知でろくでもない連中を殴りに行く戦士達が彼らだ。まして前大統領の敵と言っても申し分ない奴らが相手なのですからな！ 声援と陣中見舞いを届けずにはいきませうまい？」

リアス姉さんのそう言った通り、彼は今回の作戦に関わる在日米軍の応援に来てくれていたようだ。

米国陸軍に在籍し、「戦う上院議員」を公言。今回で初の実践投入となる、国際共同開発のプログライズスキーにおいても、合衆国で最大レベルの後援者ともいえる。こと政治的な部分では多大に貢献したそうだ。更に星辰体研究アストララルにも尽力しており、被検体として参加した結果という意味では、米国最初期の星辰奏者エスペラントともいえる。

過激派ではあるが国防に繋がる政策を行い、合衆国の富国強兵を推し進める人物。その一環で同盟国である日本国の強兵化も積極的であり、自衛隊の増強を狙っている政治家と密接に繋がり交流を行っていると言われている。

……過激ではあるが、だからこそうい時は頼りになる。今回において裏もないだろう。

とはいえ、だ。

「しかし、よろしいのですかな？ 新入りを多数投入すると伺っておりますが」

そう、伺うようにニールセン氏はリアス姉さんに指摘する。

それに対し、リアス姉さんも真剣な表情に戻り、真つ直ぐに向き合った。

「……ええ。おそらく今後も関わることになるだろう、大欲情教団。不意打ちで関わるより、意識的に関与するこのタイミングの方がフォーローが聞くと判断しましたわ」

そう、僕達は今回、ちよつとした博打じみたことをしている。その危険性を理解したうえで、リアス姉さんは微笑みすら浮かべた。

「日本政府から了承は得ましたし、責任はこちらで追いますわ。在日米軍の方々に迷惑は駆けませんので、ご容赦を」
さて、この一手、吉と出るか凶と出るか……。

カズヒSide

「……さて！ オカ研の戦いを経験していないひよつこども!!
ウォーミングアップは終わったか！」

「「「「「はい！」「「「「「」」」」」」」

鬼教官みたいなムーブで、私は今回の作戦に参加する、新しく入ったメンバーに檄を入れる。

何よりいふべきことはシンプル。これが一番大事！

「今回の作戦で絶対に頭に入れるべきことはシンプル！」

そう、これはしっかり言っておかないといけない。

この心構えがあるかどうか、本当に死線を分けるといっていい。そんなレベルの重要すぎる情報。

そう、それこそが――

「性癖でどんなことが起きても思考を停止するな！　そういうものだと割り切りなさい！」

「「「はいー」」」

「「「……………え？」」」

返答は二種類。

懲罰人事で来た行船達四名に、割と天然なアルティ―ネがしっかりと返事。

それ以外のメンツが返答するのも忘れて困惑している。

ま、これは仕方がない。

仕方がないけど無視はできない。

だからこそ、準備は万端。これがあるなら大丈夫。

「困惑するのも当然。だけど現実を見せるしかないから覚悟しなさい」

そう言ったうえで、私は記録映像を流す。

題名は、「おっぱいドラゴンとおパンツドラゴンの異業」

偉業ではなく異業なのがミソよ。

ここをしつかり教えておかないと、マジでまずいものね。

和地Side

大丈夫かなー、皆。

そんなことを思いながら、俺は甲板でウォーミングアップをしてい

た。

軽く走ったうえでイメージトレーニングを体を動かしながらし、ス
トレッチをしてから水分を補給する。

相手は大欲情教団。それも基地レベルだ。油断ができる相手では
ない。

そしてそんな連中をガチで相手する以上、ファープニルも割と速攻
で出す予定だ。毒をもって毒を制するアレだ。まず共食いで数を減
らしたいともいう。

なにせ相手は、あの大欲情教団だ。

ひと月に一回ぐらいの割合で、俺に大打撃を与え続けてきた強大な
組織。ここ数か月は教主と本部を失い静かにしていたが、必ず牙を研
いでいると確信していた。詰まるところ、ヤバイ相手だ。

日本政府もそれを分かっている。だからこそ、総統の戦力をもって
打倒を考慮しているという事だ。俺達にお呼びが掛かっている辺り、
かなり戦力を集めていると見ている。

だからこそ、俺達も本気で仕掛けないといけないわけなんだが少し
困ったものもある。

「……三美さん、大丈夫だろうか」

とりあえず、ここ数日はおかしな様子はない。

ただ同時に、あの時の顔面蒼白になっていた一瞬を俺は知ってい
る。

それが気になっているが、タイミングを逸している為、迂闊に聞け
ないのが難点だ。

見てしまったのを理由に聞き出すことはできるし、必要ならそれを
するべきだとも思う。

だが同時に、彼女の深いところに踏み込みかねないからな。

タイミングを計りたいが、それを逸している。もうこうなつては、
最低でもこれを終えてからでないと無理といったところだ。

それとなく気を使っておこう。万が一にでも足元をすくわれれば
致命傷になりかねない。

とはいえ、戦力だけなら十分すぎると思うが。

想定される敵基地は、無人島の地下に作られているらしい。空洞化している地下基地であり、体積に限定するとこのたけしま級二隻分とのこと。

つまり、戦力は数においてはそこまで多くはないわけだ。ここをつければ勝ち目はある。

日本も異形に積極的な支援をもらっており、五大宗家・妖怪・日本神話からも相応の援助を受けている。そこに変態慣れしている俺たちD×Dオカルト研究部メンバーが、変態の経験値を積ませるべく新参メンバーを集めて参戦。他の異形からも増援が来ているらしい。

そういえば、吸血鬼からも増援が来ていたはずだ。

最近イツセーのチームに入れて欲しいといってきた、エルメンヒルデが仲介役になっていているらしい。この後作戦開始前のブリーフィングで顔合わせをする予定だが、どうなるんだらうか。

「……ふうく。海の上って、こんな感じなんですね」

「そうなんすわ。吸血鬼はこういう時大変やから、珍しい機会ですわ」と、思いきやいきなり吸血鬼か。

純血の吸血鬼は、流れる水の上を移動できない。だが、それなりに術式を利用して克服しているそうだ。今回はそのテストも兼ねているとか。

和平って凄いなあと思いつつ、俺は近くにきているのなら挨拶するべきだろうと思ひ振り返ると――

「あ、あの時の!?!」

「はあ!?! な、なんやいきなり!?!」

あの時三美さんに会っていた人おおおおおおっ!!?

闇動神備編 第二話 どこもかしこも大変です。

イツセーSide

俺達が与えられた休憩スペースに行くと、そこには結構集まっていた。

「あ、イツセー。そっちはもういいの?」

「おう! そっちもいい感じみたいだな」

成田さんと言葉を交わし合うけど、全員準備万端っぽいな。と、いうかだ。

「九成ハーレムが揃ってんなあ」

「カズヒ先輩はいないっすけどね」

俺とアニルがそう言うぐらいには、休憩スペースには九成の女達がカズヒ以外全員集合だった。

リーネスも南空さんもいる。ベルナもリヴァさんもいる。成田さんも枉法さんもいる。

本当に、結構なメンツが揃ってるって感じだなあ。

これで全員強い側だ。そして可愛い。

「……九成が、九成が憎い!」

崩れ落ちるぐらい完璧度合いのあるハーレムじゃねえか!?

「うくん。人のこと言えない完璧おまいう案件かな?」

そうですねよリヴァさん! 俺も大概ハーレムですよ!

でも羨ましいんだ! それとこれとは別なんだ!?

「……ま、男つてのはそういうところあるよな?」

「このレベルはまあ、マシすぎるぐらいだしね」

ベルナと枉法さんがうんうん頷いているけど、喜んでいいのか分からない!?

そもそもマシすぎるって、つまりどっちかという下ってことだし。

あれ？ 俺ってそんなに評価が低いの!?

みんなと知り合った時は、もう覗きも我慢していることなんだけど。ひきつけを起こしながら頑張ってたんだけど。

これが、男女関係の現実なのか……っ

「悶えてるところ悪いんだけど、仕事大丈夫なの？」

成田さんにそう言われるけど、まあそこは大丈夫。

俺だっっていい加減、荒事に慣れてるからな。既にしつかり仕上げています。

「ま、何かあった時にすぐ動ける状態だから。そこは安心していいぜ？」

それなりにウォーミングアップもしてるからな。

俺達オカ研は基本的に、毎日自己研鑽は欠かしてない。トレーニングを常に積んでいるのが強みの一つだしな。

毎度毎度トラブルに巻き込まれているし、奇襲にも慣れている。常在戦場とまではいわないけれど、急に襲われても割と早く対応に回れるぐらいには心構えもできてるし。

それに、だ。

「相手はあのオカ研だ。変な油断はしてられないぜ」

「……確かに」

満場一致で納得されたよ。

ただまあ、実際俺達にとっても強敵だしなあ。

あの変態達、士気も練度も技術力も高水準だし。毎度毎度頭が痛くなるぐらい色々優れてるし。何ならどいつもこいつも、覚悟ガンギマリで活動してるし。

……本当に、気を抜いてられないしな。

俺達は今回、どっちかと言えば後ろで待機する後詰部隊だ。

でも、オカ研はほぼ全員が参戦だしな。それぐらいは保険をかけておいた方がいい。

そしてまあ、同時に大部隊で一気に潰すつもりなのも事実だ。

かなり大部隊だし、想定される敵戦力の六倍ぐらいで仕掛けるみた
いだしな。マジ本気って感じだ。

だからこそ、俺達もそれなりの手札は取ってる。

「そういえば、カズヒは大丈夫なのか？ アルティーンや亜香里達を
監督するんだろ？」

そう、今回俺達は、新メンバーともいえるみんなも連れて来ている。
正直ちよつと心配だったけど、ある意味で適任なのが大概情教団
だ。

敵として厄介だし、変態すぎて厄介だし、要は二重の意味で面倒な
連中だ。強敵とも変態とも縁のある俺達の戦いに付いてくる場合、こ
いつらで慣れておくと後が楽になるしな。

ま、ちよつと不安ではあるけど。

「そこは大丈夫よ。緋音さんは実戦こそ経験してないけど、訓練でい
くつも統率訓練もしてるし、大丈夫じゃない？」

南空さんはそう言うけど、アフォガードさんだったっけ……できる
人なのか。

ま、あの九成とチームを組む前提らしいしな。間違いなくできる人
になるんだろうさ。それも、サポートとはいえ部隊のリーダー担当
だったみたいだし。

ヒマリもかなり出来る側だしな。南空さんも、出来る側……ではあ
るし。

「……今なんか失礼なこと思わなかった？」

なんで心読むかなあ？

「まあ、全員能力はあるしい、訓練でも成績優秀だから大丈夫よお」

リーネスもそう言う辺り、なら大丈夫なのか？

それに、その上でリーネスは更に微笑んだ。

「それに、出来る補佐官も雇ってるしね？」

……それ初耳!!

「と、いうわけで！　今回は今後私達と関わるにあたり、起こりうる事態に経験値を持つてもらう為のものよ」

と、私は作戦の概要を説明してから大事なことを伝える。

「あくまで見学。戦闘は自衛に徹して、能動的な戦闘はしないこと。あと自衛隊の方々に迷惑がかかるようなことは控え、ゴミはきちんとゴミ箱に入れるか持って帰ること。家に帰るまでは実地見学です！」

「はーいー！」

元気よくアルティ―ネが返事するけど、全体的に緊張感が強いわね。

ま、実戦経験を積んでない者も多いから当然でしょう。そうであっても、ガチで異形や異能が関わるレベルの戦いになるでしょうし。

ま、それぐらいでちょうどいい。

ガチガチで固まるのもあれだけど、何の緊張感もないのもあれだわ。世の中には気を張るべきところがあるもの。

……このタイミングでの大欲情教団は、正直に言って渡りに船だ。今後を踏まえると、皆にはある程度の経験が必要になる。戦力を揃えたうえでそれができるといえるのは、間違いなく幸運と言ってもいい。

大欲情教団に感謝することになるとは思ってたわ。

ま、とは言っても緊張しすぎでミスしてもあれね。

そろそろフォローの準備をしますか。

「ま、と言っても今回はあくまで見学。安全には配慮しているから安心して？」

「それはいいけれど、どういった形で配慮しているのかしら?」
と、シルファがそう指摘する。

ふふ、いい質問ね。

「リアスが私費で、その辺りのフォローをしてくれたわ。……勇ちん、入って」

「あいよつと」

そう、今回の安全配慮は、そういったことをやってのける人材の追加補充。

友情価格ではなく、きちんと仕事に見合った対価を（リアスが）用意しての、PMCの投入だった。

「よつす! 大抵の連中と顔合わせは初めてだな? 日美っちが世話になってるぜ!」

「……えつと、お世話になりつぱなし……ですけど……?」

緋音が困惑気味なので、そろそろ紹介するのでしょうか。

「紹介するわ。こいつは接木勇儀って言って、私の前世の悪友。今はD×Dが恒常の下請け契約をしているPMCをやってるの」

「ま、そういうこつた。今回のフォロ役を担当する。ま、実力はアザゼル杯で分かってくれてるだろう?」

軽口交じりで話すけど、なんか急にぽかんとされたわね。

何かやらかしたかしら?

「……気の置けない間柄なんですね」

有利に言われて、納得したわ。

確かに、普段とはちよつと私の態度が違ってたわね。

「昔が懐かしくてね」

苦笑しながらそう言つたうえで、改めて大雑把に確認なども行つていく。

「お〜! 筋肉固い! しかもおつきい!」

「すつごーい! 実際強いけど強く見える!」

「鍛えてっからな! ほおれ力こぶう!」

亜香里やアルティーネ相手に、中々いい感じになってるわね。流石子持ち。

ま、それはそれとして。

……少し様子を確認するけど、どうやら近くに来てないみたいね。ちよつと意外だったわね。それとなく様子でも見てくるかと思っただけれど。

「カズヒ様」

と、武山黒狼が私にだけ聞こえるように小さい声で語りかける。

「和地様、来られてないようですね？」

「……ええ。信頼されてるのは事実ではあるけどね」

聡い人がいると助かるわね。

あれで天然でマメなジゴロだから、それとなく緋音達の様子を見に来るかと思っただけれど。

何より――

「日本生まれの日本育ちで、PMCのエースを張っていたなんて凄いですね！　そう思いませんが、行船さん？」

「……ええ、あ、そうですね！　凄いですね！」

――三美の様子が微妙におかしいところを、気にしていると思ったのだけれど。

勇ちゃんに感心しているヴィーナに話を振られたのに、どうやらほぼ聞いてない雰囲気。

少し前からそういうところが見えていたようだけど、大丈夫かしら？

「ま、PMCってのも基本は警備業務とかが多いんでな！　フォローは任せてくれていいぜ？　……な？」

と、周囲に太鼓判を押ししたうえで、勇ちゃんはそれとなくこちらに視線を向けている。

気づいてくれていて何よりね。その辺、頼りにしているわよ？

俺は、あまり人のいないところまで二人を連れ戻したうえで振り返る。「……こんな場所に引き込んで失礼。ただ、ちよつと話をしたいことがあるまして」

振り返り、俺はアニル達と組んでいた吸血鬼のほうを向く。

エルトーナ・バルトリ。カーミラ側の吸血鬼、その名門貴族の一角を継いだ少女だ。

クリフォト、そのトップであるリゼヴィム・リヴァン・ルシファアの悪意ある姦計にはまり、吸血鬼はその里で大きな被害を受けた。

クーデターを実行したツエペシユはもちろん、対応したカーミラにもいた内通者。そいつらが改造邪龍になって暴れたことで、双方ともに甚大な被害を受けた。更にそれによって貴族の多くが失われ、その事実もあつて引退する者や心を病んだ者も出てきている。

バルトリ家もその一つであり、今後方針を変換するしかない吸血鬼側も事情もあつて選ばれて、要は元から解放的な人物だと聞いている。

実力も結構あつたしな。黒狼や三美さんと渡り合えるレベルであり、間違いなく強者側だろう。

どの勢力も、若手が強くていいのか悪いのか。将来性は間違いなくあるけどな。

「……もしかして、白雪のことですか？」

と、俺の視線に気づいたエルトーナはすぐに悟ったらしい。

なるほど、こういう判断力もあるからこそ、ルーシアもチームメンバーに入れたってわけかもしれないな。

「ま、そういう事です。先日試合後、ちよつと気になることがありますね」

俺はそういったうえで、視線を白雪と呼ばれた女性に向ける。

小柄ではあるが、少女とは言えない外観だ。おそらく大学生レベル

であり、しかも吸血鬼になっている以上、年齢がその通りだとは言えないところもある。

そして俺が視線で促すと、白雪はちよつと肩をすくめた。

「見られとったってことですか。ま、あの時は周囲気にする余裕なんてあらへんかったから当然ですけど」

関西人か。少しなまっているが、まあそれはいい。

「ああ。あれ以来三美さんの様子がどことなくおかしくてな。……チームリーダーとしても個人としても、ちよつと無視はしたくないんだ」

本音を言ったうえで、俺は真っ直ぐに向き直ったうえで頭を下げる。

「問題のない範囲で構わない。三美さんが、過去に一体何を背負っているのか、教えてくれないか？」

闇動神備編 第三話 下半身関係の失敗談は割と尾を引く

祐斗Side

僕はリアス姉さんと共に、許可をもらったうえで揚陸部隊の様子を見学している。

たけしま級はファン・カルロスを母体としつつ、ある程度の改修が行われたライセンス生産型の揚陸艦だ。付け加えるなら、ファン・カルロスが諸外国でも評価され、日本以外でも採用している国家がある名船舶といえる。

その見学は、興味が無くても悪い事にはならないだろう。そういう判断だ。

「なるほどね。人間界の軍艦はこういう仕様になっているのね」

リアス姉さんも感心しながら見ているけど、その上でちらりと視線が兵員の待機室に向けられる。

そこには今夏の主力となる、多国籍で構成されるレイダー部隊が、実装前の状態で準備を整えていた。

「……日本を中心に開発された、新型プログライズキー。ついに実践投入されるのね」

「日本も色々と被害を受けましたからね」

昨今のテロ活動は、ザイアが余計な仕込みをしていた所為で一気に質が危険域に到達している。

特に大量生産されたプログライズキーが、技術ごと流出しているのが痛い。その所為で規模の小さいテロ組織ですら、戦車や攻撃ヘリを投入する必要性もある。

だからこそ、どの国家も同じように流出した白兵戦力を大幅拡張する技術―すなわち星辰奏者やプログライズキー―に強い関心を持っていた。

そして、日本でいくつもの大規模テロが起きたことにより、日本国は一気にその事業に参入。更に大欲情教団がらみの一件で、国民意識の刷新と地下鉱脈の獲得まで行われた。それが、一気に加速させたと言ってもいい。

僕達が来たのも、ある意味ではその技術の見学と言っている。

「リアス姉さん。これから、人間は一気に力を増していくんでしょね」

そう、僕は思わず聞いてしまう。

悪い事とは言わない。だが、懸念事項がないでもない。

異形や異能を一般人に広めていないのは、人間がそれを爆発的に進化させてしまうかもしれないからだ。事実、英雄派は神器を魔王の血を使って強化するなどという、恐ろしいことをしでかしているしね。核兵器も、考え方によつては恐ろしいものだ。

これから、人類は果たしてどこに向かっていくんだらうか。

そう、少し寒気に近いものを感じてしまう。

「そうね。人間の悪意は時として、私達悪魔すら超えることがあるもの。懸念はしてしまうでしょう」

リアス姉さんもそう言い、しかし小さく微笑んだ。

「でも同時に、人間の善意も馬鹿にならないわ。私達は、それだっただけ知っているもの」

「……そうですね」

ああ、確かにそうだ。

懸念はある。だけど、希望もある。

あとはその天秤が懸念に傾かないよう、僕達も頑張つて動いていく。ただそれだけかもしれないね。

「……元々、ウチと三美は同じ大学の同じサークルにおったんや」と、白雪さんは話始める。

「芸術系の大学だったのは知つとるか？ 海外で起きとる最近の芸術関係を調べたり真似してみるサークルだったんやけど……」

と、そこでなんかちよつと言いよどんだ。
なんだなんだ？

俺とエルトーナが首を傾げたその時だった。

「……裏でヤリサーやってん」

「また!？」

思わず絶叫したよ。

え、またヤリサー案件？ え、マジで？

おいおい、インガ姉ちゃんの件でちよつと腹いっぱいだぞ!! 二度目え!？」

思わず天を仰ぐが、白雪は慌てて両手を間にして降っている。

「勘違いせんといてな!! 基本的に任意でやってるグループさかい! 女子も十人以上おったサークルやけど、ヤリサーやとつたのは六人ぐらいやったし」

……とりあえず、その比率ならえぐいことはしてないのか？

まあ、この状況下で嘘を言うことはないだろう。その点なら安心か？

ただ、そこで更に白雪は視線を逸らしている。

「で、でな？ そのサークルには三美だけやなくて、その幼馴染もおつてな？」

嫌な予感が再発してきたぞ？

えつと、どつちかがヤリサーに属していたことが原因でおお揉めしたとか？

俺は覚悟を決めることにした方がいいんだろうかと、割と真剣に思えてきた。

「三美は二年の夏前から参加しとってな？ で、幼馴染の秋冷しゅうれい充あてるつちゆう奴がその年の冬から参加しとってん」

ん〜。それがどうしたんだろうか。

ヤリサーとはいえ任意参加なら、流石にやばい事にはならないと思うが。

ただ、気まづいかもしれないんだが。

「……ちなみに、秋冷は後輩と学生結婚しとってなあ。夫婦仲良く、入籍前に同時参加しとったわ」

「とりあえず、俺の過去に匹敵するレベルで性的に倒錯してるな」

「どんな関係だ。退廃的というか倒錯的というか。」

別の意味で不安になるが、大丈夫なんだろうか。

「ただ妊娠後も普通に新入生を食ったりしてから誘つとったりしてつてなあ。後輩のその子もたまに愚痴つとったわあ。あいつ、前は秋冷だけつて形やつたし」

「……仮にも貴族なので、正直頭痛がするんですが」

エルトーナは真剣に頭を抱えている。

まあ、吸血鬼の価値観的に、無節操にふしだらな性事情は抵抗があるかもしれないな。女系主体だと尚更か。

しかしまあ、はしやぎにはしやいでるなオイ。俺も大概性遍歴が酷いが、三美さんも八茶けてた系だったのか。

あとその結婚した奴つてのも大概だな、前はつてことは後ろはウエルカムなのかよ。

「……で、二人はそれが黒歴史だったのに、出くわして気まづくなつたとかそんな感じですか？」

白雪さんにそこを確認する。

そういう事なら、そこまで気にすることでもないだろう。というより、つついてしまつて申し訳ない気持ちに更に溢れてくる。

あとで謝っておくべきか、胸にしまつておくべきか。真剣に悩む。

ただ、白雪はそこで表情に影を差させた。

「そうやない。つーか、かなりアレなことになっとつてな？」

……どうやら、更に何かあるようだ。

「……貴方を下僕にした、その時のことが関わっているのですか？」

エルトーナは心当たりがあるようだ。

エルトーナは、俺の方を振り向くと、苦い表情を浮かべていた。

「バルトリ家は里の外側、食料となる人間の確保もあり、人間側の衰退した貴族の後援者となりつつ、そこを拠点の一つとしていました」
ふむ。

まあ、いくら里に引き籠っているか追放されて暴れるかの二択が多いとはいえ、人間の血を糧とするならそういったこともあるか。

少なくとも、現在においてはあからさまな違法行為はしてないだろう。ならばそこはいい。

問題は、そこからだろう。

視線で俺は促し、そして周囲をそれとなく警戒する。

三美さんはいないな。それに、近くに他の人もいない。なら、少し深く聞いても大丈夫か。

「私が白雪を眷属としたのは、その貴族が保有する海岸線の別荘に、死にかけている彼女を見つけたからです。たまたま私がそこにいて、日本人が珍しい地域だったこともあって、憐憫半分興味半分で助けた形ですね」

「そこから衣食住もしっかり用意してもらって、心の底から感謝してもらいます」

説明するエルトーナに感謝の意を改めて示してから、白雪は複雑な表情を浮かべる。

「三年の夏に、海外に行つて大当たりしたOGの提案でな？ クルーザーに乗って思いっきり羽目を外すつてことになったんや？ ただ、

その前に三美の奴、急に自主退学してんねん」

なるほど、な。

「三美さんは、自分に独創性が欠けていることから、芸術の道を断念したとかいう話だからな。そこは問題ないと思うが」

そういう俺だが、しかし少し思うところがある。

なんとというか、懸念事項があるな。

話の流れ的にどうも不穏を感じる上、俺の経験上尚更不安を覚える。

どうもオカ研関係者は、過去に悲劇を抱えている奴が多くいるからな。加えて、カズビや春つち、インガ姉ちゃんと下半身関係でトラウマになってもいいレベルの傷を持っている手合いも数多い。

なんだろう。表向きの事情とは別に裏があるという、そういうたえげつない可能性を察してしまった。

つまるところ、三美さんが芸術の道を諦める決心となった、そのきっかけ。それが芸術にあるという、そんな保証があったか？

いや、流石にこれは憶測が過ぎる。

俺はそこはあえて振り切り、とりあえずは白雪の話聞くことにする。

「……その後にクルーザーに乗って大はしゃぎしとったんや。ただ、ウチが一休みで外の空気を吸とったら、急に衝撃が来て意識が飛んで……その後、気づいたら吸血鬼になとった」

そう語る白雪は、その時のことを思い出したのか、寒気を感じているように震えていた。

「分からんねん。あの後調べたけど、誰一人見つかつたらんや。あそこは、そんなに陸地から離れ取らんかったのに……っ」

思った以上に闇が深い。そんな印象を感じた。

異形が関与しているのか、それとも人間側の何かしらか。

ただ一つ、なんとなく思ったことがある。

きつと、三美さんは……心で泣いているんだろう。

イツセーSide

俺は今、崩れ落ちた。

畜生……畜生！

「今夜もエツチなことをするんだな、九成の奴!？」

リーネス達と話してたら、もうそれがすぐに分かっちゃうよおおお
おお！

「うっせえよ！　ってか、いい加減アンタらはしろよな!？」

ベルナがマジでツツコミを入れるけど、俺だって文句を言いたいく
らいだっての。

なんでエロエロな毎日を送りたいのに、むしろほぼハーレムが完成
しているのに、俺はいまだに童貞なんだ。

泣いていいか？　泣いていいか？　マジ泣きしていいか!？」

「……悪かったわね！　いいじゃん、愛し合っている男女がエロいこ
とでも！　っていうかしなさいよアンタ達も!？」

南空さんが半泣きで言い返すけど、俺だってそうしたいっての!？」

なんでか上手くないかないんだよ。俺は、童貞を卒業したくてたまら
ないのにな。

してほしい時にしてくれない。してくれても、邪魔が入る。とどめ
に珍しくする気じゃない時に限って、邪魔が入らない形でアプローチ
してくる。

泣いていいかな？　泣いていいかな!？」

「……何を泣いているのよ、イツセー」

って、カズヒ?？」

「あ、終わったの?？」

「まあね。あとは少し休憩をしているだけね」

南空さんに答えてから、カズヒはこっちに呆れた視線を向けてきた。

「この状況でギャグやれるとか、天然で前任軍曹とかに向いてそうね」「うっせえよー。当たり前前にエッチができるやつに、今の俺の気持ちは分からねえ！」

俺が涙を浮かべてそう絶叫すると、カズヒはちよつと視線を逸らした。

「気まずいよな？ なら気遣ってくれ！ 主に俺の童貞を卒業させる手伝いをしてくれ。」

なんで俺はいまだに童貞なんだ。俺はもちろん、リアス達だってオツケーなどころがあるのにだ。なんで俺は、童貞なのに同居人達はエッチしているんだ。

ちよつと殺意が漏れそうになるけど、カズヒは静かに頷いてた。

「そういう事なら任せなさい。こちらもそろそろ準備を進めておくわ」

……………え？

「ちよつとカズヒい？ 流石にそれは……………ねえ？」

「やりすぎだつて。和地君泣くよ？」

リーネスと枉法さんが悟ったのかたしなめるけど、カズヒは首を横に振った。

「私じゃないし、いきなりではないわ。……………一つ手を思いついたのよ！ 一つの手？」

俺は、俺は――

「期待していいのかな?!」

「うーん。絶対頓珍漢な形で失敗しそう」

俺の期待を後ろから破壊しないでくれ、リヴァさん!?

「……………つってもどうすんだよ。いや、いい加減ステップを踏めって言いたいけどよ?」

「簡単にいきそうだけど、全然いかないもんね」

ベルナも成田さんも、怖いこと言わないでくれ!

でも、希望があるなら頑張れる。

そう、俺は一步を踏み出せるかもしれないんだからな！

「俺は、この戦いが終わったら童貞が卒業できるんだ！」

「『『『…嫌な死亡フラグ!』『』『』』」

なんて失礼な合唱なんだ!?

闇動神備編 第四話 攻略戦は順調です

カズヒSide

作戦開始と共に、私は使い魔を飛ばして戦場を確認している。

奇襲に近い形だったけれど、やはり対応はされている。大欲情教団、やはり練度が高くて厄介ね。

性欲に連なる高い士気。更にそれを訓練に回すことによる練度も相応。そして天才をこじらせた変態どもにより、優れた技術力。

大欲情教団は強大な組織であり、厄介以外の何物でもない。展開されるのは、何度も見てきた小型の人型兵器。

股間部にコックピットブロックを持つ、股幅と肩幅の広い人型フレーム。しかも股間から砲撃が放たれるとかいう、ツツコミどころの塊。

しかも忌々しいことに、奴らの人工神器技術は性欲に呼応して力を引き出す設計らしい。結果として性欲が人体的に最も集まる股間部に使用者を搭載することで効率化が図られている。そして性欲において奴らが低いわけがない。

……地味に中級悪魔でも手こずるレベルだ。本来、自衛隊でも勝てる相手ではないわけだ。

だが、今回は違う。

「全部隊、戦闘開始！」

自衛隊の部隊長が声を張り上げ、同時に反対側から攻撃が当たる。

囃作戦は見事に成功し、敵部隊は先制で被害を受けている形ね。

そして、今回その戦いを優勢にする切り札が突貫した。

「GOOOOO!!」

正面から突貫するのは、イノシシのライダーモデルが装着された新型ライダー。

対。

豪快に敵と激突するパーシングボアレイダーに対し、ジャパニング
デИАレイダーは流れるように敵の猛攻を受け流し掻い潜る、仕事人
のような雰囲気を持つ。

設計思想の違い……いえ、お国柄の違いかしらね。日本と米国では
技術の使い方に違いもあるし。

この調子なら、この戦闘は連合軍が有利。それは間違いない。

奇襲を受けた上に隠し玉も貰っているものね。圧倒的に大欲情教
団が不利でなければいけないでしょう。

とはいえ、あいつらも無能ではない。

ここからが本番になる。それは確実だわ。

さて、私達が派手に出張る必要が無ければいいんだけどね。

祐斗Side

戦闘は激しいけれど、今のところは僕達が積極的に動く段階ではな
い。

後詰の一環として参加しているけど、この作戦は基本的に人間側の
作戦だしね。異形の僕達は積極的に関与できないといってもいい。

ただ、不穏な感覚も覚えている。

「意外と、抵抗が大きくないですね」

「そうですね。なんとというか、拍子抜けですわね」

そう、朱乃さんと同意見になるぐらいには、あの変態達は脅威では
ないのだ。

これまで戦ってきた彼らは、もつと脅威に感じていたと思う。それがどうしたというのか。なんというか、圧力があまりない。僕達がこれをやったのなら、僕らが強くなったと勘違いしていたかもしれない。

だが、対抗しているのは人間の軍隊だ。

言つては何だが、彼らと僕達なら僕達の方が個では圧倒している自覚がある。客観的に見ても断言できる。

それが、数で圧倒しているとはいえ大欲情教団を相手にこうも戦えている。これに違和感を覚えてしまう。

「大欲情教団にも、ピンキリがあるってという話でしょうかあ……？」
ギヤスパ―君がそう考えこむけど、もしかするとそうなのかもしれない。

僕達が今まで戦ってきたのは、大欲情教団にとつても精鋭だった。そう考えればつじつまも合うだろう。

「……単に、本部と教主を失って士気が下がったのかもしれない」
小猫ちゃんの言い分もあり得るだろうね。

相当カリスマだったようだし、本部である地下性都も、日本政府が今獲得している。神滅具や地下鉦脈を考えれば、失った影響力は絶大だろう。

それも考えると、心身共に弱体化している可能性は確かにある。

だからこそ、それなりの警戒はするべきだろう。

そういう手合いが暴発したときは、単純な強弱とは別の意味で面倒なことになる。クリフォトが実権を握り切る前、駒王学園が襲撃を受けたガス抜きの特もあるしね。

……少し、警戒心を強く持った方がよさそうかな？

俺達兵藤一誠眷族は、外側の方を警戒する動きになっていた。
なにせ、俺達つて基本的に派手だからね。

赤龍帝の鎧はレイダーとは毛色が違いすぎて注目を浴びるだろう。
ゼノヴィアのデュランダルも破壊力が大きいから目立つだろうし、レ
イヴェルの不死が発現すると、衆目を集めてしまうだろうし。

なので、俺達離れたところで外周を飛びながら様子を確認してい
る。

「……島ごと吹き飛ばせればすぐ終わるのですが、そういうわけにも
いかないのが難儀ですわね」

「だな。久しぶりにまずデュランダル砲を放ちたいぐらいだ」

パワーを如何に叩きつけるかのレイヴェルと、基本的には力こそパ
ワーなゼノヴィアが物騒だ。

うん、レーティングゲームとか疑似フィールドならともかく、ここ
日本だから。やったらいろんな人に怒られるからね？

ただ、あいつらが相手だとそれぐらいしたくもなるよなあ。

俺も大概変態だけど、あいつらには絶対負けるし。

俺やファーブニルもたまにやるけど、変態つてはたから見ると意味
不明なとんでもないことをたまにやるからなあ。その辺りを考える
とちよつと怖い。

気づいた時には何かが起きる。そしてそれで戦局がひっくり返る。

……本当に、俺つて実践しているから警戒しちまうよ。

俺がリアスのおっぱいで何かやるのが、グレモリー眷属の必勝パ
ターンなんて言われてるし。実際言われた時には形勢がひっくり
返つたし。

あの変態達だつて神器持ちが何人かいるわけで、それを考えると本
当に警戒しないとなあ。

それに、他にも警戒することはあるだろうし。

大欲情教団は、俺達がロキや禍の団と三つ巴で戦った時に第四勢力

として引つ掻き回せるだけの部隊を送り込めた。

神聖糾弾同盟との一件でも、他勢力が入り乱れる大乱戦の一角だった。

つまり、あいつらは俺達だけでなく禍の団やサウザンドフォーも警戒する組織なんだ。

もし、もしもだ。

奴らのどちらかがこの作戦を知ったとしてだ。

何もしない、そんな虫のいい話があるんだろうか？

「……ロスヴァイセさん。外の方の警戒もお願いします」

「分かっています。とりあえず、今のところは大丈夫ですよ」

ありがとうございます。俺達だと、それが一番できるのがロスヴァイセさんなので頼つてます。

頼もしいロスヴァイセさんに心から感謝していると、シャルロットが少し目を細めて島の方を見ていた。

「イツセー、念の為他のメンバーと連絡を取ってみますか？」

ん、どういうこと？

「相手はあの大欲情教団です。もしかすると我々に気づいている可能性もありますし、一度情報交換して再確認……ぐらいなら問題ないと思いますよ」

「なるほど。それぐらいなら問題ないか」

そうだな、その方が――

――ん？

さて、現状はいい感じだけど、今後はどうなるかだな。

相手は大欲情教団であり、油断は禁物。

少し前には意味不明な現象も多かった以上、トラブルが発生する可能性もあり得る。

壊滅的打撃を受けたとはいえ、禍の団は新たな象徴を得て立て直しを図っている。

そして、サウザンドフォースに至ってはいまだ健在。

何か起きてても不思議ではない。その辺りは真剣に考慮すべきだ。

だからこそ、呼吸を整え、常に対応ができる状態を。

そう思った時、通信が繋がった。

『みんなヤバイ！ 海からなんか来てる!?!』

イツセー？

その声に、俺はイツセー達がいる方向を確認した。

そして、軽く眩暈を覚えた

闇動神備編 第五話 ギャグみたいな事態で死屍
累々になる事態が本当にある

イツセーSide

目が、目が痛い！

具体的にはスパイスで目が痛い!!

「くっ！ なんだあれは!?!」

驚愕してるゼノヴィアだけど、俺達もうかつに手が出せない。

だって、あれを倒したら海洋汚染確定だし!?!

「な、なんだあれは!?!」

「麻婆豆腐のクジラだと!?! っていうかでかつ!?!」

自衛隊の人達も困惑してるけど、本当にそれなんだよなあ。

全長90mぐらいの、巨大すぎる麻婆豆腐でできたクジラ。そういうしかない物体が、海面から飛び上がった。

そして海にまた戻るけど、影響で大津波が発生したし。

「上に登れええええええええつ!?!」

「ぎゃあああああああ!?!」

「ジーザアアアアアアアッス!?!」

もうどこもかしこも大混乱だし!

「な、なんか分からんが今だ! 離脱するぞ!!」

「麻婆豆腐か……ありだな!」

あと逃げようとしてる大欲情教団が、変なインスピレーションを得ている!?!

ああもう、どうしろってんだ!?

「迂闊な攻撃はしてはいけません! おそらくあれは、九州に出てきたラーメンのイソギンチャクと同じものですわ!」

レイヴェルが慌てて声を出すけど、やっぱ似たようなものか、中華料理だしね！

あれは本当に大変だった。

人々をラーメンの奴隷にするラーメンイソギンチャク。あと渦の団の最高幹部らしいラーメンの豚軍団を操る怪人。立ち向かうのもラーメンでグレンデルを再現したヴァーリで、ラーメンのゲシユタルト崩壊だった。

そして倒した後も結構大変だった。

倒されたイソギンチャクは豚骨ラーメンに戻り、十メートルを超える巨大なイソギンチャクを構築していた体積のラーメンが、町中に津波となったからだ。

死人が出なかつたのは幸いだけど、後始末が大変だったらしい。

……ラーメンの津波つてなんだよ。今でもそう思う。

だから奴を倒した場合、そのまま麻婆豆腐が海に流れ出すかもしれない。

あのサイズの刺激物が海に流れ出したら、割と笑えない海洋汚染だ。

なので、俺達は今魔法が使えるメンバーが集まって、空中に打ち上げる準備中。そのあと、俺が∞ブラスターで吹っ飛ばし、リアスが三つぐらい消滅の魔星を出して残骸を掃除する予定だ。

ただ暴れ出すは周りで何人か麻婆豆腐を作り出そうとする話で、結構大変。動きも早いし波も出るしで、割と無視できない。

そして何より――

「……そっち行つたぞお！」

自衛隊の方が教えてくれたので、俺はすぐに拳を握り締めると飛び出した。

そこから出てきたのは、自我未覚醒体のステラフレーム。

……どうやら禍の団の残党、こいつを追跡してたみたいだ。

自我未覚醒体と言ってもステラフレームは虎の子だろうけど、俺達がいるのに気づくのが遅れたんだろう。逃げる為に奥の手を出して、状況を引つ掻き回そうとしてるんだと思う。

まったく。ステラフレームは真女王でも手こずるからな。疑似龍神化は∞ブラスターに取っておかないとだし、厄介だな……まったく！
「……なんだと!？」

と、そこで自衛隊の人が驚愕してた。

今度は一体何が―

「たけしまに敵襲！ 今、迎撃している最中だそうだ」

―マジかよ!？」

くそ、こうなったら強引にでも―

「と思ったらもう終わったぞ!？」

―あれえ!？」

Other side

「隊長、撤退は何とか完了いたしました!」

「そうか。例の通信装置は大丈夫か?」

「はっ！ 無事に回収を完了しております!」

「それは不幸中の幸いな。……我らの雌伏は、すべてこの通信装置が大事なのだから」

「移設が可能だと判明したのは行幸でした。ですが、何時になるのでしょうか?」

「それは分らん。だが、決して忘れてはならないことがある」

「世界をみだらで包むことこそが我らの、世界の本懐。ならばそれは、

この世界だけに留まってはならないのだ……！」

和地 Side

ふう。危ないところだった。

念の為、事態が動いてからたけしまの護衛に回ってて良かったな。出ないと死傷者が結構出たかもしれないな。

「おーっし！ お前ら無事かあ？ 点呼！」

「は、はい！ 一番、鰐川です！」

……とりあえず、新参メンバーは無事だな。カズヒが勇儀さんを付けていてくれて良かった。

「ったく。ステラフレームの一機は足止めに回し、もう片方を旗艦に差し向けて攪乱させる狙いか？」

「そうぼやきながら、俺は真つ二つにしたステラフレームを軽くつついてみる。」

既に自壊プログラムは機能しているようだが、とりあえずは一安心だろう。

他にも襲撃を仕掛けてきたやつはいたが、俺がステラフレームの撃破に成功したら即座に撤退した。

……まったく。やっとこさ倒せたのかと思うと苦労するな。

ま、流石に一瞬で倒すのは難儀な奴なんだが、今回はこつちが圧倒的有利だったからな。

「久しぶりのリスタートだけど、まあ行けたわね」

と、カズヒも周辺警戒をしながら、リスタートのまま念の為待機している。

今回、自衛隊の被害も考慮してリスタートバツクルを使つて一気に仕掛けた結果がこれだ。

リスタートのポテンシャルがそもそも高く、更に俺とカズヒの極晁を描いた親和性もあり、タツグで仕掛ければヴァーリが魔王化を使つても押し切れる。

それを相手に速攻を駆けられれば、ステラフレームでも自我未覚醒体がどうにかするのは不可能に近い。単独なら尚更だ。

最も、手際のいい撤退だったのでそれ止まりではあるわけだが。

「……どう思う、カズヒ？」

「ま、ついでにちよっかいでしょう」

どうやら同意見みたいだな。

禍の団はおそらく、あの麻婆豆腐鯨を追いかけていたつてところだろう。しかし鯨は俺達と大欲情教団の戦いに入つて行つてしまった。禍の団残党は虎の子のステラフレームを出して、潰せるならそれでいいかとちよっかいをかけたわけだ。

ま、この調子なら今から探すのは無駄骨になるだろう。逃げに徹した潜水艦は厄介だしな。

「とはいえ、ステラフレームをこんな使い捨てじみた真似ができるだけ持つてみたいね」

「そこだよなあ。ミザリ無しで増産できるか疑問だけど、自我覚醒体がクソ親父達で打ち止めて確信もないし」

そういう意味だと、まだまだ禍の団は厄介なんだろう。

自我覚醒体のステラフレームは、D×Dでも多少手古摺ることはあり得るレベルだ。人造惑星の星光もあるし、場合によっては足元をすくわれかねない。

もし複数が初見殺しを同時多発でぶちかませば、俺達だってやばいかもしれない。

そういう意味では、今後も備えておく必要があるそうだな。

なんというか、互いのため息をつきたいところだな。

そう思いながら、残敵が潜んでないか念の為確認していると、やばいのが見えた。

「……………」

三美さん、顔色が真っ青を通り越して真っ白なんだが。
……………」

「和地」

と、そこでカズヒが俺に声をかける。

何事かと思ひ振り返ると、カズヒは苦笑気味の様子で肩をすくめていた。

「あの条件はまだ消えてないわ。増やすならしつかり守り切りなさい。手伝いはしてあげるわ」

…………敵わないというかなんというか。

Other side

「ジョンの奴から報告来たぜー。例の異世界案件、表の連合部隊＋チームD×Dの大欲情教団潰しに突つかかったってよ」

「…………そうか。我々が渡したステラフレーム、役に立ったか？」

「ま、陽動ぐらいにはなったみたいだぜ？ もうちよつとちよつかいかけたかったが、今のグレモリー眷属相手は荷が重かったな」

「攻撃潜水艦サイズに備え付けられる数だからな。まあ仕方がないだろう。とはいえ、別動隊もある以上慌てる段階ではないな」

「怖いねー。旧魔王派の連中もだが、アンタも立ち直り早いんじゃない？」

「当然だ。新たな象徴も据えているし、旧魔王派も英雄派もある程度

は残っている。ならこちらは研究のし甲斐があるともさ」

「……やあ、オイケスに美緒さん。どうも面倒になつてゐるみたいだね
？」

「……あてる充か」

「僕がテストで貸した人形も、戦闘を経験したみたいだね。よければ
話を聞かせてくれるかい？」

闇動神備編 第六話 冥府、腰を上げる

祐斗Side

一時はどうなる事かと思つたし、作戦も逃げられた者が多いから微妙な結果だけど、何とか乗り切れた。

禍の団が動いている事といい、乱入者だったあの食品による獣は油断できないだろう。というより、最悪の場合は笑えない環境汚染になりかねない。

イツセー君とリアス姉さんが跡形もなく吹き飛ばしてくれたけど、あの鯨は四川風麻婆豆腐で出来ていたみたいだしね。あの刺激物がそのまま海に流れるのは、ちよつと笑えない被害になりそうだとはいえ、一旦帰つてこれたし後のことは後で考えるべきか。

まだ時間は日が沈んだばかりだけど、アザゼル杯の試合もあるしね。そろそろ部屋に行つて合流した方がいいかな？

そう思つた時、携帯に電話が来た。確認すると、匙君からだ。

「……………どうしたんだい？」

僕が電話に出ると、何やら様子がおかしい。

息を呑んでいるというか、戦慄しているというか。

ただ、もし戦闘系のトラブルで呼ぶのなら携帯ということはないだろう。

どこかでそんなレベルの試合があつたのだろうか？ 特に注目するレベルの試合はなかつた気がするけど。

『おい、今すぐ「西遊記」チームと「黒」チームの試合を確認しろ』

その声には、明らかに緊張感がにじみ出ている。

一体何が……………いや、そうだ。

確か黒チームと激突しているのは――

『どつちも負けかけてるぞ。ハーデスの息がかかったチームにだ!』

――偉大なる冥府神の従僕チーム。ラツィイカ・レヴィアタンの率いるチームじゃないか。

和地 Side

どうやら非常事態というほかないようだ。

俺は試合会場に到達し、思わず目を疑いそうになった。

試合を映像で観戦していたシトリ―眷属から、連絡を受けたのが十分ほど前。

そしてそこから俺達が分散。イッサー達が西遊記チームに向かっている間、黒チームの方に俺達が向かってくるまでの時間に、試合は終局へと向かっていた。

西遊記チームはD×Dのサブリーダーでもある、初代孫悟空殿が王を務めるチーム。メンバーは僅か五名ながら、優勝候補の一角と呼ばれる手練れ中の手練れだ。

また黒チームもまた優勝候補。アースガルスと対立していた北欧の巨人達。その王たるスルトが率いる、これまた優勝候補レベルの凄腕揃い。

その優勝候補が、どちらも苦戦を通り越して追い込まれている。そんな連絡が来たわけだ。

既にさらりと確認したが、懸念事項はどちらもハーデスの息がかかっているだろうこと。西遊記チームとかち合っているのは、上級死神であるゼノとやらが率いているチーム。名前は「ブラックサタン・オブ・ダークネス・ドラゴンキング」とかいう長いチーム名だ。何かの嫌味だろうかど勘繰りたくなる。

そして問題は、黒チームの相手。

そいつらは「偉大なる冥府神の従僕」チーム。

そうだ。あのラツイーカ・レヴィアタンが率いる、ハーデスに仕えていると明言しているチームだ。

優勝候補とは言わないレベルだが、それでも三大勢力の手練れが集まったチームを撃破し、そのタイミングで名乗りを上げたことで一躍注目されているチーム。目立ちすぎてデコイではないかと思いたくなるが、なんだかんだで実力者が集まっており、手加減してわざと目立たない試合運びまで出来る辺り、まごうことなく精鋭だろう。

だが、これは流石に予想外すぎる。

優勝候補の一角を相手に、ラツイーカ達は熾烈な戦いを成立させていた。

そして俺達が到着した時、決着はついた。

ラツイーカはボロボロで苦笑いをしている。そしてカバーをしている二人の人間は、満身創痍。

だが、その眼前でスルトが消滅の光に包まれ倒れ伏した。

それ以外には誰もいない。そんな、熾烈な戦いの後。

かろうじてフィールドが残っている状態。そんな、今見ただけで壮絶な戦いが起きたのだと分かる状況。

それを見守っていた観客達は、誰もがその光景に目を奪われている。誰一人として、声を上げることができない。

だが、スルトがリタイアの転送を終えた直後。ラツイーカは微笑みながらゆっくりと動く。

伸びた手が、握り締められたその時――

「……来ていたか、リアス・グレモリー眷属」

と、近くから声がかかる。

振り返れば、そこには見たことのある上級悪魔が一人。

あ、確かバース・フルカスだったっけ。

「バースだったわね。貴方達も見に来ていたの？」

「ええ、リアス嬢。流石に、あれだけの純血悪魔がハーデスの傘下にいるなど無視できませんよ」

と、リアスにバースは答えている。

どうも考え込んでいるし、奴らにとっても無視できないのか。

「問題は、何故ラツィイカの傘下にしなかったのか。それなら旧魔王派から奴が引き抜いたことにできる分、余計な疑念も抱かずに済むだろうに」

バースは考え込んでいるけど、確かにそこも妙だな。

と思っっていると、足音が響いた。

「……おそらくは、あっちが本命なんだろうよ」

あ、ノア・ベリアルだ。

「来ていたのか、ノア」

「あんたが来てる方が驚きだよ、バース。ま、調子乗って油断しないでくれんのは助かるがな」

バースとちよつと話してから、ノアは勝利したことで映像が流れている、ハーデス陣営のチームを見据えている。

「ラツィイカは、おそらく本命を探る力を少しでも削る為のブラフだ。そして本命が用意できたから、テストを兼ねて試合に出した。……問題は、あれで全部って言いきれないところだな」

……おいおい、勘弁してくれよ。

あいつらが、ハーデスにとつての本命だっけ？

それだけの力があるのは分かる、分かるけど――

「……なんで、囃も本命も悪魔なのよ……」

――リアスがため息をついていいぐらい、悪魔だらけじゃねえか。

『フアフアフア。初陣はそこそこのようじゃのお?』

「ええ。あの西遊記チームが相手なのは都合がいいですし、ラツイーカに送ったメンバーも大暴れをしてくれたようで何よりです」

『超越者クラス二体に魔王クラス四体。そしてこちらには、それぞれ一体ずつ残しておる。十分すぎる戦力だ』

「それはもう。意外とたくさん作れて二十万體、その大半を上級以上にできましたし。ま、壊死が酷いので当分は製造できませんが」

『構わぬ。中級以下はお主が好きに使い潰せばよい。十分だろう?』

「個人的には、もつと時間をかけてみたかったですけどね? でもまあ、今後魔王クラスを狙える者達は八体もいますし……動くに足るだけの戦力にはなりましたね?」

『うむ。これだけの戦力があれば、勝の目も十分ある。それならば呼応する者もおるじやろう』

「私は既に、アースガルズに連なる者達にスカウトをかけております。もつとも、ヘル様は睨まれているので難しいでしょうけど」

『構わぬ。それに数だけあっても意味がない。超越者や主神を相手どるのなら尚更だ』

「了解です。では、私は精鋭を用意する準備に入ります」

『……例の連中か』

「はい。強敵にメンバーが心折れ、チームがリタイアした者達から順番に」

『先も言ったが、儂は死者を素体とする人造惑星も、死者の影法師を呼び出す英霊召喚も好まぬ。貴様に与えた裁量が許す範囲内にとどめ

ておけ』

「承知しております。貴方の機嫌を損ねるのは、私としても御免被り
ますので」

闇動神備編 第七話 一度やらかすと一生恨まれる
こともままあるもの。

和地 Side

とりあえず、俺達は一旦イツセー達と合流した。

どうやらあっちの試合も終わったようで、西遊記チームは敗北した
そうだ。

「リアス。こちらも大概だったけれど、そっちはもっと大概みたいね
?」

「ええ。あれだけの力量を持つ悪魔が、ハーデス達についている。こ
の時点で厄介なことだわ」

カズヒもリアス先輩もため息をついたけど、問題はそこに終わらな
い。

「……特に、あの悪魔達を私達が一切知らないこと。あれだけの力を
持つ悪魔が、今の今まで姿を見せてないなんておかしいわ」

そう、リアス先輩の指摘が最重要。

神クラスの中でも武闘派の集まりである、西遊記チーム。その西遊
記チームを相手に、優位性を保った状態で勝利した、ブラックサタン・
オブ・ダークネス・ドラゴンキングチーム。

その戦力の中核を担う、明らかに異常な強さを持つ悪魔達。

俺も映像をさらりと確認したが、どう考えても全員魔王クラスはあ
る。特に二名はリゼヴィムと真っ向勝負ができるだろうポテンシャ
ル、超越者クラスに到達しているだろう。

それだけの力量を持つ悪魔が、今の今まで見つかっていなかった?
そして寄りにもよって、あれだけの人数がハーデスにスカウトされ

と思っただけど、それより先に一步前に入る人物が出てきた。俺達の前に出ると、その女性は礼儀正しい動きで一礼する。

「お初にお目にかかります、グレモリー次期当主リアス・グレモリー様。及び天使長ミカエル様のA、^{エイズ}紫藤イリナ様」

そう一礼する女性は、その上でにつこりを微笑んだ。

「私、サンブック王国第二王女のエカテリーナ・ロド・サンブックと申します。以後お見知りおきを」

その挨拶に、真つ先に警戒の色を濃くしたのはリアス先輩でもカズヒでもない。

「……あく、そういうこと」

リヴァねえだ。

意味深に笑みを深めると、エカテリーナとかいう女性も笑みを深くする。

その上で、エカテリーナは胸を張った。

「隠し立てする理由はありません。我々サンブック王国は、公式にハーデス様の活動を支援することを表明する予定です。私はその名代として、こうしてラツイカ殿のチームメンバーとして活動しております」

……っ

思わず警戒心を浮かべるが、仕方がないだろう。

国家の王族が、こうして堂々と、国を挙げてハーデスを支援すると宣言する。

事実上、遠回しな宣戦布告だ。ハーデスと決着をつける時に矢面に立つだろう俺達の前で言う辺り、自分達が相手になるという意味にとれる。

そんな警戒心を齎すが――

「……ふふ、エカテリーナも豪胆ね」

――問題は、近くの二人だ。

オーラが割とシャレにならない。間違いない、こいつは超越者クラスだ。

「初めまして、チームD×Dの皆さん。私はヴェリネ、隣はバルベリ

スつていうの」

「……」

「凄まじいオーラを放つ男女悪魔。」

ただ、どこか無邪気な雰囲気を感じるのは気の所為だろうか。

……なんだろう、オーフィスを思い出すな。

あいつも無邪気な子供じみているし、性能はシャレにならない。この二人も同じレベルだろうから連想したんだろうか。

俺以外にも戦慄しているな。ヴァーリですら多少戦慄しているぞ。

そしてヴェリネの方は、それを面白そうに見ている。

「ちなみに、私達二人は超越者クラス……だそうよ?」

……やはりか。

「グレシル達も魔王クラスつて話だし、きつとあなた達ともいい勝負ができるかも? その時はよろしくね?」

……やはりかあ。

魔王クラス四人に、超越者クラス二人。それだけいれば、人数が僅か五名の西遊記チームをどうにかする余地もあるだろう。

問題は、ハーデスがどうやってそんなメンツを引き入れたのかつてところだろう。

「ま、これ以上のおしやべりはハーデス様も怒りそうだ。今日のところはこの辺で……ね?」

ラツイカがそう切り上げ、そして全員を連れ立って去っていく。

『……あれだけの悪魔が、今まで隠れ潜んでいただと……?』

『……まったく、この時代はどうなっている……っ』

ドライグとアルビオンも戦慄している。

本当に、どういった事態になっているんだよ。

「……アジュカ。ハーデスは僕らが思っている以上に力をつけているみたいだね」

「ええ。リアスから報告がありました。魔王クラスや超越者クラスの悪魔を擁し、更に人間世界の国家が直接ハーデス派であることを表明しました」

「やってくれるというかなんというか。これがきつかけで、新たに協力する人間世界の国家も出かねない」

「その件ですがシヴァ様。その可能性が大きくなりかねない事態になっっているようです」

「……そうなのかい？」

「はい。ハーデス達につくことを表明、もしくはそう取るしかない者達が多数確認されています。どうやら、我々に対する不満を抱いている者達が焚きつけられているのでしよう」

「へえ。ハーデスが人間達にまでスカウトの手を広げるとはね。そういうのは最小限にしているものと思ったけど」

「裏で手を貸している者達がいるのでしよう。そのものの発案だとすれば、納得もいきます」

「あとで、ヴィーザルやアポロンとも話した方がいいかもね。特にヴィーザルには、ヘルの監視を強めてもらわないと」

「ロキの娘である彼女は、かなりの懸念材料ですからね。こちらからも監視の要員は派遣しましょう」

「ふふふ。こういうのは不謹慎だけど、ハーデス達も思った以上に切り札を持っているようだ。ここで見せてない札も、いくつがあるかね？」

「……はい！ ではこれより、対策会議を始めます！」

と、リヴァさんが音頭を取る形で、急遽集まれたメンバーが会議をすることになった。

議題は、初代の爺さん達のチームやらスルトが率いる黒チームを打倒した、ハーデスの配下と思われるチームについて。

特にリアスたちと、曹操達が話すことがあるらしいので集まれるメンバーが全員集合した形になる。

「とはいえ、対策といえるものは現段階では難しいので、情報共有に留まるでしょうが」

と、ソーナ先輩が口火を切った。

そして映し出したのは、偉大なる冥府神の従僕チームの一人。

僧侶の駒を担当しているエカテリーナと、騎士の駒を担当している女の女の人。

どっちもラツイーカと共に、黒チームを全滅させた時も残っていたメンバーだ。

特に騎士の駒の方は、俺達を見てから胃の辺りを抑えてたな。

で、この二人について心当たりがいる人がいると。

「まずは騎士の方ですが、彼女は元駒王学園生です」

「え、本当に!？」

思わず素っ頓狂な声を上げたけど、俺さっぱり知らないんだけど。

あ、でも年上っぽかったし、俺が入る前の人かも？

そう思っていたけど、ソーナ会長は割と困った様子で眼鏡を治していた。

「彼女の名前は、いちぎき壺崎虎美。元駒王学園高等部所属でしたが、三年の春に自主退学をしています」

じ、自主退学？

駒王学園って、偏差値も高い方だし自分から辞める理由はなさそうだけどなあ。

首を傾げていると、何故か卒業生の人達の視線が苦笑い気味に俺に向けられた。

えつと……何事？

「……その、彼女は自主退学前に当時の風紀委員・生徒会・校長にある直談判をしております。間違いなくそれが通らなかつたことが理由で退学……いえ」

と、ソーナ先輩は俺の目を真つ直ぐ見た。

「素直に言いますよ。貴方の退学処分及び刑事告訴を止められたことが理由で、彼女は除籍願を出したうえで学園を去りました」

………はい？

五秒ぐらい考えてから、俺は頭の中でかみ砕いた。

「俺の所為ですか!? あ、いやまあ確かに起こりそうですけど!」

「まあ、私達と会う前の貴方なら、そうなるわね」

「それにしたって過激派な気もしますが、起こりますよね」

うおおおおお！ カズヒとシャルロットに言われると納得するしかねええええつ！

そ、そうか！ 俺のかつての狼藉は、そこまで酷い事だったのか。そこまですか!? 俺を警察に叩き込めないのなら、学園から追い出せないのなら、いた事実すら嫌になるぐらいですか!?

「まあ、彼女自身は被害を受けておらず、被害を受けた女子側も「ボコったんだしそこまでしなくても」と言っていたからこそ止められたわけですが。どうもその反応の方が耐えがたかった雰囲気でしたし」

ソーナ先輩はそう言うけど、そこまですか!?

いや、だからってハーデスにつくほど!? そこまでえ!?

「……思い出したわ。彼女、確かかなり苛烈な性格で知られていたわね」

「駒王学園ではかなり珍しいタイプでしたわね」

リアスと朱乃さんもそう言うけど、そこまでつすか!?

いや、相手が苛烈なだけだと思いたい。いくら何でもそれだけでハーデスにつくなんて、そっちの方が問題だと思いたい！

「……そしてもう一人。エカテリーナ・ロド・サンブツクについてです。彼女についてはまず、サンブツク王国について説明するべきでしょうね」

ソーナ会長がそう言うと、一旦後ろに下がって今度はグリゼルダさんが前に出た。

「では、比較的知識が多い側である私が。……サンブツク王国は地中海内のいくつかの島々が集まってできた、数年前に独立した国家です」

なるほど。シルヴァスタン共和国みたいなものだろうか。

ただ、今のご時世で独立って中々難しいと思うんだ。特に人間世界で王国って、かなり大変だろうに。

「サンブツク王家は千年ほど前に小国を興していた一族です。その彼らが地中海の島々で新たに独立国を興そうとしましたが、これには大きな要因があります」

というと？

首を傾げると、グリゼルダさんは俺達を見渡した。

「サンブツク王家はサウザンドデイストラクション後有数の速さで^{エスベラント}星辰奏者を軍事採用した国家です。これによる陸軍戦力の圧倒的優勢の確保と、浮いたりソースで対空兵装を重質化させたことが大きいでしょう」

「……これは仮説ですが、サウザー諸島連合は地中海における対異形の橋頭堡確保として、サンブツク王家を利用したかったのではないのでしょうか？ その一環として星辰奏者技術を使ってコントロールを凶っていたところにサウザンドデイストラクションが起き、サンブツク運営陣が結果的に武力を獲得して動く理由になったと」

ソーナ先輩が仮説を立てるけど、なるほどお。

サウザー諸島連合って色々考えていたようだし、対異形を踏まえて

そんなことをやっていた可能性はあるのか。他にも色々ありそうだな。

「……確か、海軍戦力もサウザー諸島連合から調達していましたね。サウザンドデイストラクシヨン後の混乱をついたとはいえ、かなり早く早期に揃えていたので、なおさら間違いないでしょう」

「あく。最初つからもう予定だったから、そのコネで一気にゲツトってかんじかあ」

小猫ちゃんやデュリオがそんなことを言い合う中、グリゼルダさんは咳払いで俺たちに意識を向けさせる。

「話を戻しますが、エカテリーナ・ロド・サンブックは現国王の二女です。王家は革命及びその後の安定化まで、直接活動しない婦女子を離縁して、諸外国に避難させていたのです……が」

ここで、グリゼルダさんは小さくため息をついた。

え、ここからが重要ってこと？

でも何が起きたんだろう。そんなことを思っていたら、曹操が苦笑いをしてながら立ち上がった。

え、関係者？

「そこから先は元凶の俺達が話そう。……簡潔にまとめると、知らずに実験の為に誘拐したというわけだ」

……あ、なるほど。

そういえば、英雄派って禁手到達の方法を確立させる為に色々やってたな。

手当たり次第に異形側が確保してない神器保有者を誘拐。洗脳したうえで、神器にブーストして保有者が死んでもおかしくない負荷をかける蛇を投与。その後俺たちのように強い異形の者達と戦わせて、命がけの戦いで禁手の覚醒を促す。

その結果、英雄派は殆どのメンバーが禁手に到達していた。洗脳されていたメンバーは後継私掠船団の情報提供で助かったけど、それはあくまで捕縛できた人だけだ。中には自分から曹操達の力になる為に実験台になった奴もいたけど、死者がそいつらだけってわけでもないだろうしな。

……でも一応、曹操達って処罰を受けてるんだけどなあ。

「まあ、イツセーに対する対応と同じで足りてないと思ってるんでしょうね。これに関しては、言いたい奴が出るのは仕方がないでしょう」

と、カズヒがため息交じりでそう言った。

「危うく自分達は操られたまま殺されるところで、同じように死んだ者達がたくさんいる。公開処刑でも生ぬるいと考える奴だっているでしょう。イツセーに関しても、実際刑事訴訟を受けたり退学処分になってもおかしくないわけだし」

「痛いところをついてくれる」

「うう。こんなところで火種になるなんて……」

曹操も俺もついボヤいてしまう。

「えく？ でもハーデス達って、大昔のことでこっちにぐちぐち言ってる来てるでしょ？ 正直あんなクレーマーにつく奴らなんて、遠慮する必要なくありません？」

と、シトリー眷属の仁村さんが言ってきた。

「まく確かにですなあ。それにおっぱいドラゴンの旦那も、英雄派のお方々も色々戦ってくれてますし、その分でちよつとぐらいチャラにしていると思えますがねえ？」

うう。リントさんも庇う事を言ってくれるし、ありがたいぜ。

カズヒも言い分は理解してるのか、ちよつと笑ってくれてる。

「ま、それは言っていないでしょうけどね。言うだけ言って譲れないのなら、もう互いに遠慮は無用でしょう」

あ、結構割り切った意見だった。

……っっていうかあれ？

「そっかいや九成は？」

よく見ると、全然見当たらないんだけど？

と、カズヒはこれまた小さく笑いながら肩をすくめる。

「別件を重視するように言ってるわ。あいつは実働だから、別に方針を決める会議はあともいいでしょうしね」

別件……ってなんだ？

闇動神備編 第八話 和地「もはや定番になっている
……っ」

和地 Side

俺も会議に参加するべきかと思ったが、カズヒの言い分ももつともだ。

……あと、大半の女達が俺に対して生暖かい視線を向けてきたしな。なんだあの視線の集中砲火。自分で言う事でもないけど、その方向性はおかしくないか？

ま、それは置いといてだ。

俺はある人を探していると、どうやらいつも通り従者としての業務をしていたとメリードから報告を受けた。

で、今は大浴場の掃除をやっているとのことだったので向かってみるんだ……が。

「なんで水着祭り!?!」

清掃作業をしているメンツ全員が水着だったので、思わず絶叫ツツコミを入れたよ。

「あ、和地様だ」

「ども！ 持つてる水着を無駄にしない為、こうしてたまに着てます！」

「どうしました？ は、まさかお手付き狙い!?!」

メイドさん達ノリが軽いな！

いや、前向きに生きているならいいことだけど。それはそれとしてツツコミ入れたいけど。

ま、それは置いといて、だ。

「三美さん、こつちだって聞いたけど」

……自分で言うのもなんだけど、これ八割ぐらい勘違いされないか？

そう思った通り、従者たちの反応はもはや黄色い悲鳴だった。

「あ、やつぱり！ 行船さん、おめでとうー！」

「八割逆玉だよね！ 頼れる仲間もいるし、よかつたじゃん！」

なんか凄い事になってるけど、それはこの際置いといてだ。

「……和地様？」

三美さんはいつも通りの格好で仕事をしていたけど、それはこの際いいだろう。

とりあえず、俺がやるべきことは一つだ。

「時間はメリードに許可をもらって休憩時間を作りました。……ちよつと時間ください」

「……あ、これ告白とかお手付きじゃないかも？」

後ろうるさいな！

あとなんで二人だけの場所を用意しようとしたのに、勘違いが治るのかな！

とりあえず、プライベートが確保できるだろう場所を考慮。その上で変な勘違いが無いよう、俺の部屋にはしなかった。

「……なんでカズヒ様の部屋なんですか？」

「変な誤解をされないようにする為だからね！」

だってこれぐらいしないと絶対誤解されるし。カズヒもその辺を考慮しているから、部屋貸してくれるっていったし。

ちなみに、いくつかの場所にぬいぐるみが置いていある辺り可愛いしいワンポイントができてる。この辺り、今からでも頑張っているんだらうなあ。

だけど今は落ち着こう。そこにテンションを上げている場合じゃ

ない。

「……単刀直入に聞きます。たけしま級に襲撃してきた奴に、知り合
いでもいたんですか？」

もうその辺はすっぱりと行こう。

大欲情教団殲滅の際に、謎の食べ物怪獣と追跡していた禍の団が混
ざり合ったあの乱戦。

あの時、禍の団が陽動狙いかたけしま級に仕掛けてきた。そしてそ
の後、様子がおかしくなっていた。

しかも三美さんだけじゃなく、白雪の方も様子がおかしかった。

おそらくだが、共通する知り合いの姿を見たとかそんなところだろ
う。

……撤退されたから確証が持てない、そういったところだと踏んで
いる。

「……白雪ちゃんから、なにか聞いてますか？」

と、三美さんから探るような言葉を聞いた。

「……昔大学でヤリサーにいたとか、三年で自主退学したとかは聞い
てます」

ここは素直に言った方がいいと判断し、俺は白状する。

それを聞いたうえで、三美さんはどこかほっとした様子だった。

「そっか。なら、白雪ちゃんは何も知らないんだ……そうだよね」

あ、これかなりヤバイ地雷が埋まつてる。

俺はそれを悟るが、もうこうなったら仕方がない。

腹をくくり、気合を入れる。

そして、俺は真つ直ぐに三美さんに向き合った。

「白雪からはヤリサーは任意だと聞いてますが、ケースバイケース
だった……ってことでしょうか？」

「……はい。私の場合、新歓コンパで……無理やりされたのが最初で
した」

……あくもく……っ！

俺の周りの女性って、なんでそういうトラウマ案件が多いんだ。茶
化して言えるタイプの黒歴史じゃなくて、元ネタ同様の忌まわしきレ

ベルの過去じやねえか。

というか、白雪は多分知らないな、これ。ギグシヤクしてたのはこれも原因だな。三美さんは悟ってたから、尚更言いづらかったとかそんな感じだろ。

とはいえ、それは本題からずれている。

とりあえず、言い難そうだしあえて俺からずばずば切り込もう。最悪俺が恨まれればそれでいい！

「大体分かりました。つまりそんなことした下種野郎が、何故か禍の団にいたという事ですか？」

「いいえ、違うんです」

……というと？

俺がちよつと首を傾げていると、三美さんは顔を蒼くしながら少し肩を抱いていた。

「あてる充の、秋冷充のことは聞いてますか？」

「……幼馴染だとは聞いてます」

彼がいたというのか？

そう仮説を立てる俺だが、三美さんは俯き気味でそうではなかった。

「……いたんです」

その表情に、俺は呼吸を整える。

そして、三美さんは震える声で、それでも言った。

「お姉さんが。充の、お姉さんが禍の団にいたんです……っ」

……そういう事か。

衝撃を受けるには十分な理由だ。加え、色々と懸念材料でもあるだろう。

白雪の話では、例のサークルで現役だった者は行方不明になっている。それも、生存が絶望的な状況下で、だ。

最も、それが何で禍の団についてことになるか疑問だ。全員とも限らないだろうがな。

ただ、間違いなく何かがある。それだけは間違いない。だからこそだ。

「三美さん」

俺は、ここを違えるつもりはない。

「困ったことや力が必要なことがあるなら、俺達にちゃんと伝えてください」

これは、はつきり言っている。

「え、でも——」

「というか、勝手に無茶するようなら俺達も勝手に助けに行きますから。足並み乱れるんで、なるべく報連相はしっかりしてくれるとありがたいです」

そこははつきり言っておこう。

ま、個人的な問題がゴロゴロあるだろうからな。言いづらいのは当然だろう。

それでも、言えることはあるわけで。

「もう三美さんはこの家の一員です。なら、本当に困ったことがあるなら、力になりたいと思うのが俺たちなわけで」

安心させるように微笑んだうえで、俺はちよつと苦笑する。

「というか、ここにいる連中は甘やかすタイプが多いですから。カズヒだつて、こうして部屋を貸すぐらいの気遣いはしてますからね？」

そういう連中がゴロゴロいるからなあ、兵藤邸。

うん、勝手に三美さんが先走つてヤバくなつたりなんてしたら、結構な連中が動き出すのが目に見える。

……うん、逆にそっちの方がグダグダになりそうだ。きちんと報告してくれるとありがたい。

それに、だ。

「第一、涙の意味を変える男が、チームメンバーの涙を放っておけるわけがないでしょう？ 愚痴ぐらいは聞きますし、やむを得ない鉄火場ぐらいは全力でカバーさせてください」

嘆きで生まれた涙の意味を、笑顔に変える救済者。

瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻め。

俺の根幹は、一切たりとも譲らない。こればかりは命がけで断行する。

ああ、そうだ。

それに言わなきゃいけないこともあっただろう。俺としたことが忘れてたな。

「三美さん、それと後二つ言っておきます」

俺はそう前置きして、三美さんの目を見て言う。

「勝手に過去を探ったことは謝ります。そして、もう一つ」

ある意味こっちが本題だ。

「その過去において、貴女は間違いなく被害者だ。そこは誰にも否定させないし、されるわけがない」

そう、彼女は被害者だろう。

もしかしたら、そこから転じて加害者側に回ったことがあるのかも
しれない。

でも、起点は被害者だ。それは決して違わない。

「貴女がその過去の中で罪を犯したのなら償うべきですが、同時に貴女が悪意に翻弄された被害者である事実も変わらない。なら、俺はそこには手を伸ばしたい……いや」

言葉を切り、俺は言い直そう。

「手を伸ばさせてもらう。貴女の涙は、俺が変える」

……言ってから、これ半分告白じゃなからうかと思っただ。

だがまあいい。こうなったら覚悟を決めよう。

「……っ」

っていうか、泣かれた!?

あれえ!?! もしかして失敗!?!

くそ、こうなれば土下座するしかないのか。謝り倒す覚悟がいると
いう事か!?!

ちよつと混乱するけど、三美さんはその後小さく微笑んだ。

「ありがとうございます、和地様。その言葉だけでもだいぶ救われました」

そ、そう?!

ちよつと安心したけど、そこで終わるのはあれだな。

「言葉だけで済ますつもりもないですよ? もし今後何かあるような

ら、どうせイツセー達も動きまますから俺もきちんと考えて動くんで、そこはよろしく」

どうせ、イツセー達も動くだろうしなあ。

あいつら身内のピンチには全力投球だろうし。まあ俺は政治とか国際情勢とか考えるけど、それにしたって、何もしたくないなんて考えじゃない。

彼女は理不尽な悪意に翻弄された被害者であることは事実だ。もしそのあと、彼女が他者に悪意を向ける手伝いをしたというのなら、その償いに手を貸すぐらいはしたいと思う。

だってそうだろう。この懲罰従者として関与しているということとは、己の罪を償うという意味があるか、被害者であるという事実が根底にあるからだ。そこは上層部を信頼するしな。

その上で、少ない時間だが付き合があるからこそ、それを言っていないだろう。

だから、俺は彼女の味方側だ。容赦はなくても情けは持つ。

自分の考えをきちんとまとめていると、三美さんはまだ涙を浮かべてはいるが、その上で俺の方を見る。

「なら、一つ甘えてもいいですか?」

「具体的に? 相当の無茶振りじゃないなら頑張りますよ?」

さて、何が出てくるのかな?

イツセーSide

うくん。ハーデスも戦力を拡張させていつてるんだなあ。

俺達もきちんと備えながら、アザゼル杯を乗り越えていかないと

なあ。

そんなことを考えながら、上級悪魔としての書類仕事をやっている。

リアスはスパルタだから、こういう時積極的に教えてくれたりはない。苦勞しながら自分で覚えなさいって感じだ。

正直大変だけど、頼れる敏腕マネージャーのレイヴェルがいるから何とかなっている。

「イツセー様、そちらの資料の束は主でなくても処理できます。半分は私が受け持ちますわ」

「オツケー。半分は俺の書類仕事の練習って感じだな」

敏腕すぎて、俺を休ませてくれないところはああるけどね。

ま、一年足らずで上級悪魔になったのは困惑だけど、上級悪魔は目標だったしな。遅かれ早かれ書類仕事もやることになってるか。

こういうのも日々の一環ってね！ 頑張るか！

そうやって気合を入れていると、ドアがノックされた。

「お茶をお持ちしました」

入ってきたのは、エルメンヒルデだ。

少し前から俺のチームに入りたいて言ってきたんだけど、レイヴェルはマネージャー活動に終始させてる。

どうも理由に隠し事があるみたいで、レイヴェルもそこを懸念してるんだろう。ま、最初に会った頃は色々言われたし警戒もするよな。

ただまあ、最初に会った頃とは雰囲気はかなり変わってるからな。

……あと、シーグヴァイラさんが色々布教してるらしい。ちよつと大変だなあと思ってしまう。

「……そういえば、今日九成和地から頼まれごとをしたのですが知っていますか？」

と、エルメンヒルデはそう指摘する。

んー、あれのことかな？

「九成のチームメンバーがなんか悩んでるみたいだったけど、それかな？」

カズヒもその辺気にしてて、色々気を回してるしな。

そして九成はこういう時動くから、きつとフラグも立ってるんだろうなあ。

ちよつと嫉妬心は燃えるけど、ま、何かあるなら俺も手を貸すか。力が必要なり大ごとになりそうなら、あいつならちやんと言うだろうし大丈夫だろ。

でもエルメンヒルデに頼み事？　なんかあるのか？

「どういった内容ですか？」

レイヴェルがそう言うと、エルメンヒルデも首を傾げている。

「バルトリ家当主になった、エルトーナ・バルトリと連絡を取りたいそうでした。一応茶会は社交パーティーで何度か会っているので、繋ぎを取りましたが、なんだったのでしょうか？」

ん？

エルトーナってというと、確かルーシアやアニルのチームにいた、女吸血鬼だったな。

ちなみに若人の挑戦チームは、先日リタイアを決定してアザゼル杯から途中退場した。

多くのチームメンバーが、精神的にいつぱいいつぱいになったみたいだしな。他にもリタイアしているチームはいるみたいだし、まあ大変なんだろう。

なにせ神クラスも当たり前に参戦している大会だしなあ。戦うだけで精神的にギリギリになる人もいるんだろう。ヴァーリみたいに強い奴でワクワクする奴らばっかりでもないだろうしき。

ま、それはともかくだ。

ルーシアやアニルじゃなくてエルメンヒルデなのは、単純により付き合いがありそうな方だからってことだろう。

問題は、なんでかってことか。

まあ、九成なら必要ならちやんと言うだろうし、聞けば余程のことがない限りちよつとは答えてくれるだろう。

おそらく行船さん絡みだけど、そこまでは今の俺だと分からない。

……ま、大丈夫か。

「気になるなら直接聞いてもいいと思うぜ？　それとも、そのエル

トーナって人と仲悪いのか？」

俺がそんな風に世間話的なことを言うと、エルメンヒルデはちよつと複雑な表情になった。

「エルトーナ・バルトリは元々変わり者でしたから。もつとも、現状は主流派になっているとも言えますが」

ふくん。

まあ、クリフオトのテロで吸血鬼は大打撃を受けている。

それまでの圧倒的な自主族優位主義や選民思想が一気に崩れ、他勢力に頭を下げて援助をもらっている状態だ。

つまり、エルトーナは元々多民族に寛容な方だったという事か。

……最初に会ったエルメンヒルデのことを思うと、絶対そりが合わなかつたろうな。

ま、これ以上深く聞くのも野暮か。

そう思っていると、通信が繋がった。

『イツセー、そろそろ時間よ？』

おっと、そういやもうそんな時間か。

今日は、曹操達がラツイー力達が試合する日だった。

……大丈夫かなあ、曹操達。

闇動神備編 第九話 激突、冥府派VS英雄派！

カズヒSide

「あいつら、殺されないと良いんだけど」

「カズヒカズヒ、物騒なことを言わないで？」

オトメねえに指摘されるけど、正直その辺が心配になるわ。

なにせ偉大なる冥府神の従僕チームには、英雄派がテロの一環で誘拐・洗脳・実験を行った者がいるということが判明しているわけで。そりやもう恨み骨髓でしょう。私としてもそれはまごうことなく事実であり、否定する気はない。

例えしつかり刑罰を受けていようと、だから被害者が加害者を許して仲良くしろと言われてできるかと言われるれば別問題。刑罰を受けたという事実をもって生活を容認するのはともかく、友として肯定しろとまで言うのは困難だろう。相手が刑罰に納得いつてないのならなおのこと。

元々三大勢力が中心になって保護していたにも関わらず、その三大勢力の潜在的な敵であるハーデス達冥府についているわけだし。納得いつているわけがない。下手をしなくても、今の英雄派幹部に対する対処の不満があるだろうから、三大勢力も嫌いでしょうし。

だからまあ、試合にかこつけて「ぶっ飛ばす！」と気合を入れるぐらいは私だって許容する。ただし――

「競技試合でも死者や重篤な後遺症を患う事例がないでもないし、レーティングゲームでも同じことだしね」

「あゝ。勢い余って殺してしまう系の事例を悪用して、どさくさに紛れて殺せないか試す可能性はあるかも？」

鶴羽もそう言うけど、本当にそこが懸念なのよね。

まあ、恨まれるのは曹操達の自業自得。実際にそれで無法を働くのなら私も止めるけど、嫌悪や憎悪を向けるのまでは止める気はない。だからまあ、きちんと試合をしてくれるのなら問題ないけれど。……映像越しでも分かるぐらい、一部メンバーがピリピリしてるわね。

「……一応ねえ？　今回、審判や監視役を増員しているのお」

「あ、やっぱり？」

リーネスが裏事情を明かして、鶴羽も納得しちゃってるし。

ま、どうせこの位置だと何もできない。

精々頑張りなさい、英雄派。ほぼほぼ自業自得だけど、刑罰案件はこちら側にも責任はあるから試合の外では手伝ってあげるわ。

和地 Side

今日はみんなにも色々予定があったので、久しぶりに外食中。

……回らない寿司をみんなで食べるという、俺が金を使う為の努力をしている！

ちなみに異形を知っているお店なので、個室を借りてレーティングゲームの試合も観戦可能。今日は此処で試合を見る予定だ。英雄派が試合をするらしい。

で、今回誘ったメンツは、だ。

「その、よかったのですか？　私まで誘っていたあなた」

三美さんも連れてきた。色々いっぱいあったろうしな。

それに他にも数名は連れてくるわけだ。

「うつす先輩！ ゴチになります!!」

「ありがとうございます、先輩。ふふ、いっぱい使わせてあげますね？」

アニルとルーシアの後輩信徒。更に――

「ひっそりぶりのお寿司ですのー!」

「おー。回らない寿司、豪勢じゃん?」

――ヒマリとヒツギも連れてきた。

三美さんのメンタルケアも兼ねているけど、あくまでメンタルケアと金の消費が目的だ。勘違いされないようにそういう方向にならないメンツを集めている。

「ささー。三美さんは成人ですしお酒どうぞ！ お酌します」

「あの、和地様? 一応私従者なので恐れ多いというか……?」

「なら私がおしゃくしますのー♪」

こういう時、ヒマリがいるとありがたい。

ま、それはそれとしてだ。

「とりあえず全員大トロに――」

「先輩。とにかく値段高い順から頼もうとしないでください」

ルーシアの鋭いツツコミはありがたいけど、お願いだから高いものを頼んで欲しい。

正直お金を使つてないと不安になるんだ。国家予算クラスの金額がどんどん利子が増えていくこの状況下。俺としては心をゴリゴリ削っていく。思わぬ強敵参上だ

一応義援金の類を提供できるようにしているが、安定して供給できる設計にしているので増殖が若干上回る。

どうすれば使える、どうすれば?」

もうテンションぶち上げて、俺専用のTFユニットでも開発してもらおうか。神の子を見張る者ならワンオフ機体とか作つてみたいだろうし。世界の英雄用ワンオフ機体とか、ロマンだらけで乗っかりそう。

いや、問題はそのノリだと別の方向から予算が出てくるかもしれない。……まあ、維持費は意地でも俺が出せばいいか。

それはともかく、そろそろ試合だな。

テレビに異形のチャンネルを通して、試合会場の映像を確認する。結構大盛り上がりだが、相手であるラツイカのチームはピリピリしているのが多いな。

ま、メンバーの中に英雄派の被害者がいるから当然か。そういった方面から人員を確保するとか、ハーデスもやはり侮れない。

とはいえ、現状大人気チームの一角が英雄派による天帝の槍チームだ。罪状に関しても処罰を受けて復興支援金を常に送っている以上、こちらにも言い分はあるからな。

向こうもこの場で堂々と罵倒するような真似はしないみたいで良かった良かった。まあ、このタイミングだとハーデスが言わないように言い含めるだろうがな。

『さーて！ 今回のルールはシンプルなもの！ 試合時間は三時間で、フィールドはそこそこの広さとなっております！』

良かった良かった。この時間で三時間なら、この店で食べたり飲んだりしてたら問題なく終わるだろうさ。

さて、この後はどうなるかな……？

O t h e r s i d e

レーティングゲームのフィールドで、曹操はチームメンバーを散開させながら冷静に状況を俯瞰していた。

偉大なる冥府神の従僕チームには、自分達がテロ活動の際に誘拐・洗脳・投入をした、民間の神器保有者がいる。

相当恨まれているだろうが、そこを付け入る隙にできるだろう。恨み骨髓の相手なら、どうしても前のめりで攻撃的になりやすい。その隙をつけば突き崩せる隙も生まれるだろう。

だが同時に、相手は優勝候補である黒チームを打倒したチームだ。ハーデスにとっては一種のブラフだったのだろうが、それでも有数の実力者が揃っている。そうでなければ、巨人の王たるスルトを打倒するなどできるわけがない。

だからこそ油断できないチームであり、ゆえに相手に付け入るスキがあるのなら付け入るべきだ。

そもそもテロリストをやる時点で恨まれて当然。如何に処罰を受けていようと、呆れるぐらい自由があるので思うところもあるだろう。

むしろ納得すらしているのです、試合のついでに恨みを晴らしに行くことは構わない。ただ、それができるのならといったところだ。

「さて、そろそろ接敵するだろうが、どうなる？」

一人ごちると、通信が繋がった。

『曹操、こちらペルセウスだ』

テロ活動をする前に離れ、アザゼル杯参加に伴い戻ってきた盟友。ペルセウスの魂を継ぐ者が通信をつなげる。

『出くわしたぞ。まずは手札を見ながっ!?!』

そして、すぐに通信が途切れる。

怪訝に思い問いただそうとした時だった。

『天帝の槍チームの騎士ナイト一名、リタイア』

「なんだと？」

そのあまりにあっさりとしたリタイアに、曹操は耳を疑う。

ペルセウスは、ジャンヌやヘラクレスと肩を並べるほどの使い手だ。どう少なく見積もっても、最上級悪魔クラスにだって通用するだろう。

そのペルセウスが、接敵した直後に倒された。

想定外の事態に、曹操はしかしすぐに警戒態勢を取る。

何より、ペルセウスの位置は自分に一番近い。

ゆえに即座に至り、七宝も展開。

その上で呼吸を整えた時、殺気を感じた。

「あら、もう終わりになるのかしら？」

切りかかるのは、兵藤一誠に敵意を持っているだろう壱崎虎美。

英雄派を恨んでるわけではないだろう彼女がくることを意外に思いつながら、曹操は女宝をまず展開する。

一定以上の力量を持たない女の異能を封印する。とはいえ、スルトを打倒した時に無事だった彼女に効くとは考えづらい。

これは異能封印をデコイにした攻撃。瞬時に槍の形にして貫くのが狙い。

「甘いわね」

だが、彼女は拳でそれを弾き飛ばした。

そのあまりの光景に、曹操も目を見開いてしまう。

だが同時にいくつかの可能性を踏まえつつ、防御の為に槍を構え――
「だから甘い」

―その刃は、バターを切るように聖槍を断ち切った。

闇動神備編 第十話 神器の否定者

祐斗Side

その光景に、僕達は目を疑った。

壱崎虎美の獲物は日本刀だ。異能を併用して強化しているようだが、伝説の剣のような性能はない。

それが、曹操が持つ最強の神滅具をたやすく両断した。

ありえない光景に目を疑い、同時に曹操の敗北を予感する。

だが、そこに曹操の姿はいなかった。

「……例の転移の七宝ツ」

リアス姉さんが悟ると共に、曹操はすぐさま壱崎虎美の眼前に現れてから攻撃を仕掛ける。

壱崎虎美は曹操を探すように周囲に意識を向けていた為、あえてさっきいた場所から現れた曹操に反応が遅れていた。

だがその粗のある受け流しでやすやすと聖槍はいなされる。

ありえない。あの日本刀、映像を見る限りは異能で強化されてるにしても大したことはない。

それが聖槍を断ち切りいなす。それも、いなした時は本領を發揮しきれてないにも関わらずだ。

そんなあり得ない現象に、曹操は確かめるように聖槍を振るいながら何かに納得する。

『……なるほど。信じられないが、現状そう考えるほかなさそうだなんだ？』

曹操はあの一瞬の攻防で、一体何を掴んだと――

『君、リゼヴィムの真似事ができるね？』

――なんだって？

思わず困惑する中、リアス姉さんはどこか納得している様子で画面

を見ている。

「……女性の力を封じる七宝がたやすく突破され、その前には仲間が一瞬で倒された。まさかその一瞬で、その可能性を踏まえた試しを入れることを決めるなんてね」

「どうやら、リアス姉さんの推測では曹操の立ち回りはその確認の為だったようだ。」

なるほど。最初から突破される前提で聖槍を防御に回し、同時に転移の七宝を使うことで確認と回避を同時進行したのか。そして更に念押しする為に、あえて一撃を防御させたと。

納得はできる。だが、信じられない。

「あのリゼヴィムと同様のことを？ 人間がしたというのですか？」
「信じられません」

朱乃さんと小猫ちゃんも困惑しているけど、それはそうだろう。どう考えてもイレギュラーだ。信じられないと言ってもいい。

超越者リゼヴィム・リヴァン・ルシファア。その真骨頂と言ってもいい、神器無効化能力。D×Dの領域で漸く突破できる、あの恐ろしい絶対性。

それを、人間が使ったというのか？ 流石に信じられない。

ただ、曹操と壱崎は互いに距離を保ちながら、肩をすくめ合っていた。

『神滅具クラスは完全無効化できないようだけど、ペルセウスがやられるわけだ。あいつの神器は盾だから、この初見殺しはきついだらう』

『流石は英雄派の長なだけあるわ。神器の性能頼りではないわけね。……ま、玩具ではしゃぐだけの子供じゃないのは良いことだわ』

互いにそう言葉を投げかけ、その上で曹操は苦笑する。

『ふふ。人間という異形に比してちっぽけな存在から、英雄なんて目指すんだ。これぐらいはね？』

曹操はそう言いながらも、七宝をあえて拡散させたうえで槍を油断なく構えている。

壱崎虎美が本当に神器の力を殺せるのなら、神器を保有する英雄の

末裔が主体の天帝の槍チームは、圧倒的に不利だ。

真つ向から戦つて有利に立ち回れるとすれば、監視役として女王の配役を受けている、関羽殿ぐらいだけどそもいかない。

『はっはっは！ 悪いが、邪魔はさせられないのでね!!』

『……彼さえ押さえれば、こちらが有利!』

『ほう。これだけの猛者が多数いるとは』

ラツイーカが一人を連れ、抑え込んでいるからだ。

ラツイーカ・レヴィアタンは蛇を使っていない旧魔王派トップの一人と同程度。イツセー君なら真女王なら余裕を持って対応できるレベルだ。最上級悪魔クラスではあつても、その上澄みというレベルではない。

だがもう一人も優れた実力者だ。聖なるオーラを持った左腕の鎧と、飛翔する四つの盾が関羽殿の攻撃を凌ぎ、ラツイーカが溜めに溜めた攻撃で抑え込んでいる。

他の部類でも熾烈な争いが起こっており、曹操に増援を送る余裕はないだろう。

必然、曹操がピンチということが確定した。

『……まあいいわ。とりあえず仕事をするとしましょう』

『怖い怖い。油断していると切り捨てられそうだ』

そう互いに呟いたうえで、互いに距離を一瞬で詰め―

『――ッ!!』

― 壮絶な攻防が繰り広げられた。

思わず寿司を食べる手が止まるレベルの、壮絶な戦いが流されていた。

「……なんすかあの戦い。え、マジで？」

アニルが啞然となつているけど気持ちは分かる。

神器の力を削減し、聖槍すらただの異能付与日本刀で断ち切る女。元駒王学園生、壱崎虎美。

そんな手合いに対し、曹操が選択したのはシンプルイズベスト。

……相手の攻撃を一切接触しない回避に徹底しつつ、溜めたオーラによる攻撃での撃破。

信じられないことに、壱崎虎美は剣技に限定すればアーサー・ペンドラゴンやエヴァルド・クリスタリデイの領域にあるだろう。

しかも動きが明らかに早い。反応速度に取捨選択、それらまで全てが早い故の、素早すぎる対応。あらゆる動作が早いゆえに、曹操の攻撃をすべて回避か受け流しで捌き、傷一つつかずに反撃を行っている。

そしてそれら全てを回避だけでのぎながら、曹操は反撃すら入れている。

人間水準、それもテクニクなら同年代でも上澄みの中の上澄みだろう。真剣に参考になる。

そして、互いに攻撃を一切喰らうことなくギアが上がっていく。

なんだこの猛攻。現状、神器に対してマウントが取られている曹操が不利ではあるのだが、それで互角に渡り合っている時点で曹操が化け物であることが証明されているぞ。

「……あれが、英雄派盟主の曹操ですか……」

「相変わらず、本当に人間か分からないんですけど……」

三美さんもルーシアも、戦慄すら覚えている。

ただ、それとは異なる視点の者もいる。

「むむむ〜？ でもどうやって神器を無効化してますの？」

ヒマリが首を傾げているけど、確かにその通りだ。

種がさっぱり分からん。神器無効化能力とか、デッドコピーであつ

ても簡単にできることではないはずだ。少なくとも、超越者の特性を再現なんて下手な上級悪魔でも不可能だ。

現実問題どうすればできる？ 敵の力を封印するタイプの神器を禁手にしても、あそこまでできるとは思えないんだが……。

「あ、仕切り直した」

と、ヒツギの言葉に画面を見れば、互いに千日手になると気づいたのか飛び退って距離を置いている。

様子を伺いながら、呼吸を整えつつ、どうすればいいかを考えている。そういう睨み合いだ。

とりあえず今のうちに寿司を食ってお茶飲むか。

ただ、他の戦いも結構白熱しているな。

ただし、既に一人倒している偉大なる冥府神の従僕チームが、防戦主体で戦っている感じだ。

最悪このまま逃げ切る算段か。たった一人でそれをやる辺り、英雄派を舐めてないのは間違いない。準エースクラスを速攻で倒した余裕を生かしているともいえるな。

となると、神器の無力化は誰にでもできるような代物ではないようだ。おそらく、現状の前置き付きだが壱崎にしかできないんだろう。

『時間稼ぎ代わりに、一つ聞いていいかしら？』

と、壱崎は曹操に質問をした。

一体何を――

『貴方達って、なんで神器を誇らしげに使ってるの？』

――ん？

ちよつと何を言っているのか分からない。というか、それって時間稼ぎにしても今聞くことなのか？

ただ、壱崎は本気で言ってるようだ。

『神器って、聖書の神が作ったシステムで与えられているだけでしょ？ 貴方の遺伝子にも鍛錬にも絡んでない、外野が勝手に押し付けたガチャ運程度で、なんでそこまで自分が誇らしいものと思えるのかがよく分からないのよ』

おくキレッツキレ

「……あいつ、異形側の信徒全員を敵に回す気？」

「遠回しに主を罵倒してないでしょうか、アレ」

ヒツギとルーシアがドンビキしてるけど、それはまあ確かに。

さっすがハーデスの配下。あの状況下でよく言えるな、オイ。

半分ぐらい呆れてると、曹操は苦笑を浮かべている。

『そんなに気にすることかい？ 神すら屠る力をその身に宿し、その力を磨き続けてきたんだ。少しぐらい自慢にしてもいいと思うけどね？』

曹操はそう返すが、壱崎はつまらなさそうに息をついた。

『……やっぱり理解も納得も共感もできないわね』

そう、吐き捨てるように言い切った。

『私の人生に、そんな余計な設定なんていらないわ。私の人生は私の努力と生まれ持った血の恩恵で十分。慕っても崇めてもない神様に、生まれる前から勝手に押し付けられたもののおかげなんて思われる。そののどろがいいのかさっぱりだわ』

心底からうんざりしている。それが分かる。

おそらくだが、壱崎虎美も神器保有者だ。その上で、彼女は神器の概念そのものに否定的だ。

何かが引つかかる中、壱崎は刀の切っ先を突き付ける。

『だから私は、神器なんて使わないし必要ない。そしてそんなもので得意げになっている連中風情なんかの好みなんかに合わせない。

……私の前で、神器で争おうなんてさせないわ』

何かが二重に引つかかる。

彼女の言いぐさもだが、同時に何かそれ以外が気になって仕方がない。

そう思う中、壱崎は息を吐き――

『最強の神滅具大いに結構。切り捨てればいい見せしめね』

――その瞬間、壱崎は戦法を切り替えた。

高速で移動しながらの一撃離脱。だが反転速度が速いがゆえに、半端な奴の連撃に匹敵する攻撃頻度と化している。

元々、壱崎の攻撃は聖槍で防げない。加えて曹操は人間故に、防御

においては脆い。そして斬撃とは基本、直撃すればそれで勝負が決まる系統だ。

それを理解したが故の戦法だが、それにしたって動きがおかしい。さつきまでの動きから読めるような身体性能じゃない!

「なんだよあの動き!?! プログライズキーでも切り替えたみたいなきじやねえですか!?!」

アニルが目を見開くけど、確かにそうだ。

何かが決定的入れ替わっている。そう思わせるほどの動きの違い。それが曹操にも戸惑いを与え、かすり傷を与えていく。

だがなんだ? あの動きは明らかに……っ!

「……呼吸……?」

俺達が戦慄していると、三美さんが首を傾げた。

思わず視線が集まる中、三美さんは映像を見て怪訝な様子になる。

「……呼吸の仕方が、明確に切り替わってます。まさかそれが……?」
当人も半信半疑だが、ただそれだけであそこまで変わるのだろうか?

いや、呼吸法は割と色々効果があるとは聞いたことがある。リラックスの為の深呼吸しかり、出産の為のラマーズ法しかり。だがそれにしたって変わりすぎなんだが。

いつからここは鬼滅の世界になった。全集〇の呼吸とか、あれって半分ぐらい異能の領……域……っ

「「まさか!?!」」

思わず、ヒツギやヒマリとハモって大声を上げてしまった。

思いついた。だが、出来るのか?

……いや、奴自身が言っていたことだ。

—私の努力と生まれ持った血の恩恵で十分—
それが、俺達に一つの答えを連想させる。

あいつ、あいつはまさか—

『……なるほど、そういう魔術か』

—そして、それに曹操も思い当った。

ここから、形勢は更に変わっていく。

なるほど、そういう事。

「……呼吸のリズムそのものを魔術詠唱とする、特殊調律された強化魔術、その手があつたわねえ」

リーネスが感心しているなら、十中八九間違いない。それほどまでに、リーネス・エグリゴリことアイネス・ドーマの魔術回路保有者としての見識はずば抜けている。

そして問題はそこじゃない。

呼吸のリズム。それを魔術詠唱とするのはいいでしょう。

音楽を利用した魔術や踊りを利用した魔術はある。芸術を利用した魔術だつて存在する。ならば、呼吸のリズムや呼吸度合いで魔術を行使するのもありだろう。

もちろん、一代でできるかと言われれば別問題。何世代も研鑽を詰み、最適化された魔術回路と継承した魔術刻印があつてこそその完成度。更に、その恩恵を生かせるだけの下地を鍛え続けてきたからこそその力でしようね。

そしてそれだけでは曹操は倒せないでしょう。しかしそこに神器を弱体化させる力がかみ合った結果、曹操ですら一対一では苦戦必須の化け物が誕生している。

「おいおいやべえなあいつ。どんだけ鍛えてんだ？」

勇ちんが感心しているけど、まさにその通りね。

あそこまで鍛え上げるのはそう簡単にはいかない。人より己を限界まで鍛え上げることに長けているからこそ、あそこまで鍛え上げる

ことがいかに困難かはよく分かる。

壱崎虎美。どうやら思った以上に気合と根性がやばいレベルの相手なようね。

私みたいにそこを突き抜けているわけでも、ヴィールみたいに異常なレベルに突き詰めて言うわけでもない。だけど、十分すぎるほどのポテンシャルを限界ぎりぎりまで磨き上げている。

だからこそ、曹操は追い込まれている。

ただ神器の力を弱体化させているだけなら、奴ならやりようはいくらでもある。

だけどあいつは、神器の無力化を手札の一つにとどめるレベルでハイスペックだ。ゆえに、曹操でも捌め手で嵌めることができてない。

……認めるしかない。壱崎虎美は間違いなく強い……っ

『そろそろ終わりにしましょう。というより、あんた程度に苦戦するわけにもいかないわ』

壱崎は、そう言い捨てる。

曹操は間違いなくハイスペックであり、才能があり、鍛えている、実力者だ。

だが、彼女にとっては決して最高の到達点ではない。

『所詮、アンタは神器を普通に高めているだけ。貫い物で粹がってるだけの馬鹿にかかずらっているようじゃ、あいつらには遠く及ばない』

……なるほど、ね。

あの女、超えるべき対象はあくまで兵藤一誠達クラスという事ね。

ま、イツセーは本来禁手で終わりの神器の極みを、二段階も切り開いている。間違いなく、壱崎の対神器能力でも決定打にならないでしょう。

そんな新次元に到達しているわけでもない曹操を、壱崎は舐めてはいないけどイツセーの下と判断している。だからこそ、あいつにとってこの戦いは試金石止まりだったのでしょうか。

……ただ、それはちよつと甘く見すぎじゃないかしら？

『なるほど。確かに、俺はいまだに禁手どまりだからね。仕方がない』

か』

曹操は確かに、阿呆というほかない迷走をしていたクソガキだ。

それで大規模テロまでやっているのだから救えない。そして文字通り死んでも根本が治ってない。そりゃあ馬鹿と見切るのも一つの判断でしょう。

ただし――

『ただし、こっちは使えるんだよ？』

――スペシャルであることは事実。そこに対する危機感が欠けているわね。

蒼い飛沫を放つ曹操を見ながら、私はこの戦いがまだまだ終わらないと確信した。

闇動神備編 第十一話 熾烈なる大激戦

Other side

英雄派の長、曹操は天才である。

これについては多くの者が認めることだろう。曹操はまごうことなく、人間の中では上澄みに属する存在だ。

最強の神滅具は確かに彼の大きな要素で、彼にとっても自身の根幹であった時期が長い要素だ。最強の聖遺物であり最強の神殺し。聖槍の保有者とはそれだけで一目置かれており、それをもっていくつもの鉄火場を潜り抜けてきた自負はあつて当然だ。

まして、曹操は聖槍を独自の禁手に至らせている。本質を半分以上使わずに。歴史上永遠に最強の白龍皇となりえるヴァーリ・ルシファーに覇龍を使わせるほどの猛者。そして全てを使うことなく、単独でオカルト研究部の殆どを相手取った事実もある。

だが同時に、彼はある意味で普通だった。

かつて帝釈天は「普段はB級だが本気出せばS級」と、曹操を形容した。それはある意味で誉め言葉だが、彼の視点からすれば決して珍しくはあつても探せば見つかる程度でもある。そしてその上で「普段も本気もB級だが、必要な時にSSSを叩き出す」と兵藤一誠を形容し、それこそを評価していた。

そして兵藤一誠とヴァーリ・ルシファーは、神器保有者の歴史でも類を見ない、禁手や覇のその上に到達した、イレギュラー中のイレギュラーである。

覇を克服し、禁手のその先に至った兵藤一誠。覇を超越し、更なる高みに至ったヴァーリ・ルシファー。そして両者は、二天龍と分かり会い、龍神と絆を結んだことで、更なる高みであるD×Dへと到達し

た。

それに比べれば、禁手どまりの彼は確かに普通だろう。比較対象があまりにイレギュラーなだけだが、確かにそこまで飛び抜けてはいない。

普通という表現が正しくないなら、特別、というべきだろう。それは確かに優れているが、あくまで優劣という直線上。文字通りの異常たる現二天龍には遠く及ばない。

……だが、それをもって曹操が弱いとするなら、それは目が曇っているか視点が違いすぎるだけである。

曹操は神器について大した知識もなく、目覚めた直後に異形を打倒した。

曹操は幼い身で世界を放浪し、数多の勢力に目を付けられながらも潜り抜けてきた。

曹操はいまだ若い青年でありながら、寄る辺なくした英雄の末裔や後継足ろうとする者達が集う、英雄派の長である。

間違いなく、「世界最強の人間」を決めるとすれば名が挙がる人物。そして超常の存在を超えんとする、英雄派の長。

止まるわけがない。留まっているわけがない。

ゆえに、当然彼は作り上げるのだ。

エルダーゴッド 旧済銀神。タイタス・クロウ 涙換救済。かの九成和地が編み出した、聖書の神が想像

もしていないだろうイレギュラー。禁手の残滓をもって創り出す異

能、コスモス・ホルト 残神

テクニックタイプの極みが到達できるその新境地。その筆頭たる曹操に、到達できぬ道理なし。

蒼い飛沫を放った曹操は、それを作り出した。

またがっているのは一台のバイク。そして、腰には独特な形だけども間違いなく一つの機能を持っているベルト。

それを見た壱崎も、警戒の色を濃くしていた。

『到達していたのね、それに』

『まあね。これぐらいは到達しないと、英雄派のトップは名乗れないんだよ』

そう返し、曹操はアクセルを吹かしながらプログライズスキーも取り出した。

『CHALLENGE!』

『変身』

装填したプログライズスキーが解放され、ライダーモデルが装甲を具現化。

その瞬間、曹操は仮面ライダーに変化する。

そう、あれは仮面ライダー。ライダーとは異なる、より洗練された戦闘プロテクター。

神滅具の力で到達した、曹操の為の仮面ライダー。

『仮面ライダー孟徳、参る』

『Let's go beyond the mountain』

その瞬間、戦闘は一気に曹操有利に進展する。

バイクにまたがった曹操は、壱崎よりも素早い動きで一撃離脱戦闘を開始。壱崎も防御とカウンターに徹底した切り返しを行うけど、曹操の方が読みが早い所為で、追い込まれていく。

『変身デバイスとバイク。なるほど、防御と移動をカバーする残神と
いう事かしら?』

『ああ。俺の残コスモス・ボルトトウルー・ドライブ・スプリンター神、霸王の聖装具。要はあれだよ、聖槍や現代に見合った形で、武将の騎馬と鎧を残神で作りに出した形だね』

互いにすぐに分かりながら、でも攻撃は更に一方的になっていく。曹操は素早い切り返しの一撃離脱戦闘をこなしながら、壱崎虎美を追い込んでいく。

すげえ。リゼヴィムみたいな対神器能力を持っている相手に、曹操があそこまで戦えるなんて。

やっぱりあいつ、強いよなあ。

「……むう、よもや奴までもが残神に到達するとはな。また強くなっ
ていくな」

ゼノヴィアが困り顔になっているけど、一応今は味方だし大丈夫だ
ろ。

それに、あいつが簡単にやられるところを見るのはちよつとな。

「なるほど。これは地味に厄介な残神ですわね」

でもレイヴェルも感心気味だったり。

ま、バイクと仮面ライダーってのはそれなりに凄いとは思うけどそ
こまでか？

俺はちよつと疑問だけど、レイヴェルからするとかなり脅威らし
い。

「彼の欠点は種族的な弱みによる、耐久力と持続力の相対的な低さ。
ですがそれをプログライズキーとバイクにより改善している上、プロ
グライズキーの併用が前提故に残神としても高性能ですわ」

な、なるほど。

つまり、残神としても高性能で、更に曹操の弱みをカバーしてらっ
てことか。

更にプログライズキー分が強化されているから、なおのこと強く
なっている。曹操らしい、隙のない構成だな。

そしてその隙のない構成は、壱崎を間違えなく追い詰めている。
かすり傷が少しずつだが増えていく中、曹操は決めるつもりらし
い。

振られる攻撃は刀をすりむけるように振るわれ、そして壱崎に迫り

『それを待ってたわ！』

その瞬間、槍を吹き飛ばしながら壱崎は曹操に組み付いた。

……あの女、今の今まで加減してやがったのか!?

たぶんだけど、曹操に隙を作らせる為。その為に、壱崎は神器無効化を弱くしていた。

たぶん、武器だけじゃなく生身にも全力で組み込むことができた。だけどそれで曹操が警戒する可能性を見越して、あえて出力を弱くしてかすり傷ができる程度にとどめたんだ。

そして曹操が決めに来たところに全力で突貫して、決定打を与えられるようにした。

おいおいまじかよ。あいつ、どんだけ戦いで頭が回るんだ!?

「……曹操が、負ける……?」

『な、なんと!?!』

イリナとボーヴァが戦慄する中、曹操の背中から刀の切っ先が生える。

急所は避けてるけど、あの刺突は深手だ。

あいつが負ける、負けるってのか?

『私の勝ちよ』

静かにそう告げる壱崎は、左手に脇差を抜いて叩ききる体制に入り

『いや、そうでもない』

『CHALLENGE!』

—その瞬間、曹操もまだ諦めてないことを示した。

七宝の球体がベルトを動かし、起動するプログライズキー。

壱崎が気づいてすぐに攻撃に入るけど、曹操の動きは一瞬だが早い

『トラベリングジャッジメント!』

ト

ラ

ベ

リ

ン

グ

ト
ン
メ
ジ
ッ
ヤ
ジ

間一髪、曹操の蹴りが早い。

壱崎もそれに気づいて状態を逸らすけど、威力を殺しきれず宙を舞う。

『どうやら、出力を徹底的に高めれば貫けるようだ』

そう悟った曹操は、聖槍を構える。

『悪いが、ここは俺の勝ちだ』

そしてそのまま切っ先を壱崎に向けて――

『いえ、私達の勝ちよ』

――壱崎は勝ち誇った。

その時、俺達は気づいた。

曹操が決定打を討とうとしたその瞬間、ほかの英雄派と戦ってたメンバーのうち、四人が即座に曹操に向かって突貫している。

誰もが、深手を負うことになろうとかまわず曹操に突貫することだけに集中する。気づいた英雄派のメンバーが止めようとするけど、他の連中が援護までしている所為でリタイアまでには届かない。

そして同時に、ラツイーカが微笑んだ。

『更にダメ押し！』

その瞬間、ラツイーカが四つの蛇を生み出し飛ばす。

それは四人のメンバーに絡みつき、そして絶大な力の上昇を齎した。

オフィスの蛇を参考にした強化かと思った。だがそうではないとすぐに気づいた。

増幅されるオーラは神器のものだ。つまりあれば、神器の増幅に特化している。

そしてラツイーカ・レヴィアタンは魔王末裔。

……おいおい、冗談だろ。

「業カオス・ドライブ魔人だったか？」

英雄派が魔王血族の血液を用いて開発した、神器のドーピング剤。確かにあり得る。魔王の力を流し込むことで神器を強化するのなら、絶対に血液でないとダメってことはないだろう。

だがそれにしても、そう来るのか。

曹操も気づくが、しかしわき腹を刺されているため反応が一手遅れ

る。

四方からの一斉攻撃。それを裁く余裕は曹操にない。

曹操最大の欠点は、耐久力の低さ。

最上級悪魔クラスどころか、上級悪魔クラスの攻撃ですらクリーンヒットが致命的。仮面ライダーとなることでだいぶ克服できただろうが、残念なことに壱崎の攻撃はそれをすり抜けた。

ゆえに、曹操にそれを防ぐことはできず――

『天帝の槍チーム、王の退場を確認。偉大なる冥府神の従僕チームの勝利です』

――その戦いは、曹操の敗北に終わる。

闇動神備編 第十一話 もはや何でもあり

イツセーSide

「はい！ ではこれよりD×D大会議！ 「ハーデスあんた何集めた？」をはじめまつす！」

リヴァさんがあえてお茶らけて言うけど、ま、それぐらいがちょうどいいよな。

「いやホント、どれだけの人材を集めたんだろうねえ、あの神は」

曹操がちよつと苦笑気味でノるけど、真面目にそれなんだよなあ。

ハーデスの息がかかっていると断言できる、いくつかのチーム。そのメンバーが変わったかと思ったら、勝率が一気に跳ね上がってきてる。

特にヤバいのが「ブラックサタン・オブ・ダークネス・ドラゴンキング」チーム。優勝候補の「西遊記」チームを打倒して、一気に注目を集めている。

また、メンバーの交代が少ないチームも活躍してきてるから困ったもんだ。

こつちで特にヤバいのが「偉大なる冥府神の従僕」チーム。ラツイカ・レヴィアタンが王を務める、人間が多く構成されているチームだ。

壱崎虎美は俺のことが嫌いだし、エカテリーニって人は英雄派を恨んで当然だし。ある意味俺達のが嫌いな連中だけで構成されるな。

それで英雄派や、優勝候補の「黒」チームまで負かすんだからやばいって。ラツイカ自体は割とフレンドリーだったけど、演技の可能性もあるしなあ。油断できなさすぎる。

「まあそんなこんなで、超越者クラスが二人もいたり、神器の力を無力化したりブーストしたり。そんな連中がゴロゴロ出て来て先生もちよっとマジ顔になりそう。っていうか思わずグラス落として高い酒飲めなかつたわね」

あく。リヴァさんもかなり驚いたんだ。

ま、それは確かに。

あれは本当にビビったというか、あんな切り札まで持ってたのかよっていうか。

ラツイーカが魔王末裔であることを考えれば納得だけど、それにしただ。

「……問題はいくつもあるけれど、問題はラツイーカと例の超越者ね」

リアスが困惑しているのも無理はない。

西遊記チームを下し、会った時のオーラと戦闘映像から超越者なのは間違いない、バルベリスとヴェリネっていう二人の悪魔。

曹操達に奇襲をかける四人の神器を、大幅に強化したラツイーカの業魔人じみた所業。

どちらも、ハーデスと敵対した際に武力として脅威になる。

まして超越者が二人いて、魔王末裔を神輿に据えられる。政治に詳しくない俺でも、冥界が揺れることが分かる。

……使い方によつては、冗談抜きで冥界政府から多数の造反者が出かねない。

「……出所のついてはこちらが探る予定だよ。諜報を担当する者は当然忙しくなるだろうね」

鳶雄さんがそう言うけど、そこはそうなるよな。

真魔王計画なんてのが知られている、そこ出身のラツイーカはい。だけど超越者クラス二名はそれとは別の意味で厄介だ。

あのリゼヴィム級の純血悪魔が二人いるだけでも、ハーデス達の戦力は大きく底上げされている。ただでさえ隔離結界領域に主力となる神々を送っている俺達だと、懸念事項が多すぎるぐらいだ。

「懸念事項は他にもあります。壱崎さんのあの異能です」

そしてソーナ先輩の言う通り、そこも大変なんだろうなあ。

「神器の無力化か。リゼヴィムを思い出すね」

「あれほどの絶対性はないようだが、無力化が出来なくても弱体化が狙えるようだな」

「使い勝手は増しとるのお。今の二天龍でも影響は受けそうじゃ」

ヴァーリもサイラオーグさんも孫悟空のじいちゃんも、その辺りを評価している。

壱崎虎美か。俺のことめっちゃ嫌いだろうし、俺が相手をするのかもな。

そういう意味だと、神器の力を弱体化させるあいつは厄介だ。乳技で押し切る手もあるけど、たぶん対策ぐらいは立てるだろうしなあ。ただ、気になることが多すぎるな。

「でもどんな方法でやったんですかね？ 禁手や残神にしたっておかしくないか？」

「どうやって」が気になる。

神器の力を削る異能。どうやって作ったんだらうか？

あの言い草だと神器の力を積極的に使うのも嫌だろうし、禁手や残神ってことはないだろう。

そもそも、禁手や残神にしたって限度はあるだろ。あんなどんな神器も弱体化させるような異能になるとも思えない。

俺はその辺が気になって質問してみたけど、誰もが首を傾げている。

事実上の技術顧問二代目であるリーネスも首を傾げているしなあ。それだけの難行ってことなんだろうさ。

……いや、本当にどうやって？

首を傾げているその時だ。

「そこについては、こちらが仮説を立てれます」

その言葉と共に、入ってくる人がいた。

「……クロード長官？」

カズヒが困惑しているけど、クロード・ザルモワーズさんだ。

プルガトリオ機関の長で、かつて召喚されて受肉した、教会が用意した偽ジャンヌ・ダルクのクロード・デュ・リスのサーヴァント。

プルガトリオ機関とはちよくちよく関わるけど、ここで来るのか。「お久しぶりつす、クロードさん。で、どうしてここに?」

D×Dのリーダーでもあるデュリオが挨拶すると、クロードさんは軽く苦笑しながら頷いた。

「こちらで受け持つている案件で、その説明が出来そうなことがあります」

なるほど。

プルガトリオ機関は大きい組織だし、色々と動いてるからな。何か知っててもおかしくないのか。

そしてクロードさんは映像を映し出し―

『『『『『『『『『ヴォルテックス!!』』』』』』』』』

―なんか変な映像が出てきた。

っていかツツコミたいんだけど。

「……なんで渦ヴォルテックス・バンチの団ですか!？」

俺達オカ研が、春休みの日本横断旅行で何度もかち合ったテロ組織。禍の団とややこしく、色々混同され合ってたらしい渦の団。その戦闘員達が敬礼している映像だった。

「残念ながら、彼ら渦の団が大きく関与しているのです」

クロードさんは真面目な顔で俺達を見回した。

え、これってマジな話? 真剣にしないといけない話なの?

もう頓珍漢な連中だった。俺のお得意様にも変人は多いけど、勝るとも劣らない幹部達だった。

地味に強かったからなあ。なんていうか、頭が痛くなるっていうか。ファアーブルが敵に回ったらあんな感じなんだろうかって感じ。

……俺も敵から見るとあんな風に見えるんだろうか。

ちよつと落ち込みたくなっていると、クロード長官も目元をもんでから、頭痛を堪えた表情になる。

「単刀直入に言います。彼らは実験により異世界に一時的に転移。それによって得られた力を振るっていたのです」

……………。

え?

「長官、長官。まさか乳神案件ですか!？」

カズヒが珍しく慌て気味で問い質すけど、クロードさんは首を横に振った。

あ、違うのか。安心したらいいのかどうなのか――

「残念なことに、どれ一つとて乳神の出身世界とは異なるとみられています」

―どれ、一つ!？」

「待つてくださいい！　つてことは、いろんな世界からいろんな技術を引つ張り込んだっていうんですか!？」

思わず大声で聞いちゃったよ。

おいおい、俺達が乳神様の異世界に困惑してたり侵略云々している間に、この世界はどれだけの異世界と接触を持ってるんだよ。

ヤバイ。リゼヴィムが異世界侵略を目指して頑張っている間に、なんか訳の分からない軍団が何度も異世界に行ってたなんて。

「どうやら限定的な転移だったようですが、そこから技術を取り込み扱えるものまで用立てる。渦の団は思った以上に難敵だったようですね」

マジですか!？　あいつら、そんな凄いことしちゃってましたか！

あ、でも訳の分からない技を使ったらしいしな。それがそういう事だったのかあ……。

俺達が何とも言えない空気になっていると、クロード長官は映像を移し替えていく。

そこにはかつて九州で現れた拉麺のイソギンチャクに、つい先日戦ったマーボー豆腐の鯨がいた。

「例えばこちらの食物で出来た生物ですが、これらは渦の団が「食界」と定義した世界の異形のようです。食文化の違いで世界大戦が起きて荒廃した世界のように、その過程で生まれてしまった異形こそが、この食獣しじゆうとのことです」

「すみません。ツツコミどころが多いのですが」

思わずカズヒがツツコミを入れるけど、クロード長官は目を伏せて首を横に振った。

あ、ここからが本番だ。

「そしてその食獣の根幹といえるものが、特定の食に対する強い思いを糧に発現する異能、食技^{じき}。……概念的にはヴァーリ・ルシファアの麵技と同じです」

「なるほど。例の鮭怪人が振るっていたのはそれか……一戦交えてみたかったね」

ヴァーリ、クロード長官が頭痛を堪えてるのに、そんな真剣な表情で興味深くないでくれ。

なんていうか頭痛がしまくる状態な気もするけど、この際それは置いていて。

それ以外にも色々あった気がするけど、本当に頭が痛くなりそう
だ。

「また、人体改造技術が異常に発達した世界もあったそうです。どうも世界征服がなされていたようで、迂闊な介入は避けたようですが」
そう前置きしたうえで、クロード長官は本題とばかりに映像を変えた。

九成達がぶつかった、京都の警察官を怠けさせた奴。木場が懲らしめた、道頓堀川の水を自在に操る奴。

「……彼らはそれぞれ、何かしらの縛りを入れる誓約を己に科すことでそれに見合った異能を得る誓約術が確立した世界及び、憎悪や怨恨を核とすることで他者を害する異能を振るう怨術という物が確立された世界の異能を会得していました」

……どこから突っ込んだらいいんだろう。

毎度毎度道頓堀川に落ち続けることで、少しの間道頓堀川の水を操る異能って、限定的すぎるし。

なんなら警察官を怠けさせるだけの術ってなんだよ。警察官を恨むにしても、もうちよつと異能の方向性があったんじゃないだろうか？

「おそらくですが、壱崎虎美が振るったのは前者でしょう。彼女の駒価値から逆算して、高位の神器を持っているようですから」

クロードさんの説明に、リーネスと孫悟空の爺さんが納得顔になっ

た。

「なるほどねえ。神器を不要とする価値観に、更に生まれ持つ神器そのものを一切使わないという縛りがあれば―」

「―その分、神器の力を削減する異能として使える。そういう可能性はあるのお」

技術顧問とサブリーダーが言うなら、可能性は高いか。

そして、リーネスは小さくため息をつく。

「問題は怨術ねえ。間違いなく、英雄派に恨みがあるなら対英雄派に特化した怨術が得られるでしょうしねえ?」

「……中々厄介な話だね。自分の尻は自分で拭けと言われるだろうが、拭きたくても相性が悪すぎるんだけどね」

曹操がそうため息をつくけど本当になあ。

ちよつと反応を確かめたくてカズヒの方を見るけど、カズヒは割としたり顔だった。

「ま、困ぐらいは死に物狂いでやって頂戴。それぐらいは責任を負ってもらわないと困るわね」

あ、意外と優しい。

ちよつと意外に思っている人達の視線を浴びていると、カズヒはつまらなさそうに肩をすくめる。

「起爆剤になったのはこちら側の沙汰その物でしょうしね。できないことまで無理にしろとは言わないわ」

「……言ってくれるね。君達を出汁にしつつどうやってあいつらを止めるか、試したくなってきたよ」

二重の意味でなるほどなあ。

ま、カズヒもきちんと処罰されてる奴に言いすぎることはないか。ただし、曹操達を挑発してやる気スイッチを入れるぐらいはすると。

曹操も分かっただうえで乗っているみたいだし、ま、必要なら協力するか。

「……俺の場合、壱崎の相手で手いっぱいになるかもだけど。」

「二ついいですか?」

あ、九成が手を挙げた。

なんだなんだ？

「相手が何をしたのかに仮説は立てられましたけど、このままってわけにはいかないでしょう？　俺達も対策を立てたり、こちらも流用するということも考えるべきでは？」

あ、なるほど。

確かに、相手にばっかり強い力を使われるってのもあれか。

怨術はともかく、食技はヴァーリが学んだらもつと凄いいことになりそうだしな。誓約術も、ある程度なら使えるかもだし。

俺が納得していると、クロードさんも頷いていた。

「その通りです。……なので、既に作戦を立てています」

そういうと、クロードさんはマップを映し出した。

えっと、山奥っぽいけど？

「渦の団残党の拠点を確認したので、各種資料を獲得することも狙い強襲作戦を仕掛ける予定です。もしよければ、何人かサポートに貸し出してくれると助かります」

あ、意外とちやつかりしているんですね。

Other side

「さて諸君、仕事の時間だ」

「なんだよ大将。また俺らをこき使う気か？」

「はっはっは。ここ最近訓練ばかりで暇だろう？　たまには給料分の仕事をしてくれないとね？」

「……ケツ！　ま、食わせてもらってる分の仕事はしてやる。それで

？」

「簡単に言えば、とある悪の組織の秘密基地を襲撃してほしい。中の資料もいただきたいが、それは随伴部隊がする仕事だね」

「例の渦の団ってか？　なんか妙な手品を使うみたいだが、そんなに必要かね？」

「もちろんだとも？　分かる者には宝の山だ。……最も、今度の作戦は手古摺るかもだろうが」

「あん？　木っ端テロリストの残党如きに、俺が負けるとでも思ってるのか？　ブラネテス人造惑星舐めてんじゃねえぞ？」

「はいはい。ま、その辺りは期待してるよ？」

「ハーデス様、いいですか？」

『ふむ、虎美か。何ようだ？』

「技術顧問のランドアングリフですが、どこかに行ったのですか？」

「……今後を考え、ある程度の装備調整はしてもらいたかったのですが」

『怨術や誓約術の更なる研究の為、子飼いを連れて残党狩りをしておる。ある意味ではおぬしにとっても都合がよからう』

「それはそうですね。ただ、現状の装備だといざD×Dに挑む際、押し切られる余地があったので」

『……まあ、おぬしらDスレイヤー及び、エカテリーニ達カウンターポイズンは、あやチームD×Dに対するネガティブキャンペーンというものを踏まえておるからのお？　実力も踏まえてチームに送ったが、限度はあるか』

「自画自賛になりますが、Dスレイヤーで最強の私ですら、相性で勝つていながら曹操にあのざまです。カウンターポイズンが総出で潰せたのは行幸ですが、先を考えるとそれなりの強化武装が欲しいところですね」

『ふむ。確かにあつさり潰されれば「大したことがない」と思われるだけか。よかろう、あとでランドアングリフに伝えておこう』

「……礼を言います。やはりあなたぐらいしか、人類を託せる神が現状おりませんので」

『フアフアフア。ランドアングリフが提言せねば、儂は人間の力を積極的に借りはせぬかつたろう。そこは感謝しておけよ?』

「承知しました。……すべてまとめて、いずれあいつらと挑む時に勝つことで返させていただきます」

闇動神備編 第十二話 たまたま同じ目的で出くわすと、気まずいよね

Other side

「失礼いたします、ベルゼブブ様」

「クロード長官か。ご苦勞、まずは座ってください」

「ありがとうございます。そして、ロキに同調していた者達の件で追加報告が」

「直接来るとは、それなりに懸念事項ということか」

「はい。……どうも、ロキはPMCのいくつかを買収して子飼いの戦力にしていたようでして。残党といえる者達も存在しているようです」

「……狙いは星辰奏者。そして、現代の英雄を取り込む為か」

「そのようです。良くも悪くも国軍からだど、人間界との折り合いや和平前の各勢力を気にすることになりますからね。我々も表向きのカバーとして、そういうった企業を設立することを踏まえておりました」

「厄介な話だ。あのロキのことだし、デコイもいくつかあつて本命は探しづらいだろう」

「はい。またPMCではなく違法な傭兵企業や私設軍隊なども考慮すれば、相当時間がかかることでしょう」

「……そして、そのいくつかがハーデスと繋がっている可能性は大きな」

「接触することができれば間違いないでしょう。ハーデスとロキは思想の面から同調しやすいです。残党はハーデスの支援を受ければロ

キの奪還も狙えますし、ハーデスも現場で動く部隊として徴用可能ですし」

「更に、ロキを倒された復讐という形にすれば、ハーデスとの直接の繋がりを探り難い形で襲撃も可能。いや、別の残党をそそのかす形で動かすことも可能か」

「頭が痛いですが、この手の類はプルガトリオ我々機関の専門ですから。続報が入り次第、追って連絡します」

「分かった。……それと、チームD×Dが何人かそちらの作戦に協力するとか」

「はい。カズヒが借りれば儲けものつもりで提案したのですが、意外にも頼れる人達が多くて逆に困りました」

「はははっ。彼らはそういう者達だと知ってるだろうに。まあ、そろそろ例の異世界技術も取り込みたいところだしね」

「……偉大なる冥府神の従僕チームですが、間違いなく使っているでしょうね」

「ハーデスにしては人間を積極的に徴用しすぎているし、おそらくロキ残党辺りが提案したのだろう。負の側面を見せつけるのは、大衆向けのコマーションルとして有効だろうしね」

「既にエカテリーニ・ロド・サンブックの情報漏れ始めています。おそらく意図的に流すことで、潜在的に不満層を増やす算段かと」

「既にサンブック王国からも抗議声明が送られているからね。「いくら何でも元テロリストを放し飼いにしすぎている」とね」

「……現状異形からは抵抗がないですが、被害者の会でも結成されるとやりづらいですね。特にジャンヌ・ダルクに関しては教皇陛下が下した沙汰ですから」

「まったく。禍カオス・ブリゲードの団も早々に復興の兆しが見えていることといい、厄介なことが多いものだよ。」

そういうわけで、俺達はこうして渦ヴォルテックス・パンチの団残党の討伐作戦に参加することとなった。

とはいえ、D×Dはあくまで助っ人扱い。加えて多くの参加表明者にはアザゼル杯やそれ以外の業務もあつたので、全員参加というわけではないんだけどな。

……ただ、渦の団相手に過剰戦力気味でプルガトリオ機関が動いていることもある。だからこそ、戦力としてよりこれを利用した慣らしを目論んだ構成になっている。

で、そのメンバーだが――

「はっはっは。俺も死徒とは戦ったことがあるが、まさか最高位の直下とはな！ それに動きも鍛え上げられた者のそれだ、いざという時は頼りにしてるぞ！」

「ど、どう……も」

――サイラオーグ・バアルが参加しているうえ、緋音さん達も参加している。

異形アレルギーがある緋音さんが参加しているのは不安かもだが、これはちよつとしたりハビリを兼ねているからだ。

今回の作戦はプルガトリオ機関や五大宗家が主体。それで本来は終わらせる予定であり、俺達はあくまでゲストだ。

だからこそ、緋音さん達の慣らしにもなるだろう。そういう判断である。

もちろんイレギュラーの可能性もあるが、それを気にしていたらもう何もできない。ある程度はリスクに目をつむる必要があるのが世の中であり、問題はその辺りにどう折り合いをつけるか。そういう話だ。

幸か不幸か、サイラオーグ・バアルやバアル眷属がいるのならだい

ぶました。彼らは若手悪魔としては異例なレベルの戦力であり、アザゼル杯でも連戦連勝の高い勝率を誇っている。これ以上の戦力を求める場合、それは国家予算を投じてでも必ず得られるようなレベルでは無いと断言できる。

ならこれで十分だ。あとは俺が頑張つてフォローするべきところだろうさ。

……と、いうわけで。

「お前はお前で頑張れイツセー。俺は俺で頑張るから」

「悪かったな畜生！」

俺は一緒に参加しているイツセーに、割と残酷なことを言い放つておく。

ツツコミは飛んできたが、こればかりは仕方がない。

異形アレルギーがまだ完全に治っていない緋音さん。そのフォローになるべく徹しつつ、有加利さんのフォローも入れるべきだからな。ちなみにザンブレイブ姉妹も参加している。

俺もカバーできる範囲に限度はある。主にアルティーンネに関しては、イツセーに任せたい今日この頃だ。

……つと、作戦が始まったな。

「じゃ、様子を確かしつつイレギュラーに備えるということ。サイラオグ・バアル、そっちもあくまでゲストなのを忘れないように」その辺りは釘を刺しておこう。

俺達だけで何でもかんでも解決すると、他のメンバーが育たない。俺達と真つ向から渡り合えるだけの戦力なんて早々ないが、どう考えてもハイローミックスのハイなんてレベルじゃない質である自覚はある。点の突破力とでも形容するべき、まさに精鋭部隊の類なんだよ俺達は。

それと同じぐらい、面の制圧力と形容するべき範囲をカバーするメンツは重要だ。ハイローミックスのローは、数を揃えたうえである程度の質も必要だからな。ただの有象無象の人海戦術では駄目だろう。

基本的にフロンズ達の領域だが、政敵に全部頼るのも冥界政府的にあれだろう。フロンズ達だ（ディアドコイ・ブライベーター）って後継私掠船団で、点のカバーをし

ているわけだし。

というわけで、実戦経験を多くの者達に積んでもらうことが重要だろう。俺達は想定外の事態に対する備えで十分。ワーカーホリックは避けるに越したことはないのです。

「さて、何事もなく終わってほしいもんだー」

—チユドオオオオオオツン！—

「—と思ってたんだがなあ」

なんか、明後日の方向から戦闘の音が聞こえてきたんだけど？

なんでこう、俺達つてば高い確率でトラブルに巻き込まれる……っ
「本部、想定されてない箇所が起きていますようだが？ 何が
あったか報告してくれ」

サイラオーグ・バアルが確認をとっているけど、まあある程度は予想できるので俺は周囲を確認。

さて、この位置ならいきなり強襲されることはない。俺達D×Dメンバーが来ていると分かっているのならともかく、そうでないなら戦術的優位性が薄いこの地点を真っ先に狙う可能性は薄いからだ。

なので、呼吸を整えて周囲の様子を確認する余裕はある。

「サイラオーグさん、もしかして禍の団ですか!？」

イツセーが当たりをつけるけど、サイラオーグは首を横に振る。

「いや、どうやら全く異なる集団らしい。プラネテス人造惑星が四機確認されているそうだ」

ついに全く別口のテロ組織まで、当たり前のように人造惑星を投入するようになったのか。

サウザンドフォースではない。奴らは量産型の大型兵器や艦艇まで持っているからな。

だからこそ、この事態は歓迎できない。

どんな勢力が出てきたのかは知らないが、魔星を当たり前のようになんかところに投入するとか勘弁してほしい。控えめに言うまでもなく、今後の世界の治安に悪影響だ。

まあいい。奴らが来る前に最低限の情報確認と意思疎通を――

「……なんだと!? 気をつけろ、一体がこちらに向かって真つすぐ突っ込んでくるぞ!」

――なんでピンポイントなんだよ!?

思わずぼやきたくなるがそんな時間もない。

瞬時にパラディンドッグを起動して変身。魔星剣を展開して防衛体制を万全に。

その瞬間、森から飛び出すように一体の敵が飛び出してくる。

そいつは俺達の迎撃を素早く躲しつつ、俺達を視認。

「……チツ」

……あれ? なんか舌打ちされてないか?

心当たりがなかったのだが、殺気が俺に対して真つすぐ突きつけられる。

「てめえかよ、九成和地。木っ端信徒や退魔師しかないんじゃないやなかったのか」

名指しされてる。

「まあいい。なんか気になったんで来てみれば都合がいい。……こここでぶち殺すとするか!」

因縁ある感じだけどー

「すいませんどちら様ですか!?!」

「殺すぞクソガキイツ!?!」

――顔が見えないから誰だか分からねえ!?!

ブチ切れられても困るぞ!?! マジで誰ですかあああああ!?!

イツセーSide

なんか九成が因縁つけられてる!?

ええい、いったい誰だか知らないけど、九成に何の恨みがあるってんだ。

とにかく、ダチとしちや放っておけない。というか、こつちに仕掛けてきた敵なんだから容赦する必要もない。

遠慮なくぶち倒す、そう思った時だ。

『緊急連絡！ ガトリンガルと思われる戦闘兵器を確認！ 禍の団が参戦したと思われます！』

おいマジかよ!?

ここで禍の団だと!? タイミングが—

『こちら第十三班！ 突如として施設内の非戦闘員が怪物に変貌！先日の怪物化現象と同様の存在と思われる!!』

—悪すぎだろ!?

っていうか、例の怪物化現象って亜香里や有加利さんのケースか!? おいおい、勘弁してくれよ。

あれは結局、大きな情報が掴めないまま収束していた。だから再発の可能性はあるし、にも関わらず対策を立てるのが難しいところもあった。

だからってこのタイミングかよ!? どんだけ—

『こちら北部中隊本部！ 内部において別勢力と思われる存在を確認！ 渦の団と戦闘が行われている模様!!』

—本当にどんだけだよ!?

ああもう！ 渦の団の残党を潰すだけかと思ったら、謎の魔星に禍の団に怪物化現象に更に別勢力!?
敵が、敵が多いiiiiiiiiiiiiっ!!

闇動神備編 第十三話 星の戦槌

和地Side

なんか急にたくさん出てきたなあ、おい！

「千客万来にもほどがある！ 乱戦にしたってやりすぎだろ！」

星魔剣を振るって魔星に一撃を叩き込もうとしながら、俺はぼやく。

それに対して、魔星は聖なるオーラを持つ剣を構えると、俺の攻撃を受け流しながら愉快そうに笑う。

「面倒な仕事だが悪くねえ！ 薪は多い方が騒がしくなるしなあっ！！」

俺の相手に集中したいってか。厄介なファンに好かれたもんだ。

舌打ちをしたくなりながら迎撃するが、敵の動きに何となく覚えがある。

……というか、ザイアで教えられた剣術モーションに近いな。関係者か？

しかし様子見や探りを入れている余裕もない。何せ事態は厄介なほどに乱戦だから、いちいち魔星にかかずらっているわけにもいかない。というか、パラディンドッグの持続時間が厳しい。

流石に一時間ぐらいなら問題ないが、あまり長期戦ができるわけでもないからな。

なのでこちらも容赦はしないと思った時、魔星を起点に大量の敵影が出現した。

いや、数がいきなり増えるとか勘弁してくれ。

こちらも禁手を切り替えて対応したいが、それより先に動きが変わる。

魔星が更にギアを上げると共に、手に持った聖剣に魔のオーラがまとわりつく。

その瞬間、奴の剣が聖魔剣へと変貌した。

「なんだと!？」

咄嗟に躲してしのぐが、これは想定外だ。

木場の聖魔剣は相当のイレギュラー。簡単に真似できるものではない。

禁手によるものといえど、簡単にできるわけがない。それをこうもあつさり？

警戒度を跳ね上げた方がいいな。こいつ、かなり研鑽を積んでいる！

そう思った時、渦の団残党の方から何か接近してくる。思ったらオーラの弾丸やエネルギー弾が飛んできた。

「ちっ!」

同時に舌打ちして、俺達は互いを蹴り飛ばすようにして距離を開ける。

直後、放たれた攻撃が俺達のいた地点を通り過ぎる。

そこから乱戦の形で現れるは、かつて見た欲望のままに動く魔獣達と、それに対応する謎の集団。

衝動のままに暴れる怪物達を相手するは、まるで機械のように無感動かつ無感情な動きで連携攻撃を仕掛ける集団。

と思つたら、今度はガトリンガル・ゴリラとか言われていた人工神器兵器までもが出現する。

ああもう、数が多すぎるだろうに!

これは短期決戦でどうにかなるレベルじゃない。これは、パラディンドッグを使うタイミングを間違えたな。

俺は意を決して禁手を解除すると、サルヴェイティングアサルトリックにプログライズキーを変更する。

禁手で畳みかけるのは、状況の変化を考えて立ち回る時だ。まずは長期戦を視野に入れてしのぐしかない。

だが、魔星の方は俺のその態度に苛立ちをあらわにしている。

「禁手もなしに俺をどうにかできると? ……なめてんじゃねえぞ、狂犬!!」

「失敬な！」

狂犬扱いは不愉快だな。俺はむしろ逆方向だぞ!!

百歩譲ってカズヒやイツセーなら分かるが、俺をピンポイントに狂犬扱いとは失礼な。愛する者にアメンテース・アームメンテース正気無しとかいうラテン語の格言を聞いたことはあるが、それにしたって失礼な。

「寄りにもよって狂人扱いか！ 流石に苛立つな」

吐き捨てながらミサイルを発射。同時に機銃掃射を行って、乱戦の中注意を俺に引き付ける。

まだリハビリ中の緋音さんや、戦闘慣れしていない有加利さんがいるんだ。ここはしっかりとフォローしておかないとな。敵の注意はこちらに引き付けるぐらいでちょうどいい。

実際問題、まず一体に集中して撃破するのは乱戦だと有効でもある。そういう意味では乗っかってくれやすいだろう。

そして、無感動な連中は攻撃の優先順位を俺に向ける。欲望の怪物も、俺に攻撃を受けたことで俺の対する攻撃に意識を向けている。魔星は当初から俺狙いなので分かり易く乗ってくれた。

ガトリンガルは乗っかってくれてないが、そこはイツセー達に任せるとするか。

そう判断しつつ、俺は一呼吸を入れてギアを切り替える。

普通に考えれば、とりあえず共通の敵に集中攻撃するのは理に適っている。高確率で集中攻撃により撃破できるだろうしな。

だが、俺の場合は別だろう。

極晃に到達しているが故のポテンシャルを全力で振るい、俺は防衛戦を開始。

障壁で攻撃を受け流し別の敵にあて、接近戦は捌きつつ敵同士が邪魔になるように誘導。そのうえで魔術も踏まえて攻撃を入れることで、更に浮いた敵を始末していく。

生憎防衛戦は得意なんぞな。ここでしつかり仕事をさせてもらう

!!

九成はやつぱりこういう時強いな！

ちよつと感心したけど、そればかりでもいいわけがない。

すぐに俺は真女王になり、接近してきた敵を殴り飛ばす。

同時にサイラオーグさんも獅子の鎧を身に纏い、敵を殴り飛ばしていく。

亜香里達はサイラオーグさんの眷属もいるし、当分は大丈夫。まずはペースを取り戻す！

「サイラオーグさん！ 右は任せました！」

「ああ、行くぞ、兵藤一誠!!」

サイラオーグさんと共に敵を殴り飛ばし、とりあえず全員が合流できるところを開ける。

乱戦だからな。まずは合流して陣形をとれるようにする！ これも戦術の内だ！

とにかく固まって対応できるようにしてから、分散して倒せばー

「なるほど、これがチームD×Dのフィジカル二大巨頭というものか」

―その瞬間、目の前に男が現れた。

なんだ、これは。

高速移動？ 空間転移？

いや、それとも何かが決定的に違う。寒気すら覚えるほどに、何かが決定的に違う。

「イツセー気を付けて！」

思わず俺達が面食らっていたのに気づいたのは、離れたところで乱戦をどうにかしていたアルティナーネの大声だ。

「そいつはアルグラブ！ 僕と同じでスタードライブの真徒だよ！」
マジか、こいつもスタードライブ!?

構えをとるその時、更に真徒と思われる奴が二人ほど現れる。

「お前達はアルティーンを頼む。こちらは俺が引き受けよう」

「承知」

アルティーンに向かっていく真徒二人。

俺もサイラオーグさんも対応したいけど、それは相手が許さない。

「悪いが魔王クラス以上が相手ならば、こちらも手加減は一切ない」

その言葉と共に、相手はいきなり抜き放つ。

「創生せよ、地より溢れし星辰よ——我らは煌く星の使徒」

その瞬間、いくつもの球体が出てきた俺達に襲い掛かってきた。

「青き宝珠、命育む奇跡の星。今ここに、その輝きを代行せん」

俺もサイラオーグさんも拳で迎撃するけど、硬くて重い。

「無尽に広がる星の海。その砂粒の一つにある、この奇跡に宿る我らが幸運。そこに感謝を捧げよう」

巻き込まれた敵が文字通り跡形もなくぶっ飛ばされる中、アルグラブとかいうのは冷静だった

「故に星敵粉碎あるのみ。星の重みで押し潰されろ」

殺気すら感じない。それが逆に寒気を感じちまう。

「この一撃こそ星の代行。大地を汚すというのなら、その業に立ち向かうが義務である」

こいつ、本当にアルティーンと同じ種族か？

そう思うぐらい、目の前のこいつからは相手を殺す気負いつてのが感じない。

「汝、星に挑む価値はあるか？ 能わるのなら、砕け散れ」

どこまでも無感動なのが、思わず振るえそうになるぐらいになる。

俺が例え滅ぼすことになろうと、皆と過ごす平和を汚すやつを倒すという決意を持ったのと真逆。そう言いたくなる。

「超新星——星の重みは神罰が如き、砕け散れ」

こいつらは、本当に掃除感覚で人間を間引くつもりなのかよ……っ

！

アルグルス・スタードライブ
☆^{アー}星^スの^ス重^メみ^イは^ス神^ス罰^スが^ス如^スき^ス、^ス砕^スけ^ス散^スれ^ス
基準値：A
発動値：A A A
収束性：A A
拡散性：B
操縦性：A A
付属性：D
維持性：A A
干渉性：D

「我が星槌、果たしてお前はしのげるかな？」

Other side

その光景を見て、アルティーンは舌打ちを仕掛けている。

「あくもう！ 厄介なのが来るしなあ、もう!!」

この状況はめっっぽうまずい。

真徒はその性質上、地球上では戦闘能力が大幅に向上する。

あくまで例えるなら、自身の力量と釣り合った眷属フルメンバーに従えるに等しい。そしてスタードライブの名を冠す真徒は魔王クラスであり、当然だがそれに比例する眷属フルメンバーを敵に回している状態だ。

如何にイツセー、そして肩を並べられる戦士がいるとはいえ、今のアルグラブはそう簡単には倒せない。

そもそも真徒は命を懸けるつもりはあまりない、害虫駆除やごみ掃除の感覚で動いているのだ。その状態で魔王クラスすら打倒できるあの二人を相手にする以上、更に札を持っていると考えるべきでもある。

必然として、アルティーネは気合を入れる。

イツセーという毎日は楽しい。

無感動な日々は好きじゃない。

それは断言できる。

なら、戦える。

だから、こそ――

「創生せよ、地より溢れし星辰を――我らは煌く星の使徒」
ここで、やるべきことは決まっている。

闇動神備編 第十四話 革命の真徒

カズヒSide

プルガトリオ機関が活動することもあり、私も参加していてよかったですと思う。

何故ならば、目の前のやつを相手にできるのは上澄みだけだ。自分で言うことでもないけれど、私以上の使い手はプルガトリオ機関でも両手の指なら余りが出るといって確信がある。

そしてその大半は神が参加するエクストラ部隊。となると、更に太刀打ちできるものは限られる。

振るわれる攻撃は神殺し。更に絶大なる聖なるオーラを纏い、こちらを殺さんと振るわれる。

それをこちらも聖なるオーラを使っていなしながら、私は仕切り直しを兼ねてため息をついた。

「……今回の作戦、人類の間引きには程遠くないかしら？ 疾風殺戮・com！」

「こちらも組織人なんでね。特に首魁の動きともなれば、補佐必須だろう？」

そう言い返すのは、確か疾風殺戮のリクだったわね。

聖槍の再現、それも肉体と一体化させる方向性の亜種で発現させる^{アステリズム}星辰光。更に独自に仮面ライダーに変身する。

間違いなく、現存の禍の団ではトップクラスの实力者。まだまだこういうのが残っているのだから、禍の団もしぶといわね。

そして、別の意味で厄介なのがいる。

「俺を忘れるんじゃないやねえぞおっ！」

振るわれる攻撃を、私達は互いを足場にする形で飛び退って回避。

現れたのは、虎のような意匠がいくつか見える謎の存在。

プログライズキーとはまた違った科学的な装備を纏っており、性能もサイラオーグ・バアルクラス。

今私達は、三つ巴の戦いになっている。

……最初は渦の団の怪人かと思っただけれど、どうも毛色が違う。

それにこいつを見つけた時、離れたところに似た格好の奴がいた。

おそらくは、渦の団の技術を狙った別勢力。結果的に四つ巴状態であり、外側で更に別件と思われる勢力もいる以上は五つ巴と言ってもいい。

千客万来過ぎて渦の団残党は泣いてそうね。

とはいえ、これ以上好きにさせるのは論外だ。

上手く敵を押し付けつつ、まとめて屠れる機会を探るべきだろう。

ただし、それは相手も考えているみたいだけれど。

そんなことを思っていると、更に状況は悪化する。

「……へえ？ 疾風殺戮に悪祓銀弾シルバレット、更に妙なのが出てるじゃないか」

その声と共に、更なる攻撃が別方向から放たれる。

私含めて三者三様で捌くけれど、周囲が更に破壊された。

既に岩盤すら破壊されて外の様子が見える中、其れを成した奴は肩をすくめながら現れる。

「あらら、全部対処されてんのか。……本気出したつもりなんだけどなあ〜」

そうおどける相手は、おそらく人造惑星プラネテスと思われる存在。

外観から見える印象から見て、おそらくこれまでとは全くの別口。

そして、戦闘特化型であり高性能でもある。

頭が痛くなりそうだわ。これが終わったら、シルヴァスタン共和国まで行って店長のところで酒とつまみでもかつ食らおうかしら。

和地も誘いましょう。あの子、金使いたくてたまらないもの。奢らせてあげるのも女の甲斐性かしらね。

ま、それは後で考えるところ。

「まったく、とんだパーティ会場ね」

私はそう愚痴ってから、意識を素早く切り替える。

どいつもこいつもあれな連中なのはほぼ確実。ならば容赦の必要

なし。

悪祓銀弾シルバールレット、なめるなよ？

和地Side

振るわれる攻撃を素早くさばきつつ、何とか緋音さん達と合流したが、それがそうもいかない。

今俺は、人造惑星に粘着されている真つ最中。こいつを連れて行くのは気が引ける。

ただ、そうも言ってもらえなくなっているな。

「……九成、こっち気をつけろ！」

イツセーの声飛び、直後流れた攻撃が俺を襲う。

素早く伏せつつ障壁でカバーも入れると、その上を巨大な球体が通り過ぎた。

……なんだあれはと言いたいが、厄介な攻撃なのは確定的に明らかだ。

直撃すれば肋骨ぐらいは粉碎される。それだけの質量が高速で動いており、しかも抜き打ちではどうしようもない強度もあると見た。

「チッ！ 鬱陶しい邪魔が入りやがるか。……まとめてぶち殺してやればいいってか？」

「ふむ、面倒な邪魔者がいるようだ。……まあ、次いで殺菌すればいいだけだがね」

相手はどっちもまとめて相手取る気満々か。

これをつけ入る隙にすれば、そう思いたいが……。

「和ちや……ん！」

その時、緋音さんの声が聞こえる。

振り返れば、緋音さんがフォローする形でみんなを連れてきていた。

「とりあえず、陣形で対応しない……と！」

「確かにな。まとまってくれた方が守りやすい」

ここは動き回らず、まとまって身を守る方向にした方が好都合か。問題は、急な散会ができるほど戦い慣れてない人がいることだけだな。

「亜香里、有加利さん！ 俺や九成から離れないでくれよ!!」

イツセーも気を付けているけど、さてさてどうするかー

「なら、ボクに任せて！」

—そんな声が、響き渡った。

Other side

アルティイーネ・スタードライブは真徒の姫君。

そんな敵に対し、真徒は二人がかりでかつ足止めに徹することでお応を返る。

二人がかり、それも足止めに徹したのならばそれができる。そういう判断がなされていたからこそその選択。

ただし、そこに判断ミスが一つ存在していた。

それはすなわち、「前提条件がかつてのアルティーネを前提としている」ただ一点。

真徒達はその全員が、「アルティーネが成長している可能性」を考慮していなかった。人間達と手を取り合うことで、アルティーネが成長するなどありえないと思っていた。

故に、彼らは瞠目する。

「創生せよ、地より溢れし星辰よ——我らは煌く星の使徒」

起動詠唱こそ、真徒共通。

だが、そこからは彼女だからこそ至れる劇的な変化が浮かび上がる。

「紅の衝撃は我が身を貫き、面白き世を伝えてくれた」

笑顔と共に告げる詠唱。それは、真徒達の基本形にあらず。

「星の歴史の僅か数刻。ただそれだけの短き者が、世界に彩りを示してくれる」

真徒の詠唱に、あやかる伝承は必要ない。

彼らにとって、己とは星の共生体。ゆえに、伝承ではなく地球にあやかるが当然の摂理。

「眺めて笑うが真徒の価値なら、私はそれを投げ捨てよう」

だからこそ、そのくびきを解き放ったアルティーネは、僅かにあやかる伝承がある。

感情が乗り、祈りが籠る。それを祝福のように受け取りながら、アルティーネは星を成す。

「踊る阿呆に見る阿呆。同じ阿呆なら踊りたいと、私はそこに飛び出した」

踊るように扱い戦いは、星のように輝く銃砲。

振るわれる剣を打ち落とし、有象無象をあえて巻き込みながら、ア

ルティーンネは真徒二人を圧倒する。

「無限の夢持つ赤き王道。その道はまるでパレードで、誰もが笑顔で浮かべている」

歌い上げるのは赤龍賛歌。？誠の赤龍帝を歌い上げ、その王道に続きたいと心の底から願っている。

故に遠慮は一切ない。敵対するなら容赦なし。

「私もそこに混ざりたいと、心の底から思うから。気品を投げ捨て無邪気に笑い、笑顔で明日を迎えよう」

その砲撃は戦場そのものを制圧するかの如く、敵の尽くを吹き飛ばしていく。

「我、星の共生たることを誇らぬもの。ゆえに一つの誠を誇る者」

それこそが、アルティーンネ・スタードライブの星辰光。

「我が前に立ちふさがるもの、その一切を撃ち抜かん」

星の力を銃砲とし、敵を穿つ星の権能。

「超新星——紅星の砲火、道を違えても悔いはなく」

星砲創生運用能力、ここに顕現。

アルティーンネ・スタードライブ
紅星の砲火、道を違えても悔いはなく

基準値：A A

発動値：A A A

収束性：B

拡散性：B

操縦性：A A

付属性：A A

維持性：A A

干渉性：D

そして突貫する対象は、アルグラブ・スタードライブ。

己と同様にスタードライブの名を冠す存在。すなわち真徒の王族。

そしてアルグラブもまた、瞬時にアルティイーネに敵意を向けて対応する。

……真徒はそれ自体が魔星に匹敵する星辰体運用能力を保有する。そしてその方向性は、星の力を宿す武装の創造と操作に集約される。

大半の真徒は共有のそれであり、星剣を振るうというものだ。それ自体が強力な剣であり、それを複数同時に宙に浮かべて操ることで、敵を切り刻むのが基本形。

そしてスタードライブとは、それを隔絶する独自の武装を具現化して使役する、強化星辰体運用个体といっても過言ではない。

アルグラブが振るうは星槌創造運用能力。星の力を宿すメイスを具現化して振るう力。

操作する性質上柄が必要ない為、一見すると鉄球にも見えるのが特徴。だが強度・速度・質量のすべてが高水準であり、魔王クラスですら破壊は困難。身を隠すほどの大きなそれを、同時に十五も生み出し操ることで、アルグラブは圧倒的な破砕力を保有する。

対してアルティイーネが振るう星砲創生運用能力は、星の力を宿す砲撃兵装を創造して運用する能力。

性質上付属性が高いこともあり、反動をほぼ無視した運用が可能。ただし投射攻撃を可能とする代わりに、遠隔操作能力が失われている。

故に戦闘は一瞬で拮抗。襲い来る星槌を迎撃することで、回避する隙間を作つての膠着状態に突入する。

それに対し、他の真徒達は躊躇なく介入を決定する。

アルティイーネの成長は危険であり、そこまでして人類の駆逐を阻害するのならばはや容赦をする理由もない。

これ以上成長する前に殲滅するという、極めてシンプルな回答を

もって制圧が試みられる。

造反者を、脅威度が高まる前に撃破する。これ自体は戦略としては当然。また、優位性を獲得している状態で倒すのも、戦術的には何ら間違っていない。

間違っているとするのなら、それをこの状況でなせると考えることそのものだった。

「させるかよっ!!」

横合いから拳を握り締めて殴り掛かるは、兵藤一誠。

星剣を砕き星槌を弾き飛ばした彼は、紅の鎧をもつてアルティエネに並ぶ。

「やるじゃんアルティエネ！ かっこいいぜ!!」

「……うんっ！ そうでしょそうでしょ!」

満面の笑顔で応えるアルティエネに、兵藤一誠もまた笑顔をもつて返す。

そして囲む周囲の真徒を見据え、互いに背中を合わせて迎撃の姿勢に入る。

「……じゃ、ここで一気に叩き潰すか!」

「オツケー! やっっちゃうよー!」

今ここに、戦いは更に加速する。

闇動神備編 第十五話 因縁つけるのに理由はいら
ない

和地 Side

よし、この状況はまだましといえるだろう。

真徒達がアルティーン及びカバーに回ったイツセーに集まってい
るが、あいつらやばいからな。

単純計算で魔王クラス一名最上級悪魔クラス四名に、眷属5セット
分の敵だ。はつきり言って相手にするには苦勞するのが確定といえ
るだろう。

イツセーならまだまだもたせるだろうから、今のうちにこつちで持
ち直してからカバーすればいい。

幸いこつちにはサイラオーグ・バアル眷属もいるからな。やりよう
は十分にある……けど！

「乱戦なのは変わってないんだよな！」

「まったく、こうも入り乱れるとな！」

主力であると俺とサイラオーグ・バアルで、入り乱れる戦いを何と
かしのいでいる。

乱戦になっていたら何時の間にかこうなってたよ。いやいややば
いやばい。

不幸中の幸いは、サイラオーグ・バアルの眷属は間違いなく全員が
上側であるという点。

彼らがいるなら、比較的安心ができるだろう。厄介な真徒連中も
イツセー達に注力しているしな。

このチャンスを逃さず、一気に状況をひっくり返す。

「まずはそこの人造惑星^{プラネテス}！ そろそろぶちのめすぞ!!」

俺は重装備を一齐に投射しつつ、魔剣を創造して切りかかる。それに対して、相手も応じる体制だ。

魔剣を振るう騎士団を大量に出して攻撃に回しつつ、俺が放った攻撃は障壁を張って無効化。更に聖剣を具現化すると切りかかる。

……なんだ、この動き？

慣れてくると、何故か相手がどう動くかが何となく読めてくる。慣れてきたにしても読めすぎているぐらいだ。

しかも相手も、こっちの動きをある程度先読みした対応をしている。結果的に先日手に近い状態だが、付け狙ってきたことといい俺を知っているということになる。それにしても、読みすぎな気もしないでもない。

「つくづく忌々しい奴だなあ？ だったら……こうだ！」

その瞬間、人造惑星は聖剣に魔のオーラをまとわせる。

更に同様のオーラを纏った鎧を展開。更に押し切るようにこっちに猛攻を仕掛けてくる。

俺は聖血も展開してしのいでいるが、こいつやばいな。

……人造惑星といってもピンキリはあるが、奴は間違いなく上位側だ。

こっちに対して苛立ちを向けて執拗に仕掛けているが、動きに無駄がない。

人造惑星は性質上、いくつか欠陥がある。

適当にふるうだけで強大な星を持ち、さらに強い衝動で神星鉄を制御するのが根幹設計。そのため魔星というのは基本的に、テクニクタイプになりにくい。

糞親父達が典型例だろう。元々厳しい訓練を積んでいるわけでないところに、細かい技術を習得しなくても強力な異能の獲得。そこに絶大な衝動が重なり、戦術や技術に対するモチベーションが持ち辛く、そもそも戦闘中に意識し難い性質を持つ。ステラフレームは基本フレームなどにプログラミングすることで対応しているようだが、それだって補佐が主体となる。

死者を素体として衝動をもって制御するという、基本設計そのもの

からして兵器であって戦士じゃない。プログライズキーや禁手で補正をかけている俺達が特殊であり、星辰体関連技術だけでこれを克服するのは絶大レベルに困難だ。

外観から見て、奴が第一世代を基本理念としているのは間違いない。にも関わらずあれだけの戦闘技術。それに細かいところで都合のいい流れに相手を誘導しようとする、駆け引きのようなものも感じている。

間違いなく、素体の段階で戦闘巧者。それも入念な訓練を受けているそれだ。

厄介な敵だな。サルヴェイティングアサルトドッグでは押し切りづらいか？

かといって、パラディンドッグははまだ限界時間がある。タイミングを見計らわなければ、半端な使用は敗北に繋がるだけだ。

チツ！ 面倒な！

「和ちや……ん！ 638！」

—その声に、俺は条件反射で対応した。

ザイアで散々叩き込まれた連携戦闘パターン。俺はそれに従い射撃に切り替える。

連携戦闘での運用を想定した、射撃による誘導。

俺が陽動側で、それに合わせた本命の射撃が行われる。

だが、それを相手は完璧に回避した。

……俺の攻撃を回避したうえ、回避の移動距離が絶妙に本命担当が狙いづらい位置にとどめている。

それを見て、俺は正直目を見開いた。

おい、ちよつと待て。完璧すぎる対応にもほどがあるだろう!?

「やっぱ……りね」

そう呟きながら、指示を出した緋音さんが俺の隣に並ぶ。

そして緋音さんは、微妙な表情を浮かべていた。

この反応。もしかして、知り合いか？

「緋音さん。もしかしてあいつ……ザイア関係？」

サウザンドフォース側だろうか？

そう思っていると、緋音さんは俺の方をちよつと呆れた目で見てきた。

「……阿武隈さんだよ。ほら、いっぱい突っかかってきた」

「……あく……。思い出したくなくて記憶から引つ張り出せなかった」

思い出したー。そうだよ動きが似てるし、俺の動きも想定しやすいわあ。

本当に思い出した。というか、思い出したくなかったのかもしれない。

阿武隈川人。AIMSにいた日本人メンバーであり、俺達とは別のチームだった年長者。

俺が仮面ライダーに認定される前から食って掛かってきて、合計千回以上模擬戦をする羽目になった記憶がある。

そういえば動きがそっくりだった。そして俺と戦い慣れているから、そりゃ俺の動きにある程度の先読みや誘導ができるわけだ。

「てえめえ……っ！ 思い出すのが遅すぎだろうが！ 取るに足りない木っ端だとも思ってたんのか!？」

「いやそこまでは言わねえよ。そもそも模擬戦の勝敗はそんなに大差ないだろうが」

大体600回ずつ勝ちと負けがあつて、ぴつたり50引き分けだった。

総合的にはトントレベルだと思うんだけどなあ。

ま、それはともかくとしてだ。

……まさか人造惑星になっているとはな。誰が施術したのかは知らないが、因縁がこんなところで出てくるとは。

AIMSのメンバー全てが堕天使の世話になっているわけじゃない。多くは何らかの形で庇護下に入っているが、サウザンドフォースに流れたやつも多いだろう。

だが、おそらくあいつは別件。

これは気合を入れ直さないと……なっ!!

戦闘は乱戦になっている。

時折相手を入れ替えながら、私達は素早く戦闘をし続ける。

油断と不運が死に繋がる。その緊張という鎖を気合で引きちぎりながら、私は何度目かの新顔との戦いに入る。

「砕け散れやああああ!!」

振るわれる爪に対し、私は素早く反撃を叩き込む。

比較的狭い空間であることから、私は大型の防御プレートをスベイス・カーゴ異界の蔵から転送。そのまま魔術で加速させて叩きつける。

だがその瞬間、防御プレートは粉碎された。

「脆いぜー」

虎擬きのSF野郎は、あろうことか噛み砕いた。

……あれ、イツセーでも通常禁手じゃ一回殴った程度で壊れたりしないプレートなんだけど。ついでに言うとかかなり高いんだけど。

警戒度を上方修正しつつ、私はその種を観察する。

迫りくる大型物体相手に、あえて噛み付きで対応する。その不可解に、私はある仮説を立てる。

おそらく噛み付き攻撃こそが、奴にとつての最強手段。そう考え、しかし外れている可能性も決して捨てない。

そのうえで、私は相手の猛攻を捌いていく。

「ウラウラウラアツ!! このクラッシュタイガー様に勝てるかよお!!」

……クラツシユタイガー。また安直な気もするけど、コードネームと考えるべきね。

虎をモチーフとした、破壊力特化型。そういう方向とみるべきか。渦の団としてはネーミングセンスに乖離がみられるけど、とりあえず敵なのは確定。

結論は、すぐに出る。

「いいでしょう、ならもっと相応しい装いで対応してあげるわー！」

『BURST!』

私はプログライズキーをダイナマイティングライオンに切り替え、再び変身。

そして後退し―落ちた。

「間抜けがあー！」

吠えるクラツシユタイガーは私を追撃する。

そこは戦闘で崩落した通路。そして落ちた個所は小さな倉庫。

逃げ場がないと判断した奴は、躊躇なく噛み付き攻撃を行使する。

……ええ、馬鹿でよかつたわ。

「……まだだっ！」

気合と根性を入れ、私はあり得ない体制から瞬間加速で突貫。

掻い潜り、すり抜けるように、私は上下を切り替える。

「知ってるかしら？ 狭い空間だと機動力より出力重視が有利らしいわよっ！」

狭い倉庫は小さい空間。つまるところ、爆圧の逃げる道がない。

逃げ道側から爆圧を発生させれば、それは高出力で敵に襲い掛かる。

故に、この火力は恐ろしい。

「圧殺されなさいー！」

『ダイナマイティングデイストピア!!』

その瞬間、奴は逃げることを許されず爆圧に押しつぶされる。

……残心をとりつつ、私は思考を回転させる。

渦の団残党施設を狙う、多数の勢力による乱戦。それがこの状況の簡潔な説明だ。

つまるところ、奴が渦の団とは別口である可能性は十分すぎるほどにある。

まったく。終わったら終わったらずで頭が痛くなりそうなこと。

闇動神備編 第十六話 不穩増大

和地 Side

阿武隈川人が俺に突つかかる理由は、いくつか想定できる。

まずあいつは日本人であり俺より年上。だがしかし、奴はライダーどまりで俺は仮面ライダー。

その前から突つかかれていたが、それ以上に突つかかられたのでそれもある。

それと性質がかぶっている。

俺は転生の影響で神器を二つ持っている。対して奴は、生まれ持った神器だけじゃなく、聖十字架のように宿主を渡り歩く性質の神器も宿している。つまりところ神器二つ持ちでかぶっているわけだ。

元々阿武隈はチンピラ気質などころもあるからな。年下の同系統が自分のアドバンテージを食ってるのが気に食わない、そういうこともあるだろう。

……そして厄介なことに、あいつ強いんだよ。

そして思い出したけど、あいつの星^{アステリズム}辰光がまた厄介だ。

それが、人造惑星について勘弁してほしい以外の何物でもないんだが！

「創生せよ、天に描いた守護星よ——我らは鋼の流れ星」

そして、それを本格的に開放してくるわけだよ！

「今ここに、我らは神に見初められん。約束された破滅に挑む、黄昏の戦が約束された」

先制攻撃で潰そうとするが、それは障壁で阻まれる。

宿主を渡り歩く性質を持つ準神滅具。形状変化可能な高出力防御障壁を展開する、結界系。その名も、パライン・ストレンジヤー流浪者の楽園

「栄光の死により俗世を飛び立ち、迎えられるは神域の楽園。約束されるは英雄の座、汝は人界に留まる器でないのだと、荘厳たる神々が、我が身を褒め称えてくれたのだ」

更に何発か突破しても、奴は聖剣と同等のオーラを持つ聖なる鎧で弾き飛ばす。その余裕が、更に妨害を困難にさせていく。

奴が生まれ持つ準神滅具。強大な聖なるオーラを纏った剣と鎧を具現化する属性系。その名をパライン・バスタード聖騎士顕現

「故に我、凡俗を超えた傑物なり。幾千の敵が集まろうと、有象無象が我を討つこと能わず。この身が示す魔剣の群れが、鎧袖一触、一騎当千の威光を示して屠るのみ」

そして具現化され襲い掛かるは、十体近い魔剣の騎士。

それぞれが別の魔剣を振るいながら迫りくるが、ドライブ発動値に到達している以上、そこで留まっては魔星じゃない。

「故にこそ、恨めしいのは我が宿敵。汝の守りが忌々しい」

まず、単純に数が増えた。六倍ぐらい増えた。

更に武器が魔剣だけじゃなくなる。楯も構えた。

それどころか、何体化は銃剣付きの重火器に持ち替えている。サイズから見て軽機関銃だ。

「絶対なる救済。嘆きの変換。涙の意味を変えろという、妄言こそが我が怨敵」

それらの、単独の禁手とは思えない波状攻撃。俺はゾーンに到達し、更にパラデインドッグに切り替えることで何とかしのぐ。

温存する余裕もタイミングを見計らうゆとりもない。つまるところ追い詰められているからこそその対応なんだが、これを見た奴は更に敵意を燃やしている。

「幾千の刃も聖なる一閃も、汝の守りを切り裂けぬ。あろうことか絶対なる絡繰りの仮面すら預けられる、面従腹背が苛立たい」

まごうことなき殺意。俺を殺したくて殺せないという、苛立ちをこれでもかと奴は放つ。

「故に、我が栄光は汝の死の先にある」

その怒りに呼応して、魔剣の軍勢は更に猛る。

「苦渋にまみれ、絶望せよ。それこそが我が黄昏の先にある新世界にほかならぬ」

それこそが、魔星となつて凶悪化した、阿武隈川人の星辰光。

「メタルノヴァ超新星——ミッドガルズIIソード・アンリミテッド勝利掴め、人界制す魔剣軍」

魔剣創造多重再現能力・独立具現型。

数の暴力に多様性を併せ持つ、割と反則じみたアステリズム星辰光が俺達に襲い掛かる。

「覚悟してもらうぜ？ この俺は——」

その全身から殺意を滾らせ、阿武隈川人だった魔星は突貫する。

「人造惑星マークツヴァイ……アンリミテッド無尽斬撃だあああああつ!!」

マークツヴァイ

☆勝利掴め、人界制す魔剣軍

基準値：A

発動値：A A

収束性：A A

拡散性：A

操縦性：A A

付属性：D

維持性：A

干渉性：A

上等だよ、この野郎

そこまで俺をぶちのめしたいのなら、こつちだって容赦はしない。
極兇奏者、なめるなよ!!

Other side

「フロンズ。面倒なことになったようだ」

「どうしたのかね、ハツシユ？ このタイミングだと、ヴォルテククス・バンチ確か渦の団
案件と思われるが」

「どうやら多種多様な勢力が狙っていたらしい。カオス・ブリゲート禍の団の真徒も
出てきているようだ」

「……大盤振る舞いだな。まあ、赤龍帝一行なら乗り切りそうだが」

「そこは同意見だが、増援を送った方がいいのではないか？」

「それはいいだろう。というより、少し忙しい事態が発生している」

「というと？」

「禍の団から亡命者を出せないか行っている最中だろう？ だが、そ
の中に面倒な連中がいるようだね。……いまだにこちらが接敵して
ないのが懸念点だ」

「どういう連中だ？」

「疾風殺戮・comの下部組織とでもいうべき同盟組織だ。奴らが人
類の間引きを目的としているのは知っているな？」

「ああ。それがどうかしたのか？」

「どうやら、彼らはその一環で「間引かない人間」の選定もしていたら
しい。そういう組織があるようだが、疾風殺戮と連携をとってないこ
とが疑念点だね」

「なるほど。それは確かに懸念点だ」

「チームD×Dの手柄を奪うより、こちらはこちらで独自に利益を得られるのならそれはそれでいいことだ。対応するべきポイントがあるなら、尚更だろう?」

「まったく。世の中は厄介なことが思った以上に多いものだ」

「ディアドコイ・ブライベーター後継私掠船団ならこういうだろうね。……だからこそ、挑みがいがある」と

「さて、例の連中が接触を試みたと聞いたが、どうしたのだ?」

「むろんだな、幸香。この才能の権化がたかが神の因子を覚醒させただけの下らぬ手合いに媚びるとも?」

「まあ、おぬしならそう言うだろうて、ユーピ。だがしかし、奴らは少数チームとしては異例なほど禍の団に貢献しておる」

「確かに。特に曹操達の見つけた禁手到達のメソッド化。あれにより一気に化けた者が数多い」

「組織的活動としては三下だったが、被害は決して無視できぬ。フロイズには伝えておるだろうが、逃げ切られる余地はあるだろうて」

「同意見だ。そもそも奴らは至らぬ時点で、各勢力のそれなりの要人も暗殺しているしな」

「曹操達の実験のどさくさにまぎれ、最上級悪魔を眷属ごと滅ぼしたそうじゃしのお? とはいえ、根っこの性根がくだらなすぎるが……どう動く?」

「分からんよ。とはいえ、流石に奴に関してハーデスにとやかく言われたくはないが」

「それは当然。そも恨むのなら、弟の種蒔きにこそ告げるべきじゃろうて」

「同感だ。なにせ——」

「メンバー全員がゼウスの血を引く特殊チームと来たものだ」

闇動神備編 第十七話 欲望の姫君

イツセーSide

真徒どもは本当にやばい連中だ。それは分かっているつもりだった。

アルティイーネは俺達のチームで女王だ。そしてその力は、アルマロスさんと真つ向から渡り合えるほど強いから明らかだ。

その、つもりだった。

「如何に君といえど、私だけならともかくこの数で勝てるかな？」

「負ける気はないよー。イツセーもいるもんー！」

それにしたって強すぎだろ!?

地球の共生体。その言葉の意味を改めて実感したよ。

こいつら、地球上で戦うとマジ強いな！

「食らっつけ!!」

速射でドラゴンショットを放ったその瞬間、狙っていた真徒の眼前に岩山が立ち塞がる。

ただの岩山じゃない。まるで神の加護を受けた霊峰のようなそれは、ドラゴンショット二発で何とか消し飛ばせる程度の頑丈さ。それがいくつも出てきた。

精々50mほどの岩山を壊すのに、真女王の俺がドラゴンショットを使う。これがやばくなくて何だっつんだ。

甘かった。俺達は、まだどこか真徒をなめてかかってた！

そう思った瞬間、今度は氷山が真上にできた。

更にそこに蔦が絡みつき、俺に向かって振り下ろされる。

回避……はアルティイーネの方にも向かう。なら答えは単純だ！

「赤龍帝をなめんじゃねえぞー！」

拳を握り締め、撃鉄を起こす。

そして全力で殴りつけ、一気に氷山を粉碎する。

そして壊れた氷山の向こうから、合計十本の剣が襲い掛かる。

真徒が使う星真光で振るう剣だ。聖魔剣とも打ち合えるだろう、やばい性能なのはもう分かっている。

だからこそ、なめんな！

「オールレンジ攻撃は俺にもある！」

飛龍を操って迎撃し、俺はそのうえで真徒の一人に突っ込んだ。

殴り掛かかられた真徒は素早く後退するけど、それはもうお見通しだ。

「アスカロン！」

『BLADE！』

瞬時にアスカロンを展開し、奴の首を切り飛ばす。

これで一人。そう思ったけど寒気を感じた。

次の瞬間、ツタが伸びて首と体を繋げた途端、跳ね飛ばされた真徒の手が動き、応じるように溶岩が現れた。

すぐに後退して安全圏に到達するけど、その時にはその真徒は首を繋げ、まだ血がこぼれているけどすぐに体の調子確かめている。

……首を跳ね飛ばしたぐらいじゃ死なないってか。フェニックスもびつくりな不死性だな。

『まったくだ。こんな連中が数十も息を潜めていたのだから、この世界も大概魔境だな』

そうだな、ドライグ。でも戦えている。

確かに厄介だ。でも、普通の真徒相手なら同時に複数相手にしても、俺でもしのぐぐらいはできる。

ま、？誠の赤龍帝なんて言われている俺が、数体相手にするだけで苦労してるってのはやばいんだけど。それでも、俺クラスなら無銘の真徒複数程度ならしのぐことができる。

ならやれる、戦える！

『今の相棒は魔王クラスすら打倒できる、いうなれば準超越者クラスだ。疑似龍神化なら超越者クラスに届く以上、見極めれば奴らも殺せるさ』

ああ、その辺はドライブさまさまだ。

ドライブだけじゃない。アザゼル先生にアジュカ様、オーフィスにグレートレッド。そしてもちろん、リアス達俺の大事な愛する女と頼れる仲間達。

みんなと続けてきたこれまでの日々が、俺に奴らに対抗する力を与えてくれる。

なら負けない、負けられない！

「こいつらは抑える！ やっちまえ、アルティーン!!」

和地 Side

現状、阿武隈川人こと、人造惑星マークツヴァイ。コードネーム^{アソリミテッド}無尽斬撃と戦闘中。

乱戦状態ゆえに緋音さんとはぐれ、今はサイラオーグ・バアルと共に戦っている。ちなみに阿武隈は放置できないので、残神による疑似固有結界で隔離している。

人造惑星マークツヴァイ。こいつは間違いなく強敵だ。

準神滅具を二つ保有。更に魔剣創造を多重に再現し、そのすべてが独立具現型で更に至っている。

魔剣創造は創造系神器故、多重に保有するメリットが禁手の同時展開以外にないという無駄がある。だが魔剣の騎士という独立具現型で再現することで、その無駄を省いている面倒な星を振るうことになる。

多重に再現して更に組み合わせることで、奴は軽機関銃による集中攻撃を敢行。しかも何体が離れていたのか、汎用機関銃による遠距離

制圧まで加えている。

とどめに、準神滅具の一つが聖なる武装だったことから、聖魔の融合まで成し遂げている。簡単にできることではない以上、マークツヴァイが強敵であることは間違いない事実だ。

だからこそ、一気に仕掛ける。

「サイラオーグ・バアル！ 畳みかけるぞ!!」

「任せておけ！」

俺はサイラオーグと共に、猛攻を仕掛ける。

もとよりパラディンドッグは時間制限必須。ならやることは決まっている。

全ての神器を禁手にし、更に残神まで展開。波状攻撃で圧殺を仕掛ける。

サイラオーグ・バアルも覇を解き放ち、既に仮面ライダーレグルスに変身済み。

全力で、一気に、撃破あるのみ。もとより戦闘特化型魔星相手に、長期戦は基本として愚策だからな。

ともかくにも一点特化。数で圧殺される前に押し切れればいい。

故に、こちらもどちらも遠慮は無用。今後の粘着は殺し合い前提が確定的だし、ここで終わらせるぐらいの勢いで叩き潰す！

「覚悟してもらおうか、阿武隈あ！」

「我らの前に立ち塞がるなら、容赦せん！」

左右から猛攻を仕掛け、更に固有結界を生かした複合障壁により防御も加える。

この多重攻撃に、マークツヴァイは防戦一方。

当然だ。如何に戦闘特化型魔星とはいえ、神滅具の禁手が左右から襲っている。

更に片や二つも神器を別に持つ極晁奏者。片や若手悪魔最強と称され、生身で下手な最上級悪魔を返り討ちにできる肉弾派悪魔の頂点クラス。

同時に相手をしてしのげている、マークツヴァイが十分すぎるほどにやばいだけだ。

故に逃げられるとまずい。必然として、ここで一気に叩き潰す！
「クソがあつ！ 魔力を使えない欠陥悪魔との連携だけで、ここまでやるってのか……っ!!」

マークツヴァイも善戦しているのは認めるが、それが限界。
一対一ならやばいところもあるだろう。だが二対一なら押し切れるレベル。

油断はしない。遠慮もしない。躊躇なく、このまま押し切―

『カズちゃんまず……い！ 敵の増援!』

―る直前、事態が急展開を迎えている。

ここで外側が非常事態。

躊躇する時間もなく、故に迷いはない。

躊躇うことなく、俺は固有結界を解除する。

Other side

固有結界を解除した九成和地は、躊躇することなく後ろに下がる。

同時に魔剣創造の禁手を切り替え、星を振るう騎士団を具現化し、マークツヴァイ相手に遅滞戦術を開始。

眷属から通信を聞いていたサイラオーグもまた、振り返り味方のカバ―に入る。

そしてそこには、大量の欲望のままに暴れ回る魔獣達の姿があった。

それにイツセー達が気づいた時、更に割って入るように突貫する存在がいた。

それらはサイラオーグ・バアル眷属の猛攻をいなし、一直線にターゲットを見据えて狙う。

敵との乱戦。だがしかし、彼らは瞬時に判断した。

「奴は抑えるっ!!」

「今すぐ行って!!」

声を上げるサイラオーグとアルティーン。

それと全く動じのタイミング。それを半ば予期していた、二人が一気に突貫する。

「させるかああああああっ!」

「なめるなあああああっ!」

一瞬でかけるは、兵藤一誠と九成和地。

かろうじて距離を間に合い、互いが示し合わせるまでもなく庇う相手を選択。

突貫する攻撃を受け、迎撃を成立させる。

そしてその瞬間、守った二人と守られた二人は、目を見開いた。

そう、何故ならその姿は――

「……………嘘……………っ!?!」

――驚愕するまでに、望月有加利と鰐川亜香里に瓜二つ。

そう、かつて戦った時の二人に、あまりにも似通っていたのだから。

闇動神備編 第十八話 窮地、何とか潜り抜ける

イツセーSide

そつくり、すぎないか？

思わず面食らうぐらい、瓜二つ。

というか、目の前の奴は雰囲気からして、かつて戦った時とほぼそのままたま雰囲気だ。

でも、後ろには亜香里もいる。有加利さんもいる。

え、なんで……二人がもう二人!?

「ちっ!」

九成が咄嗟にショットライザーを抜き打ちして、仕掛けてきた方を迎撃する。

距離を開けさせたうえで障壁を張りながら、九成も戸惑っているようだった。

「……クローン？ それとも英霊召喚を流用した？ いったいどういう仕組みだ？」

九成で分からないなら、俺が考えても多分無理だろうな。

そこはもう、頼れる人に後で頼むしかない!

「九成! とにかくまずは何とかするぞ!」

「……確かに、後で考えるべきだな」

納得が早くて助かるぜ。

おかげで凄く頼れるけど、問題はそこじゃない。

後ろをちらりと確認するけど、亜香里も有加利さんも顔色が真っ青だ。

当然といや、当然か。

ただ、今考えても仕方ない。とにかくここを乗り切らないと――
「なめんじゃねえぞ、ガキいいいいいいっ!!」
「くっ!!」

ってサイラオーグさんが押し込まれた!?

あの人造惑星、結構できるな!

何とか頑張らないといけないってか!

「……うあああああっ!!」

「いい加減にしてよ!」

そう思った時、亜香里と有加利さんが大声を挙げて、戦闘態勢をとった。

しまった。こんな事態になって精神が限界に入ったのか!

目いっぱいになると大変だけど、これって大丈夫か!?

「イツセー、二人は任せるあつちは俺が!!」

「分かった、そっちは任せたこっちは任せろ!」

九成とすぐに意識を切り替え、そして俺は飛び出した。

既に我慢の限界を超えた二人は、神器を具現化して攻撃を仕掛け――

「すっこんでろ雑魚どもが!」

――一瞬で弾き飛ばされた。

ただ、あつちはあつちで片手間に相手をした感じで、そもそも殺すまでやる気が感じられない。

ならカバーできる!

「大丈夫ですか!!」

カバーして拾うけど、相手の人造惑星はこっちに意識を向けているだけだ。

そのまま直行して、魔獣状態のそっくりさんと戦ってる九成を狙っている。

「和ちや……ん!」

「分かってる!」

アフオガードさんが声をかけるのとほぼ同時に、九成は魔獣の二人を飛び越えるようにして人造惑星の攻撃を回避。そのまま回り込むようにこっちに戻ってくる。

上手い！ 面倒な奴を全員まとめて押し付けやがった。

「九成いいいいいいっ!!」

人造惑星は魔獣状態の二人を相手にしながら、かなりイラついている。

「こんな擬き神器なんぞで、俺の邪魔をするんじゃないやねえぞおおお!!」

おお、善戦してる。

「一旦離脱だ！ 別動隊と合流して立て直すぞ!!」

「お、おう……いいの!?」

ちよつとためらうけど、九成は他のメンバーも動かしてすぐ離脱する体制だ。

ああもう！ 付いて行くしかないってか!?

「つたく！ で、どうするんだよ!?!」

「そうだな。まだ乱戦は続いているぞ」

サイラオーグさんも合流してそう言うけど、九成はどうやら既に考えているようだった。

「とりあえずアルティーンだ。どうせ阿武隈の奴は追いかけてくるだろうし、そのまま真徒どもも巻き込んで潰し合ってもらおう!」

……えっげつねえ。

というかその判断がすぐ出るって、お前どんな経験とか訓練とか受けてきてるんだよ。

割と真っ向勝負が多いから、その手の戦いにはちよつと困惑するぞ俺。

「だ……ね。乱戦時はとにかく……く、敵対勢力同士で潰し合わせるのは手だし」

緋音さんもそんなこと言ってるよ。これ絶対ザイアの教育だな。

でも、アルティーンも一人で戦うには限度がある。まず合流するのは良い事だ。

そう思っただけ俺も納得して走り出すとー

「イツセーごめん、ちよつといっぱいいっぱい!?!」

「うわあああああつ!?!」

ーなんか凄い速度でアルティーンの方が来たあ!?!

合流するつもりが合流された。

いや、それは仕方がない。仕方がないけど微妙に窮地だ。

ちよつと状況が混乱だったので、俺が考えたのが敵同士潰し合わせる作戦だ。

この手の乱戦において避けるべきは、複数の勢力から集中的に攻撃を受けること。裏を返せば自分が一勢力を複数勢力で戦える状態にするのがある種のベスト。俺が考えたのはその応用で、敵同士を潰し合わせてこつちは安全圏に到達するというものだ。

だが、その為には俺達が乱戦からちよつと離れなければならぬ。間違つても別勢力同士が挟み撃ちする状態になつてはいけない。

……つまり、この状況はなつてはいけないかつたわけだ。
あ、これやばいかも。

そう思った時、上から何か近づいてくる。
今度は一体何だと思つた時、心強い存在が姿を現した。

『騎兵隊参上ううううううううううっ!!』

『無事か？ 無事だな!? 無事でよかつた!!』

『なんか久しぶりな気がするぜええええ!!』

あ、あれは!!

「トライデンⅢ!!」

イツセーと共に声を上げれば、可変したトライデンⅢが盛大に暴れ始める。

トライデンⅢ。神の子を見張る者が人型兵器としての人工神器をことごとく投入されたことに刺激を受け、対禍の団用に開発した、人型人工神器であるT Fユニットの第一弾。

ここで来るか、あいつらが!!

「……追いついたぞ。面倒なのが来ているようだが、お前はここで排除する」

と思っただら、今度はアルクラブが真徒を連れてこっちに向かって来ているな。

ええい、こうなれば短期決戦。一瞬が勝負を分ける。

「アルティーン、もうひと踏ん張り頼む！ 具体的にはあいつらの後ろに全員で回り込む!!」

「え、そうなの!? ……頑張る!」

素直でありがたい!

「そういうことなら、こっちも出し惜しみはもうなしだ!」

イツセーも気合を入れてくれているようで何よりだ。

とはいえ、追いつかれるまでにそれができるかはちよつと不安だが

「和地!」

—それも今、吹き飛んだ。

横合いから駆けつけてくれたのは、愛する我が比翼。悪敵銀神こ
と、銀弾カズヒ・シチャースチエ。

ここでカズヒが来たのなら!

「こっちも出し惜しみ無しだ! カズヒ!」

「なるほど、分かったわ!!」

『リスタートバックル!』

実戦で使うのはこれで二度目か。気合入れるぜ!

『Let's restart』

展開されるバツタと犬のライダーモデル。

『It's restart』

真徒達は気づいて攻撃を仕掛けるが、ライダーモデルがそれを弾き飛ばしていく。

『I'm re start』

呼吸を整える。

意識を切り替える。

『You're re start』

さて、変身だ。

「変身！」

『Kamen rider re start!!』

ここから、一気に形成をひっくり返す。

真徒達もすぐに仕掛けようとするが、しかしこのタイミングでは致命的に遅い。

仮面ライダーリスタートは、マクシミアンやシルバードーマより性能が数段上。必然として、それに対応するには相手もギアを数段上げる必要がある。

故にこの一瞬で、真徒二名に深手を負わせて更に蹴り飛ばす程度のことではできた。

「早いが甘い」

その瞬間、既にアルグラブ・スタードライブは攻撃を仕掛けている。球体をドーム状に配置して、俺とカズヒを同時に狙う。

回避させず確実に当てる。そこから巻き返しをする判断だろう。

だが、甘いのはそつちだ。

「……おい、こつち忘れんな」

既にイツセーは、疑似龍神化に到達してるぞ？

俺達に気をとられたその瞬間は、あまりにうかつ。

振り返ろうとするより早く、イツセーの拳がアルグラブの顔面に叩き込まれる。

一瞬で数十回回転しながら吹き飛びながら、アルグラブは体勢を整える。

無駄にしぶとい。だが―

「おっしや―発かまあああつす!!」

―その瞬間、アルティーネが追いついた。

もの凄い轟音が出たと思ったが、アルティーネの姿を見るとその理

由に気づく。

あいつの背中から十本ぐらい、短砲身大口径の砲門が生えている。しかも煙を吹いている状態だ。

反動のでかい砲弾、それもすぐ爆発するタイプをあの状態で発射して加速したのか？ 核パルスエンジンのアレか？

また凄いことを考えたと感心しつつ、俺達は既にショットライザーを構えている。

突貫したアルティーネが蹴り上げ、アルグラブは更に吹き飛ばされる。

それに俺とカズヒは照準を合わせる。

反応の隙など、与えない。連携に言葉は必要ない。

極晃を共に描き、連携戦闘前提のリストアートとなっている。今ここに、極晃衛奏者は卓越した連携精度を確立した。

『パラディンメガブラストファイバー!!』

『リスターテイングメガブラストファイバー!!』

リスターテイングメガブラストファイバー

パ
ラ
デ
イ
ン
メ
ガ
ブ
ラ
ス
ト
フ
イ
ー
バ
ー

その一撃は、まごうことなくアルグラブの全身を包み込み――

「そうはいかないね」

その瞬間、割って入る者が出てきた。

かつさらうようにして、アルグラブを回収。そのまま俺達から距離をとるように着地体制をとる。

むろん逃がす気はかけらもなく、俺とカズヒはショットライザーで射撃を慣行。

だが相手はそれを意に介すことなく受け止め、無傷で着地する。

「……つたく！ この状況下で新手かよ。」

内心で舌打ちしたくなるが、そいつは軽く肩をすくめると真徒達の方を見る。

「情報収集で死亡は流石に避けてほしいね。そろそろ撤退だよ」

「……そのようだな。礼を言おう、絶芸家^{ビュクマリオン}」

引くのか？

正直このまま逃がすのは思うところがあるが、余裕がないのも事実だろう。

と、そこに更に着地する影が。

「なるほどね。やはりチームD×Dは、片手間で相手をしていい相手じゃない、か」

「おやおや。マークツヴァイは苦戦してるのかい？」

戦闘をしながら来たといった感じで現れたのは、疾風殺戮・c o m のリクだったか。

そして更に、阿武隈の知り合いと思われるなんかサイボーグじみた魔星と思われる奴が出現。

互いに睨み合いの体制になりつつ、更にトライデンⅢの戦闘で、状況はシツチャカメツチャカになっていく。

……残念だが、ここは逃がすしかなさそうだな。

「……クソが！ 次だ……次こそぶち殺してやるからな……っ！」

吐き捨てると、阿武隈達は煙幕を撒いたうえで飛び退っていく。
更に真徒達も集まると、リクや追加の奴を巻き込むようにして転移
で離脱。

……まったく、とんだ残党狩りだよ。

Other side

「マークツヴァイ相手にあそこまで戦えるとは、流石は涙換救済」

『ほお？ 意外と買っているようだな？』

「当然ですよハーデス様。彼はそこらの死神相手なら、人間だった頃
から無双できる逸材。性格はしよっぱいですが実力は本物です」

『確かに、あ奴を単独で相手どれる死神は、タナトス達に類する域が必
須。ハルベルトでも何人いるか分からぬな』

「そういうことです。性格の大小と力量の大小は別なのですよ。それ
に、ああいう性格の方が扱いやすいですし」

『なるほどな。とはいえ、どこまでできるのか』

「ま、彼は彼で本当に役立ちますよ？ 他のメンツももれなく優秀で
すから、その辺りはご安心を」

『……問題は、あのチームD×Dに通用するかどうかということじゃ』

「……それは確かに。あの手合いは、予測不可能なところが数多いで
すから」

闇動神備編 十九話 あえて空気読まない人がいる
と、時として気分が切り替わる

祐斗Side

渦の団の残党狩りを行った戦闘部隊が、他勢力による乱戦に巻き込まれた。

当然だけど、参加しているイツセー君や九成君も巻き込まれたらしい。禍の団から真徒が五人も出てきたようだし、聞いた時はちよつと心配になってしまったよ。

とはいえ、全員無事に生還だ。増援が間に合ったこともあり、殆どの勢力は撤退を選んだみたいだしね。

現地で残存勢力に対する掃討作戦も行われているけれど、そこは後続の部隊に任せることになったそう。イツセー君達の奮戦が士気向上を果たしたことで、後は任せて引き上げることになったらしい。

なので出迎えたけど、誰もが何か落ち込んでいる様子だった。

「イツセー、みんな。おかえりなさい」

「ああ。ただいま、リアス」

リアス姉さんにイツセー君は微笑むけど、その表情は少し暗い。

鰐川さんや望月さんの方をチラチラ見ているし、何かあったのだろうか。

カズヒや九成君も渋い表情だし、かなりの大ごとになっているようだね。

と、その時ジャンプする人影が。

「カズ君おつかえり〜！」

「わっふっ！」

リヴァさんが空中でムーンサルトまでしながら、九成君に抱き着い

た。

突拍子もなさすぎて誰もがちよつと呆気に取られるけど、器用に着地したので九成君も倒れてない。

そして着地の勢いを利用して横に一回転もしているほどだ。

「色々大変だったみたいだけど、とにかく無事生還してひつと安心！

先生もちよつと心配だったけど、まゝずくは〜！」

と、九成君の頬をつまむとムニムニ動かしている。

「……笑顔でたいていまって言つてほしいな〜？ 暗い顔はだーめーよ？」

「……そうだな。悪かった」

九成君はその言葉に、肩の力を抜くとリヴァさんと微笑み合う。

「ただいま、リヴァねえ。色々あつて疲れた〜」

そして体の力を抜き、もたれかかるようにリヴァさんに抱き着いた。

「もう色々ありすぎだよ〜。とりあえず飯食つて風呂入りたいな、うん」

「オツケオツケー！ じゃ、メイドチームはお夜食作つてー！ 私は

カズ君をお風呂で甘やかしまーす！」

「……しまった」

抜け駆け状態のリヴァさんに、成田さん達が若干悔しそうになつていた。

しつかり空気を緩ませ、更に気分転換を進めながらも美味しいところをゲットする。

これが主神の娘か。やはり抜け目がなく、油断できない御仁だね。

「……そうね。こっちは死人ゼロでしのいだんだし、まずはリフレッシユしてから話すとしますか」

「確かになー。汗もかいたし泥だらけだし、疲れておなかも減ってるし」

カズヒもイツセー君も、小さく笑ってから肩の力を抜いている。

ふふ。頼りになる女神さまに好かれているよね、九成君は。

あく。風呂上りにフルーツ牛乳。更に夜食にお茶漬け。

疲れた体にいろんな意味で染み渡るぜー。

汚れを落として腹を満たして、ちよつと心も軽くなつたな。

その辺りはリヴァさん様様だぜ。頼りになるな、あの人。

さて、それはそれとしてだな。

「……さて。そろそろ聞いてもいいかしら？」

リアスも切り出したし、話を進めないとな。

俺達はそれぞれがああ戦いであったことを話し、みんなも真剣に聞いてくれた。

あの欲望の獣と化した亜香里や有加利さんとそっくりな存在。

九成達の古馴染みらしい、人造惑星。

更にカズヒが遭遇した、新手の敵。

どいつもこいつもやばいな。特に新手の敵つてのがきつい。

三つ巴で疾風殺戮の幹部やカズヒと競り合い、ガチで潰しに行つてもカズヒが手古摺るレベルだぜ？ あくまで渦の団残党の私設つてことを考えると、新顔だとすれば更に上がいるか、同格が複数いるか。どんな事態になつてるんだよ。軽く怖いんだけど？

「……とりあえず、データに関してはある程度集まつてるようねえ？ 私にも回ってきたけど、新発見の事実があるようだわあ」

と、リーネスがタブレットでデータを確認しながらそう切り出した。

流石、アザゼル先生が隔離結界領域に旅立ってから、事実上の技術

顧問をやってるだけあるな。そういえば魔術回路保有者の一族の天才で、独自のプログライズキー開発や星辰体研究までしているうえ、人工神器の研究もしてた見たそうだし。技術力ありすぎだろ。

ただ、表情が渋いところを見るにやばい案件っぽいなあ。

「まだ確証が言える段階じゃないけれどお。例の欲望のままに動く生物について、判明したわあ」

その言葉に、俺達は全員が鋭くなる。

二度に渡り戦った、欲望に飲み込まれて化け物になった存在。そして、それを半ば強制的にしてくる結晶体。

それが渦の団の残党案件で出てきた。完璧に異世界案件だ。

「……どうやら、欲望を力とする技術が生まれた世界があるようねえ。ただ、それが行き着いた結果欲望のままに動きそれにあつた存在へと変貌する事態が発生。ほぼ知的生命体が全滅しているようだわあ」

「……なるほどね。つまり、その存在が何らかの事故でこちらに来てしまったのが、あの事態の原因と見ていいでしょう」

リーネスの説明にリアスが頷くけど、た少し眉間にしわを寄せてもいる。

「問題は、かつての亜香里と有加利のように知性を持っている個体がいることかしら」

「知性はあつても、欲望の手綱を握る理性がないのよお」

リーネスはリアスの意見にそう言うと、目を伏せる。

「欲望のままに動くことは事実。ただ同時に、それを効率的に成すにはどうするかを考える知性を持っているかどうか。それが重要でしょうねえ」

「……他にも警戒するべきことは多いけどな」

と、今度は九成だ。

「禍の団にも新顔が出ているし、別途で出てきた敵も危険だ。……阿武隈が人造惑星になってるってのもなあ」

と、九成は盛大にため息をついた。

そうそう。新顔の人造惑星、一人は九成の知人らしいな。

「阿武隈さんがいましたの？ あの人、強いですね」

「え、マジで阿武隈？ あいつ魔星になっちゃったの？」

ヒマリと南空さんも反応するけど、ちよつと微妙そうだよなあ。
と、そこでお茶を持ってきたメリードが咳払いをする。

「……僭越ながら、私が説明いたしましょう」

あ、そっか。

メリードは元々、ザイアのヒューマギア。AIMSの世話をする従者型のヒューマギアだったな。

なら当然知ってるか。そっちの方が分かり易いかも。

「阿武隈川人。あぶくまかわとAIMSに拾われた少年の一人で、準神滅具を生まれ持った物と宿主を渡る歩く物の合計二つを保有。更に魔術回路と星辰奏者適性を併せ持つ、戦闘面におけるトップクラスの逸材でした」
え、マジで？

準神滅具二つって、それもう神滅具持ってるようなもんじゃん。
めっちゃ強いじゃん。

しかも星辰光使えるうえ、魔術回路もあるとかオールレンジじゃん。下手したら、当時の九成より上じゃん。

ちよつと引くんだけど、その上でメリードは目を伏せると首を横に振った。

「……ですが、残念なのです」

残念なのか。

俺達の視線が、南空さんやイリナに集まった。

「ちよつと!？」

二人同時に反論しそうだけど、メリードは完全にスルーの構えだった。

いや、ごめんね？ でも二人とも、なんていうか残念だから。別の方向性だとは思うけど！

「煽り耐性が低いうえにチンピラ気質で、かつ口が軽く守秘義務という概念を理解できていないところがありました。当時の教導官達は満場一致で「責任ある立場や重要なポジションには付けさせられない」「現場の優れた戦力どまり」と認定していました。なので要素がかなり気味な和地様に対して因縁をつけていたのですが、仮面ライダー

に正式認定されたことで一気に増加してしまったのです」

「ちなみに600回ぐらい勝ったり負けたりしてますの」

「ヒマリからも補足説明が入るけど、また凄いな。

神滅具を持ってないし禁手にも至ってないとはいえ、あの九成相手に600回も挑んで結構勝ち負けが多いのかあ。

十分できる奴だな。でも残念だからポジションは高くないと。で、高いポジションの九成に因縁をつける……確かに、残念って言っていないかもなあ。

「ちなみに勝ちと負けがそれぞれ600以上ずつで、引き分けも数十回あるからな？」

九成がげんなりした様子でそう言った。

え、つまり千回以上突つかかられたのか。大変だな。

でも勝ち負けに対した差がないってのは厄介だな。やっぱり強いってことじゃん。

「ちなみに星辰光は魔剣創造の亜種発現を多重発動する奴だ。魔剣を振るう騎士を一体具現化するスタンド的な感じの独立具現型」

「おそらく禁手も至れるだろうと言われてましたし、実際魔星になつてからは至ってるようですわね」

「あいつ、能力は高いからね。それが魔星って、私らでもタイマンで勝てる奴多くはないわよ？」

ヒマリと南空さんも九成に乗って高評価してる辺り、能力はあるんだろなあ。

それが仮面ライダーにはならない。……言っちゃ悪いけど、ヒマリって意外にそういうのはきつちりできるんだなあ。

いや、阿武隈の方が致命的に悪いってことかもしれないな。俺はあんまり分かってないけど、沸点が低い印象はあったし。

ただ、そいつだけでもないってのがあれだよな。

「カズヒは阿武隈の同僚っぽい奴とやりあったんだっけ？」

九成がカズヒに尋ねるけど、カズヒは首を横に振った。

「残念だけど、疾風殺戮 c o m のリクに押し付けた形だから詳しくは。……別件の奴はある程度データも取れたのだけれどね」

「あく。そつちも警戒必須だよなあ」
結構厄介らしいなあ。

最上級悪魔クラスを単独で返り討ちにできるレベルのようだし、油断はできないレベルだろう。

と、カズヒはメモリースティックを取り出した。

「ちなみに記録映像は取ってあるわ」

あ、そうなのか。

「一応ダーティジョブ専門部隊だったわけで。音声とか映像とか、重要なデータの記録ぐらいは取っておいた方がいい時もあるもの。未知すぎるので念の為……ね」

そう言いながらカズヒはコンピュータにメモリースティックを差し込み、映像を映す。

……ん。なんていうか、SFのボディスーツ的な感じだなー

「……え……っ」

……あれ？

急に立ち上がる人がいて、俺はそつちに視線を向ける。

アフォガードさんが、目を見開いて顔も真っ青になっていた。

「う……そ……っ」

「緋音さん!」

ふらついたアフォガードさんを九成が素早く支えるけど、アフォガードさんはそれに気づいていない。

よ、よっぽど衝撃を受けてるけど……まさか!?

「知り合いなの、緋音さん?」

様子を確認しながら、南空さんもそれに思い至つたらしい。

ただ、アフォガードさんは首を横に振りながら、それでも顔色を悪くしたままだ。

えつと、知り合いじゃないなら、一体?

「知ってるのは、格……好」

か、格好?

「……あの格好、知ってる……知って……るの……っ」

お、思わぬところから思わぬ展開が!?

「ドクター。クラッシュユタイガーが倒されたようです」

「ふむ。奴は中々性能も完成度も高かったのだがね。誰に倒されたのだ？」

「星辰奏者の仮面ライダーのようです。やはりこの世界、表に出ている特殊組織に戦力が偏っているとみるべきかと」

「なるほどな。効率が悪い気もするが、まあ平均的な文明レベルではそうなる可能性もあるか」

「で、どうします？ そろそろ突くつもりと伺っておりますが」

「そうだな。では、例の放火魔達とコンタクトをとれ」

「かしこまりました。で、人員は誰に」

「ラピッドとヴェノムが適任だろう。奴らはそういった交渉向きだ」

「餌で飼いなすのが得意ですからね。では、連絡しておきます」

「さて、第一歩からして、思った以上に波乱万丈になりそうだ……」

「……嬉しい誤算だ。これなら、更なるインスピレーションが湧いて出てくるだろうさ」

闇動神備編 第二十話 シエラのSはシャムハト（聖娼）のS！の

Other side

「……アジュカ、この内容は本当かい？」

「ええ、シヴァ様。少なくとも映像は本物です」

「かつて君は、僕が異世界に破壊をもたらしたいと考えて牽制を入れた。だけど異世界の方からこの世界にちよつかいをかけてくるとはね」

「どうですか？ 直々に出て彼らを破壊することで無聊の慰めとなされては？」

「それもいいけれど、今の段階だと情報が少なすぎるからね。僕が動くと余計な揉め事になりそうだ」

「まあ、俺が大きく動いても騒がしくなるでしょうからね。今は配下を動かして対応している最中です」

「仕方ない。ヴィーザルやアポロンには僕から伝えておこう。ガブリエルやシエムハザには頼むよ？」

「それは既にしております。帝釈天にはD×Dを経由して伝わるようにしております」

「こういう時、曹操が準メンバーとして出向しているのは便利だね。……と、それで思い出した」

「どうしましたか？」

「元英雄派だった、後継ディアドコイ・フライベーター私掠船団つてのがいるじゃないか？ フロイズ達、大王派の……革新衆とか呼ばれている奴らの子飼いになった」

「どうやら、相当前から根回しが済んでいたようですね。かなり気が合っているのか、連携が取れています」

「能力的にもかみ合ってるよね。革新衆は全体の面を強化しているし、そこに点と質がずば抜けている私掠船団だ」

「……少しは牽制球を入れたいのですが、そうもいかないのが実情です」

「そうかい？ 確か例の後継覇王^{アレキサンダー}、負けたって聞いたけど？」

「一敗したのは事実ですが、その相手が寄りにもよってバベル・ベリアルですから」

「なるほど。フロンズ達大王派が強制出撃させた皇帝^{エンペラー}か。元々ベリアル家は大王派寄りだったし、あまり心理的なダメージにはならないと」

「とはいえ、あまり油断していい相手ではないですからね。フロンズは足並みを揃えているので改革もスムーズですが、腹に何かを抱えている気がしまして」

「確かにね。例のG^{ギガンティック・フォートレス}も、僕ですら楽しめそうな代物だ。玩具とは流石に言い難いかな？」

「それをどうやってあそこまで大量に、それこそアザゼル杯で使い捨てることを踏まえて用意できたのが謎ですね。懸念事項は色々ありますが、上手くかわされているのが実情です」

「フイーニクス家か。悪魔の出生率向上に大いに貢献した、分家筋としては最高峰の家柄だと聞いているよ」

「大王派に限定すれば、フェニックス本家を超える発言力を持ってますからね。彼が手綱をとっているからこそ、魔王派の改革を進められるので仕掛けづらいのが実情です」

「……そういう意味だと、今回の試合は楽しみだね」

「まあ、見方によっては代理戦争になりそうですがね」

「すまないな、リーネス。そつちも用事があるだろうに」

「いえいええ、バラキエル様。事情を説明しないといけませんものお」

「……緋音・アフォガードからの情報提供か。……真実なのか？」

「少なくとも、嘘は言ってますせんわあ。当人も冷静に話せる自信がなかったのか、イツセーの乳語翻訳までかけてましたしねえ」

「なら、少なくとも彼女の記憶通りということか。そして、例の謎の武装勢力に助けられた、と？」

「そのようですねえ。彼女はその時、異形について何も知らなかったののでえ、異能保有者が異形から守ってくれたと思っていたようです」

「……相当前から、未知の脅威は我らの世界に巣食っていた。そう考えるべきだろう。渦の団が異世界技術を手にしたのも、かなり昔で時期はあっているしな」

「となると、昨今の改造技術と思われる事態はあー」

「一本腰を入れ始めた。そう考えるべきかもしれんな」

「……面倒ごとはい多いですな」

「そうだな。だが、今のお前たちにはもつと明るい話題に集中したいだろう？ データの共有が済んだら、転移の準備をしているからすぐに向かうといい」

「ありがとうございますう。あ、朱乃先輩にお土産でも持っていきましようかあ？」

イツセーSide

ついに、この時が来ちゃったな。

俺は人の試合だったのに、緊張感に包まれ気味だ。

だってそうだろう？

なんだってー

「……和地と幸香が試合とはねえ……」

—あのカズヒがげんなりする展開だからだ!!

「まあまあ。競技試合だし、そこまで気にしなくても?」

「そうですねよ? どっちも応援するぐらいで行きますの!」

と、南空さんとヒマリが励ましてくれていますが、まあ頭が痛くなりそうだよなあ。

血の繋がらない年上の実の娘とかいう、情報量が多い奴だし、幸香って。

……うくん。ミザリが打倒されてなお、このカズヒが頭を抱える業の深い関係よ。真剣に同情するぜ。

「ま、あんまり気にしてもあれだろう? 他のことでも考えたらどうだ?」

俺もちよつと励ますけど、これでいいかな?

考えてもどうしようもないところがあるし、だったらそういう方向で切り替えるってのはありだと思っただけ。

ただ、カズヒは俺の言葉にちよつとハツとなったらしい。

「そういえばそうね。ええ、忘れてたこともあったし」

お、それはよかった。

そう思ってたなら、カズヒは俺の方を向いてきた。

「イツセー。プルガトリオ機関には色仕掛け専門部隊のシエラ部隊ってのがあるの。まあ男もいるけど」

……何言ってるの?

「来歴的にガチ鬼畜ゲームみたいな経験した人が多くて、お互いがお互いのフォロワーをする結果、夜伽の技術がフルスロットルで磨かれているわ。それこそ同性愛者や両性愛者もターゲットにした、loniから大乱●まで、あらゆるシチュエーションを日々磨きあって訓練しているの」

……いきなり何言ってるの?

大欲情教団とS○Xバトルでもする気かよ。この世界はエロゲー

だが、それは試合前の興奮を更に高めることに繋がっていく。

三大勢力の英雄。スライアードイフェンダー極晃衛奏者、九成和地。

後継私掠船団の長。アレキサンダー後継霸王、九条・幸香・ディアドコイ。

魔王派側についている世界の英雄と、大王派に仕える風に見せている英雄派の雄。

その戦いが注目されるのは当然であり、立見席まで埋まるほど。

その興奮が更に高まる時間が与えられ、そして爆発寸前になる。

代理戦争とみなしている者もいる。ただ単に英傑同士の戦いを待ちわびる者もいる。

そしてもちろん、情報収集として見る者もいる。

「……さて、曹操ですら厄介だったけれど、今度の連中はどうなのかしらね」

壱崎虎美は俯瞰する視点で、試合を観戦する。

「曹操を見限った女に、曹操すら警戒する男。その激突となれば、見応えも情報もあるでしょうけど」

そして彼女は刮目する。

チームD×Dと後継私掠船団。

世界の命運を狙うに辺り、決して無視できぬ組織。

その筆頭格同士が激突し――

――失笑が飛び交うことになる戦いを。

闇動神備編 第二十一話 死闘(一)、幕開ける

和地 Side

「……何やってんだ、カズヒ達」

俺は試合が遅れる連絡を受け、内容を察してため息をつきたくなつた。

カズヒがこんなタイミングで乱闘とは珍しい。変な暴走をしてリアス先輩辺りがキレたとかそんな感じか？経験に基づく大正解

「……どうすんだよ。幸先悪くねえか？」

ベルナが結構ゲンナリ気味でそういうけど、まあ気持ちは分かる。相手が幸香達のチームなんだが、そのメンツが問題だ。ちなみにこんな感じだったりする。

王：九条・幸香・ディアドコイ

女王：九条・梶子・張良

戦車：一橋・幸弥・ディアドコイ

戦車：リーン・ヴァプラ

騎士：ナシユア・バアル

騎士：アーネ・シヤムハト・ガルアルエル

僧侶：シユメイ・バアル

僧侶：道間・禅譲・信姫
兵士：氷塊^{エレン}星辰^{キドゥ}眷属8名

たまにメンバーが変わることもあるが、今回は基本的主体になっているな。それなりに堅実に挑むつもりだろうか。

「……どう思います？」

「そうだな。和地様相手に奇策を仕掛けて崩し損ねるより、真っ向勝負で地力による凌駕を狙う方が堅実と踏まえたのだろう。事実、リザーブメンバーは絡め手に長けている者が多いからな」

三美さんと黒狼が冷静に考えているようだが、なるほど確かに。

幸香達は基本メンバーで敵の圧倒を試みつつ、絡め手が必要と判断すればリザーブメンバーを投入するのが基本的な手段だ。

……それが無いということは、どうやら真っ向勝負がお望みなのだろう。

まあ、自力ではこちらが下回っているのなら尚更だ。格上が格下に合わせるのは、基本的にハンデにしなければならないからな。

そして問題は、俺達が素直に乗るわけがないということを手相手だつて理解しているはずだ。

こつちが絡め手を仕掛けてきても圧倒する。そういう手段を持っている可能性があるだろう。

「黒狼。相手チームで俺達相手に、誰がどう出るか判断できるか？」

「そうですね。彼女達「進軍制覇の霸王」チームは、大きく分けてパターンが二つに分けられています」

そう、黒狼の言うとおりだ。

九条・幸香・ディアドコイが率いる「進軍制覇の霸王」チーム。このチームは全体的にチームメンバーの傾向が二分されている。

一つ。九条・幸香・ディアドコイが率いる後継私掠船団のメンバー。

一つ。フロンズ達が指名した、大王派の上級悪魔達。

これは、まず間違いなく各勢力に対する配慮だろう。

後継私掠船団は、元々禍の団の構成組織である、英雄派の特殊チームだ。英雄派に見切りをつけフロンズ・フィーニクスに下った事実上は盟友に近い風に見えるわけだが、それにしたって元テロリストではある。

その辺りを配慮して、お目付け役を配置する。そういう手法をとったということだろう。まあ、実体はそうでもない可能性が高いがな。それはともかくとしてだ。

お目付け奴ということになる以上、相応の人材を用意する必要がある。つまりはそういうことだ。

ハツシュ・バルの弟達である、ナシユア・バルとシユメイ・バル。こいつらは最上級悪魔に昇格しており、間違いなく実力者だ。更にリーン・ヴァプラ。こいつは元レーティングゲームの上位に位置する元最上級悪魔。

王の駒こそしていないが、実家の意向もあつて不正に関与していたそう。もつともそこで暴れることなく、暴走した不正プレイヤーの鎮圧に回っていたわけだが。

おそらくだが、奴は幸香達における参謀役だ。レーティングゲームの経験値が高いことを理由に、その辺りが浅い幸香のフォローを担当しているんだろう。

三人揃って、警戒に値する相手だ。特にリーン・ヴァプラが隙を埋めている以上、なるべく真つ先に潰したい相手でもある。

そして、後継私掠船団は当然脅威だ。

誰もがカズヒのように光を極めた精神性を持つ。ゆえに追い詰めればそれを理由に覚醒し、限界を超えて文字通り強くなる。筆頭戦力ともなれば、最上級悪魔クラスは最低でも到達しているとみるべきだろう。

九条・梶子・張良

アーネ・シャムハト・ガルアルエル

二人の筆頭戦力は、それぞれがかなり強い。こちらとしても三美さ

んや黒狼をぶつけるべき相手だろうが、光を極めた連中に慣れていないガ姉ちゃんの方がいいかもしれない。ベルナはアーネにぶつければ迷うが、俺が出るべきだろうか。

九条・幸香・デアアドコイが一番やばいのは言うまでもない。あの圧倒的な面制圧力とカズヒに匹敵するレベルの極まった光は、レーティングゲームのシステムを生かして絡めとりたいところだ。

そして比較的警戒が薄くなる、要注意担当は二人。

道間・禅譲・信姫と、一橋・幸弥・デアアドコイの二人だ。

こいつらに関して情報は情報が薄い。しかし兵士以外の駒を担当している以上、相応の価値は間違いなくあるだろう。実際、活躍しているしな。

一橋・幸弥・デアアドコイは真つ向勝負で相手チームのエース格を乗り越えているし、道間・禅譲・信姫は、多種多様な力を振るって相手の戦力を屠っている。

「ったく。何がやばいって、あいつら自己研鑽を欠かさないから何してくるか分からないしなあ……」

さて、あいつらはあいつらで何を考えているのか。

Other side

「……母上とリアス・グレモリー達が一戦交えた？」

報告を受けた幸香が困惑するのも無理はない。

自分の試合の直前に、試合会場の前で、チームD×Dが内輪もめをする。

字面だけ聞いたら九割意味不明だ。流石の光を極めた者であろう

と、困惑しないわけがない。

だが、幸香はあえてそれを気にしないことにした。

意味不明すぎるが、だからこそフロンズも動くだろう。自分が考えるのは試合が終わってからで十分だ。

そう判断したうえで、幸香はブリーフィングに意識を切り替える。

「……まあそれは置いておくが、おぬしらはこの試合に対する気合は十分か？」

九成和地は間違いなく強者だ。その彼が率いるチームもまた、難敵と言つていい。

個人としてはこれまでで一番の強敵。チーム全体でも難敵に値する。ゆえに、当然だが、気合を入れる。

勝利を欲し、敗北を忌む。負けたからこそ価値があつたなどという考えそのものを嫌い、負けて得られる経験など、勝ち続ける気概で補える。すべて勝ち取り、肥え太り、輝く明日を駆けるが為に。

その後継私掠船団をベースとするこのチームに、負けていいという考えは必要ない。

それに対し、片手をあげる者がいた。

「むろん、負けなければならぬ理由はないから勝ちに行くのに異存はない。……だからこそ、やはり確認をしたい」

そう語るのは、このチームにおける参謀役としてフロンズが派遣した男。リーン・ヴァプラ。

不正に関与しつつも、フロンズのアドバイスによって潜り抜けた元最上級悪魔。レーティングゲームでレートも高く、いくつかの大会でもトップに立ったことがある凄腕だ。

その彼が指摘する内容は、少なくとも一考の価値がある。

故に、誰もがその続きを無言で促した。

「……既に話は終わっているが、あのチーム最大の間は「作戦の基点にキャスリングを据えている」点だ。理由も語ったが、ルール上一回しか使えないキャスリングが起点である以上、それさえ乗り越えれば難易度は間違いなく下がるからな」

その経験が、つけ入る隙を見出している。

涙換の救済者チームは、キャスリングを攻撃的に運用するのが特色だ。

これにより一気に形成をひっくり返した試合も一度や二度ではない。かの神の子ディアブロローサに続くものすら出し抜いた手腕も見事。

九成和地という最大火力と最硬防御を併せ持つ、あのチームだからこそその持ち味ではある。だが同時に、参謀である竹山黒狼がそれを最大限活かしたたプランを立てているのも効果的だろう。

だがしかし、長所は時として短所と表裏一体になる。

キャスリングという特殊ルールは、一試合につき一つという回数制限がある。必然として、救済者チームは特徴的かつ効果的な手札を一回しか使用できない。

一回きりの手札を如何に使うか。そこに縛られるがゆえに、それを踏まえれば絡めとる手段はいくつもある。むろん対策もないではないが、策による戦いを得意とするチームならば、無駄うちは無理でも効率を低下させることはできる。

そしてしのげば、後は普通に強いものが何人かいる程度のチームだ。戦力の低下さえ下げることができれば、こちらならゴリ押しでも十分勝ち目がある。

そのうえで、リーンは懸念の視線をある人物に向ける。

「態々マークを付ける必要はやはり薄いだろう。それに、彼でいいのか?」

その視線の意味は疑念。

だが、向けられた少年はそれに対して不満を見せはしない。

「ま、言いたくなる気持ちは認めるさ。俺はこのチームメンバーだと弱い方だしな」

同意すら示したうえで、だが少年は立ち上がると拳を握り締める。

「だが、俺はあいつと向き合わなければならねえ……そう!!」

「後継霸王と添い遂げる、アレキサンダー帝国船長にも意地つてもんがあるんでな
！ この機会に奴と戦えないなんて、流石に我慢ができないぜ!!」

一橋・幸雄・デアアドコイ。

あえて幸香と同じミドルネームをつけた男は、胸を張って宣言する。

それに対して、呆れもあるし関心もある。

それぞれがそれぞれの感想を態度で示す中、幸香は小さく微笑みながら幸雄を見る。

「ならば示して見せるがよい。妾わらわを射止めんというのなら、それぐら
いはやってのけよ?」

祐斗Side

説教を受けている、リアス姉さん達は間に合うだろうか?

壮絶な死闘が試合前に起きた結果、今リアス姉さん達は運営スタッフにマジギレされている。

まあ当然だね。これに関してはその、いつものノリで動いたリアス姉さん達が悪い。

まあ、一番悪いのは空気を読んでなかったカズヒだけど。多分、九成君と九条・幸香・デアアドコイの激突で冷静さが欠けていたんだろう。

イツセー君に関してはほぼ被害者だね。久しぶりに引き付けが酷

いらしく、医務室に送られているようだし。

九成君も知ったら落ち込むだろう。理由が前回とは異なっておバカな感じがするのが猶更ね。

「ふふふ。彼はみんなに好かれてるのね?」

「そうなんだ、ヴァレリー。……でも、怖かったなあ……」

ヴァレリーさんに頷いていたギヤスパー君も、あの熾烈な戦いに寒気を感じて振るえていた。

うん、あれはとても怖かった。

「カズヒがごめんなさい。最近少し考えこみ気味だったけれど、あんなところで言うなんて」

「あく。まあ言うタイミングを逃していたみたいだけで、多分どっちにしても言う気満々だったわよ、アレ」

「どうせ実行したら凄いことになるよと分かり切っていたからあ、感覚がマヒしてたのかもねえ」

オトメさんが謝る横で、南空さんとリーネスが少し呆れ顔になっている。

まあ確かに、イツセイ君の貞操関係問題は地雷原だしね。どうせどこで言っても爆発すると分かり切っていたから、爆発そのものを防ぐ配慮が欠けていたんだろう。

そしてそこに疲れがあつて、うかつなことをしてしまったんだろうね。

「……にしても、和地の坊主と日美つちの娘が激突か。俺は直接会っちゃいなかったが、アーネとかユーピとかみたいなのばかりなんだよな?」

勇儀さんが懸念点を語るように言うけれど、実際そこはそうだからね。

僕は領いたうえで、試合を盛り上げる為の今までの両チームのダイジェスト映像に視線を向ける。

後継霸王、九条・幸香・ディアドコイ。

カズヒの娘名だけあつて、凄まじい光の極め具合だ。グレイファイアさん達ルシファー眷属が総力を挙げて倒しきれなかった超獣鬼ジャバウオツク

を、片目を失いながらも圧殺したのだから。

間違いなく、彼女は最強クラスの人間だ。単独では魔王クラスでも危ない、それだけの戦闘能力を誇る。フロンズ・ファイニクスの懐刀といえるだろう。

間違いなく、現大王派にとって最強戦力の一角。フロンズ・ファイニクスが政において大王派で二番手の立ち位置についているのなら、彼の派遣を守る武の筆頭が彼女と言ってもいい。

ボトムアップを中心とした軍備強化を進めているフロンズだが、彼女たちがいることで個の戦力でも有数となっている。事実後継私掠船団主体のあのチームは神クラスがいるチームや複数の最上級悪魔が集まったチームすら打倒している。

間違いなく優勝候補の一角とされており、数少ない現状無敗のチームだ。

優勝候補筆頭とされる帝釈天といった指折りの存在が率いるチームが、思わぬ敗北を喫していることも多いからね。現状無敗という点ではグレイフィアさんの率いるチームもだけど、こちらも大王派の息がある程度はかかっている。

平均的なチームの勝率という点ではD×D関連チームが上だけけれど、個の勝率なら大王派革新衆も負けてはいない。それほどまでに、後継私掠船団とサウス計画は凄まじい実力を持つ者達を呼び寄せたのだろう。

そんなチームに、同じく現状無敗のチームD×D側の九成君が挑むわけだ。

一部の権力者は、これを魔王派と大王派の代理戦争と位置付けている。

だから注目はかなり集まっている。実際、双方ともに強者だから尚更だろう。

……ただ、僕は心のどこかで不安を覚えている。
なんだろうか、この胸騒ぎは。

例えるなら、イツセー君がおっぱいで何かするような、そんなことが起きる予感がする。

そして試合が開始され、僕はその胸騒ぎがある意味での中したこと
を思い知ることになる。

闇動神備編 第二十二話 死闘（当事者にとっては）、
勃発！

Other side

試合会場に集まる両チーム。

そんな彼らが互いに見据える中、試合のルールが発表される。

『今回のルールはワンデイ・ロングウオーとなります！』

ワンデイ・ロングウオー。それは文字通り、一日を制限時間とする
長期戦のレーティングゲーム。

制限時間に比例してフィールドも広大であり、戦術的な立ち回りが
求められることも多いルールといえる。

そしてチームが互いに転移した、その瞬間。

『開幕速攻おおおおおおおっ!!』

空を埋め尽くす爆薬の群れと、それを断ち切る魔力斬撃が放たれ
た。

ギリギリで解放されたと思ったら、試合開始から凄いのが出たなお
い!!

「あいつら馬鹿なの!? 何考えてんの!?!」

思わず俺は面食らうけど、隣のリアスはなんか納得顔だったりして
る。

え、あれおかしくないの? おかしなことになってない?

一日かける長期戦だよ!? 開幕速攻からなんで大技を連打してる
の!?!

と思ったけど、何故か隣のリアスは感心してる感じで頷いている。
「……確かに、人員数で劣り、更に長期戦での爆発力にかける和地にと
つて、このルールは意外に不利だわ。ならば「長期戦」というルー
ルの裏を突いた開幕速攻は理に適っているわね」
そうなのか。

ただ、リアスもだけど隣のカズヒも苦い顔をしている。

「とはいえ、幸香もそこは読んでいたようね。開幕速攻で大火力を放
出することで散らしているわ」

あ、確かに。

あの大量の面制圧を薙ぎ払う方向に回ってる所為で、九成は幸香達
の殲滅が出来ないでいる。

最初の一撃も当たらなかったみたいだし、これはきつついか?

『凄まじい光景です! あれは終末戦争ハルマゲドンか何かでしょうか!? フィー
ルド上空が破壊の嵐に包まれております!!』

実況の人も、まるで戦争とか大災害の様子を報告するかって感じになってるし。試合の言い方じゃないよ。

ただ、九成がこのままだとジリ貧になるな。

そもそも面と線の勝負だと、面が包み込めるからな。禁手まで併用した魔力量によるごり押しでしのいでるけど、禁手の持続時間がかかりやばいし。

それに、幸香の火力って星辰光だけじゃないわけで――

『捕えたぞ、タイタス・クロウ涙換救済!!』

――つて、もう出すのかよ!?

何時の間にか飛び上がっていた幸香が、天に手を突き上げ。

それに呼応するように、魔力が浮かび上がって集まっていく。

そして突き出す手に従い、魔力の奔流が押し寄せる。

『正面对決と行こうか――アレクサンドロス・ドリーマー我、焦がれ目指される夢也』

出たよ超大技!!

サーヴァントのアレクサンドロス大王が保有する、対城宝具。

普通に俺でもロンギヌス・スマツシャーとかで迎撃しないとやばいレベルの火力なんだけど!?

……あれ?

九成の奴、反撃する気配が見えないけど?

……え、ガス欠?

「九成いいいいいいっ!」

「……今夜は添い寝でもするべきかしら?」

俺は絶叫するし、カズヒも天を仰ぐし、これ勝敗決定してないか? 試合が始まってから30分も経ってないよ! え、これで終わり――

『パラディンシルバークラスト!!』

1：俺がカリブ・リマス・シルバレットの銀剣で奇襲を仕掛ける。

2：それに呼応して幸香が反撃している間に、それを目くらましにしてチームメンバーを分散させる。

3：幸香に奇襲を仕掛けられそうな位置に三美さんを配置。

4：押し切られたと思わせつつ、キャスリングで転移して奇襲を仕掛ける。

—というプランが建てられた。

ちなみに三美さんは、ぎりぎり回避が間に合ったらしい。
バスター・ダンシング大剣乱舞を推進機器代わりにして、ぎりぎりでのいだらしい。

とはいえ、これで深手を負わせられればそれは好都合だが、そう甘くはないだろう。

「まだだあつー！」

強引に斬撃で威力を殺し、反撃を叩き込んでくる。

俺はガス欠防止で禁手を解除。サルヴェイティングアサルトリックに切り替え、ソニック・チャリオット疾走車輪で離脱を試みる。

いや、これまずいな。

どちらかという誘い込まれている。

俺がそこに気づいた時、正面から突貫してくる奴がいた。

全身に氷の鎧を纏い、氷のランスチャージを仕掛けてきたのは、一橋・幸弥・デアドコイだったな。

俺はジャンプしてそれを交わしつつ、反撃に炎の魔剣を叩き込む。

「まだだー！」

それを覚醒した攻撃で強引にしなぎ、一橋は俺と向き合う。

……周囲から敵がいる気配はない。どうやら、一騎打ちがお望みらしい。

数でも相手が勝っている。ならば、キング困んで叩くというある種の王道はやりようがある。そしてやるなら王である俺に使うのが最適のはずだ。

態々俺と一騎打ちにさせる。メリットではなくロマンが理由だろうか—

「初めましてだな、お義父さん！」

—と思つたら、なんか頓珍漢なこと言つてきたぞ？

「……誰がお父さんだ？」

「あんたに決まつてるだろう？」

え、真顔で返されたぞ。

一橋の奴は、胸を張つて自分に親指を向ける。

「俺は、アレキサンダー後継霸王、九条・幸香・ディアドコイといずれ必ず添い遂げる

男！キャプテン・マケドニア帝国船長、一橋・幸弥・ディアドコイ!!」

そして今度は俺に指を突き付ける。

「あんたは、ノーデンス悪敵銀神、カズビ・シチャースチエと愛し合う比翼の

スワイアディオフエンダー極晃衛奏者！エルダーゴッド旧濟銀神、九成和地！」

「ああその通り。で？」

当たり前のことを言われてもなあ。

それでどういう意味なんだか。

「……つまり！ あんたは幸香のお義父さんだ！ まず親御さんに挨

拶するのは仁義つてもんだらうが!!」

……。

あ、なるほど。

「まったくもつてその通りだった！ すまん義息子！」

ド正論だ！

そうだよ、俺つまり幸香の義理の父親じゃん！ まだ籍は入れてな

いけど、九割以上パピーじゃん!?

そんな幸香に惚れてるならそりやそうだ。確かに両親に挨拶回り

をするのは当然の礼儀だ。

わきまえてるな、帝国船長！ これは俺が甘かった！

「……いいだろう。つまりアレだな？ 義娘むすめに相応しいか武力だけで

も見せつきたいと」

「当然だろう、義親おやじ父殿。それぐらいはしないと駄目つてもんじゃね

えか、おい」

互いに不敵な笑みが自然と出てくる。

ふつ。幸香もそれを分かっていたからこそ、あえて俺を陽動したのか。

だって九成とカズヒってラブラブだもん！ 義理の孫になるよね
!?

「だ、大丈夫ですか!? その、元気出して！」

「えっと、血の繋がりはないよね？ なら別に大丈夫じゃない？」

亜香里とアルティイーネがフオローを入れてるけど、そういう問題
じゃないと思うんだよなあ。

九成、後でオトメさんに謝った方がいいと思うぞ〜

ええ……っていうかなにこれ？ いきなり親子対決？ 娘さんを
俺にください的な感じになってる？

まあ、俺も似たようなことはしてる。バラキエルさんを前に啖呵を
切ったし、後悔もしてない。

してないけどなんだろう、この微妙な空気。

俺は今、心の底から「一緒にされたくないなあ」って思ってる。

会場もなんていうか、沈黙してるし。空気が微妙だし。

『な、なんと……お？ 試合中ですが、刃が飛び交う親子の戦……い
?』

実況の人も困惑してるし。これ、迷う方の迷勝負にランクインする
んじゃないか？

ただ、九成も一橋ってのも、かなり本気で戦っている。

『まあだだあああああつ!!』

『そうだなまだだな、知ってるよー!』

猛攻を仕掛ける一橋に、九成は素早く攻撃を回避しながらちびちび
と反撃を入れている。

急激に追い込んで覚醒されることを防ぎつつ、余力を残すことで覚
醒されても対応できるようにする戦い方だ。九成の奴、本気で倒すつ
もりだな。

……でも、なんか微妙な空気だよな……。

『負けるものか！ 惚れた女が繋げてくれた戦いだ！ 必ず……勝あ
つ!』

一橋が気合と根性を振り絞ってるのは分かるんだけど、なんでだろ
う？

俺達はちよつと、首を傾げながら試合を見続けていた。

闇動神備編 第二十三話 (当事者にとっての) 死闘、
並列侵攻!

Other side

この試合は、珍試合として認識されることとなる。

何故なら、何故か帝キャプテン・マケドニア国船長こと一橋・幸弥・ディアドコイと、
タイタス・クローラ旧済銀神九成和地が、エルダーゴッド婿としゅうと姑じみた戦いをしてしまった
からだ。

似たような試合が割と頻発しているのがこのアザゼル杯予選だが、
しかし毛色が違うと誰もが認識していた。

観客の大半は若干引いており、空気は微妙になっていると言っても
いい。

だが、フィールドの試合はまごうことなく真剣そのもの。

後継私掠船団を主体とする以上、幸香たちはこの程度のことと戦意
を失ったりはしない。必然として、共に戦う悪魔達や、対抗している
黒狼たちも真剣にならねばやられてしまう。

……そしてそんな戦いは、同時多発的に激しくなっていく。

「忘れてた! カズは時々馬鹿になるんだったあああああつ!!」
頭を抱えるベルナはしかし、高速機動での戦闘を一切解除していな
い。

幾度となく熾烈な争いに巻き込まれた。更に意味不明な事態が何

度も起きた。窮地と珍事に慣れてしまった本能は、この程度の事態で困惑して停止するという行動を許さない。

加え、今ベルナは最もたくさんの敵を相手にしていると言ってもいい。

何故なら――

「さて、光から背を向け得た者が、どれほどのものか見せてもらうわよ？」

――アーネ・シヤムハト・ガルアルエルが率いる氷結星辰眷属達を一手に相手にしているからだ。

これは貧乏くじを引いたというより、アーネの意をメンバーが酌んだと言ってもいい。

……アーネ・シヤムハト・ガルアルエル。ベルナの姉であり、光を極めた聖継娼婦^{シヤムハト・セカント}。疑似的な星辰奏者たる、氷結星辰眷属を作り導く星辰奏者^{エスベラント}。

そしてベルナは分かっている。

九条・幸香・デアドコイ。魔術をもって己を魔星^{プラネテス}に到達させた、礼装型人造惑星。

それを、先駆者がいる状態で、後継私掠船団の筆頭戦力が、会得してないはずがない。

そしてアーネはその先駆けと言ってもいい。まごうことなき、礼装型人造惑星の先発組。

その力量。高まった力。そのすべてをもつてして、アーネはベルナに問いかけているのだ。

今まさに無様をさらしているながら、それが本当に幸せなのか。それを分かっているからこそ、アーネは一步を踏み出した。

「少なくとも、テロってるよりは悪くねえなっ!!」
発動するは水蒸気爆発による推進力。更に氷塊による実体攻撃に、

高圧水流による斬撃を併用。
一対九という状況下において、ベルナは獅子奮迅で食らいつく。

それに対し、アーネは悲しげな表情になっていた。

「そう、その程度なのね」

心の底から憐憫だ。哀れみがあると言ってもいい。

光を指し、彼方を指し、駆け抜けるが後継私掠船団。

大きく異なれどどこか似ている、大王派革新衆と共に、願いを叶えるべく目指すこの道。

それと対を成せる生き方になっていると、ベルナは全力をもって示している。

この程度で

なら、その思い上がりは打ち砕かねばならないだろう。

その決意をもって、アーネは本腰を入れ始める。

「天進せよ、我が守護星——鋼の未開あしたを駆けるが為に」

全体的に性能が向上したアーネの星は、それゆえに隙の無い猛威となる。

三種類の星辰眷属は強化され、己は統合した星をより高い出力で振るう。

ただでさえ数で押している状況下で、質を高めることで圧殺の構えとなる。

総合力を高めるといふ無慈悲な猛攻をもって、アーネはベルナに問い質す。

お前は本当に、そこまで価値ある道を進めたのかと。

そして猛威はそのままアーネを飲み込もうとし――

「そうはいかないぜ、お義姉様ってな!!」

―彼女を救い上げた救済は、黙ってみたりはしなかった。

和地Side

危ない危ない。流石に全包围攻撃は危なかったな。

滑り込むように障壁で攻撃を捌いてから、振るわれる幸弥の攻撃を
迎撃する。

「てつめえっ！ 男と男の勝負にいい加減なことするか!？」

「悪いが参謀に怒られてな。やりたいなら並列作業でと言われてしまっただよ！」

黒狼が厳しいけど、結果的にはオーライオーライ！

振るわれる攻撃を連撃でしのぎながら、俺はサルヴェイティングア
サルトドッグの内蔵武装で氷結星辰眷属をけん制する。

「カズツ！ マジかお前、あのままボケ倒すかと思ってたぜ！」

「いやホントゴメン。俺としてもボケ倒す気満々でしたごめんなさい
！」

信頼が厚くてちよつと泣きそう。いや、確かにまず一橋に集中した
かったけど。

だが黒狼から怒られた。「せめて同時進行でやってください」と言
われてしまった。ついでに一番向かってほしいところとしてベルナ
の位置を指定された。

ま、これはこれでいいだろう。というか、いい機会だ。

「……悪いな義息子！ お前が義親父に挨拶したいように、俺だつて

義姉貴あねぎに挨拶しておくべきだつてことで一つ！」

「チツ！ そう言われると文句が言えねえ!? つていうか、俺つてつ
まり星継シヤムハト・セカンド娼婦の甥っ子!?」

「なるほどね。なら、尚更明日彼方を目指してもらわないと！」

とりあえずすぐに納得してくれてよかったよかった。アーネも納得してくれたので問題ないな、うん。

「それもそうだな！ あっちもこっちも立てるに越したことはないつてか!？」

「勝ちなさい、帝国キヤブテン・マケドニア船長！ 聖継シヤムハト・セカンド娼婦も見せてやって！」

「行け、アーネ！ 彼方を駆ける光を、思い出させてやるんだ！」

「やっちまいな、ディアドコイ！ そのまま一気に添い遂げろ!!」

氷結星辰眷属達も、テンションが高いようだ。

まあ、俺としてもテンションを上げていきたいがな!!

「……いや、別の意味でツツコミがキツツイぞ!？」

どうしたベルナ!？」

「ツツコミする暇なんて与えるか……そう、まだだあああああつ!!」

うおおおお義息子の猛攻が特に激しいっ!？」

カズヒSide

とりあえず、あれね。

和地がボケ倒しているわね。

………

「とりあえず、あとでベルナには一杯おごるとするわ」

「うん、オトメにもしたげて？」

そうよね、鶴羽。

「……あは……はは……孫と子供がいっぱいだなあ……あ」

「しっかりしてオトメ。いえ、本当にしっかりしてえ……その……」

既にオトメねえが真つ白になつてるし。リーネスも励ましてるけど、生憎該当している立場的に義理の娘が一人からちよつと弱いし。

この試合、こんな形で波乱を生むことになるなんて……っ！

「私は誰を締めればいいのかしら？ いえ、私ごと……？」

「誰か！ カズヒもマズいから気付けを持ってきなさい!？」

リアス、私はまだ大丈夫だと思うのだけれど？

闇動神備編 第二十四話 星辰光、(本当に真面目に)
開帳

イツセーSide

なんか俺達のVIP席が酷いことになってる!?

オトメさんのダメージが一番でかいけど、カズヒも割と喰らってるし。

というか、試合が始まってから一時間で派手な戦いが連発してるんだけど。これワンデイ・ロングウォーだよな!?

「……なるほど。別に制限時間が一日とはいえ、数時間で終わらせてもかまわないといえばかまいませんわね」

「いやあく。評価的にはどうなのかなって、先生思っちゃう?」

レイヴェルが怖いことを言ってるけど、とりあえずリヴァさんが抑えてるからいいのかな?

俺のマネージャーは辣腕参謀すぎて、結構派手なことやとんでもないことするからなあ。今度俺達がワンデイ・ロングウォーをした時、「開幕速攻∞ブラスターで即殺」なんて提案しそうでちょっと怖いぞ。

……別にいいのかも? あれ、混乱してる?

「気を取り直しますけど、和地先輩達って大丈夫つすかね?」

と、アニルが首を傾げていた。
ま、確かに。ベルナと二人で10人を同時に相手してるわけだしな。

しかも全員光極めちやつてる系。殆どが氷結^エ星辰^ン脊属^キだけど、あいつらも大概強いからなあ。

「まあ、九成が防御に徹していれば当分大丈夫だろう。その間にどれだけベルナがどれだけ削れるかが重要だな」

「そうですね。ただ和地先輩は禁手の持続時間が低いですから、主力が一気に畳みかけると押し切られるリスクはあるかと」

ゼノヴィアとルーシアが冷静に推測しているけど、それが問題だな。

ワンデイ・ロングウォーにおいて九成達が最も不利なのは、九成の禁手持続時間だ。

……まだ一時間でできないくらいだったっけ？ 俺でも至ってからこれぐらい経つてると、数時間は持続できるんだけどなあ。

あいつ、本当に禁手の才能がないんだなあ。パラディンドッグを使っても、これってやばくね？

ただ、ベルナと連携をとった九成は、十人がかりの猛攻を至ることなく捌き切っている。

高速機動を得意とするベルナが攪乱しつつ、それを九成が障壁でフォロー。この戦法でしのいでるな。

同時に、九成は一橋、ベルナはアーネを中心に相手をしてる。それで戦えてるんだから、やっぱすげえよ。

でも、それ以外でも戦闘は頻発してる。

……勝てるかな、あいつら……？

Other side

武山黒狼にとって、現状は比較的好都合といえる。

想定外のマッチメイクとなっているが、和地が「一対一の決闘」を「対多数戦闘の支援」を片手間にしつつ戦えているのが特にいい。おかげで、相手のアドバンテージである数の差を防ぐことができている

からだ。

黒狼にとって光を極めた者達は慣れていないが、それでも言えることはある。

半端に圧殺を試みてはいけない。そうなれば、文字通りその場で上回られる。

各種データや経験者の聞き取りにより、黒狼はそう結論付けている。

本来、心身の消耗ゆえに弱体化し続けるのが常である前線での戦闘継続。それを意志の力で困難を乗り越えることで、彼らはあつさりとなじ曲げる。

必然、あの手の手合いに対応するには「圧倒的確殺を一気に叩き込む、有無を言わせない必殺」が最適解。そういう意味では、レーティングゲームという競技では相手をしたくない手合いといえる。

だが同時に、その覚醒は「より強い存在を乗り越える」という形で発揮されやすい。

つまるところ、遅滞戦術や受け流しによる消極的な戦闘では本領を發揮しづらい。

その点において、防衛戦闘に長ける和地は間違いなく最適解。

彼がベルナと連携して、相手チーム18名中10名を足止めしているのは、間違いなく数で劣るこちらにとって圧倒的有利。

その間に何人かを各個撃破できれば、初手のプランが失敗したこちらの勝算が取り戻せる。

問題は――

「さて、貴様の相手は妾がしよう」

――自分が、九条・幸香・ディアドコイを足止めできるかどうかだ。

ジャバウオツク超獣鬼の単独撃破。魔王クラスであるグレイフィア・ルキフグス

ですらできなかつた難行を成し遂げた、後継私掠船団の長。

まごうことなく化け物であり、そんな彼女が王であることそのものが、彼女達と相対するにおける最難関。

つまるところ、初手のプランが失敗した時点でこの戦いは「幸香以外を可能な限り減らしての逃げ切り勝ち」か「戦力を集中投入しての

後先を考えないごり押し勝ち」の二択だ。

それを成すには、当然だが彼女に各個撃破される現状だけは回避しなければならぬ。

……つまるところ、ここが正念場である。

「……創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌く流れ星」

「天進せよ、我が守護星——鋼の未開あしたを駆けるがために」

全力で星を開帳。それをもつての防衛線。

歯を食いしばり、死力を尽くす戦いが始まる。

両チームは、最重要人物が二人いる。

最強戦力でもある王は当然。だが、その上でのもう一人も共通項。

それは、経験豊富なブレインである。

互いにレーティングゲームは経験が浅く、専門的知識も豊富ではない。実践では圧倒的に強くても、ゲームはゲームで勝手が違う。

故にこそ、それを補えるブレインがあつてこそその快進撃ともいえる。

和地たちにとって黒狼が担うそれを抑えられれば、こういった戦術プランが無視できないルールにおいて有利になる。

必然、準最強戦力である行船三美が、進軍制覇の霸王チームのブレインを潰しに向かうのは当たり前前の戦術だった。

対策が施されることは想定していた。その上で、食い破る必要があることも理解していた。

やることは奇襲速攻。リーン・ヴァプラという光を極めていない悪魔が相手なら、勝ち目は十分すぎるほどある。

……だが、ここで想定外が起きる。

『見つけました。その手は喰いません』

かけられたのは、通信ではなく念話。

魔術的に直接届けられたメッセージに対し、三美は全力で警戒。

その瞬間、幾重もの魔術攻撃が放たれた。

瞬時に大剣乱舞を展開し回避と迎撃を敢行。

だがその瞬間、周囲の地面が隆起し、そこから魔力が迸る。

初手の奇襲で気を引き、そのタイミングでこちらを包囲して圧殺を狙う。

戦術としては一理ある。可能ならば行けるだろう。

だが、これをかなり離れたところから行うのがどれだけの難易度が。

魔術回路保有者は時として奇跡の真似事すらできる。だが、これだけの行動は超一流の回路と練度をもってなお、周辺に緻密な加工を施す必要がある。

レーティングゲームで扱えるような能力ではない。あり得ない。

だが、現実になんか成している以上は対応するしかない。

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌く流れ星」

『天進せよ、我が守護星——鋼の彼方を駆けるがために』

今ここに、張越最良が開帳する星に立ち向かう。

そして同時期、約三名が致命的に追い込まれていた。

「ふうふうふうううっはっはっはあああああああっ!! この程いいいいいい度おおかあああああああっ!!」

「いやうるさいからっ!」

目の前にいる女、道間・禅譲・信姫は、あろうことか悪魔の力を振るっている。

そういう系統の神器が一切ないわけではない。だが禁手に至っているとしても不自然な進化を遂げている。

何か裏がある。だが、それが分からない。

「探ってみiiiiいよおおおおおおお！ 当てれるううううのなああああっ!! 褒めえてやるううぞおおおおおお!!」

「どうやって!?!」

インガとヴィーナは思わず同時にツツコミを入れた。

状況が意味不明すぎて、現状ではどうしようもない。そもそもなんでもありな星辰光も存在する以上、探りようがない。

だが――

「いいわ。それがあなたの望みなら」

――そこに、一手を叩き込める者がいる。

力強く宣言するシルファに、信姫は面白そうにやりと笑う。

「ほおおおおううううううう！ 探れえええるうううかああああああ!!」

「お望み通り当ててあげるわ。ま、粘られればになるけれどね!!」
手段を、一人だけは持っている。

「創生せよ、天に描いた星辰を――我らは煌く流れ星」
今ここに、更に星が開帳される。

闇動神備編 第二十五話 魂（たま） じゃないよ、塊（かい）だからね？

イツセーSide

俺達が見守る中、シルファが星を開放した。

『創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌く流れ星』

発動体のナイフを構えながら、道間・禅譲・信姫に接近戦を挑んでいく

『愛しきを守り、憎きを滅ぼす。矛盾に満ちた願いを胸に、今銀塊は鍛えられん』

信姫も魔力を放つけど、それを回避しながら攻撃を開始。

『鋭き刃に壊れぬ硬さ。しかし願いは千差万別。全てを叶えることなどは、いかなる鍛冶にも出来ぬだろう』

鋭いナイフだけじゃなく、神器も使いながら仕掛けていく。

あいつの神器は手裏剣みたいな刃をいくつも出して、それを操って攻撃する物。

見た感じ、行船さんの大剣乱舞の下位互換。だけど、小さいからか小技が利いてるし見つけにくい。

『故にこそ、千すら超えて鍛え直さん。その結論こそ我が祈り』

それを回避する信姫の顔面に、シルファの蹴りが放たれた。

信姫はのけぞって回避するけど、そこに神器が襲い掛かる。

『愛しき貴女の笑顔が為に。貴女の輝く未来のために。私は千度の窮地も乗り越えよう』

かすり傷は回復されるけど、シルファは少しにやりと笑ってる

『そして此度の窮地を断ち切る、銀の刃はここにあり』

そして、一旦距離を取りながらシルファは再び武器を構えた。

『絶叫せよ悪しき者よ。汝を断ち切る刃は、我がこの手に握られた』
『^{メタルノヴァ}超新星——^{オーダー}祈りを宿して放たれよ、^{シールド}煌く銀刃』

シルファ・ザンブレイブ
^{メタルノヴァ}超新星——^{オーダー}祈りを宿して放たれよ、^{シルバー}煌く銀刃

基準値：C

発動値：A

収束性：C

拡散性：A

操縦性：D

付属性：B

維持性：C

干渉性：E

あれが、シルファの星辰光か？

見た感じ、特になんか能力は纏ってなさそうだけど。

「……なんでしょうか、あれ」

「そういえば、前に見ただけどよく分かんなかったよね」

シャルロットとアルティナーが首を傾げるけど、そういうやそうだな。

「俺、追いつかれたりしましたけどあれなんだったんすかね？」

「走力強化能力……とかかな？ シンプルだけど、そういう星もあるだろうさ」

「アニルと木場もそういう感じに推測してるけど、そうなんだろうか？」

九成達がルーシア達と試合をした時、確かにシルファは星を開帳して足が速くなった。

ただ、そういった感じでもなかったんだよなあ。なんていうかシルファの言い方が気になる。

確か、期待に応えるのは得意……だったっけ？

ちよつと意外な気もしたよなあ。

なんていうか、あいつヴィーナ以外に関してはやちよつと関心が薄いというか、お姉ちゃん大好きっ子だし。どっちかっていうと、ヴィーナが関係ないところだと「期待に応える」って感じじゃない。

それがちよつと気になるけどー

「ま、シルファもここからが本番ってことだな」

ーそう簡単にはやられないだろ。

俺がそう言うのと同じタイミングで、シルファは信姫とやりあつてる。

信姫の相手をシルファがメインで引き受けてるから、インガさんもヴィーナも持ち直した。

そして、シルファはある程度切りあつてからため息をついた。

『……反則でしょ、その魔術』

お？

「道間の時点で予想はしてましたが、やはり魔術回路を利用した魔術ですか」

「問題は、どんな魔術ってことよねえ」

ロスヴァイセさんとリーネスは納得しているけど、それでも首を傾げてる。

ま、魔術回路を使用した魔術って色々やばいからな。一人につき出来ることに限度はあるけど、バリエーションが豊富で何でもありになつてるし。

っていうか、今ので分かったのか？ マジかよ!?

『なるううううほおどおおおお！ そううううううう言う星いいいいかあああああつ!!』

あと信姫の方もなんか分かったっばい!?

ってどうか、一体どういうー

『肉体に悪魔の性質を宿す魔術……何でもありよね、本当に!!』

『他者の願いを受け、それを叶えられるように己を変質させるうとうとううとうっ!! 面白おiiiiiiiiい星だなあああああっ!!』

同時に言いながら、二人は攻撃を躲し合う。

……えつと、どういうこと!?

Other side

「……なるほど。そういう星か」

「分かったのかい、アジュカ？」

「ええ、シヴァ様。似たような星を知っていますので」

「似たような星か。名前の響きは悪祓銀弾シルバレットに近いけどね」

「その通り。シルファ・ザンブレイブの星はある意味類似した性質を持っています」

「と、いうと？」

「簡潔にまとめれば、あの星は、他者の願いを受けて自身を変性させる星。いうなれば願望憑霊・自己変性能力……といったところでしょう」

「なるほど。要は星辰体アストララルをもってして、劣化型の亜種聖杯みたいなマネをしているのか」

「自分自身を他者の願いが叶えられる様にする。それも、星の性能がもたらす限りでの能力強化でといった形でしょうね。限度はあるでしょうが、戦い方によってはかなりの特性があるかと」

「今回は洞察力などを強化した形かな？ とはいえ、相手も中々に恐

ろしい」

「魔術回路保有者の魔術の中には、獣の性質を己に取り込む魔術や再現するといった者もあるようですし、その応用かと。……最も、人格に破綻をきたしたり発狂するリスクも多く、極めるのは困難なようです
すが」

「そういう意味でも妙手だろうね。知的生命体なら、獣よりはまだ人の性質に悪影響がなさそうだ」

「まあ、それだけで乗り越えられる難易度とも思えませんかね。……例のアレでしょう」

「あれだろうねえ。そう、まだまだ！ ……いつもの如くそういった真似をして、一気に花開いているとかそんな感じなんだろうね」

祐斗SIDE

目の前で繰り広げられる、多角的な戦闘。

各地で行われている戦闘は、間違いなく激しい。そして、後継霸王^{アレキサンダー}達が優勢だ。

総じて人数が多いのが利点になっている。チームメンバーをフルに揃えている相手側と、空きが多い九成君では、その点で差ができて
いるからだ。

もちろん、眷属をフルに揃えていない者達も数多い。だがしかし、フルに揃えている方が優勢になる場合は多いということだ。

少しずつだけど、確実に追い込まれている。

追い込まれているんだけど――

『まだまだ、親父！ 俺を見ろおおおおおっ!!』

『見たいのは山々なんだがな!? こつちもゲームだからやること多いんだよ!!』

— 九成君と一橋・幸弥・ディアドコイの戦いが微妙だ!!

既に一時間経過しているけど、九成君は持ち堪えている。頑張つて持ち堪えている。

圧倒的な防衛戦闘能力と、カズヒとの鍛錬で気づいた光を極めた者達が覚醒するタイミングを察知する判断力。それをもってして、上手く外すことで覚醒の連発を阻害し、合わせた戦い方に仕立て直すことでしのいでいる。

それで可能な限り粘っているけど、このままだと削りきらられるだろう。

座して負けるような真似はしないだろう。とはいえ、ここでどうやって仕掛けるかが重要だ。

さて、どうするんだろうね。

「……先に一人落とされれば、そこから一気に崩れるわね」

「そうね。流石は後継私掠船団ディアドコイ・ブライベーターといったところかしら」

カズヒとリアス姉さんも表情が険しい。それほどに不利ということだ。

ぶつかるタイミングが悪かったともいえる。明らかに、九成君達が不利になっている。

初手の作戦で倒せなかったのが大きいね。このままいけば削り殺されるのは九成君たちだ。

必然として、どこかで大勝負に出る必要がある。

『なめるな！ 娘を駆けた決闘ぐらい、タイマン一対一しろや男だろ!!』

『……いや、確かに俺も一対一をしてやりたいけどタイミングが悪かったというか、実際怒られたというか、冷静に考えると別に幸香の夫選びに意見を言う立場でもないような……?』

ただ、あそこまで粘着されると厳しいね。

二人で十人を相手にしているのは十分すぎる働きぶりだ。ただ、このままだと負けるだろう。

全員納得する中、カズヒも涼しい顔で肯定する。

そういえば、カズヒの星も「自分を呼び水に他者の想念を集めて強化する」というものだった。

そういう意味では、確かに類似した星ではある。

「もつとも、応用性が幅広い代わりにそういった特性の力はそこまで強くないでしょうけれどねえ。本来は多数の似た想念を集めて、それで補強する形式なんでしょうねえ」

「なるほどねえ。ま、あまり無茶はできないけど、かなりの補強はできるってことかしらね」

リヴァさんがそう結論付けると、そのうえで九成君の方に視点を戻す。

「問題は、そこまで頑張ってるシルファちゃん達にカズ君が応えられるか……でしょうけれど」

確かに。そこが一番重要だろうね。

全体的に九成君達は追い込まれている。このままだと、誰かが倒された瞬間に一気に総崩れになるだろう。

また覚醒を避ける為、全員が防衛戦闘主体になっている。守りを固めるのはいいけれど、そこから反撃に転じきれてない。

九成君以外で主力なりえる、武山さんや行船さんも追い込まれ気味だ。

片や、幸香の圧倒的猛攻を聖なるオーラで強引に弾き飛ばしてしのいでいる、武山さん。

片や、遠隔地から魔術攻撃を仕掛ける梶子相手に、大剣で弾き飛ばししのいでいる行船さん。

どちらも星を振るってしのいでいるけれど、このままでは削り殺されるのが見えている。

後継私掠船団団長とその妹。その力量は圧倒的だということだろう。つくづく油断できず、猛威以外の何物でもない猛攻だ。

九成君。君はここでむぎむぎやられるのかい？

闇動神備編 第二十六話 巨星激戦

カズヒSide

「ふふふ、孫が二人もできたんだよねえ。ありがとう、日美子ちゃん……私の子供……」

「本当にごめんなさい。意図した流れじゃないけどごめんなさい。だから本当にそろそろ戻ってきて、オトメねえ」

「やばいオトメねえのメンタルが本当にヤバイ。こつちもやばいけど本当にヤバイ。」

「いや本当にごめんなさい。この事態、誰の行動と決断が原因かと言ったら間違いなく私なわけで。元凶すぎてフォローを入れることができない。限界を超えるところかそういう次元ではないレベルでできない。」

「と、とりあえず和地はまだ倒れそうにないし、ここは置いておいて話を進めるべきでしょうね。いえ本当に。」

「視界の中で同時進行の戦闘が映し出されているけれど、どこも激戦ね。」

『しづとい……っ！』

『やってくれる……っ！』

「シユウマ・バアルの子息である、二人のバアルをそう唸らせるほどほど、防衛線が成立している。」

『大丈夫？』

『もちろん』

「大神文雄と文香・ヴォルフ。どちらも明確に格下でありながら、しぶとく立ち回っている。」

「防衛戦闘に長けた者が多いのは、和地の巡り合わせというべきかしら？」

……だが問題はそこではない。

というより、今最も激しい戦闘は二か所。

『ふははははははははっ!! 上手くないなすのが上手いと見える! だが、その時間稼ぎが功を奏すかな?』

『奏す可能性に賭けるしかないからな。当面は付き合ってもらおう……っ!』

片や、圧倒的な猛威を捌き続ける防衛戦。

『この速さ……凄まじいですね!』

『それはまあ、そういう星だもの!』

片や、四方八方の多重攻撃を避けられ続ける迎撃戦。

武山黒狼と行船三美。本気がここまでできるとは。

それに九条・梶子・張良。幸香の義妹である彼女もまた、やはり後継私掠船団の筆頭戦力なだけあるわね。

個人的に気にしたいのは、やはり黒狼の方ね。

放たれる大量の爆薬製の飛行型ゴーレムの猛攻。それを一瞬でも掻い潜れたとして、多角的に展開される結界を発生する花卉が防ぐ。そしてもしそれすら乗り越えられたとしても、間違いなく超一流の実力者との戦闘が待っている。

どう考えても詰みに近い状態で、黒狼は信じられないほどともに渡り合っている。

魔力を幕のように展開して爆風をいなしつつ、襲い掛かるゴーレムを聖なるオーラが瞬間的に放出される打撃で迎撃。そして時折掻い潜るも、それは花卉で防がれている。

明確に幸香が圧倒的有利。ただし勝負は成立している。

……その手札となるのが、黒狼の星辰光。

「いったいどういうものかしらね」

「そうね。聖なるオーラによる打撃……というのは分かるけれど」

「聖なるオーラそのものを操る星か、何かしらの聖なる神器を再現する星か……どちらでしょうか」

私もりアスもロスヴァイセ先生も首を傾げていると、ふと気配が来た。

「間に合ったようだな。そして、私に一つ心当たりがある」

「これは、猊下!!」

ゼノヴィアが真っ先に反応するけれど、ストラーダ猊下が来られるとは。

「猊下、心当たりがあられるようですがなんですか?」

「それはだな、戦士イリナよ。……ある検査に彼が来たことを聞いたことがあるのだよ」

イリナに答える猊下は、興味深そうに戦闘する黒狼を見る。

「……これはまだ一部にのみ伝えられている情報だ。新しく神滅具に登録されるかもしれぬ、聖遺物に由来する神器が発見されている」

その言葉に、私達はほぼほぼ全員が戦慄する。

聖遺物、それも神滅具クラスとなれば、すなわち神の子に由来する物。奇しくも、現代において神滅具に認定された聖遺物の恐ろしさを、私達は全員が敵対した経験から知り、味方になったことで頼もしさも知っている。

だからこそ、新たな聖遺物が神滅具クラスの神器として確認された。これが戦慄に値しないわけがない。

「猊下、どういった物なのかを伺ってもよろしいでしょうか?」

「かまわぬとも、戦士ルーシア。聖遺物は聖釘せいてい、それもロンバルディアの鉄王冠に由来する、深潭アルフェック・タイラントの蓋世王冠だ」

ルーシアに答える猊下が語るその神滅具は、まさに驚愕ものね。

聖釘。それは神の子の処刑―すなわち、十字架にその体を釘を使つて磔にする磔刑―に使われた釘。元々数があることから贗作含めて多数知られているけれど、その中でも有名な物だ。中世前期に作られた最古の王冠の一つであり、内側に聖釘の一つを加工して作られたという鉄の輪が仕込まれている。

「聖十字架と同じで、独自の意思で次の所有者を選ぶ。また聖十字架が紫炎を所有者に合わせた形で発生させるように、聖釘は聖なる釘と支配の能力を、所有者に合わせて発現させるそうだ」

そう語るストラーダ猊下は、同時に少しため息をついておられた。

「最初に発見された所有者は、武器として聖なる釘を具現化すると共

に、王冠を被った状態で数分間のキーワードを聴かせると洗脳ができるようだな。最終的に討伐という形になったそうだな」

……また凄いことになっているわね。

というより、聖遺物の神滅具が悪用されすぎている気がするのだけれど。信徒にとつて厄年ならぬ厄世紀なのかしら、今世紀は。

そして猊下は、黒狼の方を見直した。

「その性質からか、聖釘の力を再現すると思われる星辰奏者は数多くてな。彼もまた、そうではないかということでも検査を受けていたはずだ」

「マジですか。神滅具再現能力、多すぎだろ」

イツセーが若干呆れているけれど、まあそうね。

この調子だと赤龍帝再現能力ぐらいいくらでも出てきそうだな。むしろ出てこない方が驚くレベルね。

さて、あくまで現段階はその候補。だけれど――

『やるではないか！……ここまで凌がれるとは……ギアを上げるとするか！』

『ではこちらも。あと数段は上げられるからな！』

――幸香相手に真っ向から渡り合っている以上、それが正解と考えるしかないでしょう。

恐れ入ったわ、武山黒狼。未恐ろしい戦力じゃない。

相まみえるのが楽しみね。和地を支えるブレンである、背中を預けられるだけの聖釘の担い手。

ふふ、戦闘狂ではないけれど、流石に滾るわ。

イツセーSide

すつごいことになってるな、武山さん。

となると、並び立つ最上級悪魔候補の行船さんも、かなりできるってことになるはずだけど――

『まだだ！　そう、まだだ！』

『知っているけど当たらないわ!!』

あっちも凄いことになってるなあ!?

さつきから、行船さんと九条・梶子・張良の戦いは凄いことになっている。

梶子は自分を基点に、まるで指揮者のように手を振り、それが魔術儀式になっていのか周囲数百メートルから魔術攻撃を乱れ撃つ。

対して三美さんはそれを凄まじい速度で回避している。ただし回避に徹している所為で攻め手に苦勞していて、最初の段階で結界でも張られたのか脱出もできてない状態だ。

その状態で一気に圧殺を狙う梶子に対し、常時回避をし続けることで行船さんは真つ向から渡り合っている。

なんていうか、重武装の対空網を相手にしている凄い戦闘機とかそんな感じだな。当たれば負けるけど当たらないって感じ。

「あちらもあちらで恐ろしいわね。なんというか、あの機動が」と、リアスはちよつと戦慄している。

それは俺も分かる。

三叉成駒とかで経験があるけど、高速移動って体がしっかりしてないときついところがあるからな。

行船さんの速度は速いけど、それ以上に機敏すぎる。

100の速度で右に行っているのに、すぐさま100の速度で左に行っているようなものだ。あれは反動がでかいはず。

ってことは、付属性特化の星辰光ってことか？

そう思った俺に、梶子の声が届いた。

『凄まじい星ですね。何より、一発二発では絶対に落とせないその硬さこそが凄まじいっ!』

え？

よく分からないことを言った途端、梶子が素早く魔術を成立させた。

「というか、さつきまで放たれていた魔術が全部光ったと思うと、行船さんを雷撃が包み込む。」

あの威力はやばいだろ。流石にゼウス様やテュポーンのそれには劣るけど……神滅具クラスはあるんじゃないか!?

「やられたわねえ……!! あの魔術攻撃、全部本命のための布石だわあ!」

「マジ!? 今までの魔術攻撃全部、あの本命の為の魔術工程じゃない!?!」

「なるほどね。攻撃そのものを魔術儀式にすることで、効果範囲を一気に仕掛けるとはね」

「え、でもあれ……魔力が持たなくない? 私ぐらいじゃないと無理でしょ?」

リーネスや南空さんやカズヒやオトメさんが戦慄しているけど、そういうレベルかよ。

あ、これは終わりー

『この程度で倒れると!』

『悟ってますよ、そうまだだ!!』

ーじゃなかったああああ!?

「……ふむ、そういうことか」

そしてストラダ猊下が何かに気づいた!?

「あの高速移動、本命はそこではなくそれを可能とする体質への変化ということか」

え、え、どういうこと!?

……そろそろまずいな。

キャプテン・マケドニア
帝 国 船 長に押され気味な状態で、俺は内心で舌打ちする。

できることならもつと一騎打ちをしたいところだが、そんな余裕もないし黒狼に怒られたし。まあ試合は試合ですることあるしな。

なのでベルナと合流して、十人を二人で抑える戦いをしているがそれもきつい。というより、ここで頑張ってもジリ貧だ。

特に隠し玉にしたかった、三美さんと黒狼の星辰光が明かされそうなのがまずい。

付け加えると二人とも維持性は並程度。この調子だとガス欠になる。

……仕方ない。ここは博打を打つか……っ！